現代エロ漫画

塩山芳明

一水社

プロフィール

塩山芳明

しおやまよしあき

1953年、群馬県富岡市生まれ、72年に上京。牛乳配達員、私大夜間部学生、ホテル掃除夫、零細出版社アルバイト、各種業界紙記者兼集金人を経て、77年に、エロ劇画誌下請けプロダクション、(有)遠山企画に入社。93年に漫画屋を設立。同時期に富岡市に帰郷。超遠距離通勤を続けている。現在、『Mate』『レモンクラブ』『キャンディクラブ』『漫画バンプ』『ジャニー』『秘密少年』『コラージュ』編集長。かつて手がけた漫画誌に『漫画モンロー』『漫画ダンディ』『コミックブック』『漫画ショック&ショック』『漫画娯楽館』『漫画ロリータ』『ロリタッチ』『漫画スマック』『漫画ストレート』『漫画エキサイト号』『ヤケッパチ』等がある。地域では、95年初頭、自宅から50mの所に突然建てられた富岡市(市長・今井清二郎)の防災無線が、気違いじみた暴音で無意味な説教放送を連日連夜繰り返すために激怒、自ら「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」を設立、官尊民卑を絵に描いたが如き、同市企画課の尊大な態度に抗議し続けている。著書に『嫌われ者の記』(一水社・1631円)がある。

連絡先。〒102　東京都千代田区飯田橋2-11-5
栄昇ビル503号　漫画屋。電話 03-3238-9851。

●装画————阿宮美亜
●装丁————一ノ瀬和彦

現代エロ漫画

塩山芳明

一水社

目次

第2章❖凡人回想録（『レモンクラブ』'89・8〜'97・5）

第3章 ✣ エロ漫画家論①（『ギャルトピア』'82・10〜'84・1／『漫画スキャンティ』'86・7／『ぺあ』'83・12〜'86・9）

エロ漫画界裏通り（『漫画スキャンティ』'87・3〜'88・8）

エロ漫画家論②（『ぺあ』'87・6〜'97・9）

＊序章＊

エロ漫画グラフィティ

阿宮美亜／佐伯達也／葉月つや子／成田那佳／汰峨倭圭

【エロ劇画】70年代後半から80年代初頭にかけて隆盛を誇る。一時は月刊誌が百誌をうかがったが、現在は20誌にも満たない。リアリズムを追い求める余り、袋小路に自らを追いやった感がある。エロ劇画界の漫画家で、池上遼一に足を向けて寝られる人は少ない（『漫画バンブ』96年12月号、阿宮美亜「愛国HOTラーゲ」より）。

ズニュ

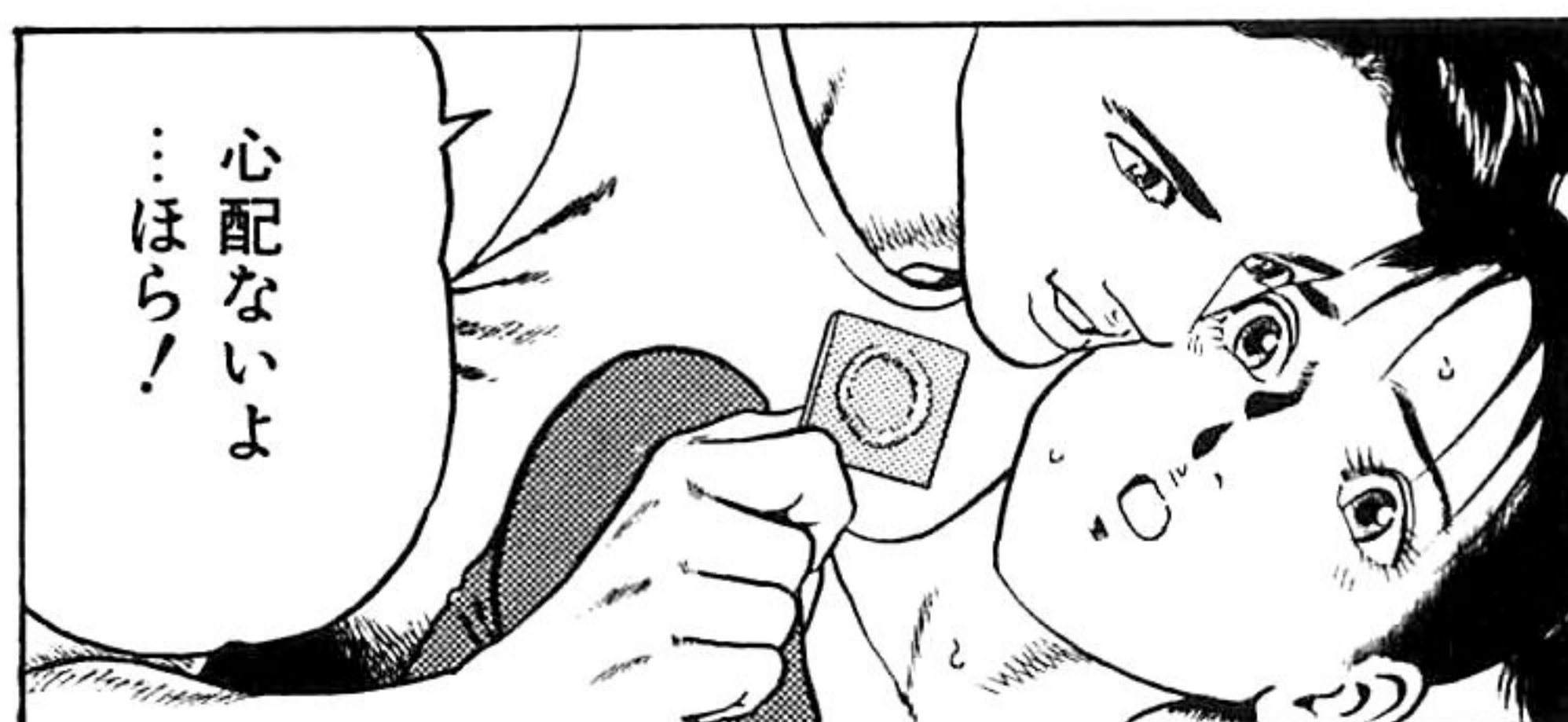
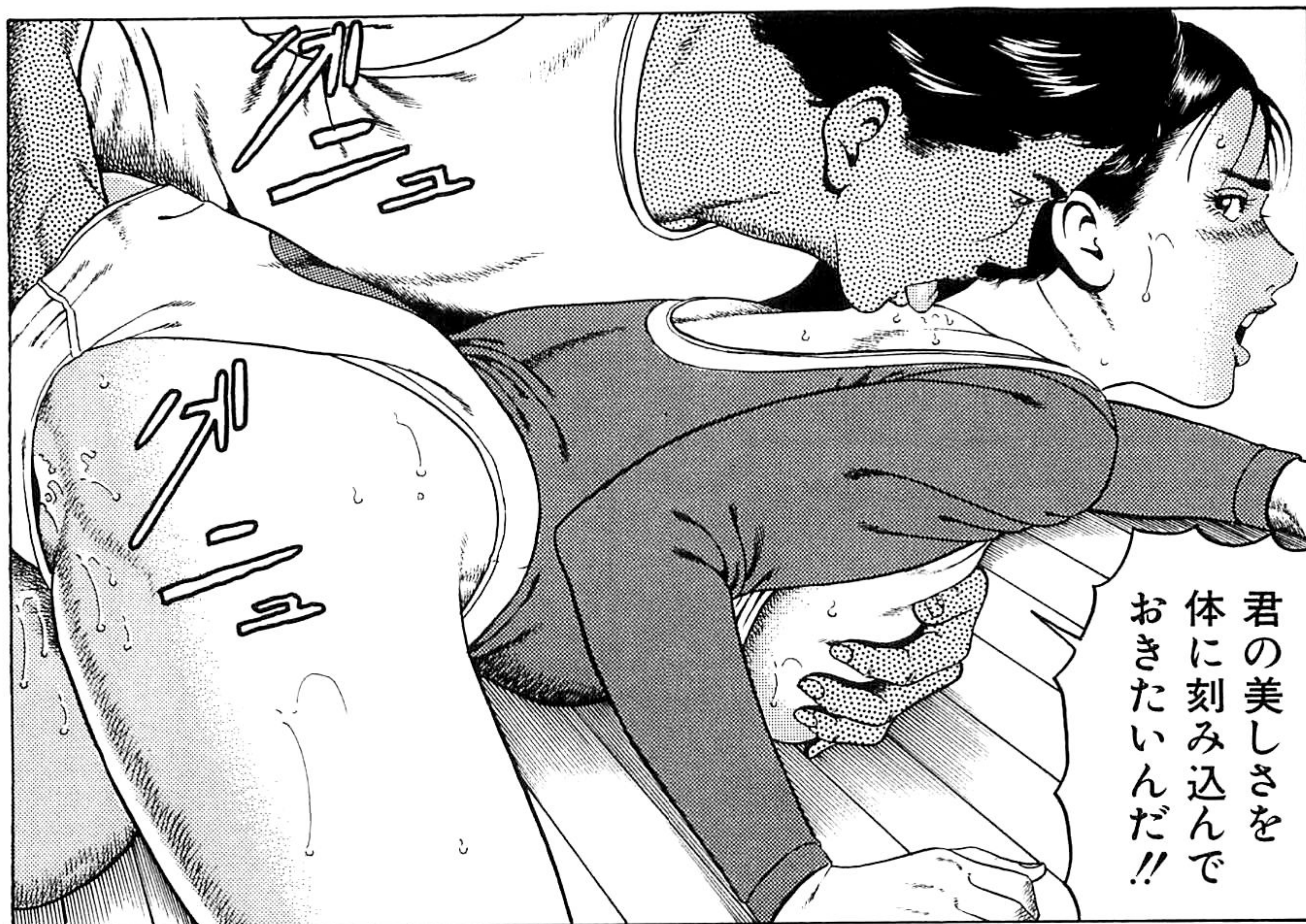
ズニュ

君の美しさを体に刻み込んでおきたいんだ!!

だ…駄目よ!! だって…だって河田クンは…

心配ないよ…ほら!

君もいつでもどんな所でもコンドームを忘れないでね

ああん…さすがね

【ロリコン漫画】80年代初頭より、エロ劇画の衰退に反比例して市場を拡大、現代のエロ漫画の最大の流れとなる。単行本分野もあなどれない。が、90年代後半に入ると、“一分野十年”の言い伝え通り、急速に勢いを失ないつつある。宮﨑事件以降、業界人は“美少女漫画”という言い方を好んで使うようになる。犯罪的臭気を嫌ったためであろう（『Mate』97年11月号、佐伯達也『BIG or small』より）。

やっ
はっ
山寺君
お願い…誰か来たら
はひっ
はっ
本当に
本当に駄目だって私 声大きいから
んかあああっ
理科室入るから
ぷちゅ ぷちゅ
ガラッ
分かったよ
はひゃ
ひゃ
ギクッ
よー松村
いい腰使いだ
野々村もすっかり感じてるじゃないか
山寺てめー
ひとの彼女に手出しやがって
そんな格好で言える台詞かね
松村君
くそう
ぷぴ ぷぴ
はっ
くぇ

かっぽ
かっぽ
にしても松村
お前が操ちゃんを
こんなにしたのか？
してない!!
にぽ
にぽ
操　操なの？
え？　私は今　松村君
にされてるの？
操？
松村君？
どう言う
事？
そうよ明美
ごめんね私のせいで
怖かったでしょ
ひあっ
ふううう
こいつが野々村
だったなんて……
あっ
操　私　私――
飛んじゃうー

【レディースコミック】ロリコン漫画に少し遅れ、80年代中半頃から誌数が増え始める。絵柄はリアリズム主体で、エロ劇画の雰囲気を最も濃密に残すエロ漫画分野。実際に漫画家も、元エロ劇画家が大量に流入している。90年代中半に失速するが、依然、30誌前後がある。巨額の広告収入が当てに出来る、唯一のエロ漫画分野でもある（『アクアマリン』97年４月号、葉月つや子「アルゴラグニア」より）。

…誰…よ…
…!!
私 あんた なんか知ら ないわよ！
知らない… か… ま いいや
悪い気は しないだろ 自慢じゃないけど 女に拒まれたこと ないんだよねオレ
コロ…
自慢かな やっぱ
!!
オレの顔 雑誌とかで 見たこと あんだろ？
モデルの コージ ホンモノだよ
悪いけど… 知らない！
!!

でも オレのほうはキミのこと 昔から知ってんだぜ
今の会社のことも
ミーハーなファッション誌なんか見ないってことか
んっ…
毎週火曜日と金曜日あそこのプールの8時の部で泳いでるってことも――
見ろよ
ぜい肉のかけらもない完璧な身体だぜ!!

【やおい漫画】要するに、女性向けのホモ漫画。元々同人誌市場は活況を呈していたが、80年代中半以降に商業誌も急増。しかし市場はエロ劇画、ロリコン漫画、レディースコミックに比べると、はるかに小さい。90年代後半になると、後述するショタ漫画に追撃されるようになる（『コラージュ』97年VOL・2、成田那佳「俺はANIMAL!!」より）。

あ…はっ

う……

く…うん

チロ
チロ…

おーっ
感度
バツグン!!

あっ…
いやっ

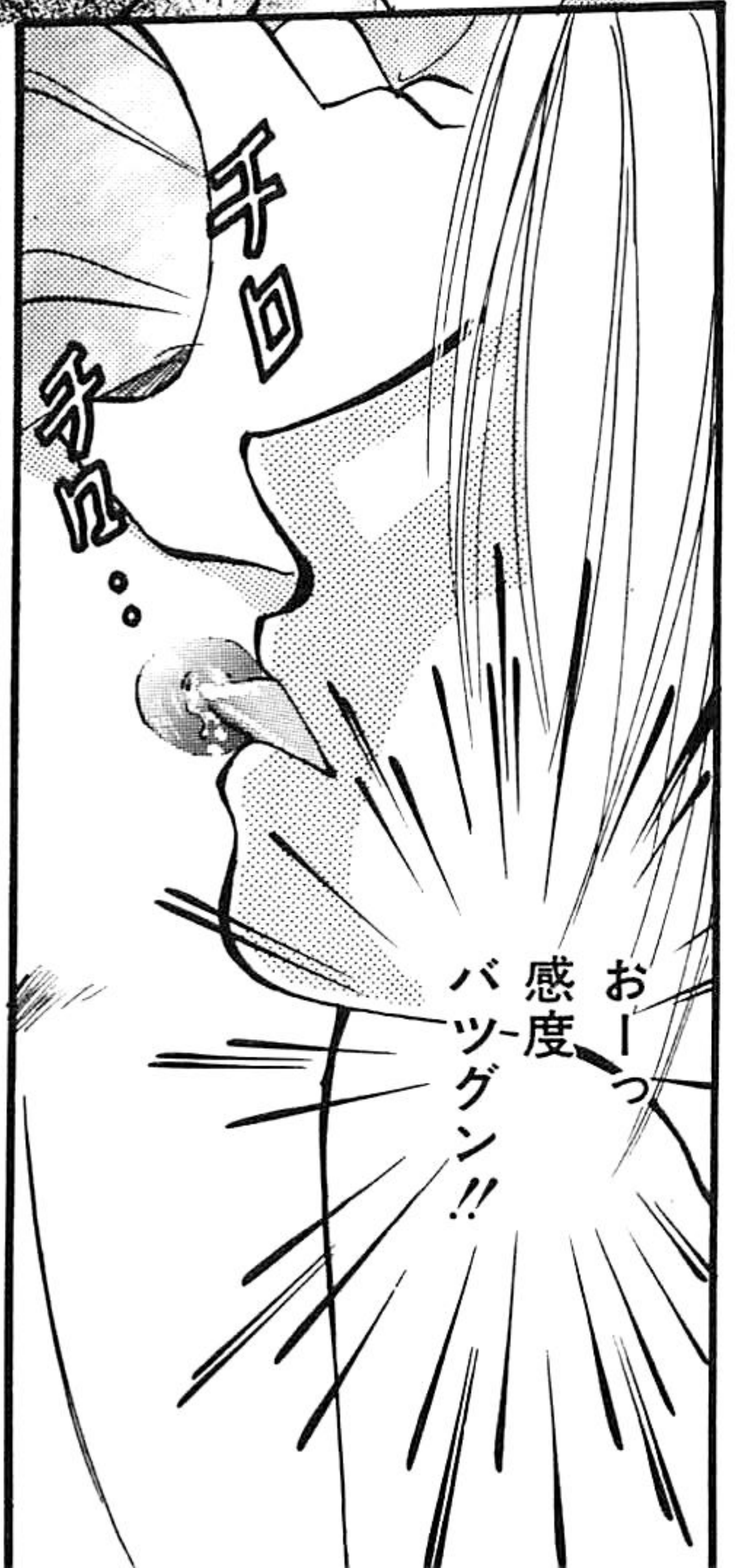
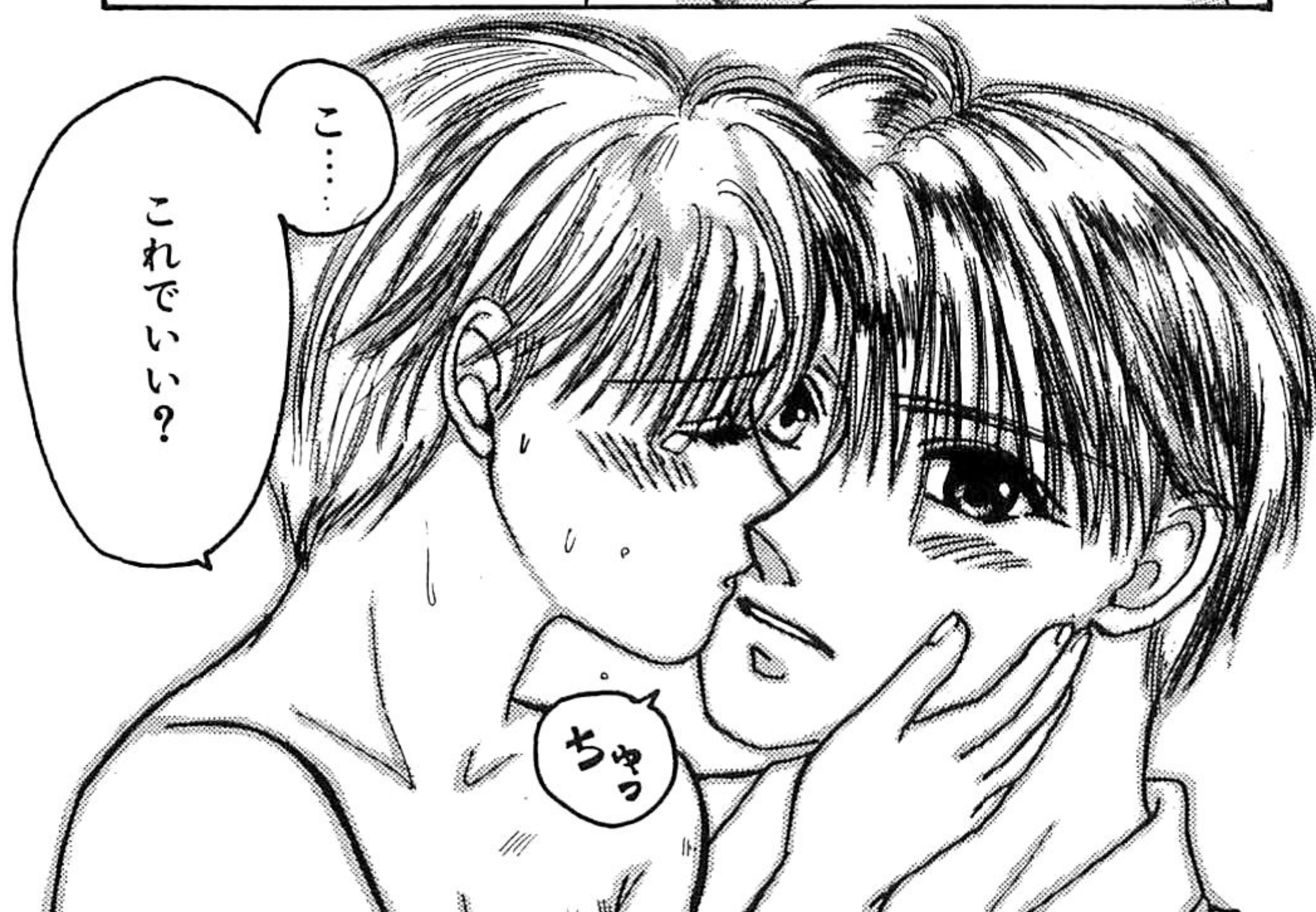
いてーっ

いきなり
何すんねやっ

じんじん

……
ごめんっ

がばっ

…んっ
ん!!
う……っ
ずるっ
……俺にキスしろ
そしたら優しくしてやってもいい
……本当に?
?
でもあの
初めてなんだ こんなことするのだから うまくできないかもしれないけど…
はぁ はぁ
こ……
これでいい?
ちゅっ

【ショタ漫画】やおい漫画の一分野だったが、商業誌の間では本家をしのぎ、今や一番勢いがある。キャラがやおい漫画より、低年齢化しているのが特徴。"やおい漫画界のロリコン漫画"とも言えよう。PTA幹部や、外人が見たらビックリするに違いない。良くも悪くも、日本の10代の女の子達の嗜好が一番ストレートに出ている(『秘密少年』97年No・1、汰峨倭圭「キミの瞳が好き」より)。

なに？
………これでもキスかあ？
………
ふん
まあ いいか
えっ えっ？
足開いて
力抜けよ
ほら
入れるぜ
……!!うっ
ん―――っ…!!
ぐっ
ぐっ
はあっんっ
んっんっ
ぐっ
あっ
ああ
お前……
はあっ
ん
はっ はっ
少しは
感じているのか？
んっ
ああ！なんか変なのっ
こんなことされるの
初めてなのに！
あん熱いよ熱いっっっ!!

― エロ漫画史概略 ―

エロ劇画ブーム
●『漫画エロチカ』『漫画ビッグエロブン』『漫画大快楽』
●『漫画ダイナマイト』『漫画ローレンス』
▼80年代前半に失速。コンビニルートに入ってる物のみ残存。

※エロ劇画家が絵柄を変えてロリコン漫画界へ参入するも、読者にオカマ扱いされるだけだった。ロリコン漫画に転身出来たエロ劇画家は皆無。

隔週青年劇画
●『コミックVAN』『漫画ルック』『ヤングコミック』『プレイコミック』
▼月刊エロ劇画誌に取ってかわられる。

エロ劇画誌の代名詞『漫画エロトピア』

ロリコン誌化。『EROTOPIA』に

▼コンビニの恩恵を一番受けて延命。

70年

レディースコミックブーム
●『アムール』『La・comic』『アヤ』『マノン』『ラビアン』
▼90年代中半に失速。

※引退少女漫画家復活組と失業エロ劇画家が大量に流入。

ロリコン漫画ブーム
（M事件以降、美少女漫画と呼ぶようになる）
●『レモンピープル』『漫画ブリッコ』『ロリポップ』『ホットミルク』『ペンギンクラブ』
●『漫画ジャンボ』『カラフルBee』
▼90年代後半に失速。しかしまだ最大の勢力。

80年

やおい漫画ブーム
●『June』『麗人』『モーリス』
▼90年代後半にショタ物に市場を喰われるようになる。

※両者を描き分ける漫画家も多い。

90年

ショタ漫画ブーム
●『純一』『少年天使』『ショタキング』
▼エロ漫画の一番の新興勢力。

※読者層は先行三分野に比べるとまだまだ薄い。月刊はなく、ほとんどが隔月誌だ。

第1章

亜流誌の内幕
新・亜流誌の内幕

『ロリタッチ』'86.9~'90.12

POPちゃん by 計奈 恵

TOUCHちゃん by.若菜まりあ

↑どうせやるならここまでやらな!
アイドルキャラも"POPちゃん"に
"TOUCHちゃん"。

新参者です。おたの申します。

亜流誌の恥なき編集者の、私が塩山です。私にトモミ、太郎のトリオは、『漫画バンプ』、『漫画スマック』、『漫画エキサイト号』という一般エロ劇画誌もデッチ上げてます。ご想像の通り他の3誌も全くオリジナリティを欠いた、SUKEBEならいー、売れりゃいー、どうでもいーという、〝3いー思想〟で貫かれた雑誌ですので、気が向いたら立ち読みして下さい。

私達トリオは、まだこの業界では新参者。それゆえに、ロリコン漫画業界の、誌面とは裏腹な陰湿振りにはあきれました（最近は、その陰湿さをエンジョイする余裕も生まれたが）。漫画家さんに暗い人が多いのは、一般エロ劇画誌も同じで慣れてますが、驚いたのは編集者のセコさ。

2カ月ほど前の『朝日新聞』の求人広告欄（男女）に、〝同人誌漫画家募集〟という、キッカイな広告が載ったの、皆さん御存知？出したのは桜桃書房。『アプリコット』の発行元だ。さすがに、〝ロリコン漫画家〟との文字はありませんでしたが（天下の朝日じゃ載せてくれないな）、版元が漫画家集めに苦労してるのがよく分かる広告だった。

考えてみたまえ。〝青年エロ劇画家募集!! 原稿料1万円以上。ただし三条友美並の画力と、早見純以上の感性要〟なんて広告が、たとえ朝日じゃなくても載ると思う？ あり得ない。だって九割方の雑誌の編集者が、漫画家の連絡先なんて教えてくれるから。

ロリコン漫画誌の場合、完全に逆転。ほとんどの編集部が教えない。僕なんかにすれば、自分の所で描いている売れっコが他誌でも売れりゃ、編集者冥利に尽きると思うんだけど。噂じゃ『漫画ブリッコ』の何とかいうガキが、そのセンベンをつけたのだとか。彼らがセコイ真似をする理由を考えてみた。

①元々描くのが遅いのに、他誌で仕事を増やされて、これ以上残業すんのはかなわない。デートもしたい。

②自分の所の原稿料はメチャ安。他誌で世間水準の稿料をもらい、アップ要求されては上役に叱られる。

③俺（達）は同人誌も長くやって、ようやくブームとなり下請け編集仕事にありついたのだ。ウマイ所は全部俺達がいただく!! 以上がほとんど。語るに落ちるの一言だが、この3要素がミックスされた編集者が余りに多い。

唯一聞く所があると思ったのは、〝『漫画ブリッコ』の何とかいうガキ〟こと大塚英志が、『新文化』という業界紙に書いてたこと。つまり、漫画家との関係は、フリー編集者の財産だということ。もっともだ。ところが一部出版社の中には、フリーを一時的に起用、財産を吐き出させた後、首を切る所があるのだとか。確かにこれは許せない。

怒りはその通りだが、漫画家を囲い込む理由にするには飛躍がある。この問題は、フリー編集者と版元の次元の問題だからだ。漫画家を盾にとる権利は、誰にもない。彼らを盾にとる編集者は、大塚が批判した出版社と同次元に堕することになるのだ。漫画家は、いやどんな物書きにも、執筆誌を選ぶ自由がある。各社の競争があるからこそ、彼らの稿料もアップ、生活も向上するのだ。

仕事量オーバーによる「つぶれるつぶれない」を判断するのも、漫画家自身だ。何の契約もしてないのに、マネージャー気取りで恩着せがましい態度とって、漫画家を喰い物にしてる編集者が多すぎる。エロ劇画誌がバタバタ廃刊になる模様なので、今後もロリコン漫画誌は増えるはず。過当競走の中で、漫画家の仕事量、原稿料、そしてフリー編集者の仕事も増えるのは間違いない。結構じゃないの。

けれど、従来は2〜3人の同人誌通(ゴロ)と言われる連中が、本当は仲が悪いくせに暗黙のうちにギルドをつくり、漫画家に安いエサをくれてイケスに飼ってたのが実情。こんな連中をぶっ飛ばすためにも以下に挙げるのが、本誌編集部の経験に基づく、各誌の「漫画家さんの連絡先教えて下さい」に対する対応である。後発誌を企画してる編集者の皆さん、執筆中の漫画家の皆さん、参考にして下さい。

『レモンピープル』(久保書店)→いつ電話しても「担当がいません」。よっぽどデケー会社なんだろ。

『ペパーミントコミック』(日本出版社)→ほとんど教えてくれるが、一番知りたい人はなぜか不可。

『ハーフリータ』(松文館)→「教えられません」。ハッキリしてていい。自らに尻の穴の小ささをよく知ってる。

『プチパンドラ』(一水社)→全て教える。さすが本誌執筆編集長(蛭児神建)。

『ホットミルク』(白夜書房)→ほとんど教える。女だねえ。

『パンプキン』(白夜書房)→教えぬのにカッコつけ、マネージャーまがいの態度をとる。なあ、鳥居某君よ、今度会ったら…。

『ロリポップ』(笠倉出版)→さすがに尋ねる度胸がなかった。

むろん本誌も教えます。聞く側も一切教えるのであれば。漫画家の皆さん、イケスのやせた鯉だけにはならぬよう、注意してね。

('86・9)

亜流誌編集部㊙盗聴作戦決行!!

塩山、トモミ、太郎の〝ヒンシュク亜流誌トリオ〟といえど、一枚岩の恥知らずさを誇るわけではない。筆者は某日編集部に盗聴器を設置、赤裸々な内幕をキャッチすることに成功した。

塩「馬鹿野郎、太郎! 樽本一の『漫画エキサイト号』(毎月5日発売・樽本センセの他、阿宮美亜センセも執筆中)の原稿、『ロリタッチ』の製版屋に投げてどないすんのよ。目ぇ開いて仕事せんかい。飯喰ってくっから、マジメにパクれ、いや、やれよ」(数分の沈黙。口を開いたのは女のコ。どうやらトモミ嬢らしい) **トモミ**「何がマジメにやれよ、あの短足アバタデブが。あいつはね、食事だなんつってるけど違うのよ。高岡とかブックマートの3階、西澤書店なんか回って、『ロリポップ』の上に、『ロリタッチ』を重ねて回ってんのヨ」 **太郎**「ええっ、トモミさん、それどっかで見たんですか?」 **トモミ**「高岡でモロよ。あんな恥ずかしかったことないわ。親父さえ失業してなけりゃ、即退職したわね」 **太郎**「あの野郎は読者欄で、〝何よ『ロリポップ』って?〟なんつってるけど、結構計算高いすからね」 **トモミ**「私なんか2年もつきあってるから百も承知よ。蛇年生まれの乙女座よ、並じゃない陰湿さよ。この前このページで業界が陰湿だなんつってたけど、自分のことよ。2〜3日前に電話で印刷屋さんにこうなんだから。〝まァ、俺の目算としちゃ、う〜んとスケベな読者1万、『プチパンドラ』の読者1万、某『ロリポップ』と間違えて買う読者1万で、返本は3割っすよ、グハハハ…〟表歩けやしないわヨ」 **太郎**「よかった、俺今月で退職で」 **トモミ**「いいね、商売してる家って」 **太郎**「それよっか俺、蛭児神さんのファンだから、こんな亜流誌に書いていて、あの人の将来が傷つくんじゃないかと心配。あのブタ野郎に利用するだけ利用されて…」 **トモミ**「蛭児神さんも傷つくほどヤワじゃないけど、〝蛭児神建日記〟のおかげで、また敵ふやしたみたい」 **太郎**「内容よか、うちみてえな本に書いてるから…」 **トモミ**「それだけでもないみたい。あの人も相当なヒネクレ者だから、塩の野郎とヒネクレ競争してるみたいよ」 **太郎**「なるほど。けどあのブタ野郎にゃ〝商業主義〟って貞操帯があるから」 **トモミ**「そのくらい、蛭児神さんは承知してるわよ。けどあの人も、西川口の安飲み屋で、2〜3度奢られたから

って何も…」（以降しばらく聴き取り不能。その後に飛び込んで来たのは、塩の声。もう一人、来客もあるらしい）

塩「蛭児さん、２回目の日記バッチリ。これで『プチパンドラ』の読者は、ウチに民族大移動…」**蛭児**「ウチの読者もひねくれた人が多いから、そうは簡単にゃ。それより、内容証明書はどっからも来なかったですか？」**塩**「それ、それ、それなのよォ。せめてほら、〝内容証明書のオーソリティ〟と言われる、例の〝何とかいうガキ〟は、一通くらいしたためてくれると思ったのに。あいつほら、前からエロ本屋さん馬鹿にする傾向あるし。昔、ＥＵオフィスの小谷哲と『ブリッコ』でケンカした時も、その点に盛んに触れてた」**蛭児**「差別ですね。新体操会社が好みそうだ…」**塩**「でもあのガキ、いや大塚英志は、文章はなかなか。『シティロード』のコラムも非常に面白い。人格的にほめる奴はいないけど、文字書きとしちゃ買ってるぜ」**蛭児**「その辺は僕も異論ありません。高取英なんかに比べてもダンチです」**塩**「おっ、懐かしいお名前。新進劇作家になって、もうこんな世界とも縁切ったと思ったら、この前うちの事務所に顔出しましたよ」**蛭児**「おやまた高取の旦那が、何しにこんな所に？」**塩**「千之ナイフセンセの再録原稿を借りによ」**蛭児**「よく原稿出しましたね」**塩**「あの人にゃ、以前何度か漫画家の連絡先教えてもらったりして、義理あるし。それに、原稿は漫画家のもんすよ。著作権が編集者に移ってるみたいな、最近の悪しき風潮に警告を発するために…」**蛭児**「減らない口ですな。それよか旦那、元気してました？」**塩**「ピンピン。それにしても、高取センセって善人らしいな。奴の悪口って聞いたことない。あえて探しても、俺と一水社の多田正良（通称タコ多田。後に多田在良と自主改名。一時は松本博とも名乗る。全て同一人物）、『元気マガジン』やってた山崎邦紀くらいだ」**蛭児**「ほとんど影響力のない人ばっか」**塩**「そういうこと。あんたも高取センセの爪のアカでも飲んだら？」**蛭児**「や…やめて下さい。僕ァ人の良い凡人になる気はありません」**塩**「聞き捨てなりませんけど納得。文章書かせりゃ、川本三郎の出来損ないって所だもんねェ」**蛭児**「イヤな奴でも、書く物良けりゃ一流人」**塩**「いい人でも、書く物つまんなけりゃ二流人」**蛭児**「でも普段は、二流人としかつきあいたくないわいな」（以降、またしばらく聴き取り不能）

塩「…というわけで、来月の３号目に勝負がかかってる。座して死を待つか、立ち上がって活路を切り開くか、全てがトモミと太郎、そして不肖私めの頑張り一つなわけだ。では、今月のモットー。まず太郎！」**太郎**「一に個性、二に個性」**塩**「トモミ！」**トモミ**「三四がなくて、五に独創性」**塩**「よ〜し、頑張ろう!!」

〈文責／盗聴器〉（'86・10）

ロリコン漫画誌の編集ほど、素敵な商売はない!!

深夜スーパーでカップヌードルを万引きするのも、お湯を注いで作るのも、さましてから粗チンを入れてオナるのも、まあ確かに簡単。しかし、ロリコン漫画誌を編集する容易さに比べれば、太平洋をおわんの船にハシのカイで渡るほど、偉大な作業と言わねばならない。そのくらい、ロリコン漫画誌の編集は簡単だ。小学生程度の学力、中学生程度の性欲、高校生程度の体格、大学生程度の商売っ気さえあれば、君は明日からロリコン漫画誌の編集長になれる。その作業のお茶の子さいさい振りについて、具体的に説明してみよう。

①ロリコン漫画家は掃いて捨てるほどいる。本当である。ここまで簡単に台割り（雑誌の設計図）が埋まる世界も珍しい。エロ劇画誌も確かに簡単だが、ロリコン漫画誌に比べれば、殿山泰司を夢想してオナるくらい困難な作業を伴う。彼らは数が多いだけでなく、

若い割に日本人的でお仲間意識が強いので、一人コンタクトをとれば後はイモヅル式。同じアパートに住んでる連中も多い。僕が知ってる範囲での、彼らの生態について紹介してみよう。

【同棲タイプ】島崎れむ&影次ケイ。阿乱霊&緑沢みゆき。つくしの真琴&××な×××み。**【仲良しタイプ】**ゆきあやの&松原香織。篠原尚秀&伊魔崎斎。**【隣接駅タイプ】**千之ナイフ&ねぐら☆なお。**【肉親タイプ】**中森愛&五藤加純（双子）。**【下総中山沿線在住超遅筆タイプ】**番外地貢&中山たろう&なぞくん、そのお友達の雨宮じゅん等。**【同人誌仲間タイプ】**上総志摩&中総もも他、腐るほど。**【エロ劇画からの転向タイプ】**音切プッコ&さとう栄治。**【新聞屋住み込みタイプ】**相沢真理。**【ビデオ屋タイプ】**樽本一。**【現役編集者タイプ】**若堂まりあ。

一部で脱線しましたが、彼らの生態の一端は理解していただけたと思う。まだ3号しか亜流誌を編集してない僕でも、こんだけ分かるのです。各集団の横の交流もあります。つまりは、ロリコン漫画誌を編集しようとした君は、この中の一人の連絡先さえ分かれば、あとは2冊でも3冊でも4冊でも、楽々編集出来るのだ。

②ロリコン漫画家の原稿料は異常に安い。エロ劇画誌の場合、ほとんどの所がどんな新人でも4000円は払う。当然である。でなければ、スクリーントーン代、交通費等が赤字分になりかねない。ところがロリコン漫画業界は、3000円クラスがいも虫ゴロゴロ稲光りピカピカ。5000円も払おうなら、男女を問わず体を投げ出し、浣腸までさせかねない。どんな売れっコでも8000円止まり。エロ劇画界では、富田茂、三条友美、和気一作らが一万円以上の稿料を取ると言われてるが、本業界ではまだ一度も、万札漫画家の噂を聞かない。

③漫画誌の編集作業は、簡単というより何もしなくていい。つまり〝無〟なのだ。漫画家は簡単に大量に、しかも安く集まるとなれば、どの出版社も蛙のように飛びつく。残るは編集作業だけ。これが実に楽。入稿した原稿は、写植屋さんに出せばネームを打って貼ってくれる。次に製版屋さんに回せば、縮少してくれる。後は順番を間違わぬように校了紙に青焼きを貼り、印刷屋さんに渡せばいい。10日もすると本屋に並んでいる。いかがかな？

簡単というより〝無〟であるとの発言も、オーバーではないのだ。しかも、しかもである。これで出版社から**お金までもらえる**のだ。美人女流漫画家も多いので、その方面での苦労もしない。これを酒池肉林と言わずして何と言おう？

なのにあにはからんや、ロリコン漫画誌を出してるどの出版社も、社員の下にブレーン的存在を置いている。『ペパーミントコミック』（日本出版社）、『ペリカンハウス』（司書房）は、金子某。『パンプキン』（白夜書房）はスタジオ・バトルという糞ガキ集団。『ロリポップ』（笠倉出版）は川瀬某。『ペンギンクラブ』（辰巳出版）もメンバーを見れば、誰がゼゲンをやっとるか明白。『チューリップ』（大陸書房）など、他誌もほとんど同様。

要は、ロリコン漫画誌編集者のボロい生活を他人に奪われんと、姑息なブレーン連中が、「ロリコン誌の作業くらい大変なものはない。素人が編集すんのは、針の穴にボッキしたチンポを突っ込むくらい困難ですヨ」と、もっともらしく触れ回った結果らしい。信じた奴もアホ。

ブレーン連中が、漫画家の生活向上にも努力したのならいい。何も言うまい。しかし、そんな良心的な連中は、皆無だったらしい。ここへ来て、「約束の原稿料を払ってもらえなかった」「いつまでたっても稿料が出ない」「2000円もピンハネされた」「原稿を落としたら、約束の稿料の倍額を払うよう言われた」等の、とんでもない根も葉もある噂話が横行し始めた。

これも結局は競争がないため。酒池肉林で太った豚どもが、今度

はいい車が、広いマンションがと欲を出したためだろう。こんな連中をぶっ飛ばすのは簡単。君が、あなたが、明日からロリコン漫画誌をつくっちゃえばいいのだ。

（'86・11）

順法精神あふるる道徳的えろほん屋・沖田翔二君万歳!!（法律スレスレ野郎）

『ロリタッチ』編集部の〝創刊準備号〟における閉鎖的ロリコン業界の告発は、自らの編集者としての無能、および厚顔無恥振りを覆い隠そうとする、腹黒い打算にすぎない!!（以上リード。その上に横組みでメインのたたきがバーンと）**〝本番ストリッパーがキスを拒否するに等しい児戯！　サル真似雑誌編集部が漫画家の味方ヅラ!?〟**

（以降いよいよ本文）

今日は、『ロリポップ』の沖田翔痔です。今回は巷でウワサの、悪質類似誌『ロリタッチ』の話題です。あの本を初めて見た時にまず感じたのは、とうとう僕の編集した本も、人に真似られるようになったかという、一種の感慨であります。最近では余り触れないようにしてますが、僕もかつては『マルガリータ』という、『レモンピープル』の真似っ子雑誌を編集してました。アッという間に廃刊になったので、『ロリポップ』は僕にとっても正念場。血のにじむような苦労をしました。

だから、真似すること自体を、僕は他人にあーだこーだ言える資格はありません。けど、物事にはおのずと限度があります。ロゴぐらいどこでも真似ます。けど糞『ロリタッチ』は、全ての写植の級数から、背の色指定、何と〝ポップちゃん〟に似せて、〝タッチちゃん〟なるニセキャラクターまででっち上げたのです。奥付けに㈱東京三世社となければ、これは僕の雑誌です。僕に編集費下さい!!

…冗談でなくそう思いました。

これは完全に限度を超えてます。シャレも人を傷つけたらシャレになりません。笑止なのはこの糞本が記事ページで、閉鎖的ロリコン業界の告発までしてること。盗っ人にも三分の理と言いますが、両手で女のコの股ぐらを撫で回しつつ、口先だけで〝姦淫することなかれ〟と言っても、一体誰が信じるでしょう。

さらに、下請けとしての節操のなさです。御世話になってるスポンサーに、よくあんな後ろ足で砂をかけるような真似が出来るもの。確かに塩山某は、直接は笠倉出版の仕事をしてるわけではないようです。けれど同じ組織の人間は、笠倉のエロ劇画誌の下請け編集をしているのです。恥ずかしくないのですか!!　こういう文章も、相手の本の宣伝に一部加担していることになり、悔しいけれど、読者のみなさんに真実を伝えるために、あえて今回は『ロリタッチ』を話題にしました。読者にとっては出来た本だけが問題でしょうが、法律スレスレ行為をしてる連中の真実の姿を、是非分かって欲しかったのです。悪は必ず滅びます!!

…とまあ、僕が沖田（川瀬）君の立場なら、このくらい冷静になって塩山某を批判するつもりだけど、読者の皆さんはどうお思いでしょうか？（もっとも今月の本欄は、腐れ業界雑誌『ＣＯＭＩＣ ＢＯＸ』11月号の65ページを立ち読みしてないと、あんましオモローありません）。

それがよりによって、〝人道外れた、法律スレスレの行為をして本を売り、それを自慢するとはどういう神経をしているのだろう。あやまったという行為もポーズだけで、言っていることとしてることがまるで違うのだ〟と来た。確かに、独創的個性派編集者川瀬君の、〝言っていることとしてること〟はまるで違う。まず最初に聞きてんだけど、お前さんはいつから、教科書の出版社、あるいは岩波書店の編集者になったんだい？　いつから〝法律順守！　守れ人権!!〟

の本を編集するような器になったんだい。ええ!?
糞オカマ野郎!!（でも本当のホモ＆オカマの人を、僕差別する気ありません）〃人道に外れながらも法律に違反しない程度のエロ本〃をつくるのが、東京三世社、そして笠倉出版の本業だろうが。どこで血迷ってんじゃボケナスビ!! こういうのを世間では、〃目糞が鼻糞を笑う〃と言うのだ。
正義漢ヅラした愛しの沖田（川瀬）君が悪質なのは、一方で〃こんな本では、明日の生活のために仕事を引き受けざるをえない作家達の方が、かわいそうだ〃などとほざきつつ、すぐ〃何しろあそこに描くことで、悪人のように思われてしまうのであるから〃と続けるあたりだ。ちゅうことは、ねぐら☆なおセンセなど、とんでもねえ悪人ということか？　お前個人が思ってるにすぎぬことを、勝手に普遍化するな。それに本欄の第一回目に書いた通り、どこで仕事をするしないは、漫画家個人の決めること。僕や本誌に、いくら赤ちゃん言葉で泣き言を連ねようと勝手だが（面白いので）、逆上して限度を超えるな。後で後悔するのは沖田君、君だよ（それとも翔ちゃん、あんたいつも酒飲んで文章書くのォ？）。
さらに沖田君が恥ずかしいのは、一下請けの僕とのケンカに、県会議員をやってるお父様や、親類の国会議員にまで御足労を願っちゃってること。お前も下請けだろう。僕も下請けだ。ケンカやんなら『ロリポップ』対『ロリタッチ』だ。加勢なんか頼むな!! お前みてえなのが子供の間で、一番嫌われるのだ。だから、お前の言う正々堂々は、〃正々堂々ハイドードー〃にすぎぬと言うのだ。
乳離れしない沖田君、もう一度言う。ケンカする時は逆上するな。逆上するならケンカするな。ケンカする時にゃ相手を選べ。

（'86・12）

……だから『ロリタッチ』は一時も目が離せないね。

木枯らしが吹き始めたばかりなのに、ポカポカと暖まっております。それもこれも、縁側の猫のように、㊧の心めは、4月中旬の慈愛あふれる読者諸兄の、励ましの手紙のおかげ。郵便料金も馬鹿にならない昨今、つくづく頭が下がり、編集者をしていて心底良かったと、ふと涙をポロリと落とす始末。ああもう年はとりたくないと嘆いては、再びポロリ。
中でも12月号に対しては、文字通りの絶賛のハガキが殺到、うれしさで仕事も手につかぬ日々を送りました。普段よりハガキが多かった原因は、3つの点に関して。第一は裏表紙に突如登場した、芸術的写真集のPRへの、圧倒的な讃辞の嵐でした。
「腐るほどあるロリコン誌の中で、これほどの英断を私はかつて見たことがない。普通は毒にも薬にもならぬPRやイラストでお茶をにごすが、貴誌はその常識を、高度な芸術写真でぶち破った。アヴァンギャルドである。思わず3冊買った」（20歳・学生）とか、「普段私は、レジに表紙を表にして差し出すのですが、今回は余りに裏表紙が素敵だったので、裏表紙を表にして出しました。すると本屋のおじさんが、〃君もようやくスケベロリコン誌を捨て、写真芸術に目覚めたか〃と、ほめてくれました」（16歳・某女子高1年）とか、「レジで定価を見ようと裏返しにした書店の姉ちゃんに、〃いい御趣味ですね。今晩、写真芸術について語り合いましょう〃とナンパされた。どうやらインテリに見られたらしい」（18歳・高校生）だののハガキが、ミカン箱に2個くらい届いています。
編集長の英断との声もありましたが、それは買い被り。何を隠そう私も本になった時、実は初めて知ったのです。私にはこんな前衛

的な、商売も考えぬような真似は出来ません。ミカン箱2個の激励ハガキが届き、見事大勝利を収めた今だから言えることですが、広告担当の方、本当にありがとうございました。通常号より返品は2割確実に減ったなと、感謝の涙にくれながら仕事に励む今日この頃です。

2番目は、作品の一部にブレンディな味がしたという指摘でございます。「?」私めもしばらくは理解に苦しみました。コーヒー、あるいはみそ汁の合わせみそ、納豆とネギ、ウイスキーとコーク、等々におきましては、私もブレンド感覚を大事にしますが、およそ漫画誌においては…と思案していた所、裏表紙センスに限らず、万事に保守的な私めになりかわり、印刷所の方々が空前絶後のブレンド感覚を、「あいつに相談すると反対するから無視。保守反動のゴロツキが!」と申しつつ、率先して実践なさって下されたらしいのです。ありがたい!!

これも大成功でした。実にミカン箱に3個もの感謝のハガキが殺到しました。「ぶっ飛んでる。このワープ感覚には、サザンの歌詞だって逃げ出す」だの、「同人誌だってこんなことはしない。本来は彼らこそが、こういった新機軸に挑むべきなのに…。商業主義化した同人誌を、貴誌のパワーで押しつぶせ」とか、田舎で百姓仕事をしている、老母に見せたくなるような讃辞の嵐でございました。これまた私めの知恵と、99%の方が誤解なさってました。これでは印刷所の方々の努力が報われません。たった2通のハガキのみが(八部貞一郎、菅野正人)、真の功労者を見抜いてくれてたのは、不肖私めにも唯一の救いでした。両君のハガキを持参、××印刷の○佐○藤工場長に一升ビンを差し入れ、「またお知恵を拝借させて下さい」と飲み明かした夜のことは、一生忘れないでしょう。

ミカン箱2個で2割返品が減るのですから、3個分のこの快挙で3割減るわけです。いつもは返品が×割だから、12月号は増刷せにゃあかんとうれしい悩みに悶えてたところ、第3のグループのハガキが目につきました。これは少量。ほんの20通くらい。しかしこれは感謝ではなく、抗議する内容です。

「樽本一の漫画はグロすぎるから止めろ」というのです。その通り。私は業界一のヒューマニストを自認しております。人間の尊厳を損なったり、人の悪口を言ったり、セックスを面白半分に扱うような漫画は、断固体を張って阻止するのが、唯一の編集方針。つい忙しさにかまけて、樽本が如き不良漫画家を起用したことを、その日は2369(ニィサンシックスナイン)回後悔しました。

その後の調査で、12月号は完売に落ち着きそうだと判明。増刷必至だったのを、私めの安易な作家起用がぶち壊したのです。無能な亜流誌編集者に出来ることは、他人様の足を引っ張るくらい。関係各方面の皆様、そして私が一番愛してる全国の読者の皆様、いつも迷惑ばかりかけてすみません。みんな私が悪いのです。

* * *

予定では今月号は、『パンプキン』の糞ガキ大久保某に、「われ人にケンカ売るときゃ、マジメにゴロ巻かんかい。テメーのガンは、ウインクと区別がつかんゾ」てな調子でからむ予定だったのに、出来ずにグッスン。

〈ジェイソン塩山〉('87・1)

*『ロリタッチ』12月号は三栄印刷(数年前に倒産)のミスで、2本の漫画に股がり、4カ所もの乱丁が全部数で起きた。

もう知ってるとは思うけど、僕は道徳主義者だ。

一昨日(12月9日)、大地主の蛭児神建の旦那が、15日締め切りの『漫画スマック』(毎月8日発売・300円・上総志摩&なぞくんの両センセ執筆中)の原稿を届けに来る。隣のセクションの『ス

ーパーコミック』（毎月12日発売・300円）の原稿までも持参。先月〝番外地建〟呼ばわりされたのが、よほど応えたらしい。ムフフ…。と…ところが、僕の担当してる『漫画スマック』の方は、カットだけで原稿を忘れて来やがった…いえ、お忘れになられていたのだ。脳軟化が進行してるとは聞いてたが…。

それにしても蛭児の旦那は偉い。本誌以外にもこんだけ㈲遠山企画から仕事を依頼されながら、今月の日記を読めば分かるように、コビはおろか、妙に突っ張る所もないし、大新聞のように客観的ぶる風もない。素直なのだ。こういう人に僕もなりたいと、常々心がけているのだが（奥歯ガクガク、眉毛ベトベト、腹ん中は真っ赤）、やはり彼も人間。〝うさん臭い塩山というアバタ野郎〟に対する、若干の配慮が感じられる。小作人を馬鹿にした態度なので、僕が注釈を加えます。白夜書房主催で行なわれたエロ劇画誌編集者座談会ですが、記事になった時の題名が、〝さらばロリコン！　ハードエロ劇画の時代だ!!〟。いやあ、人間生きてくって、つくづく大変だと思いますよ。

もう一つ旦那が指摘していた、12月号の本欄の一部に事実と違う所があるとの件、確かに僕の書き方に問題があったので、沖田翔二さん、そして読者の皆様に謝ります。その部分というのは、「順法精神あふるる道徳的えろほん屋・沖田翔二君万歳!!」というアミ文字でも、「〝人道に外れながらも法律に違反しない程度のエロ本〟をつくるのが、東京三世社、そして笠倉出版の本業だろうが、どこで血迷ってんじゃボケナスビ!!　こういうのを世間では〝目糞が鼻糞を笑う〟と言うのだ」でも、「どこで仕事をするしないは、漫画家個人の決めること。僕や本誌に、いくら赤ちゃん言葉で泣き言を連ねようと勝手だが（面白いので）、逆上して限度を超えるな」でもなくて、「さらに沖田君が恥ずかしいのは、一下請けとの僕とのケンカに、県会議員をやってるお父様や、親類の国会議員にまで御足労を願っちゃってること」という下りのみに関してです。

蛭児の旦那の日記を読めば分かるように、沖田クンの実家はただの洋服屋さんで、親類にそんな政治家はいないとか。すいません沖田さん。僕は次のような象徴的な意味で書いたのですが、確かにあなたはともかく（内心で分かっててトボけんじゃねえヨ!!）、一般の読者には誤解を与える内容でした。釈明します。下請け↓スポンサーの出版社↓大手取次↓読者という、ある種の力関係の一部を、県会議員と国会議員というヒユで表現したのですが、自らの非才から一般読者に分かりにくい内容になってしまいました。すいません沖田さん、そして読者の皆様。僕が悪いのです（余計に分かりづらくなったかな…でも、ある種の事情を察して理解して下さいよ）。むろんその他の部分に関しては、一切謝る気も道理もないので、読んでない方、バックナンバー買ってね（それから沖田クン、僕は別に扁桃腺は悪くないので、以上の部分を何度でも朗読して差し上げます。早朝でも、深夜でもいいから電話して下さいね。ウッフン！）。

＊　＊　＊

謝り疲れたので、いきなりお年玉クイズ。A欄とB欄に挙げたものは、それぞれ関連があります。例えば①と㋩、②と㋬というように書いて、〝お年玉クイズ〟宛にお送り下さい。全問正解者の中から抽選で1名に、〝秘密プレゼント〟を進呈。B欄には余分なものも混じってるので、まどわされないで下さい。

A「①㈲遠山企画②スタジオ・バトル③日本国憲法④マルクス⑤EUオフィス⑥コミックハウス⑦阿宮美亜⑧中核派⑨マル優⑩番外地貢⑪一水社⑫レーガン⑬田中康夫⑭上総志摩⑮総理府世論調査」

B「㋑新宿まんがの森の売り上げランキングの数字㋺『ロリタッチ』という亜流誌の編集元㋩『マイドール』という3冊目の単行本が出た㋥チンチンが立たなくて困ってる㋭約束通りの稿料払わなかったり、生原稿の紛失は日常茶飯事㋬最近、永井荷風的風格が出て

きた㋣右翼に毛嫌いされている㋠人は人の上に人を乗せてつくる㋷三流役者㋦…の二丁拳銃㋸多田正良という本番編集者を未だ雇っている㋾オカマ系ロリコン誌『漫画カルメン』の編集元㋻乳もふくれた毛も生えた〜男の味も知りました〜♪（〃青い山脈〃のメロディで）㋕各社に落とした原稿のネームが2〜3本眠っている㋵『ペンギンクラブ』の編集元㋟廃止の予定㋹塩山氏の愛人との噂㋞ロケット弾㋡「西口パレス座」がなくなって、寂しがってるホモ㋧一でいっちゃん嫁もらい〜二で二階へ連れ込んで〜三でサルマタひっこぬいて〜♪㋤ねんねんころりよ〜おころりよ〜♬㋶人格者沖田翔二クンに、最近謝った」

皆様、それではよいお年を。来年こそは、私も謙虚に参ります。

〈うさん臭い男・ダーティー塩山〉（'87・2）

人間素直が一番。

蛭児の旦那の足元にも及ばないのは分かってますが、そこは亜流誌編集長の図々しさ。〃亜流誌編集長日記〃で、今月は本欄をつれづれなるままに埋めてみることにものぐるほしけれ。

12月×日…忘年会を数日後に控えてるのに、『漫画スマック』の下版が終わらない。エロ劇画家の小森達センセ、それに上総志摩センセのおかげ。「上総センセ、3月に東京三世社から出る単行本、原稿を早く上げないと圧力かけて遅らせますヨ」と脅してはみるが、進まない。それにセンセの場合、急がせると線が流れる。流れるといえば、成瀬巳喜男にそんな映画もあったはず。今年はとうとう、年間の映画の見物本数が150本に届きそうもない。10年振りのいけない記録だ。

12月×日…出社したら阿宮美亜センセが、アシストの西川潤センセと共に、会社で原稿のスクリーントーンを削っている。業界では有名な諏訪発の、〃人間宅急便〃と化したのである。今日昼に、本来は宅急便で原稿が届くはずだったが、昨日送れなかったため、わざわざ長野から特急に乗って来たのだ。経済的にはどう見ても、都内にアパートを借りた方が得なのだが、「私、最近人に会いたくないんです。だから…」と本人。先月も、先々月もこうだった。先々月は、偶然阿宮センセのファンを自称する、ねぐら☆なおセンセと遭遇。ねぐらセンセはその数日後、バイクで事故って長期入院の身に。原因は、阿宮センセの余りの美貌振り以外には考えられない。夜、阿宮センセの原稿が入稿したため、『漫画エキサイト号』の下版終了。この本の印刷を担当している暁印刷の中内さんは、『ロリポップ』の担当も。光栄です。

12月×日…昨日、『漫画スマック』の下版を終え、今日は楽しい忘年会…のはずだがユーウツ。というのも、昨日出席した㈱旦々舎の忘年会は、15万もの赤字を出したのだとか。ここは、ポルノ映画やビデオ、単行本の制作をしてるのだが、5000円集めてこの赤字。うちは4500円だもんね。幹事役なので心配。関係者に寄付を仰ぐ手もあるけど、ミジメったらしいから今年から中止したのだ。カッコつけすぎたか…。

ただ昨日の忘年会は、なかなか楽しかった。日野日出志、堀内満里子、篠原尚秀の各センセらも出席してた。しかし篠原嬢に、一水社の出腹薄毛野郎、多田正良（『なすびクラブ』編集長）が寄り添ってたのは不愉快だった。

会場に行くと、樽本一センセ、読者招待当選者のテディ・キータン氏、中総ももセンセ（ストッキングの模様が挑発的）らが既に席に着いてる。遅れてすんまへん。早速集金開始。新宿の「三平酒寮」で会費4500円…良心的な忘年会だと思うけど、「高い」との声も多い。集めてると、まいなぁぼぉい、やまぐちみゆき、法田恵、三条友美、ひで・かず、青山一海らの各センセ方がドドッと入場。

会費を値切ろうとする者、逃げようとする者、「体で払いたい」とせがむ者、股間をいきなり握る者…忘年会は人種のるつぼだとつくづく思う。やまぐちみゆき嬢（男）が、1月下旬に東京三世社から出る初の単行本の宣伝かたがた、カラオケマイクを握る。スカートの乱れもまるで気にせず挑発。まいなぁセンセが下からのぞく。それを注意する若堂まりあ女史のスカートに、ササッと手を伸ばすゴブリン森口センセ…。結局、1000円くらいの黒字に。幹事は大変だ。

12月×日…蛭児の旦那の個人的忘年会の見物に。松原香織、ゆきぁやのの各センセらの他は、未知の少年少女ばかり。熱もあったので、見物に徹す。地味に盛り上がってたが、蛭児の旦那も無理してつきあってる様子がありあり。高校生でサングラスをかけたうさん臭そうなガキが、僕の手みやげのロバートブラウンをガバ飲みしてる。余程育ちが悪いのだろう。

1月×日…出社日なのにオズが来ない。夕方になって電話があり、「明日からかと思って…」。長生きしろよ。痔が痛む。

1月×日…原稿を持って来た樽本一センセが、沖田翔二クンがまた腐れ業界誌『COMIC　BOX』2月号に、何やら書いていると教えてくれる。「あいつは、俺10回くらい殺してるからもう興味ないの」とはいうものの気になり、イサムに買わせる。フフフフフ。何カ月振りかの反論がこれかよ。ププッ。一つ。国会議員&県会議員の件。あれは僕の書き方が悪かったのね。ゴメン。二つ。乱丁。俺は下請け編集者。それ以降の工程はどうにもならない。編集部の責任なら、もうこの本出てないよ。言っておくけど、君は10発くらいタマ喰らってんの。一～二発が不発でも、既に死んでいる!!　一番本質的な問題、例えばねぐらセンセを例に論じた、編集者と漫画家の関係等から反論始めぬ限り、君は甦れない。

もう、頭は悪いけど善良な、沖田君あたりを相手にすんのは飽きちゃった。この業界、印税を組織的にかすめとる奴や、マネージャー気取りで漫画家の稿料ピンハネする糞ガキがゴロゴロ。こいつら相手の方が、余程面白そう。（'87・3）

虚実皮膜論は、芸術だけで充分…
私はウソつきが嫌いだ。

知らなかった。いくら悪事を働いても、それを辞めた人のせいにしたり、〝会社組織になってなかった時代のこと〟と言うだけで、一切が帳消しになるなんて…。さすが資本主義国ニッポン。なら僕も、有限会社でもつくろうかな。で、設立前に悪事のし放題、漫画原稿で猫の爪とがせ放題。そしてある人間に事前に言い含めて超高給を支払い、有限会社設立直後に、全責任をかぶせて首切り。へへへ。世の中チョロイチョロイ。「素人同然の子達が何分やってますんで…」と、スポンサー筋まで弁護してくれますし（以上のことは、特定の団体について述べられたのかも、そうでないのかも、ネギなのかも、糸コンなのかも、シイタケなのかも不明かもネギ）。

1月×日…『漫画エキサイト号』の下版が遅れてる。阿宮美亜、樽本一の両センセのおかげ。樽本センセが電話で、「スクリーントーン貼りだけだから、そちらでやらせてくれ」。拒否する理由もないので隣の机で仕事をさせるが、漫画家に電話しづらい。というのも僕は、〝七色の声の男〟と言われるくらい、漫画家によって声や態度がガラリ変わる。むろん売れっコには卑屈で、新人にはゴーマンなのだが、童貞の眼、いや樽本センセの眼の手前、自分でもしばしばあきれるくらいの豹変振りが、かなり湿りがち。

1月×日…また人間宅急便こと阿宮美亜センセが、諏訪より原稿を一人で持参。いつもはアシスタント同伴で、トーン貼り等を事務所でおっ始めるのだが、今日は既にアップしている。本人の顔もさわ

やか。「⁉」と僕。「何かいいことあったのかよ。男が出来たとか、妊娠したとか？」「相変わらずの発想ね。フフ、ウフ、フハハハ」「とうとう頭来たか。男の味も知らねえうちに」「まあ、『漫画スキャンティ』3月号を見てからにして下さいよ。フハハハハ……」何考えてんだよ、この高齢処女!!　しかし、少し不安…。

1月×日…娘（2歳8カ月。誕生日は5月12日。人づてに聞いたところでは、かの『ホットミルク』の名女編集長、斎藤O子女史と同じとか。娘の誕生日まで亜流とはね）と団地近くを散歩中、「應文堂書店」のスタンドに『漫画スキャンティ』3月号を発見。早速阿宮の「女子高生凌辱日記」を読む。塩山なる編集ゴロが、徹底的にコケにされてる。しかしあの糞女、ここまで深く観察してるとは…と涙を流して笑いつつ感心する。「トーチャン、何が面白いのォ」娘が、チーズカマボコをかじりながらけげんな顔。立ち読みも見苦しいので買う。ついでに娘にも、ドラえもんを一冊。しかし変な本。阿宮の他にも、中森ばぎ菜（デビュー直後は〝中森ばぎ菜〟だったが、しばらくして〝中森ばぎな〟と改名。後には国北瑠璃、塚本那美由とも名乗る。全て同一人物）、中総もも、まいなぁぼぉいらの各センセまで描いている上に、僕が「亜流で悪かったなあ」なんてコラムまで担当。B5判の300円雑誌でこの路線。松本博こと多田正良もよくやるよ（ちなみに、肖像権問題にゾーケイ深い、蛭児の旦那もコラムを書いてる）。

2月×日…上旬は比較的暇なので、神保町の本屋を散策。どこもロリコン誌と単行本の山。今年のしつこいカゼにせきこみ、タンがからむ。ティッシュを持ってなかったので、手近にあった『パンプキン』を開いて中に「ケッ」と吐く、かなと思ったが、出版にたずさわる人間として恥ずかしいので、道路に吐く。みんな、カゼには注意してね。

2月×日…胎芽流縷センセ来社。「前号の人気どうでしたか？」ハガキの束を渡す。見る見るうちに肩が落ち、顔が蒼ざめる。見終えると、「あ…り…が…とう…ご…ご…ざい…ました」と一言残し、亡霊のように立ち去った。ちなみに編集部近くには、深そうな運河も国電の駅もあるし、少し歩けば枝振りのいい木がいっぱい繁る後楽園もある。胎芽センセに教えてやればよかった。少々人気がなくても、胎芽センセなど良心的。音切プッコ（やまだのら）センセなど、「わ〜い！　俺ってみんな2番人気だ!!」とはしゃいでおったもの。ペケの②の方に書かれてるのを、2番人気と誤解してたわけ。

2月×日…若堂まりあ女史が原稿を持参。「大岡家の一族」は、なかなか評判良かったよと言っても、うれしそうではない。昔から、感情を表に出さない人なのだ。しかし、酒を飲むと一変する。また飲みに行こうね、2人だけで。

2月×日…中総もも女史、下描き持って来社。『ひとみ』に描いてるとかいう、友達の少女漫画家も同行。ふと一昨年の夏、『漫画バンプ』に連載中だった番外地貢センセが、阿乱霊と一緒に編集部に遊びに来たのを思い出す。いつ出世なさるか分かんないので、つい名刺を出して友人にコビる。姑息な〝下請け編集根性〟と我ながら思う。

2月×日…プレゼントコーナーに載せるため、上総志摩センセの単行本、『パラダイスドール』の刷り出しを、担当の東京三世社の飯田さんからもらう。アヴァンギャルドな表紙だ。

2月×日…蛭児の旦那が、大幅に遅れて原稿持参。弁明するスキを与えず、「阿乱建センセ、御苦労様!!」。先手必勝♥

（'87・4）

ウソつきで愛されるより…
正直者で嫌われたい!!

小心ゆえ大胆、繊細ゆえケンカ好き、敏感ゆえ早漏の僕ですが、

近く2人目のガキも出来ることだし、もう大人になろうかなと決意。〝避けて通るか信者になるか〟(多田正良作のコピー)などとおだてられて(!?)、粋がってた昨日までの自分が恥ずかしい。要するに業界の嫌われ者じゃねえか。やっぱり人間、最後は愛だ。人に嫌われるような言動は今後一切致しません!! 小学校の時の田島校長先生だって、毎週月曜日の朝礼の時に、「人に迷惑をかけるようなことはやめましょう」と、あれほどおっしゃっていたではないか。

2月×日…『ホテル・ニューハンプシャー』を観に中野へ出るため、新宿から中央線に乗ったら各駅停車だった。チェッ! おまけに同じ車両に、不細工な母親と、親以上にヘチャな糞ガキが乗り合わせうるさい。吐き気がするようなアホヅラは、まるでカボチャ、いやパンプキン。「大久保〜大久保〜」次の駅で降りたのでホッとしたのもつかの間、今度は2人連れの酔っぱらいが大バトルロイヤルを始める。スタジオ撮影以外のシーンが、極めて美しいという一本の映画を観るのに、何でこんなに苦労をするのかと、心は白夜のように蒼ざめ、書房ン、いや、ショボン。これも皆あの不細工な糞ガキのせい。

2月×日…『漫画エキサイト号』の原稿は何とか入ったものの、阿宮美亜の『漫画スマック』分の原稿が落ちそう。「われ、いつから原稿落とすほどの身分になった。雨の降る日に野良犬のように、残飯を漁っとったんはどこのどいつじゃい。それをここまで育ててやったんは、誰やと思ってんねん! 野良犬だって一度飯もらえば、お手くらいするぞ」と電話で脅す。これは業界では通称〝雨の日の野良犬理論〟と言って、急に売れっコになって態度がでかくなった漫画家に、よく用いられる兵法の一種だ。「黙っててもわからんじゃろ!! 遅筆漫画家にゃ黙秘権なんてねんだよォ」阿宮くらいの玉になると、〝雨の日…〟くらいの責めでは一向にたじろがない。こちらの会話が途切れた一瞬のスキを狙い、「許して下さい…」。敵が諏訪住まいでなければ絞め殺してやる所だ。業界にはもう一つ、〝恋愛理論〟という兵法もある。漫画家が言を左右にして自分の所の仕事を敬遠しだしたら、「要するにあんたは俺って編集者、いや、俺って人間が嫌いなんだ」とズバリ言うのだ。ナイーブな相手ほど傷つく。4〜5年前、『漫画バンプ』に「アコギまんが」を連載中だったいがらしみきおに用いたことがあるが、最近の漫画家、特に女流には効果が薄い。2〜3カ月前に阿宮に使ったら、明るく「ええ」と答えた(結局落ちる。必ず復讐してやる)。

3月×日…中森ばぎ菜が下描きを持って来る。前作「赤いブルマーの女」に比べれば乗りも良く、アホらしい話で好感が持てる。ほめた後で一言。「もちっと背景も描けよ。前号みてえにトーンをコーヤクみてえにベタベタ貼るだけじゃダメだ。でなくっても、〝スクリーントーンのメカタだけは業界一番の『ロリタッチ』〟なんて、斎藤O子女史にこの前もコケにされたんだから」「分かってますよォ。だから塩山さんも分かって下さい! 私、塩山さんとこに、一番力入れてんです。分かって下さい!」その瞳はかすかに濡れてさえいる。「また惚れられたか…。けど商品には手を出さねえのが俺のポリシーよ」と、彼女の台詞を初めて聞いた時には考えたが、どの編集部に行っても同じことを言ってるらしいのを知った今は、俺の心も網走の流氷のようにクール。一応は、「分かってる。分かってるよォ」と答える。あの女、事務所に入る前に目薬つけてんじゃねえだろな。

3月×日…樽本一の2冊目の単行本(『漫画エキサイト号』連載分)が、5月半ばに辰巳出版から出ることに。編集も僕。樽本に題名を考えてもらう。『ロリタッチ少女』か『エキサイトレディ』と来ました。案の定、辰巳出版営業部の正木さんに拒否される。樽本センセのサービス精神は買うけどね。結局は『ブルーレディ』に。定価700円。東京三世社の『DATE OF THE DEAD』

（発売中・700円）共々、絶対に買おう。本欄では時々他社の本を宣伝しているが、不道徳ではないかとの声が読者の一部、いや僕の心の一部にある。が、『漫画エキサイト号』では『ロリタッチ』や三世社の単行本の宣伝を大々的にしちゃってるので、その非難は当たらないのであった。

3月×日…今月も蛭児の大旦那の入稿が大幅に遅れている。電話にも出ない。居留守かはたまた、エロビデオを借りにレンタル屋にでも行っているのか。

3月×日…イサムが絵画の道に復帰するに伴い、後任に隣のセクションからつかさが着任。もうベテランだが、しばらくは雑誌も大幅に変わるし大変だろう。ガンバ!!（いつから僕のセクションは、ハードゲイ化しちゃったんだろ。トモミちゃ〜ん!）

3月×日…『ロリポップ』（毎月12日発売・笠倉出版・500円）を買う。素晴らしい!!

（'87・5）

ファミコンも悪くないけど……他人の真心は最高の玩具（オモチャ）だ。

3月×日…近頃、完全に僕は狙われている。読者が想像するような、連載が打ち切りになった漫画家や、沖田の翔チャン、あるいは〝無能編集者〟の名前を欲しいままにする、一水社の多田正良などにではない。何を隠そう、〝絶対に手を出してはならない〟、女流エロ漫画家や女性編集者にである。女に持てた話など、第三者にしたら子供自慢同様に鼻持ちならぬだろうが、これほどの重大事を取り上げぬのもまたわざとらしいので、事実のみを羅列する。

3月×日…中森ばぎ菜が絵コンテを持参。こんな物を見たってどうにもなる絵ではないが、彼女は人格の方が面白いので、顔を見る機会を一度余分につくったのだが、それが誤解の元だった。近頃は用もねえのに電話はよこすし、濡れ場の描いてあるコンテの脇に、「〝何が3回オナっちゃった〟よ。私ってどーかしてる、こんなの描いて」とか、「塩山さんとの出会いは運命的ですね」だの、危ねェ寄せ書きを腐るほど書いて来る。今日は上着も胸元が異常に開いてる。「このオメコシーン、もっとしつこく描かんかい!」と言うと、「どーこどーこ」と近寄って、わざとらしく胸の隆起を見せつける。前から1度飲もうという約束になっているが、これではいつレイプされるか分からない。妻子に示しもつかない。「ヤッピー、ばぎ菜ちゃん!! また今度ねェ」と、冷た〜く追い返す。油断もスキもない。

3月×日…また**人間宅急便**こと阿宮美亜が、諏訪から『漫画エキサイト号』の原稿を持参。黒澤明の『生きる』をパロり、エロ劇画誌編集歴30年のガン老人が、公園のブランコで腹上死するという、何ともアホらしい傑作。コーヒーをごちそうする。徹夜明けの女流漫画家は、ほつれ毛の乱れあたりが色っぽくなくもないと見てると、意味もなく首を傾むけ、襟足を見せる。この前電話で、女のセクシーポイントは襟足だと言ったのを覚えてて、さかんにモーションをかけているのだ。遂にはタバコの火を灰皿に押しつけると、「塩山さん、今夜一緒に飲みましょう!」。一瞬、襟足付近にキスマークをつけるのもオツかと思ったが、後々のことを考え、「いや〜、今娘が水ボーソーで早く帰んなきゃ」と、本当のことを言って逃げる。油断もスキもない。

3月×日…隣のセクションで、『スーパーコミック』と『漫画セクシャル』を編集している美少女（?）編集長、カーマストーラ吉田の態度が近頃妙だ。SEXの奥義を極めた人で、僕のような早漏インポには、かつて鼻水もひっかけてくれなかったのに、柄にもなく厚化粧して来たり、意味深なことを。「塩山さんて、読書と映画鑑賞と、**人の真心を弄ぶ**のが趣味だってよく言うけど、私そういう人っていいなって思うようになったの、最近」。で、深いスリットの

入ったスカートで足組みを。「あ…あの僕、性格はしつこいけど、ベッドの中ではタンパクで…」と逃げる。油断もスキもない。

4月×日…樽本一がゲンコを持って来る。早く帰ればいいのにウロウロ。空いてる机に座ってため息をつき一言。「あ〜あ、今日で23歳か…」要するに、まだ自分は童貞だと言いたいのだ。古女房を貸せとでも言うのか？　しかし奴の視線は、何と僕のデンブに注がれてる。何てことだ!!　遂には男にまで…。そうか、うちの女房が妊娠中なので、僕が性的に飢えているという噂を、オズかつかさが誰かにしゃべったに違いない。殺してやる!!

4月×日…『プチパンドラ』10月号で雨宮じゅんに、〝**パンプキン帝国の謎〟●スタジオバトルの社長の月収はなんと260万？●いまだかつて誰も見たことがないという、わたなべわたるテレホンカードの謎●創刊号のカラー生原稿はネコのツメとぎ用として使った？●おかかえ作家の原稿料はページ10000円？　等々…ホントかウソか？　その全貌が今、明かされる！　刮目して待て…〟**と書かれた『パンプキン』14号（編集人・大久保光志・発行人・福田博人・発行所・白夜書房）を買って読む。いいメンバーが揃ってる。わたなべわたるは元より、ライ麦栽培委員会、L・ライムなどは良い。エロ劇画じゃプロだと自認しているが、この世界じゃトーシロだと実感（今挙げた人で、本誌で描いてもいいって人、読んでたら連絡してネ！　ここは『イチゴみるく』なんかと同様、連絡先教えてくんない）。やはり文化的エロ本屋、白夜書房である。全ての出版物が一流であり、誠実であり、堂々としている。まだ修行が足りないと反省。

4月×日…友人が電話で、「先月貸した4000円を返せ」と言って来たので、「バーロー。お前の知ってる○×には、4万も貸してんだ。あいつが一番悪い。何だ4000円くらいで」と逆襲すると、納得して電話を切った。アホな奴。

4月×日…ばぎ菜、ゲンコ持参。ヤベー、今日はミニスカートだ。た…立ってしまう。

（'87・6）

……どうでもいいけど、僕はSEXが弱いんだ!!

百姓出身の僕は、雨の日が嫌いだ。先祖の血が体の内部で、〝これでは農作業が出来ない〟とかすかに騒ぐためである（とはいえ、今でも連休には実家に帰って、農作業にいそしむこともしばしば。業界でただ一人の、〝兼業編集者〟である）。雨の日の団地住まいのユーウツを晴らすには、「イトーヨーカ堂」で買ったステレオでレコードを聴くのが一番。聴く曲も順番もいつも決まってる。最初にシャネルズの「フール・フォーリン・ラブ」、次いでプレスリーの「テディーベア」、最後が、マイトガイ小林旭の「自動車ショー歌」。聴き終えると頭を3度、ガッシャガッシャガッシャと振る。気分が晴れる…てなことは、『漫画バンプ』7月号の編集後記でも書いた気がするが、稿料がタダのページでは、この程度のことは許されるはず。

3曲目も終わったのでヘッドフォンを取ると、娘の観ていたNHKの『みんなの歌』がブワッと耳に飛び込む。「カボチャのおじさん」なる曲。例によってアニメ。八百屋の店頭。キャベツやピーマンは次々に買われていくのに、いつも威張り腐ってるカボチャが売れ残り、やせ我慢しているという歌詞。歌詞は切ないが曲は「軍艦マーチ」調で、その落差がえもいわれぬムードを醸し出す。身につまされる曲ではないか。「カッポッチャッの〜♪　オッジサ〜ン♪　カッポッチャッの〜♬　オッジサ〜ン♪」（自らが編集する雑誌を〝カボチャ〟に託してるのであり、糞雑誌『パンプキン』等とは無縁な話題であることをお断わりしておく）

ねぐら☆なおセンセと電話。やばい噂が一部に出回ってるとのこと。前々号の「ヤケクソジョッキー」で触れた『コミックキッド』(笠倉出版・480円)に、僕が一枚加わってるんじゃないかとのハガキが、『ホットミルク』(毎月3日発売・白夜書房・480円)に殺到してるのだとか。まずい…!! 僕個人と遠山企画の名誉のために、事実をここで確認しときます。あの糞本の編集長加藤健次氏は、確かに遠山企画から『漫画エクスタ』と『漫画ラブ&ラブ』を請け負ってる嘱託編集者です。けれど、『コミックキッド』は彼が直に笠倉出版から請け負った仕事で、遠山企画は場所を提供しているのみ(当然家賃タダじゃないだろうけど、一社員の僕にゃ不明)。売れる売れぬはともかく、あんな百姓っぽいイモ雑誌、僕が一枚噛んだら絶対に出させせんもんね(傍点部分、兼業編集者が言うと説得力があります)。

僕が一枚噛んでるのは、隣のセクションのカーマスートラ吉田が編集長をする、『キャンディコミック』(6月上旬発売予定・日本出版社・350円)の方。これこそ、本物の(!?)『ホットミルク』(毎月3日発売・白夜書房・480円)の〝亜流誌〟と言えるだろう。形態も『ホットミルク』そっくり。メンバーも、阿宮美亜、樽本一、中森ばぎ菜、杏咲もらる、ねぐら☆なお、鶴田聖、ゴブリン森口と、お里の知れるセンセ方がゾロゾロ。売れる売れぬは出てみなきゃ分からないけど、『コミックキッド』のように〝オカマロリコン誌〟になってないのだけは確か。けど『ロリッコ倶楽部』、『ペンギンクラブ』、『ココナッパイ』、そして『ロリタッチ』といい、エロ劇画出身の編集がやってるロリコン誌って、〝アヴァンギャルド〟なのが多い。顔が真っ赤に。

オズが今月で辞めることに。正業に就くのだとか。よく8カ月も持ったもの。誰一人彼を引き止めない。これは彼が嫌われてるためではなく、つかさと僕の間に「次は女のコを入れようネ」という、暗黙の了解があるため。5月下旬に『フロムA』に広告を出すことに。男の去り際は寂しいものだ。悲惨な下請けプロダクションにとっては、ありふれた光景だが。

雨のせいか、何かとせわしい日だ。食事のついでに神保町を散歩。先月の本欄で、『プチパンドラ』10号で、雨宮じゅんに〝**パンプキン帝国の謎**〟**●スタジオバトルの社長の月収はなんと260万?●いまだかつて誰も見たことがないという、わたなべわたるテレホンカードの謎●創刊号のカラー生原稿はネコのツメとぎ用として使った?●おかかえ作家の原稿料はページ10000円? 等々…ホントかウソか? その全貌が今、明かされる! 刮目して待て…**〟と書かれた『パンプキン』14号(編集人・大久保光志・発行人・福田博人・発行所・白夜書房)…と紹介された、『パンプキン』15号(編集・制作㈲オーエスピー出版・**旧スタジオ・バトル**)が本屋に並んでいた。八百屋に並んでたならともかく、あえてここで触れるまでもなかろう(ここで言う『パンプキン』と、冒頭の「カボチャのおじさん」は、無縁な話題であることを再びお断わりしておく)。

『**「まんが」の構造**』(大塚英志・弓立社・1600円)を買う。詳しくは来月触れるが、〝本書に収録した文章の多くは、ぼくの事務所のただ一人の所属まんが家白倉由美とのおしゃべりがもとになっている〟という後記が笑わせた。みんなで買ってあげよう。

('87・7)

馬鹿の相手より孤独の方が素敵…友達なんかいらない。

前田俊夫といえば、今や『うろつき童子』のヒットで有名だが、数年前までは技術の割には売れない劇画家として知られていた。10年前に僕がこの業界に入り、初めて担当したのも彼。すぐ廃刊なっ

たが、『漫画モンロー』というエロ劇画誌で原稿依頼したのだ。当時彼は梶原一騎と組み、『少年キング』で「明日へキックオフ」というアメラグ漫画を連載していたため、〝前田としお〟の名で掲載した。「僕はどうでもいいんですが、少年画報社が…」と照れ笑いした。

絵だけでなく、頭も切れる男だった。ただ殺人的に原稿が遅かった。『増刊ヤングコミック』の戸田利吉郎氏が、「平田さんだってほら、もう出来たんです」と、生原稿を差し出したこともあった。むろんファンの前田は仕事を放り出し、平田弘史の生原稿を喰い入るように見つめていた。僕はといえば、今年の阪神ファンのように暗たんたる心境。なぜなら自誌の原稿は、まだペンいれが終わったのみの、『増刊ヤンコミ』がアップした後でなければ、取り掛かってもらえなかったからだ。

その前田の代表作、『血の罠』が単行本になった（『漫画エロトピア』という雑誌は、これとふくしま政美の「女犯坊」を掲載したことのみで、劇画史に名を残すだろう）。以前サン出版から出たこともあるが、同社の単行本は印刷も最低、ページは適当にカットするはで悪名高く、買わなかった。今回は版元が、〝文化的エロ本屋〟で知られる白夜書房なので、早速一冊「文苑堂」で手に取った。で、ページを開くなり、眼球と脳ミソがグシャグシャに。「な…何だこの糞本は⁉」誰の眼にも、この単行本が生原稿からではなく、雑誌発表時のスクラップ、ないし他の手段、例えばサン出版の単行本からでも起こしたであろうことが歴然としていたからだ。全ページ、トーンの飛び放題、絵のつぶれ放題。もしこれが本当に生原稿から製版したのであれば、その職人は座頭市か何かであろう。「これで金とるの？」とカバーを見れば、定価500円。奥付には、企画編集、オーエスビー出版、発行人、福田博人とある。一転して納得。

4ページばかり乱丁印刷されんのとはわけが違うとあきれつつ、彼らにも次のような弁明は可能だと思う。「いくら糞のような印刷でも、名作は出されるに超したことはない。エイゼンシュテインの『メキシコ万歳』が、断片でしか観られなくとも貴重なように…」その通りだ。が、これを見て一番驚くのは前田本人だろう。もっとも彼のこと、「いいんですよ、銭さえ入りゃ」とケラケラと笑うか。笑わないのは読者だけ。

てな憎まれ口を叩きつつ、家で『朝日新聞』の夕刊を読んでたら、かの大塚英志センセがコラムを書いててビックリ。もはや〝内容証明書のオーソリティ〟も、朝日文化人であらせられるのだ。僕の如き〝亜流誌編集ヤクザ〟が、御高著『「まんが」の構造』（弓立社・1600円）を、「図解入りの評論文に面白いのがあったためしがない。まァ、梶原一騎への言及はオモロイが…」などと論評するのは恐れ多いことと、即中断。けどこの人って、時々とんでもない所に顔出すね。昨年だったかな、『社会新報』（社会党の機関紙）を親戚の家で読んでたら、年の割にむくんだツラした写真が載ってて、のけぞったことがある（筆者の写真が見たい人は、古本屋でロリコン誌になる前の『漫画ブリッコ』を探して下さい。〝漫画家インタビュー〟というコーナーがあり、いがらしみきおが登場している号で、オイラが彼と醜いツラさらしとります。当時のエロ劇画再録本時代の編集長は、『ゴミックキッド』、もとい、現『コミックキッド』編集長の加藤健次氏。いや〜、世間て狭いもんです）。

回想にふけりつつ人材募集コーナーに目を移せば、どっかで聞いたような社が。経理、広告の募集だ。「書籍、娯楽雑誌の総合出版社。（自社ビル社員70名）㈱白夜書房」傍点部分の鋭いコピーに、ナイーブな心がズタズタに。夏センセを採用した㈲遠山企画の、『フロムA』での広告文はこうだった。「青年劇画に興味のある方‼」で、夏センセ、「ファミリーマート」（今やエロ劇画誌の品揃えじゃ日本一）に出向き、立ち読みして応募したんだって。

そこへ凸版印刷から催促の電話。6月25日発売の阿宮美亜センセの増刊号、『恋色マドンナ』（B5判・170P・300円）の表紙の入稿はまだかだってさ。まいったな。こんなこと書くと、本の宣伝してるみたいだ。おまけにファミリーマート系で売ってる『漫画エキサイト号』には、阿宮センセの「生徒会発情族」が連載されてるとまで書いたら、二重に宣伝の強制だよ。彼女の5冊目の単行本は、秋に東京三世社から出るだろうとまで書いたら、人間として最低だ…。でもサイテイってカッコいい!!

（'87・8）

他の下請け編集者は礼儀知らずのゴミばかり…俺だけが正しい!!

日陰者に甘んじてる〝夏〟でっす。今回は次号から始まる、〝ばぎ菜と美亜の交換日記〟の前祝いで、中森ばぎ菜さんと阿宮美亜さんに、電話座談会をしていただきました。本番漫画家、中卒、膝小僧が小汚い（以上ばぎ菜さん）、骨太、アル中、アシスト手ごめにしての給料不払い（以上美亜さん）、陰気なブス（2人とも）等々、種々の真実まじりのデマ攻勢の中、けなげに生きる2頭、いやお二方ですが、さてどんな話が飛び出すことやら…。

ばぎ菜「どーも。次号からよろしくお願いしまっす。この前は『恋色マドンナ』につまんないの描いちゃって…」**美亜**「あれ、すっごく面白かった。4冊の単行本の濡れ場のパターン表なんて最高。あの馬鹿の編集した本にゃもったいなかったね。あの〝漫画★阿宮美亜論〟、今度単行本出る時に入れさせてくんない？」**ばぎ菜**「えっ！ホントですか。すっごく光栄。そ…それと、あの馬鹿って誰のことですか？」**美亜**「そりゃ決まってるじゃん。短足アバタデブ、別名群馬の短パンコンニャク百姓よォ」**ばぎ菜**「いいですね、美亜さんて巻頭2色原稿の常連だから、編集の人のこと、そんだけ好き勝手言えるんだ…。あたしなんて、どーせ寄席で言えば〝色物〟だから」**美亜**「何言ってんのよ。そんな弱気じゃ、この業界生きてけないよ。編集と漫画家ってのはね、インドのシーク教徒とヒンズー教徒みたいなもんなの」**ばぎ菜**「はあ？」**美亜**「喰うか喰われるか、殺すか殺されるかよ」**ばぎ菜**「……」**美亜**「つい最近もあいつに、銭儲けの話つぶされたんだよな。フランス書院ていうさ、三笠書房の子会社が、エロ漫画の文庫本出し始めたの知ってんでしょ。その下請けを、**コミックハウス**っていう、『ペンギンクラブ』や『ココナツパイ』編集してる編プロが始めたらしいの。私ん所にも電話あったから、塩山のカス野郎にさ、〝壱番館の『危険フレンド』は増刷もしそうにないし、文庫に回していいですか？〟って、猫撫で声でお願いしたの。そしたらこうよ。〝手前、真っ昼間からショーチューのビール割り飲んでんじゃねェ、ボケッ!! 何で俺んちの畑に実った野菜を、何の手入れもしてねえ宮本（コミックハウス社長）ん所のガキ共に、タダでくれにゃならんのよ。テメーの所じゃ1冊しかエロ劇画誌持ってねえから、他人の家の畑当てにしてんだろけど、よその家の座敷に土足で踏み込むようなチンピラは、俺が一人残らず殺してやる〟これよ」**ばぎ菜**「こわ～い」**美亜**「そんだけならなよくあること。一息つくといきなり猫撫で声。〝…なんて言うのは大人気ない。知っての通り、著作権は君のもん。文庫本でも何にでもしなさい。辰巳の『感じるとしごろ』も三世社の『恋色マドンナ』も一冊残らず。遠山企画を信頼して単行本の仕事をくれた、辰巳の正木さん、三世社の仙田さん、壱番館の松田さん、司書房の岡野さん、皆大喜びするよ。君の幸せは僕らの幸せ。けどよ、その前に俺のアバタヅラ、テメーの骨太の足で踏んづけてくんだなあ〟…これよ」**ばぎ菜**「こわ～い」**美亜**「結局塩山の野郎、外部に対しては漫画家の著作権を強硬に主張してて、それはそれで私買ってるけど、内部の漫画家操作方法は、一番自分で馬鹿にしてる、〝ナニワ節〟。矛盾だらけ

のアバタ野郎よ。だから天敵の『COMIC　BOX』、『パンプキン』、『ロリポップ』は団結して対抗すべきなのよ。『COMIC BOX』の権威（?）、『パンプキン』の金力、『ロリポップ』の厚顔無恥が3本の矢になりゃ、あいつなんて問題になんないわ。軽く抹殺よ。それにしてもコミックハウスの文庫の件、印税が8％なんてのじゃなく、せめて10％なら話に乗ったのに」**ばぎ菜**「はあ」**美亜**「ともかく交換日記、来月から頑張ろうね」**ばぎ菜**「はい!」

（文責・夏／検閲・塩山）

【お詫びと訂正】 8月号の「ヤケクソジョッキー」での渡辺かほるさんの投書、「…またこりずに『美少女症候群』なんて、金もうけ本を出してる〃ゴミBOX〃ですが、以前知り合いが、この本にのった時、原稿料が出るというので待っていたら、図書券を送って来ました。ま、それはそれでいーのですが、ゴネたらお金をもらえた♡といううわさを聞き、どーいうことなんだろうと、しゃくぜんとしないものを感じてしまいました」の〃ゴネたら〃の部分を〃**当然の権利を主張したら**〃に訂正させていただきます。またオハヤシ中の、「ケンカがあったら、両方の意見を聞いてことの判断をするなんてのは常識。ましてや雑誌編集者となればな。それが勝手に沖田に文章の場をまず提供、加えてあのガキに、〃反論のスペースを用意する〃ってなことを書かしてる。何思い上がってんだ、漫画家と出版社へのコジキ集団が」の中の、〃コジキ集団〃の部分を、〃**ゴキブリ集団**〃に訂正させていただきます。

前者の基本的文章ミスは、投書した方にもやや責任があります。が、後者におき、全国の誠実なコジキ産業従事者に、多大な迷惑をおかけしたことは弁明の余地がありません。慈善家気取りの商人どもとは、今後二度と混合しないと、ここに誓約いたします。

（'87・9）

日なたにはい出るから殺されるのだ…ゴキブリは日陰で生きろ。

公団住宅の8階に住んでいるのだが、この夏はやったらにハエが多い! 愚妻がハエ叩きに興じているのを見た豚児が（3歳。女。斎藤O子女史と誕生日が同じ）、それを真似てあちこちをビシバシ。さすがに8月も10日を過ぎるとハエも減る。それが許せぬ我が娘。近頃は台所やネズミの額のような風呂場にまで、ハエ叩きを持って出撃。ゴキブリを待ち伏せ、殺してはニタニタ。顔つきはまったく似てないが、根性の悪い所は僕にソックリ。しかし、〃三つ子の魂百までも〃と言うくらいなので、近頃はしばしば説教。「ゴキブリさんもね、やっぱり生きてんだよ。お父さんも、お母さんもいるの。お前だって、お父さんやお母さんが、死んで帰って来なくなったら困るだろ。誰もロッテリアで、ストロベリーシェイクなんて買ってくんないよ。だからね、こんな日陰にまでわざわざ来て殺しちゃダメなの。あっちのね、御飯食べる所や、テレビのある部屋、ネンコする8畳にまで出てきた時は、そのハエ叩きでぶってもいいんだよ。ゴキブリさんが、法律を破ったことになんだからね。でもね、日陰でコソコソ生きてる、優しいゴキブリさんまで殺しちゃダ〜メ」それに答えて娘いわく。「わかったよお父さん! でもストロベリーシェイク、今度はもっと大きいサイズのにしてネ」（以上の話題は、前号本欄における**【お詫びと訂正】**での、〃**ゴキブリ集団**〃云々の話題とは一切関係がありません。勝手に〃ゴキブリ〃を象徴的に解釈して、〃いつも楽しい稿料の図書券払い〃や、〃貧乏漫画家は図書券を喰え〃等で知られる、良心的ぶった糞ゲロ漫画情報誌への怒りをエスカレートさせても、本誌編集部は一切責任を負いません）

その娘も女房出産のため、愚妻共々実家に帰省。これから2〜3

カ月、独身に戻れるわけ。洗濯等はメンドだが、オナニーがゆっくりと出来ると思いつつ、『シティロード』を見ると、『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』と『サボテン・ブラザース』を「文芸坐」で上映中。『サボテン〜』は未見だが、『リトル〜』は既に観てる。けど、あと2〜3度は観たいよなと参上したら、いつもは邦画を上映している文芸地下でやってる。画面が小さいのでガックリ。けどいいよな、冒頭シーン。サイコー!! あと、スティーブ・マーチンの歯医者とマゾ趣味の男性患者との下り、何でみんな笑わないのだろう。あんなおっかしいシーンなのに。僕なんか涙だけじゃなく、ザーメンだってまき散らしたいくらいだったのに、場内はシーン。最初観た大宮の映画館でもそうだった。不思議だ（『サボテン〜』は退屈でした）。

観終えるなり新宿へ。5時に、高松の生んだ〝**工員エロ漫画家の星**〟、くらむぼんセンセと待ち合わせているのだ。せっかくの土曜日のプライベートタイムを、ンな汗くさい野郎との会見で汚したくはないのだが、ゴミケなる発情ガキ共の全国大会があるとかで上京。「めったにこんな機会はないので、是非会ってくれ」と、電話でせがまれたので仕方ない。東口改札の外で、ノースリーブ姿の可愛コちゃんの腋の下に見とれてると（僕の腋の下のフェチは、業界では有名）、「シオヤマさんですか?」との声。『転校生』の頃の尾美としのりのIQを、30ほどマイナスしたような野郎がヘラヘラ。「やっぱり昭和館で、高倉健の『いれずみ突撃隊』観るんだったな」と深く反省するが、もう遅い。「いや〜、塩山さんて、案外若いんだもん驚いちゃった。そんなデブでもないし、アバタヅラってほどじゃないですよ。結構2枚目ですね。どうも阿宮美亜さんの、『気分は少女色』（一水社・500円）でのイメージが強くて…」

よくしゃべる男。善良そうではあるがこうケーハクでは、しかも工員じゃ女に持てぬであろう。例によってアルタ裏の「三平酒寮」へ。「いや〜僕飲めないんすよ…」との口とは裏腹に、カエルの塩焼きをツマミにビールをグビグビ。20歳だというが、飲み方が中学生のようにぎこちない。「危ない…」彼にとって上京とは、ハレの体験なのだ。泥酔した野郎のゲロ掃除などマッピラ御免。今の所は、僕の持参した読者のアンケートハガキを喜々として読んでいるが、いつ狂うか分かったものではない。

その時である。こんなこともあろうと事前に呼んどいた、本番女流漫画家の中森ばぎ菜が登場。「び…び…美人じゃないですかァ」肉体労働者らしい臭いオセジを言う方なら、聞く方も聞く方。「オホホ、いやん!」だって。「これが小汚ないので有名なばぎ菜の膝小僧です」と、サッとスカートを酒ぐせのよい僕がめくると、何と黒いモモヒキ（スパッツ）でカバーしてる。「オホホ…その手は喰わないわ」今度はサッと二の腕を取り、腋の下をジロリ。すると、真っ白な赤チャンパウダーが塗ってある。「オホホッ!」とんだ酒ぐせの女。その時である。くらむ氏が、いきなり逆宙返りを2度繰り返したのだ。どよめく店内、僕、そしてばぎ菜…。

（'87・10）

武者小路実篤でいいの…、よく憎む人はよく愛する人だ。

夏カゼがまだ抜けない。一文にもならぬ文字を連ねるのが、切れ痔が痛む日の朝の脱糞のようにつらく、豚児の発熱を見るように苦しい。2〜3カ月前の『漫画スキャンティ』の自分のコラムをそっくり流用し、楽しようとも考えたが、『漫画スキャンティ』→一水社→多田正良→阿宮美亜という連想ゲームをするうちに、今月の行数埋めのアイデアがポンと出る。よし行け！ 手抜き箇条書きゴシップ情報!!

①40近い妻子持ちの一水社の多田正良が、骨太女流漫画家の阿宮美

亜のイジメに会い、号泣したという話は「ばぎ菜と美亜の交換日記」で有名になったが、その余波を受けて中断に追い込まれたのが、同誌の阿宮の「女子高生凌辱日記」。続行を望む声は、多田正良の引退を求める声同様に強かったが、遂に勇気のある雑誌が出現した。『漫画エキサイト号』（毎月5日発売・300円・ファミリーマートに完備）である。同誌の11月、12月号が連載を引き受け、完結の暁には、一水社以外の某社より単行本化する予定とか。同誌の編集長はこう語っている。「一水社分だと120Pしかないというので、阿宮を哀れに思い、連載を引き継ぐことにしました。今まで苦労なされた多田さんには気の毒な気もしますが、人生、谷あれば山ありです」（同シリーズの第1部は『気分は少女色』と題され、既に500円なりで一水社より発売中）多田の涙が枯れるのはいつの日のことか…。

②ファンだった深沢七郎が死んでしまった。こんな時だけは、なぜか書評紙を買う習慣がある。まず『図書新聞』。立松和平の追悼文はまあまあ。笑ってしまったのは一面のその横。真崎守の『風漂花』の書評を、矢野敬子なるオナゴがしてんのだが、注目したのは名前の横。（COMIC BOX編集部）と明記してんのだ。どういう神経した女(アマ)なのかなと思いつつ『週刊読書人』を開くと、目にドー～ンと〝**大塚英志**〟なる、朝日文化人の名前が飛び込む。深沢七郎とどういう関係があるのかと日付を見れば、追悼は一週間前の号だった様子。しかし、やりましたね。落ち目の三度笠とはいえ、『読書人』の一面です。さすがは〝白倉由美とのおしゃべり〟の中で思考を磨いている、筑波大出のインテリだけはある。マジな話、四方田犬彦なんかよりは大塚の方がよっぽど面白い。人間的にはいくらゲスだろうが、物書きは作品が面白ければいい。ただ『読書人』の文は、やや肩に力が入りすぎ。結びの文など最悪。けれど御高著**『「まんが」の構造』**（弓立社・1600円）の価値が減ずるわけではない。それはともかく、なぜ大塚の本はあれほど無視されたのだろう。いくらイヤな馬鹿ヤロでも、いいものはいいのだ。特に白夜書房関係の雑誌なんか、僕の見た限りではまるで無視してたけど、大塚で一時はたんと銭儲けしたくせに、冷たいというか、尻の穴が小さい編集者ばっかの社だとつくづく思う。ビニ本屋上がりの〝文化的エロ本屋〟（ププッ）の限界と言ってしまえばそれまでだが、敬愛する斎藤O子さんにしろ、川崎ぶらなんていう善良なゴミに2ページも毎月糞文書かせるスペースがあんなら、〝ドーン〟と紹介してやればいいのに。蛭児神センセじゃないが、〝大塚の遺産〟喰ってる面があるのは事実なんだから。人間、都合の悪い過去はよく忘れる。敗戦→終戦。

③中森ばぎ菜が「まんがの森」で、自分の『エンドレスチャイルド！』（辰巳出版・700円）を買い占めてるとの噂。膝小僧をモモヒキ(スパッツ)で隠してゲンコ持って来た本人に尋ねる。「ホントだよ。いつも同じ格好じゃバレるから、上着やヘアスタイル変えて大変。そりゃさ、アソコは所詮は白夜書房の経営する本屋で、発表するランキングも客観的だなんて全然思ってないけど、童貞漫画家の樽本さんのォ、ほら『ブルーレディ』（辰巳出版・700円）が15位でしょ。当然さ、処女漫画家だって気にするよォ」一週間かけて買い占めた部数が、計6部だそうです。

④ねぐら☆なおセンセがネームを持って来る（翌日、ゲンコも持参してくれた。よく読んどきなさい。駆け出しなのに、「ゲンコ取りに来て」なんつー漫画家諸君！　下請けはな、交通費工面するのも大変なんだよ。貧乏漫画家はもっと大変だ!?　元請け→下請け→孫請けという、世界に誇る日本の資本主義メカニズムを知らんの君!?）。ねぐらセンセとの会話。「時坂夢戯がこの前ばぎ菜さんと会ったらしいけど、ブスじゃないって言ってましたよ。塩山さんもゴールデンブスダイヤモンドラインとか、言い過ぎじゃないですか。阿宮さ

んとは僕も会ってるけど、普通っていうか、特にブスでもォ…」ねぐら氏らしからぬ煮え切らぬ会話に、思わず問い返す。「それじゃ聞きますけど、ねぐらさんには、いやねぐらさんの眼には、阿宮が美人に写るんですか⁉」「う…う…いや…そ…そ…の…の…」「**イエスかノーか？**」山下奉文並の筆者の態度に、ねぐらセンセも脂汗を一筋、二筋、また一筋。「う…う…何だかんだ言っても、塩山さんて面白いですね、ハハハ」漫談編集者とは俺のこと。（'87・11）

小学生でも知ってることだが…銭にならぬ友情はウソだ。

近頃本誌の人気ベスト3は、盗作漫画家のかおる、工員エロ漫画家のくらむぼん、童貞漫画家の樽本一の各センセと、だいたいメンツは決まっているのだが、今日4色原稿を持って来た、まいなぁセンセもかつては常連であった。東京生まれ特有のシャイな性格が災いしてか、やや最近は人気が凋落気味だが、人間的にはいい奴だし、頭の回転も早く、肥満気味とはいえ美少年で、割と僕は好き（彼のことを〝善良なゴミ〟などと、一度も思ったことはない）。

たまにはお茶でも飲もうと、一階の喫茶店へ。本誌11月号を手渡すと、既に目を通している様子。「いいんですか？」「何が？」「今月の〝亜流誌の内幕〟ですよ。あんなこと書いてちゃ、多田（一水社の多田正良。阿宮美亜のイジメで、号泣したのは全国的に有名）さんに続いて、斎藤さんにも絶交されんじゃないですか？」「斎藤さんて、斎藤O子さん？」「またとぼけて。いくら夏カゼがひどかったからって、あの人とか、川崎さんにまで八つ当たりしちゃ悪いですよ」「川崎って誰よ？」「……。悪口言った方はすぐ忘れても、言われた方は忘れないもんですよ」「へえ〜」

確かにまいなぁセンセはいい人だ。今時僕に説教してくれんのは、うちの長女と彼くらい。「まいなぁさん、僕は今でも友達が多すぎると思ってんですよ。**なるべく友情を商売の種にして、身軽になりたいんですな**。10月27日に、増刊号が出るんです。これは笑えますよ。『漫画ホットパンツ』（B5判・172P・300円）言いますねん。タイトルロゴが『ホットミルク』（毎月3日発売・480円）ソックリ。これで高田馬場方面とも縁が完璧に切れ、サッパリしますワ」と付け加えようと思ったが、どうせ分かることなので平山三紀に話を移す。まいなぁ氏も大ファンだそうだが、彼女の最盛期は僕の中学時代。あらゆる面でレトロな奴。早死にするタイプだ。

夜7時。仕事も終了。皆帰って事務所に一人。普段なら映画を観に行くのだが、今日はどこもペケ番組。こういう日は京浜東北線は西川口近辺の〝日本のブロンクス〟と言われる凄絶地帯で、映画雑誌を片手に安酒をかっくらうのが常なのだが、たまには都会に出てみるかと新宿に。やはり東京者（モン）は違う。皆美人だ。

気がつくと、「昭和館」の前に立っていた。しばしヤクザ映画のポスターに見とれる。たたきが決まってる。〝浅草（エンコ）が俺を呼んだから、ドスを抱えて来たんだぜ‼〟（『日本侠客伝・雷門の決斗』）。く〜っ、しびれる‼　健さんになったつもりで「まんがの森」へ移動するや、気分がジトーッ。一挙に高倉健から、沖雅也になったような心境。客筋のせい。店員は非常に感じがいい。何も買わずに出ても、「ありがとうございます」。普段の教育のせいだろう。

品揃えも、**白夜書房の経営する書店でありながら**フェア。レジ付近に、わざとらしく『パンプキン』や『コミックウェーブ』、白夜系の単行本が山になっていることもない。先月の本欄で中森ばぎ菜嬢が、ここの売り上げランキングが客観的でないみたいな意味の発言をしていたが、とんでもないブスデマ女である。地方の書店のコミック部門担当者は、ここのランキング通りの品揃えをすべき。返本半減で、社長からほめられること必至。出版社、書店等で漫画に

関わる者は、太っ腹な白夜書房に**感謝すべきである。**

翌日は二日酔い。いつもは遅い、カーマスートラ吉田（『キャンディコミック』編集長）が、鬼瓦のような顔をして電話に吠えている。相手は阿宮美亜らしい。聞けばギリチョンで、今夜諏訪からアシストと2人で上京させ、新宿のラブホテルにカンヅメにして描かせるのだとか。アシストの西川クンは、フヌケとはいえ一応男だし、3Pに突き進まぬように陰ながら祈る。カーマスートラの**自重を期待しよう。**

三世社の仙田さんから電話があり、11月分の単行本の題名を決めてくれとの話。最初の中森ばぎ菜の分は、『極東ジャンクガール』（A5判・11月7日頃発売予定・700円）とスンナリ決まるものの、2冊目の阿宮美亜のが出て来ない。「〝美少女グルメ〟はどうでしょ？」いきなりつかさ。**東デ中退東京芸大受験経験あり**の割にはまァまァなので採用。『美少女グルメ』（A5判・11月15日頃発売予定・700円）の内容は、いつかの増刊の『恋色マドンナ』とは大幅な変更があるらしい（**ヒヒヒ**）。

夜7時。カーマスートラと2人。「暇そうですね。たまには飲みに行きましょか？」「ちょっと今夜はダチと…」とミエを張り、優しいカーマスートラの心情を踏みつけにし、西川口で一人寂しく楽しく酒を飲む。最後に飲んだショーチューの梅割りに悪酔い。自宅近くのレンタルビデオで、『若妻の匂い』なるイタリア社会派ポルノを借りる。2発抜く。妻子が来週実家から帰る。こんな極楽の日々もあと数日。

（'87・12）

太っ腹なんてもう古い…今ケチがオシャレだ!!

10月21日、新宿の「三平酒寮」で、まいなぁぼぉいセンセの、『黒の薔薇奴』出版記念宴会が開かれる。出席者は、まいなぁセンセの他、樽本一、中森ばぎ菜、DONKEY、かおる、るりあ∅46、白井薫範、露骨助一郎、秋山道夫、井野場ひろみ、号泣編集の多田正良らの各センセ方で、計15名。若手漫画家がほとんど酒を飲まず、おにぎりをつまみにコーラで酔っているのにア然。樽本センセの『DATE OF THE DEAD』、『ブルーレディ』の刊行祝い以来2回目のこの宴会の実態は、実はとんでもないもの。

要するにこうだ。「**遠山企画経由の原稿で単行本出した漫画家は身内関係を中心に、必ず出版記念の宴会を開く義務を負う。その際本を出した漫画家は、必ず1万円寄付する。**残りは寄付者以外のメンバーで割りカンとする」毎月三世社から1～2冊単行本が出てるので、しばらくはタダ酒にありつけるわけ。11月は中森ばぎ菜と阿宮美亜でしょ（『極東ジャンクガール』と『美少女グルメ』、もう買ったかな？）。12月は、かおる御大の『ラブカウンセリング』と、樽本センセの『遊戯室』ですので、たまりませんな。ワイロ役人の気持ちがよく分かるゆうもんでっせ。誰が考えたって!? 決まってまんがな、〝永遠に本の出る予定のない〟男、つまりワシだす。今夜はつかさがカゼでダウン。悔しがること悔しがること（タダ酒への人間の、奥深い業を目のあたりにする思いでした）。

しかし人間、悪事を繰り返してると天罰が下ります。〝**遠山企画の永久幹事**〟と呼ばれ、年末の忘年会、単なる宴会等をことごとく取り仕切って来たワイこと塩山が、この日とんでもないドジを踏んだ。会計の際、寄付のあった1万円を差し引いた額を15人で割ったところ、1300円になったんで全員から集めたら、2000円ほど足りない。幹事参与のかおるセンセも、「おっかしいですね」。しかしこれは幹事の不手際。身銭を切る。でも納得がいかない。翌日、会社でボツにした井野場ひろみのカットを破り捨ててると、ハッと理由が判明。「そうだ！ まいなぁセンセからは集金してないから、

14で割らにゃならなかったのだ」同時にこの前田舎に帰った時、親父から聞いた話を思い出す。よくその村の衆も、山陰のホルモン焼き屋で宴会をするのだが、村一番のリンショク家のオッサンが、必ず自分で金を払いたがるのだという。皆も妙に思っていたが、割りカンだし、面倒でないので放っといた。そしたらある日、ホルモン焼き屋のママが俺の親父にポツリ。「あの人払いたがるはずよ。だって、いっつも一人分少なくして、あんたたちだけで割りカンにしちゃうんだもん。最初は身銭切っても、あんたたちから割りカン分回収すりゃ、自分はロハでしょ」年末を迎えて種々の宴会がありますが、読者の皆さん、こんなセコイ真似しちゃダメよ。

てな調子の『ビッグトゥモロウ』的駄話で行数埋めして来たら、もう少し。恒例の悪口を2〜3書いて（例えば成金出版社ほど、ショーもねえ雑誌の中吊り広告を国電に出すとか、最寄りの駅に看板出すとか、白亜のビルを建てるとか、人材募集の際に自社ビルと社員の数を百姓っぽく自慢するとか、文化的振るとか、作家の振り込み手数料を図々しくも差っ引くとか、その銭でタダで社員旅行を、しかも海外でするとか）、皆さんの筋肉をほぐそうとも思ったけど、僕も子供じゃないのでそういうことはやめて、11月末に発売になるもりを舞センセの、『幸せの青い鳥』（辰巳出版・700円）の校正をしてると、噂のまいなぁセンセが2色原稿を持って来る。

「いやあ、疲れましたよ。この前は朝の5時までるりあセンセと舞い上がっちゃって。カーマスートラ吉田は、珍しく3時頃にゃ帰りましたね」さすが太っ腹。1万円も強奪された上に、15名のうち誰一人として『黒の薔薇奴』を持参してサインを求めようともしなかったのに、この余裕。東京者の良い面であるな。「宴会の時、テープレコーダー回したでしょ。聴かせて下さいよ」うかつであった。すっかり忘れていた。早速カバンから取り出して、スイッチオン。

「……くちゅくちゅのかおるにゃ盗作という切り札があるぜ、くちゅ・・・くちゅ・・・」「ばぎ菜、テメー樽本と結婚しろ。原稿の回収に手間かかんなくていい」「樽本、いーかげんに童貞捨てろ」「泣け、泣かんかい。ハンカチは俺のを使え、なァ多田正良よォ」下品な僕の声が部屋中に満ちる。「ショーがねえなァ」が口癖のまいなぁセンセの声も。「塩山さん、これ今度コミケで売りませんか。天狗堂に1割か2割出せば、売りますよ。これから中森ばぎ菜編とか、かおる編とか、続々作っちゃうんですよ。地方の電波とか電気に縁のない所のマニアに、絶対売れますよ」東京者だと思って甘く見てたら、とんでもない商才。ウーム。

（'88・1）

確かに生きてることは恥ずかしいが…ぶっ飛ばされんなよ!!

ギャンブルと酒には、よくその人の本性が出ると言われる。残念ながら筆者は、酒豪を装ってはいるが下戸。しかし、酒席でのムードは大好き。各人の〝酒癖〟を観察するのが、何よりも楽しみだからである。12月2日、例によって新宿の「三平酒寮」にて催された、**〝中森ばぎ菜センセの『極東ジャンクガール』出版記念宴会〟**における各漫画家さんの痴態を、一切の主観を交えずクールに報告してみたい。

【芳賀露天】 中森嬢公認の「中森ばぎ菜ファンクラブ」の会長というか、代表。そのせいか、原稿はメチャ遅のくせに（その反動ゆえにか）、太々しい態度を示して宴会を盛り上げた。筆者を〝オッサン〟呼ばわりする頃からエンジンがかかり始め、僕は出なかったのだが（妻子に心配をかけられぬので）、二次会会場においては、何と**中森ばぎ菜嬢の膝枕**で終始高イビキをかいていたのだという。昔、キャンディーズの何とかいう小娘が、ファンクラブの会長と出来たことがあったが、エロ漫画界においても〝まんざらあり得ん話〟で

なくなる可能性も。中森ファンの皆様、会長の公私混同を許していいの？

【樽本一】 その2人の痴態を、ムッとして見つめてたのが樽本センセ。〝処女漫画家〟の身を案ずる〝童貞漫画家〟というのも、どこか昭和40年代の日活映画的である反面、不潔な感じも。本人もそれを自覚してか、「最近じゃ、ソープで捨ててもいいと思ってるんだ…」と、弱々しく友人に漏らしてるという。そろそろ25の壁を突破するセンセだが、本人のこうした〝不遇〟が、読者人気につながってる面も確かにあるので、担当編集者としちゃ複雑な心境（実は面白がってる他人の不幸！）。

【まいなぁぼぉい】 そんな下町ナンパ派（芳賀）と、地方ボクトツ派（樽本）の間に割って入り、「まあまあ」と細心の気配りを発揮、「エロ漫画界の竹下登！」と、思わず筆者に叫ばせたのがまいなぁセンセ。1月号での手抜きへの攻撃を察してか、「手抜き漫画のホームラン王です」とか、「一晩で20ページ軽くアップ。稿料に応じて描き分けます。160ページのA5判単行本も、8日間で描き下ろしOK！」などとハシャギまくり、煙に巻こうとの魂胆がありあり。この程度のことで、僕の追求を逃れようなんて甘い。早速日本酒を口に含み、本人が一番盛り上がってる所で、「ブワーッ」とクジラの潮吹きをモロに顔面にかましてやる。しかし下戸とは恐ろしい。一滴も飲まぬのに、その夜は顔が真っ赤になってました。

【DONKEY】 一見は温厚だが、かなりの毒舌家。それも自ら率先して言うのではなく、誰かが、例えば芳賀センセが、ジグソー漫画で知られる、某女流漫画家の悪口を言い出すと、「その通り！」とか、「優し過ぎる見方だね！」とかの合い手を入れ、軽犯罪法違反程度の罪状しか犯すはずのなかった彼を、死刑台にまで導くのだ。本人は幇助程度の罪しか問われない。真正の悪人である。**「ヒゲヅラの悪魔！」** ジュースを飲みながら、僕は思わずつぶやいていた。

【中森ばぎ菜】 僕と同じく下戸。会場に到着するなり、いきなりひどい目に。「はい1万円！」と幹事の僕に恒例の寄付を強奪されたのは仕方ないとして、問題はその後。注文をおばさんが取りに来た時、テーブルの上に『ロリタッチ』が一冊。「何ィこれ？」裏表紙の『極東ジャンクガール』の広告を見たおばさんが、**両眼を寄せて**手を伸ばす。その脇にいたのがつかさ。「あっこれですか。この中森さんて方の単行本の宣伝ですよ。それにほら中のこれ。〝ネオ・プリティーズ！〟ってんですけど、ほらほらスケベな漫画でしょ。み〜んな、この中森さんが描いたんですよ」「お…女の人が、こ…こ…こんなもんを〜？」本を手にしたおばさん、**漫画と中森センセを交互にジロジロ**。よせばいいのにつかさはこの後、「この、〝絶対麗奴〟はこの人、〝春はもうすぐ…？〟はこっちのヒゲの人…」と、ぶち上げ始めた。

中森センセ、その間顔をテーブルに伏せたまま。ただ一人、「あ〜良かった！」と胸を撫で降ろしてたのが、1月号は休みだった樽本一センセ。妙なところで運がいい。おばさんが去った後、つかさが全員のリンチを受けたのは言うまでもない。僕も上役として、穴にでも入りたい心境でした。

一次会では殊勝だった中森センセが舞い上がったのが、二次会会場。『キャンディコミック』編集長のカーマスートラ吉田が、そのスナックのマイクを取り、「ひとつ出たホイのよさホイのホイ〜♪一人息子とやる時にゃ〜親の許しを得にゃならぬ〜♪」と、とても女とは思えぬ春歌を唄い始めるや、いきなり芳賀の膝枕を崩し、中森明菜の「少女A」を歌い始めたのである。火がついたら止まりません。カーマスートラとマイクの奪い合い。高イビキの芳賀。ふて腐れた樽本。毒舌のDONKEY。仲を取り持つまいなぁ。時計は午前3時を回っていた。

（'88・2）

愚妻と豚児と『ホットミルク』と、香港映画にゃ勝てないっ。

正月映画で一番当たった邦画が、『ビー・バップ・ハイスクール高校与太郎狂騒曲』と『はいからさんが通る』、それに『あぶない刑事』だと聞いて、つくづく世の中、良い物にのみ客が集まるのではないと改めて思った（これは昨秋頃から部数が逆転したと言われる、『ロリタッチ』と『ロリポップ』の関係とは全く無縁な話題。部数が上なのは、かの亜流誌の方だとか。〝石が流れて木の葉が沈む〟とは、古人は立派なことを申しました）。

〝ビー・バップシリーズ〟など、正視し得たのは1本目だけ。下手な〝特撮〟使い始めた頃から糞もいいとこ。おまけに中山美穂まで出ないっつんじゃあねえ。あの白痴的淫乱振りと、音痴でピュアな主題歌がいいんじゃねえか。何なんだよ、柏原芳恵とかゆうブス女は！宮崎ますみのセーラー服姿も見苦しい（古女房のセーラー服姿よりはマシだろうが）。このシリーズの監督、那須博之ってのは、昔からコツコツよく努力するだけの無能人だからね。前にも書いた通り、〝善良な低能（川崎ぶら）〟は大嫌い!!『はいからさんが〜』に至っちゃ、フィルムの垂れ流し。つまり問題外組。水原一城（日立市）程度の字しか書けない、八部貞一郎（中野区）クラスの頭脳の持ち主といった所か。

『あぶない刑事』もひどい。前売券が売れようが客が入ろうが、ホントにひどい。山根貞男というオッサンが、『キネマ旬報』で重箱の隅をつつくようにしてほめてたが（?）、無理してうちの豚児の顔を称賛するような真似は、中森ばぎ菜さんや、カーマスートラ吉田のスカートをまくって股を舐めまくるのと同様、公序良俗に反する行為なので、絶対にやめて欲しい。

アメ玉しゃぶりの館ひろし（そういうしゃべり方でしょ）や、マザコンぽく振る舞うのが演技だと思ってる柴田恭兵に、今以上の演技を求めはしない（それは、㈲遠山企画に個性的雑誌を求めるようなもの）。ただ、アクション映画なんだからもっと体を動かせっつーの。

その点、『あぶない〜』と併映された『七福星』は素晴らしかった。賢明な読者は二百も三百も承知と思うが、香港映画は凄い!!カッコつけずに、主役級の役者までが受けようと死に物狂い。そのためか、ディテールはいいかげんな所も多いけど（『七福星』も最初の15分間は、一体どうなるんじゃろと思いました）、彼らの体技の躍動を眺めてるだけで、お金出した価値があると思っちゃう。

さて『あぶない刑事』。日本人やってんのがやんなっちゃいました。御覧なった方は御存知と思いますが、最後に2人がヘリコプターに吊り下がるシーン、お人形さん使ってんですよ。重要な山場なんです。ヘリの風圧に悶えてるはずの2人が、硬直してピクリとも動かない。「ウッソー！ マジイ!?」近頃の糞ガキの台詞を、思わずつぶやきました。ジャッキー・チェンさん、サモ・ハン・キンポーさん。僕は成瀬巳喜男や石井輝男、ヴェンダースを尊敬するのと同じ気持ちで、あなた方にいつも跪いています。

漫画にまるで関係ないことを書いて、ロハのページをうまく埋めようとした所に、ぶらりコンテを持って来たのが、読者人気はあるものの、女には持てないので有名な樽本一センセ。「何か面白い映画観ましたか？」「俺は一応漫画誌の編集なんだから、〝面白い漫画読みました〟とか聞けねえのかよ」「だってどうせ読んでないんでしょ、漫画」「そりゃそうよ。編集してるとネームの曲がりとかが気になって、ゆっくり読む気になれねんだ。な…何を言わす。こんなことが読者に知れてみろ。〝亜流誌の編集だけに、漫画への愛情がないんだ。そんな奴の編集してる雑誌、いくらエロ本だからって買ってやるか〟なんて言われて、また返品の山だぜ」「……。よくし

ゃべりますねえ、一人で。漫画なんて、僕も喫茶店でしか読まないすよ。それより面白い映画は…」「ズバリ『七福星』と言いたいけど、樽本センセの趣味に合わせて、『007／リビング・デイライツ』!!」「えーっ、観たんですか。僕もなんです。かなりいいですね」シリーズ最高の出来との噂は本当でした。高所恐怖症の僕は、ハッキリ言ってラリっちゃいました。

ようやくもう16行になったけど、それなりの落ちも着けにゃいかん。忘年会の話題に一行も触れぬのも、ゴシップマニアに対してサービス不足かな（非香港映画的）、と思っているうちにあと10行、と思っているうちにあと9行、と思っているうちにあと8行、と思っているうちにあと7行、と思っているうちにあと6行、と思っているうちに、もう手も疲れて来たし、寛容な読者の方ほど一度怒ったら怖いし、そうならぬうち本題に入ろうとしたけど、やっぱり香港映画の前にゃ、邦画なんてゴミでしかないと思わざるを得ないのだった。

（'88・3）

ゴキブリどもへのメッセージ…すぐ告訴しましょう。

今頃、もっともらしくトニー谷を語る奴と、白夜書房の直営書店「まんがの森」でサイン会するロリコン漫画家は、一体どっちが恥ずかしい存在か暇つぶしに考えていると、事務所のドアがコンコン。またお茶のセールスだろうと無視し、先日「大井武蔵野館」で観た大映映画、『悲しき60歳』（監督／寺島久・61年）のソーニュー歌である、森山加代子の「ジンジロゲの唄」を口ずさむ（この題名は違っているかも。だとしたら、『ホットミルク』―毎月3日発売・480円―の編集長、斎藤O子さんの上役、西尾さんの責任。小学校2年生だった僕に罪はありません）。〝ジンジロゲヤジンジロゲ〜♬ソレツラッパノツーレツマ〜ジョリ♬　ソレミヤパ〜ミ〜ヤ〜チョイナラジ〜ヤ♪〟

人がいい気分になってるのに、またもやノック。「すいませ〜ん。『ロリタッチ』編集部でしょうか。漫画を見て欲しいのですが…」仕方ないので「ど〜ぞォ!」。本当は今月の本欄は、「とはいえ、森山加代子やダニー飯田とパラダイスキングを語る筆者こそが、実は一番恥知らずなのではないか。むろん佐川ミツオや飯田久彦における…」というように、自省的内容を展開するはずだったのですが、以降正体が明らかになる持ち込み野郎のおかげで、構想がズタズタ。

僕は普段、壁に向かって仕事をしている。だから、振り返らないと相手の正体は分からない。しかし、その日の相手の職業は、壁を見たまま知ることが出来た。〝プ〜ン〟と機械油が臭ったからである。「工員だろう。それも1年や2年の職歴じゃない。機械油で産湯につかったような、超経済的下層階級出身者だ」とピンと来る。本誌の執筆者の中にも、一人四国は高松住まいの職工エロ漫画家がおるがと振り返れば、本人。くらむぼんのヤローが、油まみれのナッパ服に安全と書いたヘルメットをかぶって…いたわけではないが、イモなファッションに身を包んで立っている。片手に茶封筒。「すいません、初めて描いたもんで…」と臭い芝居。一目でピンと来たが、くらむの奴は昨年の夏に一度しか会ってないので、僕がもう忘れてると思い一芝居打ってるわけ。「工場の用事で東京に出張か?」「あれえ、もうバレてたんですか、アハハ…」とか言いつつ、エレベーター脇に山と積んであった、バッグ類をドサドサと運び込む。休暇を取り、北海道旅行する途中で寄ったのだとか。「よく分かりましたね。へへへ…」頭をかく手の爪にも、機械油の汚れがビッシリ。「イトーヨーカ堂」あたりで買った吊るしを着て、ホワイトカラーに化けたつもりなのだから笑止。南アフリカで日本人が、〝名誉白人〟扱いされて粋がってる以上にコッケイ。が、考えてみりゃ僕も

業界で唯一人の、百姓も時たまやる兼業編集者。偉そうなことは言わずに、次号の打ち合わせを。
「えっと、今月は同人誌漫画家が、ただ姦るだけの話だったなァ」「うっせえ!!」「え…まあ。けど、そう面と向かって言われるとォ…」「の中の名台詞）の路線でいんだっつーの。それよかよ、次号で例の奴やろうよ。この前電話で話したろうが」「はあはあ。でもあん時は夜勤明けで眠くて、よく憶えてないんです」「夜勤？　一体何だそりゃ？」「……」「工員界の専門用語か。そりゃいいとしてだ、時期も次号あたりが一番いいぜ。春の就職シーズンだろが。簡単に言うとこうだよ。地方でさ、昼間はカッコつけてマガジンハウスの雑誌類読んでるくせによ、夜は白夜書房の文化的エログラフ誌読んでるマスこいてんのが主人公。こいつがよ、〝白亜の自社ビル社員70名〟なんつう『朝日新聞』の募集広告見て、白夜の『ホットミルク』編集部に入るわけよ」「……」「入ったらイメージとは全然違うの。薄給で毎晩遅くまでこき使われて、しまいにゃ斎藤O子女史なる上役の、夜の相手までさせられるっつう話。どうだよ、小粋なストーリーじゃねえか」「……。でもやっぱまずいですよそりゃ。社員が70人もいる会社の悪口描いちゃ、将来色々と…」「この意気地なしが!!」「かんべんして下さいよォ…」
〝さあやろう、すぐやろう〟（2月号掲載の「ノン・ストーリー」
てな罪のない世間話に興じていると、カーマスートラ吉田が現われる。紹介するといきなり一言。「あ…よ…吉田さんですか～美人ですねェ凄いですねェ」どっかで似たような抑揚の台詞を聞いたと思ったら、昨年夏、中森ばぎ菜を新宿の「三平酒寮」で紹介した時と、全く同じなのだ。笑わせたのは、言われたカーマスートラが結構気を良くし、「連絡船のイカソーメンは結構いけてね…」と、観光案内をおっ始めたこと。いやあ、オセジとワイロと愛液は、この世の三大潤滑油ですね。

（'88・4）

金より女より名誉より…愛こそすべて!!

昨日殺された女性作詞家が、かつての西野バレエ団の江見早苗と知りウ～ム。36歳だったという。僕が中学生の頃はかなりの人気者で、レ・ガールズというのを由美かおるや奈美悦子らと結成。『ミニミニ突撃隊』というわけの分からん映画にも出演、「ミニと題名にあるからにゃ、すげえスケベな映画に違えねえ」と、クラスの好き者がワンサカと、今は駐車場になってる映画館につめかけた記憶がある。けど『ミニミニ突撃隊』に出たのは、江見でも由美でも奈美でも、むろん金井克子でもなく、原田何とかというヤエ歯の娘だった気もする（調べたら全員出ていた）。
人間の記憶なんて実にいいかげんだけど、だからといって絶対につける気のしないのが日記。今、『古川ロッパ昭和日記』（全3巻・晶文社）の戦中篇を読んでんのだが、こういう人も世の中にゃ結構いるらしい。会った人、食べた物、世相等、実に念入りに書き残してる。当時のインテリ人気コメディアンだし、一般人の日記とは異なるでしょうが、絶対に刊行されるって感じで書いてるナルシスト振りが面白い（ここらの調子は高取英が、『漫画エロジェニカ』に関して語る口調と、やや似ている。むろん高取が、ロッパほどの器だと言うのでは、当然ない）。
この日記の面白さの要因は、第一に古川ロッパのインテリイメージとは裏腹な、すっげえ俗物振りにある（インテリだからと言うべきか）。本当にイヤなヤロ。自分が由緒ある家系だからと、地方出身者や肉体労働者をやたらに馬鹿にする。工員エロ漫画家のくらむぼんセンセを馬鹿にする、某誌のアバタヤローも困ったもんだが、奴は所詮は水呑み百姓出の夜間大学卒。職業も電話帳にさえ乗って

ない〝下請けエロ漫画編集者〟で、いわば仲間内のケンカ。
けど金も名誉も家柄もある奴に、こう言いたいこと言われちゃァッタマ来る。加えてえらい美食家。大っ嫌い!! ところがこの戦中篇は、次第に食料事情が悪化して、空襲も始まり、ロッパにしてイモ飯並の物を食べざるを得ぬ所が山場。つまり読んでる方は、「ヒヒヒ…」てな感じで、サディスティックに楽しめる。共感し得ない内容で、近頃こんなに面白い本はない（定価は1冊1万2千円。薄汚い貧乏学生や、機械油まみれの工員エロ漫画家に買える値段ではありません）。
戦中篇を読み終え、娘に「バイバイ」して団地の外に出れば、秋晴れまがいの春の日。雲一つない青空に、読了後何も残らないので有名な、米沢嘉博の〝まんがひょうろん〟もどきを思い浮かべるが、そんなことはどうでもいい。呉智英も『COMIC　BOX』で、手前の本が2万部売れたからどうのこうのと書いてたが、アホな奴。売れ行きで本や雑誌の質が定まるなら、誰も苦労はしない。今苦労してるのは、ここ3日ほど中森ばぎ菜が、いくら電話しても出ないこと。一水社の多田在良も知らぬらしい。ああいうプッツンタイプは、時々こういうことがある。
翌日出社すると、ばぎ菜がニヤニヤ。『漫画スマック』の「中森ばぎ菜自伝」の原稿もアップさせてる。電話が故障してたのだとか。なら自分から電話しろと怒鳴りつけてやるが、本人は相も変わらずヘラヘラ。**他人から心配されることの快感に酔っているのである。**思春期を処女のまま通り過ぎた、20歳前後の陰気なブス特有の症状だが、この手合いにオセジを言いつつ、うまくつきあうのも下請けエロ漫画編集者の仕事。「この1～2号、人気がイマイチだね。でも僕ぁ評価してるよ」と媚びる自分が恥ずかしい。これも娘達のため。ガマンガマン。
ばぎ菜が去ると、妙に電話が陰気かつ太々しく鳴る。3月中旬に『危険マドンナ』（B5判・平和出版・300円）という増刊が出たばかりの阿宮美亜だと直感。ズバリ。「塩山さんですかァ…シクシク…げ…原稿が、今日アップするはずの原稿が…シクシクエンエン…ど…どうしても出来ないんです…エンエン…こんな自分が情けなくて…シクシク…」
スタニスラフスキーも、大竹しのぶも真っ青な、新劇タッチの臭い芝居にゲッソリ。「この骨太ドブスの泣き虫陰気女。泣くのは切れ痔が悪化した下痢の日の朝だけにしろっ!!」とドヤしてやろうとも思ったが、『漫画スマック』の連載で一部に人気のある、山口花子女史とも最近ケンカ別れしたばかりで、メンバーも不足気味だという事情から、「誰だってそんな時あるよ。気にすんな。明日でいい」と言ってしまう。これも娘達のためだが、森田健作だよこれじゃ。てなことを「大井武蔵野館」で、マキノ雅裕監督の『織田信長』（1940年）を観終えた後の、充実した休憩時間に思う。やはり生きるって、耐えることだとようやく悟る。

（'88・5）

下請けエロ漫画編集者の涙の記録…ああ！　新橋人生修行。

酒飲みって、どうしてああしつこくなるんだろう。30余年生きて来たが、下戸の僕にはサッパリ分からない。その日も夕方の5時頃、電話がリーン。昨日『アットーテキ』の、「下請けエロ漫画編集者／塩山芳明の嫌われ者の記」の原稿を取りに来たばかりの、一水社の泣き虫編集者、多田在良から。「久しぶりですね。どうです今夜芝公園に、花見に行きませんか?」「テメーのハゲ頭越しに桜見て喜ぶほど、俺は酔狂じゃねえ」「まあまあ、僕だって何も、2人で行こうなんて言いませんよ。中森ばぎ菜チャンと、大山ミミずクンも一緒ですよ、ヒヒヒ」「ミミずはともかく、ばぎ菜は『ロリタ

ッチ』の締め切り控えてんだよ。男に縁のねえ、本番女流漫画家かどわかすんじゃねえよ。女房に言いつけるぞ」「まあまあ。2人共もう来ちゃってるんですよ、社に。例の〝酒菜屋〟で待ってますから、じゃあねえ！」

酒飲みもよーく観察すると、全ての人がしつこくなるわけでもない。陽気、陰気は余り関係なく、普段割と遠慮深いタイプほど気違い水が入ると、納豆にとろろいもをブレンドした状態になる。編集部の酒乱野郎のかもはともかく、身の回りでそのタイプを代表するのが、多田と『キャンディコミック』編集長のカーマスートラ吉田女史。この手合い、カラオケ狂なのも共通。多田とカーマスートラに関しては、ハゲ同士でもある。

この2人、酔いが回って来ると、薄汚い額が一種の脂味を帯び、テカテカと輝き始める。僕はこれを、〝ミラーボール現象〟と呼んでるが、こうなるともう危険信号。「塩山さんも、一曲唄って下さいよ」「音痴じゃねえけど死んでも唄わん。そんな真似するくれえなら、良心的振った腐れゴロツキ業界誌、『ＣＯＭＩＣ　ＢＯＸ』の社員になった方がまだマシだ!!」するとあっさりあきらめてこうだ。「じゃ、私もう一曲唄うわ。今度は『骨まで愛して』よ！」このパターン、何かに似てると思いませんか？。

そうです。彼らは僕ら下戸にも断わると知ってて酒を勧め、拒否するやいなや、「そう。じゃ私が…」と言って自分で飲み腐る。あれです。酒飲みって白夜の『ホットミルク』（毎月3日発売・480円）の自分のページで、他社でやった仕事まで自慢して（メジャー系中心なのが笑わせる）、営業活動やっちゃってる〝善良な低能（ゴミ）〟、川崎ぶら以上に卑しい（ところで、村上知彦、鴻上尚史、呉智英、勝川克志、米沢嘉博なんつう、『ＣＯＭＩＣ　ＢＯＸ』に登場するセンセ方は、心が広いというか、欲がない。いくらでも他で仕事がありそうなのに、よりによって〝いつもニコニコ図書券払い〟の社で仕事するなんてね。無名な同人誌漫画家が、稿料代わりに図書券しかもらえないのは、当然なのかも）。

地部分の文とカッコ内のそれの、どっちが主なのか分からない書きかけの記事を投げ出し、いやいや新橋の安飲み屋まで出かけると、もう完全に多田は出来上がって、額が電燈と反射し合ってる。一見右翼風の太り気味の青年がいる。「大山です」僕より先に自己紹介。礼儀正しい男。体型からすると、空手でもしてたかも。殴られると怖いから、今夜は余り偉そうなことは言わないようにしよう。

近頃のロリコン漫画家のほとんどがそうであるように、中森、大山ともに下戸。あ～よかった。敵は多田一人だ。カーマスートラがいたら、カンペキに叩きつぶされてた。と安心してると、不二家ピーチネクターをチビチビ飲んでいた、中森センセの眼が座り始めた。しまった！　この人がジュース性酒乱であるのを、阿宮美亜が無名時代に僕に受けた数々の恩を、サッパリ忘れているのと同様忘れていた。

「何だよアレは」「アレって何だよ？」「塩山さんの〝嫌われ者の記〟よ。カット描くんで多田さんに見せてもらったけど、全然面白くないじゃない。手ェ抜いてんでしょ。阿宮さんの漫画の登場人物のファッションみたいにイモよ」「そうだよ。ひどいよ。おれの本だからって手ェ抜いてるでしょ。原稿料稼ぎの味を覚えちゃってますねえ。いけませんよ。『ロリタッチ』の時みたいに、メチャクチャやってくんなきゃ」泣き虫ハゲまで図に乗ってペラペラ。

「馬鹿野郎！　10万や20万の原稿料のために、他人の雑誌に面白いネタが振れるか!!」と、イッカツしてやろうとも思ったが、今はハゲ多田もスポンサー筋の一人。スポンサーの命令ならば、たとえ実父へのフェラチオであろうと、即やっちまうのが下請け編集者の心意気。「次号からは改心します！」と、ついお銚子を持って酌をしてしまった。もっと悲しくなったのが5分後。「よ～し！　これか

らタクシー拾って芝公園に花見だ!!」との声が、多田泣き虫ドハゲスポンサーより発せられた。「合点だ!!」と応じた僕は誰よりも先に駆け出し、烏森口交番の前でタクシー拾いに精を出したのだ。下請けエロ漫画編集者にいつ春は来るの?
('88・6)

『ホットミルク』は最近全くつまらんが…『ハーフリータ』が面白い。

実は僕、デブに悩んでます。身長174センチで72〜73キロだから、DONKEYセンセ程の肥満ではないけど、ホホやアゴのあたりが、年々丸味を帯びて来てます。おまけに近頃じゃ両足を閉じると、内腿がピッタシくっついて気色悪い。もっと悲しいのは、その内腿の間に手の平を差し込むと、妙に汗ばんでていやらしく、ついボッキしてしまうなんてことは、決してありませんが…。12年前にこの業界というか苦界に身を沈めた時は、60キロしかなかったんだけどね。もう5〜6年生息してたら、カンペキにDONKEYセンセになってしまう、と悩んでたら電話が「リ〜ン」。

ビジネスライクな響きだなあと思ってたら、やっぱ辰巳出版の営業部の人。「え〜と、今度7月に遠山企画さんでやってもらう、あだちけんさんの『ドキドキDカップ』(A5判・168P・700円・7月末発売)なんですが、40字前後で宣伝文を考えてもらえませんか?」「どうもどうもいつもお世話になります(こういった場合の卑屈さたるや、筆舌に尽くしがたい)。宣伝と申しますと?」「うちでは毎月、『COMIC BOX』に宣伝載せてるんですよ」「そ…そうですか。すぐファクスで送ります」

三案ばかり考える。①「遠山企画の塩山だ! この単行本の担当は俺だが、印税の図書券払いなんて真似は絶対せんぞ!!」②「漫画を金儲けの手段にすんのが大嫌いな、良心的図書券性編集部の皆様今日は! 当然この宣伝料も、タダなんでしょうね。けど貴誌の方針でいくと、漫画家も原稿料もらえなくなりますね。あっそうか、だから図書券払いなのか」③「わたなべわたる、かおる、くらむぼんに次ぐ、第4のDカップ漫画家登場! 買うしかない」…で、結局は③にしたんです、当初の予定通り。

再び電話が「リ〜ン」。世間全体に媚び切ったこの音は、奴しか考えられぬ。「へへへ、多田です、へへへ。今度『アットーテキ』でパーティーやるんですよ。執筆者の一人として参加して下さいよ、へへへ」「もう廃刊パーティーか」「……へへ…へへ。冗談言わないで下さいよ。創刊パーティーですよ」「廃刊パーティーも兼ねた方が、手間がはぶけるぞ」「へへ…へへ…今日はいつも以上に毒舌が冴えてますね、へへ…へへ…。新宿の三平は遠山企画の臭気が強すぎるから、10日に新橋でやります。へへ…へへ」

相変わらずのタコ。一水社の恥部多田在良(36歳。子供2人。同志社大学卒)については、今発売中の阿宮美亜の増刊号、『体験マドンナ』(B5判・東京三世社・300円)の、「裸の履歴書」と題された阿宮自身の描き下ろしエッセイに詳しいので、是非読んでよねと、下請けエロ漫画編集者らしい宣伝をしてると、まいなぁぼぉいセンセが、ネームを持って来る。

「ひひひ…塩山さん、ITOYOKOセンセの『Let's たつみ』(A5判・辰巳出版・700円)が、増刷になったとか」「そうよ。しかも5000部だぜ、一カ月も初版からたってねえのに」「ひひひ…それじゃ、21日の〝出版記念宴会〟の寄付金は、1万円てわけにも、普通の神経した人間なら行かないんじゃ?」「そうよ、俺もそれ考えてたのよ。ただよ、21日の宴会は従来通り1万円ですませて、〝増刷記念宴会〟ってのを、別口でするのはどうだ?」「ひひひ…もうお見通しですよ。今後は増刷の度に皆でたかりまくろって魂胆ですね。ひひひ」「お前も悪い奴だね。それとよ、21日にゃ、あ

だちけんにも声かけといたぞ」「ひひひ…さすが素早いですね。ＩＴＯＹＯＫＯセンセの宴会にアリバイ的に呼んどいて、センセの『ドキドキＤカップ』が出たら、みんなでハゲタカのようにってわけですね、ひひひ」「たかるなんて人聞きの悪い…。日本の伝統文化の存続のため、日夜努力してるって言えよ。それとよ、21日の宴会7時からだけど、あだちのヤロには8時からって言っといたぜ。あの手の下戸の貧乏人は、やたら酒の代わりにツマミを喰いまくって、幹事を悩ませるからなぁ」「…ひひ…ひひ…ひひ……」

急にまいなぁセンセが元気をなくしたので、その視線の先を辿れば、空いてる机の上にシッカリ据えられてる。ただそこには小さなカポックの鉢植えが一つあるだけ。「⁉」だが、その鉢の下を見た時には「アッ‼」。何と発売されたばかりの、センセの『絶対麗奴（れいどＫ）』（Ａ５判・１９０Ｐ・東京三世社・８００円）が、哀れにも水に濡れて横たわってのだ。よりによってセンセの単行本を、鉢植えの下敷きにするとは。アル中のかも以外に考えられない。「何ィさらすんじゃい、このド腐れアル中早漏中年が〜っ‼」「すす…すいません。僕近眼で、あの、その…すいません、まいなぁさん」「じゃっかあしい‼　テメー誰に謝ってる。本こんなに濡らしちゃ、後で古本屋に売れねえだろうがボケッ‼」暑くてイヤですね。

（'88・8）

神はやはり見守っておられた…遂に天罰が下る⁉

自分の本名、住所は書く勇気がないのに、いつもチョコザイな意見を連ねては笑わせてくれる、人権擁護委員会（浦和市）クン。君は思ったよりもかなりのトロイの木馬だね。おっと、その前に君の問題の投書を。〃『Ｌｅｔ'ｓ　たつみ』（ＩＴＯＹＯＫＯ・辰巳出版・７００円）が、同人誌再録本だったとはなかなか興味深い。日頃、再録本で銭もうけしている『ＣＯＭＩＣ　ＢＯＸ』を攻撃する一方で、堂々と『Ｌｅｔ'ｓ　たつみ』（ＩＴＯＹＯＫＯ・辰巳出版・７００円）を売り出すところは、まさにダーティー塩山云々……〃（注・カッコ内は塩山記）。アホかお前は。いつ僕が再録それ自体を非難した⁉（そんなことすりゃ天にツバすることに。三世社のＡ５判だってほとんど本誌の再録じゃん）。そうではなく、そういう同人誌再録本で大儲けしながら、漫画家へ原稿料を支払わずに図書券でごまかし、一方で〃良心的〃振りやがって、反原発だ、反戦だと御託並べてる、腐れ『ＣＯＭＩＣ　ＢＯＸ』の体質を批判してるのだ。ゴキブリにもダニにも、反原発だろうが推進だろうが政治を語る権利はあるし、語られることでその大義は、正統なものであれば傷つけられぬであろう。けれど、これだけはハッキリと頭に叩き込んでおこう。いかに厚化粧して、ワキガにバンを噴きつけようが、ゴキブリはゴキブリであり、ダニはダニだということだ。人権クンよ、くらむぼんの『マニアック』（東京三世社・７００円）と、本誌の昨年の9月号を、顔を洗って読み直してよね。

てな〃人間『ビッグトゥモロウ』的体質〃を日々深めてく僕ですが、遂にボケも相当進行した。いくら酔っぱらおうが、他人のサイフを拾ってくることはあっても（本当に一緒に飲んでた奴のサイフが、翌朝気づいたら自分のポケットに入ってたことがある。泣く泣く返したが）、絶対に10円の金も落とした経験のない僕が、何と２万円もの大金を、飲み屋に忘れて来ちゃったのだ。しかもこれは、ただの銭っコじゃない。単行本を出した漫画家さんに、1万円ずつ寄付させ宴会開いてたのは皆さん御存知でしょ。その金の残りなんです。あ〜ッ、弁償しなくちゃ。いくら天罰でもむごすぎる。落とすなら、『ＣＯＭＩＣ　ＢＯＸ』のダニどもの頭上に…‼

それは6月21日のこと。『Ｌｅｔ'ｓ　たつみ』（辰巳出版・７０

0円)、『絶対麗奴(れいどK)』(東京三世社・800円)の出版祝いということで、ITOセンセとまいなぁセンセに計2万の御寄付をいただき、かの新宿アルタ裏の「三平酒寮」で、豪華な中、どこかセコイ宴会が開かれたのです。両センセの他、DONKEY、戸山優、月星明、その他デブな2~3のオタク共で、計10人くらいでした。遅筆ライターの雄、戸山センセ教育勅語の暗唱に、宴会は愛国的な高揚を示し、ケンカにもヘドにも無縁で無事終了。ところが翌日、2日酔い気味の僕がカバンを開けると(変だな。僕って確か下戸のはずなのに。いいか。途中でキャラが無節操に変化すんのも、サイケじゃんか)、〝L資金〟(『ロリタッチ』資金の略)と赤マジックで書いた、週刊誌大の茶封筒がなくなっていたのだ。「ヒ――ッ!!」

事務所に早出して、あちこちに電話。「本当ですか?」とまいなぁセンセ。「確か、塩山さんバッグに入れたと思ったけど…」と月星明。次第に蒼ざめる僕の顔。たった2万と言うことなかれ。金も金だが中年になると、「こうもボケたか…」という思いが、余計に焦らせるのだ。方々に電話するが、誰一人として、「僕がそのくらいの金カンパしますヨ」程度のことも言ってくれない。冷たいというか、銭に汚ない連中だ。中でも〝ヒゲヅラの悪魔〟こと、DONKEYの次のような言葉は、一生忘れないであろう。「漫画家の生き血を吸ってきた天罰ですよ、ヒッヒッヒ…」

最後の期待をかけて、午後4時頃に、問題の「三平酒寮」に電話。この頃になると、もうほとんどあきらめている、息も絶え絶えな可哀想な僕。ところが電話に出たおばちゃんは、あっさり答えたのだ。「ええ、ありましたよ。店長が保管してるそうです」ありがとう人類、ありがとう地球、ありがとうこの世の全ての生き物達!! 僕はこの時ほど、人を信じることの大切さを痛感したことはない。新宿で飲むなら、アルタ裏の「三平酒寮」の、しかも3階が道徳的に正しいと、幾度も主張するゆえんであります。

てな調子で、〝『ビッグトゥモロウ』ごっこ〟してんのだが、今月はちっとも行数が埋まんない。銭にならぬ原稿書きは、サイフをなくした朝のようにつらいなあと思ってると、中森ばぎ菜がゲンコを持って来た。たまにゃというわけで、近くの安飲み屋へ。するとジュースでポテトサラダをつまみながら、いきなりこうだ。「普通の女の子でもフェラチオん時、玉の袋まで舐めんですかあ?」このアマ、ジュースで悪酔いしてんじゃねえと説教しようと思ったが、幸いもう終わり。とにかく諸君、人を信じようね。 ('88・9)

しまらない最終回でラリルレロ… 当然読者が神様です。

白夜書房の直営書店でありながら、実に客観的で公平なコミック売り上げランキングを毎月発表、全国の書店のコミック担当者を喜ばせている、新宿の「まんがの森」の前のガードレールに腰かけ、こっぱずかしい漫画論戦わせてる発情ツーレロガキと、毎日短パンで通勤中、電車内で異常にセクシーな腋の下をしたノースリーブ姿のOLに発情、股間を半立ちにさせてるだけならまだしも、ややその近辺にシミを浮かべてしまっている早漏気味な俺は、一体どっちが恥ずかしい存在なのかと考えてると、早い話が、どこまでが主語でどこまでが述語なのか分からなくなり、いいや、〟。〝を打った所が述語の終わりさとウソ吹きつつも、やっぱり夏は暑い方が、パンツがブリーフよりガラパンがいいようにいい、なんて考えてる君達がいて僕がいた。1988年の夏休みももう終わりですね。

で、上野駅構内には、何でパンダの置き物が2個もあんだバカヤロー! あれは7月17日の日曜日のこと。ホントは娘と豊島園にでも遊びに行こうと思ってたのだが、〝高松の生んだ工員エロ漫画の星〟くらむぼんセンセが、静岡への旅の途中で東京にも立ち寄るという

ので、「たまにゃ一杯やっか?」と、上野駅構内のパンダの前で待ち合わせたのだ。野郎、しかも肉体労働者とのデートは、ホワイトカラーの雄の下請けエロ漫画編集者としては、何とも気の進まぬものであったが、センセの連載は人気ベスト3からめったに脱落せぬし、単行本もよく売れるので、大切な私生活を削っての待ち合わせと相成ったのだ。

ところがくらむのヤロー、いやくらむ大センセ、ワシが上野駅新幹線ホーム近くの、ガラス箱入りパンダの前で30分も待ってるに、ちっとも機械油にまみれた姿を現わさない！ ひょっとして、工場のガス爆発事故か何かで死んだのかな。いや、南の方は台風が多いというし、水害でくたばったかな。もしそうなら仕方がないが、今月のゲンコ、つまり「常連投稿者悲話」だけは、アップした後だろうな、と考えているうちに40分経過。ちっくしょうあの田舎者め、まさか上野公園のパンダの檻の前で、ボケーッと待ってんじゃねーだろな? が、ふと脇の構内地図を見ると、全く逆方向の構内に、〝ジャイアントパンダ〟とクッキリ。そういやあんにゃろ、確かジャイアントパンダがどうのこうの言ってたと思い出し、焦って現場に駆け着けたのだ(田舎者はワシの方でした)。

「やーワリワリ。JRの糞ガキ共の陰謀に引っ掛かかってよォ。ガハハハハハ…」例によっての責任転嫁性ホラ話。少しは威張ればいいものを、そこは社会人の常識を心得たくらむセンセ。「そいつはいけませんね。同じ駅に2頭もパンダを置いとくなんて。地方の人は迷っちゃいますヨ」と、田舎から青雲の志で上京後16年。現在2DK在住、妻と女のコ2人ありで、埼玉県住まいのオイラを田舎者扱い。手みやげに持って来た十勝の甘納豆の包みを、黙って持ち帰ろうと思ったが、いつか高級讃岐うどんセットをもらっちゃってるので、「これつまらないもんだけど」と、イヤイヤ差し出す。

すると工員、いや敵もさる者。「はあはあ、こっちこそつまらないもので」と、静岡みやげの菓子折りを取り出す。「甘い物は嫌いだ。持ち帰ってブス女房を喜ばせんのも胸糞悪い」とも言えず、「ワリワリ」といただいちゃう。クッソー、せっかく貸し借りなしの五分の関係に持ち込んだのに、あっという間の負債生活。こういう義理があると、漫画家が落ち目になった時、連載の打ち切り通告しづらくなる。絶頂期の時点においてその漫画家のツラに、ドン底状態の姿を重ねて見られてこそ、真の下請けエロ漫画編集者。漫画の明日やあさってはどうなろうが知ったことじゃないが、大切なのは俺の今日の生活だと、相も変わらぬ妄想癖に捕われつつ、駅前の「丸井」近くの安飲み屋に。2人で130通余り来た8月号の読者ハガキをツマに、昼間からビールをかっくらったのだ。

むろん野郎同士の宴会が盛り上がろうはずもなく、「いくらブスでも、ばぎ菜でも呼んどきゃ良かったな」「はあはあ。でも、ばぎ菜さんスタイルもファッションセンスもいいし、結構美人ですよ」「俺はよ、お前のそういう、本人もいねえのにオセジ言う性格が嫌いなんだよ。今日あたりばぎ菜呼んでみろ。〝塩山さんはあたしに気があんので、くらむさんをネタに呼びつけた〟なんて、『アットーテキ』(毎月7日発売・一水社・480円)あたりにデマ書くに決まってんだ」「はあはあ、そんなもんですか」てな駄話の交換のうちにお開きに。

お開きといえば、本コラムも今月で終わりにして、次号より新企画をスタートさせる予定。例のアホの秋山道夫あたりに、何かデッチ上げさせようと思っとります。じゃあまた!

('88・10)

●Ⓒくらむぼん『マニアック』(けがされたセーラー服)より。

●ある日の“L資金宴会”(三平酒寮)にて、まいなぁぽぉいセンセ(左)と。

昔、小林旭の映画にあったけど…俺に触ると危ないぜ。

白夜書房の直営書店でありながら、実に客観的で公平なコミック売り上げランキングを毎月発表、全国の書店のコミック担当者を感動させている、新宿「まんがの森」の支店のある高田馬場の駅構内の、「ポニー」という立ち喰いの店のソース焼きそばは、用いる油も上質でなく、食後に下品なゲップが出ますが、そのドギツイ味つけが僕大好き。あそこの焼きそばをパンにはさんで食べたら、真夏の二日酔いの日の朝5時頃トイレに起き、冷蔵庫の冷えたスイカをガブリとやるのと、どっちがおいしいだろうと考えてると、くらむぼんのヤロとか、まいなぁぼぉいとか、中森ばぎ菜とか、くちゅりのかおるとかの、本欄の常連出演者の誰かが、事務所のドアを開けたのだろうと思った、あちこちのモーコハンルックの少年少女達よ、君達の頭はなぜそのようにワンパなの？　亜流誌の編集にコケにされ、頭に来ないの？　ンなことで神国ニッポンはどうなるの？　と怒ってみても、夏から秋にかけてのエロ劇画各誌の売り上げは、水原一城（日立市）の字や、八部貞一郎（杉並区）の脳ミソ以上に壊滅的なわけで、これからバタバタ『漫画エキサイト号』（毎月5日発売・300円）や、『漫画スマック』（毎月8日発売・300円）が廃刊になったら、一家4人どう暮らして行けばよいのだろう。娘にも、今ある12色の色鉛筆が終わったら、新しいのを買ってやれなくなる。でも、世界に飢えたコはたくさんいるのだし、12色の色鉛筆とか俺のガラパン、しかもチンポ出し用の窓までついた高級品を用いているのは、身分不相応。ともかく早くエロ劇画誌の売り上げが好転してくれねえかと考えてると、「トントン」。来客かと振り返ると、単にカーマスートラ吉田が、椅子の脚を鳴らしただけ。また「トントン」。うるせえぞと怒鳴ってやろうと振り返ると、猫背でガラガラにやせ、ただ生きてるだけといった風情の、流通経済大学（注＊近頃急激に売り出してる名門私大）卒のあだちけんセンセが、『漫画エキサイト号』のゲンコを持って来たのであった。「『ドキドキDカップ』（辰巳出版・700円）、4000部ばっか増刷したって連絡あったぞ」「ほ…本当ですか。うれしいな。わ～」「わ～じゃねえだろ。何か忘れてねえか？」「えっと『ロリタッチ』の絵コンテは来週だし、塩山さんに、時坂夢戯さんと違って借金（注＊3万円）してるわけでもないし。え～と…」「とぼけんじゃねえよ、この守銭奴！〝『ドキドキDカップ』出版記念宴会〟だよ!!」「あ…あの、僕お酒全然飲めないし、胃かいようがまた悪くなって…」「これ見んかい」「現金書留の封筒ですね。中に手紙が…」「読んでみい」「え～と、〝前略。例の宴会の寄付金として、一万円送らせていただきます。皆様でお使い下さい。僕も、函館の地で宴会を想像、心の中でカラオケを唄います。ただその宴会に、あだちけんの奴だけは呼ばないで下さい。現役国立大生エロ漫画家、江本明宏〟…」「これよ。これが真のニッポン男児よ。目頭が熱くなる名文じゃんか。だから奴の『聖戯の放課後』（東京三世社・700円）も、あのショーもねー内容でも3刷りになったのよ。寄付する高潔な心が、意せずして銭を呼んだんだな」「でも僕のだって、4000部増刷になったでしょ。まだ寄付は…」「おいおい、こいつはヤバイことになるぞ。早く寄付しないと…」「な…なぜですか、急に深刻な顔になって」「つまりだ、寄付もせずに増刷になったってことは、古来より定められた法則、つまりよ、〝寄付→宴会→増刷〟というベクトルの公然たる破壊者に、早い話が騒乱罪にお前が問われるわけ。悪人というか犯罪者だよ、お前今後。バカだけなら、沖田翔二、川崎ぶら、永山薫、アホの浅松一、一水社の多田在良と、この世に数限りなくおるし（雑誌界では言わずと知れた、左翼っぽいポーズの裏

でド汚ない銭漁りに狂奔している、『COMIC　BOX』が有名。詳しくは、くらむぼんのヤロの、『マニアック』〔東京三世社・700円〕か、本誌の昨年9月号参照)、そんな連中は、犬の糞やゲロにたかる銀バエやウジ虫同様珍しくないけど、お前は今後江戸時代の大塩平八郎のような存在に…」と、自分の言葉に恍惚のブルースになってると、既にあだちけんセンセは逃亡した後。その代わりといってはなんだが、見かけない顔の、やや知的ではあるが線の細そうな青少年が、キョロキョロしながら立っている。「何か用かい兄ちゃん?」「あの、も…もりやねこといいますが、マイレポートのゲンコーを…」「それはどうも御苦労様。遠路はるばる憧れのハワイ航路を…」「はあ?」「かも何ボケッとしとる。お茶入れんかい!!」その後サ店で、もりやセンセの年収を聞いて異様に腹が立ちました。くらむのヤロ同様、ロクな死に方しないことを祈りつつ、皆さんさようなら。

('88・12)

どんなに強く抱かれても…偽りの愛はさみしい。

白夜書房の直営書店でありながら、実に客観的で公平なコミック売り上げランキングを毎月発表、全国の書店のコミック担当者を感動させている、新宿「まんがの森」の…おっと違った。毎月似たようなことばっか書いてんので、手が自動的に動いてしまった。不思議だなあ。「まんがの森」のある新宿のもう一つの名物といえば、本誌恒例の〝たかり宴会〟がいつも開かれる「三平酒寮」ですが、そのサンパーク1階の電気製品売場の一角の、CD大バーゲンはホンマ安くてめっけもん。輸入CDなら「キムラヤ」も扱っとりますが、ここは国内盤をジャカスカ叩き売りしてて渋い。バナナの叩き売りみたいな口上が、実に好感が持てる。先週行った時もこうだ。

「ハイハイハイ！　今日は花の金曜日！　いつも御愛顧いただいてるお客様のために、今夜8時から10分間だけ、特別大サービス!!　1000円以上のCDは、全て今ついてる特価の200円引きにて販売させてもらいます。あと3分あと2分、もうすぐ8時です!!」文化的商品も、所詮は大根と同じ。見上げた販売スタイル。早速筆者がガキの人波をかき分けて買ったのが、『レトロCD〔196X〕』シリーズの第10巻。定価は3000円だけど1380円。このシリーズ、まだ半分しか揃えてないけど、1~5巻も早く入荷して下さい。「サンペイカメラ」さん！　帰宅して、ガキ共を寝つかせた後ヘッドフォンで聴いたら、10巻には偉大な2曲が入っていて涙にむせんだ。〝♪あなたのいない渚は~とっても~淋しくて~♪〟橋本淳作詞、筒美京平作曲のこの曲こそ、かの天才歌手、弘田三枝子の代表曲、「渚のうわさ」でありんす。後に「人形の家」とかいう、大友克洋、かわぐちかいじ、能條純一レベルのナルシズム漬けバカ歌唄い出して女を下げたけど、この頃は良かった。中尾ミエなんて目じゃないよ。次いで、〝♪可愛い~あなただから~知りたくない話さ~♪〟で始まる曲は、阿久悠作詞、田辺信一作曲の、ズーニーブーの「可愛いあなただから」。あ~あ、この頃は俺も夢があったよ。まさかこんなドエロ漫画の苦界に、10余年も身を沈めたまま、醜い出腹中年になっちまうとはな。トホホ。それだけじゃねえ。上に〝エロ〟の2文字がつかなくとも、『COMIC　BOX』の如き、ゴロツキペテン腐れゲロサギ猫の糞ゴキブリとハイエナの小便毛ジラミの目ヤニダニの鼻糞雑誌の頭目、才谷なんつうガキがえっらそうに、原発推進キャンペーンに一役買ってる、松本零士にテメーらの悪業棚に上げ、説教ぶってんだから聞いてあきれて屁がねばる。最初の質問がまず笑わせる。〝あの広告の原稿料はいくらですか？〟だと。バカヤロー、同人誌漫画家に図書券でしか原稿料払ってねえ、盗っ人もどきの吐く台詞じゃねえぞ（図書券、ショーユ券

等は、ディスカウントショップで、「サンペイカメラ」のCD同様に叩き売られています）。おまけに著作権侵害本を、『アットーテキ』（毎月7日発売・光彩書房・500円）の返品の山以上にバカスカ出しといて、平気で表紙に勝川某の絵を真似されたなんて、図々しくキャンペーン張る奴のシンケーは、中森ばぎ菜や阿宮美亜のヌードを見てマスをかく以上に、想像を絶することだわな。答えて松本いわく。〝私は、いまだかつて、自分の原稿料を公表したことはありません〟。さすが原発のチョーチン持ちする、ノータリン漫画家だけはある。以降、両厚顔無恥人間の低次元漫画談義は延々と続くが、最初の応酬以上の展開はなし。けど、良心ぶりっこのゴロツキ編集者と、あり余ってる銭にまだ目のくらんどるゲスメジャー漫画家のこのヨタ漫談、ある意味では貴重。中川信夫監督の新東宝時代の傑作、『地獄』の一コマを観るつもりで眺めると、なかなか興味深いものが…あれっ？　変だな。確か俺、弘田三枝子や、ズーニーブーの話してたのに。どうもだめだ。最近、人間嫌いと分裂症が、だんだんひどくなって来た。こういう時は、またミコちゃんの「渚のうわさ」でも聴いて、気分を晴らそう…と思った時だ。隣室で寝ていた下の娘が、猫を八つ裂きにしたような馬鹿声で泣き始めた。「あ〜、ヨイヨイ」不細工女房のあやす声。ヨイヨイなのはテメーだろ。ミコちゃんの美声も台無し。上の娘まで釣られて泣きだす。まさに、中川信夫監督の新東宝時代の傑作、『地獄』。「あんたも一人あやしてよ、ったくもう〜!!」………。〝あなたのいない渚は〜とっても〜淋しくて〜♪〟も〝可愛い〜あなただから〜知りたくない話さ〜♬〟も、みんな夢、いやガキの泣き声の中。少年老い易く、学成り難しとはよく言ったものと思いつつ、ガキに小便させてると、どこかで犬がワンワワ〜ン。ユンユア〜ンと、ブランコが揺れてる公園でだろうか。

（'89・1）

知っての通り私の趣味は…子供と貯金とパチンコ。

チンポにようやく2〜3本毛が生え始め、御飯もこぼさずに食べられるようになった中学生ぐらいのガキが、2〜3人学生服姿で群れ、これ見よがしにタバコを吹かしてる姿は、幼稚園児が〝ぞうさん〜ぞうさん♪お鼻が長いのね〜♬〟とお遊戯する光景同様、微笑ましく心休まるものがあるが、まったく休まらないのが年末進行下の下請けエロ漫画編集者。エリート社員編集者様のような、社会的地位や名声のない彼らは、桑をはむ蚕同様にただ黙々と仕事をしては、糞まみれのガキやシワだらけの不細工女房が、綿のはみ出たフトンを引っ張り合ってる長屋に帰り、一昨日のゲロのようにひからびて眠るしかない。そんな彼らにも、全く喜びがないわけではない。漫画家が、立派な原稿を描いてくれることである。今月の勝生真菜美、真弓大介はその筆頭。むろん両名の作品は下手だし、あちこちゆがんでて、叩けばホコリも盗作の気も舞い出すかもしれないが、とりあえず大したもの。下手なり無名者なりの、懸命さが感じられる。努力、一生懸命、謙虚。この3本を人生哲学にしている筆者としては、下手は許せても手抜きをする漫画家は、左翼ポーズの陰でド汚ない銭漁りに狂奔するゴロツキペテン師集団、『COMIC BOX』一派同様、絶対に許せんのだ（DONKEYが手抜き漫画家の代表だとは、僕は一言も言ってない。僕が言いたいのは、いくら『朝日ジャーナル』に広告を出そうが、ゴロツキ雑誌はゴロツキ雑誌だということ。それと、うち宛に見本誌送って来る郵送代と暇があんなら、内容証明書の束でも送ってこんかい。裁判はお好きのようですし。オホホホ…。見本誌も1回だけでなく、毎月お願い。「まんだらけ」に持ってくと結構お金になんので、貧乏下請けとし

ては大いに助かる)。あれ？　何のこと書いてたんだっけ？　ところが、人間は自分勝手な生き物なんだよ。そんだけ許せない自誌漫画家の手抜きだけど、同じ漫画家が他誌で手抜き原稿を発表すると、異様な快感が全身に満ちるのよね、僕のバヤイ。僕が2人の娘の次に愛してるお金が、ビタ一文入るわけじゃないんだけど、オナニーとSEXを同時にいたしたような充実感があるのは、議員証言法に誓ってホント(童貞諸君は、オナニーと夢精を同時に味わったとでも思って下さい)。まあ、こんなことはどこの編集者も考えてんだろうからどうでもいいけど(?)、どうでもよかねえのが、今月の時坂夢戯みてえにピントの外れた努力をして来る奴。早速電話して、「バカヤロー！　エロシーンたったの4ページで、一水社の多田在良みたいな早漏ならともかく、どこの誰が抜けると思ってんだよ!?絵コンテん時、あんだけエロシーン増やせっつったろうが、ボケッ!!うちの読者はエロ漫画読みたくて、500円払って買ってくれてんだよ。男のファッションショーみてえなシーンが5ページも6ページも続いたら、発狂すんぞ。これじゃ読者への裏切り、礼儀を欠くことになんだよ。礼儀を欠く奴は、恥を忘れた奴の次に許せねえ。みんなエロシーンを半分義務づけられた中で、どんだけ面白さを出そうかって努力してんだ。それをお前だけが、浮世離れしたの描かれちゃ困るし、そもそも人間が平等であるように、エロ漫画家も平等なわけで、リンカーンが言ったように人は人の上に人を乗せてつくる…あっ、これは福沢諭吉か。でも、バックでだって人間はつくれる。つくれるといえば…」と、時坂センセを説教してるうちに、例によって頭ン中がこんがらがって、気がつくと本屋にいた。本屋といえば、『古川ロッパ昭和日記』の戦後篇はいつになったら出るのだ。4月発売予定だったのに。生存者のプライバシーの関係でもめてんだろうか？　戦中篇にだって、今『キネマ旬報』の社長してる総会屋とか、生存者のビックリ話がいっぱい出て来たし。それより今日、僕、俺、いやワシが古本屋に立ち寄ったのは、谷岡ヤスジが昔、清水の次郎長を扱かったシリーズ描いてたが、あれがねえかなと思ってね。やっぱりない。面白かったのに。面白かったといえば、やっぱり子母澤寛の『駿河遊侠伝』(全3巻・徳間文庫)にとどめを刺すが、俺って全然漫画読まないな、ますます最近。漫画への愛はなくてもというか、ない方が商売にするには都合がいいのは確か。不思議なのが、それなりに愛を抱いてる編集者ほど、つまんね本つくんだよ。多田在良なんかその筆頭だろうが、『ザウルサーガ』(一水社・860円)の増刷おめでとうございます。最近、僕との酒席をお避けあそばしてるようだけど、冷たくしないでン。僕ってとっても寂しがり屋なの。オホホホホホ!!

('89・2)

吉野家の湯飲みで我発見せり…ケチは美徳の最高峰。

『座頭市』は面白かった。勝新太郎の映画センスは、しばらく前の日本TVのドラマで証明済みだったけど、スクリーンだと余計にそれがハッキリ出る。一番印象的だったのは、市っつぁんと樋口可南子の、露天風呂でのラブシーン。樋口の背の刺青を照らす月明りが幾通りにも変化、その色っぽさっつったらなかった。むろんこのシーンの功労者はカメラマンだろうけど、総指揮は勝監督。当然、本物の月明りではなく、照明のテクニックで生まれた名シーンだろうけど、〝ウソ〟の魔術こそが映画なりと身にしみて知ってるはずの勝新が、なぜンな大根な息子に真剣なんか使わせたんだろう。例えば雨のシーンが、人工雨でなければ雨らしく映らぬなんて、映画の初歩を知ってる人なら百も承知してる。〝本物主義〟なんて、映画的効果という観点から見れば、16歳で失った自らの童貞を惜しんでるニキビヅラ野郎の感傷同様、無意味で、無価値で、不潔かつ不愉快

な笑い話にすぎない。なぜ勝新ともあろう者が？　これは僕の想像にすぎぬが、デクな息子への精神論じゃなかったのか。奥野ナントカという馬鹿息子が、どうにもならぬ役者でしかないことは、いくら勝新でも分かるはず。同時に彼にだけ甘くしたら、そうでなくても追い込まれてる勝の最後の賭け『座頭市』は、とても客を呼べるような映画にはならない。デクな息子の精神にカツを入れる意味で、勝自身が真剣を渡したんじゃねえのかと、大入りの封切り日に「上野松竹」で本作を見物した僕は思った。僕も子を持つ親の気持ちは、世間並にゃ分かっとるつもり。泣き切れないのは他人の精神論というか、いびつな親子の情のおかげで死んじゃった人。遺族が何億円もらおうが、死者はカムバック出来んもん。いきなり重い話になったのは、昨日の（2月7日）ニュースのせい。むごかあ…。誘拐した子供の骨を親の家へ…こんな心の暗くなるニュース、初めてじゃないですか？　まずい。いや、まずいというか、今月は本欄向けの話題がないので、ついこういう方向に。やばい、エロ本にこういう話は。…と、何度も自分に言い聞かせているのに、死を中心とした話題に脚をズルズルと…そうだ、もっと明るい話をしなくちゃ。そうそう！　先月の末、わざわざ蒲田の「ロッポニカ蒲田」まで行って観た、60年代末の大蔵ポルノ映画3本立ては、濡れ場のシーンだけパッとカラーになる、懐かしのパートカラーだった。題名は『怪談バラバラ幽霊』、『沖縄・支那怪談』、『生首情痴事件』…うっ、また死の影が…。これも時代のせいなのか。で、全観客数が10人にも満たぬのが当たり前だったロッポニカ時代に比べると、20年も前のエロ映画なのに客が入っとりました。暇なオイラが数えたら約30人。劇場側からすれば、心境は複雑でしょう。俺は複雑というより空腹だったから、観終えると近くの吉野家で牛丼の並を食べました。むせながら食べた味はいつも通りだったけど、西武系になったとたん、湯飲み茶碗が小さくなったのは許せない。牛丼てのは誰でもむせるもんなんだ。お茶もしょっちゅう飲まなあかん。だから、湯飲みがでかくなるのはともかく、小さくなるたあどういうわけだ？　結局、拝金主義のなせるワザ。糞まじいミソ汁の売り上げ伸ばそうって魂胆だろうが、どこまで貧乏人いじめりゃ気がすむんだ、バカヤローッ!!　その蒲田の吉野家で茶碗見つめてたら、怒りが十倍にも百倍にも膨らんで来て、店員を殴り倒したくなった。彼に何ら責任がないのにである。その店員の態度は特に悪いわけでもなかったし、一水社のタコ多田のバカヅラのように、つい泣かしたくなるようなフグヅラでもない。なのにその直後、彼の顔面はただの紅ショーガを投げつけられたように朱に染まった…と思ったら、「ごちそうさま」と僕は金を払い、路上の人となっていた。危うい所で難を逃れたグッドラックな店員が、「ありがとうございました！」。「これでいい。これでいいんだ。彼にどんな罪があるんだ、彼に。近くの専門学校の生徒かもしれん。新聞奨学生っつう可能性もある。その彼に全吉野家を代表して、湯飲み茶碗の責任を問うなんて…」との思いも確かに心の一部にあった。しかし草の根民主主義の観点からすれば、彼にこそ湯飲み茶碗の責任を、一牛丼客としては心を鬼にして、全国底辺国民のために問うべきだったのかもしれない。

（'89・4）

他人のヒボーチューショーに耐えて…一生懸命に生きる僕!!

人間味溢れる作家だと、いつも思うのが小林信彦。新刊『小説世界のロビンソン』も面白く読んだが、ホントこの人って俗物。そこがいいんだけどさ。だいたいNHKの『素人のど自慢大会』レベルのお国自慢、いい年こいた流行作家がマジにやるんじゃあねえっつうの。

彼の生家の下町の菓子屋がどうのこうのっつう話だけど、誰も生まれる場所なんざ選べるわけねんだし、水戸黄門のインロウみてえに安易に持ち出すんじゃねえよ。友達に、「福岡は夢野久作、花田清輝、五木寛之（?）と、特異な思想家がたくさん出た。これは朝鮮が近い、福岡という特殊な地域性が…」とマジに主張してた、『アットーテキ』6月号で本体価格を間違え発売を10日も遅らせた、タコ多田並の低能ヤローがいたが、小林センセも同レベルなのかと、情けなくなりました。ハッタリかませなくても、エッセイは少なくともライバルの井上ひさしに比べりゃ、よっぽど面白いんだから（小説は所詮、井上の敵ではないわな）。一流のエッセイスト兼通俗作家じゃ、満足出来ねえのかしら。東西の物語作家の復権を主張すればするほど、弁明めかしくなっちゃうのね、この人のバヤイ。人間性だろね。またその辺の人間的未熟さが、小林のセールスポイントだから、世の中は面白い…という風な話は、いかにもやや売れ行きが安定してきたエロ本編集者が、文化人ぶってるみたいでゲロゲロだから、もう止めよう。それじゃ、サギペテン師集団の手になる、『COMIC BOX』あたりが、『朝日新聞』や『朝日ジャーナル』に広告出して、テメーらの糞だらけの尻の穴の臭気を消そうともくろむに等しい。

　そこへ、まいなぁセンセが原稿持って来た。エロシーンが少ないので叱る。本人は、「今回は『ARMOR—ZONE』のストーリー展開上仕方なく…」と弁解していたが、エロマンガ誌はストーリー展開より、エロシーンの量が重要なことは言うまでもない。もっと許せないのが、糞DONの奴。ネームもまだ入れてない（注＊〝クソDON〟とは、糞ったれDONKEYの略語。僕に対する©三条友美の、〝塩豚〟みたいなもの）。とんでもないムレ肉ヤロー。先月、原稿落ち寸前の勝生真菜美センセをカンヅメにする際に、糞DONのアパートを借りたのでちょっとチヤホヤしたら、このざま。一日最低3回は脱糞するという痔でただれた肛門、ホチキスでとめたろか!?　電話をしたら、こしゃくにも留守番電話に切り替えてある。「のう糞DON。おのれは、いつからそげん命知らずになったんじゃい？　わしゃあ、お前みたいな童顔ヤローのツラだけには、赤い化粧したくなかったんじゃけどのう」と、自己陶酔気味に語り始めると、途中で録音時間が切れたので、余計にむかつく。

　近頃ロクなことがねえ。明るい話題といや先週、日に2回という、パチンコの打ち止め記録をつくったことくらい。今でも信じられんと思ってたら、翌日も翌々日もバカスカ出ちゃって、5月は10日目にて一カ月のパチンコ投資額を全部回収する怪記録。後半よっぽど悪いことがあんに違えねえと思ってると、カーマスートラ吉田がギックリ腰矯正に通ってる病院から帰って来た。その病院、パンティ一枚にして治療すんだと。若い姉ちゃん達なんぞ、すんごく恥ずかしがっとるとか。「そこの医者、単なる色気違いじゃねえの？」と尋ねようとしたが、カーマスートラもパンティ一枚にしたとこみると、必然性があってとしか思えないので、止める（忍耐力のある医者！）。

あ〜あ。
もう疲れた。
やんなった。
フン！
毎月
毎月、
オモ
シ
ロイ
ハ
ナ

シ
な
ん
て
あ
る
わきゃねーよと、実に効果的な行数埋めを考えついたけど、あんまし露骨にやると、いかにも怠慢な下請けと、これから仕事をやろうと思ってるかもしれぬ、どこぞかのスポンサーに嫌われる恐れもあるし、それより何より俺の、〞魂を捨てた職人派下請けエロ漫画編集者〞としての良心が、ズッキンズッキンズッキンと痛むので、家に帰って日活青春映画のビデオでも観て眠っちゃおう。（'89・7）

色々女流漫画家はいるけど…愛するなら中森ばぎな。

ああ気持ちワリー。飲みすぎたな夕べは。飲んだ相手が悪かった。「ボーッ」としてるっきゃ能のねえま～、それにタコ多田とくりゃあ、このくれえですんでまだマシだったたと思ってたら、また、ウゲ～ッ。あ…あ…、吐きそ。何かねえかと探したら、資料に買った『ペンギンクラブ』が何冊か本棚の上にある。が、届かない。その間にも、ウゲウゲウゲ…な…何かと思ったら、くらむぼんの『トラブルデート』（東京三世社・750円）が数冊あったので、踏み台にして『ペンギンクラブ』を取り、ビリッとひっちゃぶいてゲロろうとしたら、急に吐き気が収まったので、再びゴックンとクッサ～イ息と一緒に、ノドチンコの辺りまで逆流してた汚物を飲み込んでしまった。さすがは転んでもタダでは起きない、根セコ兼根ケチな塩山家の長男だよと我ながらあきれてると、急に小便がしたくなる。ゲロと小便は、何か関連があるのだろうかと一人悩む。おっと、こんなことはどうでもいいのだ。

問題は知る人ぞ知る、タコ多田の『アットーテキ』に激讃連載中の、「嫌われ者の記」のカットの担当を探さねばならぬこと。今までは現レイアウターの中森ばぎなが、イヤイヤ手抜きカット描いてたんだけど、噂では引退後も、僕が何かと彼女を話のネタにするものだから（しかもブスの代表として、犬猿の仲の阿宮美亜とセットで）遂に激怒、タコ多田に「辞めさせてもらうヨ!!」と、三行半を叩きつけたのだとか。コワーッ!!

バカヤローめ、引退後も種々のエロ本にサイケな名前が犬の糞みてえに登場するなんて、ブス女流漫画家冥利に尽きんじゃねえのか。ケッ！　分かってんぞ。ホントの理由はンなことじゃなく、セールス面で阿宮美亜に完膚なきまでに水をあけられちゃったのが、大ショックだったくせにと、言いたくなかったことまで、7刷りを重ねた阿宮の『感じるとしごろ』（辰巳出版・520円）を叩きつけ言ってやろうと思ったけど、その場に本人がいなかったので止め、「誰にすっかな。糞DONだけは死んでもイヤだな」と語り合ってると、ボーッとしていたま～がポツリ。「おがともよしさんじゃどうですか。多田さんの所から『セーラー服グルメ』（一水社・720円）が出たばっかだし…」「その手があった！」タコ多田も僕も珍しく意見が一致、次号から彼に依頼することに。

この件は一件落着。けど今後は、本人が嫌がってるらしいので、中森ばぎなという名前を意味もなく使用できなくなるのだ。人の嫌がることなら、父や弟へのフェラチオでも実践するのがこの僕。その僕の男がすたると色々と考えたけど、実を言えば近頃は御本人にも、長いことお会いしてない。かつて水道橋のそば屋へ行って、もりそばを食べてたら（珍しく僕が奢ったのだ）、カゼ気味だった中森センセが、そばをズズッとすする度に、鼻水をズルッと逆方向に

垂れ流してて粋だったなんて話は、余りに古いネタだしな。
また吐き気が。ウゲウゲ…そんなに夕べいっぱい飲んだかな？　思い出した。酒ばっかのせいじゃねんだ。飲み腐って家に帰り、色黒女房のイビキ聞きながら読んでた夕刊、そう、『朝日新聞』に、岩波文化人でもあらせられる懐かしの大塚英志が、変な文章書いてたんだよ。最近、サッパリ面白くない内容の方はどうでもいいの（この人は、無名時代にミニコミに書いてた頃が、ただ一時の旬だったみたい）。問題は写真。何だよ、タワシ吹き出したような出っ歯ヅラに、宇野ピンク総理並の眼鏡センスは。ウゲゲッ!!　思い出しただけでもまた…。友人に、「お前この写真じゃ、まるで男林真理子だぜ」と、一人くれえ言ってくれる奴はいねえの。打ち止めは略歴。いつもそうだから本人の要望があんだろうけど、〝筑波大学卒（民俗学専攻）〟てのは、どうにかなんねえの。ヒヒヒ、確かに大塚に筑波大は、富士に月見草以上によく似合ってますが。
でも不思議。こうして他人の悪口を言ってると、自然にゲロ気、いや吐き気が収まる。しかも、自分と直接利害関係のない、遠い世界へ行ってしまった人の悪口ほど良いみたい。間違ってもスポンサーとか、本誌の重要執筆者、例えば真弓大介は多分カンペキな包茎だろうとかのことは、このゲロ気に効果があるとは思えない、絶対に（真弓センセ、ホントだったらゴメン。ホントは書きたくなかったんだけど、ま〜の奴がどうしてもってもんだから。ホントにホントだったらホントにゴメン）。

（'89・10）

オナニーと子供と貯金を除く人生は…悪口とワイ談に尽きる。

石橋前社会党委員長の、突然の引退表明を例に出すまでもなく、古来より男のシットは、女より数十倍タチが悪いと言われているが（特に今回は、相手が土井委員長と女性である点が、石橋のセコさを際立たせています。ネ暗男の人気女性委員長へのシットは、想像を絶するものがあるのでしょう）、エロ漫画界でも、数々のシットが、バリアのように行き交ってます。御存知の通り、編集者側では不肖私めが〝シット王〟の栄誉を冠せられてますが、それにつきあうエロ漫画家さんは、種々の苦労が絶えぬとか。
先日、事務所のドアを開くなりオイラに土下座して、水呑み百姓のようにペコペコ頭を下げたのが、真弓大介に唯一肉薄する人気を得ながら、〝マヌケフォトジェニック野郎ナンバーワン〟と物笑いの種になっている、ＩＴＯＹＯＫＯセンセ。「どったのよセンセ。今回の〝特訓！　ソフトボール部物語〟は、人気抜群。真弓センセの〝月よりの使者〟は題名負けした凡作だっただけに、センセが人気ナンバーワンだよ！」「い…いやあ、あんな手抜き作品を…」「？　キャラの髪の毛の線数が少ないのは気になったけど、ンな手抜きだった？」「じ…実は、今回コミックハウスの『キャンディータイム』で描いた作品、３人がかりで徹夜で手を入れまして…。そしたら、自分でも予想外の力作が出来ちゃって。タッチと比べると月とスッポン…。これを塩山さんが知ったら、シットの余りどんなイジメにあうか怖くて怖くて…」「で、先手を打ってゲロったってわけだ。このヤロ、グリコ森永、朝日襲撃もテメーだろう？」「は…はい、やっぱりアニメマニア…な…何を言わせんですか。次号のタッチは必ず今度出るキャンディー並の描きますから、怒らないで下さい」「何か馬鹿にされてるような気もすんな…。ところで真弓大介のヤロ、お前のファンで『Ｌｅｔ'ｓ　たつみ』（辰巳出版・７２０円）も持ってるそうだぜ」「うれしいなあ、ああゆう人にファンだなんて言われっと」「あのヤロあだちけんも好きでよ、『ドキドキ白川先生』（東京三世社・７２０円）も、『ドキドキＤカップ』（辰巳出版・７２０円）も持ってるって言ってたな」「……。後半聞かなき

ゃ良かった」「目糞が鼻糞笑うんじゃねえ！」「シクシク」
　そのマヌケフォトジェニック野郎が帰って、10分もしないで登場したのが、最近の若手の台頭に逆襲をかけんとしている、古老のまいなぁぼぉいセンセ。「今、ＩＴＯのタコが帰ったことだよ」「あんな色白でムチムチしたタコがいたら、刺身にすりゃおいしいでしょうね」「ヒヒヒヒ。ふぐでもねえのにしびれたりして」「くふふ。ところでＩＴＯセンセ、この前コミックハウスに行ったらちょうどいて、ホラを吹いてましたよ。手の入った『キャンディータイム』の原稿目の前にして、〝いざとなれば原稿料ですよね、やっぱり。明け方の眠気が、万札の影で吹き飛びますからね。こんだけのもんは遠山企画じゃ、描く気も価値もないです。宮本さん、今後も不肖ＩＴＯを、よろしくお願いします〟なんつって、米つきバッタみたいにペコペコしてましたよ」「…ったくあのフグチョウチンめ。そんなことだと思ってたんだよ。そういやあのヤロ、お前の絵はもう古い、ＤＯＮＫＥＹとかまいなぁ、ＷＩＮＧ☆ＢＩＲＤは、長く持ってあと1年と3カ月くれえだろって、先々週来た時に言ってたな。同業者の悪口言うなんて、何て下劣なヤローと思ったもんだ。ただお前らに言うと、トラブルが起きるんじゃねえかと…」「やっぱりなあ。ちっくしょう！　ＤＯＮＫＥＹセンセとＷＩＮＧセンセはそんなもんだろうけど、よりによって俺まで…」「まいなぁセンセは乱作しすぎるとか、目つきが悪いとか、真弓大介と同じで、包茎なんじゃねえかとも言ってたなあ。同じ漫画家同士で、よくアソコまで言えるよ。人間て、どこまで獣になりゃ気がすむんだろう？」「……。ところで最近コミックハウスが、また大幅に原稿料アップしてくれたんで、タッチでもお願いします」「…………。お前さ、そういった低次元な問題に頭使ってるばやい？　ことは人間の本質に関わる、より高度な…」「でもお金がなけりゃ生活出来ないし。僕も今度引っ越して、色々と物入りで…」「…………」

微笑ましい人々の行き交う中、その日もトップリと暮れて行った。仕事も7時頃に終わったので、水道橋駅前のパチンコ屋「オリンピア」へ。久々に「ビッグシューター」をやる。Ｖに入ってもなかなか8回まで行かぬのに、何となく打ち止め。ここは３０００発がリミットで、2円50銭くらいの換金率だから、７５００円前後にしかならない。つまんねえの。だから本でも読もうと、近くの書店に入って『キネマ旬報』を買うと、雑誌コードがスミでつぶして訂正してあった。（'89・11）

栄枯盛衰はこの世の定め…どうせ一度は死ぬんだ。

昔はかなり人気のあった、エロ劇画家のやまだのら夫婦、それにま〜との4人で、昨夜、中野の「赤ひょうたん」で宴会をした。彼と飲むのも3年ぶり。「最近はロリコン漫画家としか飲まないんでしょう？」と、ほぼ真実の皮肉を言われたので、「たりめえよ。嫁さんももらえねえ30前後のビンボエロ劇画家と、陰気な酒飲んでも気がめいるし」と切り返す。
　エロ劇画誌＆エロ劇画家は、滅亡寸前のシーラカンス並の扱いを世間から受けてますが、まだ40誌くらい月刊誌が生き残っており、ザッと数えて70〜80人がエロ劇画家として生計を立てている。ほとんどが30代後半から40代だけど、その一人であるやまだのらも含めて、この世代はまだいい。10年チョイ前のエロ劇画誌全盛時代に、いい思いをしてるから（家持ちも結構いる）。
　悲惨なのはそれ以降にデビューした、今30歳前後の連中。ようやく食べられる原稿料になったら、エロ劇画誌はバタバタ廃刊するし、若い連中はエロ劇画に目もくれず、ロリコン漫画家になっちゃうし、しかもその連中の方が余程収入もいいし（単行本の売れ行きがケタ

違い）。急にロリコン漫画風の絵に変身出来るわけでもないしで、悶々としている独身男が多い（好きで独身なら結構だが、異性と接する機会の少ないエロ劇画家は、したくも出来ない）。中には田舎に帰ったり、行方不明になったり、死んじゃったりする例も。

「時々は飲んでるの？」「全然。同世代の漫画家、みんな子供が出来ちゃったでしょ。出て来ないんだもん。たまに門井文雄さん、片桐七郎さん、みやまさだみさんなんかと飲むくらい」「でもおめえなんて、結構仕事抱えてっから幸せな方。段・玲児や宮本ひかるなんて行方不明だって評判だし、昔、エロ劇画とギャグ漫画の両方描いてた、嶋けんじっていたでしょ。奴なんか沖縄に帰ってから、病気で死んじゃったって噂だぜ。ショックだよ。あいつには俺も結構仕事してもらったし。今何本抱えてんの？」「えっと、『漫画ウインキ』でしょ、辰巳でしょ、『漫画エロス』でしょ、それと塩山さんとこの『漫画スマック』と、『エロトピアデラックス』が隔月で、あとサン出版とか…。月に5本くらい。よくやってるよね。夫婦とアシスト一人の3人で、毎月80枚くらいしてんだもん。完全な肉体労働だよ」「枚数絞ったら？」「喰えないもん。ロリコン系と違って単行本めったに出ないし、出ても部数は少ないし、まず増刷ないし」「若い連中が、エロ劇画家になりたがらねえわけだ」「劇画系の持ち込みなんて来るの？」「たま〜にな。ほとんどが30近くて、昔少し描いてたのばっか。全くの新人となると、まずいねえなあ」「でも塩山さんとこ、結構新しい人出てるでしょ。えっと（持ってったエロ劇画誌をパラパラめくりながら）、『漫画エキサイト号』のおがともよしさん、『漫画スマック』の小田こうへいさん、杏咲モラルさん、こーゆー人達若いんでしょ？」

いきなりビールビンが1本倒れる。ミニスカート姿の奥方のマリヤさんが、トイレに立とうとして太腿がむき出しになったのを、ま〜がスケベ心を出してのぞこうとしたから、頭にぶつけたのだ。馬・ぬケな奴。オチャメなマリヤが、わざとスカートを一瞬めくったが、赤面したま〜に、もう出歯亀る勇気はないのであった。

「ったく恥を知れよ恥を」「わっはっはっ」（のら氏は鷹揚に笑っていたが、自宅に帰るとそのシット深さをモロ出しにして、暴力振るうこともあるという）「でもおがセンセは、昔『特集漫画』で描いてたんだよ。小田こうへい君は、沖圭一郎や間宮青児、青山一海なんかのアシスト上がりだし。杏咲はその点業界外からのデビューだけど、新人というより中堅」「幾つくらいなの、みんな？」「20年代前半。けどこの3人なんか、例外中の例外。元民青で、今や反共エロ劇画家で有名な阿宮美亜だって、30になるはずだしな」「いいよ。俺なんかもう40だもん。この10何年間か、何やってたんだろ。ただ喰うために馬車馬みたいに働いて、マンションの一つも買えないなんて」「けどお前、結構しっかりしてっから、貯金4〜5千万持ってんだろ？」「な…な…何言ってんのォ!? ンなのあったら、この年で月に100枚近く描かないって…」

たそがれゆく分野の従事者らしく、グチばかりの宴会になったが、次の彼の一言が私をうれしがらせた。「けど塩山さんて、漫画家に評判悪いよ。俺が塩山さんと古いつきあいだって知らない人がよく話題にするけど、10人のうち9人は悪く言うね。ンな悪人じゃないのにねえ。ハハハ」ふふふ、悪口の素材(ネタ)にされるうちが花。

（'89・12）

ゲスな奴も所詮は色どり…やはり人生は美しい!!

金にも名誉にも女にも縁のないまま、ズルズルとオジンになってしまったせいか、近頃口をつくのはグチばかり。特に酒席でのそれがひどい。当然ガキ共からは敬遠され、ますます孤立を深めて酒量

も増えがち。体に良かろうはずもなく、このまま老後を迎えるのかと思うとアンタンたる思い。〝エロ漫画家とエロ漫画編集者の老後の生活設計は!?〟ンなことばかりが昨今頭をかすめる。チックショウ!

西武の堤義明なんてヤローは、大金持ちのくせに税金をほとんど払ってねえって話じゃねえか。そのくせ、ピチピチ美女や銭に埋まって死を迎えるのだろう。クッソー! 俺やエロ漫画家は、死にたくなるほど税金を払ってるのに、何でバカな孫共が泣きわめく長屋の片隅で、コンコンとゼンソクに苦しみ、タンを喉にからませて死なにゃならんのヨ!? 橋本大蔵大臣、ババア共に愛想笑いばっかり浮かべてねえで、俺に説明しろい!!

例によっての二日酔い性の妄想の虜になってる所に、ノシノシと姿を現わしたのが、糞DONこと日に3度脱糞をするので有名な、DONKEYセンセ。「シクシクシク」「どした? 陰毛性アゴヒゲを涙で濡らして」「僕、嫌われちゃったらしいんです」「何だよ今頃。俺がお前嫌ってんのは、何年も前からだぜ」「そ…それは分かってますよ。そうじゃなく、多田さんに嫌われちゃったんです。最近僕が塩山さんとユチャクしてるからって、すっごく冷たいんです」「いいじゃねえか。あんなハゲタコに嫌われたって。稿料のいい『ヤングジャンボ』の編集に嫌われっと、不利なことあんだろけど」「そりゃそうですけど。けど出来んなら、誰からも嫌われないで業界を生き延びたいような…」「センセのキャラクターからすりゃ、そうありたいとこだよな。でもダメだよアイツは。奴のシットってなあ、実は俺以上。やたら思い込みも激しいし。阿宮美亜、まいなぁぼぉい、中総もも、未将崎雄なんて連中が離れてったのは、みんなあの性格のせいなんだから」「シクシク。隔月の仕事だけど、出来たら単行本が出るまで続けたいなあ」「ウ〜ム…。分かったぁ! 俺も一肌脱いでみるぜ!!」

翌日の夜、新宿アルタ裏の「三平酒寮」で、編集仲間の宴会。3階の座敷に約束の7時に着いたが、誰一人来てない。ルーズな連中。戸山優並の性格の奴ら。全員が顔を揃えたのは8時近く。出席者は、『アットーテキ』のタコ多田。『マンモスクラブ』の空気デブこと加藤健次。『ホットパンツ』や『キャンディコミック』のカーマスートラ吉田おばさん。風俗ライターの山崎邦紀。それにオイラ。

近頃機嫌のいいタコ多田が、まずは一発得意のおせじカウンターパンチ。「加藤さん、『マンモスクラブ』ってホントに面白いな。信じらんないくらい愉快な本だよ。売れてるでしょ?」「ま…まあね。夏場ちょっと悪かったけど」「それは一時的。すぐ盛り返しますって。ああいう内容で月刊で、全国の書店で販売されてるなんて、僕には信じられません。完全にアヴァンギャルドですよ」おかしいのは、最初は分かり切ったオセジにもついニヤニヤしていた、プライドだけは10人前の加藤センセが、次第にユーウツな顔になり、終いにゃ腕を組んで考え込んでしまったこと。タコ多田にほめられて長続きした雑誌は、一誌もないってことにようやく気づいたらしい。分かり切ったことだが、ついプライド健ちゃん、タコ多田のおせじに一時的に乗せられ、オイラ達にマヌケヅラ見せちゃったのです。お気の毒様。

一人舞い上がってるタコ多田めに、ワシが一言。「糞DONの奴がブツブツ言っとったぞ。お前が松原香織(男)や緒図乃真朋ばっか可愛がるとか、原稿料もちっとも上げてくんねえとかよ。奴なんてお前に、ンな口きける身分じゃなかろうが。何かあったんか?」「…。う、うん、いや別に。ンなこと言ってたかァ…」「人間ってのは、因業な動物よ」「……」

出席者のほとんどが白髪まじり(加藤、山崎、塩山)、白髪&ハゲまじり(多田、吉田)の連中ばかり。世代的には、〝エロ本編集の中で一番カンタン〟と言われる、エロ劇画誌編集上がり。楽して青

春をすごした名残りは、今でも彼らの編集する漫画誌の程度の低さに、ストレートに反映されてます（筆者の分も含む）。こういった脂ぎった中年アーパー編集共は、コミックハウス等の若手編集者の台頭で滅ぼされつつあるが、そのスピードはいかにも遅い。老境に至る前に彼らを廃業に追い込むのが、実は連中の幸福な老後を保証するということに、まだ読者も漫画家も、各出版社も同業者も気づいていない。

（'90・1）

愛さずにはいられないこの姿…これが本当の貧乏人だ。

昨日はいい日だった。パチンコが出たわけでも、痴女に出会ったわけでもないけれど。本屋に行ったら面白い本が色々出ていたのだ。小林信彦の『コラムは歌う』（ちくま文庫）、『坂口安吾全集1』（ちくま文庫）、東海林さだおの『トンカツの丸かじり』（朝日新聞社）、『キネマ旬報』も出てたのでゾロッと買った。

そしたら、残金が２０００円。マズイ！　これらの本をパラパラめくりながら、京浜東北線沿線の場末の飲み屋のカウンターで安酒をあおるのが、〝金にも名誉にも女にも縁のないまま、ズルズルとオジンになってしまった〟、筆者の唯一の楽しみなのだが、いくら場末でも２０００円じゃあね。

カーマスートラ吉田おばさんに、５０００円ばっか借りるか。ところがおばさん、「５０００円貸すと、私１０００円しかなくなっちゃう」だと。40近い女が外に出んのに、万札1枚持たずにどうすんだとガミガミ説教した後、おばさんの部下のゆ〜ま君に３０００円借りる。情けない下請けエロ漫画編集屋道13年の僕チャン。

「コンニチハ！」そこへヨロヨロ現われたのが、内臓の弱さは業界一番のあだちけんセンセ（胃弱のため一膳の御飯も一度に食べられないとかで、ここ3年はハンスウが日常化してるという）。「締め切りは明日じゃなかったか？」「いえ、もう出来ましたんで…」糞DONや忍野しのぶに聞かせてやりたい名台詞。「さすがベストセラー漫画家だねえ。『ドキドキDカップ』は6刷り3万部突破だし、『ドキドキ白河先生』も『ときめき♥Dカップ』も増刷したらしいが、心がけが違うねえ」「いやあ、それほどでも。それとこれ…」

見ればビニール袋の中に、缶ビールが7〜8本。「何よ？」「この前増刷のこと知らせてくれた時、〝増刷したからって間違ってもビールなんかお歳暮に持ってくんなヨ〟って言ってたじゃないすか。あそこまで言われちゃあ」「あれは冗談よ、冗談。真に受けて本当に持って来てもらっちゃあ…」そこへしゃしゃり出て来たのがま〜のボケ。「よかったですねえ。今日はこれで2件目ですね、ビール。あの手は効果ありますねえ」「バカ！　そういうことは、持って来たガキが帰ってから言わんかい」「あ…あの、ガキって僕のことですか？」とあだちセンセ。ったくま〜の奴め、これじゃオイラがおいはぎと誤解されかねません。

その夜はあだちセンセ御寄贈のビールで、オイラ、ま〜、ゆ〜まの3人で宴会。「いやあ、まいっちゃいましたこのジャンパー。買って一カ月ちょいなのに、もう背中の文字がかすれて」ゆ〜まの旦那が、小錦のような肥満体を揺すりつつグチる。確かに背中のBREAKの白い文字の、Bがかすれてる。「安いの買うからですヨ」とま〜。「4〜５０００円はしたのか？」オイラ。「冗談やめて下さいよ。この冬だけ間にあえばいいと思ったから、近所で買ったんす。１８００円です」「……」「……」

沈黙の後、またま〜が言わんでもいいことを。「Tシャツ一枚の値段だし、仕方ないですね」ゆ〜まの奴も傷ついたに違いないので、僕が優しく、「大丈夫。そこの修整用のホワイトでも塗りたくっとけよ」とフォロー。

3人で2本ずつ缶をカラにしたとこで、「なんか口さみしいね」「そーだね」と、コジキコンビが暗につまみを要求。仕方ないので、ま〜にさっきゆ〜まから借りた1000円札を渡す。「えびせんでいいからな。イカの足なんて買ってくんなよ、高えから。少年画報社近くの酒屋は高いから、飯田橋のカエデスーパーで買ってくんだぞ」

コジキの一方が買物へ行った所に、『レモンクラブ』の色原稿を持って来たのか、〝くちゅくちゅ一筋〟のかおるセンセ。あだちといいかおるといい、今日は白痴っぽい漫画家日和だと思いつつも、「1月号の〝ディストラクション〟は、ずいぶんストーリーに凝ってましたね」と、臭いおせじ。「たまに踏ん張らないと…」すぐその気になる方も問題ではあるが…。

東西の冷戦構造に劇的変化が生じた今、世界の中の日本、そしてロリコン漫画界はどんな変貌を遂げるのか、などとの駄話をしつつ3人でビールを飲んでるのだが、まだえびせんが来ない。ま〜の奴、一体どこまで買いに行ったのだ? 「買って一ヵ月でこれですよ」よせばいいのにゆ〜まの奴、かおるセンセにまで1800円ジャンパー自慢。その値段を発表する際に、ゴルバチョフみたいに胸を張るんだから、近頃の肥満型オタクの神経は分からない。しかし、かおるセンセも負けてない。「Tシャツが2枚買えますね。」「………」。

('90・2)

ねんど遊びをするように…お口の中をいじって!!

なぜか分からないが、漫画家や他社の編集者がやたら近頃、甘〜いお菓子関係の手みやげを持って来るので、事務所の空気がトロ〜リ甘くて気色悪い。ハッキリ言っときますが、㈲遠山企画に甘党は一人もおりません!! 今後手みやげをとお考えの方は、缶ビールかおかき(つまみになる)のどちらかにと、本欄に大々的に記そうと思ってたら、昨夜かおるセンセがまた洋菓子を。気の効かねえ奴と今日開けたら、ブランデーケーキ。普通のケーキよりはましだけど、こりゃつまみにゃならねえよな。せっかく持って来てくれた、本人の前じゃ言えねえけどね(いつかの温泉まんじゅうといいブランデーケーキといい、どこか本人のキャラや漫画のイメージにピッタシ。これはいつも手ぶらなくせに、他の人の手みやげはバクバク食べて帰るDON助チャンが、日頃〝ぶらぶら〟してるだけで仕事をちっともしないということに、果たして通じるものがあるのかどうか。↑〝DON助〟とは、糞DONのニューキャッチフレーズ。ちなみにセンセ、最近は『アットーテキ』のタコ多田がコビを売るので気色悪いと、二本柳俊馬の北海道みやげ、〝すずの音〟という菓子を、一度に3個ずつ食べながら言ってた)。

歯医者で若い女性助手に、口の中をグチャグチャいじられるのって、とっても快感ですね。男の医者がわけの分からんことする時は吐き気がするけど、女性に、「ちょっと痛いけどガマンして下さいね♥」なんて言われると、「大丈夫! もっともっと痛くしてン!」と、しゃべるにしゃべれぬ状態の中で思っちまう。ンな美人じゃなくったっていんです。もっとも彼女らは、大きな白マスクかけてんので、実態は不明だけど。〝僕の口の中をグチュグチュしてくれる方〟も、マスクルックなのでよく分かりませんが、眼は割とキレイ。ちっと腕の毛が濃い。今日レントゲン室の明るい所で見て、少しガッカリ。余り男性体験がないのかしら。と思っていたら、口の中に妙なモノを突っ込まれて撮影されたせいか、よだれがタラ——ッ。情けない僕。ンなことは気にせずテキパキと仕事を片づけ、「お大事に!!」と、優しくのたまうマスクガール(次号あたりの『漫画バンプ』で、エロ劇画家の小森達に、マスクをした女じゃないと興奮

しない、変態野郎の漫画でも描かせるかな）。
『ゴジラVSビオランテ』はなかなか。邦画にしては頑張ってる！ 新聞広告での怪獣、人物などのアングルが、1950年代から1960年代にかけての臭〜いタッチでまとめられていたので、ピンと来るものがあったが。監督の大森一樹は、昔から可も不可もない人だけど、これをきっかけに〝90年代のゴジラ映画の花形監督〟と言われるよう、燃えまくって欲しいが、1月6日の「上野東宝」の最終回は、客が30人しかいなかった。
翌日は「王子100人劇場」で、『男はつらいよ・ぼくの伯父さん』と『釣りバカ日誌2』を。満員で立ち見。僕はゴダールやトリュフォーは嫌いだけど、ブニュエルやテリー・ギリアム、成瀬巳喜男や石井輝男、そして山田洋次は大好きなので、本シリーズは欠かさずに観てます。近頃落ち目の後藤久美子が、非常に美人に撮れていた。このコは険のある所が魅力なのだから、TVより映画一筋に行くべきじゃないのか（彼女に白いマスクをして、口の中をグチャグチャ治療してもらったら最高だろう）。
『釣りバカ〜』の釣りのシーンは、何とかならねえのかよ。一応釣り映画なんだから、ヒモノみてえに硬直した石鯛が、はねもせずに釣られるってのはねえだろ。TVの釣り番組だって、もちっと生きのいいシーンをカメラに収めてる。
何となく不満が残るので、帰路レンタルビデオ屋で『ブルー・ベルベット』を借りる。デビッド・リンチの映画は、2カ月に一度は見物、眼を清めたいもの。飲み屋でのオカマのカラオケ合戦シーンがたまんない。『マッドマックス2』も借りる。ジョージ・ミラーも好きなのさ。男っぽい女戦士の、眼線が非常に色っぽい（しかしこのシリーズ、どうして1と3はあんなつまんねんだろ）。
帰宅してVHSの方に、『ブルー・ベルベット』を突っ込もうとするが入らん。「壊れたみたいよ」と馬鹿女房。「×××が『アンパンマン』観てたら、テープからまってね。ウンともスンとも言わないの。小さい方（ベータ）で観たら？」バカ！ あのレンタル屋は、VHS専門なのだ。情けない夜。こうして人は老いて行くのだ。
（'90・3）

「ネタミ」「ソネミ」「シット」こそが…思想の核心である。

どうでも良かねえけど、ンとに眠い。なのにこんなものデッチ上げにゃならない俺って、下請けエロ漫画編集界のこまどり姉妹か（ヒユのせいで余計わかりずらくなった。どうでもいいが）。今月もまた面倒臭いので、『マンモスクラブ』（毎月17日発売・セブン新社・320円）に好評連載中の、「嫌われ者の記」の番外編というパターンで、適当にお茶をにごしてみたい。
4月×日…かつては『現代詩手帖』の常連投稿者詩人であり（当時の『現代〜』の表紙は林静一）、『漫画大快楽』の重要メンバーであり、故『漫画カルメン』の編集長であり、今は単にアナクロなエロ劇画誌『漫画エンジェル』の、二枚目兼小金持ち編集長であり、離婚経験もあり、『漫画ブリッコ』時代の大塚英志（男林真理子）とも論争経験のある、小谷哲センセから電話。
「この前の辰巳の新年会じゃど〜も〜」「いや〜こちらこそ〜。あん時小谷さんにイモファッションをどうにかしろと忠告されましたが、こればっかしはどうにもなりませんね。へへ」「いや〜。そっちは漫画家さんの連絡先は、教えてもらえましたっけ？」「他ならぬ小谷さんじゃ仕方ありませんよ。誰ですか？」「えっと、摩周子…っての」「そいつはうちじゃ使ってません。『ヤングビタミン』の、古内さんとこの看板作家ですよ」「はあはあ…そっかあ〜。看板作家なんですか〜。えっとそれじゃ、大地翔…」「そいつは分かりま

すよ。9××〜2××です。本名は××と…」「どもども。あっと、有村しのぶ…」「そいつはコミックハウスの看板作家ですよ。宮本さん、教えてくんないかな。劇画系はともかく、ロリコン系は凄いからなあ。また何かやるんですか？」「いや〜、人に頼まれちゃって…」「ふ〜ん。そんなことやるとロリコン系じゃ、編集に恨まれっかもしれませんよ。誰に頼まれたか知らないけど。僕も小谷さんにゃ義理あるけど、他の人で、嫌いな奴だったら、いい気持ちしないだろうし」「そっかあ。実はさ、少年画報社に筧さんているでしょ。昔、『ヤングコミック』してて、今4コマやってる。あの人知り合いで、頼まれたもんで」「懐かしいなあ…。やすだたくの〝セーラー服純愛〟とか、宮谷一彦のエロ漫画、西脇英夫の日活アクションのコラムとか、ドドッと思い出しましたよ。僕も6〜7年前、いがらしみきおの増刊号出すんで原稿借りに行ったら、感じよく出してもらったことあったなあ」「あの人が、また漫画誌やるみたいで」「そのメンバーからすると、エロ路線で好調とかの『プレイコミック』の線だな」「どうなんでしょうね」ところで少年画報社といえば、かつて㈲遠山企画が一時的に下請け編集していた、『漫画ボン』のカジとかいう胸糞の悪い野郎は、健在なのであろうか。奴が命あるうちに一度メタメタにぶっ飛ばしてやりたいものと、社が小川町から画報社近くの水道橋に移転して4年、常に虎視眈々と狙いをつけているのだが、なかなか遭遇する機会がなくて寂しい(下請けを使い捨てにする出版社は、少年画報社に限らず胸糞が悪い。二流ヅラしとるが、この手の社は、東京三世社、アミカル、日本出版社、辰巳出版等に比べれば、外道以下)。

4月×日…羅美亜企画の通称バカボッチャンこと、池本浩一に電話。彼には、『レモンクラブ』(奇数月の13日発売）第7号から、「懐かしの業界ケンカ史」なるコラムを書いてもらう予定になっている。「例のコラムの行数だけど、16字×２００行で、4月10日締め切りな。当然第1回目は、〝大塚英志内容証明書事件〟だ。こいつは笑わせる事件だったし、本人もM事件特別弁護人だ何だと話題で、読者にも受けっぞ。あいつは元々人格的にゃろくな噂のねえ奴だから、触れられたくない過去をねちっこく、『週刊新潮』的に頼むぜ」「はあはあ。そりゃいいんですけど、『ロリポップ』のあのコラム、内容証明書のおかげですぐに打ち切りだったし、行数が埋まるかなあ」「大丈夫。時代的背景だって説明せにゃならんし。『ブリッコ』だ『ロリポップ』だって、今のガキ共はほとんど知らんよ」「かもしれませんね。あれ何年前くらいでしたっけ。資料の山も引っ掻き回さないとならないし」「4年前くらいか。これはいいネタだし、3回連載くらいにしてもいいよ。あいつは、『朝日ジャーナル』でM事件への過剰報道批判してだよな、〝高取英のバカよりましだな〟と思わせといて、その最先端だったフジサンケイグループの『SPA!』あたりで寝言こいてた、売名的マッチポンプヤロなんだから、ガンガンやったれよ。たまが公害企業、川崎製鉄のＣＭに出る以上のブラックユーモアだっつーの」「は？　ともかく資料チェックしてから電話します」「おう！　それとよ、2回目はスタジオ・バトルと蛭児の旦那の件なんて面白いじゃんか…」。

('90・6)

各編集部並びに読者の方々…電話待ってます。

自宅に帰っても、糞ガキ共がうるさいだけだから、大して仕事もねえのに事務所でビール喰らいながら、『オレンジ通信』開いてマスを、いや、ディケンズの『ピクウィック・クラブ』をめくっていると、時々わけの分からん電話が来る。一番多く来るのが、「あのォ、ＳＥＸ体験を告白したいんですが」という、生臭い声をした中年男の電話。「忙しいから」と切ろうとすると急に態度を変え、「バカヤ

ローッ!!」と絶叫してガチャン。そのくせしょっちゅうかけて来る。何が楽しいんだか。しかもコイツ、ハゲ頭ワックスで磨きながら、『ホットパンツ』のカーマスートラ吉田おばさんが出たりすると、「男の人に替わってもらえますか」。ホモっ気があるのか？ あるいは普段小心なため、同性とワイ談も出来ぬので、わざわざ電話をして来るのか？ 岡山のムッチーあたりの晩年は、多分こうなのであろう（今度電話が来たら、コイツだと分かったとたんに、バカヤローと怒鳴ってやろう）。

昨夜もイカれた電話が来た。〝プルプルプル〟。「はい！ 遠山企画です！」「すいません、『エロトピア』編集部お願いします」「はあ？」「あっ…ど…どうも失礼しました」あんまし聞き覚えのある声ではなかったが、一体誰がンな寝ぼけた電話をして来たのか、推測してみた。①両方に執筆経験のある漫画家が、単に電話番号を間違えた（やまだのら、小鈴ひろみ、それに真弓大介の各センセ等、いっぱいいる。が、全然聞いたことのねえ声だった）。②前出のムッチーみてえな、読者のホモッぽ電話魔が、種々ある得意先のエロ本編集部の電話番号を間違えた（それにしては声が明るすぎた。ジトーッとした、生臭い粘液質の声こそが、これらの趣味人の声のはずなのだが）。③一週間ばかり前、本誌に真弓大介センセの電話番号を尋ねて来て、「お前ら、こっちが聞く時ゃ教えねえくせに、図々しく見下した態度で下請けエロ本プロダクションに、しかもタダで、金の成る木の漫画家の電話番号なんか聞いてくんじゃねえよ、カスッ!!」と邪険に断わられた、『ヤングジャンプ』のクマガイ君とかいうヘンシューが、同じく真弓センセの描いてる『エロトピア』に電話しようとして、ドジってまたうちに電話を寄こした（けどそれほどの馬鹿が、ンなメジャー誌に関係を持ってるとは思えない。が、かの『エロトピア』のヤマザキ君の例もあるし。去年の話だけど、真弓センセの電話番号を教えてあげたの。一週間ほどたって、また電話を寄こすんだ。〝ちょっと甘いツラして教えるとすぐまた聞いてくんだから、一流気取りの二流エロ漫画誌の尻の青いヘンシューは嫌いなんだ〟と思いつつ電話を取ると、そうじゃなかったのだね「もっともしばらくして、同誌編集部のシマオとかいう小生意気なガキが、工員野郎、いや、くらむのヤロの電話番号を無礼な態度で聞いて来たが」。「すいません、先日教わった所に電話したのですが、通じないんです。塩山さんは、○××—×××—2×××とおっしゃいましたが、局番の区切り方が間違ってるのではないかと…」「けどよ、お宅の社は青森にあるわけじゃねえだろ。東京からかけんのに、どこで局番区切ろうが関係ないじゃん。その番号で合ってるし」「そ…そう言えばそうですねえ」「そう言えばそうだよ」この件に関しては、今発売中の『マンモスクラブ』6月号の、「嫌われ者の記」を必読のこと）。

結局、真相はどうなんだって!? ンなこと分かるかいなあ。あえて真相をと言うなら、〝行数埋め〟とでも申しましょうか。後は読者の方々の想像にお任せするとして、昼飯を吉田おばさん班のひろ君と食べに行ったのよ。三崎町のいつも行く「豊年屋」へ。消費税どさくさに紛れて、４５０円のおもりを５００円に値上げした、悪辣なそば屋なんだけど、味は悪くないから通ってんだよ。先輩だし、栄養失調気味のひろ君に、天丼を奢ってやる（俺も大好物なのに、ダイエット中で食べらんない。自分の金で相手に倍もするのを食べさせ、自らは粗食に耐える…美しいけど、むなしか景色）。

帰りに、「そだ！ コミックハウスがこの辺に引っ越したらしいから、見物してこうじゃねえか」「場所知ってんですか？」「全然。けどすぐ分かるって。どうせクリーニング屋か、〝歌って踊れるスナック、来夢来人〟てな調子の、サイケな大看板が出てるに決まってっから」と、ひろ君がこうばしい天丼の香りを、僕がビール臭い息を漂わせつつ、そば屋から数メートル歩くと、何ともう2～3軒隣

りのビルの2階に、コミックハウス分室の看板が。「チェッ！ もう見つかっちゃったか」「けど、結構粋な看板ですね」「だな。人間、金が出来るとちゃ〜うな」と語り合いつつ、2人の青年は（?）明日を夢見ていたのだ（後の調査でやはり例の電話は、クマガイ君と判明。めげずに頑張れ、大手エリート編集者!!）。（'90・7）

今のうちにでけえツラさらしとけ。いつかは…ケリをつけるぜ!!

俺は蛇年生れの乙女座という生来の性格もあり、かなり執念深い方で、消費税の恨みはもとより、小学生の時にコケにしてくれた女のコや、同じ頃に腹痛を味あわせてくれた、貝のつくだ煮のことなどもなかなか忘れられず、暇があると思い出しては、感傷ないし憎悪への思いを反芻するのだが、昨今はリアルタイムで腹立たしい事件が続発、その至福の時を味わう時間も少なくなった。で、最近腹の立ったことを羅列してみた。

【自分のペンネームを忘れる奴】 こういうボケは、阿宮美亜以外には考えられない。「あ…あ…のあの…あの…あたくし、あやみあみゃ…あれ?…あみみゃま…あれ…えっと…あ、み、あ、み、あ…あ〜よかった。あみあみあ、いや、あみゃみゃと申しますけど」「分かっとるわい！ ンなド汚ねぇ声してんのは、お前しかおらん。糞忙しいのに、何か用か?」「あのですねえ、『漫画エキサイト号』の2色原稿、2日ばかり伸ばしてもらえないかと…」「ケッ！ 勝手にさらすんだな。それとお前、最近欲求不満じゃねえのか?」「はあっ?」「濡れ場によ、やたらチンポコばっか出て来る。読者は手前にもくっついてるもんなんぞ、見たがっちゃいねんだから、もちっと考えんかい。亭主に冷たくされとんのか? ヒッヒッヒッヒッ」「放っといて下さいよ」「ヒッヒッヒッヒッ」

【締め切り延期のOKもらった後ですぐ寝腐る奴】 ITOYOKOセンセのこと。昼頃電話で、渋々締め切りを3日延ばすのをOKして、午後また用件が出来たので電話してもなかなか出ない。21回と半分くらいのコールで、いかにも起き抜けという声で出る。「…ふあ〜あっ。え…えっと、ITOに行くならハトヤ…、電話は4126（ヨイフロ）の…」「何ィボケとんのよ。締め切り延ばしたとたん寝込まれちゃ困るじゃない」「ド…ドキ。いや〜、モカ飲んで無理して起きてたもんで、やっぱりバタンキューと…」「絶対に月曜の昼だかんね」「任せて下さい、4126（ヨイフロ）ですヨ」「……」

【駅のトイレのウンコを流さない奴】 岡山のムッチーのような性格の奴であろう。だいたい流す水を3里離れた谷間の川から、てんびん棒に桶を吊して運ぶのならともかく、短い足をちょいと伸ばせば〃シャ――ッ〃なのだ。糞自慢なんかすんじゃねぇ!!

【××××××××な奴】 ××××△△◎××○○□□××××♠♠×××★★★××◆◆×××……◎▲※⬇♬回◆♪××■よ、いつか見てろよっ!!

【人手不足の写植製版印刷関係者の高姿勢化で、オロオロしている奴】 昔は前出の関係者よりは、建て前ではあっても編集者中心の慣例はあった。が、今や、〃士農工商写植製版印刷製本社員編集者の下の下請けエロ漫画編集者〃というくらいで、米つきバッタのようになり、各業者様にお仕事をしていただいてる状態。『アットーテキ』のように、「お宅は入稿悪いし、場所も遠いから」と、製版屋から三行半を叩きつけられる雑誌も出る始末。タコ多田は泣きの涙で頑張ってるらしいが、本誌もいつそうなるか?

【腐った野菜を平気で冷蔵庫に貯蔵してる奴】 愚妻です。ブスヅラには慣れたけど、こういう無神経さは耐えられません。皆さんもスカをつかまぬように。

【駅の階段で、彼女のミニスカートの太腿を自分のカバンで隠す奴】

時々いんだよ、こういう男。カバンならまだしも、「ビッグカメラ」の袋で、むき出た部分全てを隠そうとする奴までもいる。バカヤロー、一度世間様にさらした体だ、ケチケチしてんじゃねえよ。

【全然暇なので、クーラーの効いた部屋で文庫本ばっか読んでいる奴】 カーマスートラ吉田班の、ゆ〜まとひろのこと。こちとらの班はメタメタ忙しいのに、2人は本読んで銭もらってんのかと思うと、腹立たしい。『キャンディコミック』廃刊が主因だけど、ンな調子じゃ第2の『キャンディコミック』が出るぞ。ハゲおばさん、しっかりしてね!!（以上は、似たような給料なのに忙しすぎると内心思っている、ま〜とやくる〜との心の声を代弁した労務対策上の意見ですので、吉田班の人間は気にするように）。

【黒澤明の『夢』をほめる奴】 昨日ようやく、従業員の態度も映写状態も悪いので有名な、池袋の「日勝文化」で観たけど、とんだ凡作でガックリ。『影武者』や『乱』も日本じゃ評判悪かったけど（僕は2作とも評価してます）、次元が違いますぜ。部分的に光る所はあるけど、水準は丹波哲郎の『大霊界』とさほど違わない。そのくせ妙にくどくて、後半の地獄のシーンは中川信夫の足元にも及ばない。３００人収容の館に20人も客はいなかったけれど、たとえ満席でもこれはヒドイ。老醜!!

（'90・8）

気分を害しつつ本欄なんぞ読まなくっていいの。

8月は、パチンコで1万円も黒字が出たから、9月はロクなことはないだろうと思ってたら、某誌に都条例は来るは、ＷＥＬＬＡセンセは急な仕事（本業）の海外出張で穴はあくは、時坂夢戯は『レモンクラブ』で遅れまくったあげくに手抜きを描くは、隣の吉田班の〃色魔〃のおおぬま・ひろしは、『ＢＡＢＥ』の原稿を落とすはで、悪運がカーマスートラ吉田おばさんにまで飛び火。

しかし、人生谷あれば山ありです。

そのうちきっといいことある

さ。

　ようやく50行終わったんだけど、いくら抗議のハガキを寄こそうが、本欄の手抜きは一切やめないので、読者諸君も無駄な試みは即刻中止しなさい（本欄は俺の社会福祉事業。他人にヤイヤイ言われる覚えはない。イヤなら読むな、読むなら耐えろ、耐えられぬのなら買うな、の精神で参りましょう。↑しかし、このデケ～態度は一体どんな家庭環境から生まれたのか？　我ながら驚いてしまいますわ。オッホホホホ）。

　で、運の悪い人っているもん。水道橋駅前の回転寿司で納豆巻きを食べてたら、汗ふきながら入って来たスーツ姿のオッサン、湯飲み茶碗取ろうとして、間違ってお湯のレバー押したもんだから、腕を熱湯が直撃、「アチチチチ」。だからどうした？　ただこれだけ。話にいちいち落ちがつくほど、人生はドラマチックじゃありませんて。

　あ、
　　気
　　　分
　　　　害
　　　　　し
　　　　　　ち
　　　　　　　ま
　　　　　　　　っ
　　　　　　　　　た
　　　　　　　　　　俺。

　もう50行。ニヒヒヒヒ。ひろのガキも俺の勧めで観に行ったらしいけど、15年程前に、勝プロダクションが制作して東宝が配給した、映画〝子連れ狼シリーズ〟は最高。映画と劇画という異なるメディアを、あえて混同して同じまないたの上で〝さばく〟けど、劇画版なんて問題になりまへん。

　ただ黒田義之がメガホン取った、『子連れ狼・地獄へ行くぞ！大五郎』は未見だった。いつか観たいと思ってたら、やってくれましたよ、例の「大井武蔵野館」が。雪原での大決闘シーンの凄さ、コートームケイさは、日本映画史に残るでしょうね（石井輝男監督の『江戸川乱歩全集・恐怖奇形人間』における、「お母さ～ん!!」の絶叫と共に、人体が花火で宙に舞う感動の名シーン同様に）。

　裏柳生一派が全員スキー姿でチャンを襲撃すんだもん、真っ青。で、こーゆ映画を、全スタッフがマジで力一杯に撮ってんのが、ヒシヒシと伝わってくる。１９７４年、俺の大学時代だ。リアルタイムで観ない僕がバカでした。あの頃は、藤田敏八の『赤ちょうちん』とか観ちゃ、秋吉久美子のオッパイに発情してたんだよ（幸いにも、漫画は一切読んでいなかった）。

　それがどうしただって？

　知るかいなそんなこと!!

…て、威張ってられる立場でもない気がするけど、ようやくあと20行。

フ——ッ。

助かった。

もうクタクタ。

　併映は『殺人狂時代』（監督／岡本喜八）だったけど、これは二度目。好きな人も多いけど、俺はこの頃から岡本喜八って、明らかにパワーダウンしてると思う。大向こうを意識しすぎ。題名は忘れたけど、初期の雪村いづみ主演の石坂洋次郎モノとか、『独立愚連隊西へ』の頃の落ち着きなさの心地良さが、少しずつ減退し始めた気がする。

（'90・11）

これだけの手抜きページでも…君達の血は許しなさい。

妙に甘い匂いのする夕方です。中総もも、谷内和生、ＫＡＭＥという、三大アバズレ女流漫画家が…おっとっと、三大処女漫画家が、狭い事務所に御集合あそばされているのだ。

と

こ こ ま で は マ ジ メ に 書 い て き た け ど も う 飽 き

ち ま っ た 僕 で す。

ああ忙しい。今日はこれから「大井武蔵野館」の鈴木清順特集に行って、『俺たちの血が許さない』を見物せにゃならん。けど谷内和生センセに、読者プレゼント用の『ＳＥＲＡ*!*』にサインしてもらわなくちゃ。でも谷内センセ、急遽カーマスートラ吉田おばさんに頼まれた、『ＢＡＢＥ』の秋山道夫のタコ野郎（コイツの吉田おばさんへのおべっかは、聞いてて素晴らしさの余り射精しちまいそう）のエロ小説のカット、外見ニコニコ内心ムカムカ描いてるから、それ待ってたら、後半の山場だけ見物しようと思っている、併映の『東京流れ者』が観られなくなる。エイ*!*　い～や*!*　ただでもう読者のことなんか知ったこっちゃない*!!*

10年振りに観た『俺たちの～』ですが、確かに失敗作の部類とはいえ、なかなか興味深い一作（学生時代に一度、ＴＢＳの深夜放送で観た記憶がある。白黒テレビで観たせいか、すっかりモノクロ作品と思っていたバカな僕）。

何だってェ*!?*

「エロ漫画誌なのに映画、それも大昔のわけの分かんねえ映画や、自分の体験ばっか書くな*!!*」

俺に意見するたあいい度胸。

イヤなら読むな*!!*

それでもイヤなら買うな。

どこが興味深いといえば、まだあと60行も残ってるってことだよ

な。

あ〜あ疲れたな僕。

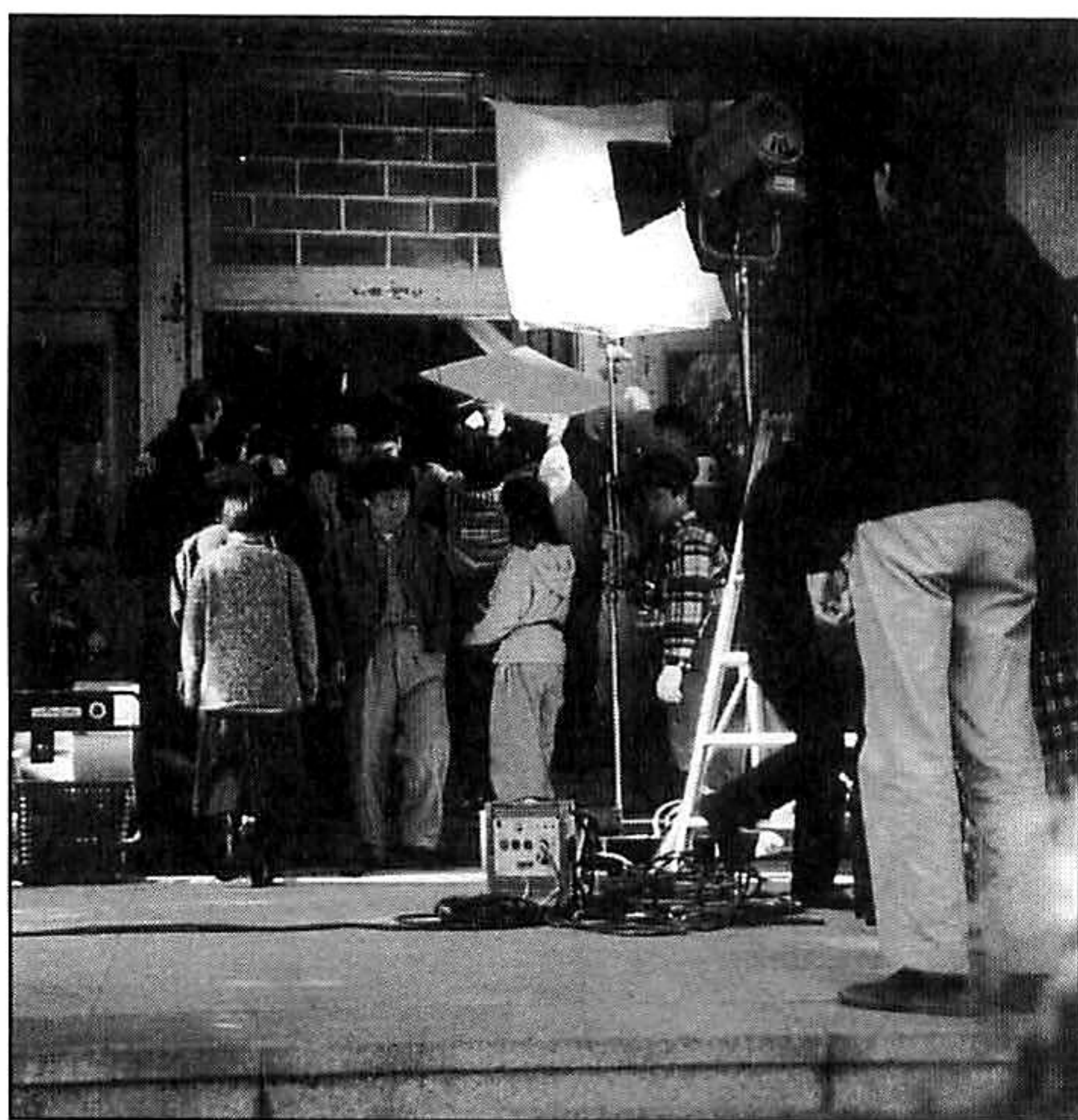
まず字幕だよね、字幕。俺は小林旭オタクだから、天才アキラの映画は色々観てるけど、序列で彼の名前が1本だけド〜ンと出てんの見た経験て、あんましない。彼の共演て浅丘ルリ子が多いでしょ。ルリ子の方が日活では先輩。だもんで必ず2人同時、つまりアキラが右でルリ子が左という風に、同格的扱いを受けてんだよね（後の渡哲也と松原智恵子にも当てはまる。ちなみに『ロリタッチ』の表紙の漫画家の序列は、一切そういう配慮はなされてない）。

だから本作で、小林旭との名前が単独でド〜ンと記されたのを見た時は、胸がジ〜ン。上の娘が私の34歳の誕生日に、スーパーのチラシの裏に、似顔絵を描いてプレゼントしてくれた時以来の感動でした。

それが鈴木清順とどう関係してんだって？　ンなこと知りまっかいな。かつて10数回は観た『東京流れ者』で、相変わらず松原智恵子がわざとらしく転んでましたが（あちこちに転ぶという点では、大島渚や野坂昭如以上）、なぜこの人は転ぶ際に「アッ!!」としか叫ばないのだろう。

この前会社でも大問題になった。というのもひろの奴を、昔のカルト邦画ムービー狂に洗脳したためで、近頃は一丁前に、昔からの日活映画オタクの間でも永遠の謎と呼ばれている、〃松原智恵子の「アッ!!」転び〃の件に関して、意見を挟むようになったからだ。「鈴木監督の演技指導では？」「いんや。小澤啓一の〃無頼シリーズ〃でも、何度転んだか知れねえ」「そういやそうですね」

こーゆ時、必ずシャシャリ出るのが、やくる〜とのドアホ。「ンなの決まってます。松原智恵子は普段転ぶときに、必ず〃アッ〃ってゆんです。だから映画でも…」こーゆバカは放っといて、僕が本当に言いたいのは字幕のことじゃなく、東大卒役の小林旭がなぜヤクザになったのかと…。

（'90・12）

●映画『無頼平野』にエキストラとして参加。

第2章

凡人回想録

『レモンクラブ』'89.8~'97.5

愛すべき若ハゲ野郎、タコ多田との遭遇。

コイツに初めて会ったのは10年くらい前。まだいわゆる、２００円台エロ劇画誌の全盛時代で、各社は競って本誌の他に、増刊号という再録本をジャカスカ出していた。しかもこの再録本、原稿料は1冊50万くらいですむのに、4〜5万出して本誌より返品がいいという例ははザラで、各出版社はウハウハの時代（むろん、下請けの㈲遠山企画は今も当時も、ただ息をしている油かすのような存在だが…。これは、恐れ多くも各出版社の皆様方に、不平不満を申し上げてるわけではない。それどころか、油かすに等しい我々が、生意気にも一人前にも息を出来るのは、皆様方の御慈悲のおかげですという、率直でピュアな感謝の自然な発露です）。

一応はエリート社員編集者のコイツは、増刊号を出すにあたり自社の原稿だけではページ数が足りぬので、当時神田小川町の芙蓉ビル7階にあった、遠山企画のウナギの寝床みたいな事務所に、脂でテカテカしたツラを出したのだ。コイツとは、通称多田在良。本名多田正良。ペンネームを腹黒三郎と称する、現『アットーテキ』編集長のタコ多田のこと。この頃は、『漫画チャタレイ』の編集長だったはず。

コイツが原稿を借りに来たエロ劇画家は、やまだのら。当時は華々しく売り出し中で、先行した羽中ルイに比べて、ヴィヴィッドでギャグめいたエロ漫画が新鮮だった。俺の所でも『漫画バンプ』(古いのねこの本)、『漫画ショック』(『漫画ショック&ショック』改題）と毎月2本連載で、大車輪。今で言うなら、『漫画エキサイト号』と『漫画スマック』を股にかける、阿宮美亜みたいなもの(ただ、のらは阿宮と違い、善人というか人が良すぎるというか、姑息に臭い芝居をして、原稿料アップを図ろうとはしなかった。ったく阿宮の糞アマなんか、屋久島の１０００年杉みてえな骨太マッチョ女のくせして、「私、このままでは死にます」とか言い腐り、そのたんびに稿料アップしてんだぜ。ざけんじゃねえ!! 私の経験では、この他にもりを舞、西江ひろあきらが、イモ臭い芝居をしちゃ、稿料アップを図らんとした。ロクな死に方はしねえよ）。

つまり俺んとことしちゃ、のらが「すいませんが1本だけ…」と泣いてせがむので、一水社に原稿を渡すのをＯＫしたが、本来は銭になった（当時）彼の原稿を、出したくはなかった。でも、約束ですから仕方ありません。しかし、出来のいい原稿は論外として、並の原稿も、癖になるのでなるべく渡したくないのが本音（サン出版の櫻木編集室なんつ所は、自分ん所じゃ1〜2冊しかエロ劇画誌出してねえのに、当時単行本バカスカ出してたので、コジキみてえに、各出版社を回って歩いてた。俺んとこも余りの図々しさに、ある段階からシャットアウトしてやったが、そのコジキ根性のおかげか、サンは今や凄えビルおっ建てたらしい。さすがです）。

で、例によって悪知恵を使い、既に再録ずみの（それもわずか3カ月前）、手抜き足抜きでコピーだらけの超ドカス原稿を渡して、あしらうことに（こういうことは今でもやってます。が、例えばくらむぼんとかかおる、白夜で言えば唯登詩樹あたりのゲンコになると、貸し借りどころか、直に手に触れさせてもくれんでしょうね、各編集部がしまい込んでて。エロ劇画の全盛時代は、沢田竜治、羽中ルイといえど、こんな扱いを受けてませんでした。雑誌がメインだったエロ劇画誌時代と、両方が銭になる、今のロリコン漫画ブームの違いでしょう）。

俺が多田の立場なら、その原稿を受けとるやいなや2つに引きちぎり、捨てゼリフの一つも残して立ち去ったでしょう。ところが、奴はこうのたまったのだ。「あ〜っ、こりゃあいい原稿だ。のらさ

んて、最近描き込みすぎで黒っぽくなってて、まずいなぁと思ってたんですよ僕。助かるなあ、こういうの貸してもらえるなんて。すいません」皮肉を言ってるのかと思ったが、そうでもないらしい。「どうです、時間があったらお茶でも」と、一階の「珈珀」という喫茶店の、まずい珈琲まで奢ってくれる始末。何だコイツ!?

　以来、しょっちゅう電話を寄こすようになる。用件は決まっている。「宮尾たけ史さんのゲンコ、教えて下さい」「すぎうらあきとさんの連絡先、教えて下さい」「樽本一さんと、おがともよしさんの連絡先教えて下さい」「あの、『ロリパック』って増刊本出すので、おおぬま・ひろしさんの原稿貸して下さい」つまりは、頼みごとばっか。普通の出版社は下請けにこーゆーことして、度重なれば銭を払わねばならぬことを知ってる。が、一水社というか、そこの社員のタコ多田、一切そんな素振りなし。何度かは、「甘えんなこのドハゲ豚!! うちは社会福祉法人じゃねえ」とイッカツしてやろうとも思ったが、憎めないんですよね、このタコは（それにひきかえ、今や誰も知っちゃいねえと思うけど、『漫画エロトピア』なんて、実に糞バカなヘンシューしかいねえぜ。ここのマキハラとかいうモーロクジジイらは、かつて㈲遠山企画を、恥知らずな猿真似集団と、的確かつ鋭く批判というか、罵倒してたもん。ところがド劇画が衰退して、自分らが地盤沈下するや恥も外聞もなく、その猿真似集団の発掘した漫画家を使うようになっちゃった。川田時男、左京景、やまだのら、大地翔、もりを舞、真弓大介…漫画家さんの仕事が増えんのはケッコだけど、漫画家の電話番号を聞くのに、関係ねえ第三者の漫画家使ったりすんじゃねえ。ちゃ〜んと編集がカッコつけずに、ペコペコ頭下げりゃいいの。そーゆ時うちは、かつてお前らにすぎうらあきとを尋ねた時のように、「今、特訓してる所なので教えられません」なんつわず、バンバン教えるから。テメーらの痔で腐乱したケツの穴を基準に、他人のそれを想像すんじゃねえ）。

　僕もゲンコ貸したげたり、新人漫画家教えるようになっちゃったんです。別に俺が人格円満になったわけじゃない。単なる打算。だってコイツ、いくらカス原稿貸し出しても涙流して喜ぶし（会社も僕も一文にもならんが、貧乏漫画家には臨時収入が入るので、彼らが「原稿料上げて下さい」という時期が先伸ばしになって助かる）、いくらうちで教えた新人漫画家が、コイツの所の本で手を抜いても、怒ったりしないんだもん（しかもうちより、1000〜2000円稿料上げてくれる）。だから僕は（俺の一人称がコロコロ変化すんのは、癖だから気にせぬよう）、多田から教えて欲しいと言われた新人漫画家には、事前にこう言い含めたものだ。

「多田んとこはよ、ど〜んなに手ェ抜いても文句言わんし、しかも俺ん所より、1000円も稿料高いんだぜ。だからよ、俺ん所の仕事の骨休めだと思ってやったれよ。それとよ、こりゃ俺のおかげで入った仕事みてえなもんだ。だから1000円アップした分のうち、500円は㈲遠山企画で払ってると思って感謝しろ。分かったなあ？」こんだけ説得力を持つ理屈もそうないと思うが、結構素直にうなずくエロ漫画家も多く、我ながらなぜ豊田商事の営業マンにならなかったのかと、反省したのを昨日のことのように記憶している。

（'89・8）

ブスで陰気でセンスない女共のハレの日々!?

　一億総成金時代とも言われる昨今だけに、近頃はエロ漫画家、編集者共々、いいべべを着るようになった。べべにあんだけ銭を遣ってるとこみると、エサの質もかなり向上したに違いない。糞も、相当臭くなってるはずだ。田舎出の成金が、イモなファッションや動

物性ウンチの臭気で身を包み、神保町の「高岡書店」や、新宿の「まんがの森」あたりをウロついてる姿はかなり奇怪だが、一番迷惑というか、コッケイなのは、ワシら現場の編集者。今回は男性は差別し無視、女流エロ漫画家の成金への道について、軽くくっちゃべってみたい。

　女流エロ漫画家が一変するのは、約一年の雑誌連載の後、作品が単行本化されて印税が振り込まれた直後。単行本の印税は、エロ漫画界ではだいたいが定価の8％（メジャーだと10％）。総額は定価によって異なるが、800円の物を1万部刷れば、手取り60万くらいになる。世間一般からすれば大した額ではないが、一流のブス揃いで、幼年期より差別を受けて来た、根暗大根足上眼使い骨太スタイル最悪学歴なしで90％がバージンの地方出身の彼女達からすれば、宝クジに当たったような巨額な金に映る。彼氏でもいれば貢ぐなり出来るが、腐臭まみれのアパートに帰っても、待っているのは同レベルのマヌケヅラした猫ばかり。いくら猫に高いカンヅメ買い与えても、高が知れてる。結局は、大胆にもと言うか、無謀にとでも言うか、ある意味では彼女らの歴史からすれば当然のように、ファッションに銭を投ずることになる。

　これは、彼女らに日常的に接せねばオマンマの喰い上げになりかねぬ僕らには、苦痛を通り越した一種の拷問だ。彼女らのブス振りには、もう驚きはしません（そもそもこちとら、毎日女房のアホヅラ見てるおかげで、ブス自体には免疫が出来てる）。問題はそのオカチメンコ軍団が、常軌を逸したファッションショーを、編集部内でおっぱじめることにある。そりゃ僕らだって分かってる。友達もほとんどいない彼女らにとって、編集部に打ち合わせに寄ったり、原稿を持って行くのは、少ない外出のチャンスであるばかりでなく、ハレの日でさえあることは。しかし、それを見せられる側の心の荒廃についても、彼女らは考慮すべきではないか？

　幸いオイラのブス女房なんか、安月給のせいでいいべべなんぞ着られないから、余程の美人の隣にでも立たぬ限り目立たぬ、座敷ワラシのようなもの。女流エロ漫画家は違う。最低でも60万になるA5判の単行本を、多い人は年に2～3冊も出す。その度に各編集部で、この拷問的ファッションショーが繰り広げられるのだ。唇を噛み締めながら、「いつかアムネスティ・インターナショナルに訴えてやる」と、涙にくれてる我が同胞（はらから）のことを考えると、僕の心はケンザンでかきむしられるように痛む。しかし、悪いことにこの養豚的ファッションショーは、それによっていくばくかの利益を得た、女流編集者にまで伝染するバヤイもある。ンな姉ちゃんを同僚に戴く男性編集者の中には、ノイローゼになったり、退職して帰郷したり、果ては突然死したりで、社会問題化する日も、そう遠くはない状態だとか。

「あればかりは、体験した人じゃなくちゃ分かりませんね。その種の家畜（僕らはこう呼んでいる）が2～3頭編集部に来た日なんか、『ヤングビタミン』とかゆう百姓雑誌の表紙で有名な、おおぬま・ひろしさんみたいに、昼間から酒飲んでます。ビール!?　ダメダメ、そんなんじゃ。ウイスキーをストレートで、しかも水っぽいサントリーじゃなく、ニッカのピュアモルトか何か、3分の1くらいドックドック飲んどかないと、カンペキな廃人になっちゃいますヨ。それがこの前ついうっかり、ウイスキー飲み忘れたんですよ。直後に家畜の集団放牧が始まったもんだから…。僕なんかいきなり失神してしまったらしくて…。後で同僚に聞いたら、〝殺してくれ殺してくれ〟って、うわ言みたいにつぶやいてたそうです」

　この匿名希望のT企画のS山氏の証言は、決してオーバーでないことが、複数の人間の発言で証明されている。しかしただ一人、女性の同僚Y田さんが次のような反論をした。極端な取るに足らない異端意見ではあるが、資料的価値はあると思うので紹介したい。

「ふざけんじゃねえよ、うちの不細工な野郎編集者共が‼　だいたいS山あたりが、何でアチキのハゲ頭馬鹿にする権利があるのヨ。アチキの頭がいくらハゲようが、テメーらにゃ関係ねえだろが。もっと問題なんは、テメーらの肥満だよ。ブクブクブクブク、どこまでムレ肉化すりゃ気がすむのよ。うちは相撲部屋じゃないよ。お前らがヨタヨタ事務所に入って来て〝オハヨ！〟なんて言うと、私にゃ〝ドスコイ！〟って聞こえんだよ。S山もゆ〜まの奴も、その上脂性なもんだから、歩く度に汗と脂が入り交じった、妙な体液をドピュドピュ飛ばしまくりやがって。テメーらいつからガマの油売りになりやがった？　アチキなんか家に帰るなり、気色悪いからすぐシャワー浴びてんだ。分かってんのかよ‼　それとありゃ何なんだよ、例のS山の短パン姿。なまっちろいブクブク足が、アチキの横を通るたんびに、ウゲーウゲーッて心の中で吐いてんだ。S山もゆ〜まも、早い話が歩く生ゴミ。よくあんな醜い姿で街が歩けるよ。テメーらは、工場でハムにでもされねえ限り、社会にとって何の利益もねえんだよ。それとS山の下のま〜。あいつのO脚もたまんないね。ビッグな万力にでも両脚はさんで、まっすぐに出来ねえのかよ。隣の、かもって中年男も一体ありゃ何⁉　アイツが鼻かむ度に、アチキは寿命が3日縮んでんだ。馬じゃなく、一応は人間だろ。遊覧船の汽笛みてえな馬鹿音出して、鼻かむんじゃねえ‼　どいつもこいつも歩く生ゴミだ。オイ！　S山よ、テメーこれ以上ホラ吹きまくると、この前会社の共同便所で、『アットーテキ』9月号の芳町カゲコの漫画で、マスこいてたのバラすぞ‼」

失礼。とんでもない方向に話が脱線してしまいました。いずれにしても、女流家畜エロ漫画家集団が、ムクな心の男性編集者達をいかにズタズタに傷つけているかは、御理解願えたのではないかと思う。フロンガスの追放のため、最近各国は政治体制の違いを乗り越えて団結しつつあります。この養豚的ファッションショー現象についても、各国が手をたずさえ、強い意志で対決して行こうとの姿勢が、今、強く望まれているのでは…？（お断わり＊本文中で取り上げた女流エロ漫画とは、決して中森ばぎなさんや阿宮美亜さんのことではありません。また女流編集者も、『キャンディコミック』や『ホットパンツ』で知られる、カーマスートラ吉田さんのことでは絶対にありません）

ようやく残り20行を切ったけど、このレイアウトは完全な失敗でした。こんなに行数いっぱい入っちゃうなんてね。なら変更すりゃ良さそうだけど、そうするとまためんどっくさそうだし。ペラペラとダボラ吹いとりゃ行数埋まると思ったけど、とんでもない思い違いでした。最近またパチンコが出ない。それくらいどうってことはないけど、新人漫画家の応募が少ないのは困る。君も早く連載持って単行本を出そう。印税が入ったら、オスメス共催の養豚的ファッションショーを開き、記念写真を撮ろうじゃないの。　（'89・10）

大公開！　エロ漫画編集者界のケンカ相姦地図。

十人十色とはよく言ったもので、「あれほどの人格円満人間が…」と思う人が、意外な人を毛嫌いしているのが世間ですが、エロ漫画界とて同様。特に編集者側にのみ限定してみると、その感はより深まります。

『ロリタッチ』を読んでた方なら、阿宮美亜VS中森ばぎな、江本明宏VSくらむぼん&あだちけん等、漫画家同士のケンカは、結構見たと思います。誌面をメインに繰り広げられる漫画家間のケンカは、全国津々浦々まで有名になってしまいますが、隠し立てのない感情のぶつかり合いは、どこかスカッとした明るい一面を持つのも確か。

一方編集者同士のいがみ合いは、陰湿なことこの上なく、「ンなことを根に持つなヨ！」というささいなことを理由に、何年にも渡って、大の大人が火花を散らしているのが普通。「えっ、あの編集長が…？」と、全国の読者がビックリしてしまう、〃エロ漫画編集者界ケンカ相姦地図〃を、今回は大胆に非難の嵐を予想しつつ公開したい（ひひひ、誰彼なく嫌われ、捨てる物のない筆者ゆえに出来る独占スクープざんす）。この種の低俗な話題が好きな人、『アットーテキ』（毎月7日発売・520円）に連載中の、筆者の「嫌われ者の記」も御併読下さいませね。

『ホットミルク』の斎藤O子編集長といえば、温厚をペンと丸メガネで描いたような女性、と一般には思われてますが、やはり生身の人間。「ケッ！　あんな奴!!」と思ってる相手が、この業界だけで2人もいるんです。驚きますねえ。一人目の「ケッ！　あんな奴!!」は、筆者も世話になっている、『アットーテキ』の多田在良編集長。

筆者の調査によれば、7～8年前に白夜書房（当時はセルフ出版）が出していた、『漫画ブッチャー』というエロ劇画誌の主催で、エロ劇画誌編集者の座談会が開かれた。そもそもの原因は、この時までさかのぼる。当時はまだ副編的存在だったO子さんは、この時お茶や食事の世話をかいがいしくなさってた。そこへ、デケーツラしてやって来たのが、『漫画チャタレイ』編集長だった多田在良。よせばいいのにこのタコ野郎、「斎藤さんて、編集のアシスタントと・・・・・・しては業界一だね。編集長になって失敗するより、今のままが一番いいんじゃない。ガハハハハ」（何たる女性差別!!）。

O子さんにとっての2人目の「ケッ！　あんな奴!!」も、実は筆者の身近に。何と、毎日社で机を並べて仕事をしている、『キャンディコミック』や『ホットパンツ』編集長の、カーマスートラ吉田おばさんなんです。O子さんと吉田おばさんが最後に酒席を共にしたのは、確か昨年春だったと思いますが、そん時も異様でしたよ。

その日は無事に一次会を終え（場所は高田馬場）、二次会へと相成った。人数も5人に減ってたので、その居酒屋の6人がけのテーブルに皆で座った。ところがO子さんは一人で、他のテーブルに腰かけたのです。「どうしたの斎藤さん。こっち来たら？」他の者が言うのですが、「うん、いいの、あたしこっちで」と、言葉はおだやかなものの、テコでも動こうとしない。

他の者は全員「？」でした。だが、筆者にはその理由が分かっていた。吉田おばさんと斎藤さんは、それまでも何度か酒席を共にしています。読者は知らないでしょうが、酒が入った場合のカーマスートラ吉田おばさんの展開は、以下の通り。［第1段階］普段は割と無口だが、ビールの2本目あたりから、急にジョーゼツとなる。しかも話題は下ネタ専門。つまりワイ談の鬼と化す。［第2段階］〃カラオケのマイクと、そりのいいチンポは吉田おばさんに見せるな〃との格言が、㈲遠山企画にはあるくらいのカラオケ狂。しかも、踊りつつ唄いまくる。一度徹夜でつき合わされた人間は、3カ月はその苦痛から逃れられぬとかで、〃90日殺しの吉田〃と呼ぶ人さえいる。

O子さんもカラオケ狂なので、［第2段階］は問題外。つまりは、［第1段階］の余りに生々しい吉田おばさんのワイ談が、地方の素封家の娘として、厳しいしつけの中で育ったO子さんには、耐えられないらしい（吉田おばさんも地方財閥の箱入り娘。同じような環境下で育っても、人間の趣味はかくも異なってしまう。ホントに面白い）。

もっと面白いのは、嫌われる側にはその意識が全然ないこと。タコ多田は、「そんなことあったの…？　けど仕方ないなあ。ンなに嫌われてんじゃあ。そういや、『ホットミルク』に描いてる漫画家の電話番号聞いても、結構冷たかったなあ…」てな調子。カーマストラ吉田おばさんはこうだ。「嘘でしょう。また塩山さん得意の

デマを飛ばして、火のない所に煙を立てようとしてんでしょ」
すぐすねるタコ多田、チョイ自信家の吉田おばさんという、それぞれの個性の違いが反応に出ていて興味深い。僕がO子さんに直接尋ねたところ、「多田さんのあの一言は、一生忘れませんよ！」と、キツーイ回答が返って来た。よほど腹にすえかねたに違いないが、こういう怒りは案外つまらぬことで氷解、逆に仲良くなったりする可能性も？（今の所そんなきざしはミジンもない）
逆に、国交回復は絶望的と思わされたのが、吉田おばさんへのO子さんの反応。「そんなことあった？ 私、吉田さんのこと全然嫌ったりしてないですヨ。パワフルな人だなあって、尊敬してるくらい」「………」並の反目ではないことが、一見はメロウなこの発言で、お分かりいただけたかと思う。別にO子さんを偽善者扱いするわけじゃありませんが、ウンコをクレープで包んだような反応と言えなくもない。
愛が人と人とを結ぶプラスの鎖であるとすれば、嫌悪の感情は、マイナスの鎖と言えるかもしれません。こればかりはプラスが良い、マイナスが悪いと単純に割り切れません。プラスとマイナスが白菜や竹の子の役目を果たしつつ、中華丼の大盛りみたいな、世間とやらを形成してんですから。
O子さんに嫌われている多田にも、嫌いな編集者がおるんですな。司書房の岡野雄一センセ。かつて『ルナ』とかいう、A5判のロリコン漫画誌の編集長をなさってた方。これをタコ多田が嫌うこと嫌うこと。「今日の宴会、岡野さんが来るヨ」と言うと絶対に来ませんし、ある時など彼の参加を知らずに飲み屋に来て、イチベツするなりサッと引き返したくらい。
理由は、互いがハゲ同士だから〝近親憎悪〟だろうというのが、世間一般の評価でした。一時は僕もそれを信じていたのですが、某日、「アッ!!」という事実に気づいた。というのもこの岡野センセ、〝業界一の女ハゲ〟と呼ばれる、かのカーマスートラ吉田おばさんとはムチャクチャ仲が良く、一時は同人誌さえ出してたくらい。「同じハゲでも、男女の仲となると引き合うのか？」と、一時は深刻に考え込んだりもしました。ともあれ、斎藤O子さんが、この岡野についてはどう思ってるのか、今度ジックリ尋ねてみます。
（'89・12）

三条友美が編集の奢りで、吉野家の牛丼の大盛りをお代わりしてた頃。

三条友美センセといえば、エロ劇画家の代名詞的な存在ですから、劇画嫌いの本誌読者も、名前くらいは御存知のことと思います。今でこそ『三条友美全集』は出ちゃうは（しかし、これはいいかげんな全集。〝全集〟がハッタリなのはまあ許せるとして「手塚治虫だって、本来の意味での全集は出てませんしネ」、ただ昔の単行本をA5判化しただけで、各作品の初出はおろか、どの社のどんな題名の単行本を、どの巻に収めてんのかなんてことまで全くのスッポカシ。B6判の菜美シリーズでガッポリ儲けてんだから、もちっとまともな〝全集〟とやらを編集して上げて下さいよ、ミリオンさん！）、エロ劇画家としての最高ランクの稿料を稼ぐはで（多分、最低でもページ1万円くらい取ってるだろう）、飛ぶ鳥を落とす勢いのセンセですが、つい7〜8年前までは、ページ3500円くらいの、一ルンペン新人エロ劇画家でした。
今はブヨブヨと肥り、ミニ小錦みたいなセンセですが、当時はスリムな体に黒ヅクメなファッションが決まった、故澁澤龍彦気取りの大学生でした。その大学とは、本誌連載陣のかおる（日本大学）、あだちけん（流通経済大）、くらむぼん（旋盤工員大学）といった

駅弁大ではなく、中央大学法学部という毛並の良さ。ただとうに司法試験はあきらめた、落ちコボレでしたが。

彼がデビューしたのは、既に倒産したレモン社（〝レモン〟は本当は漢字。辞書を引くのがメンドなので、これにてゴメン）から出ていた、懐かしの『漫画大快楽』（30代の漫画好きには忘れられない雑誌。能條純一やいつきたかしが描いていたこの雑誌、一時は10万部前後出てたらしい。今の『漫画ローレンス』や『ペンギンクラブ』には負けますが）。

投稿がスタート。当時、同誌の編集部にいた小谷哲（『漫画大快楽』→倒産→下請けEUオフィス設立→『漫画カルメン』、『漫画ピラニア』→廃刊→EUオフィス解散→現『漫画エンジェル』編集長）の特訓を受け、在学中にデビュー。同時に『漫画エロトピア』にも時々執筆。新人で原稿料も安かったせいか、『エロトピア』編集部の紹介で、すぎうらあきとのアシストを経験したりもした（このすぎうらに関しては、後に本欄でも取り上げてみたい。とにかく奇人であった。でもまだ死んだわけではない。噂では、双葉社あたりで、チョロチョロ仕事もしてるとか。何しろ、漫画家をする傍ら、ソープの従業員になったり、柄谷行人の影響を受けたとかで、〝群像新人賞獲得宣言〟を各編集部でぶち上げたり、アイシャドウや金粉まぶしたツラでゲンコ持って来たりで、なかなかの個性派であった）。

僕が初めて会ったのは、すぎうらのアシストを辞め、学生エロ漫画家として自立しようとしていた頃。同じ遠山企画で、『スーパーコミック』の当時の編集長だったS（中大法学部のセンパイだったりした。5〜6年前に足を洗い、正業に就いている。彼の後輩編集長が、カーマスートラ吉田おばさん）が、「2〜3カ月に一度なら、もう一本くらい描けるってから、『漫画バンプ』あたりで使ってやったら」と言って来たため。『スーパーコミック』には、一年程前から描いてたようだが、当時の彼の絵は、相当にすぎうらあきとの影響を受けた、良く言えばアクチュアルな、悪く言えば青クサ〜イ、とても今ほどの〝商品価値〟がある物ではなかった。

原稿料も安く、当時Sが、「今度稿料を４５００円にしてやるったら、〝これでノリ弁じゃなく、焼き肉弁当が食べられます〟なんて狂喜してやんの。可哀想だから打ち合わせの後で、吉野家の牛丼奢ってやったら、お代わりすんだもん。先輩としては、複雑な気分よ」と言ってたくらい（今彼の住む高級マンションには、映像関係のメカでないものはないと言われる程のリッチ振り）。

初めて会ったのが、神田小川町の筑摩書房の近くにあった、「ロビー」という喫茶店。画風とは異なり、やけにオドオドとしていた。打ち合わせが終わるなり、彼はトラの子を豊田商事のセールスマンに託した未亡人みたいな顔をして、僕に念押しをしたもの。「お願いします、塩山さん！　長い眼で見てやって下さい。一度や二度、つまんないの描いたり、手抜きっぽくなっちゃう場合もあるかもしれませんが、切ったりしないで下さい。次には、絶対にその何倍もいい作品描きますから。お願いします！　長い眼で見て耐えてやって下さい。打ち切りにしないで下さい!!」

他の客さえいなければ、涙さえこぼしそう。「わ…分かった…」とは言ったものの、考えれば妙な奴。一度も仕事をしないうちに、連載打ち切りのことばかり心配しているエロ劇画家なんて、初めて。が、「ひょっとするとコイツは…」という、期待も生まれないではなかった。これは今も変わってないが、エロ漫画家の条件はたった2つ。①女に縁がないこと（エロは想像力である）。②自分の性格と絵へのコンプレックス（両者への自信過剰くらい、読者に嫌われるものはない。自信よりはコンプレックスの方が、絵の成長もうながす）。つまり世間と違い妙な才能より、凡人の地味な努力こそが、案外ストレートに報われるのが、エロ漫画の世界なのだ（編集者も同様）。そして今。「あ…あの、さ…三条先生のお宅でございましょ

うか？」「そうだけど」「あ…あの、三条先生は!?」「俺だよ。あんた誰。ゴルフの会員権ならいらねえよ」「あ…あの、その、ごぶさたしております、遠山企画の塩山ですが…」「ああ、何だ、塩チャン。何か声変だねえ。何の用!? 今俺、『劇画スペシャル』の追い込みで忙しくてよ。後にしてくんない…」「そ…そこを何とか。もう3年も仕事してもらってないので、1回だけ何とかと…」「ったくう、安いんだもんお宅。俺だって商売だしね」「そ…そこを先生…」

('90・2)

持ち込み無名新人漫画家のあきれ果てた誇り高き精神について。

病死、自殺、行方不明、廃業、転業等が相次いでいる、落ち目のエロ劇画家はともかく、ロリコン漫画家は外人さんを雇いたいくらいの慢性的描き手不足ですから、どの雑誌の編集部も、「新人漫画家募集!!」のコピーを、パチンコ屋の店員募集広告よろしく、雑誌のあちこちに散りばめてます。が、パチンコ屋の広告がほとんど効果がないのと同様、その反応たるや実に微々たるもので、たまに投稿が来るや、「これで2人不足してた次号も、半分埋まるゾ!!」などと一瞬は狂喜するものの、数秒後の編集者の心たるや、なますのように切り刻まれ、サンタンたる状態になっているのが常。

〃便所の落書き〃というヒユがあります。編集者同士が飲み屋などで交わす、「く○ら○む○ぼ○ん、か×お×るなんつのはよ、漫画なんつーシロモノじゃねえぜ、おい！　昨日も会社のトイレの壁にく○ら○むのゲンコが一枚貼りついてやがんの。〃誰がこんな所に？〃と思ってよく見たら、ただの落書きでやんの、ガハハハ」といった罪のない陰口の中に、よく登場する言い回しです。

数々の下手糞漫画家に慣れてるはずの編集者をしても、投稿原稿の9割は、「まだ便所の落書きの方が…」と、ため息をつかざるを得ぬ状態。しかも、その象形文字もどきのインク模様（〃漫画〃と呼んでは、この言葉が余りに可哀想なので）の抽象度が高いほど、なぜか投稿者の知能程度は低く、態度だけはぽいんと☆たかしセンセのキャラの巨乳並というのだから、今度の選挙結果以上に世界の恥さらしで、日本にはモラルという言葉はないんですと、思わずフランス人に頭を下げてる、エコノミックアニマルな僕でした（少々の文脈の狂いに目ジラミ、いや、目クジラをボッキさせるタイプの赤まむしドリンク人間は、これ以上読まないチンゲール。けど、『おぼっちゃまくん』て何であんなに面白いの?）。

本人はもう、完全に採用されると確信してる。これが郵送の場合は、点丸もろくに分かっとらん手紙は即破り捨て（俺にンなこと言わせるようじゃあかん）、同封されたインク模様ゲンコやコピーは2つに裁断、裏をメモ用紙にするという、省エネ活動に務めれば一件落着ですが、問題なのは生身の本人がズカズカ押し売りまがいに来やがる…おっと、御原稿を御持参をば御あそばば茶そばられたバヤイ。

「カスめ！　このゲンコのどこが漫画だっつーのヨ。こんな早稲田速記（まだあんだろうか？　60年代のこの社の全国の少年少女への練習メモ持ち込みやがって！　タイムイズマネー。こちとら、忙しさとビンボだけがとりえの下請け編集屋なんじゃい。とっとと帰らんかい。それとな、事務所の近くにゃ深い川も流れとるし、後楽園に足をちょっと伸ばしゃ、枝振りのいい木はようけいあるけん、飛び込むなりぶら下がるなり、好きにせいよ。JRは止めといた方がええ。高架になっとるけん、飛び込む前に向こうが急停車しかねん」と、本心ではのたまいたいんですが、グッとガマン。「ウ――ム！　描写、アングル、構成、コマ割り、どこをとっても個性的だね。ネームもグッと来る

ねえ。ウーーム。けどね、うちみたいなただのエロ漫画誌にゃ、君はもったいないよ。これだけの個性を無理して殺し、く○ら○むとか、か×お×るみてえな白痴ドエロ漫画描いて、青春棒に振るなんて。もっと、目標を大きく持てよ。メジャータイプだよ、君は。コーダン社とかシューエー社に、目標を絞り変えなさいよ。君なら出来るよ!」(く○ら○むとか、か×お×るの部分に、真△弓△大△介の名前がなぜか登場しませんが、別にこれには他意があります。真△弓センセ以外は、サラリーマンの副業にエロ漫画を描いてる方。プロになろうという気はない。またメジャーの大変さと、エロ漫画界の相対的な気楽さもよく知っている。ですから、少々の悪口を言われても、サラリーマン的処世術で、グッと耐えてくれちゃう。もっとも反抗しようものなら、僕は両名の会社に副業にうつつを抜かしているからクビにしろと、密告してやりますが。脅迫編集者だって…!? その通り。親に隠れて仕事してる十六女十八女センセが、休みをくれと言った時もその手を使った。ウシシシ。何の話してたんだっけ? おっとそうだ。真△弓△センセを特別扱いしてる、内部事情の説明だった。青森の僻地で仕事にいそしんでるセンセのバヤイは、"脅迫のネタが今のところ一つもない"だけなの。何しろオイラ、まだ一度も御尊顔を拝したことさえねんだもん。おまけに秋田書店だ、『リイドコミック』だ、ワニマガジンだ「ここのヤマザキ君に真弓センセを紹介しちゃったのは、今となれば失敗だったのかな。でも、真△弓センセ本人のためには良かったんだからいいや。その後に、く○ら○む○ぼ○んなんつう奴の電話番号を、無礼センバンな態度で尋ねて来た、同じ社のシマオ君元気? ヤマザキ君に礼儀作法を学びなさい。僕自身は相当に礼儀知らずな男だが、他人に関しちゃ礼儀正しい奴が好きなのさ」と、どう見ても、うちより銭出しそうな版元が争奪戦を繰り広げてるもんで、ついコビ売っちゃうんだよ。こういう態度ってのは問題。く○ら○むとかか×お×るにゃ、従来も今も大いに世話んなってる。真△弓センセの数倍になるよ、月日を考えれば。矛盾してる。ちっと大きな社に注目されてる漫画家が出たからって、恩を忘れるような奴は中曽根でありますよ。顔見たことねえから脅迫のネタが見つからねえなんつのも、俺らしくねえ。ちょっと甘やかしすぎたなっつんで、次号にセンセは巻頭カラーで登場させて、苦しめてやりますぜ。それはともかく、今回はアラン・レネの映画のようにわけが分からなくなったけど、なぜか本話題は次号に続くヨ)

('90・4)

成金エロ劇画家、あるいは、ロリコン漫画家の、つかの間の満たされた日々。

最近一番笑ったのは、例のM事件に対して、ビートたけしが『週刊文春』と共に、御用週刊誌の雄である『週刊ポスト』で、"被害者が俺の娘なら犯人を殺してやる"ってな、ハッタリをかましていたこと。バカヤロー、人畜無害な講談社の『FRIDAY』如きへの殴り込みでさえ、自らのデッチまがいの一族郎等を率いねば乗り込めなかった小心者が、粋がんじゃねえ(例えば相手が、三一書房とか日本教文社とかの、左翼、右翼の筋金入りの編集部員でもいそうな出版社ならまだしも)。だいたいコイツ、近頃は芸能界の細川隆元ヅラしてるが、昔は好きだっただけに、そのアホぶりにはホントむかつく。どうせならたまみてえにこちらが幻想を抱かぬうちに、公害企業(川崎製鉄)のCMに出て、自らの程度を示してくれた方が助かる、というような話は本欄には向かないし、しかも前回の結びの、"なぜか本話題は次号に続くヨ"とは皆目つながらない。つながらないと言えば、新しいビデオ買ったのはいいけれど、ちっとも配線が分かんなくてウンザリ。

要するに、メカオンチの俺には過ぎた機種を買っちゃったんだ。買う前に相談した相手が悪かった。無名時代に編集者に吉野家で牛丼を奢られたら、大盛りをお代わりしたエピソードで本欄でもおなじみの、エロ劇画家の三条友美センセだ。「塩山さん、今まで何んだったっけ？」「ベータで東芝のビュースター。8年くらいたつかな。近頃タイマーがいかれてさ、2時間の映画録画すっと切れちゃうの、途中で。ＶＨＳは〝ビックカメラ〟で5年前に買った、4万円のシャープ。ったくダメだよな、ここのは。娘のアンパンマンのビデオくわえ込んだまま、ウンともスンとも言わねんだよ」「ガハハハハ…。この際だからさ、グッといいの買おうよ。14万弱で三菱ＨＶ―Ｖ１０００てのが買えるからさ、これにしようよ。最高だよ、今出てるＶＨＳじゃ」「けんど、秋葉行くのめんどだしなァ…。センセはしょっちゅ行くんだろ。銭やっから買ってよ」「いひひひ…ダメだよ俺忙しいし。そうだ。通信販売にしよ。着払いにすりゃ安心だし。俺申し込んだげるよ」「通信販売…大丈夫？」「大丈夫だよ。そこ店もあるし。〝ディスクマップ〟がいいな。金用意しといてね。じゃ！」「あ…あの…」

　で、数日後に宅急便屋さんが届けてくれた。通信販売でこんな高価な物を買うのは初めてだったので、「香港あたりで製造した模造品じゃないのかナ」とか、「手を触れるなり、バラバラっと壊れちゃうんじゃ？」とか色々心配したのですが、ちゃんと保証書入りの製品が届きました（店のハンコが押してなかったけど）。数時間に渡って頭を悩ませた末、79年製の14型日立カラーテレビとの接続に成功し（この11年前のテレビ、スイッチ部分が3カ月程前に壊れたので、近所の電気屋さんに持って行ったら、５８００円で直してくれた。ありがとう電気屋さん！）、何とかその日に深夜放送した、ハッタリじゃビートたけしにも負けない、吉田喜重監督の『水で書かれた物語』の録画に成功。翌日、再生してみる。いやー、キレイ。さすが13万３６９０円！　が、画面の下に白いホコリ状のものが数ミリに渡りチラつき、映像がゆがむというか、流れてる感じ。「!!」

　何本録画してもこれ。昔のＶＨＳで録画した物まで汚れが出る始末。三条センセに電話。「へ――っ。やっぱし、三菱のＨＶだけはやめよっと！」来週、三菱サービスセンターの方が修理に来るそうですが、どうなることやら。にしても、編集をモルモット扱いする三条センセも、とんでもないヤロー。彼は元々、用心深い所がありますがね。北海道の炭鉱街、夕張の生まれで、学生時代に生家が炭鉱不況で倒産。仕送りのストップ等で色々苦労をした末に、中大法学部を卒業した玉ですから、編集をペテンにかけるくらいは朝飯前。しかも彼、倒産した生家の面倒も見てるというから立派。ただマヌケな所もあって、先般の株の暴落で、３００万ほどすったそうです。『三条友美全集』数冊分の印税が消えたわけですが、ＳＭで得た金を株でする、これまた一つの人生でしょう。

　三条センセの生家の商売はマーケットでしたが、目黒の帽子屋のセガレが、まいなぁぼぉいセンセ。同人誌界のドン、ロリコン漫画界の御意見番とも称される業界の長老で、三条センセ同様、ＳＭ漫画には並々ならぬ興味を抱くマゾ男です。一方、なかなか義理堅い所もあって人望が厚いのですが、そのためにはまったのが、〝国家的サギ事件〟と人が呼ぶ、ＮＴＴ株のドロ沼。明大時代の友人が証券会社に勤めていたため、無理矢理買わされた一株２５５万ナリの物が、昨年処分する時にはたったの１４０万。１００万円以上損したわけで、８００円前後の単行本、約2冊分の印税がパー。どうも一時、まいなぁセンセが馬車馬のように働いてると思ったら、こんな笑い話が裏に潜んでいたのです（人間、欲張るものではありません）。

　ＳＭ派は株でするのが得意のようですが、もっと陰気なお金との交際をする漫画家も多い。〝ただただ貯金するだけ〟というのがかお

る、真弓大介の両センセ。かおるセンセ、普段はサラリーマンだし、週末は漫画家稼業で、使う時間がないのです。『コットンクラブ』、『ロリタッチ』、『エロトピア』、そして本誌と売れっコの真弓センセも同様。そのうちに証券会社の魔手が伸び、スッテンテンになるのを祈りましょう。おっと、一人忘れるところだった。旅が趣味なのが、くらむぼんのヤロー。しかも彼、四国に住みながら東京の、自分が仕事をしてる出版社の周辺を、カメラ持って散歩するのが好きというのですから異常。遠山企画、コミックハウス、東京三世社等は全てカメラに収めたとか。おい！　まだ矢来町に行ってねえだろう!?

('90・6)

「君が代」を斉唱しつつ、「大集英社帝国」に全てを捧げる少国民の真情をば見よや。

根が謙虚な性格のためか、僕は他人への誹謗中傷は大の苦手。当然、日常会話ではもちろん、人様への悪口を活字化するなんて、まずあり得ないが、ンな気弱な僕チャンでも、人間の業というか、ついつい誘惑に負けて、グチというか悪口を洩らしてしまう場合も。先日もそう。その時のま～のヤロとの会話をここに再録、以降は誘惑に負けぬよう、自戒の手本とする所存です。

塩「あのよ、俺ってしつこい性格か？」**ま～**「SEXは淡泊ってっか、弱いって聞いてますが」**塩**「……。まあ、確かにしつこい方かもしれねえが、何もあの〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟に、ンなこと言われる覚えはねえよなァ」**ま～**「〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟って、あの、真弓センセの連絡先を教えろって、しつっこく無礼な態度で聞いて来やがった…」**塩**「そうよ。そのクマガイのガキが、テメーの所の同人誌の集まりでほざいてんだってよ。へへ、俺も確かにしつけえが、ヤツの厚顔無恥振りに比べりゃ屁のようなもんだって」**ま～**「けど〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟て、厚顔無恥ってっか、単にマヌケなだけじゃないですか。うちに2回も電話寄こしたんでしょ」**塩**「笑っちゃうよな。〝お前らこっちが聞く時にゃ教えねえくせに、図々しく見下した態度で、下請けエロ本プロダクションに、しかもタダで金の成る木の漫画家の電話番号なんか聞いてくんじゃねえよ、このカスっ!!〟てな対応取られたくせに、一週間後にまた、〝『エロトピア』の編集部お願いします〟なんて、マヌケ電話寄こしやがって」**ま～**「真弓センセ、『エロトピア』にも描いてますからね。でも塩山さん、〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟がマヌケでも、誰でもする電話番号間違いをネタにいじめんのは、大人気ないんじゃ…」**塩**「そりゃそうだ。〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟、ゴミンゴミン。けどあのヤロの厚顔無恥性しつこさは、それにとどまんねんだよ。羅美亜企画の中山天子が『ロリタッチ』にコラム書いてんの見て、アソコにもまとわりついたらしんだ。〝…そういえば『ヤングジャンプ』の熊谷氏は羅美亜企画にも「塩山さんに作家の住所を教えてもらってくれ」との電話を入れていました。「是非、執筆したい。いや、させて下さい」と熱望するヤング誌の編集者も、ここまであからさまに恥も外聞も捨てている様子はどこか物悲しいモノが〟（『ロリタッチ』8月号）てなこと書かれてるしナ」**ま～**「2カ所くらいは、マヌケな〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟でなくとも…」**塩**「まだ終わりじゃねえの。奴は『SCREAM!』なるエロ同人誌の代表もしとるわけだが…」**ま～**「一流出版社の花形編集者が、ンな裏漫画本編集して、無税の大金荒稼ぎしていいんすか？」**塩**「ンなのは個人の自由だろが。それよか黙って聞かんかい。今度俺、〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟のもう一つの顔でもある、彼のエロ同人誌関係の漫画家を使うこと

になったんだよ。そしたら懲りずにクマガイの馬鹿、そいつにまた〝真弓センセの連絡先を塩山さんに聞いてくれ〟とか言ったらしいんだよ。今後は〝蛙のツラに小便〟を、〝クマガイのバカヅラに小便〟に変更せにゃならんな」**ま〜**「当然拒否したんでしょ」**塩**「ウーム。その新人漫画家にゃ悪いとは思ったけど。何しろそいつ、クマガイのカスにンなこと頼まれたもんだから、菓子折りまで持ってペコペコ…。失業中だってのに」**ま〜**「でもその菓子折り、きっと〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟が、経費で落として…」**塩**「俺もそう思ったんだが、そいつの身銭だってよ」**ま〜**「失業中の人に、そんなことさせるなんて、クマガイ君も案外…」**塩**「それだけじゃねえの。最近は同人誌の集まりで、〝あの『ロリタッチ』は必ず俺が廃刊にしてやる‼〟って豪語してんだってヨ」**ま〜**「そ…そりゃヤバイじゃないすか。何しろ相手は、〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟ですよ。集英社は、大手取次や書店にも絶大な力を持ってますからねえ」**塩**「けどよ、これは〝『ＳＣＲＥＡＭ！』なるエロ同人誌で無税の金を大儲けしてる、某大手出版社のクマガイ君の私的発言〟だから、それほど気にすることは…」**ま〜**「甘いすよ。閣僚の靖国神社参拝とは、わけが違いますよ。ンな楽観的なこと言ってると、『ロリタッチ』ばかりか、『レモンクラブ』まで〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟の圧力で…」**塩**「そしたら、うちの娘の幼稚園の月謝はどうなんだよ？」**ま〜**「僕は知りませんよ、そんなこと。長い物には巻かれろって、日本の誇る名言があるでしょ。今後は、大手エリート編集者の言うことには、一切反抗しないことすよ。いいじゃないすか。漫画家の電話番号くらい…」**塩**「やっぱりそうか…。分かった。俺も今後は考えを改めるよ。以降、こういうありがた〜い〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟階級の人からのお電話をいただきましたら、直立不動、国旗掲揚、君が代を斉唱しつつ、お電話番号をば教えさせていただきます！」**ま〜**「……。だめすよ、あんまし敵つくっちゃ。寂しい老後をすごすことになりますよ。読者の皆様、僕は8月いっぱいで辞めますが、『レモンクラブ』や『ロリタッチ』が、〝集英社の『ヤングジャンプ』のクマガイ君〟の圧力で廃刊にならないうちは、読んで上げてください」**塩**「2度と帰って来んじゃねえぞ！」

映画『バタアシ金魚』はなかなかでした。が、何カ所か使われていた、スローモーションやストップモーションにはガックリ。何でああいう真似すんだろ。作品がすんごくチャチく見えんだよ、小手先のテクニックは。これ1本であとはカスカスってなことにならないと良いですね、あのドジョーヒゲ監督も。ところで、デビッド・リンチの『ツイン・ピークス』のビデオ、どこでもなぜレンタル中なんだよー！　今、女房も娘も帰省中で、一番鑑賞時なのに——‼

（'90・10）

塩山は本当に新宿の「三平酒寮」での宴会で、財テクをしているのか!?

貧乏暇なしを絵に描いたような、下請けエロ漫画編集者が筆者の職業ですので、当『レモンクラブ』の他にも、僕とやくる〜とと、ひろの塩山班は、3人で4誌もエロ漫画誌をデッチ上げてます（つまり、3人で月に5誌。業界でも屈指の〝量的記録〟「質的記録と言わない謙虚さに注目」です）。4誌のうち、『漫画バンプ』、『漫画エキサイト号』（あの〝燃える反共エロ漫画家〟阿宮美亜の、唯一の連載誌）、『漫画スマック』の3誌は、俗に言うエロ劇画誌なので、本誌読者に縁があるとは思えませんが（と思って、本誌でかつて『漫画バンプ』で使用したおおぬま・ひろしセンセの原稿を再録したら、何人もの読者に一発で見抜かれた…テヘヘヘ）、残る『ロリタッチ』は、そのイカレ振りで知られた存在なので、結構読んでる

方も多いと思います。
今まで4年とチョット、僕が編集長しとったんですが、11月26日発売の1月号を最後に、編集長がカーマスートラ吉田おばさんにバトンタッチすることに。というのも、本誌が1月13日発売の2月号から、毎月出ることになりましての。今までは月に5誌ゆうても、本誌のみ隔月だったので、実質は4誌半だったわけ（といっても本誌の出ない月に、今発売中のあだちけんセンセの初の増刊号『いけない女教師』［B5判・330円］や、真弓大介センセの初の増刊号『天国少女隊』［B5判・330円・12月13日発売予定］を編集してるので、実質はとうに5誌体制）。これで『レモンクラブ』が正式月刊になったら、名目5誌、実質5誌半になっちゃう。そうでなくとも近頃のオイラ、高血圧でクラクラ。このままじゃカストリ雑誌時代からの古老編集者である、㈲遠山企画の遠山孝社長より先に死んじゃうと、ちょうど『ホットパンツ』の廃刊で、やや手のあいとった吉田おばさんに、『ロリタッチ』の面倒見てもらうことに（余りにも小さな有限会社内の問題で、読者に関係ないと僕は秘密にしとった。ところが吉田おばさんが、『ホットパンツ』でバラしたもんだから、来ましたよ、業界ゴシップマニアのハガキがワンサカ。一番多かったのが、〝吉田おばさんに『ロリタッチ』を奪われて、塩山さんは引退ですか?〟とか、〝ここまで落ちた『ロリタッチ』は、吉田おばさんでも再建不可能〟という、わけの分かんないヤツ。オイオイ、ゆうとくけど、『ロリタッチ』はよく売れとるんよ。正直なとこ『レモンクラブ』より3分ばかり、高定価なのに返品が良い始末。だいたい、〝男〟が売り物の塩山が、落ち目の本を後輩に押し付けて、目腐れ金に転ぶとでも思うとんのかね。俺は大島渚や野末陳平とはちゃーゆよ。そもそもンなに売れねえ本が、いつまでも『ロリポップ』や『コッペパン』、『キャンディコミック』なんかと同じ運命にならず、ダラダラ出てるわきゃない）。

それはともかく、L資金（〝ロリタッチ資金〟の略称。「同人誌キャッチ」宛に送って来た同人誌や、資料に買った単行本等がたまると売り払い、それを元手にしたエロ漫画家、編集者による宴会資金。『アナザーマニアック』［日本出版社・880円］がバカ売れしているくらむぼんのヤロ、いや、くらむセンセのように、人格高潔な方になると、自分の単行本が出る度に、1万円も寄付してくれる。他の漫画家も見習うように。この資金の経理担当者は、不肖この塩山ですので、時々水道橋駅前のパチンコ屋、「丸十」の「ドッキンマン」に注ぎ込んだり、新宿の「吉野寿司」でトロ食べたり、娘と蕨の「イトーヨーカ堂」の屋上のゲームコーナーで遊んだり、「西川口テアトルミュージック」でストリップ観たりのためには、1円たりとも流用されてませんので、御安心を）による宴会が、10月15日の夜、新宿「三平酒寮」の3階で久々に開かれた。この資金のおかげで、参加費1000円で飲み放題、喰い放題、女性参加者の尻は触り放題、との幹事である筆者のプロパガンダが効いたためか、雨にもめげず、ゾロゾロやって来ましたよ（人間て、ホントにあさましいもん。それと、来年からのL資金は、『ロリタッチ』資金じゃなく、『レモンクラブ』資金の略称になりますのでヨロシク。↑誰に言ってんの?）。
以下が、全出席者の御芳名。まいなぁぼぉい（L資金宴会界の最長老。どこでいつ開かれようが必ず出席、イカ刺を玉子焼きで巻いて食べている）、そのまいなぁセンセの名前不詳の友達漫画家（聖徳太子にやや似た30男。70年代にはこういうルックスの男が持てた）、DONKEY（最近、筆者があまり〝DON助の落ち目、ヤ～イヤ～イ〟と言うので、内心ムカついている。まいなぁセンセによれば、人への恨みは、毎日ノートに記録してるとか）、すている88（昨年の年収は200万。これで夫婦でアパート代も払って、東京で生活してるのだ。ちなみにその年収額は、くらむのヤロが最近

キャッシュで買った新車の約半額）、その女房（クッソー！　何とまだ20才。結婚は18の時だそうな。へっへ、金権くらむよ、いくら高級車でもＳＥＸは出来んだろう。人間金ばっかじゃねえ、へっへと、俺が威張ってどうすんのよ、シクシク）、二本柳俊馬、池本浩一（通称バカボッチャン）、中山天子（太腿美人。池本浩一の羅美亜企画は、彼女の太腿が支えてるとの噂）、忍野しのぶ（美少年。その割に女に縁がない。手抜き漫画の達人）、やくる〜と、ひろ、ゆ〜ま（吉田おばさんは休暇中で欠席）、あとオイラ。

酔っぱらいは十人十色と言いますが…と何か書こうとしたけど、全然思い出せない。何せオイラが一番悪酔いしたもんで。自宅近くの公衆便所の鏡で顔見たら、青アザ、腕にはひっかき傷も。要するに、酔っぱらった振りして尻に触らんとして、すてぃるの女房、天子女史の逆襲に会ったのだ。仕方なくジーパンにわざと泥を少し塗って、女房には「そこで転んでますりむいてさァ…」と弁解しましたが、情けない夜でしたな。（'90・12）

俺達が生きてられるのも小学館と集英社のおかげです。

というようなわけで、業界は今日も明日もお先真っ暗（あえて書かなくとも、本欄を読んでるような方は、主語は御存知のはず）。秋口までの天国が、一挙に奈落。右を見ても左を見ても、一筋の光明も見えません。バブル経済の恩恵は、少しも授からなかった下請けエロ漫画編集者の私も、今の証券会社の営業マンの気持ちは、よ〜く分かる。そこへいきなり、僕担当のエロ劇画誌『漫画スマック』の廃刊決定。売れ行きは良かったけれど、例の動きの影響で、某コンビニルートを閉め出されたため。余りに急なため次の仕事も見つからず、バイトのひろ君をクビにするしかなくなる。この年の瀬に、あんなによく働いてくれてる彼をクビにするなんて、むごい話。下請けプロダクションは、こういう自分勝手なことをしては、生き残って来たのだ（日本の資本主義のダイナミズムとやらは、こういう二次、三次の下請けが安全弁役を買って出ては成り立っている）。余り広くもない顔を駆使、ひろ君の来年からの仕事を見つけようと、東奔西走の毎日。今のうちは他人の仕事を探すだけですんでるが、このままの状態じゃ、僕自身がデューダしなきゃならなくなるかも。あ〜あ、来年は上の娘が小学校、下の娘が幼稚園に入るってのに、情けない新年になりそう。〝下請けエロ漫画編集者生活15周年〟に、こんなプレゼントが用意されていたとは…。つくづく『ヤングサンデー』編集部の方々がうらやましい。大企業は少々の配置転換があろうと、高給が保証されてますからね。私らは、バイトのコをクビにして生き残る、吸血鬼みたいな人種。あ〜あ、この際だし、帰郷して野良仕事でもしようかなあ。いいキッカケかも。生き延びて、とはいえ、消費税込みで７万４３６９円の（これでたったの２ＤＫ。しかも公団!!）月々の家賃は支払わねば。お仕事お仕事。「忍野センセ。塩チャンです。今日締め切りなんだけど…」「あ…そ…そうですよねえ、確か」「客観的に語んなよな、自分のこと」「ど…どうも…。そ…それがですね、急に羅美亜企画のバカボッチャン、いや、池本さんの所から注文があって…。この調子だと塩山さんの所も３〜４日…」「テメー、電話だから肉体的暴力をダイレクトに受けねえと思って、寝言を真っ昼間からこくな。俺が怒りとかの感情を、時間差攻撃出来るタイプのヤロだって、知らねえわけじゃねーだろ？」「わ…分かってますヨ」「分かっちゃいねえ。バカボッチャンの注文だと？　小細工を弄すんじゃねえよ。仕事を縁に、この前のＬ資金の宴会で現物を見た、中山天子のアマでもコマそうと考えてんだろ、バカ!!」「い…いえそんな。決してそんな…」「もちっとう

まいウソつけ。あと3日だ。3日以上遅れたら、くらむのヤロに、お前と天子とバカボッチャンの三角関係をネタにした漫画を描かしたる。くらむは、バカボッチャンとはケンカ別れしてて、今でも因縁ある関係じゃけん、リアルなのを描くだろうぜ、へへへ」「そ…それだけは…」暗い表情で神保町に食事へ。よく行く「わいわい」で、330円の普通盛りカレーを食べようと思ったが（他店に比べれば普通でも大盛り以上の量）、これからは節約せねばと、もちっと先にある立ちそば屋で、かけそばを食べることに。途中に、小学館プロダクションの巨大なビルが。いいなあ。こういう立派な会社に就職出来たエリート人間は。私大の夜間部を勤労学生しながら出たワタクシなんぞには、雲上の方々（そんな方々の御活躍で、330円のカレーけちって、200円の立ちそばを食べるハメになるとはねえ）。帰りに寄ったディスカウントショップで、ちびまる子ちゃんのキーホルダーを400円で売っていた。上の娘がキーホルダー集めに狂っているので、思わず手に取りカウンターに向かったが、フッと我に返り元に戻す。ここで400円を遣ったら、何のために昼飯をカレーからかけそばにしたのか分からなくなる。今の俺は、2～3カ月前の俺ではないのだ。都落ち寸前で、〝ただ息をしているだけの業界歴15周年を迎えようとしている下請けエロ漫画編集者〟なのである——オーバーと思う人がいるかもしれない。そういう人は、この仕事を3カ月も続けてみれば良い。多分、「イラクの人質の方がまだマシ!!」と、絶叫しかねぬだろう。グッタリしながら、社に向かいつつ清掃局の先の橋を渡ろうとすると、今日の『日刊ゲンダイ』が落ちている。「ラッキー!!」これで80円の節約。よし、5日間は新聞を毎日ゴミ箱で拾うぞ。そうすりゃまる子のキーホルダー、娘に買ってやれる。ザマーミロ、とか何とか思いつつ、やっとこさ7セントラルビルにたどり着けば、ひろがニコニコ。クビになってニヤついてるとはアホな奴。やっぱクビにして良かったと思いを改めていると、「塩山さん、ありがとうございます。紹介された出版社に、昨日面接に行って来ました。その場で内定もらいまして…」「うん…あ、そ…そうか、そうだったな。そりゃ良かった。俺もクビにした手前、寝覚めが悪かったんだよ。で、給料はどのくらいくれるって？　まさか今までより悪いたぁ思えねえけど…」「それが、手取りで×万円もらえるそうで。ここと違って、年金、健康保険関係は全部完備してて…」「…………わ…かった。慣れないうちは大変だろうが、来年からは頑張れヨ」6文字分のリーダーには、それなりの意味があった。彼の手取り額は、業界歴15年で妻と2人の子供持ちの僕より、ほんの数万低いだけだったのだ（ひろ君は独身）。他のスタッフもボー然自失。が、これが世間である。災い転じて福となした彼のツキが、僕らにもめぐって来る日をじっと待とう。

（'91・2）

忘年会に露骨に出るエロ漫画家の株価、いや商品価値の変動。

どっかの落ち目ロリコン漫画誌（『マンモスクラブ』だったな、確か。↑この嫌味な表現がナイスです）のヨタコラムにも書いたけど、90年度㈲遠山企画の忘年会（12月26日の午後7時より、新宿「三平酒寮」の4Fで、会費5000円で行なわれた）で、余りに多額の黒字が出たため、参加者に500円ずつ返金する毎日。今時5000円の会費で黒字が出るなんて、その宴会のレベルが知れるが、1万円くらいなら当然、幹事の筆者が豪遊してチョンだったはずで、黒字幅がいかに巨額であったかがしのばれる（例の〝L資金宴会の常連参加者〟、つまり、DONKEY、忍野しのぶ、ITO YOKO、二本柳俊馬らには返金されず、L資金に強制没収された。また、「僕にも500円！」と手を出した、常連参加者のまいなぁ

ぼぉいのヤロにも、違う理由で返金されなかった。というのも、同じ日に開かれていた東京三世社の忘年会に参加し、遅れて来るはずだったセンセ、ビデギャル等も参加して華やかだったそちらの宴会に居続け、とうとう遠山企画の方には参加しなかったにもかかわらず、返金情報をキャッチ、素っとぼけて手を出したため。ホント、油断もスキもない連中）。

忘年会でひときわ目立ったのは、現役女子高生の菜摘ひかるの脇にピッタリ貼り着き、汚ない歯並びの口先を駆使してナンパに励んでいた時坂夢戯でもなく（彼も『EROTOPIA』から依頼が来るようじゃ、となみむか、中山たろう、内山亜紀、もりやねこ同様に、既にアナクロなのだろう。↑筆者の編集的思惑から、某漫画家が一名外されていることにお気づきのあなたは、もはや㈲遠山企画教青少年部の熱心な信者。オッホホホ）、一時期のカリスマ性も失せ、妙にオッチャンぽくなった旧美少年の樽本一でもなく（僕は昔、彼にずいぶんと世話になった…）、美少年漁りの趣味にますますハマり込んでいる、谷内和生お嬢様のたわわな胸元でもなく（かつてR－KIDSは、自分では業界ピカイチという、インド美人もビックリコンな超美人妻を持ちながら、センセの胸元に眩惑され、そのコッケイなサンタのお供のトナカイみたいな赤鼻ヅラで、〝俺のメカケになんネ？〟とかぬかし腐ったとか）、遂にコミケの会場で、同じ国立大学の級友に職業がバレちまった十六女十八女でもなく、御存知、カーマスートラ吉田おばさんのハゲ頭を、あたかもバタフライのように覆っているだけの、小学生でも数え切れる程度の本数の陰毛状の頭髪でもなく、イラクでもなく、多国籍軍でもなく、オシャマンベや北千住でもなく、ましてやボボやツビ、ヘッペやべっちょでもなく、トキ同様に死滅しつつある、〝エロ劇画家〟の存在である。

いくら落ち目とはいえ、まだエロ劇画誌は40誌くらいはある。㈲遠山企画でも、全下請け誌6誌のまだ半数はエロ劇画誌なので、35人くらい漫画家が集まる忘年会の参加者の半数は、エロ劇画家でいいはずですが、ここ3～4年、劇画家の比率は低下する一方。特に今回は、常連の三条友美、杏咲モラル、紫れいからが参加しなかったため、ほんの数える程もいいとこ。小海隆夫、鶴田聖、やまだのら、マリヤ（のらチャンの女房。昔は僕のアイドルだった。よく3人で西荻あたりで飲みまくり、ゲロ吐いた）、小鈴ひろみ（テレクラ漫画の鬼。つのだじろうの弟子。かつては純文学風青年漫画に打ち込んでいたが…。そういや、南日れんなんてまだ生きてんだろか？　漫画はハシにもチン棒にもかからなかったけど、いい方でした）と、わずか5名。ロリコン系の若い作家と一緒にしちゃ白けるだろうと気を遣い、会場の一角に集めたもんだから、余計に陰気さが増し、まるで大企業の窓際族用の部屋。「何だよ塩山。今頃になって俺達をノケ者扱いしとるけど、テメーみたいな嫌われ者が、どうにか家族を喰わして行けてんのも、元はといや俺達のおかげだろう。いくらエロ劇画誌が落ち目だ、単行本がサッパリロリコン系と違って売れない、『漫画スマック』までコンビニ切られて廃刊だからって、今あるテメーは、俺達の屍の上に立ってんだろうが!?」とでも語るような冷ややかな視線を浴びて、一人でオロオロ。

助け船を出してくれたのが、廃刊になった『漫画スマック』に、エロ漫画誌評論を書いていた、エロ漫画コレクターの小倉智充センセ。センセこの日も、千葉の果てからわざわざ上京したのに、懐かしのエロ劇画誌をドッサリ持参してくれた。『漫画ショック』、『漫画スキャンティ』、『漫画ギャルトピア』、『漫画パーキング』、『漫画ピラニア』…ったくよくンなもの保存してるもん。特にかつて田上憲治というペンネームで、双葉社や芳文社で活躍していた、小海隆夫センセとは話がはずんでいた。また『漫画ピラニア』には、あの中森ばぎなが実名で何度も投稿したりしてて、いい話のツマになっ

てた（今のA5やB5のロリコン漫画誌も、あと5〜6年もすれば、こういう扱いを受けるのでしょう）。

陰気な忘年会もこうして、予想外の黒字を出して無事終了したのですが、直後に身内に不幸があり、田舎に帰ったために全然映画は観られず。葬式を終え、娘や親戚の子供を連れ、マーケットの中にある映画館に『ちびまる子ちゃん』を観に行ったら、これが何とビデオシアター。画面は字幕が読めないほどにじんじゃっている。こ…こ…これで、普通の映画館同様に、大人1600円（子供は喜んでた。内容はTV版に比べて数段落ちる。だいたい俺、まる子の声の女がコビすぎてて大嫌い）。が、不幸はこれに終わらず、翌日3歳の下の娘が階段から落ち、ピーポーピーポー。異様なコブが出来たり、吐いたりしたが、何とか無事。忘年会の黒字だけがハッピーだった90年よ、サラバ!! と、カッコつけてられる情勢ではないような気も…。

（'91・3）

30歳で半期にボーナスが200万円出る集英社のエリート社員編集者と、三流下請けエロ漫画編集者の遠くて近い関係。

あ〜あ、肩が凝っちまってコッチコッチ。アッチの方はいつもフニャフニャで、何の役にも立たんのに、ンな所ばっか硬くなってどないすんのよね。「忙しくっていいじゃんか？」とんでもない。実を言えばこの肩凝り、原因は〝暇すぎる〟せい。僕もこの年になって初めて知ったけど、ムチャクチャ仕事をしてた人間が、急に暇になると肩凝りになるんすね。かつて、やくる〜と、ひろとのトリオで、毎月5誌も白いポスト向き漫画誌編集してた頃は、ンなこと意識する間もなかったけど。今や、一ツ橋グループ（小学館＆集英社）の恥知らずなポルノ出版屋化のおかげで、わしら青息吐息。30歳で半期にボーナス200万ももらう、高給取りエリート編集者共がエロ本屋になったからって、何で昔から細々と、裏通りで世間様に目立たぬよう、伏し目がちに生きて来た俺達がこんなにイジメられなきゃならんの？…てなグチはいくら並べても、廃刊なった本は生き返らぬだろうし、新企画も通りっこないだろうから、やくる〜とのアホと、今ある3誌で細々と生きて行こうと、前号をペラペラめくってると、とんでもないミスがゾロゾロ。少々の誤植なんぞどうでもいいけど、重要な所でポンポンミスってる。働きバチは急に暇になると、肩凝りになるばかりか、注意力も散漫になるようだ。

まずは本欄に2カ所。一段目の5行目に、〝コラムにも書いた思うけど〟とあるけど、当然、〝コラムにも書いたと思うけど〟だよね。2段目の終わりから6行目。〝いくら落ち目とはいえ、まだエロ劇画誌は40誌くらいあるので、全下請け誌6誌のうちまだ半数はエロ劇画誌なので〟と、〝で〟を2回も同一センテンスで用いているので、全体の文章が分かりずらくなってしまった。他に、もう一カ所似たような所があるが、これは略。㈲遠山企画でも、「ヤケクソジョッキー」でも大チョンボ。2ページ目の一段目の23行。〝書名、著者名、定価さえ分かれば、書店で注文した方がいいですよ〟とあるけど、〝書名、著者名、定価〟に、出版社名を入れなんだのは致命的。以上のようなミスは、めくら校正しか出来ぬ、やくる〜とのトンマ振りに責任の99%はあんのだが、僕も奴の後で目を通してるので、ほんの1%くらいの責任は、イヤだけど免れられません（こういう素直な上役を持った部下は、いつの時代でも幸福だ）。

とはいえ、ンなことにこだわっている読者が、果たして何人いるのやら。暇すぎる俺は、頭ン中自体がプッツンしているのか？ そんなことより、問題は東京都知事選挙。磯村尚徳には落ちてもらいたい。〝ハイハイオジサン〟ならぬ〝ハイハイバカ〟のツラを、何年

も見させられたらまた血圧が上がっちゃう（暇になったおかげで、血圧が下がったのは助かった）。だから、『週刊新潮』２月21日号の「磯村尚徳という男」と題された記事には、うれしくなっちゃいました。内容が、読む前から分かっちまう名タイトルですが、中味も充実してました。特に結びの、〝…しかし、やがて都内全域に、あの顔とあの声が、時間を選ばず満ちあふれるのかと思うと、少々気味が悪くなる。都民にニコニコ、永田町のペテン師どもに、ハイハイ…ああ、東京はいやだな〟の部分を読んだ時は、京浜東北線の中で笑いをこらえるのが大変でした。最近の『週刊新潮』では最高のヒット。矢来町にある出版社は、どっか一味違います（手前ミソですんません）。

まずい。また脱線した。そうだ。漫画家と業界のゴシップが、本欄の本来のスタイルだ。塩田丸男みたいな、太鼓持ち低能評論家みたいなこと言っとっては、読者に失礼。『逃亡者』（監督／マイケル・チミノ）は良かった。チミノの映画は全部イカすが、今回の疾走感溢れる演出にも、グイグイ引き込まれた。アメリカって国が昔から持つ、暴力的体質もキッチリ見せてくれる。ウィリアム・フリードキンやこの人は、頑張ってる割に認める人が少なくて可哀想（愚作、『ワイルド・アット・ハート』までほめまくる、にわかリンチ狂は、ハガキ職人並にウジャウジャいるのに。いくら天才でも愚作を撮ったら、〝バーーカ!!〟って正直に叫んでやるのが、真のファン）。併映の『ニキータ』（監督／リュック・ベッソン）は、監督が三流ペテン師の類いなので観る気はなかったものの、つい貧乏性のため観続け、地獄の思い。『ワイルド～』の愚作振りと、余りに次元が違い過ぎる。ンなのよくシラフで撮れるよ。誰かが『０課の女・赤い手錠』（監督／野田幸男）と比べてたが、失礼千万な話（大傑作でした。そういや荒木一郎って、最近全然映画に出ませんね。残念）。

ちっ。またまた話が飛んじまったよ。そりゃそうと…と、業界ゴシップに話を持って行こうとするんだけど、余りに状況が悪いもんで、ついついペン先が光りを求めてあちこちをフラフラ。昨夜も、カーマスートラ吉田、ひろとの３人で飲んだんだけど、吉田婆ちゃんに、「塩山さん、いつまでも私のこと陰毛カットだ、街灯だ、女中曽根だ、歩く坊主札だ、パイパンヘッドだ呼ばないで下さい。何年言い続けたら飽きんですか!?」と、抗議されてしまった。ゴメンゴメン婆ちゃん。婆ちゃんのことを、もう２度とハゲ呼ばわり致しませんと、ここに誓います。俺はただ、やたら過去を忘れやすい日本人の習性を、吉田婆ちゃんのハゲ頭を通して、国際化時代に合わせて改めんとしただけ。今後は反省をするだよ。で、３月21日に、大阪の難波付近で、発情ガキの群れを引き連れた薄毛中年女がいたら、吉田さんなので声をかけてあげて。

（'91・4）

俺の思想の根本は、〝ネタミ〟〝ソネミ〟〝シット〟。

よくもこうグチるネタが、次々と起きるもん。余りに各マスコミへの本業界の露出度が高いので、日本は小沢や海部ではなく、エロ漫画業界を中心に動いてんじゃないかと、錯覚しちまうくらい。でも、それと反比例して、本屋からは僕らの編集してるコミックスが次々と姿を消しているわけで（一方で、さっさとポルノ路線から撤退した、小学館や集英社の〝健全コミックス〟とやらの、書棚に占める比率は増えちまってる。自主規制を俺達にのみ押し付けてトンズラしたアイツらは、恥知らずな陰謀家との見方も出来る）、数カ月後の本業界というか、我が下請け編集者家庭の食卓のオカズの品数を想像すると、ゾッ（だいたい、小学館や集英社の編集は、同じポルノ漫画編集してて、何で30歳で半期に２００万もボーナスもら

うんだよ…てな例によってのグチを、『マンモスクラブ』のデブ健こと加藤健次に話してたら、「アンタの大手批判は、単なるシットじゃないんですか?」と、非難がましく言いやがった。バーロー、〝ネタミ、ソネミ、シット〟が、俺の根本思想だってのを、今まで知らなかったのか。ハッキリ確認しておこうじゃん。ビンボ人の金持ちへのシットに類する感情は、一切健全だってね。他人に害を及ぼすのは、その逆の場合。また公団の家賃が上がるんだって。愚妻も、建築現場の後かたづけのパートにでも出さにゃ)。

チッ! またカッコ内の独白が長すぎたせいか、何の話してんのか分かんなくなっちまった。どうでもいいか。いや、やっぱりどうでもよくねえか。ともかく俺がクヨクヨしたって、なるようにしかならねえ。問題はチョウ・ユンファ。一体あの方は、年に何本映画に出てんだろ。近頃は旧作もバンバン封切られるから、映画街を歩くと、必ず彼の主演作が上映されている(ここらは書店における、コミックウハス系B5判漫画誌と似ている)。ただコミックハウスの漫画誌と違い、チョウ・ユンファ映画ってのは、まずスカがないのが凄い。例えば『セブンス・カース』(監督/ラン・ナイチョイ)も5年前の作品だけど、〝コイツァーエグイや!!〟の一言。ハリウッド娯楽映画のヒット作の、おいしいアイデアのみパクリにパクった珍品だけど、野生美少女のムッチリオッパイも楽しめたりして、『非情城市』や『サンタ・サングレ/聖なる血』も悪かないけど、この手のエレキな映画も、月に2本は必ず楽しみたい(同じくユンファの、『狼/男たちの挽歌・最終章』も最高。特に砂浜での銃撃シーンのサエは、ペキンパーも真っ青で、「文芸坐」から出て来た時は、なぜか足元がヨロヨロしてた。かつては邦画にも、『拳銃(コルト)は俺のパスポート』とか、『0課の女・赤い手錠』みたいな、観客の血を逆流させるパワフル映画もあったんだが)。

ンな話にうつつを抜かしてる場合かよ?↑てなこと言っちゃ、うつつを抜かすのが俺の趣味だけど、くらむぼんセンセよ、前号は悪かったなあ。「ヤケクソジョッキー」でデマ飛ばしすぎて。しかし俺も、最近各方面でますます評判が悪くなってる。㈲遠山企画の社員を辞め、フリーになった今年からの傾向だけど、精神、肉体ともにカックンしちゃってる。15年の下請けエロ漫画編集者生活の疲れと言えばカッコいいが、要するにたるんどるのだ。肩凝り、悪酔い、読者いじめ、漫画家いじめ、ハゲ婆ちゃんいじめ等は昔から繰り返してるけど、最近の本業界への世間の風あたりを、彼らをいじめて晴らす姿は、確かに健全とは言えねえよ。と、素直に反省すべき所は反省するが、余り殊勝なツラばかりしてると、また腹に一物あるんじゃとかんぐられかねぬのでハッキリ言っとくが、「サカキの霊剣」を落とした時坂夢戯センセよ、俺は乙女座生まれの蛇年で、淡泊なのはベッドの中だけだから、明るい夜道でも用心した方がいい(が、時坂センセ、細いがケンカは強そうな気も。そーだ!「昔のことは忘れて、今後は頑張ってよ!」と和解のカンパイする振りして、アイツの缶ビールの中にだけ、会社のトイレに落ちてる陰毛を混入させてやろうか。キキキ。↑嫌われるはずだよ♥)。

眠いなあ春は。ビデオ観てても本読んどっても、すぐグーグー。子供から、「お父さんて、どーして朝眠れるのォ?」なんて言われちゃしょうがねえ。2人の子供連れて、『ドラえもん/のび太のアラビアンナイト』(監督/芝山努)を観に行った時も、立ち観しつつウツラウツラするザマ(映画は決してつまらなくはない。特に併映の、『ドラミちゃんアララ♡少年山賊団』[監督/原恵一]は、大いに受けとりました)。しかし、問題はドラえもんでもドラミちゃんでもなく、数カ月後の我が家の食卓の、オカズの品数(オカズの品数とは直接関係ねえが、先月締め切りを過ぎて封書をくれた、江東区のきたのみほチャンよ、君の意見は色々と参考になった。また投稿しておくれ。君の封書は、菜摘ひかるにでもあげとくヨ)。我

が家は（と言っても公団の2DK）、朝食は豪華にという主義（いつも飲んだくれてんので、夕食を食べる機会がないせいだが）。ドラえもんふりかけ、野菜サラダ、つくだ煮、シャケ、納豆、焼きノリと超豪華で、読者諸君の貧しい朝食とは根本的に異なる。が、この情勢。今から節約しなければ。決意は3カ月前からしてるが、シャケをやめるか納豆をやめるか、まだ決断がつかない。こればかりは、ブッシュやあだちけんに相談してもどうにもならない。苦悩は一層深まるばかりだが、唯一の救いはちくま文庫の『坂口安吾全集8』の、「街はふるさと」という小説がめたらやたら面白かったこと。が、「街はふるさと」と我が家の食卓の納豆に、一体どんな関係が？

（'91・5）

ガリをガリガリ食べつつ、一ツ橋グループにゴロを巻く。

今月のハガキはロクなのねえ。「ヤケクソジョッキー」で苦労すンぞ。特に数が少ねえわけじゃねえが、皆さんポカポカ陽気で、ネジが外れちまったんですかね。てなことを考えながら、水道橋駅西口前の回転寿司屋で、120円の安い方ばかり4皿食べ（かつては5皿食べた。今は全国の健全おばさん達に糾弾を受けている、有害コミック誌の編集者ゆえに、自粛をしたのです。好きでしたのではない。おばさん達のおかげで仕事が激減、大幅収入減になったため。だからタダのガリをガリガリ食べ、5皿分の満腹感を得たわびしい僕。おばさん方よ、こういう姿を見てどんな気分だい？　マイナー系出版社が実害を一手に引き受け、アンタらが当初糾弾を試みた集英社や小学館の連中は、逆にシェアを増やして、金ピカビルで左うちわじゃヨ）、7セントラルビルの方に歩いて来ると、後楽園のビルの電光掲示板に、敷地内にある「シネ・ドーム」のPRが。確か『ルーバ』（監督／アレハンドロ・アグレスティ）のはずだったが（青臭い稚拙な映画だった）、『コックと泥棒、その妻と愛人』（監督／ピーター・グリーナウェイ）が併映とある。俺が観に行った夜も客が10人未満だったし、あわてて2本立てにしたのだな。この「シネ・ドーム」って映画館、何ィやっても客が入らんな。長えこたねえかも。次回は『フィガロ・ストーリー』とかいう車の宣伝映画、銭取って見せるってゆうし。何ィ考えてんだ、バカ。1割や2割、入場料を値引きにするくれぇのこと考えろ、日産のドアホ!!「グローブ座」の頭に、パナソニックなんてくっつけて、文化企業気取りになってる松下電器の成金根性と、これじゃ同じ（それはともかく、『フィガロ～』の監督の一人、林海象ってどこまでイモなんだろ。特にあの写真の撮られ方のセンスと言ったら。脂肪肝になった粗悪ゲタみたいなツラして、陰影の強い写真に収まんなっつーの。が、実は笑えて楽しい。コイツにゃ多分、デビュー作以上のもんは撮れねえだろな）。

そうだ、斎藤O子おばさんが結婚するらしいスよ。これでカーマスートラ吉田婆ちゃんも、存在価値がますます増す。本当は頭髪の数の方こそ増したいのだろうが、世の中とか、最初のSEXの際インサート、女房に隠れてのオナニーは、昔からうまく行かないように出来ている。となると、3月21日の3人での大阪見物は、旦那さんによく事情を説明しとかないと、誤解を招きかねん（旦那さんはどんな人か皆目わーりませんが、この情報に触れた知人は一人残らず、「よかったねー!!」と言って、心からホッとした表情を示す。チェッ！　一人暮らしで老後をフラフラすごすのも、すんごくダンディでいいじゃない。つまんねでやんの。こうなりゃ吉田婆ちゃんに、凄絶な老後を断固として送ってもらわにゃ。ヨイヨイになってもハゲ頭越しに、「コーヒールンバ」を息絶え絶えに絞り出し、そして死ぬ…。最高!!）。

もうすぐ今年も5月。とりたてて5月に思い出はないが（斎藤O子おばさんとうちの娘が、5月の同一誕生日とゆーくらい）、また血圧が高くなっちゃった。ンな暇なのに、90～150。完全に精神的なもんだな（僕って知っての通りナイーブというか、デリケートというか、要は小心なもんで）。で、今月から忙しくなんだよ。『漫画ストレート』（毎月16日発売・雄出版・340円）なる、B5判エロ劇画誌やることになってね。かなり環境の悪い時の船出なので、楽観は出来ない。だもんで、結局はやくる～とと2人で、またもや月刊4誌体制!! 仕方ない。うまくいかない場合、誰か雇ってたら第2のひろになっちゃうし（奴の時みたく良い就職先が、常に口を開けてるとは限らない）。下請けというのは、仕事があってもなくても、血圧の下がる暇がない〝100K業種〟じゃけん、諸君は間違っても、ンな苦界に身を投じることのないように。

てな行数埋めしてる時、よく昔のジャズをCDで聴いてます。輸入盤の格安CDは、いつも新宿の「サンペイカメラ」で買ってんですが、今日行ったらジャズコーナーがなくなってた。代わりに、エロビデオと、ナツメロポップスコーナーが拡大されている。シドイーッ!! 今年からここで㈲遠山企画の忘年会、開いてやらんぞ、オラオラオラーーッ!!（近頃、谷岡ヤスジって全然ダメですネ。もっともこの人、必ずまた復活するに決まってますけど）一枚1000円の〝ジャイアント・オブ・ジャズシリーズ〟、ケチらずにドーンと買っときゃ良かった。

ガックリ来て、もう飽きたのを夜一人で聴いてたら、懐かしの時坂夢戯センセが、「サカキの霊剣」の例の落ちた2回目を持参。「お願いだから掲載して!!」と泣いてせがむので、〝チッチッチッチッ!〟と宍戸錠の真似しつつ、「3回目は当てにしてねえが、そこまで言うのなら…」と、恩着せがましさ200％の果てに掲載をOK（次号に載る。少なくとも『EROTOPIA』のジグソー漫画よりは良く出来てた様子）。彼も帰り一人。MJQを聴きつつ、『アップル通信』を読んでいたら急に欲情、カーマスートラ吉田婆ちゃんの机の上を精液で汚し、明朝「やったね♥」と明るくVサインを出して、受けを狙おうかとも思ったが、それでは余りにミジメだと考え直し、秋葉から京浜東北線大宮行きに乗る。『煉獄の中で』（ソルジェニーツイン・新潮文庫）を読みつつ、やはり今後も他人の不幸のみを励みに、清く明るく貧しく、人は地道に生きて行くしかないのだと悟る。

（'91・6）

池袋の「シネマ・セレサ」さん、最終上映は1時間ずつ遅らせてよ。

ウーーム。どうも元気が出ない（元気あんのは血圧くらい）。酒を飲めば悪酔いすんのは相変わらずだけど（斎藤O子嬢の披露宴でも悪酔い、気がつけばなぜか浦和にいた。しかも新大久保から470円の切符を買ってる。会場は新宿駅近くだったのに）、記憶の空白度が、年々つきたてのオモチ引っ張るみたいに長くなる。やべえ。先週は、池袋駅の自動精算機に、あと丸々一カ月ある定期券忘れちゃったのよ。まだ定期発行駅に届いてないそうですから、絶望的。自動改札化のおかげで、他人様のでも安心して使えるものね（確か後ろの客は、20歳くらいのネーチャンだった。あんな顔して、駅に届けてくれなかったのね、シクシク…）。

1万円近い定期券を忘れまでして、上映開始時間ギリギリに駆け付けた『愛と野望のナイル』（監督／ボブ・ラフェルソン）は、重厚な映画で感服。保守的なライフスタイルを信条とする僕としては、併映の『ホワイトハンターブラックハート』（監督／クリント・イーストウッド）みたいな、ええカッコし映画のみだと泣くに泣けません（粋な番組編成で僕らを狂喜させてる、「シネマ・ロサ」と

「シネマ・セレサ」の両館だけに、あんまし文句は言いたくないけど、最終上映が早すぎる。2本立てのバヤイ、5時と7時でしょ。あと1時間ずつは遅くして欲しい。『愛と野望の〜』なんか長編だから、最終上映も早まって4時。だから僕もあわてちまった。定期紛失の原因は、結局は「シネマ・セレサ」さんだったんす)。でも番組ばかりか映写状態もいいし、場内もキレイで大好きな映画館だから、心で泣いて許しちゃおっと!!…が、1万円は痛かった。同館内には御神酒が供えられている。入口脇には〃水五訓〃なる、一見はもっともらしいが、実はごく当然の御託も飾ってある。オーナーが、宗教関係に凝っているのか？

それにしても、忍野しのぶのヤロは、いつ原稿を持って来るのだ？ 家族の元から独立、アパート暮らしを始めたら、余計に締め切りを守らなくなりやがった。隣室の女のコがしょっちゅう男を引っ張り込むので、仕事に集中出来ないとほざいておったが、ンなの壁にコップ当てて聞きながらオナニーにふけってないで、ゲンコ描かんかい、ゲ・ン・コ!! DON助のヤロも負けていない。〃DON&しのぶコンビ〃さえ台割から抹殺すりゃ、下版も右から左なんだが。ただうちは、コワモテが災いしてか、あんまし新人の持ち込みがないしなあ。

仕方ねえ。俺も『マンモスクラブ』のデブ健みたいに、いつもへらへら笑って、持ち込みしやすいムードを誌面に漂わせるか。趣味じゃねえけど、いつもプリプリしてると血圧にも良くねえし。命あっての物種です。

今月もあと70行でお別れだけど、我が塩山班は本誌以外にも3誌のエロ劇画誌抱えてて、2〜3人のロリコン系漫画家さんに活躍願ってますので、そこんとこよろしく（懐かしのぽいんと☆たかし、スノーベリ、上総志摩、狼太郎、高田伸彦なんて方々や、すてぃる88、あだちけんなどの本誌でもおなじみのメンバーが、『漫画バンプ』、『漫画エキサイト号』、『漫画ストレート』に散見出来る。今後は、十六女十八女、わだつみ・耳丸、そしてな…な…何と、あの悪名高い菜摘ひかる、青柳摩天楼なんつうネーチャンらも進出するとのこと。よっぽど漫画家不足なのか、編集が投げ遣りなのか!?）

話はころっと変わるが、ワリワリ先月は。俺が営業部との連絡を密にしとかなかったもんで、アップルコミックスのPRが、包茎の物に変更になったのわーらんかったの。笑っちまうのは読者のハガキ読むまで、見本誌何度も見てんのに、俺もやくる〜とも分かんなかったってこと（ンなもん）。それと、名古屋のムッチーこと役満太郎クン。夏に遊びに来る時は、ういろうなんぞではなく、本場物のきしめんをおみやげにね。僕はそば、うどん、そうめん、ひやむぎといった、和風メンは大好きでの（特に、シソの葉の薬味と酢を多めに入れたタレで食べる、ひやむぎが好き。経済的なことも見逃せない。一家4人で食べても３００円くらいですよ、原価だけなら。どんな話をしていても、水が上から下に流れるように、話題がいじましい方向へと向かう所は、我ながら凄いと思う）。

あと先月号の次号予告に、松原香織さんがおりましたのに、今月号に掲載されてません。ごめん。センセとの連絡がしばらくつかなかったため、近頃キャラをリフレッシュ、人気急上昇中のすてぃる88センセに、僕が変更させてもらった。松原センセには、次の機会にお願いしようと思ってますので、ファンの方は悪しからず（すてぃるセンセは『漫画ストレート』で、かつて『漫画スマック』に執筆していた〃若奥様は16歳シリーズ〃を、しつこく連載している。赤貧にもめげず、同シリーズにこだわり続けるセンセに、印税がバカスカ舞い込む安楽の日々は、いつ訪れるのか？）。

今月はフットワークが悪いな。時々下痢ったりもする。ブックサ野村監督みたいにグチッてるうちに、下痢性高血圧でコロリじゃたまらないが、『鬼平犯科帳』は結構面白い。仕事柄興味を引かれた

のがエロ描写。基本的にはイタリアの〝青い体験シリーズ〟風の、マザコン的視線で貫かれてる。池波正太郎って人は、元都職員だったとか。そういや、〝公務員風ムッツリスケベ〟の視線も感じる。この品のなさが、お上の手先という悪臭を消す、香水の役割を果たしてるのだろう。が、問題はンなことではなく…（本稿入稿後に定期券が出て来る。やはり人間は美しい!!）。

（'91・7）

〝塩山芳明クン下請けエロ漫画編集者生活15周年パーティー〟って何さ!?

人間、やりつけないこたするもんじゃねえと思ったのが、6月14日に開かれた、例の〝塩山芳明クン下請けエロ漫画編集者生活15周年パーティー〟（当初予定されていた寿司屋が取り壊しになってたため、結局は「三平酒寮」の4階に。ワタクシって、よっぽどアソコと縁があるんすね、トホホホ）。15～16人のいわゆる〝裸物編集者〟が、気が進まないのにタダ酒に釣られて集まったのですが、いつもの宴会とは異なりサッパリと盛り上がらない。

理由は明白。僕を除く全参加者の心中に、一つの大きな疑惑が存在したから。そう、〝あのケチンボなショーヤマのヤロが、いくら三平風情でとはいえ、額面通りにビタ一文も取らず酒をふるまうはずがない。これは陰謀だ。さんざ飲み喰いさせた後で、「実はワリカンダヨーーン！　キツイ余興だったが、15周年だから許せ!!」と叫ぶにちがいない!!〟…という。

人間てイヤですね。いくら他人は自分のモノサシを基準に計るしかないからって、これじゃあんまり。疑惑だ陰謀だと、全員下唇を突き出しちゃって、まるで松本清張。もっと人間、素直にならないと長生き出来ないよ…と思わせられたのも、最初の30～40分。本来が尻の穴やタダ酒には汚ない連中だけに、一度決断を下した後は飲むは喰うは、ヘタなカラオケはがなるは！（ここのカラオケに、「コーヒールンバ」が入ってなかったので、カーマスートラ吉田婆ちゃんが、戦争中の日本軍の蛮行を糾弾する、韓国のおばさんみたいなド迫力で、怒りまくっていた）

他の参加者に目を移せば、新婚ホカホカスタミナ弁当の斎藤O子さんは、妙に頬がゲッソリ。夜の生活もほどほどにと、30年程前に全盛を極めた実話雑誌、『夫婦生活』や『100万人の夜』風の説教をしかけたところ、実は足の傷が化膿、3日3晩熱でうなされていたためとか。たった3日でこれほどやせるとは…。下手に詳しく報告すると、デブオタクどもがダイエットに悪用せんと、自らを傷付けかねないので、ここらで止めておきます。

『マンモスクラブ』のデブ健こと加藤健次も、唇をペチャペチャ鳴らしながら、焼き鳥をつついてましたが、いまいち元気がなかった。『ヤングビタミン』の次に廃刊になんのは、同誌じゃないかとの噂（僕が勝手に流してるだけ）のせいか？　でも、それは困るーーっ!!　御存知の方も多いと思うけど、『マンモスクラブ』のオイラのコラム、「嫌われ者の記」の低額原稿料のおかげで、我が家の食卓がどんなにうるおってることか!!（神様お願いです。『マンモスクラブ』はどうなろうとかまいませんが、「嫌われ者の記」だけは続行して下さい）

最高齢出席者が、下ネタ専門使い捨てライターの山崎邦紀（10年程前までは、『漫画ブッチャー』や『劇画パニック』の編集長をしていた。エロ劇画にパワーのある時代だったといえ、ンなタコジーサンがやっても、商売になったんすから驚き。2～3の芸術漫画家～ユズキカズ、近藤よう子ｅｔｃ～を起用した点で記憶される雑誌ですが、「マイH漫画誌コレクション」の小倉智充センセ、そのうちに取り上げてやって）。

山崎センセは、なかなかの映画通。僕が、『ミラーズ・クロッシング』（監督／ジョエル・コーエン）をベタぼめすると、「あっそうか。あのアルバート・フィニーが主演する奴ね。俺あいつ好きなんだよ。ジョン・ヒューストンの、『火山の下で』も渋かったし…」と妙に感慨深そう。数日後、偶然同作が深夜放映されたので、ビデオで鑑賞。納得。同作のアルバート・フィニーの役柄は、別れた女房とよりを戻したいのに、悲劇的な死を2人共迎えるというもの。これじゃまるで、今の山崎だっつーの（実は彼も、一度別れた奥さんと、未入籍のまま同棲中。それが、『火山の下で』の影響を、どこまで受けているかは不明だが…）。

一方では17年間にも渡る、上村一夫的同棲生活にピリオドを打った夫婦も。エロ劇画家のやまだのら夫妻だ。彼とはつきあいが古いので、エロ劇画家総代で参加してもらった。声をかけた後に同棲解消を知ったのですが、当初の予定通り、2人共参加してもらう。のらチャンは僕以上にケチンボなので、慰謝料は一銭も出さないとか（奥方のマリヤさんが、一銭も欲しくないと言ってるらしいから、他人がとやかく言う必要はないか）。この夫婦、10年くらい前に、未入籍のまま結婚式までしてんだよな。世の中色々ですが、〝善人〟の僕はマリヤさんの味方。一方のらチャンにも仕事してもらってるし、2人とも幸福になって!!（この夜は僕の右にマリヤさん、左にのらチャンに座ってもらった）

少々寂しかったのが、〝塩山の人間オモチャ〟、おっと失礼、『アットーテキ』の多田在良の欠席。むろん出席して、各方面に臭いオセジをバラまく予定だったのだが、当日の夕方になり、下の子供が高熱を出したため欠席。デブ健は、「父親がお前にイジメられるに決まってる宴会だから、息子が発熱して、親の危機を救ったんだよ。今時珍しい孝行息子だ！」と申してましたが、後日聞いた所では熱もすぐ下がったとのこと。良かったですね。

良くなかったことも。何とか二次会（三平の2階の洋風居酒屋だったのだな、コレが）も終え、珍しく記憶喪失にならぬまま安普請公団にたどり着けば、去年の県市民税の請求書が。今年からフリーだから、自ら納めにゃならんのは分かってたけど、4期に別れた額の合計を見て「ガチョ――ン!!」。し…信じられない。宴会参加者の皆様良かったですね。これを事前に知ってたら、即中止にしてたざます。シクシク。

（'91・8）

吉田婆ちゃんの頭が、なぜここまでハゲてきたかを詳しく説明しよう。

血圧はまだ低くなっておりませぬが、水泳のおかげで、体重は大分軽くなりました。そのせいか、各方面で思いっ切りヒンシュクを買っていた、私の〝悪酔い振り〟も影を潜め、我がことながら、ホッとしている今日この頃。

そんな中、『BABE』から『SHAKE』へと改題改判が緊急決定したため、かなりあたふたしている、ハゲ婆ちゃん班の飲み会があるというので、呼ばれもしないのに新宿の東宝会館にある、「セントラルパーク」なるだだっ広い居酒屋に出撃。『Beat』関係の漫画家も含めて、その数およそ20人（『SHAKE』は、値段、判型ともに『Beat』化するわけ。婆ちゃん班にB5判誌がなくなんのは、寂しいけど仕方ない。今回初めて読む読者のために説明すれば、〝ハゲ婆ちゃん〟とは別名カーマスートラ吉田。下請けエロ漫画編集歴10年を誇り、ソリのいいチンポとカラオケマイクを握ったら、雷が落ちても放さないという、超薄毛頭のどの横丁にも必ず何人かはいる、好色未婚ババーだ）。

主な出席者は、佐々木みずき（シクシク。『ハーフリータ』も廃刊ですってネ）、悠宇樹（シクシク。カバー原稿まで入れたのに延

期になってる、私の処女単行本はどうなるの？）、鈴木しげる（シクシク。背景の木の木目を1本ずつ描くのは、本当につらいです）、さくらがい（シクシク。塩山のアホヤロに、オメーの唇は24時間フェラチオしてるみてえだとホザかれた）、MAC—V（シクシク。顔付きは、若き日の赤木圭一郎や、峰岸徹に似てると言われるが、とにかく儲かってねえ）、谷内和生（シクシク。塩山のヤロの肩揉んでやったら、ドサクサにまぎれてオッパイ揉まれた）、忍野しのぶ（シクシク。その谷内センセと、まるで肉体関係のある男女のような雰囲気で参加したところ、〝コノヤロ、『レモンクラブ』のゲンコはどうした!?〟と、居ないはずの塩山のヤロに怒鳴られた）、中総もも、まいなぁぼぉい、DONKEY、その他のセンセ方（R—KIDSの赤鼻もピカついてた気もするが、女房のよろず壱を欠いたコイツには、あえて触れるまでのニュースバリューはない）。

会費は4100円と、「三平酒寮」も真っ青な額だったために、ポテトフライとおしんこしか出ないんじゃと心配したが、実態の分からぬバターまみれの西洋料理が結構出たため、そうでなくともギョロリとした、ビンボ生活度NO・1の鈴木しげるセンセの眼など、かなり血走ってた（ハゲ婆ちゃんに言わせると、〝塩山さんほどじゃなかった〟とか。が、私の眼の血走りの原因は料理じゃなく、谷内和生センセのオッパイ、中総ももセンセの太腿、よろず壱と毎夜白黒ショーしてるR—KIDSのだらしなく開いた唇、ジュースでガマンしてる菜摘ひかるの腋の下、等々への中年的視姦光線のため）。

相次ぐ廃刊や改題疲れのためか、宴会はそう盛り上がったとは言えなかったけど、〝つか**マラ**して下さいヨ〟の名台詞と共に悪酔いした、女座頭市こと谷内和生センセの活躍もあり、ヘルス、いや、ヘルシー感覚に溢れた会になったのは事実（要は谷内センセ、酔うと他人の肩を揉みたくなるらしい。で、〝つか**マラ**して下さいヨ〟［注＊〝**マラ**〟部分が太Gになっている点に他意はありません］となるのですが、〝しゃぶらして下さいヨ〟でなく、お互いにホントに良かった。猫背気味だけど、背筋をピンと伸ばすとかなり美人な、KAMEセンセも参加しとった。昔は余りに猫背なので、〝阿宮美亜に似てる〟とボートクしたけど、許しておくれ）。

二次会が終わっても記憶が喪失することなく、この日の押し掛け宴会も無事終了したが、参加漫画家の心中は、「俺って時々、今は吉田さんのどういう題名の雑誌で、何描いてんのかがマジで分かんなくなっちゃう。原稿料が入ればいいんだけど…」というR—KIDSの発言が、代表してるのかも。

その『BABE』、先月の最終号が一周年だったためか、〝祝一周年〟てなハガキを含め、投稿がスタート以来ってくらい大量に来てた。だもんで、読者のビックラ振りも並じゃなかったみたい。吉田班の連中はまだ出勤してないので、中の一通をコッソリ紹介。

「お、俺は猛烈に悲しい〜！　な、なんで廃刊なんだよ〜!!　そ、そりゃ少しHだが、楽しいのも、心があったまるのもあって、Hだけではなかったのに〜!!　くそ〜、せっかくうちの町の本屋でも取り扱い冊数が増えて、7冊になったのに〜!!　佐野さんや悠宇樹さん、そして心のあったまる法田先生の作品が好きだったのにな〜!!　Y子さん、ゆ〜まさんも、多分少しは『BABE』に愛着あったのに残念ですね。でも安心して下さい。僕たち読者は、たとえどんなに値段が高くなろうとも、たとえどんなに探しにくかろうとも、どこまでもついていきます（笑）。負けるな『SHAKE』、こえろコミックハウス!!」（和光市・法田先生は廃刊の使者）

この種のハガキが今月は『BABE』の他、『ハーフリータ』、『マンモスクラブ』にも殺到したのでしょう。どこの雑誌が廃刊になろうと、自分の身入りに関係ない限り興味を示さぬオイラですが、予想通りとはいえ、『マンモス〜』の廃刊にはちと困りました。『ア

ットーテキ』から引き継いだ「嫌われ者の記」も、あと1回の40回で終了になっちまうわけ。こりゃ困る。一家のオカズ代がまた減ります。それより何より、Ｈ漫画業界の実態を後世に伝えるという、文化的事業がストップすんのは社会的問題。そこへタコ多田が電話を。「でだ、〝嫌われ者の記〟『アットーテキ』でまた出戻り連載しない？」「そ…そ…そ…それだけは死んでもやだっ!!　お前が編集長より威張って、金まで取って俺をいじめる、あんなコラムだけは死んだって…!!」尻の穴の小せえ野郎だよ、ホ～ント!!

（'91・９）

例の女、菜摘ひかるがまだ単なる不良女子高生だった頃。

困った奴はどこにもいる。所は例によってプール。中年のオッサンが水泳に疲れ、ボケ――ッとプールサイドで休んでいる時の楽しみといえば、言うまでもなく、ピチピチネーチャン方の泳ぎの鑑賞。本誌読者の皆様方のように、強力なザーメンの生産力はとうに失せていますので、ナンパいたそうなんて下心は吉田婆ちゃんの頭髪の数ほどもありやせん。眺めているだけでいい。人生も半ばを経過して先の見えた人間にも、この程度の楽しみは許されるでしょう。

ところが、とんだ邪魔者のおかげで、このささやかな楽しみが奪われようとしている。その憎むべき相手は、20代半ばの僕も真っ青な短足ナンパ野郎。こいつプールに来るなり、ろくに泳ぎもせず、燈台みたいにキョロキョロ。で、目を引くネーチャンが現われるや、英国の商船を狙うＵボートみたいにソロソロ接近し、生臭い息を吐きつつ話しかける。当然拒否される。が、そこは厚顔無恥な奴だけに、金魚のウンコみたいにウロウロとまとわりつく。

これを3日やられてごらんなさい。ほとんどのネーチャンが来なくなっちまう（少なくとも、時間帯は変えちゃう）。悲劇的なのは、俺の行く時間帯に必ずコイツが来てること。結果的に俺がプールに行っても、病み上がりの婆さんや、外人には持てそうな個性的なフェイスのネーチャンや、オッサン、兄チャンの類いしかいないという、悲惨な状況に。たま～に新入りのネーチャンが現われっと、ホッとするのもつかの間、またコイツがキョロキョロ、ハーハー、ペチャペチャ…。

誰にもナンパする権利はあるから、僕も「オッチャンの楽しみを奪うんじゃねえ！」と申すわけにもまいりません。しかし、オランウータンのクンセイみたいな婆さんの群れの中で泳いでいるのも、気分いいもんじゃありませんぜ。兄チャン、あんだけ矢を射ってんだから、いい思いもしてんだろうが、ネーチャン方がパッタリ来なくなるとこみっと、ナンパ師としちゃ四流（蕨の「ユアーズ」に黄緑の水泳帽かぶって来る、メガネをかけたチビで短足の兄チャン、オメーのことだ!!）。

てなことはどうでもいいが（その割にしつこく書いたが）、問題なのは本誌執筆漫画家陣の高齢化問題。吉田班に比べると一目瞭然。爺さんや婆さんばかりで、まるで僕の通っているプール。一方で長期執筆者は、原稿料も高額化している。その割に人気のない奴もいるので、そろそろ整風運動（懐かしいお言葉。僕チャンの学生時代、つまり、中国の文化大革命の頃に流行した。退廃分子を一掃しようとの意味。当時は、試験用紙を白紙で出した低能学生が、英雄扱いされたりもした。大学の中国文化研究会の同級生にオイラが、〝中国も大分イカれて来たな〟と言ったら、そいつは真顔で〝何を言うんだ君は！　彼は立派な革命の英雄だ!!〟と反論したもの。奴も今頃は、証券会社の営業マンにでもなってるだろう）でも起こすか。それにゃ新人漫画家の発掘が先決。先行きの暗い本業界に、若い連中を引っ張り込むのも良心が痛むが、その気のある諸君、もっと投

稿してや（その気のある方々が、既にポツリポツリと投稿してくれてるけど、オイラの起用する気を起こしてくれる人が…）。

それはともかく、あきれちまったのがコミケ初日に、編集部に『漫画ストレート』10月号用の原稿を持参した、菜摘ひかるとその御一行様の、サイケデリックファッション。その日は役満太郎が、飢餓に苦しむ我が家族にと、きしめんを差し入れに来た日でもあった。偶然JR水道橋駅から、ひかる軍団の後ろを歩むはめになった役満は、股間をモッコリさせつつも、「あんな素っ裸みて〜なカッコして、やっぱし東京の女はすげ〜な〜。街娼みてえなカッコしてっけど、歌舞伎町でもあるめえし、ここらでも客が拾えんのかナ〜」と、彼女らが自分と同じ高校生であるとも知らずに、妄想していたらしい（塩山のオッサンには、彼女らは中学生にしか見えなんだが）。

だが太郎よ、今頃ンなことに驚いてっから、いつまでたってもネズミ花火みてえなイラストっきゃ描けぬのだ（だが、きしめんはうまかった。あれで我が家は、3日間喰いつなげた。特に上の娘など、きしめんが気に入った余り、〝きーめん〟との愛称まで考案、〝お父さん。またお友達に、きーめんもらって来てネ〟とかのたまい、甲斐性のない親を男泣きさせた）。7〜8年前に死んだオイラの明治生まれの婆ちゃんは、東京オリンピックの頃に、ムームー姿でハワイアンのヒットを数曲飛ばした、日野てる子という歌手をTVで見つつ（その頃オイラは小学校5年くらい）、「ったく何だぁ、あのカッコは。乳半分も丸出しにして、ケツ〜振り振り、尻の穴ぁすぼめながら唄いやがって。ま〜ったく、東海林太郎に比べると、テンゴーもいいとこだ。今の女は、どいつもこいつもパンスケだいなぁ、芳明ィ」と言ったもん（しかし、尻の穴をすぼめつつ唄う、彼女の〝夏の思い出〜恋しく〜て♪〟という最大のヒット曲は、僕、大好きでした）。

あれから20数年。何が起きても驚く年ではないと思ってましたが、「嫌われ者の記」が『ホットミルク』に登場との、一部の噂にはビ〜ックリ。

（'91・10）

売れてた頃の阿宮美亜と、売れてない頃のかたせ湘の横顔。

〝「嫌われ者の記」を一冊にまとめるそうですが、俺は取りあえず、「普段用」「その予備」「貸し出し用」「永久保存用」と、4部購入することをココに宣言します〟（柏市・松戸サイエンティスト）といった手紙と定額小為替が殺到している…というようなリードは、秋葉原駅の牛乳スタンドのおばさんみたいで、押し付けがましいから止めようと思ったのに、やっぱり書いてしまった、図々しい僕（秋葉原駅の牛乳スタンドのおばさんの、押し付けがましさが爆発するのは、牛乳を頼んだ時。当然ビン。紙パックの臭気にウンザリしている人が、結構利用する。「牛乳！」「薄いの濃いの？」「はあ？」「普通のと、もっと濃いのと2種類あんの」「普通のでいい」ムスッとしたツラにおばさん、あるいは兄チャンがなるとこ見ると、高い濃い方を売ると、店員もマージンでも入るんだろう。「バカヤローッ！ 薄いのはテメーの脳ミソだろ。客に向かって何て言いぐさだ、この薄らバカ!!」といつかは言ってやろうと思いつつ、結局は濃いも薄いもない、コーヒー牛乳で間に合わせてる内気な僕）。

何の話だっけ!? そうそう。昨日は台風18号の豪雨で、事務所付近はあちこちで川が溢れて水浸し。特にひどかったのが、後楽園脇の道路。水没道路に車がプカプカ。思わず写真を撮っちゃいました。事務所に戻ると、コピーのそばにまいなぁぼぉいセンセの未完成生原稿が16枚。ネームを社のコピーで取り、生原稿を忘れて千葉まで帰っちゃったのだ。最後の1Pをコピーにはさんだまま忘れて帰る方はおりますが、丸ごとってのは15年やってるけど初めて。電話。

「ハッハッハッハ…。明日一番で取りに行きます。どうせ今夜は寝ようと思ってたから。ハッハッハッハッ…」笑ってごまかそうったってダメ。あんたは、〝未完成生原稿丸忘れ漫画家第1号〟として、永遠に記憶されるよ。

マヌケな漫画家は他にも腐るほどいる。反共バカの阿宮美亜など、遅れに遅れた原稿が2P不足してたなんてドジを、先月やらかした。後続の漫画が4コマだったので、それに旧原稿を不足枚数分プラスして事無きを得たが、一歩間違えば、物語が続いていない雑誌が出来る（そういえば大昔、印刷屋の責任とはいえ、2種類の漫画がブレンドされちまうという、とんでもないA5判平とじ雑誌に関係してたことが…。あれを初めて本屋で見たときゃ、サーッと顔色が変わるのが分かった。自分がミスったと、最初は思うからね。もう誰も持ってないとは思うが、つくしの真琴センセの表紙の本だったな）。

昔話はともかく、新人を探さなきゃ。かたせ湘センセも『ヤングチャンピオン』に専念したいとかで、しばらく描いてもらえなくなっちゃうんだ。『ヤングチャンピオン』なんて、同じ秋田書店の『プレイコミック』同様に、うちと同レベルの三流エロ漫画本だから、普段なら種々の引き止め工作をすんだけど、今のこの業界ありさまじゃね。特に単行本が出ないと、彼みたいな若手はつらい。で、「またエロ描きたくなったら声をかけてヨ」なんて、上から見ても下から見ても、斜めから見ても後ろから見ても、俺らしくない台詞、平気で吐いちまうんだよ（おい！　秋田に教えたのはバカボッチャンこと、池本浩一、オメーだろっ!!　最近、ゲンコがやったら遅れんなァ!?　反省しろ。それとな、そーゆ際の半メジャー編集者のからかい方は、オイラの「嫌われ者の記」を読んで、よっく勉強しなさい。特にオメーみてえな立場の奴は、タダでサービスしたらあかん）。

そこへ電話を寄こしたのが、女子高生パンパン、いや女子高生芸者、おっと、女子高生ダッチワイフの菜摘ひかるセンセ（!?）。「次の『漫画ストレート』のストーリーですが、キューピーさんが大きくなって、女のコを犯してしまうってのはどーでしょー?」「ギャグにすんなよ、少なくとも絵づらは。で、下描きが10月1日と。ところでオメー、『漫画クリスティー』にも何か描いてんの?」「えへえへ。まー、ふふ」「下手の段階にも達してねえ、トーシロに陰毛が3本程度のうちは、あちこちウロウロすんじゃねえ」「えへえへ、まあ…」「相談なんだが、11月頃、『レモンクラブ』で描いてみねえか。短小、いや、短いの!?」「えーっ!!　いいです。怖いもん『レモンクラブ』って」「バカヤロ!!『レモンクラブ』みてえなナイーブな本がどこにある。俺もホントはよ、オメーみてえなシロモノにゃ登場して欲しくねんだけど、一人くれえは下手なのがいた方が、新人が投稿しやすいんだって。ちっとばっか考えといてくれや、なあネーチャン！」「………」

ほのぼのとした電話している僕の隣の、吉田婆ちゃんの所に原稿を持って来たのが、佐々木みずきセンセ。この人の漫画ってそそるね、僕ちゃん大ファン（当人は、平の工員風青年ですが）。あのバカっぽいネーチャンの、オッパイのカッコがいい。スタイルもよく、「締まりが良さそうよネ」（吉田婆ちゃん談）。本人は『ハーフリータ』にも描いてたから、「アソコ廃刊になって、漫画家余ってない?」と尋ねる。「どーなんでしょ。アソコって、漫画家同士の交流全然ないんですよ」「打ち合わせも時間ずらして、ハチ合わせしないようにしてるとか?」「ハハハ。そこまでは知りませんが、僕も他の方のことは全然。ただ、『ハーフリータ』でしか描きたくないって人は、多いみたいですヨ」「な〜る」

この夏は2度もカゼひいて、2回目のは未だ完治してない。プール通いのせいかもしれないけど、水に浮かんでいると、このままど

うなってもいいと思えてくるから、水は怖い。今夜もまた泳ぎに行ってしまう中年であった。

（'91・11）

まだバブルの二日酔いが醒めない、広告代理店周辺の連中の白痴度を笑う。

高血圧のせいか、だから高血圧なのかは知らんけど、しょっちゅう腹ぁ立ててる俺が（むろんチンポはめったに立たない）、一番ムカついた映画が『ドアーズ』（監督／オリバー・ストーン）。途中で何度も眠たくなったし、意識的に眠ろうともしたんだけど、その日はぐっすり昼寝をしていたせいか、眼がギンギラ（逆にこの前、閉館直前の「浅草東京クラブ」で、中年御ホモの方々の毒牙に脅えながら見物した、真弓大介センセ特選の『赤ちゃん泥棒』［監督／ジョエル・コーエン］の時は、娘の運動会で昼寝が出来なかったためか、映画の中身はイケたのに、10分ばっか眠っちまった）。こーゆの〝ド糞映画〟っつんだぜ。何だよ、この楽団のリーダーの兄チャンの、もったいぶった神がかりキャラクターは？　ポカンと開いた口に、馬糞を突っ込んでやりたくなったぜ。吉田栄作級の低能ナルシストにもこなせる、ンなキャラをシラフで撮ってるこの監督、篠田正浩と新藤兼人を足して割ったような奴としか言いようがねえ。西洋楽団モノ映画撮んなら、『シド＆ナンシー』とまでは言わんが、せめて『ローズ』、いくらレベル落としても、『ロッキー・ホラー・ショー』くれえのは、素材から言っても仕上げて欲しかった（ちなみに北関東の田舎では、当時ドアーズなんて全然人気なかった。断然、ウォーカー・ブラザーズの天下で、ビートルズも、〝少女趣味〟の一言で片付けられた。スコット・ウォーカーがピカイチの人気で、グループ解散はよりそれに火を注いだ。当時、山の少年達の間で流行していた、猟銃の薬莢収集を山道で行ないつつ、安物トランジスタラジオで聴いた、「ジャッキー」の素晴らしさ!!　スコット・ウォーカーは、今何してんでしょ？　ゲイリー・ウォーカーも？）。

CMでむかっ腹が立つのは靴屋のマドラス。中年デブのチャーリー・シーンを、あんだけスリムに撮った写真の方はほめたる（マンホールからコイツが乗り出してるの）。けど、あのコピーは何!?

〝モデーロはチャーリーと契約している〟バカヤローッ、誰がしてくれって頼んだ!!　タダで契約したならまだしも（〝モデーロはタダでチャーリーと契約している〟というコピーならイカす）、銭をぎょうさん出して商売しとるだけなのに、しかも自社の広告媒体の中で、腹突き出して威張んじゃねえ。〝ガンバッテーガンバッテーシーゴート!!〟と、外人にバカやらせてカッコつけてる、どこぞかのドリンク剤のCM以上に腹立ったな（後者の場合、日本人への皮肉を込めたつもりなのかもしれぬが、結果的にゃ三流大和魂の鼓舞になってる）。

てなこたともかく、まいったな「嫌われ者の記」の申し込み、ジャカスカ来ちゃって。あんなに来るとは。コピーしたり、とじたり、郵送するのかと思うとウンザリ。おまけに郵送料込みで５００円なんてダンピングしたでしょ。郵送費に一部２００円はかかるから、居酒屋でやくる〜とと2人でちっと豪華な宴会したら、黒字が出ても一回でパーッ。でもいいや。俺は今回のこと、銭金や名誉のためにしてるわけじゃねんだ。今度『ロリタッチ』時代の、「亜流誌の内幕」や「ヤケクソジョッキー」（初代）をパンフ化する時にゃ、絶対に送料込みで１０００円にしよう！　と熱き中年の心に誓っていると、「どーも今日は〜っ！」という、エロ漫画家に一番無縁な、明るい声が事務所中に響く。セールスマンかな、いやひょっとすると…と思って振り向くと、やっぱ吉田婆ちゃん班の『Ｂｅａｔ』とか『ＳＨＡＫＥ』で活躍中の、佐野たかよしセンセ。

明るいエロ漫画家って、本当に珍しい。時々いるこたいんだけど、そーゆ人ってほとんど、商品価値ゼロって場合が多い。佐野センセなど、通ってる大学こそ渋谷近辺の2・5流大学だけど、息子への刺激度は次第に一流に近づきつつあるので、吉田婆ちゃんにすれば頼もしい限りでしょ。ンな所へ「迷宮のアリス」のゲンコ持って来たのが、古老のまいなぁぼぉいセンセ。同人誌作りが忙しいらしく、最近締め切りが遅れがち。「しょーねー古老だ」なんつってると、いきなり2本ずつ6本ある事務所の蛍光灯の1本がチカチカし始め、数分後にプッツン…。思わず出た古老の台詞が、「この業界の明日を象徴してるみたいですネ」。なろーっ‼ いちいち口にすんなってての。全員が内心思ってるんだから（この時期、蛍光灯代もバカならない）。

暗い午後をすごしていたのに、夜の8時頃にゃなぜか新橋で、L字型チンポ野郎、吉田婆ちゃんの3人で飲んでおった。「イッヒヒヒ…まあ、仕事のこたそれくれにしといて、俺ぇマジで心配してんだよ。何をだ？ 決まってんじゃない、『ホットミルク』の明日よ。だって、あれ『アットーテキ』で連載中止にしたら、返品が五分良くなって、何とか生き残れてる。『マンモスクラブ』は、お前を切れずにあの通り廃刊じゃん。で、よりによって『ホットミルク』でしょ。お前と一番肌の合わない読者の多い雑誌なの、アレは…。ああ、心配だな〜」「ボケッ！ 〝嫌われ者の記〟1Pの威力でぶっ飛ぶような雑誌なら、なくなった方がいいんだ‼」「グヒヒヒヒ…そうですかね、グヒヒヒ…。それよっか、エイズが随分増えてるようですね。怖いですね、ヤバイですね。もう風俗なんて3年も4年も行ってませんよ。女房一人でガマンガマン…仕方ないすネ」だって。バ〜カ！ 〝新橋大奥〟の馬鹿殿様（タコ多田）が、ンなボケかまして誰が信じるかっつーの。そりゃそうと、さっきR—KIDSに原稿催促の電話したら、夫婦で息荒げた対応してやがんの。やだな〜、真っ昼間から。いくら夫婦だって、していーことと悪いことがあっぞ！ それより原稿どうした？ てなうちに、秋も深くなるね。（'91・12）

小銭に細かいはずの下請けエロ漫画編集者のマヌケさをギャハハ‼

自分でおっぱじめたこったから仕方ないけど、コピー同人誌の制作もいざやってみりゃ地獄。例の、「嫌われ者の記」のパンフ、48Pのもんを250部近く作らにゃならんから、ここ半月ばかりは、本業の方はやくる〜とに任せっ切り。一人でコツコツとコピーとったり、A3で2Pずつ裏表にコピーしたのを、断裁機がないから金尺あててビリビリ破いたり、ページ順に並べたり、ホチキスでとじたり…。原価500円のものを500円で売るというマヌケな現実が（郵送代を考えなんだ俺がアホなのだ）、余計に疲労を蓄積させる。あのカーマスートラ吉田婆ちゃんをして、「見てるだけでグッタリ！」と言わしめた地獄の作業の日々も（とはいえ吉田婆ちゃんは、少しも手伝おうとはしなかった）、ようやく昨日で峠を越えた。あと100部ほど製本せねばならぬが、一勢に送るとなるとこれまた大変。で、〝良心的通販希望者〟、つまり、2部以上を申し込んだ国士の方々のみに、今日（11月21日）、いち早く発送しちまうことに。やくる〜とは、『漫画ストレート』の仕事が忙しいようなので（本業の進行状態が、近頃はよく分かんない）、自ら慣れぬ手で発送準備。ウッヒャ〜ッ！ ンな仕事は学生時代にした、出版社でのアルバイト以来だ。

しかしよく考えれば、原価500円の物を複数希望した連中は、より多量に俺の血を吸う輩とは言えないか？ 良心だ国士だは、1部のみ希望した連中にこそ冠せられる言葉なのだ…と、途中で気づきはしたものの、今更作業を中止するのもメンドー。結局、吸血鬼

読者の方々の方が、4～5日早くパンフで目を汚す機会を得そう（ちなみに最多部数希望者は10部。コヤツは1万円分の定額小為替を送って来て、残りはカンパとかぬかしおった。男だね～！　もっとも同額の小為替で1部のみを希望、9500円をカンパした剛の者もおったが…。いずれが真の愛国者かは、断わるまでもありません。あのムッチーくんは、たったの1部。ヤだね～!!　こーゆドセコイ野郎ーつーのも。多分この手はオナニーする時も、使用するティッシュは1抜き3枚とか決めてんだろう）。

何の話してんだっけ？　余り長い間カッコ内でグチこぼしてたもんだから、本題が分からなくなっちまった。だが考えてみれば本欄にとって、いやこの世の中の全てに、一体〝本題〟などというたわけたモンがあるのかよバカヤロおもしろけりゃ脇の話題がその瞬間から本題なのであって前提としての本題なんつうもんがワシらの回りにあるはずがねえじゃんかよねえムマさんやハタハッハハタハッハドンドンガバチョドンガバチョ～みなさ～んアババであかちゃんちゃんちゃんこババアになってちゃんちゃんこ…てな口調についなってしまうのは、ここんとこ『ひょっこりひょうたん島』（ちくま文庫・全10巻）をガバチョガバチョと読んでるせい。ガバチョの声をやっとった藤村有弘は、ええ役者だった。〝日本人の考える架空の中国人〟を演じさせると、右に出る者はなかった。赤木圭一郎と共演した日活無国籍アクションの一本で、ツブテの竜とかをやっとったのも彼じゃないか。岡本喜八監督の、当時のレベルからすれば決して上の部類とは言えない、『大学の山賊たち』にも、某国の皇太子役でほんの数カットゲスト出演、一人で画面をかっさらってた（彼は芸能界でも有名な、御ホモの方であったとか。故人）。

ええ役者といや、例の火野正平。スケコマシ役者としてしか知られてませんが、味のある奴ですよ。何でもっと世間の通人は、彼に注目しないの？（人間的に嫌われている可能性はあるな、あのツラガマエじゃ）中井貴一主演の、『極道戦争・武闘派』でもいい味出しとりました。うらぶれ中年ヤクザやらしたら、独壇場。ただ本作に関しては、彼もやや割を喰っとりましたで。ちゅーのも、ドハゲ振りじゃ半端じゃない、松山千春が中井と共演してんだもん。日本でもドハゲが、主役級演ずる時代にばなったんのはよかけど、脇でハゲを鈍く輝かせ、独自の味ば出しとったような連中は逆に大変だいね（中島貞夫監督、なかなか快調。が、何で最後に中井の機関銃は、中尾彬も殺らさないんヨ？　ありゃあおかしかヨ。組長代行なんぞ殺して当然だが、やっぱし中尾の方を一番残酷に殺して欲しかった。故天津敏や中尾彬が生き残るヤクザ映画なんて、都条例の悪書指定が、1年半前の『ヤングサンデー』や『ヤングジャンプ』に一切来ずに、わしらの業界の低部数雑誌にばっか今もドカドカ来続けてんのと同様、完全に間違っている。人種差別ならぬ、南アフリカ的雑誌差別）。

で、筆者がよく悪酔いしつつ徘徊している、京浜東北線の西川口駅近辺は、現代の魔窟であるな。ソープや本番サロンで有名な一帯であるが、普通の居酒屋にして、客はおろか店側も相当いかれている。この前も行きつけの、昔女房が創価学会員の仲間と駆け落ちし、今は再婚して幸福なれど、半年前に大和証券のセールスマンの口車に乗って、数千万すったオヤジの店で一人飲んでると、ヤクザっぽい肉体労働者コンビが入って来て注文した。「俺、氷なしウーロンハイ！」「俺も！」日本酒は、冷やがカンよりも膨張せぬので、実質量が多く飲めるとは聞いたことがあるが、氷なしウーロンハイとは？　店側もさして驚かない。後で西川口生まれの友人に聞くとこうだ。「ンなのここらじゃ当然ですよ。近頃じゃ、〝氷は2個だけ〟なんつう小心者もいますしね。けど店の方も負けてないスよ。氷の代わりにチューでなく、ウーロン茶の量を増やすんすヨ。貧乏人同士のパワーのぶつかり合いって、迫力ありますね」確かに。不況は、

氷なしウーロンハイで乗り切るっきゃない!?　（'92・1）

殺意さえ抱かせる高田馬場の落花生の臭気。

もう半年か…。オイラの水泳狂いもよう続いとります。我ながら驚く。もう真冬ですが、夜の8時30分頃行っちゃ、1時間くらいはしゃいでます（実質的には、500～600メートルしか泳いでないが）。僕の通ってるスポーツクラブは、蕨駅西口の「ユアーズ」。確か入会金が3万で、月の会費が9000円。〝会員制スポーツクラブ〟というよりか、〝スポーツ施設付き会員制銭湯〟と言った方が、ピッタシなビンボ人用クラブ。が、ここのプールでのビンボ人パワーの爆発振りも、先月の〝西川口の氷なしウーロンハイ〟の一件以上に、凄まじいもんが。数カ月前に、黄緑の水泳帽かぶった、痴漢風チビ短足ナンパ野郎を紹介しましたが、彼は割と早い時間に来るので、最近余り見かけません。で、夜にもおったのですな、〝蕨のジゴロ〟が…。この兄チャンは背もスラリとして、外見は悪くない。ただ、経済面ではない育ちの悪さが、顔面に炸裂しとりましてな。カマキリが盛りづいたみたいな、変チクリンなクロールも耐え難く、最初はウンコみてな奴だと思ってたんすよ。

この兄チャン、実は偉大な男だった。コイツいつもキョロキョロとプールサイドやサウナをうろついてんので、最初は生き別れした母親でも探してんのかと思ったの。が、2～3カ月して、ようやく分かりました。ナンパしてんですね。僕みたいなオッサンが見ても、「フ～ム。あのクラスから、良い器量と申すのだろうな」と思える姉チャンが来ると、片っぱしから声をかけ、妙ちくりんなクロールで追いかけ回す。ただ、プールでのナンパは、生半可な根性じゃ出来ませんぜ。女性もめっぽう水泳上手が多いですし（水泳上手なコは、近頃の僕には全員理知的に見える）。300や400、一気に泳いじゃうコもザラ。この男、もう30過ぎてっから青息吐息。僕も最初は笑いをこらえるのが大変でしたが、コイツがいったんプールから上がり、ビート板持って再び追いかけ回し始めた際にゃ、感動の余りツーと涙が一筋頬を濡らしました（いつも通り、結局は相手にされなかった）。その彼が最近、余りプールにツラ見せない。ハッキリ言って寂しい。常連女性にゃ相手にされてないみたいだし、めぼしい新人も顔を見せないので、エアロビの方にでも行ってんのか？　彼の愛すべきジゴロ振りを見たいのは山々だけど、体操ばっかしはねえ。

で、KIRINのHIPSというウイスキーの宣伝は、完全に狂ってる。〝どこでもくぴくぴ〟とか、新聞に全面広告ぶってる奴ですよ。あの宣伝関係者にゃ、良心はねーのかね。ウイスキーったら数多い気違い水の中でも、最強の種類の一つでねーの。大マスコミもヘーキで掲載してる一方で、Hコミック好きがこんなにイジメられるなんてねえ（酒やタバコの害は確実だが、ポルノのそれは可能性にすぎない。可能性をも罰する法律は、北朝鮮とミャンマーと中国あたりにしか、今ンとこなかんべよ）。しかし、酒やタバコの宣伝を禁止する法律をつくれとは言わない。あんなもんこそ、酒の自動販売機同様に、自主的に撤去すべきなのだ。法律なんて、出来ちまえば権力者がいいように拡大解釈して、結局は弱い者いじめのサディスト器具化すんだし（強い奴規制する法律は、逆にいくらあってもいい）。

『無能の人』（監督／竹中直人）は最悪のエーガ。オナニー狂の石屋以外に見る所なし。三浦友和はチョイ良かった。悪趣味なゲスト陣とやらには、ゲロがノドまで出かかったので、無理して飲み込んだら、余計に気持ち悪くなっちゃった。気持ち悪いといえば、俺はこれを「高田馬場東映パラス」で観たんだけど（かつては、日活ロ

マンポルノ専門館だった)、俺の2つ隣の席に座ったヤロも、気色ワリー奴だった。40くらいで、一見インテリに見えなくもないヤセギスだったけど、やたらでかいバック持ってやんの。ンなヤロが何ィ持とうが関係ねんだが、傍迷惑なヤロなんだ。一人だから大声でしゃべるわけじゃねんだが(そりゃ狂人だ)、菓子袋から何か取り出して、ズ〜ッと喰いっ放しなんだよね。問題はその菓子袋。パラフィンとでも言うの、あの透明の袋ってガッサガサ音たてんじゃん。ろくに客の入ってねえシーンとした劇場で、しかもすぐ近くでやられちゃ、気になってしょうがねえ。だから、2〜3度眼を付けてやったのよ。並の神経の奴ならこれで静まるが、相変わらずこのバカ、ガッサガッサ。ドタマ来腐ったので、いざケンカになっても五分に持ち込める程度の体力と素早く確認、「ガサゴソうるせんだよォ! 家でTV観てんじゃねーゾ、バカヤロ!!」とイッカツ(こういう時、相手が単品では余り快感が得られません。カップルの、それも軽口男の場合が一番。2人の幸せの一時を、ドログツで踏みにじるって最高!!)。

このドアホ、以降パッタリ静まったのは言うまでもないが、奇妙だったのは、併映の『泣きぼくろ』(工藤栄一監督の久々の佳作)上映中に、俺の前を通って帰ったそいつの体臭。強烈な落花生の臭いなんだ。あのでかいバッグに、ギッシリ落花生が詰まってたのかとも考えたが、それじゃ余りに70年代の芸術漫画風で陳腐。人によっては長く風呂に入らないと、汗があのような臭気に転化するのか? その夜読んだ、『石井輝男映画魂』(ワイズ出版・3900円)はなかなか。名優、小池朝雄への言及は特に感動した。「大井武蔵野館」もつぶれる前に、是非、『明治・大正・昭和・猟奇女犯罪史』を、ニュープリントで上映して下さい。小平義雄役の小池朝雄の〝勇姿〟よ再び!!

('92・2)

例の『Mate』がおずおずと、世間様にあいさつをさせてもらった弾圧の日々。

ひょっとして『アットーテキ』って、1000人前後のみに限定販売している、会員制雑誌なんじゃとマジで思っちゃうこの頃。だってよ、例の健全でちょっとだけHな、純情投稿コミック『Mate』(3月中旬発売・A5判平とじ・520円)へのハガキ募集の見開き広告を出したのが、同誌2月号。あれは1月8日発売だから、もう2週間近くもたつのに、来たハガキの総数がたった7通(ぐろぽり、BLANKA、小倉智充、貴澄美悠、ヤクト・パラーシャ、海龍王、天照☆暴威)。読者の好みが違うとか、種々理由も考えられるけど、信じ難い数字(『漫画バンプ』でもそのくらいは来る)。今さら『アットーテキ』の、オナニスト達への影響力の低さを嘆いても始まらんが、こりゃ1号目の記事ページ埋めんの苦労すんな(最初から『レモンクラブ』で、大々的に宣伝しとくんだった。でも、下請けエロ漫画編集者としての俺の良心が…と言っても説得力欠くか)。

一方で本誌への投稿は、ドカドカと増えとんのでホッとしてんですが、当然、ボツハガキの数もうなぎ昇り。心優しい私としては、皆さんにボツにならないテクを御教示しようと思いまんねん。

①締め切り直前でなく、半ばくらいまでに着くようにすべし…本誌の場合、毎月160通から200通来るけど(『Beat』や『SHAKE』は300通は来るから凄い)、約2週間の締め切り期間のうち、後半の一週間に7割近く集中してる。しかも、とりやんだやす○だ北条工だ、コミックハウスでもおなじみのトニー・ハーケンだと、スター連中が多い。むろん、誌面の隅々まで読まにゃ、

スターでいられんので仕方ないのだろうが、初心者や全身筋肉痛男レベルの凡人が、この時期に一緒に投稿しても、はじき出されんのが落ち。前半の一週間に投稿しとけば、それだけ編集の目にも触れ、どうしても記憶の片隅に残る。ンな縁からつい採用ってなことは、結構多い（ＦＩＳＨ、麒麟伝説なんて、それ以外に採用される理由は一切ない）。

②プレゼントが欲しいのなら、封書はなるべく避けヨ…月末の塩山班は、本誌の他に『漫画エキサイト号』、『漫画ストレート』、さらに2月からは『Ｍａｔｅ』までが同時進行になるのだ。これを、例のやくる〜とのドアホと、たった2人でデッチ上げるんだぜ。ビンボ下請けらしい風流な景色だが、並のハードさじゃない。ンな時に、プレゼント当選者のセレクトなど、沈思黙考してするか!?

一応区分けくらいはするが、あとはカン。そんな時に一番困るのが封書組。かさばるし、封筒と中身は迷子になるし、何を希望してんのかよく分からんし。12月なんか、ＤＯＮ助がせかすせいもあったけど、面倒な封書組は対象外にしちゃった（こん時だけすよ、ホント）。封書にハガキを入れて投稿する場合は、必ずそのハガキ、ないし厚紙の裏にもペンネームや本名を書く。本体と迷子になっちゃう場合も多いので、〝プレゼントはいらネ!!〟と絶叫してるようなもん。こーゆのはハガキ職人の常識かと思ったけど、どんどんそうじゃない連中が増えてる。

やす○や、ポンコツ車両化している白狼黒剣は、ここらが実にキチンとしている（だからスター&廃車という、栄光の地位を守っていられる）。それとこの2人（確かきたむら何とかいう、神戸のオカマもそうだった。奴の場合は単にケチなだけだろうが）が偉いと思うのは、一通の封書の中に各コーナー宛の物を何通も同封して、それが全てハガキ大の厚紙である点。俺みてえなＢ29の姿を拝みつつ、一升ビンで米をついた人間には信じ難いのだが、わざわざ62円切手を貼った封書の中に、41円なりのイラスト入りハガキを入れてくんのよね、近頃の皆さん。俺は一度も払った経験ねえが、ＮＨＫの受信料、3年分前払いする以上に無駄なことじゃ!?（けど俺は、1や3が放映する、海外放送局制作のドキュメント番組は、ほとんど観る）こーゆ時代だから、郵便屋さんの手前もあるってんで、ハガキが一枚くらい入ってんならまだ分かる。けど、2枚、3枚なんてのはザラで、今日来た愛知県のラウド孝なんて奴に至っちゃ、103円分の切手を貼った封書の中に、ハガキ6枚も入れてる。お前の親の教育って、どうなってんだよ!? …けど、俺の言いたいのはそーゆことじゃねえの。ハガキ代は投稿者側の負担だからどうでもいい。ただ今度からどうせハガキを封書で送るなら、つまらんポンチ絵などで汚さずにキレイなまま同封、駄文&イラストは別の厚紙に書いてね（つまり遠山企画に、未使用のハガキを寄付せよと言ってる）。

③あちこちに投稿すんのは自由だが、姑息にペンネーム変えんな。イラスト組は一発でバレる…身銭を出してエロ漫画誌購入し、おまけにハガキまで買って投稿してあげてるのは読者なのだから、セコイ真似をするな。すっごくお尻の穴の小さい人間に、僕なんぞには思えます（ンなことチェックしてんのは俺くれえかな? けどよ、トニー・ハーケンがペンネーム変えたって、全然しゃれにならんての。とりやんが同じことをすると、なぜか相当にシャレになるから、投稿者の個性も僕らが考えるより、余程、多様性を秘めてるみたい）。

④編集の説教をうのみにするべからず…知っての通り、俺こんなで昔から説教好きだけど、人にされんのはナニと違って大嫌い。もっと嫌いなのが、説教されると何の抵抗もせずに、唯々諾々とすぐに従っちゃう、管理教育慣れした連中。他人のゆうこといちいち聞いてちゃ、幾つ体があっても、いくら銭があってもたまんねっつうのよ。だからって、どんだけ説教しても行動に変化のねえ馬鹿って

のも、締め殺したくなるけどな。

('92・3)

〝肉じゃが〞は前座ではなく、本格的なつまみである。

夜7時以降は絶対に仕事をしない主義の僕ですが、やっぱ『Mate』(3月中旬発売・A5判平とじ・520円)が入って、月5誌体制になった今月はそうもいかない。連日、10時頃まで仕事してます。たまにゃこーゆのも、サービス残業が得意の都市銀行員になったみたいで、気分がいい(でもプールに通えないのが悲しい)。あと、ここは水道橋。帰宅時間によっちゃ、「東京ドーム」帰りの大群衆と電車で一緒になっちゃう。昨夜もそう。7セントラビルを出るなり、深夜に強盗に会い易いコンビニでバイトしてますって感じの、黒装束の兄チャン姉チャンが4〜5人ずつウロウロウロ。またドームで、洋楽系楽団の発表会があったんだろうと思いつつ、「どんな名前の楽団か知らねえが、いつかのXより、客筋はちっとばっかしええようだのう。あん時にゃ昼飯時から、水道橋近辺がコミケ会場化してたもんなあ。男も女も強烈な不細工揃いで、頭も悪そうなのばっか。Xっつう楽団自体はどんなもんかは知らねえども、あの客筋のセンスは、美少女系漫画誌、特にコミックハウス系の読者と同レベルで、まいっちまったもんよ」と、その帰りらしい超ミニスカ姉チャンの太腿を、駅前の信号の所で見物しながら思ったもん(翌日もこの混雑は続いた。なんつー楽団なんだろうと考えながら、〝裸物雑誌写植業界の雄〞、㈱公栄社のある飯田橋駅近くのラーメン屋「えぞ松」で、ソース焼きそば&ライス[計700円]を食べとると、マスターらしいのが、夕べはドームのコンサート帰りの客が、飯田橋まで詰めかけて大変だったたという話をしている。ようやく楽団名が分かりそうだと聞き耳を立ててると、「うちのバイトの兄ちゃんの話じゃ、〝肉じゃが〞っつうバンドの前座したこともある連中らしい」「へえ、肉じゃがねえ…」と、ニラレバいためを作っていた、40代の脂ぎったツラのおっさん。肉じゃが? 俺は元々、現在進行中の流行にはほとんど関心はないが、少なくとも10代後半から20代前半の、異性に縁のない、飢えて怒れる青年男女向けの漫画誌を編集する仕事に就いている。中年のナツメロ回顧節が売りの、子連れ下請けビンボ編集者とはいえ、あんなフィリピン売春ツアーの常連みたいな顔したマスターや、脂汗ジトジト地雷也風ニラレバオッサンまで知ってる、有名楽団の名前も知らねんじゃ、『レモンクラブ』も『Mate』もお先は真っ暗じゃないかと、ソース焼きそばの束で、飯をお寿司みたいに巻いて食べ、ため息をついてると、使いに出てた中国人労働者が話に加わった。「大変だたですね、彼も。成田で、クーコで泊らされて」ええ? 肉じゃがって外国のバンドなのと、焼きそばにむせてると、彼が付け加えた。「やぱり、ミック・ジャガーの人気、凄いですねえ」……………。が、東北出身らしい、例の売春ツアー風マスターとニラレバ地雷也は、相変わらず〝肉じゃが〞で通していた。社に帰って『シティロード』を開き、2/19、2/20とドームでコンサートを開いてた楽団が、ガンズ・アンド・ローゼズだったと初めて知る)。

まさか肉じゃが一皿で、ここまで引っ張るとは思わなかったでげしょ? あちきもそう。当然、韓国レポートでもと思ってたんすが、『Mate』の記事ページで、写真入りでバンバンやっちまってるので、キムチと焼き肉のお好きな方は、そっちゃを読んで。前号の本欄では、投稿していただいてる皆様方に、恐れ多くも説教をぶっこいちまったんすけど、かなり効果があった。だが、中にゃマヌケというか図々しい奴も。北条工を第1回目に立てた、〝今月の女王様〞は大好評だったけど、おい! 八王子の森田、オメーは何ぃ考えてんだ!! 〝編集部で転送すっから、その分の切手を同封せい〞と、

ハッキリ「なかよし倶楽部」にゃ書いてあんだろ。なのにコイツったら、北条宛の長ったらしい手紙、裸で編集部宛の封筒に入れてくんの。切手貼った封筒も折って入れてあったから、こいつに入れて送れってことかと思ってると、その封筒にはテメーの住所と、〝様〟まで付いた名前が黒々と記されている。つまりだよ、オメーの62円じゃ足りんかもしれん長ェ手紙、編集部がわざわざ封筒にお入れあそばし（ついでにオメー宛の切手付き封筒もな）、しかも切手までこっちが貼って出せってことらしんだ。でも、まあいいか、62円くらい…と思っていたら、こ…こ…こいつが、な…な…何と、〝バカとビンボー人とフェミニストは相手にしない、世界一高いアングラ新聞〟として知る人ぞ知る（まだ1号も出ていないが）、『真実新聞』を申し込んでいるのだな。……。ウーム。考え込みましたよ。俺のゴシップコラムの数少ない読者って、こういうタイプが多いのかと思うと、悲しいやら、恥ずかしいやら、どうにでもなれというやら。どうにでもなれといえば、この4月以降の業界のことですが、考えてもどうにもならねえことは、あっち置いとく振りしてこっちの胸にしまっておくとして、今月は悲惨でげすよ。韓国旅行＆『Ｍａｔｅ』発刊のせいで、今日（21日）までに観られた映画は、たったの3本。『訴訟』、『夜逃げ屋本舗』、『シコふんじゃった』のみ。プールにも行けず、映画も観られずじゃ、何のための人生なんだか。監督（周防正行）が胸糞悪い奴なので、退屈であれと念じて観に行った『シコ～』が、かなりいい出来なのには驚いた。もっと驚いたのは、客の大半の若いお姉様方が、ちっとも笑わずシ――ンと観てること。退屈ってことじゃないらしい。途中で帰る人はおらんし。あんなおっかしい、本日医科大学との対戦の下りでも、笑ってるのは席の後方にコソコソ来てる、ワシら中年オッサングループのみ。いい席を占拠したお姉様方は、ただスクリーンを凝視するのみ。モックんの股間はそれ程に魅力あるのか？　既に見た女性読者の、その辺の感想をお寄せ下さい（森田、切手送らんと捨てんゾ!!）。

（92・4）

H漫画誌を年頃の女が読み続けることの楽しみと苦痛。

女装はしたことあるけど（『Ｍａｔｅ』の1号目、見ていただけましたか？）、女になった経験はないだけに、女性投稿者がどんな苦労してるのか、いまいち実感出来なかった。が、例の北条工の件以来、色んな反応が来てて、色々と考えさせられる。理屈としては以下に紹介する、きさらぎ☆はるか姉ちゃんの意見に尽きると思う。

〝…北条さんの文章読んでて思ったけど、本当にこーゆーことする親いるんですね。いっちゃあ何だけど、世間じゃ21～22歳って立派な大人です。こーゆことといちいちかんしょーする奴って、よっぽど子離れできてないんですね。誰にも迷惑かけるわけでもないのに。別に絵を描いてっから、「うちの子、M﨑みたいになるんじゃないか」って考える親って、絶対に偏見にみちてる。うちなんか親といっしょだけど、ぜーんぜんかんしょーしないもん。だいたい「イラ投妨害」って何？　よくわかんない。そんなもん妨害したからって、世の中良くなるわけじゃないでしょ。個人の自由だし、誰にも妨害する権利ないよ〟

多分きさらぎ姉ちゃんは、経済的に自立してんじゃないかと思う。だから、こういう関係が維持出来るのだろう。北条も確か女工、いやＯＬだったはずだから、食費代くらい入れてりゃ、それほど干渉されなくて済むはずだが。そこへ、電話がプルプル。「へい！」「あの、塩山さんお願いします」「わしじゃがのう」「ひどい！　あんなに公開しちゃイヤだって言っといたじゃない（カンペキな群馬弁）」「あんた、誰じゃったかいのう？」「ほ…ほ…北条です～。ひどいよ

～（と言いつつもかなりうれしそう）」「いやま、そう言わないで。こりゃ君一人の問題じゃないし、読者に問題の提起をしてだね…」「ウソッ!! ただ面白がってるだけでしょ。人をさらし物にして」「うん！ 実はそうなんだよ」「分かってたんだから（分かってたんなら聞くナ！）」「人の困ってる姿や真心ってなあ、傍から見ると面白いもんでのう。許してくれや。北条一人の真心が傷付くだけで、何百人、何千人の読者が、一時の幸せを得られるんじゃし」「も～、絶対そうだと思ったんだから」「ゴミンゴミン！ で、あんた宛の封書どうする？」「会社宛でお願いします。どうせあんまし来てないでしょ？」「ソなこたねえよ。返事を書く書かないはアンタの自由」「……。また投稿始めたら、皆に笑われるでしょうねえ？」「だろうなあ。けどな、人に笑われるのってなぁ、慣れると楽しいもんだぜ」「……。あの、この電話のことまで、書いたりしないでしょうね？」「一つネタめっけたら、それで3度は笑わせせんのがプロだって本で読んだけど、俺はそれほどの悪人じゃねえよ。それによ、いくらあんたが投稿者のスターだからって、もう過去の人。次々と新人は出て来るし、仕事は忙しいで、あんたをオモチャにする時間もないっての」「そ…そうですか…本当はもっと投稿したいんだけどなあ…。うちの親って、結婚するまで女の子は、処女じゃなけりゃなんて思い込んでるし」「はかない願いだ」「えへへ…」「まあ、元気出して仕事頑張ってな」「はい！」

〝結婚するまで処女であれ!!〟か。こう親が考えるのは勝手だが、それを押し付けられる子供はたまったもんじゃない（両親のそれぞれが、互いに絶対に浮気をしないで老いてゆこうと誓うのは、これまた風流であるから、勝手にやって欲しいが）。この手の考えを持ってる親は、独身時代にゃどんな生活をしてたんでしょうな。余程サイケデリックなSEXライフを送ってたか、ド純潔かのいずれかでしょうが、北条の両親の件は別として、一般的には前者が圧倒的に多かったのでは。自ら出来なかったことを子供に託す…こりゃペーペーサラリーマンが、いいガッコに行かせたくて、子供を塾通いさせんのと全く同じだから、被害者の女性もハンパな数じゃないでげしょ。

「うちの読者の親なんてさ、私達より5歳くらい上の人が多いわけでしょ。自分じゃエイズのない時代に、今じゃ死語になってるフリーセックス楽しんどいて、娘がH漫画読んだくらいで出てけなんて、とんでもないわよ。だいちさあ、男のコがエロ本読んだくらいで、そんなこと言われっこないでしょ、絶対。女だけそんな目に会うなんて、完全に女性差別よォ」と、いきなり吉田婆ちゃん。「そんな暇あんなら、中学生以上の娘持つ親は、ナニする時はコレ使えって、コンドーム持たせるべきよ。あればっかはしたくなったら、どんな法律つくっても取り締まれっこないんだから」ごもっとも。けど、俺も娘が2人いっけど、中学生になったからって、ソな真似出来っかなあ…!?

数日後、再び電話がプルプル。「へい！」「『レモンクラブ』担当の塩山さんは」「わしじゃけんど」「岩手のやす○ですが…」「おう！ いつもハガキありがと。元気でやっとるかね」「あんまし元気じゃなくて…。今度、近くに引っ越したんです。それで、『Ｍａｔｅ』のプレゼント当選してたみたいですけど、出来たら新しい方にと思って連絡したんですが…」「あー、あれ、一昨日送っちゃったよ。まずかった？」「いえ、取りに行けばいいんですけど…」「やっぱ、君ンちの親もいい顔しないのかな？」「まあ…」「でも、北条みたいに止めたりしないでな。寂しくなっから。あいつんちは、結婚前の娘は処女でなくっちゃあかんて考えらしいし」「そうですよ、どこも。私もそのことでこの前親とケンカになって、殴られちゃいましたヨ」「ウーム。どこでも苦労が絶えんね。ところで、アパート暮らしだからって、あんまし乱れ切った生活送んじゃないよ」「ハハ

ハ。わけがあって今働けなくて…。すっごく貧乏しちゃってて…。朝御飯も食べられなくって」「おいおい、大丈夫かい!? それにこの電話代?」「テレホンカードだけはいっぱいあんです。もらったのが…」

青少年電話相談室のオッチャンになった心境ですが、男が電話寄こした場合は態度を一変、受話器を叩きつけてますので、誤解しないで下さいね。ではまた来月、プルプルしましょう!!（'92・5）

場末の古本屋に山になってた、自ら編集した、いがらしみきおの増刊号への複雑な思い。

いやあ、やっぱしデビッド・リンチは凄いわ。『ワイルド・アット・ハート』が余りに愚作だったし、昨今の〝ツイン・ピークスキャンペーン〟にゃゲッソリしてるせいもあって、『ツイン・ピークス／ローラ・パーマーの最期の7日間』は全然観に行く気なかったんだけど、その日は「大井武蔵野館」も見尽した鈴木清順特集だったし、「池袋シネマ・セレサ」は、恐怖のジャック・ドワイヨン特集なんぞやっとる始末だったので、「まっ、モノはためしだ」てな感じで、トコトコ「浦和シネマ2」へ出かけたのだ。

「コルソ」のプレイガイドでまず1300円の前売り券を買い、「イトーヨーカ堂」近くのレコード屋で、『ザ・コミットメンツ』のサントラCDを買う（2500円もすんのに、つまんねえ選曲しやがんナ。多分それほど売れると思わずに、安易な選曲したんだろが、今頃になってCD第2弾なんて出すんじゃねー!! 5000円もかかっちゃう。もっとも最初から2枚買わせようとしたのなら、大した商魂。見習わなくっちゃ。にしても日本のCDはベラボー。値段が高い上に、一枚の収録時間が短かすぎる。コレだって1枚に全部収まんじゃ？）。

で、香港映画たあ思えぬ併映の糞映画『炎の大捜査線』を、抜こうと思って『ペンギンクラブ』か『キャンディータイム』買った、ビンボ高校生みたいなムカツキの心でやり過ごし、いよいよ『ツイン〜』かと思って場内を見回せば、ミーハーカップルでほぼ満席。大キャンペーンの成果だろうが、イヤ〜な雰囲気。これじゃ『ゴースト／ニューヨークの幻』と同じ客筋じゃねえの（当たったらしいけど、ヒデー映画だった。あれとか『ニュー・シネマ・パラダイス』みたいな映画、僕チャン大嫌い）。

が、いざ始まると、グイグイと画面に引っ張り込まれっ放しというか、2時間30分はあっという間。素直にもう30分は長くすべきだと思う。いい所は幾つかあったけど、第一に挙げるとすれば、ストーリーが良く分かんなかったこと。大筋は一応通ってんだけど、やたらに脱線する。その生理的とも言うべき脱線振りと、「こいつぁちょっとやりすぎたかナ」てな感じの、取り繕いというか、大筋へのわざとらしい回帰振りがこれまた楽しい。ここらを面白いと思うか、カッコつけてると思うかで、この映画への評価は分かれるだろう（ここら読んでて、真弓大介センセの漫画を思い出したアナタは鋭いよ。「毛穴が開くまで」を例に引けば、押し入れから出てきた〝女子大生の芳村真理子〟はデビッド・ボウイなのであり、〝よくわからない時には横に回る〟首は、ローラの母の曖昧な微笑なのかも。ちなみに僕、TV版はビデオで最初の一巻観てるだけどっす）。

第二は、リンチ映画は女性を撮る時、芸術というより、ポルノ映画の視点で捕えている所が凄いわけで…てなことをちょっくら弁じようと思ってたら、懐かしいハガキが来たので紹介してみよう。内容から言ってヤケジョじゃ浮くし、当節の本欄は、1〜2通の投稿や、読者の電話を紹介する約束になっちまってるしな。「……古本屋で、『熱烈ギャグ噴射だっっ／いがらしみきおVS今村直道』（白

夜書房）を入手。２００円。やっぱりいがらしみきおは、デビュー直後のは抜群に面白い。もう一つこの本が貴重なのは、中程に塩山サンのコメントが、山上たつひこ、渡辺和博、末井昭、畑中純、村松恒平、多田在良（！）、小谷哲（！）らのそれと一緒に載ってること。奥付を見ると、昭和58年9月1日。この時点で、すでに塩山サンは、〝他の何者でもない塩山芳明〟を思わせるコメントを発していて、感慨深い。流石に年季が入ってる…」（柏市・松戸サイエンティスト・26歳）

……。コノヤロ、ひと回りも年の違う人生のセンパイを、完全に舐め切ってるな…と、いつもなら怒る所だが、10年も前の話だから、目くじら立てるこたねえか。確かに、そんな増刊本ありやしたね。それを編集したのが当時白夜で、『劇画パニック』や『漫画ブッチャー』を編集していた、現『ＣＲＯＳＳ　ＤＲＥＳＳＩＮＧ』編集長の山崎邦紀のヤロ（尊顔を拝したい方は、『Ｍａｔｅ』の1号目参照）。奴の歩いた後には、廃刊誌の返品のボタ山が築かれるという伝説があるくらいなので、同誌も長くはないでしょうが、彼は当時、同じくＡ5判平とじで、『問題劇画だっ』とかいう増刊本も手がけてんのだ。中身の方は、ワタナベ幸弘とかいうショーもないエロ劇画家の特集本なのだが、笑っちゃうのが、エロ劇画誌編集者の座談会というシロモノ。「死んでも例のロリコン漫画という奴だけは編集したくないよ。許せねえよ、あ〜ゆこたあ!!」てな発言してるヤロまでいて、それが何と俺だって説もあって、人間なんてホントに信用出来ません（この座談会のスクラップは保存してある。サイエンティスト君、欲しかったらコピーして上げるから、返信用封筒に切手を貼って送りなさい。いいよ、タダで。それじゃ悪いとか言って、ビール券なんか同封して礼を尽くさないように）。

そういや同じ頃、俺も東京三世社からＡ5判平とじの、『面白ネ暗大全集』とかいう、いがらしの増刊出してんだよね（全然売れなかったが）。主として『漫画バンプ』に連載してた分で、彼の当時の唯一のシリーズ物8コマの、「お父っつぁん、オカユが出来たわよ」で始まる奴は、かなり笑えました（「アコギまんが」とか言った）。驚いたのは昨年の冬、下の娘と蕨駅東口の商店街を歩いてて、小さな古本屋にフラリと入った所、その増刊が棚に6〜7冊ズラリ並んでいたこと。10年近く前に自分が編集した本に、まさかそんな所で出会うとは…。その数から見て、よっぽど売れなかったんですね。おっかなびっくり、1冊取り出してペラペラ。ふ〜う。帰宅したら、上の娘が絵を描いてたんだけど、使ってる鉛筆がぼのぼの鉛筆。過去はいきなり重層的に甦るから、怖いもんです。（'92・7）

大手出版社のエリート編集者達の寝言をノーメンクラツーラのそれと理解しつつ、ペッとツバを吐く。

俺の漢字知識は昔から友人の間で、〝小学三年生並〟と馬鹿にされたもの。「ざけんなよ、この白痴豚ども!!」と反論したい時期もあったが、〝白痴豚〟の〝豚〟の字が、怒鳴りつつ頭の中で漢字化されぬ情けなさ。強がっても仕方ないと、以降は〝漢字白痴〟との不名誉な看板を、甘んじて受け入れる振りをして、居直って生きる道を歩んで来たが、さすがに先月の本誌の文字ページ欄の誤植の多さにゃ、90の婆さんが初体験のことを思い出した時みたいに、頬を赤く染めました。

『Ｍａｔｅ』も含めて5誌もあったからと、弁明がましいこと言ってごまかそうとも思ったが、考えてみりゃ、今月からは毎月5誌体制なんだし（今月15日発売の、『キャンディクラブ』第1号、買ってもらえました？　美衣暁センセの、「リリス」の大特集ざます。今後は、毎奇数月の中旬発売になりますんでヨロピック！　偶数月

は、御存知の『Ｍａｔｅ』がこれまた中旬に発売ざますので、お忘れナック！）、説得力を欠く。結局はオイラが悪い。先月の漫画ページはともかく、記事ページはほとんど斜めにサッと校正しただけだもんな。今月からは各段ごとに、いや各行ごとに、一応は（トホホ…）眼を通さなくっちゃね（やくる〜とのヤロの校正ってのが、ほとんど当てにならんの。もっとも、余計に誤字を増やすと言われる、ＤＯＮ助の校正よりはましだろうが）。

割としおらしい今月のオイラだけど、どうしたんだろ今月は？今日は6月22日。締め切りもあと2日っきゃねえってのに、本欄向きのハガキは一枚もない。数だけは来てんだよね。けんど、なか倶楽やヤケジョに、スッポリコンと収まりそうなのばっか。どのコーナーに入れても村八分になりそうなのが、毎月2〜3通はあんのに。困っちまった。そーゆーのがねえと、行数が埋まんねえのにと、ボヤきつつハガキをパラパラやってっと、一通ありました。嫌味の極致だと、出してる本人だけは思ってるらしいのが。「私は子供のころよりエリートコースを歩み続け、現在某有名国立大学文学部に在籍する者です。毎月『レモンクラブ』を楽しく読んでいますが、私のようなブルジョワ出身の自民党支持者に、本誌を読む資格はあるのでしょうか？」（京都市・知恵豊富）

「ある」チッ！　何だこのヤロ。ケンカにもゴロマキにもならんだろが。こっちゃが日本酒3合以上飲んだ状態になるサイケハガキ送ってくんなきゃ（あたしゃ日本酒5合も飲むと、ほとんどラリパッパ。8割方はその夜の記憶もなくなる。が、自宅にはちゃんとたどり着くし、財布もなくした経験がない。昔いた〝かも〟という酒乱ヤロは、酔う度に財布どころか、メガネ、バッグ、靴、何でも紛失していた。余りの不経済振りに、〝俺は決して酒乱にだけはなるまい〟と、心に誓ったもの）、人間同士の真心のやりとりが出来んでっしゃろ。

そこへ、くらむのヤロから電話。「ど〜も」「どうだ、工場の方は？」「おかげ様で忙しくて。今時、感謝しなくっちゃいけないんでしょうねえ。そりゃそうと、例の石ノ森章太郎とか、『創』の編集長がやってる、コミック問題を何とかする会ってのから、入会しないかって連絡があって」「おー、あの広告なんか出してる所な。まあ、入ってやれば。どっかのファシストババー共とは、やってることも違うんだし」「そりゃそうなんですが、何て言うか、どうもあの人達のしてることは、理屈はその通りなんですが、あの…」「肌合が違うってんだろ!?」「そう、それなんですよ」「ついでに、育ちも違うんかもよ」「まあ、へへへ…」「俺も去年、総評会館であった集会に行った時、まずそれは感じたな。〝私達編集者は、必然性のないＨ描写を強制したり、ましてや半分以上描けなんて、絶対言いません〟なんちゅうのさ、大手の編集が。シラフで何百人かの大人相手に」「ギャハハ…」「俺は思わず、〝必然性のないエロシーンを半分以上、嫌がる漫画家に（そうでない奴もいるが）描かせんのが俺らの仕事です。それのどこが悪いんすか!?〟って立ち上がって発言したかったけど、通じないと思ったから止めた」「言ってやればよかったんですよ。テメーら大手のトーシロが、大ハシャギすっからこーゆーことになったのに、テメーの尻もふかないうちに、大義名分振りかざすなって」「あん時にそれ言っちゃ、〝行動する（馬鹿）女たちの会〟と同じピエロになっちまうよ」「あん時って、今はちゃーうんですか？」「ちっとな。やっと反規制の動きも出て来たし。それに、森山塔の『ブルー』が都条例の指定受けただろ。あれへの、『創』＆森山塔の対応は噴飯物じゃんかよ。やったら、森山を被害者扱いしてる。けどよ、都条例の悪書指定なんか、俺たちの業界の編集にとっちゃ日常茶飯事。あれ出した光文社が、大手の自主規制団体加盟社で、森山が反規制の動きをしていたから報復だなんつってるけど、だからどうだってのよ。〝大部数出ている芸術風エロ漫

画〟が指定受けんのは不当だが、マイナー出版社のコミック、例えば久保書店、松文館のもんならかまわねえってのかよ？」「そ…そらまあ」「あの連中の大義名分にゃケチのつけようはないけど、してるこた欧米人に多い、〝牛を喰うのはかまわんが、人間に近い頭脳を持つイルカは大切に〟という、根拠のない差別選別に基づく、ナチス的発想の運動になってるぜ」「ンなオーバーな」「連中の入会案内を、『アットーテキ』のタコ多田が、その場でゴミ箱に破り捨てたって気持ちも、俺にゃ分かる。もっとも大塚英志みたく、自己売名のためのみに、『創』に商業主義のレッテルを貼り、ピーピーまずいツラで、『SPA！』で吠えたりすんのもコッケイだが」「どうしたらいいんすかネ？」「好きにすればいいのサ。けんどお互いに、〝あんぐら〟の視線だけは忘れたかねえなあ。ローアングルだよ。分かってんのか？」「え～ま～、何となく、へへへ」PKOとエロ漫画狩りは、やっぱセットでしたね。（'92・8）

大企業に横行するクビ切りを喜びつつ、郷鍈治の死に涙する。

大企業でも人員整理が平然と横行している現在、仕事が忙しすぎると悲鳴を上げるのは、まるでぜいたくみたいな雰囲気があるが、「バカヤロー！　忙しいのは事実だ。テメー自身が忙しいから忙しいと言ってどこがワリー、ケッ‼」と、例によって自分には素直に生きてるつもりの俺だけど、こーゆー肉体&精神状態の時にカス映画を観ると、ホ～ント、SEX一晩に7回くらいしたように疲れますね（ホントは一晩に一回出来ればいい方だし、それ以上の経験もないが。いいじゃないすか、例え話の時くらいはみえ張ったって）。

その日観たカス映画は、『KAFKA・迷宮の悪魔』（監督／スティーブン・ソダバーグ）。題名が余りにダサえぐいので不安を感じていたら、予想以上のポンコツ振り。脚本も映像も演出センスも全部ダメ。この監督は、ンな規模の映画を仕切れる器かよってんだ（下らないが見てて疲れない、『SEXと嘘とビデオテープ』程度がピッタリ）。『未来世紀ブラジル』にまで色気を見せるその厚顔無恥振りに、近頃復活した切れ痔までがヴィヴィッドに反応して途方に暮れたが、「文芸坐」とはいえ1300円も払ったんだしと、ジッと耐えに耐える―。

その帰りに、池袋駅で初めての体験をした。仕事とカス映画のおかげで、よっぽど顔面に疲労がにじみ出ていたのでしょう。やせたチビでスーツ姿の男が、俺に密着して来てこうのたまった。「統一教会って御存知ですか～？　合同結婚式とか、色々マスコミで取り上げられていますが…」「も…もちろん知ってます」「どう思われますか？」「こ…光栄です。うれしいです。俺って、こーゆー所でめったに声かけられないんで、昔から寂しかったんだよね。それが、有名な統一教会にお声をかけていただけるなんて、もう一生忘れませんよ。今度田舎に帰ったら、〝俺とうとうあの統一教会に勧誘された〟って皆に自慢しちゃお」気がついたら、男は姿を消してました。ガックリ！（やくる～とのいとこも一人、この間の合同結婚式に参加して、親族中の糾弾を浴びたとか。やくる～と自身は、〝もっと早く言ってくれりゃ、ビデオでチェックしたのに〟とはしゃいでましたが）

そりゃいいんだけど、郷鍈治がとうとう死んじまいました。ちあきなおみの色としてしか、最近では知られてませんが、いい役者でした。粋な名脇役が全てそうであるように、声のいい人だった。声質が乾いてて、張りがある。だからビンビンよく響き、銀幕に登場するやその凶悪なツラと声で、サッと画面をさらっちまう。『野獣の青春』をはじめとする、無数の日活無国籍アクションで活躍した人ですが、日活のポルノ化後、東映にも多数出演した。中でも石井

輝男監督の、『直撃！地獄拳』と『直撃地獄拳・大逆転』でのド下品なコミカル演技が、今となっては涙を誘う。彼が死んだ翌日の朝、杉作J太郎（元真性包茎）が、本誌の一回目のコラム原稿をＦＡＸで送って来た。一枚目のワープロ原稿の端に、〝郷鍈治が死んじゃったんですねえ…〟と、一行手書きで付け加えてあった。そこには、銀幕越しのつきあいしかなかったとはいえ、惚れた男の死を悲しむ男心が、射精を終えてだらしなく太腿にへばりついてる、ペニスのようにゴロリと放り出されていたのだった。

とはいえその杉作も、この春先に死んだ同じ日活脇役俳優で、迫力ない所がカワユイ近藤宏に関しては、俺に聞くまで死を知らなかったのだ。一応新聞にも載ってたけど（郷鍈治と違って写真はなし）、杉作みたいなのが追悼しないで、家族以外に誰が近藤宏の野辺送りすんだってゆーのよ。「反省してます。で、今月から、スポーツ新聞を取ってるんですよ。一般紙だと、脇役クラスじゃ写真が載んないじゃないですか。ちゃんと死亡俳優を整理しようと思いまして。『アルバイトニュース』でやってる脇役インタビューで、死亡俳優にインタビューしかねませんからね、これじゃあ！」（しかし、杉作も出演してた『カルトQ』ってのはとんだガセ番組。やくる〜とのヤロが録画してあったの借りて観たら、質問の中で、網走番外地シリーズに『罪への挑戦』なんつー、存在しない作品をデッチ上げてた。むろん『悪への挑戦』なのだが、解答者が全部ヤラセなのは別にいいが、詳しい監修者を一人付けるくらいの銭けちんな）

杉作のヤロだけど、案外本誌の読者にも、彼の昔からのファンが多いのには驚いた。ろくでもねえ奴ですが、僕は10年程前からチラチラつきあいがある。確か最初は『漫画エキサイト号』で、今ほど人気のなかったラッシャー木村主演の、わけの分からん芸術ギャグ漫画を描いてもらったのだ。会うやいなや、互いに日活ニューアクションや、東映任侠映画ファンというか、気違いであることで意気投合。遂には当時彼が撮影中だった、８ミリ映画にまで出演した（なぜか俺は、それを未だ観てない。観た奴から聞くと、〝塩山というヤロは、あそこまでやるバカだったのか〟ともっぱらの噂。何しろ俺の役ってのが殺し屋で、『網走番外地・望郷篇』における杉浦直樹ばりに、「七つの子」を口笛で吹きながら、バッタリ倒れるというシロモノだったのだ）。

バイトのコが急に辞めて、半月ほど編集のバイトをさせたこともあったが、この面での彼の無能振りは、思い出しても震えが来る。一時は『平凡パンチ』のブルジョワ記者をしてたが、その後はパッとしない。ただ、彼も一応は漫画家。単行本も数冊出している。特に倒産したけいせい出版から出てた、『ヘイ！さらばワイルドターキーメン！』はかなり笑えた。古本屋ででも探してみたら。そういやけいせいでこの単行本まとめた女のコは、俺の下で編集アシスタントしてたイカレ姉ちゃんだった。もう娘が、本誌の読者になってるかも。変わらぬのは杉作ばかりなり。俺もか…。

（'92・11）

オマンコ狙いの台詞を傍で聞くことのアホらしさ。

どっちにしろ成績に中間はなく、天国か地獄の結果に終わるだろうと予測されている、吉田婆ちゃんのやおい漫画誌『カノン』の発刊を記念して、スポンサーの一水社のタコ多田チャマの音頭取りによる宴会が、新橋の「紅蔵」なる居酒屋で開かれた（ここの姉ちゃんは割と可愛いが、根性は悪そう。俺の娘じゃねえからどうでもいいが）。出席者は、オイラ、タコ多田、吉田婆ちゃん、加藤健次、パチスロ漫画誌の編集某、日本唯一のニューハーフ雑誌の編集某ら、約10人。いつもならお互いに大ボラを吹き合っては、最後にゃ俺以外の連中が、カラオケになだれ込むパターンで終わるのだが、この

日は一種妙なムード。というのも、俺が婆ちゃんに遅れて新橋に向かおうとすると、例の好き者M子が、『レモンクラブ』のヨタ原稿を持って来た。「オメよ、まだタコ多田とは会ったことねえだろ。今夜、宴会があっから一緒に行こうぜ。金の心配いらんよ。太っ腹な一水社の奢りだってから」と声をかけた所、「明日は土曜日で休みだしィ」と、ついて来たのだ。

〝一種妙なムード〟と書いたが、これは最初からそうだったわけではない。むしろ、デブ健こと加藤健次が遅れて参加するまでは、M子女史の輝やける戦歴に気押されてか、男性陣、女性陣共に、いささかいつもより行儀がよろしいくらいだった（オイラのみは、「いいじゃねえかよ姉ちゃん。乳くれえ触らせろや。揉めば命の泉わくってな。ガッハハハハ…」と全女性参加者にやっちゃ、ヒンシュクを買ってたが）。で、DONKEY並に肥満化したデブ健、M子女史が参加してると知るや、陰毛状口ヒゲの真下の、〝横たわる性器〟と呼ばれる下品な唇を、ペチャペチャと、小学生の赤ムケチンポみたいな舌で舐めて濡らし始めた。このおぞましい景色こそ、デブ健発情の合図として、業界では誰一人として知らぬ者はいない（ちなみに彼の女房も、この〝ペチャペチャ〟との音を聞くと、あわててパンツ3枚とその上にジーパンをはき、自分のフトンにもぐり込むと噂されている。というのも、デブ健のAIDS感染率は9割と確信している奥方は、ここ1年ほど奴に体に触らせぬのだとか。検査したらといつか言ったら、デブ健が答えた。「俺もおっかなくてサ」）。

奴のM子の口説き方ってのが笑っちまうんだよ（他の男の口説き文句なんて、そばで聞いてりゃ常にコッケイ）。「あなたの、『Mate』と『レモンクラブ』のコラム、ほんとに面白い。俺、あなたのページっきゃ読まないよ。素人離れしてるね、はっきり言って」（まあ、ここらまでは一般的）「あなたって、俺に似てるんだよねえ。サービス精神に溢れてるっていうか、優しいっていうか…。それに、いつも気持ちいい人生送りたいって考えてんじゃない？　俺もなんだけどさ。世の中にゃ変な奴もいて、塩山なんか〝やれば気持ちいいと分かってること〟しないで、そういう自分のストイックさに酔って、一人でボッキしてんだから変態だよ。奴が異常だってこた、昔から分かってたんだ」（本人がM子の隣にいんのに、正面切って言い放つなっての。まんざら的はずれじゃねえが）「でも、あなたは違うよ。そういう変態じゃない。本当に誠実な人なんだよ、自分に。凄いよそれって。そういう気持ちだけなら、時々持ってる人見るけど、実行してる人は少ないよ。俺の知ってる限りじゃ、俺、それにあなたくらいだなあ」（いよいよ山場に差し掛かりやがったな、この人間性器！　でもすぐ脇じゃ、タコ多田が例によっての、インチキ競馬必勝法をまくしたてたり、婆ちゃんがサーチライトヘッドを振り回しているので、全然ロマンチックじゃない）

そうこうするうちに、二次会へなだれ込もうということに。が、全員が入れる店がありそうもない。「よ～し！　こうなったらタクシーで新高円寺に行こうじゃん!!　あちしの知ってるカラオケスナックがあるし。行く人この指と──まれ」と、サーチライト婆ちゃん。6～7人が同行。疲れ気味の俺とタコ多田、デブ健と方向の違うM子女史はどっか飲み屋をめっけて…と思って回りを見れば、デブ健とM子がいない。「？」すると、道の向こうでM子が叫んでる。「悪いんですが、先に帰らせていただきます!!」そりゃいいんだけど、新橋駅へ尻を振り振り歩いてくM子の後ろを、巨大な肉塊が息をフーフー吐きながらついて行く。デブ健である。ボー然としてる俺らに向かって、ピースサインなんか出してる。「さすがは加藤さんですねえ」とタコ多田。「負ける──っ」ニューハーフ雑誌の編集長。「どのくらいの確率かなあ？」と俺。「9割！」タコ多田。「7割！」ニューハーフ。「8割！」俺。

もっぱら2人をネタに、近くの「酒菜屋」なる行きつけの居酒屋で飲むこと30～40分。ガラリ戸が開いたので見ると、デブ健。「か…加藤さんて、案外早漏なんですね」ニューハーフ。「ホテルですか、それとも公園で青姦ですか？」タコ多田。「立たなんだか？」例によって超性的弱者の俺。「そうじゃありません。今日の所はだめでしたよ、ハハハ」こん時のデブ健を見つめる、3人の表情が面白かった。俺は似たような表情を、中学の陸上部時代（中距離）に見ている。部一番のヒーローが、県大会へ意気揚々と出場したが惨敗。翌日部室にツラ出した時に、他の部員、特に下級生が、この夜の3人と全く同じ表情をしていた。「でもいいんです。あきらめたわけじゃないんです。あのコは俺とおんなじ。自分も気持ち良い人生送りたいし、相手にも同じ気持ちを味わって欲しいって、いつも考えてる立派な人なんです。偉いコなんだ。だから、いつか必ず2人で気持ち良くなれます。ペチャペチャ。ペチャペチャ。ペチャペチャのペチャ」

その夜、彼の女房が3枚パンツをはくはめになったかどうかは、悪酔いした僕には想像もつかなかった。は～ペチャペチャ！

（'92・12）

過去の栄光が銭に転化するほど、甘くないのがエロ漫画業界だよ。

この業界、どんな売れっコでも、スターでいられるのは3年前後（単行本も3冊までが一般的にピーク）。単にキャラがカワユイだけの奴と、キャラに加えてストーリーが出来る奴との間では、1～2年耐久力に差がつくが、どっちに転んでも5年以上一線で活躍できる者は、めったにいない（その点、中総ももセンセなんか凄い。センセの場合、最初から〝スター〟って感じじゃなかったのが、逆に良かったのかも。急に人気が出てちやほやされると、どうも漫画家ってのは天狗になり、手抜きと乱作繰り返して、知らぬ間にエロ劇画誌の片隅に追いやられてたりする。中総センセはバイプレイヤーに徹して、作家生命を維持するのに成功したのだ）。

そこに電話を寄こしたのがくらむぼん（念のため書いておくが、ここに奴の名前を出したのは、中総センセの対極的な存在として取り上げたのでは、絶対にない）。「いやあ、『オレンジクラブ』着きましたよ。そっれにしてもひっどい紙ですよねえ。線は飛ぶは、トーンはつぶれるはで。劇画誌でも、ここまでひどい紙使ってんの珍しんじゃ？」「俺もそう思って、雄出版に何とかしてくれって頼んだのよ。2号目の悠宇樹センセ特集号から、ずっといい紙にしてくれるらしいんで、ホッとしたよ！」「………。ぼ…僕の立場はどうなんですか…？」「知るかンなこた。オメみてな下り坂の漫画家は、特集本が出ただけで涙流さなあかん。昇り坂の漫画家と自分を混同してっと、後で恥かくぞ。3年前とは、状況は一変してんだ。わーってんのか、このボケ！」「……チェッ！　そういや最近、僕に対する口の利き方も、乱暴になってんじゃないですか？」「屁理屈を言うな屁理屈を！　だいたい漫画家はどんな落ち目になっても、一度上げた原稿料を、下げるわけにゃいかねんだ。だから特集本もオメの3倍は売れる新人でも、オメやかおるより安い原稿料ってなバヤイもある。編集としちゃすげえ不愉快。ンなストレスが、言葉の端々に出るんだってのコノヤロ!!」「……。ま、今の僕の商品価値が、3年前より低下してるってのは認めますよ。けど、けどですよ、それまでの貢献はどうなんすか？」「バカヤロー！　過去の栄光が今の銭に転化するほど、この業界は甘かねー!!」「チッ！　そこまで言われちゃなあ。僕にだってプライドがありますから、塩山さんとことのつきあいはこれっきりにして、また『花いちもんめ』に売り込みに行こっと」「勝手にしやがれ。うちにゃ『Ｍａｔｅ』

に鈴木一郎（くらむぼんのもう一つのペンネーム）ってゆう類似品がいっから、奴に頼むとするぜ」「る…る…類似品ってあれは…」

そこへ原稿を持参したのが、旧白痴トリオの雄で、〝くちゅくちゅ〟の怪擬音で一世をフービした、かおるセンセ。最近はずっとエロ劇画誌に島流しになっていたが、久々の『レモンクラブ』用の10ページ原稿である（次号に掲載予定）。もっとも、その間に有望な新人が登場すれば、その原稿も結局、『漫画バンプ』や『漫画エキサイト号』に追いやられる運命）。「いや〜、こう景気が悪いと…」センセは、マンション管理会社のサラリーマンが本業。やはりバブル崩壊の影響は免れぬらしい。あくまでセンセには漫画はアルバイトなのだが、そのバイトに頼らざるを得ないのだ。本誌に登場させっと袋叩きですが、エロ劇画誌だとシックリといっているようなので、情け深いおつきあいしてる僕。

トリオのうちの2人までが登場したとなると、気になるのがあの御方。かおるセンセの来社の翌々日だった。オイラが事務所でBUDDY GUYを聴きながら、『Mate』のズンジョの原稿書きをしてる時だ。「あっのー、あだちですがー」と、卑屈な声が電話の向こうから。「よっ、けんちゃん、元気でサラリーマンやってっか？」「いや〜、忙しくって。ほら俺、総務でしょ。給料計算とか、年末調整とかで色々と…」「信じられんよ。Dカップエロ漫画の作者が、運送会社のサラリーマンだなんて」「生活のためですよ。それで、年末までに12ページ入れるって言ってましたけど、年明けまで伸ばしてもらえませんか。とても今の状態じゃ…」「チッ！ しょうがねえなあ。今度だけだぞ。だいたいよ、ンな安サラリーマンしてたって、高が知れてんだろ。来年からは、単行本もバカバカ出んだ。弱音吐いてたら出してやらんゾ！」「本当に出るんですかねえ。それに俺のギャグだから、古くなってんじゃないかと心配で」「大丈夫。幸いオメの女性キャラは、元々古臭いのでそもそも古びない。ストーリーはこの業界としてはある方だし、不景気にゃギャグがしっくり。パロディが分かんなくったって、一応抜けるんだ。そこそこ売れるっての」「そうかなあ…」

白痴トリオも人生の曲がり角に立ってるのですが、3人共パートなんかじゃなく、正社員というのが笑ってしまう。おかげで、喰うには困らないわけですが、そういう中途半端な姿勢で漫画に取り組んでたから、飽きられるのも早かったのかも（一番、まだ可能性のありそうなあだちけんがサラリーマンになったのは、つい半年前）。

とはいえ、このトリオの存在自体を、今の多くの読者が知らぬ点に示されてるように、H漫画業界全体から見れば、連中も忘れられた無数のエロ漫画家の一部。しかし、私はここであえて言いたい。エコロジーの時代である。古くなったからと言って、エロ漫画家を穴あきコンドームのように、ポイ捨てして良いのかと。捨てるっきゃない奴が多いのも事実。しかし、バカとハサミとエロ漫画家こそ、実は使いようなのだ。忘れられた漫画家さんの、『レモンクラブ』新人漫画大賞への応募を期待します。

（93・1）

石井輝男とナイスガイ杉作J太郎（元真性包茎）。

年末進行&引っ越し準備の日々の中で、10分の時間も惜しいのに、こいつが来たんじゃ一時間は無駄にしても仕方ないって奴もいる。筆頭が杉作J太郎（反筆頭がDON助だなんてこた、皆さんもう御存知ですネ）。「塩山さん、忙しそうですけど、ちょっと、ちょっと時間下さいよ。こんな話、電話ですんじゃもったいなくて」「何だよ。柄にもなくもったいつけやがって？」「実は出ちゃったんですよ、石井輝男監督の映画にィ」「な…何ィ!? 例の『ガロ』のイン

タビューが契機でか」「そうなんですよ」「やくる〜と、30分ばっか下のピーベリーで打ち合わせしてくっから」「……ったくもう。この糞忙しいのに」「じゃっかましい!! おい、J太郎、行くぞ!!」「はい!!」

J太郎によれば、奴は主役の佐野史郎らと、玄米パンを食べるシーンにチョロリ出てるのだとか。「でも心配なんですよ。日本一の石井監督の映画に出演出来たのはいんですが、編集でカットされちゃうんじゃないかって」「主役とからんでんだから、大丈夫でないの」「そうでもないらしいんですよ。主役に近い長谷川初範は、途中降板させられたんですよ。何シーンも撮影してるってのに」「ウ〜ム、相当に力を入れてんな」「スタッフも凄いすよ、ピリピリしてて。俺たちがパンを買う小銭まで、全部昔の揃えてましたよ。分かりゃしないのに」「な〜る。けど、えてしてあのタイプの監督が妙に肩に力を入れると、どーにもなんねのが出来ちゃうんだよな」「いや、大丈夫です。この僕が保証します」「余計に心配だっての」「ガハハハ…」

ちなみに、J太郎は本人が一番面白い。2番目が文章。で、地球を15周くらいする距離というかレベル差をつけて、TV、雑誌等に登場した際の恥態が、一応は3番目。そっからこけむす石段を69段ばかり降りたあたりで、本業の漫画原稿が、風に吹かれて飛び散ってるといったあんばい。「当然観たんだろうなあ、12チャンでやってた、石井監督の『大脱獄』は?」「〝おい、ノミでもいんのか〟ククプッ…」「いるわけねえっての、あんな雪国に」「ガハハハ…」「〝チユウさんのおかげで、しばらく安心じゃのう〟ヒヒヒ…」「何もネズミの丸焼き、あんなにドアップでしつこく撮らんでもいいのに。助監督も大変だったでしょうね」「ヒッヒヒヒヒ」「こんなんもありましたね。医者が木の実ナナの検便を健さんに指示する時の…」「〝少し多目にな〟だろ」「ガハハハ…。それだけならいんすけど、健さんが同じ台詞、また木の実ナナにゆーでしょ。〝少し多目にな〟。ったくもう」「ヒーローがヒロインにゆー台詞じゃねえぜ。おまけに木の実が、健サンのフトンに勇気を出してもぐり込んで抱きつきゃ、〝ノミでもいんのか〟だもんなあ。やっぱ、石井輝男監督は、東映のルイス・ブニュエルだよ」「そっそっそっ、それにですよ、何も木の実ナナの検便、わざわざ健さんに中身見せたり、ドアップで撮らなくてもねえ…」「それが俺達、凡人の発想なんだろな。あの人って、凡人が普通は避ける通俗な発想を逆手に取っちゃ、それを数十倍にデフォルメして、銀幕にぶちまける人だから」「それが木の実ナナの検便ですか?」「ヒッヒヒヒヒ」「ガッハハハハハ」

石井監督といえば、東映時代の〝網走番外地シリーズ〟が最も有名であるが、アクション映画専門の監督だと思っていると大間違い。60年前後の新東宝時代の、『黄線地帯(イエローライン)』等の〝ラインシリーズ〟は、とにかくモダン。ドキュメントタッチで垢抜けている(とても『大脱獄』と同一監督とは思えない)。東映でも60年代後半になると、『徳川女刑罰史』等の、〝異常性愛シリーズ〟を連打。その破壊力は、今観てもそこらの有害コミックの比ではない。が、東映に深作欣二時代が訪れると、『暴走の季節』等の暴走族物、『直撃!地獄拳』のような、ギャグ物の世界へ突入して行く。だから石井監督は、見る側の世代によって全くイメージが異なる。

「制作側は、石井監督をどーゆ風に捕えてんの?」「それがですねえ、どーもあんまり、良く知らないみたいなんですよ」「………。まさか、竹中直人の『無能の人』みたいな世界を期待してたりして」「ガハハハ…だとしたら、出来上がったのを観たら、ビックリするでしょうねえ」「何しろ、〝少し多目にな〟だからな」「ガハハハ…。でも石井監督、今回は『大脱獄』以上にギンギンにやってるみたいですよ」「脚本がそうなってたか?」「それが、脚本の段階は全然まともなんです。けど、現場でバンバン変えちゃうんですヨ」「その

くせ早撮りなんだろ?」「早いなんてもんじゃないですよ。バンバン、バンバンですよ。中抜きの連続だし、台詞を順番に覚えといても、何の役にも立ちませんね」「その一方で、アドリブのギャグを詰め込むわけだ。いかにも、飯場の宴会でバカ受けしそうな、ねちっこいお下品ネタの」「ガハハハハ…。聞いたんですよ。〝監督、どうしてシリアスなシーンの中に、いきなりギャグぶち込むんですか?〟って。そしたら言ってましたね。〝現場に行くと、ついこう、ブワーッとやっちゃいたくなるんだ〟って。あの人のギャグは、『五福星』とかの香港映画に、絶対影響与えてますよネ」「だな。題名は?」「まだ、正式に決定してないみたいですね。一応は『ゲンセンカン主人』らしいすよ。けど、これだけは間違いないです。青白い顔した原作のつげ義春信者が、全員真っ赤になるような傑作になりますヨ」「何となく、『怪談昇り竜』風になりそうな予感がするな」「内田良平が屁をこくやつですね。ンとに面白い監督ですよね。この前も電話で話してたら、ポツリ言うんですよね。〝J太郎さん、オレはバカだから、ついバカやっちゃうんだよ〟って…」「確かにあの人の世界は、〝天才とバカは紙一重〟ってな雰囲気あるよな」「ありますよねえ。でですねえ…」事務所には戻ったのは、1時間30分後(石井監督の『江戸川乱歩全集・恐怖奇形人間』等が、和製ファンタジーとしてビデオ化されるとか)。('93・2)

編集長のチンポの立ちが悪いのは、「大王」のぬるいみそラーメンのせいなのか?

地獄の年末進行下に行なわれた、12月26日の漫画屋の引っ越しは、文字通りダブル地獄と化しながらも、『真実新聞』のマヌケな読者や、暇な漫画家(十六女十八女)、編集アシスタントOBらの手伝いで無事終了したけれど、年が改まって出社してみると、アクシデントが津波状に襲い、新事務所の今後に暗い影を落としつつある。

【その①】妖華センセの実母が倒れ、『Ｍａｔｅ』の原稿落ちる。あわてて十六女十八女の超不人気連載、「外道戦記」を巻頭カラーに持って来たものの、返品の急増が予想される。『Ｍａｔｅ』の売り上げは内容の割に絶好調で、雑誌コードも取れると思われていただけに、困ったことである。

【その②】中総ももセンセ、緊急入院による手術で、1月、2月は仕事が出来ず。病気自体はそう心配はないのだが、本号にも執筆予定だったので、あわてふためく。再録よりはいいだろうという理由のみで、代打は高田伸人に決定。「そ…そんな急に16ページなんて言われても…。本屋ってのは今が棚おろしで、すっごく忙しいんですよォ。自信ないですよォ。責任持てませんよォ」「責任が持てねえだと、このヘビ女漫画家め!! 改めて聞くが、テメーの仕事は確か書店のデッチ、いや店員だったなあ?」「そうすよ。正社員です」「オメの勤務先の本屋にも、『レモンクラブ』は配本されてるよなあ」「ええ。30部も。幸いいつも完売してます。『ＤＡＩＳＵＫＩ』なんて10部も配本されんのに、1部も売れないんすよ。来月から扱うのやめよかな。『Ｍａｔｅ』は15部入るけど、一日で売り切れんのに」「……。ペラペラペラペラ、興味深いが余計なことくっちゃべってんじゃねえよ。つまり、てめん所で扱ってる商品に描くってこた、書店員としての棚おろしと、同等の仕事なわけだ。こりゃあ本来、月給の範囲の仕事なんだ。なのに原稿料までもらえんだ。〝責任持てねえだ〟なんてぬかしやがると、てめん所にゃ『ＤＡＩＳＵＫＩ』っきゃ配本しねえぞ!!」「……」

【その③】塩山編集長のチンポコ、ますます立ちが悪くなる。恒例の、盆暮れ2回のみの古女房とのソレもままならず、離婚の危機も囁かれている。そりゃもっけの幸いであるが、このままじゃ独身に

戻っても、何の意味もありません、トホホホ。

その点、相変わらず〝全身ペニス〟と化してるのが、例の故『マンモスクラブ』の性獣、加藤健次。先日も、テメーの所のレディースコミックの編集後記に、〝最近、女房と別居した〟てなガセ情報を書き、女流漫画家や読者にエサをまいていた。田舎芝居の好きなヤロではあるが、元気な人がしみじみとうらやましくなる、世紀末の冬の、ヘリコプターの音が響く、飯田橋の夕暮れ景色。

【その④】事務所近くのつけめん屋「大王」で、ぬるいみそラーメンを食べさせられる。ここの定食はまあ食べられるので、初めてめん類を頼んで地獄を見た。うまいとかまずいとかではなく（実際、味もよくなかったが）、ぬるいビールとか、ぬるいラーメンなんてもっての他だ。ここのみそラーメン担当者は、例によっての金のネックレスをした、阪神の投手の…じゃなく、中国人労働者だったが、中国じゃぬるいのが普通なのか？　今後ここでは、一生めん類は食べまいと、涙ながらに心に誓う（とか言いつつ、ぬるまずいの全部食べちまったんだから、幼少時からのしつけは怖い）。この日は中華災いの日だったらしい。夜行った「ジャンボ」という中華屋でも、五目チャーハンを頼んだら、味は悪くなかったものの、余りに量が少ないので蒼ざめた馬を見てしまった。店名を「ミニラ」とでも改めて欲しい。

【その⑤】安い皮ジャンを買ったら、臭くて家族全員に嫌われる。タンスにも入れてもらえずベランダに吊され、〝クサジャン〟とまで呼ばれる始末。いい臭い消しの方法を知ってる方がおりましたら、教えて下さい（羊皮だヨ）。

…と、次々と不幸が漫画屋を襲っているのだが（吉田婆ちゃん班にも、似たようなことが連続して起きてるのだ。ただ、【その③】だけは絶対にあり得ません、ハイ！）、後半になると落ち着いて来た。妖華センセのお母さんも大したことがなく、次号の本誌の巻頭も大丈夫になったのに次いで、ふぁんとむセンセも、内定してた就職を断念、エロ漫画稼業に専念することに。これには、釧路沖地震が大いに貢献している。

言うまでもなく、ふぁんとむセンセの実家は極貧。家もあばら屋で、夜露がしのげるだけの古材の積み木状態。マグニチュード6に耐えられるはずもなく、半壊。こうなると親孝行するのは安サラリーマンより、一攫千金も夢ではないエロ漫画家にということに。現地の被災者には申し訳ないが、俺はその時一瞬とはいえ、この地震に感謝してしまっていた。

ただ、慢性的漫画家不足は相変わらず。このままじゃ、『Ｍａｔｅ』もいつまでたっても月刊に出来ません。で、くしだあしゅらみたいないいかげんな奴まで頼ってバカを見るのだが（くしだセンセはこれを読んでたら、早く銀行口座を知らせるように。『Ｍａｔｅ』の原稿料が払えません）、新人起用に関しては、いつでもンなリスクがついて回る。早く入稿させとけば間違いないと入れとくと、ベテランが急病になり、その新人の分を代原としてぶち込みホッとしてれば、新人を当初入れようとしていた月の漫画家が行方不明になり、結局は新人も急にゃ入稿出来ず、結果として2本も穴があいたってな月もあった。

『レモンクラブ』新人大賞の応募状況ですが、まだちっともってか、ほとんど来てません。クソDONに言わせりゃ、「こーゆのは、ギリギリにドカドカ来るもん」だそうだが、果たしてどうなるやら。2回目も是非したいと思ってんので、ヨロピック♥

（'93・3）

今やゲーセンと化した「酔の助」でのわびしい宴会の思い出。

個人的にはしょっちゅう飲みまくってるが、1月は年末以上に忙

しかったため、漫画屋内部の連中との宴会はしばらく御無沙汰。そんな所へ例のちん太が、臨時アルバイトとして吉田婆ちゃん班で、春休みの間の一カ月働くことに（本当は塩山班で働く予定だった。ちゅーのも2月は、『レモンクラブ』、『キャンディクラブ』、『オレンジクラブ』、『漫画バンプ』、『漫画エキサイト号』に加え、辰巳コミックス1冊と、計6点も予定されたため、1月頃からちん太に声をかけてあったのだ。女子大生ゆえにこの時期は休み。女オタクだから一声かけりゃ、ホイホイ低給で働くだろうと電話したら、その通り。が、辰巳コミックスが同社の都合で一カ月伸び、ちん太は雇われる前から首に。で、『カクテル』のスタートで、地獄の忙しさに喘いでいた婆ちゃん班が、「こっちに輪姦しておくんなまし！」と言うので、キスもせぬのに輪姦して上げたのさ）。

初日から渋谷に原稿取りに行きながら、全く逆方向にズンズン歩き、結局は半日を無駄にした大ドジ女であるが、一応は歓迎の宴会の一つも張ってやらねば。俺に『Ｍａｔｅ』で〝大顔女〟呼ばわりされたり、婆ちゃんに初日から便所掃除を命じられたのを根に持ち、火でも放たれちゃ、栄昇ビルからも追い出されかねない。というわけで、〝大顔女歓迎の宴〟（『Ｍａｔｅ』への投稿によれば、オッパイは小さいとか）が、主賓のちん太、舞、やくる〜と、俺、婆ちゃん、偶然、そのヒワイなヒゲヅラを出していた、ＤＯＮの字の、計6人で開かれることに。

問題なのは場所。2カ月近く生活してるので、飯屋に関しちゃだいたい分かってきたけど、居酒屋事情にゃ全員うとくって。全員で潮出版の前の信号を渡り、そばがまあまあな「長寿庵」（ちょっと高いけど）の裏あたりをウロウロ。「いや〜、やっと単行本が出るからな〜。これでホッと一息。何だかんだ言って、多田さんは偉いヨ」ってな、ＤＯＮの字の馬鹿話を聞くのは苦痛だったが、こうも暖冬だと居酒屋探しの彷徨も、夜のお散歩って感じでちっとも苦痛じゃない（今一番苦痛なのは台割り引き。今日は2月22日の夜だけど、4月16日発売の『Ｍａｔｅ』5月号のメンバー、まだ2名も未定。合計24ページ。先週までは3名だったけど、9Pの所に杉作Ｊ太郎をぶち込んだってゆんだから、いかに人手不足かってのがわーる。「し…し…塩山さん、僕にそんな長いページ任せていいんですか？　経験ないんで、途方に暮れちゃいます」と、Ｊ太郎本人が言うくらいだもん、あたしゃどーすりゃいってのサ）。

ふと見れば、「酔の助」なる居酒屋の赤ちょうちん（場所は、「飯田橋書店」の裏あたり）。いかにも〝まず安〟な雰囲気だったので、「婆ちゃんよ、ここらで良かんべよ。若い姉ちゃんや兄ちゃん口説いて、悪さしよってな宴会じゃねんだし」「そうですねえ」。ちゅーわけで、初めてのその店に御入場。間口の狭い店だったので、ギューギュー詰めは覚悟してたら、「奥の座敷へどーぞ！」。上がってみたらドーンと広くて、ゲートボールくらいは充分出来そう。「外から見んのと、全然イメージ違いますネ」と舞センセ。「助かった、広い所で」とデブＤＯＮ。「……」無言の大顔女ことちん太（後の『Ｍａｔｅ』への投稿によれば、この夜はわざと悪酔い、乙女心をズタボロにした、俺への復讐を計画していたらしい。もっとも、俺自身の中年のシブミに心を奪われ、10秒でンな無謀な計画は放棄したらしいが）。

早速ビールを3本頼む。「ゲッ！　冷えてませんヨ」とＤＯＮの字。確かに触ってみれば、ただ外気に放置してたってのが、一目瞭然。「夏だったら即交換よネ」と婆ちゃん。で、ぬるめのカンパイ！　ビールを飲むうちにこの座敷、広いだけにシンシンと冷えて来る。ぬるいビールに不満を抱いてるのに、体の方は寒さに震えている。何という矛盾！　早く暖まらにゃと、湯豆腐をまず注文して、ストーブ代わりにする。次いで、焼き鳥、肉じゃが、シューマイ、サラダ、おしんこ、焼きおにぎりと、バンバン頼む。いずれも予想

通りのまずさだったが、値段も安いので仕方ない。「ここ、飯田橋の三平ってとこですね」黄赤ベタのコートをはおった婆ちゃん。「だな。けど三平の方が、2ミリくらいはうまかねえか?」と俺。

ビンボな舞、やくる〜と、ちん太、DONの字らに、物のうまいまずいなど分かるわきゃなく、パクパクムシャムシャハグハグシーシー。ンな時ほど、貧民がうらやましく思えることはない（などと言いつつ、最後に一つ残ったシューマイをめぐり、互いのハシでやくる〜とと取り合いを演じた自分が、いくら貧民にレベルを合わせるためとはいえ、情けなかった）。特にちん太など、普段の栄養失調を補わんと、口だけではなく大顔を駆使して、馬刺しだレバ刺しだまで、ニンニクショーユでぱくつくので（谷内和生二世だよ）、悪酔いして俺にからむ間もない。もっとひどいのがクソDON。宴会が佳境になった9時頃、「明日締め切りが1本あんので…」と、金も払わず帰っちまいやがんの。途中じゃ清算も出来んし、さすがはただ飯&ただ酒のプロ（しかも残った2個の焼きおにぎりを、「夜食に…」と持って帰る。負けたよDONの字にゃ!）。

最後にもう一軒、「えぞ松」なるラーメン屋に寄り、ビールと餃子とラーメン。そ、ミック・ジャガーを〝肉じゃが〟と発音する店長のいる店だ。みそラーメン喰ってたやくる〜とが、不満そうに言う。「俺、昼飯もここだったんだヨ」知るかこのヤロ! ちん太はと言えば、またもやニラレバいためを大顔を駆使して食べている。サラエボは遠いなあ。

（'93・4）

ローンの組める企業人間の不幸は、あぐらも組めない俺の幸せ。

頭が痛い。風邪をひいたらしい。水泳を始めてからは、こんな状態になっても寝込むこともなく、3日もたてばケロリが常だが、今回もそうだといい。今日は3月22日の月曜日だけれど、月末から4月頭にかけては、『レモンクラブ』と『Mate』の同時下版。両誌を合わせると、原稿未入稿の糞共が半ダース以上いるので、熱が上がって悪化しようが、寝込めようはずもないのだ。

昨今は空前の不況とか。初めっから潜在的失業者同様の〝下請けエロ漫画編集者〟にとって、近頃の新聞の経済面くらい痛快なもんはない。以前は朝刊も3面から読んでたが、昨今は愚妻にまずいお茶を入れさせると（料理下手な人間は、入れるだけの茶一杯、かくだけの納豆一つとってもまずい）、いきなり経済面をバリッと開く。「グハハハッ…。やったぜ、日産が座間工場閉鎖だってよォ。ざま〜見さらせ。あんな走る棺桶つくってるだけの間接的殺人者共が、デケー顔してた自体が狂ってたんだ。今後は一人残らず路頭に迷って、山谷労働者の爪のアカでも飲みやがれっての。おおっ! コダックじゃ内定取り消しか。取り消せ取り消せ、片っ端から。バンバン取り消したれ!!」

終いにゃ、「お父さんうれしそうだねぇ。○○○にも、熊のヌイグルミ買ってヨ」と、下の娘までがコビ売る始末。筆者の性格にマヒしてる愚妻は、何の反応も示さぬものの、クビ切りの嵐が吹き荒れ始めた頃から、食卓が明るくなったのは事実。その愚妻にしてからに、「うちなんてローンどころか、まともなカードもダメだとあきらめてたけど、あーゆ一流企業の人達も、似たような目に会うのねえ」とかぬかし、〝似た者夫婦〟と言われかねぬ態度を示すに至る。

嫉妬（この言葉は女性差別だから改めるべきだと、なぜ低能で有名な〝行動する［馬鹿］女たちの会〟あたりは叫ばぬのか）と言ってしまえばその通りだが、こう思っている連中は、意外に身の回りに多い。「不況だなんて言ってる奴は、一人もいませんよ。みんな昔からズ――ッと同じだっつってますけど」（杉作J太郎）「単行本の出なくなった一昨年の冬から、2年以上どん底生活してますから、

今さらねえ。ホホホホ…」（谷内和生）「この業界に入った4〜5年前から、年収300万突破するのが夢でした。最近、ようやく何とかなりそうなのでホッ。不況？　年収200万の頃から比べれば、バブルの絶頂です」（佐藤丸美）「不況？　とんでもねえよォ、ドカドカ注文来ちゃって困ってるよ。レディースの注文増えたから、エロ劇画やめようかって考えてっけど、怒るだろ、ンなこと言ったら？　い…痛えなあ!!　何も鉄のテープ台で殴るこたねえだろ」（もりを舞）

と、前行までは昨夜、クイーンの『A Day At The Stadium』という、最近買ったCD聴きながらデッチ上げたのだけど（彼らのライブ物としてはつまらん）、もう23日。予想通り風邪は、水泳による鍛練に加え、蕨駅西口の「安兵衛」で食べたスタミナ焼き&ニンニク焼き各1本のため、かなり弱体化したのだが、同一コラムのブツ切り的執筆ゆうのんは、かなり問題。鉛筆の勢いというかホラの吹き方の調子が、風邪同様にパワーダウン。遂にはこんな言い訳で行数稼ぐありさま。昨夜と今朝の接着話はともかく、あきれたのはもりを舞の戯言。最近までは、〝もりを舞る〟という隠語まであったくらいで（エロ漫画家が食べられなくなるという意味）、ビンボ漫画家の歩くサンプルだったガキが、よくもまあんだけの大言壮語が出来たもん。

しかし、こういった戯言を吐かせる、エロ漫画家一般への需要が急増しているのは事実。ハッキリ言ってこの〝裸物出版界〟、今やレディースか美少女系っきゃないって状況らしい。内側にいる人間から見れば、そんな神風は昨年の夏までしか吹いてなかったと、証拠立てて説明出来るのだが、大手の〝陰毛写真集ブーム〟で、エログラフ誌類が受けてるダメージはその比ではないらしく、「エロ漫画はまだいいらしい」との噂を頼りに、ボロ株に飛びついた、バブル絶頂期の長屋の上さんみてな出版社も、次々と現われてる状態。

「いつもお世話になっております。リイド社と申しますが…」「（テメーの世話なんぞした憶えはねえよ。このカス！）はい」「お仕事中申し訳ありませんが、真弓大介先生の担当の方をお願いしたいんですが」「（バカヤロ！　2人で5誌も毎月担当なすってるんだ。個々の漫画家担当なんかいるわきゃねえ）僕ですが」「あっ、どうも。実は先生の連絡先を教えていただけないかと思いまして…」「昔は教えてたけど、今は教えないんだよ。うちみてな三流雑誌が、逆におたくらの二流雑誌の漫画家を使う機会はまずないし、単なる輸出超過になっちまうだけだから」「あっ、今度創刊する雑誌は、そーゆんじゃなくて単なるエロ漫画誌でして、三流の…」「（何ィ考えてんだバカ！　俺がお前らを二流呼ばわりしてあげてんのは、皮肉だっての。『リイドコミック』は俺らの物以上のエロ漫画誌だし、シュベールのものなんて四流エロ漫画誌だろっての）ま、あんたん所のが何流か知らんが、二流は二流、三流は三流同士で交流してた方が、互いのメリットにゃなるみたいヨ」「いや、あのですねえ…」

こうして動き出している連中に、「お前らの持ってるエロ漫画原稿は、既にNTT株だよ！」と言っても無駄。逆に言ってやります。「エロ漫画界はバブルの絶頂期だ!!」と。業界が安全地帯と化してから乗り出した、腰抜け守銭奴共の数年後のツラを見るのが楽しみ。僕など内心、第二次バッシングさえ期待しているのですが。

（'93・5）

既にない「ファミリー」のナポリタンと、ミニカレーセット(560円)を今でも夢に見る。

人生も半分を過ぎると、先もだいたい見えてくるわけで、今さら〝徒歩世界一周〟だ、〝大会社の社長〟だ、ましてや〝処女千人切

り〟だの夢も抱き難く、結局は午後1時30分前後に取る習慣になっている、昼飯だけが楽しみという、いじましい快楽だけの余生が、今日もさらさらと、さらさらと流れて行くのでありました。

今日もどこにしようかと、12時30分頃から既に考え始めていた。ンなことばっか考えていると、仕事がおろそかになるんじゃと思われる読者も多いでしょうが、そこはこの道一筋18年。校正中の、本号掲載の真弓大介センセの「眠れない夜その2」の中に、2カ所もの誤植を発見。やくる〜とのバカ、どこ校正し腐ってやがんだ。ヤクルト景気で、ドタマが溶けやがったな（俺に2カ所も分かるってこた、普通の義務教育を受けた人間が読みゃ、6カ所くれめっけんのかも）。

問題は今日の昼飯。まず頭に浮かんだのが、好物の冷やし中華。写植の「公栄社」に行く途中にある、地下一階の「秀蘭」の五目冷やし中華は、具もリッチで悪くないし、大盛りにする必要もないくらい量もあんので、これで決まりと思ってたら、考えれば昨日も例の「亀鶴庵」（中華もやってる）で、冷やし中華の大盛り（650円）を食べたばかり。

前にも触れたこのそば屋さん、決してうまいわけじゃないけど、家族的雰囲気と値段の安さ、そこそこの味を買い、俺や吉田婆ちゃんがひいきにしてる。今時冷やし中華600円は安いし、大盛り代がたったの50円というのも感動させる。使ってる玉子焼きが、インスタント食品みたいでちと泣けるけど、全体としては許せる。ただ2日続けて冷やし中華はと思い悩んでいると、いきなり飯田橋駅の法政大側の『勝馬』の前にある、「ファミリー」というカウンターだけのカレー屋の、ナポリタンとミニカレーセット（560円）がポンと頭に浮かぶ。

じとついてると、ピリッとした物が食べたくなるしね。この店のメニューは、その盛り合わせがえぐい。特にこのナポリタンとカレーのセットの場合、でかいサラに2品が、ポンポンと区分けして盛られてんのは言うまでもないけど、それぞれに、フォークとスプーンが添えられてる。上から見ると、初期の無人人工衛星みたいで、カッコいいったらない。

が、カロリー上は問題。とにかく油っこい。一時は68キロ台になった俺の体重も、近頃は69キロ台。一昔前のように、70キロオーバーってなこた、水泳のおかげでないけれど、外見だけでなく血圧にも悪い。ここはグッとガマン。久々に神保町に行き、司書房や日大法学部図書館の近くにある、「わいわい」の並カレー（350円）にしようと、ちんたら歩き始める。

6月も下旬になると、街行く娘っコ共が薄着になんので、スケベ中年は眼がチカチカ。くらくらしながら「わいわい」に向かっていると、道順からいって、どうしても〝安いうまい量が多い〟で知られる洋食屋、「清水亭」の前を通らざるを得ない。「ここのサイコロステーキ定食（1000円）、うめんだよな。けどデブるし。いや、ここのにゃ全て野菜サラダがついてるし、それほどのカロリーじゃ…。いやいや、やっぱよそう。あんなの食べてちゃ、〝異性体験の超少ないM子の男版〟、つまり、単なるデブになっちゃうよ」てな、わけの分からんこと考えてるうちに、気がつけば「わいわい」のカウンターじゃなく、地下の「清水亭」にドッカと座ってるのだから、欲望の制御の効かない中年て怖い。

さすがにサイコロステーキではなく、注文したのは大好物のハヤシライス。「お待ちどうさま！」主賓と野菜サラダ、スープが、トン、トン、トン！「うっひょ〜っ♥」が、果たしてサイコロステーキと、どっちがカロリーが高かったのかと考えると、はなはだ疑問が。ちゅーのもここのは、ライス、ハヤシ共に、洗面器一杯くらいの量があるばかりでなく、牛肉もヤケクソってな感じで、普賢岳の麓の岩石くらいのがゴロゴロ…してたはずなのに、7〜8分もた

つと、全部オイラの腹の中へ。だめだこりゃ。68キロ台になれんのは、一体いつのこったか…（700円）。

ここまで来ると神保町の本屋も、一応は見物しとかないとねってんで、テクテク。むろん、エロ漫画類を追放し切っている、「書泉ブックマート」、「書泉グランデ」、「高岡書店」てな所にゃ用は一切ない。まずは「東西堂」へ。よくもまあ、こんだけ揃えましたな。ほぼ全社の物があるが、一水社のだけ余り見かけない。〝秋葉のまん森〟こと、「秋葉原デパート」内の「明正堂書店」になると、逆に一水社の物ばっかなんだけどね。

ゆっくり見てる間もない混雑振り。中でも邪魔なのが、エロ本を大量に買い込み、両手に紙袋下げながら、早く帰宅してマスってりゃいいものを、名ごり惜しいらしく、店内を夢遊病者みたいにフラついてるバカ。邪魔なだけではなく気味悪いし、終いにゃそいつがマスこいてるフヌケヅラまで、想像力の豊富な俺など映像化しちまうわけで、カンボジアにでもソマリアにでも、エロ漫画と一緒に派兵しちまえって思っちゃう。

それに、普通の本やビデオはともかく、〝オナニーグッズの買いだめ〟だけはしたくねえ。カンボジアに戦いに行く自衛隊員や、何カ月もの遠洋漁業に出る船員なら分かる。けど今は、どんな山奥の村の本屋にだって、池田大作センセの御本とエロ本だけは、完備してマス。この手のバカが、毎日押し入れから一冊ずつ、新しいエロ本取り出しては抜いてるかと思うとゾッ。法的根拠は一切ないが、オナニーグッズは1回3点以上は絶対に買うべからず。それが、女に縁のないマスカキ野郎の、最低限のダンディズムである。（'93・8）

ふぁんとむ、谷内和生、DONKEYの共通項。

「池袋シネマ・セレサ」や、「大井武蔵野館」あたりに比べると、実に保守的な番組っきゃ組まない「文芸坐」には、近頃めっきり行く回数が減ったけど、やっぱ月に一度くらいは顔を出してる。先日もふらふらっと、エルンスト・ルビッチ特集を観に行く。少しお腹がすいたので、「文芸坐2」の先の「ファミリーマート」で、カレーパンとウーロン茶を買ったのだが、レジのお姉さんが、お金を払った後で手を差し出す。「?」僕が「文芸坐シネマ・ブティック」で買った本を脇に抱えていたので、一緒に白いビニール袋に入れましょうと言ってるのだ。「ありがとう!」10年振りに出た中山信一郎の映画評論集、『ぼくのシネローグ』（GIブックス・2500円）が、カレー臭くなるんじゃと思ったが、素直に従う。今時珍しく気の効く女子店員だが、それより何より、こーゆ若い姉ちゃんに優しくされっと、妙にウキウキしちゃうのは、やっぱ40男の業。発情中学生の、ウンコ座りのこれ見よがしなタバコスパスパ景色が、笑えませんね!

「文芸坐2」のその日の番組は、『生活の設計』と『天使』の2本立て（一般1200円）。『生活の~』は、えらくエロいとの前評判を聞いてたので期待してたら、その通り。素直な反社会的思考にゃ、「分かりまっさあ」とうなずくしかない。こーゆ映画を容認する社会は、捨てたもんじゃねえと、制作された数十年前に思いをはせつつ、抜群の題名センスにも感心。が、全体の出来は、従来観たこの人の作品に比べると、ちょっとまだるっこしい。

もう一本の『天使』は、マレーネ・デートリッヒ主演。陰気なファッションのミーハー姉チャンが来てるはずだよ。この作品への予備知識は皆無だったので、最初は口をポカンと開けて見物するっきゃなかった。人妻の浮気映画なんだが、えらくハードボイルドタッチ。台詞も音楽もビシバシ決まりまくって、あれよあれよという間に、ジ・エンド。〝女版『カサブランカ』〟と言った所で、観終えた

後も口をポカン。40男がいつまでも大口おっ開いて、ヨダレ垂れ流してるわけにもいかんので蕨に帰り、いつもの焼鳥屋、西口の「安兵衛」に寄り、ビールとつくねを2本タレで頼む。デートリッヒのハードボイルド映画の余韻を、焼鳥屋で味わう所がオツなんですなと、自分に言い聞かせてどうしよってんだろ。しかし、これもハードボイルドの一種なのかもと、既に酔い始めた頭の中で、自慢話の独白を始めた所を見ると、今夜も悪酔いは必至か。

二日酔いの頭を抱えて事務所に出れば、机の上は先週の金曜の夜片づけたままピカピカ。「!?」予定では、コラム原稿のFAXが3本分15〜16P、漫画原稿が3本で約60Pくらいは、持参及び宅急便で入稿してなければならない。「やくる〜とセンセよ、何も入稿してねえのかよ、マジで?」「ええ、マジで何も。今頃こんなだと、月末が思いやられます」「……」まずはコラム陣の一人、杉作J太郎に電話。一応本人は出たが、ノドをやられたとかで声がほとんど出ず、会話が成立しない。ただ、「け…傑作です。『ゲンセンカン主人』は大傑作です」との声のみかすかに聞き取れる。俺みてえな石井輝男マニアに、今さら宣伝しても仕方なかろう。『レモンクラブ』のコラムがこんだけ遅れてちゃ、『Mate』の漫画は一体いつになるこったか。最近売れっコになって来たらしいが、義理堅い奴のこと。うちあたりの仕事も断わるに断われず、ヒィヒィ言ってんだろうから、ここらでこっちが気を効かせて、楽にしてやるか。

同じくコラム陣の一人、北先水人に電話。留守電だ。ったくもう。でもいいや、この人は今回で終わりだし。よく一年もガマンしたもん。コラムなんて漫画誌にとっちゃ刺身のツマだから、よっぽど面白くない限りは、締め切り守るのが第一。遅れる奴はバンバン打ち切るのが僕の主義。次のライターは未定だけど、どんなにつまらんヤロでもいいから、締め切りを守る奴にしなくちゃ。残る一人は例のM子。勤務先に電話しようとも思ったが、彼女の数多い男友達の一人と思われては、照れ臭いので止める。M子のこったから今夜あたり、ポストにグリグリとインサートしとくこってしょ（その通りでした）。

次は漫画家陣。今月は〝たりらりらん漫画家グループ〟の両巨頭、ふぁんとむ&谷内和生がいやがるだけに、相当の覚悟はしているものの、やはり頭も、切れ痔も、十二指腸も、昨夜はがした右足親指の生ヅメも、ヒクヒクとしきりに痛む。「只今出かけております。御用の方は発信音の後に…」2人共これ。何が出かけてるだよ、このたりらりらんヤセギスオタクと、たりらりらん三重アゴメス豚オタクがっ‼ オメーらが趣味で、編集の原稿催促の電話の声をラジオ代わりに聴きつつ、ドポンチ絵描きを飛ばしてるってなあ、有名な話だ。さらにまいなぁぽぉい。旦那はちゃんと家にいたが、夏コミ用の本作りで原稿が遅れてる。熟年が同人誌やっちゃいかんとは言わねえが、もう30過ぎたんだし、ゴルフやるとか、吉田姿ちゃんみたく、ハゲがハゲ山目ざすとか（別名ロッククライミング）、少しは考えれば。

最後にDONKEYに。今度、漫画屋の企画で、DONの字の単行本、『ぽわぽわにゃんにゃん』を桜桃書房で出す予定になってんだが、カバー原稿をちっとも持って来ない。「何時にくんだよ?」「5時、5時にゃ間違いありません♥」結局、その日は姿を見せず、実際にムレ肉の立ち歩きが目撃出来たのは、翌々日の5時（その間のこちらの電話には居留守を使う）。「どうも…」「今頃何だ‼ テメー確か一昨日の5時に…」「キャイ〜ン♥ そんな、塩山さんの誤解すよ。僕は今日の5時と言ったんすからあ」「……」長生きしろっての。

（'93・9）

関西人のダンディズムに、トレンチコートは要らない。

とまぁ、本来は9月中に発送せねばならない、『真実新聞』第10号（終刊号）が一行も出来てないのに（全国約1万の定期購読者の皆様、ゴミンゴミン。10月20日現在、相変わらず一行も書いてないけど、月末までには発送するつもりあるよ。今回は、諸君の定額小為替を、換金して飲み代にまだしてないせいか、全く執筆意欲がわいて来ないあるね。←久々に読んだ阿宮美亜の、『極辛香港小姐』の影響ある）、遂に念願の大阪見物を、10月16～18日にかけて決行いたしやした。

16日夜9時ちょい過ぎに新大阪に着いた俺を、約800人の本誌読者が、「熱烈歓迎!!」の横断幕を持ってホームで出迎えた…と言いたいが、実際に出迎えたのは、育ちと頭の悪さが露骨に投稿ハガキに出てるため、各方面から毛嫌いされている、スクーデリア藤原（20歳。童貞。以降、〝スク藤〟と略す）ただ一人。いきなり、「どうですか、大阪は？」だと。バカヤロー、どっかの三流レポーターが、四流外タレに空港でインタビューしてんじゃねえぞ！　駅のホームに着いただけで、その街のことが分かるか!!

まずは天王寺駅に向かう。一日目の宿泊先は、「天王寺東映ホテル」だす。何で天王寺なのかと言えば、2年前の大阪見物で行けなんだ、新世界付近を徘徊するのに便利だし、案内人のスク藤が、隣接する阿倍野に住んでいるから。ホテルに荷物を置くと、夜の街へ。「とにかく、お好み焼きでビールでも飲んべヨ」目ざした店は休みで、「ここも割と有名だし、いんやないですか」というスク藤の言葉を信用、「千房」なる店に。

で、地層が何層にも重なったみたいな、コレステロール焼きをパクパク食べたのはいいが、強靭さでは有名な俺の胃も、初日からストレートパンチをもろに一発くらった様子。むろん下痢したわけじゃないし、食べてる間はそれなりにおいしいのだが、余りに過剰なマヨネーズ、ソース、油の結束力に、胃があきれちまったらしい。〝うどんの仇をお好み焼きで討つ〟とでも言おうか、よくこんなのをパクついてて、こちらの人の胃はめげまへんな？（特にこの店だけが油っこいわけじゃないみたいだし）。

スク藤のせいもある。以降まる2日間悩ませるのであるが、こいつやたらベタベタくっついて来て、気色悪いったらない。20年間の童貞生活の疲れで、相手は男でも女でも良くなってんのかも知れんが、俺はアバタヅラ童貞野郎の精液漬け20年モノなんぞにゃ、興味ないって。キョロキョロしてるとこの地じゃ、男同士、女同士ってのが、やたらひっついてんな。人間てなぁ親しい仲でも、もちっと距離おかなあかんでと、説教したくなったが余計なお節介か（韓国もそうだった。それももっと極端で、肉体関係もなさそうな男連れが、ギュッと腕組みしてたりしてた。あの地は気候が寒いせいもあんだろうが、関西風のひっつきの理由は…?）。

スク藤と天王寺駅で別れてホテルへ向かう途中、うどん&そば、洋食兼飲み屋といった、俺好みの「すえひろ」なる店を見つけ、フラリ入る。結構混んでて相席。簡単なつまみはショーケースにズラッと入ってて、値段が表示してある。セルフサービスなのかな。まずは、ビールとオムレツを頼む。あ～、一人で飲むビールはおいしい。関西味と関西人のしつこさに、もう俺うんざりしてるのかな？

オムレツを待つ間に、向かいのオッサンが帰り、ネクタイゆるめたサラリーマン風の2人連れが座る。かなり出来上がってる様子。が、悪酔いしてる風はない。「おばちゃん、ビール頼むワ」「ダメ。うちゃ、酔っぱらいにゃお酒出せへんのや」「酔うとらんて。まだまだや。ビール一本だけでいんやから」「ダメ。さ、もう帰んなは

れ」「一本だけでもダメか？」（もうこの段階で2人連れの腰は、椅子から離れつつある）「そうや」（おばちゃんはこの間も一人で、あちこちのテーブルに、酒やつまみを素早く運んでいる）「ンなァ、かなわんなぁ」とか何とか言いながら、2人連れはヘラヘラ笑いつつ後ずさり、スーッと消えた。

長々とおばちゃんと2人連れのことを書いたのは、それぞれの対応に感心したから。この手のことはどこの飲み屋でも良くあるが、少なくとも関東地方、ましてや俺がかつて通っていた、京浜東北線沿線の、蕨や西川口では絶対こうは行かない。「ヒック…。おい、オヤジビール！」「今夜はもう止めといたら」「何ィ？ 俺がこの程度の酒で酔う男だと思ってんのか？」「だってもう酔ってるよ」「うるせえ！ ここは飲み屋だろ。黙って客の言うこと聞いてりゃいんだ!!」「おうっ！ 下手に出てるからって突け上がんなヨ。帰れったら帰れ!!」「ざけんな！ 帰らんたら絶対に帰らん。ビール出すまで絶対帰らん!!」

結局オヤジが他の客に忙殺されてる間に、意地でテーブルにしがみついてた酔っぱらいも、20分もすると消えるのだが、この間は店内の客もかなり白ける。が、前出の店のやり取りは、何とも互いが粋というか、スマートだったので驚いたのだ。おばちゃんのキゼンとした所もすがすがしかったが、客も〝酔っぱらいの意地〟なんか振りかざさず、ヘラヘラと消えるあたりのタイミングには、少々の色気さえ感じたくらい。

その夜はぐっすり眠れた。名前から分かるように東映の系列会社だから、映画館同様に小汚ないホテルかと思いきや、ピカピカ。しかも一泊9000円もしない。続く2日目も、「都ホテル」にせずにここにすんだったと反省（「都ホテル」は天王寺駅の上にあるだけで1万円もするし、後述するように、ゴキブリ騒動も起きる）。

翌日は、スク藤とホテルロビーで待ち合わせ、いよいよ新世界、そして釜ケ崎へと向かう。彼がまず忠告する。「塩山さん、これから行く所では、絶対に人差し指を出さないで下さい。すぐにインネン付けられますから」「……」ったく脅かしやがって。ここだって、結局は日本だろうと思ったが…。

（'93・12）

これが〜日本だ〜僕ら〜の国だ〜♬

チンポ丸出しの浮浪者は浅草あたりにも腐る程いるし、一目でシャブ中と分かる姉ちゃんも、最近ではそう珍しくないが、「ここらが釜ケ崎の中心街ですヨ」とスク藤に言われた、通称三角公園付近の、タイヤを抜かれて焼けただれた、10数台の車の群れにはビックリ。公園の中では何十人もの労働者が、たき火したり、バクチク鳴らしたり、ただボケッとしてたり…。新左翼系（懐かしい言葉）支援団体の物らしい看板もあったりで、ここがブロンクスじゃなく、日本だってことをようやく知らしめている。

「ここらで2〜3枚撮ったらいいんとちゃいますか？」「ば…馬鹿野郎。ンな所でカメラ向けたら、命幾つあっても足らねって」「そうですかね。いざとなったら逃げれば…」「ここらで育ったオメと違い、俺は全然方向感覚ねんだよ。オメみてな奴はいざとなったら、自分一人で逃げちゃおって根性だろしな」「へへへ…まさかそんな…。でもさっきから、塩山さんだけジロジロ見られてますねえ。よそ者だって分かんですかねえ。なんでやろうねえ」

よく足元にその人の生活が出ると言うが、ジーパン&ジージャン、安物の運動グツなのに、地元の人が見れば〝関東の出歯亀〟と、一発で分かっちまうらしい。「塩山さん、さっきから段々早足になってるんとちゃいます？」スク藤に言われるまでもなく、歩幅がどんどん広くなってるのが自分で分かる。

しかし妙な街だ。シャブ中女がフラつく傍では、商店がちゃんと

営業。焼けただれた車の脇を、地元民らしい短パンの姉ちゃんが自転車で駆け抜け、フルチンオヤジの後ろには小学校まである（さすがに塀は異常に高かったが）。ただし学生服、セーラー服、制服姿の警官だけは一切見なかった。〝塩ちゃんのちょっと一枚〟（『Ｍａｔｅ』連載）用の写真をパチリパチリやり出したのは、飛田遊廓が近づいてからという情けなさ。「けどスク藤、ここらに比べると新世界なんて、全然健全な街だなぁ」「真っ昼間だからやないですか。夜んなると、もう僕らでもちょっとあの辺は…」「なら三角公園あたりは、どないなっとるんじゃ？」「想像もつきません」「………」

釜ケ崎の迫力と臭気にノックアウトされたその日の夜は、難波で由瞳綺麗センセと待ち合わせ、彼の特集の『オレンジクラブ』の打ち合わせかたがた、居酒屋でスク藤も交えた3人で飲む。若き日の峰岸徹を、色白にしたような美少年のセンセは、デビューした頃はまだ童貞だったとかで、それを聞いた現役童貞のスク藤が、妙に力づけられている様子なのがアホらしかった。センセは『Ｍａｔｅ』1月号から、完全復帰することに。

前日は新世界、釜ケ崎、飛田と、関西のゴールデンコースを見物したので、翌日は通俗な観光コースも少しと大阪城へ。この城からは、大阪の上辺しか見えないようになっている。大阪の役人も知恵を絞っとんのだろうが、〝逆コース〟をたどって来た俺には、ギャグとしか感じられない。

「昼飯は？」「京橋のあたりがいんとちゃいますか？」「遠いのか？」「散歩かたがた歩いてみまひょ」散歩の割にはハードだったが、ガード下にゴチャゴチャ、飲み屋だとかうどん屋が密集する地域へ。うどんはもう飽きたが、中華ももたれるしと思案してると、回転寿司が一軒。「元禄寿司」なら入る気もなかったが、ギョーザで有名な「王将」の看板がかかってたので、「こんなことまでやっとんのか？」と入る。

驚いたのは寿司屋だというのに、レバ刺しが回って来たことである…と思ってよく見たら、色の悪いまぐろだった。もっと驚いたのはスク藤。「寿司なんて久しぶりやなぁ」とか言いながら、そのレバまぐろの皿をさっと取り、「ショーユはこれですか？」と、お茶用の湯の出るレバーを押そうとする。「お前、回転寿司は初めてか？」「小学生の頃、おかんと1～2度…」関西の貧民も、なかなか凄味がある。店のショーユがまた笑わせる。ワサビ入りなのだ。だからこの店の寿司は、オールサビ抜き。〝社長の愛人の実家か何かが、このワサビ入りショーユを製造してんのだろうか？〟と、ついあらぬ妄想を。

かのまぐろから見て、この店じゃ火を通さぬネタは口にしない方がいいと悟った俺は、穴子を取りタレを塗る。スク藤も塗ってんので、奴もレバまぐろに恐れをなし、穴子にしたかと思って見れば、イカ刺しに塗りまくっている。あえて注意はせず、以降は奴となるべく口をきかずに、他人の振りをする。

2人でビールを2本飲んだせいか、少しいい気持ちに。ふと見ると、いかにも2階あたりに、H漫画類をワンサカ置いてそうな雰囲気の書店が。「ここ来たことあっか？」「いえ」「何となく、H漫画の宝庫って匂いがするぜ」「そうですかねえ」気の進まなそうなスク藤を尻目に、2階にトントンと昇ると、あるわあるわ、H漫画の山。妙に一水社関係の単行本が多く、『Ｍａｔｅ』や『ホットミルク』が山積みになってる割には、辰巳や富士美の物が大してない非常に渋い趣味の店。「大阪書店」とか言いましたな（ちなみに通天閣のすぐ下にも、H本屋がありましてん。ビデオや大人のオモチャに混じってH漫画があったんやけど、なぜか一冊残らず辰巳と富士美の物ばっかで、同社の営業力にゃ脱帽するしかなかったもんや）。

天王寺駅の「都ホテル」の部屋に帰ると、昨夜殺しておいたセミみたいなゴキブリの死骸が、部屋掃除してあるにもかかわらず、片

づけてありません。こんな物は、客自ら処理すべきとの配慮でしょうか？（詳しくは『Ｍａｔｅ』１月号の、〝塩ちゃんのちょっと一枚〟を参照）その夜は、週末の昨夜みたいな暴走族のパレードもなく、本当にぐっすり眠れはしたものの、ジャンジャン横丁で、ゴキブリの串焼きを無理矢理食べさせられ、それがまたなぜか美味であったという、奇怪な夢にうなされたのでした。（'94・1）

うちの娘に一指たりとも触れさせるもんか!!

仕事柄、ではなく、年頃の娘を２人持つ父親として『美少女戦士セーラームーンＲ』を観に行く。その「高崎東映」は、つい２カ月程前『新宿鮫』を観に行ったら、全観客数７名という、封切り後数日を経ぬ祭日の午後にもかかわらず、冷え冷えとした景色をかこつけていた小屋である。いくら何でも今回の番組でそれはないだろうと思っていたら、やはり〝一応〟は立ち見まで出ていて、かなりの熱気。

なぜ〝一応〟なのかと言えば、仕事柄ではなく、年頃の娘を２人持つ父親として、種々のアニメ番組を観に行ってるが、〝かなりの熱気〟であるのは認めるものの、その熱気が割と表面的と言うか、クールであるのが分かるのだ（昨今、壊滅的な不入りに泣いている東映系の小屋らしく、早々と暖房を切ってしまったせいもあろうが。いや、ひょっとするとこの日の暖房は、朝から観客の熱気オンリーだったのかも）。

東映系アニメの常と言ってしまえばそれまでだが、例によって脚本はあってなきが如しという点が主因だろう。オスジャリがメインの〝ひっぱたきっこアニメ〟ならそれでもいいんだろうが、より合理的なメスジャリ相手では、このパターンはそう何度も通じない気がする。彼女達がクールなのも、そこらに理由がある気がする。ＴＶとは違う何かを、ナンボかの小遣いを払って観に来たのに、結局は〝映画館でもＴＶと同じセーラームーンやってた〟という、ファン特有の確認行為をするに終始したと言った所か。確認は１回すれば充分。「わざわざ映画館に行く程じゃないヨ」との女のコ同士の口コミで、尻ツボミになる番組かも。

『キネマ旬報』には「興行価値」というページがあって、大高宏雄という、かつて『Ｍａｔｅ』で例の好き者Ｍ子が、〝映画のミニコミ誌を出していて、映画雑誌にもページ持っている、グンゼのパンツをはいた、１〜２度ＳＥＸしただけでやたらにしつこい、ＯＨというヤな奴〟と書いた男に、やや似かよった経歴の男が担当している。そこでは、「…〝女のコ〟主体の興行になるであろうし、その偏りが興行の枠を狭めてしまうだろう。配収８〜10億に収まれば、成功と言っていい類のアニメの映画化になると思う」と予想している。グンゼはともかく、中国製のガラパンをはく俺から見るに、10億の大台は、絶対に無理だと思うのだが——。

で、やっぱしいました。子連れの父親にしては妙に若く、家族連れの間にポツンとはさまれて、付近の大人に変質者扱いされて孤立してる奴とか、席まで行く勇気がなく、浅草あたりの映画館のホモ客みたいに、後ろの壁にヤモリみたいに貼り付いてる連中。特に勇気のない〝ヤモリ連中〟ときたら、２〜３人連れが多く、付近から浮いていることおびただしい。俺ら一家も最初は立ち見。連中が異様な雰囲気を漂わせていたので、思わず娘達を両手でギュッと抱きしめ、「貴様らのような野獣に、うちの娘を一指たりとも触れさせるもんか!!」と、心の中で叫んでました。

野獣で思い出したけど、あれって怖いですねえ。最近、岩波文庫でも出た、Ｈ・Ｇウェルズの『モロー博士の島』ですヨ。70年代のハッテン場として余りにも有名だった、新宿「西口パレス座」で観

た『ドクターモローの島』という映画化作品は、余りにチャチだったけど、原作がここまで凄惨な描写に満ちているとは。遺族のハンコさえありゃ、勝手に臓器売買も公に認められちゃいそうな今読むと、余計に恐怖にリアリティが増す（『ドクターモローの島』は、『ガントレット』の併映だった。そ、バスが銃でハチの巣になんのに、なぜか最後までパンクしないって変な映画。音楽を薬で廃人になったと言われていた、アート・ペッパーが担当。復活の契機になったらしい。そういや漫画屋でも、近頃はよく彼のＣＤが流れてます）。

野獣と言えば忘れられないのが、ディズニーの『美女と野獣』。ようやくビデオで観ました。『アラジン』同様、コンパクトにまとまったいい映画ですが、似たようなのをもう一本観せられるとゲッソリすんので、もうこの路線は止めて欲しい。破綻がなさすぎる作品は度が過ぎると、破綻だらけの映画を観せられるより、時には腹立たしくなる（映画版『セーラームーンＲ』は、〝破綻だらけ〟の次元にも達していない）。

遅ればせながら『グラン・ブルー』も観たんですが、野獣役エンゾを演じたジャン・レノって、『アットーテキ』のタコ多田に、余りに顔がクリソツなのでビックリ。むろん、このタイプの顔の最低バージョンがタコ多田で、最上がジャン・レノだという大落差はあんのだが、似てますって。声がもっと低く、背が高くてやせてれば、〝西新橋のエンゾ〟として、安飲み屋の姉ちゃんにゃ、もちっと持てたかも。

そだそだ、93年中に未だ『真実新聞』第10号が届かなくて、お怒りの全国1万の読者諸君！　年末から年明けの休み中には、絶対、もう死んでも、いや死んでは書けないが、そんな覚悟で執筆する決意なので、たかが500円くらいのこって、そうカリカリしちゃいやざます。

大の男が（大の女も）、そーゆー小せえことで感情的になっちゃ、値打ちが下がるってもん。確かに、『真実新聞』が1部5000円くらいすんなら、そーゆー状態になるっちゅうのも分かる。けど、たったその10分の1のこっちゃないですか。もっとドーンと腰を据えて、「来るなら来い！　くたばれニミッツ、マッカーサー!!」てな、大和魂溢れる態度がとれねえもんかね（この新聞も、俺みてえなのが一人も読者に紛れ込んでなくて、本当に良かったね）。

駄作との前評判の高い『ゴジラＶＳメカゴジラ』も、絶対にガキ共が観に行くってんだけど、何とかごまかせねえかな。駄作でもこの畑は許せちゃうから、やっぱ行くか…。

（'94・2）

テメーの原稿の遅さを棚上げにして、自己主張する谷内和生のけなげさ。

めったにないことだが、約束の日にネームを持って来た谷内和生婆ちゃんが、言いてえことを言って帰った。「塩山さん、何でもいんですけど、私を〝婆ちゃん〟と呼ぶのだけは止めてもらえません。私、吉田さんとは一回り以上も違う、嫁入り前の娘なんですから」「ずいぶんとアゴのたるんだ娘だなあ」「年とアゴは関係ないです。ネームの誤植も多すぎますよ、年末だからって。密教の呪文なんか全然違うし。どこ校正してんですか？　意味が通んなくなってますヨ」「わりわり。けど、ページ順間違われなかっただけ、ありがてえと思うんだな。年末に下版した物の中にゃ、ページミスした雑誌が2～3誌はあるんじゃと覚悟してたが、今ん所は抗議の声も上がってねえんで、ホッとしてんだ」「………」

提案。ヤケジョの中に、次号から〝赤ペン読者コーナー〟を作ります。これは諸君が見つけた誤植を、なるべく編集が傷つくように、

品位なくあげつらうって渋い企画（ちなみに、送りなんざぁ誤植の範囲に入らんちゅう、この業界の元々の国語水準はわきまえた上で応募しろよ）。もっとも、新年から塩山班にも〝グァム島生まれのジミー大西〟風の新人が入り、やくる〜と俺に少し余裕が生まれたので、多少の誤植は減る可能性も…ねえよなあ…（塩班のジミー君も、例の募集にあの風貌で応募するとは、相当な度胸。近頃、毎日読者に監視されつつ仕事してる心境）。

言いてえことを言って、もう谷内婆ちゃん帰ったかと思ったら、ウロウロしつつ一言。「（下痢をこらえるような声で）あんのう、『レモンクラブ』のハガキ見せてくれません？」「うん。けど婆ちゃん、俺がハガキをネツゾーしてると思ってんじゃねえの？　ここにちゃんと来てんだから。鉛筆でくくってあんのが、採用した部分だヨ」「いえいえ。別にそんな疑ってるわけじゃないけど…」「コミケじゃどうだった。同人誌の売れ行き？」「思った程じゃなかったですねえ。あちこちで宣伝した割に…」「だろうなあ。いつまでも谷内だ、DONKEYだ、まいなぁだの時代じゃねえもん。そういや、くしだあしゅらのガキの同人誌は、『Mate』のおかげですと、調子いいことも言ってたナ。1時間で1000部売れたとか言ってたが」「私なんかもう、すっかりお婆ちゃんの世代だし…」「な、俺も全く根拠のねえこと言ってんじゃねんだ。それよかンなファクスの横に突っ立っとらんで、ハガキはソファで読めよ」「やですよ〜。あのソファで、塩山さん時々宿泊してるって噂じゃないですか。気色悪くてそんなソファになんか…」「………」「そりゃそうと、弘田三枝子のCD、必ず貸して下さいね。良かったら私も、藤山一郎のCD持って来ますから」「………」今後は吉田婆ちゃんは吉田おばさんとし、婆ちゃんは谷内和生のみに用いるとすっか。

んなこんなで、94年もろくでもねえ毎日が過ぎて行くのだが、たまにゃうれしいことも。事務所のイマジオMF530が、先週の金曜の夕方、いきなり20Pのコンテを吐き出したのだ。題して「戦えっ！すーさんっ!!」そう。妖華御大の久々の復帰だ（事前予告もなく、いきなりコンテを送って来る所が奴らしい）。完全に復調したわけではないだろうから、2カ月に1本がいい所だろうが、今後は『Mate』に専念させるので、復帰予定の4月号か5月号は必ず買ってネ（ちなみに『Mate』とは、A5判平とじの520円雑誌で、毎月16日発売の一水社の本。むろん㊏の無責任編集雑誌。通販等は、03〜3437〜6315の一水社まで。また、3月中旬発売の『メロンクラブ』4月号は、妖華センセの特集らしい）。

といったPRめいた文は、余りくどいと読者に嫌われるので、こっちゃ置いとこうと思って横見たら、『ホットシェイク』2月号がある。某誌のコラムの資料用に、事務所から持ち帰ったのだ（今聴いてるCDは、ロニー・ジョンソンという渋いお爺さんの奴。有名な曲らしんですが、「Tomorrow Night」という初めての曲に、しばしシャープペンを放り出して酔う）。

その『ホットシェイク』、吉田婆ちゃんの『ファンタジィカクテル』より少し出たのは新しく、メンバーも無名なのが多いけど、婆ちゃんのよりもパワーがある。いかにも安月給な下請け（『漫画ローレンス』や『漫画チェスト』で有名な海鳴社）の漫画好き編集者が、欲求不満を全部仕事にぶつけてるって感じが良い。『ファンタジーカクテル』より、早く正式創刊されるかもと、余計なこともふと思ったが、読者欄を見てしみじみとしてしまう。

「SHOT　シェイク」と題した読者コーナーは、よくある女のコが相手するって設定なのだが（ちなみにこれも、『ファンタジィカクテル』の姉ちゃんのより面白い）、登場する読者の中に、痛ましい名前を2〜3見つけたから。三峰徹なんてどうでもいいけど（おい三峰。婆ちゃん班では舞センセが、よくあんたのを開封せぬままゴミ箱に捨ててるが、今後は㊏班でも正式に〝開かず組〟扱いに

するので、そのつもりで勝手に投稿しやがれ）、あの〝とりやん〟がおったのです。

一体、何だろコイツって!?〝投稿者としてのダンディズム〟がこれ程ないやつとは。やはり、化石ムッチーの彼への批判は当たっていたと言ってる俺様も、どーゆーつもりだろ。だいたい、他誌の読者欄ならまだしも、そこへの一般投稿者の姿勢にまでケチつける俺は、投稿者界のKGBかよ？（一コラムのために買った資料用雑誌から、何度もダシ取ってるだけだけど）

さ〜て、もう本欄も残り数行だし、弘田三枝子の『ミコちゃんのヒット・キット・パレード』を、谷内婆ちゃんに貸しちゃう前に、ジックリ聴こうかな。いや、やっぱりその前に、荒木一郎の「紅の渚」を聴きつつ、田舎の水道の冷たい水でも飲んで、昨夜の酒を洗い流そうか？

（'94・3）

エロ写真売りみてえな「丸井」の店員の下品さについて。

渋谷に数年振りで行ってみる。いつ行ってもつまらぬ街だ。薄っぺらという形容があるが、この言葉を冠することさえはばかられる、チャチさに溢れている。いや、こういう言い方をしては、チャチという言葉に失礼かもしれぬと言ってちゃ、話は前に進まない。まともな人間は、こんな街をほっつき歩いちゃいない（その日の俺も、多分精神状態に異常をきたしていたのだろう）。

とはいえ22年前、初めて北関東のド田舎から上京した際、俺はこの街を昇って降りた、目黒川沿いに1年程住んでいた。なのに、昔っから肌になじまない。邦画を例に取ると、街が丸ごと東宝してる。日活ほど無国籍であれとは言わないが、新宿や池袋みたいに東映調に下品を極めるなり、浅草や上野のように、松竹風の枯淡の域に達するなりの、色合いを出して欲しい（ここで言う所の東宝とは、一昔前の東宝風青春ドラマのイメージではなく、都心の一等地に自分の映画館を持ってるからと威張り、下請けに制作させた映画を安く買い叩いては上映し、一人大儲けしている、悪徳不動産屋といった姿）。

あちこちブラついたり、デパートの散歩したんですが、月曜日の昼時という時間帯のためか、どこもガランとしていました。一番印象的だったのが、西川口のピンサロの呼び込み並に、しつこく声かけちゃ買わせんとする、「丸井」の店員の厚顔無恥さ。所詮は月賦屋で、お里の知れる連中が上に立ってる三流デパートとはいえ、もちっとマシな社員教育が出来ねえのかよ。俺がボケッとTシャツ見てたら、50くらいのバーコード脂ギッシュ野郎が、エロ写真売りみてえにススッと寄って来て、「これ今雑誌で、一番ヒョーバンのヤツなんでス！」だっと。思わず俺、そいつの奥目の小沢一郎みてなアホヅラ、10秒くれ見つめちゃったぜ（この月賦屋デパート、どの店舗もエスカレーターや店内がやたら狭い。あれは、キャッチセールスまがいの店員の商法を考えて、あえてしてんだろな）。

その点、やっぱ「西武」は偉いよ。あんだけ屋台骨が傾いてんのに、相変わらず店員同士で無駄話してんので、客はジックリ商品が選べて助かる。ついB館の地下で、5000円の黒いベルトを買ってしまった（が、胴に当てんのを忘れてた。家でしてみると短か過ぎ、結局女房に取られてしまった）。

次に本屋（安心しなよ。漫画専門店なんぞに、わざわざ休みの日に行くわけねえっての）。名前だけは聞いていた、「パルコブックセンター」ってのにまず行って見る。な…何ィ――これ〜っ!! 悪趣味――!! どっかの西洋かぶれの設計屋が悪凝りしたんだろうが、むやみに背伸びしてスペース取りやがって、外国の大学の図書館に野放しにされたようで、とても落ち着いて本を選ぶ雰囲気じゃない。

店員も客もこれまたすかし切って、雰囲気も最低。西武的ブンカ商売のウソっぽさが、これほど具現化してる場所ねんじゃねえの（何しろ広いので、人影のない春陽堂文庫の棚のあたりなら、野糞も出来そう。むろん拭く紙は万引きして来た、『広告批評』あたりがええんとちゃう？）。

時たま都会見物するのは楽しいが、疲れるねえ人混みは。２～３時間ほっつき歩いてたら、富士山の５合目くらいまで歩いて登った後、３度ばっかＳＥＸした心地になりました（３度というのは、例え話とはいえミエが過ぎましたね。ただ、飯田橋や髙崎くんだりと比べると、若い姉ちゃんの数が多く、目の保養にはなりまス）。

本号が発売になんのは６月13日。地方じゃ２～３日遅れるらしいが、６月17日の夜の東北新幹線に乗って、俺、ＤＯＮ、そして『Ｂｅａｔ』のま～の３人で、仙台珍道中って予定になってんだけど、実現してんでしょうかね。さっき「飯田橋書店」で、ＪＴＢの『仙台・松島』のガイドを買って来たんだけど、何もねえ所だね。岩手の女工のやす○が、工場休んで案内してくれる予定だけど、案内する程の名所なんてあんのかな？　やっぱ神戸あたりにしとくんだったかと、内心思いはしたものの、一歩も足を踏み込んだことのない東北地方にも、死ぬまでに一度は行かねばならんだろうし（でも、なまはげが出たらおっかねえなあ）。

おっかねえといえば、毛虫はその代名詞で、隣のシマ姉ちゃんはこの話をする度に震え上がってるが、ワシの豪邸（エロ漫画御殿）の裏庭の桜に、大量に毛虫が発生しましてね。前から木の枝の別れ目のアチコチに、白いクモの巣みたいなのが出来てたので、「？」と思ってたのだが、咲き終わって新芽が出始めると、そこから毛虫が洪水みたいに溢れ出し、あっという間に木が丸裸。近所のオッサンに、晴れた日には毛虫があちこち這い出してしまうが、雨の日は巣の周辺に集まるので、竹の先に灯油を浸したボロをハリガネで固定、火を付けて巣をあぶると良いと教えてもらったので、早速やってみる。「ウッヒョ――ッ！　こいつぁ面白い!!」白い巣が火でジュジュッとなると、中からまだ小さいのを中心に、30～40匹の毛虫が、体をよじらせながらボッタボッタと焼けこげて落ちて来やがる。火のついたボロの上に落ちて、コンガリこうばしい匂いを放つ奴も多い。上を向き、高い所に火を掲げてるので、手もかなり疲れてるはずなのだが、人混みの渋谷を歩いている時とは異なり、なぜか体と心が、一昔前の鳥丸せつ子のオッパイみたいにはずんでる。

翌日。巣は退治したものの、細枝に難を逃れてホッとした落ち武者が、再び太い幹にポツンポツンと愛しい姿を現わしている。しかし、連中の安堵の時は短かった。いきなり小型スコップの歯が、胴の上に降り注ぎ始めたのだ。「こいつぁふぁんとむ、この太目なぁ谷内婆ちゃん、おっとこいつはくしだあしゅらで、こいつはＤＯＮ助…」さわやかな朝の光がまぶしい。

（'94・7）

管理過剰な仙台という都市の退屈さは、日本の象徴なのか？

近頃どうもボケたってなグチを吐くと、「ンなのは３年前からだろう!!」と半畳が入りそうだが、その通りなのかも。俺が漫画編集より力を入れている、表紙のいわゆるコピーもどきに、切れがなくなっているのだ。気がつくうちはまだ救いがあるのかもしれないが、訂正がきかない編集段階や、見本誌が製本所から届いてからじゃ仕方ない。

例えば本号の〝社会党のデモクラッツめ俺のケツを舐めろ号〟は、どう考えても〝社会党のデモクラッツめ俺のケツを舐めやがれ号〟でなければならなかったし、ましてや『Ｍａｔｅ』７月号は、絶対に〝中卒の女工達は屋上でバレーボールをしていた号〟にすべ

き所を、〃中卒の女工達は屋上でバレーボールをしてた号〃にしてしまったのは、いくら御天道様に土下座しても、許される行為ではあるまい。

　で、仙台。市役所の脇に、〃娘の売買あっせんします〃との看板が出ていたり、かまくらの中で遊ぶホッペタの赤い子供を、なまはげが脅かしてギャンギャン泣かせてたり（6歳の頃、家で取っていた『家の光』に、なまはげの写真が載ってたのを見て恐怖に戦(おのの)いて以来、俺にとってホラーの象徴になった。ひょっとするとあれは、秋田の方の風習かもしれないが、関東の人間には、岩手、秋田、宮城、山形は、位置の区別も全然ついとらんのが普通だから、どうでもいいや）、ジャリ道を行く馬車の荷台の、ギター片手の小林旭まがいの皮ジャンを着た地元青年団の若者が、「アンタ、東京から来た人ですね？」なんて質問すんじゃないかと心配したが、駅に降りて見れば東北一の大都会とかで、地下鉄まで走っとんだと。チッ！

　約束の18日の午前11時に、仙台駅構内の狐に股がった伊達正宗の白い銅像の前に、ま～センセと2人、何とか無事にたどりつく。DONKEYのヤロは、またもや締め切りの遅れで、東京駅発8時36分発のやまびこ113号に間に合わず、原稿を入稿した後（徳間関係の仕事らしい）、宿泊先の「ホテルユニバース仙台」で、午後3時頃のチェックイン時に待ち合わせることに。全てにだらしのない、ムレ肉汗ダルマではある

　やす○姉ちゃんはっと、よく見たらやっぱ、股がってんのは馬だった正宗像付近の姉ちゃんらの、脚のチェックを開始。イラストや字、頭の中身はともかく、脚だけは抜群の姉ちゃんだと記憶している。数分後、「あんれま～、遠えとこよく来ただがやなぁ」と、心のなごむ御国なまりの良く似合う、超ミニ姿の姉ちゃん登場。「いや～、御迷惑かけますが、今日と明日、よろしくお願いします」「ったたこと気にすんじゃへっぺ。ボボがツビしてべっちょごっこすっか？」（注＊当地の方言で、〃DONKEYさんはトイレにでも行ってるのか〃と尋ねている。当編集部は、先住民族の言語は常に尊重する立場に立つものですが、読者の便宜を考え、以降、翻訳してお伝えします）

　世間話をしつつ、まずは軽く市内見物。お～お～、道路や歩道の幅がド～ンと広く、3人で『Gメン75』風の横一列歩きをしても、誰ともぶつからんで助かる（が、やす○姉ちゃんの太腿目当てに、多数の視線がレーザー光線のように、一極集中したのはやむを得まい）。SS'30とかいう、大宮のソニックシティとクリソツなビルに昇り、市内を一望。ウム。確かに何にもないとはいえ、きれいな街じゃあ。が、青葉城見物は明日するにしても、今日は一体何すりゃいいんだ!?　クソDONが到着するまでは、奴だけ残して遠出も出来んしの。ホント、いまいましい奴（実はやす○姉ちゃんに、GWの四国、大阪での読者集会でのゴシップを色々と聞き、楽しんでいた。おい！　伊予三島のポッポ宮本。姉ちゃんはすっかりオメのことが気に入って、旅行中は終始エクスタシー状態だったってよ。一日も早くお嫁さんにしてくれと、青葉城の新緑に向かって絶叫してたゾ）。

　話はいきなり19日の午後に飛びます（その間のことは、他ページや、『Mate』に書く予定）。〃裏街なき整理され過ぎた超管理都市・仙台〃の要所要所を踏破した我々4人は、帰りの電車にはまだ時間があるので、当地のエロ本屋事情の調査に乗り出すことになった。考えてみりゃ、なぜ我々トリオがこの街に来たのか？　近頃、急激に投稿者が増えたからだ。ただ、着いて丸1日以上たつのに、なかなかそれらしい本屋が見当たらない。

　〃裏街がない〃ということは、どの街にもある、ジジ&ババが深夜まで営業してる、ウナギの寝床タイプの、エロ本&エロビデオ&おまけに文庫本少々の書店がないってことだ。整理され過ぎて、ジョ

ージ・オーウェル風でさえある、アーケード街の書店に何軒も入るが、雑誌や単行本の影も形もない。焦る4人。半ばあきらめ、駅の近くの「仙台書店」の前に。「何かここは匂うっすヨ」とDON。見れば店頭に、『海賊版』、『スーパーロリポップ』、『外伝』、本誌などがドド～ンと平積みされている。2階はコミックコーナー。やす○姉ちゃんを先に歩かせ（つまりパンチラ鑑賞しつつ）、同書店の2階に昇るイカれた3人（他人から見りゃ4人か）。2階はA5判の巣で、『Ｂｕｎｎｙ』、『ＳＨＡＫＥ』、『Ｍａｔｅ』、『アットーテキ』、『Ｂｅａｔ』がバッチリ。「俺のが一番早い発売日なのに、まだ10冊も残ってるぅ…」と、顔を曇らせる、『Ｂｅａｔ』のま～編集長。雑誌類は充実した店でしたが、単行本が少ないのが弱点。

その後、数軒の書店で無駄足を踏みつつも、ついに僕らはたどり着いたのだ。究極の充実振りの「共同書店」に!!（御当地の方、遅れてゴメン）3階のコミックコーナーは今時珍しく、ビニ本化されてないので、朝の山手線並の混雑振り。絶頂期の「まんがの森」の3階を思い出す異様な熱気。「すっげ。あ～、僕の『ぽかぽか☆ファンタシィ』もある～。それもあんなに～♥」とDON。（'94・8）

ああ～高崎は～今日も～雨～だった～♬

前号で〝続く〟と書いたけど、何となく仙台ネタにも飽きたので、例によって続きません。今月は無意味に〝高崎〟ネタ。昨夜、くしだあしゅらの『Ｍａｔｅ』9月号の、「一発劇空間勝負!!」のネームもらって、ついでに「高島屋」の隣にある、「一兆」って居酒屋で飲んだんだよ。奴のダチも来た。臨時アシしつつ、わざわざ高崎から水道橋の東デに通ってる、とをるのヤロがくっついて来るのなら分かるけど、何なんだろこのバカヤロは。これで3回目だけど、どっかの菓子屋の店員らしいが、バカヅラしてくしだに金魚のゲロみてについて来ちゃ、ビール飲んだり焼きうどん喰ったりして（むろん金は俺持ち）、ただボケ――ッとして帰ってく。どんな精神構造なんだ。タダ酒続きに心を痛め、ビールを注ぐくらいすりゃいいのに、胸張って俺の注ぐビール飲んでんのにゃさすがに頭に来て、「テメーこのヤロ！　いつも手ぶらでタダ酒飲みに来やがって、しまいにゃぶっ飛ばすぞ!!　黙ってたって、店の大福の20個や30個持って来やがれ、この脳ミソカラッ風ヤローッ!!」。けど、元々が鈍いヤロらしく、ただ目を白黒。にぎり飯をノドにつかえさせたのは、隣のしゅら公であった。バカと下着泥棒と露出狂は、どこにもいるからンなこたいいが、問題はどうしたらＳＥＸに強くなれるか。ウ――ム…てな話なわきゃねえだろ。Ａ５判雑誌不振を、どうやって盛り返すかだよ。

漫画屋では、『Ｍａｔｅ』、『ＳＨＡＫＥ』、『Ｂｅａｔ』と計3誌のA5判誌やっとるが、返品の山だもん（他の2誌はともかく、先月号のヤケジョにも書いたように、『Ｍａｔｅ』のバックナンバーだけは買おう。問い合わせ先は、03～3437～6315の一水社。過去一年分くらいは在庫があるとか。本誌では(塩)もかなり自制してますが、『Ｍａｔｅ』は〝塩山ワールド一年中爆発状態〟との噂なので、薬なしでシャブ中になれるって評判も本当かも）。あのハイレベルな内容の、『ホットミルク』や『アットーテキ』（？）でさえ苦戦中らしいから、こりゃもう完璧にドツボかなんて弱音も出る始末。しかし、自分のだけが悪いのならともかく、競合誌のほとんどが地獄ってな場合は、ハッキリ言って打つ手がない（『Ｍａｔｅ』みたいにゲリラ的に、〝塩ちゃんのちょっと一枚〟とかのコーナーで、菜摘ひかるのマン毛写真や、麿雪みんの太腿、ＤＯＮＫＥＹの半ケツを載せたからって、大勢にゃ何の影響もない。気休め。何もしないと不安なので、バタバタしてみるだけ）。

グチる振りして、自誌の宣伝に務めるってのも、どっかみじめだからもう止めるけど、近頃の郵便局も本当にふざけ切ってる。値上げしたら、余計にひどくなった。諸君らのドラム缶で焼かれる運命にあるハガキを、近頃は普段の日にゃほんの少ししか持って来ないで、締め切り前後にまとめてドーン。もちろん、読者が締め切り近くにドドッと出すってのは分かるけど、前はこれ程じゃなかった。「ンなエロ漫画誌のハガキなんぞ、チョロチョロ配達せんで、まとめて持ってきゃ充分!」て態度がミエミエ。ちっくしょう!! 今度、連中の配達のバイクを、引っ繰り返してやろうかな。雨の降る日にコッソリ(栄昇ビルへの配達が終わったのを見計らって)。…と、ここまで書いたら疲れちゃった。今は子宮ガンで入院中のシマ姉ちゃんに代わり(本当は切れ痔)、臨時でちん太にバイトに来てもらってるので、編集後記、いや、編集中記を書いてもらって行数稼ぎを。ではちん太さんどうぞ!

どうぞって云われたってねェ…。どうも、勤労学生のちん太です。塩山さんがいきなり「あきた」とか云って原稿用紙をわたしてくれちゃったんスけど、そんなことおっしゃったってアンタ…。別に特別手当てが出る訳じゃなし。まあいいや。これも仕事さ。現在、漫画屋は異様に寒いっス。冷房バリバリです。塩山さんはアクビなどしつつソファでぐでぐでなさっとります。こいつぅ…。やくる〜とさんは何やら作業なさってます。きっと下っぱにゃ任せられん重要な仕事なのでしょう。どうでもいいけどペーパーセメントが水気がとんでネバネバッス。まるで納豆のように糸ひいてます。うひー。目の前にある缶はきっと薄め液なんだろうけど…頼まれもしないことをわざわざすることもないよなー。そういや、久々にここのバイトに入って、回ってきた仕事といえば便所掃除だのソファカバー洗いだの、私ってば相変らずシンデレラのようだわ(↑塩山さんはきっと「ケッ、よく云うぜ」とか云う。「金やってんだから黙って働いてろ」とか絶対云うんだ)。あー、で、何だっけ。まあいいや、もう行数尽きるしィ。てなもんですけど、少しは楽になりましたか? 塩山さん。

…ったくもう、ハナっから何も期待してねえっつっても、もちっとはマシなことが書けんじゃねえかと思ったけどな。近頃の女子大生って、阿宮美亜の漫画通りなんだなあと、つくづく思っちゃう。だいたいだ、ンなに体格のいいシンデレラがいちゃ、王子様は骨折しちまうって。骨折で思い出したけど、古くからの読者諸君! 昔、あだちけんてアホダラ漫画家がおったの覚えとるけ? 奴は昨年の初めから漫画家を引退し、運送会社の総務課に勤務してるんだけど、先月、単行本の増刷の件で電話したら笑っちまった。あのヤロ、昨年末に会社の連中とスキーに行って、OLにいいカッコ見せようとして転倒。複雑骨折して、この春にようやく退院したものの、まだ自宅療養中でやんの。しかも、30分以上は上半身も起こしてらんねんだって。元アホダラ漫画家の1人や2人、廃人と化そうがどうでもいいが、これで文字通り、〝白痴トリオ〟と称された、かおる、くらむぼん、あだちけんは、業界から姿を消す。それにつけても、前出のやす○やちん太をはじめ、投稿者の寿命ってなあ、漫画家より長えのか? 何かなあ…(学校のセンセみてな心境)。('94・9)

仕事場で寝るのは、古女房をオカズにオナニーにふける以上にむなしい。

遠距離通勤を始めて一年。通勤に自信がついたので、西川口にボロアパートを借りることにした。自信がついたのにアパートを借りるとは矛盾してるようだが、実はそうでもない。今までも仕事が忙しくなると、週に1〜2度、漫画屋の事務所に寝泊りしていた。古

田婆ちゃん寄贈のソファベッドで（それを知ってる谷内和生おばさんは〝塩山さんの寝汗のしみついたソファには座る気がしない〟と言って、決っして事務所に来てもソファに腰かけません。本当はその汗の香りの中で、まどろみたいくせにィ!!↑イヒヒヒ）。ただやっぱ、疲れるんですよね、昼間のお仕事の場所と同じ所で横になんのって。精神的にめげちゃう。

それと騒音。事務所の電話って音を消す機能がないので、深夜のイタズラ電話で、熟睡出来ぬこともしばしば（深夜に一人マスかく傍ら、イタズラ電話にふける人生も、個人的には興味がないわけではないが、少なくとも俺が泊った夜だけは、一水社とかコミックハウスにかけて欲しい）。ようやく寝つくと、〝シュパーシュパー〟との鈍い音に、明け方目を覚まされる場合も。ファクスの音だ。ったくもう、朝の4時だ5時だに、ネーム送り付けんじゃねえよ!!（夜明けのネームの送り主というのが、なぜか必ず吉田婆ちゃん班の『モーリス』の作家陣。やおい系漫画家は、夜明けのコーヒーを飲みつつ、ネームを切る習慣があるの？）

仕方なくアパート借りたんだけど、風呂なし6畳でトイレ付き、台所3畳のスーパーボロアパートが、何と3万6千円もすんだもん、日本の住宅事情は悲惨。ただ、妙に懐かしくはある、こういう木造ボロアパートって。20年前の俺の学生時代は、これが主流派だったで、つい、「あなたはも〜忘れた〜♪」てな、ドチンケなメロディが口をついたり。さすがに掃除に来た、握り飯とタコヤキしか人並に料理は出来ず、気の強いのと地黒肌しか誇る点のない糞女房も、「安心したわ。あれじゃどんな物好きの女のコも、引っ張り込めないわヨ」とほざき腐ったほど（アパートを借りた件は、ま〜センセとも関連がある。ちゅうのも、今まで吉田婆ちゃんがやっていた『SHAKE』も、『Beat』共々彼が担当することになったから だ。彼は今まで昼間の仕事を終えた後、夜だけ来て仕事してたのだが、2誌となるとそうも行かず、昼間の勤務は辞め、終始漫画屋で働くことになった。つまり机が一つ増える。で、例の俺の汗のしみついたソファベッドは、シマ姉ちゃんが欲しいと言うので、田端の彼女のアパートにもらわれて行った。シマ姉ちゃんは、谷内婆ちゃんと違って心が素直に出来ていて、感心感心。『オレンジクラブ』も10月売りから、オール描き下ろし雑誌に生まれ変わるらしいので、ヨロピク。時を同じくして、同誌の増刊号を、コミックウハスが担当するとか。『キャンディータイム』増刊の、『ファンタジィカクテル』を吉田婆ちゃんがやってんのと、逆の関係になるわけで、大いに楽しみ）。

往復5時間（!!）の通勤を一年続けて、身についちまった癖が一つ。本をほとんど、電車の中でしか読まなくなった。9時30分に自宅を出て、事務所に着くのが12時少し前。30分間は乗り換えや駅からの徒歩で、純粋に電車に乗ってるのは約2時間。何か読まないとどうにもならない。その反動か、週末家で本を読もうとすると、通勤中みたいな錯覚に襲われ、イライラ。おかげで近頃土日は、プールに行ったり、犬の散歩をさせる以外は、録画しといたビデオばかり観てる（今週末も、『赤狩り・マッカーシーの右腕と呼ばれた男』、『クライング・ゲーム』、『嵐の勇者たち』、『アントニオ・ダス・モルテス』と、4本も観ちゃいました）。

今月は有名文化人みたいに、どんな本を近頃読んだかを、えっらそーに公開。まず7月。『立花隆対話篇／生死、神秘体験』（書籍情報社）↓対談相手が馬鹿揃いで、立花本としては珍しくスカ。『同時代を撃つⅢ』（立花隆・講談社文庫）↓ 切れ味抜群。『殺人者の烙印』（パトリシア・ハイスミス・創元文庫）↓初期の、ハードリー・チェイスに似てませんか？『ナチュラル・ウーマン』（松浦理英子・河出文庫）↓僕も女のコのアソコは、性器より肛門が見たい方。『映画が幸福だった頃・田中徳三映画術』（田中徳三・綾羽一

紀・JDC）→幾ら何でも安易な本造り。面白い素材ゆえに、余計に腹立たしい。『ゴーマニズム宣言④』（小林よしのり・扶桑社）→まあ、頑張って下さい。『文明の逆説』（立花隆・講談社文庫）→フェミニズム批判に大笑い。『深沢七郎ラプソディ』（福岡哲司・TBSブリタニカ）→4流ドアホ田舎教師のデッチ上げた、既に知られたネタばかりの5流ゴシップ本。『ロッキード裁判批判を斬る⑵』（立花隆・朝日文庫）→〝エロ漫画界の女渡部昇一〟こと阿宮美亜も、無駄ではあろうが一読すべし。『本など読むな、バカになる』（安原顯・図書新聞）→村上春樹批判なんぞ、今さら190枚もかけてやる必要があんの？『貧困なる精神Y』（本多勝一・毎日新聞）→事務所近くの「飯田橋書店」の店員は、安顯や吉本隆明、蓮實重彦に比べ、この方の本は邪険に扱います。子供みたいで面白い。『誰が映画を畏れているか』（蓮實重彦・山根貞男・講談社）→山根の〝お座り振り〟が、泣かせかつ笑わせる。四方田犬彦の本は近頃全く買いませんが、本家はやっぱり迫力が。『ファーブル昆虫記⑼』（岩波文庫）→1巻を1年前から読み出したが、全10巻読破はなりませんでした。ま、あわてずにジックリ読めばいいタイプの本ですし。以上、13冊。

今日は8月21日。まだ一度も泊まったことのない例の6畳に行って、本の読みだめでもしようか？　（'94・10）

消えていいよ。何よりも恥ずかしい言葉、名画座。

名画座って言葉も、すっかり死語化しつつありますが、先日、例のボロアパートに泊まった翌日、久々に「文芸坐」に行った。『蜘蛛女』、『バッド・ルーテナント』の2本立てで、1300円。入場料も上がりましたが、この手の好き者向けB級映画がまず上映されない、地方住まいの人間からすると、割高とは感じません。10時過ぎの第1回目に入場したのですが、祭日とあってかドカドカ入場者も増え、2時頃帰る時には、8割方席が埋まっていたので驚く。北関東の映画館だと、通常は日曜、祭日でもこの日の「文芸坐」の入りの逆、つまり、2割も席が埋まってればいい方だから。

寒々として人影のない地方の映画館も、それなりの趣がないわけではありません。が、やはり去年の夏まで通い慣れていたことか、「池袋シネマ・セレサ」の人混みの中で映画を観ると、〝若返ったような気がする〟所を見ると、自らの中年オヤジ振りも、堂に入って来たのでしょう（41って年も半端。どうせなら50代とかに、一足飛びでなりたい）。

と思ったのは、期待外れだった『蜘蛛女』で居眠りして体力をつけて観た、『バッド・ルーテナント』でのハーベイ・カイテルの、余りにも粋な中年悪徳刑事役の、オナニーシーンの影響であろうが（本作でカイテル旦那は、警察手帳で2人連れのアーパー姉ちゃんを脅し、一人に尻を出させ、もう一人にフェラの真似をさせて、オナニーにふける。車から引きずり出して犯せる立場なのに。ダンディとしか言いようのない発想で、脚本は誰だか知らぬが、並の奴じゃない）、テメーのブヨついた体のことも忘れて、カイテル旦那についつい憧れちゃうあたりは、10代の鼻タレ小僧時代と進歩がなさすぎてつい赤面。

月の半ば頃はそんなこんなで、少しは余裕のある日を過ごしているが、20日を過ぎると一日一日が地獄。特に9月は、本誌にふぁんとむ、女ふぁんとむこと谷内和生、男谷内和生と化しつつある真弓大介、『Mate』にスーパーバカヤローくしだあしゅらと、ロクでもねえ連中の勢揃いで、顔面神経痛寸前。単行本の売り上げの悪い連中から、切り捨てて行くつもりだけど、いきなりバサバサやると、残ったのが伊集院808だけというギャグ景色になりかねない。

すぐにゃ眉毛の辺の筋肉のピクピクは、収まりそうにありません(最近すっかり白髪が増えた。もう3年もすると、二谷英明かも。俺、本当はリーバン・クリーフ調の、前からツルンのハゲ頭に憧れてたのに。チェッ!)。

最近観た映画で一番面白いと思ったのは、WOWOWで放映した、東宝の加藤大介主演の『大番』シリーズ。獅子文六の原作で、東京や地方のロケシーンがふんだんにあって、1950年代末の日本の風景が堪能出来る。ストーリーは、百姓のこせがれの出世物語ですが、加藤大介のキャラのあくの強さにうんざりして来ると、原節子がタイミング良く登場し、眼と心を清めてくれる。俺、つまり読者諸君の親父の世代だと、小さい頃TBS系で、『図々しい奴』という番組をきっと何度か見たと思うが、その柴田錬三郎の原作は、『大番』をネタにしてたんだと、今さら納得しつつ、千葉泰樹監督の職人芸に見入っていた(『図々しい奴』は、当時同じTBS系でヒットしていた『ザ・ガードマン』同様に、結構Hっぽいシーンが登場したために、小学生の間では必見番組だった。谷啓の主題歌、〝♪図々しい奴と〜人は言うけっど――♬〟という曲もヒット、よく旅行のバスの中で皆が唄ったもの。僕が今のように、控え目で謙虚な中年になれたのも、この番組を反面教師としたから)。

本、7月は13冊読めたのに、8月はさすがに10冊がやっと。読んだ順に。『人はなぜ笑うのか』(志水彰他・講談社)↓題名に惹かれて買った人の9割は、〝カックーン!!〟。『ふくろうの叫び』(パトリシア・ハイスミス・河出文庫)↓評判通り、一気に読ませる。『ノモンハン②、③』(A・D・クックス・朝日文庫)↓米国が、〝日本軍の戦車は良く整備されてピカピカにみがかれてたが、無骨なソ連軍戦車の敵ではなかった〟との意味の分析をしたと引用してあるのを読み、日本人がマイカーを磨きたがるのは、昨日今日に始まったことではないと知った。『水の墓碑銘』(パトリシア・ハイスミス・河出文庫)↓コクのある女房じゃないのよ。何も殺さんで、嫉妬して楽しみ続ければ…。『ロッキード裁判批判を斬る(3)』(立花隆・朝日文庫)↓同文庫から出てるはずの、立花隆の『田中角栄新金脈研究』は、本屋で見たことねえぞ。勝手に絶版にしてんじゃ?『言いたいこと、言うべきこと』(田中康夫・扶桑社)↓宅八郎のこの人への攻撃って、全然説得力ない。エネルギーは、『週刊ポスト』の記者に集中すべし。『超言葉狩り宣言』(絓秀実・太田出版)↓筒井康隆の昨今の商人振りには、鈴木邦男同様ムカッ腹立ててたので、納得。が、鈴木と違い、俺は筒井の小説は一切買っとらん(実を言うと、最後まで一冊も読んだことがない。3〜4回チャレンジしたが、50Pくらいまで来ると、吐き気がしちゃう。もっと下らん小説を最後まで山と読んどるくせに、なぜなんだろう?)。『百年戦争(上)(下)』(井上ひさし・講談社文庫)↓この人の長編小説、久し振りなので楽しめた。大西巨人の『神聖喜劇』っぽい所がイカす。

これ、WOWOWの『ロボコップ3』観ながら書いてんだけど、終わったらくしだあしゅらに電話しなくっちゃ。奴の『Mate』のネーム、まだ出来てねんだよ。他の連中は、漫画も大半が入稿済みなのに。ヤローも何とかしねえとな。

('94・11)

海猫よ〜さみし〜か〜なっ〜い〜か〜♪

久々に小林旭ネタ。旭の歌の全盛期はコロムビア時代だが、知っての通り、同じコロムビア所属の大歌手、美空ひばりと離婚すると、追い出されるようなカッコでクラウンに移籍する。クラウン時代にも、「自動車ショー歌」、「グングン節」等のナイスな曲がないわけではないが、やっぱコロムビア時代に比べて陰があるのだな、ファンから見ると。だから、『Mate』の応募方法&プレゼントコー

ナーで、ジャケットを紹介したこともある、コロムビア版の2枚組LP、『マイトガイゴールデンヒット』なる、黄赤ベタ地に、黄色いサイケデリック文字が踊るレコードは、俺の家宝。

が、妻帯者の宿命で、何度も転居してるうちに、ボロいステレオもいつの間にか粗大ゴミ置場に消えて、世はいつの間にかCD時代。家宝も出番を失っていた。むろん旭のCDも出ているが、今出回っているのは、現在所属してるらしいポリドールのば〜っか。クラウン初期の曲ならともかく、誰がンな目黒川沿いの、ドブ臭い所にある会社のCDなんか買いますかっての（俺は23年程前、この近辺に一年ばかり住んでいた。よく読書に行った、大橋図書館はまだあんのか？　東急修学旅行会館て、やたら覚え易い建物もありましたが、山手通りの反対側の、青葉台の中にポツンとあった超ボロアパート、万年荘同様に、跡形もないのでしょうねえ。〝ひばり御殿〟も、その前後に青葉台に完成したんだっけ）。

　体育の日に、とてもあのノータリン監督、関本郁夫が撮ったとは思えぬ佳作、『東雲楼・女の乱』を「高崎東映」で観た後、「美術をはじめとする、映画作りのプロの意地が、画面に溢れ返ってたな。永田雅一時代の大映映画を観てるような気がした。関本のバカも、いつもの思い入れ過剰なイモ演出を排してたのがいい。ようやくケツの青さが消えたな…」などとブツブツつぶやきながら、「新星堂」の書籍売り場で、『ジンジャー・ロジャース自伝』（キネマ旬報社）と、『エイズの「真実」』（山口剛・集英社文庫）を買い、CD売り場の2階に足を向けた。まずは、前から目を付けていた、東芝のベストコレクションシリーズの、黛ジュン篇を手に取る。つい、〝どうして〜みんな恋しているんでしょ〜♪〟という名曲、「雲にのりたい」が口をつく（『Ｍａｔｅ』12月号の、〝どうしてみんな恋しているんでしょう号〟というのは、当然ここから来てる）。

　今日こそは、美樹克彦のCDめっけてやるぞ！…と棚を漁っていると、『小林旭・黒い傷痕のブルース』なる題名が目に飛び込む。コロムビア版で、CD文庫というシリーズ。まず目につくのが、ジャケットの写真。見たことがねえ奴だが、１９６０年前後の物と想像され、下品な軽薄さが異様なオーラを放ってて、文句なし。曲目。「ウ〜ム」と唸る。唸るしかない高度な選曲なのだ。「黒い傷痕のブルース」、「口笛が流れる港町」、「波止場の無法者」、「アキラのまっくろけ節」、「アキラのチンチロリン」、「いとしのあの娘の涙雨」、「女を忘れろ」、「アキラのええじゃないか」、「流れもの」、「とかくこの世は住みにくい」の以上10曲。どの曲も、不評の「君が代」の代わりに国歌にしたら、国威の宣揚は間違いなしの、キラ星の如きラインナップだ。

　自宅に帰ると、早速聴いてみる。1曲目の「黒い傷痕〜」は、まあこんなもんだろうとのレベルだったが、2曲目の「口笛が〜」で、まずド肝を抜かれる。ちゃんと2番もある上に、伴奏の合唱団の強烈なこと、臭いこと（旭のカン高い声に対抗するには、これくらいせにゃあかんが）。2番もあると書いたが、例の俺が持ってる2枚組LPは、2番を略しちゃってんだよね、なぜか。それに合唱団の相の手もなく、実に澄んだ出来。むろんそれはそれで良いのだが、3番までうざったい程の合唱入りで歌いまくるバージョンも、文句ナシ。「ひょっとすると他の曲にも…」と予想していると、舛田利雄監督の初期の傑作、『女を忘れろ』の主題歌もズバリそれ（感動で涙が止まりません。ヤボなドラムが渋い!!）。

　加えて、「波止場の〜」、「〜チンチロリン」、「いとしのあの娘の〜」、「〜のええじゃないか」、「流れもの」と、お初の曲もいっぱい。いやはやこのCD、これでたった１８００円とは!!　まさか、これ一枚っきりなんてこたないっすよねえ？「ダンチョネ節」、「ホイホイ節」、「ツ〜レロ節」等と、コロムビア時代の旭資産は、文字通り宝の山の如くあるわけだし、全10枚くらいでドッカ出して欲

しい…ここまで書いて来て、ふと考える。うちの読者のオヤジ世代の音楽趣味について、こうダラダラ書いたからって、読者に一体何が分かるのかとね。ただ、そーゆのは一切無視して展開して来たのが、本欄の歴史なんだから、今さらどうでもいいじゃんかよ、世代感覚なんて細部のことは、との居直りもムクムク。

こういう時は、コロリ話を変えると問題はなくなる（本当かよ？）。つまらないのだ。何が？　読者の投稿がです。ホント、本誌の文章組の投稿はここ半年ばかり、月を追うごとに低レベル化している。この業界、夏場からは全体に売り上げも浮上中であるし、読者総数は決して減っていないのにである。しかも、部数的には問題にならない『Ｍａｔｅ』には、逆に風流な投稿が増えてんだよ。投稿は誌面を写す鏡であるから、最大要因は俺にあるのだが、それにしてもつまらな過ぎ。

特に頭に来るのは、そーゆ退屈野郎に限って、必ず何通も寄こすこと。俺の手はシュレッダーじゃねんだ。破り捨てたりドラム缶で燃やすにしろ、それなりのエネルギーを消費する。消エネのためにも、そ〜ゆアホ読者は、霧の彼方に消えてくれないかと願うこの頃。それと、今後開かず組は、宣言なしで決定するのでそのつもりで。

（'94・12）

素人の臭いケツの穴のまわりの毛を舐めて、生き長らえてる邦画界の悲しさ。

読書の秋のせいか、10月は本当によく本を読んだ。計15冊！　数年振り。が、本棚の一角に積み上げておいたのを見ると、要するに軽いのが多い。だから、ハイペースで読めたのでしょうが、量より質だと思いつつも、柄にもなく日に2時間も勉強して、急に頭が良くなった気になっていた、中学時代の心境になってんだから、僕ちゃんも進歩がない。寸評。

『映画編集とは何か／浦岡敬一の技法』（平凡社）→色々と勉強になったが、俺が映画監督なら、こういう人にゃ編集して欲しくない。

『ある八重子物語』（井上ひさし・集英社）→9月に『花顔の人・花柳章太郎伝』（大笹吉雄・講談社文庫）を読んだばかりなので、筋が膨らんで味わえた。『パブ・大英帝国の社交場』（小林章夫・講談社現代新書）→お茶の水駅の聖橋口にあって、下品な近くの日販のハゲオヤジ連中や、明大の学生がとぐろを巻いていた、「まいまいつぶろ」って激安トリスバー、まだあんの？　『日本文化の形成（中巻）』（宮本常一・ちくま文庫）→しゃべりだと、えらく安っぽい感じになるんすね、この大センセ。『おカルトお毒味定食』（松浦理英子・笙野頼子・河出書房新社）→誰もがこのまま、漫才コンビが組めると思ったはず。『女嫌いのための小品集』（パトリシア・ハイスミス・河出文庫）→昔はこーゆー活字のでかい文庫本は、「水増ししやがって！」と腹が立ったが、近頃は「読み易いや」。『アメリカ性革命報告』（立花隆・文春文庫）→性的弱者の僕も、ちょっと自信のついた良書（!?）。『デビット１００コラム』（橋本治・河出文庫）→つまらん。この人は新聞の人生相談とか、雑誌中の小コラム読むくらいが一番。『優しい去勢のために』（松浦理英子・筑摩書房）→ありましたよね、『劇画チャイム』って。ンなのに何で連載してたんだか。『イーディスの日記上・下』（パトリシア・ハイスミス・河出文庫）→クツ下ん中でマスこく馬鹿息子って、外観がＤＯＮＫＥＹみたいで大笑い。『貧困なる精神Ｋ』（本多勝一・朝日新聞社）→西武（コクド）への罵倒文だけ集めて、単行本出して欲しい。『加藤泰、映画を語る』（山根貞男・安井喜雄・筑摩書房）→非凡な監督とは思うが、この人の映画がなぜ好きになれぬのか、何となく分かったのが収穫。『イギリス貴族』（小林章夫・講談社現代新

書）→水呑み百姓の出で良かった。『古典落語／金馬・小圓朝集』（ちくま文庫）→また再開したんだよね、「池袋演芸場」って。久々に行ってみっか？

今日はもう11月20日。なのにまだ7冊。10月が異常だったのだ。そうだそうだ。今月は、杉作J太郎がらみでエキストラをした、『無頼平野』（監督／石井輝男）に触れないわけにはいきません。あれは11月9日。地下鉄有楽町線の月島駅に、朝6時40分集合。連れてかれたのが、バスで10分ばかりの、取り壊しを待つ水産庁水産試験場の建物。昭和30年代の売血所のシーンで、集まった約50人が（俺もその一人）ボロ着せられてウロウロ。そこへ、白いベンツに乗った石井監督登場。もう70にはなってるはずなのに、50代にしか見えない。映画が銭になる時代に生きた、花形監督らしい華やかさに満ちており、遅れて駆け付けた弟子筋の、内藤誠監督のビンボったらしさと比べると月とスッポン。内藤監督は外見にこだわらぬ性格と言ってしまえばそれまでですが、どの時代を監督として生きたかは、出ちまうんですよ。

早撮りで知られる石井監督、佐野史郎が売血所にたむろする連中の間を、リヤカーを引っ張るシーンから始めて、「よーがすか〜？ハイ本番！　カット、ＯＫ!!」と、猛烈なスピードで撮りまくる。本誌でもコラムを連載してもらっている、浜野佐知監督のピンク映画でもエキストラをしたが、マジな話、ピンクより早い。11時頃エキストラ連中は休憩となり、建物の入口近くでブラブラ。そこへ一人のオッサンが。全員の視線が集中。貫禄があんのに飄々としているこのオッサンこそ、由利徹御大。中で撮影が続いてたためか、御大を案内する者が現われない。少し困ったオシャマンベ。そこへツツと近寄り、案内役を務めたのが内藤誠監督だ。不良番長シリーズの常連だったもんね、御大も。

再びエキストラ軍団は、建物の内部に集められる。泥棒役の由利徹と、名優であると共に、かつてはあゆみの箱の資金をちょろまかしたとかの噂で、実生活も半端でないことを示した、砂塚秀夫の下り。２人の掛け合いには、何度もテストを繰り返してるのに、その度にあちこちから笑いが。刑事もからみアクションも入るので、撮影スピードが落ちる。さぼり始めるエキストラもチラホラ（仕方ないよね、日当はタダなんだし）。ちょうど隣に、石井監督のファンとして知られる、脚本家の桂千穂氏がいたので、初対面だったが図々しく話しかけた所、色々と面白い話がうかがえた。

中でも、「もう僕は、前金50万くれなければ、絶対に脚本を書かないことにしてんです。書き上げた後で流れて、何度もひどい目に遭ってますから。けど、そのたったの50万も出さないプロデューサーが多い。まあ、最初からやる気も金もない奴ばっかなんです」との話には驚いた。美少女漫画家の単行本だって、1万チョイ刷れば60万前後にゃなる時代に、邦画界ってな半端じゃねんですね。

それは『無頼平野』も例外ではない。本作のエキストラは、映画学校の生徒、ワイズ出版の関係作家、編集者が多く、日当はナシの弁当付きという約束。別にそれはいいが、集合場所の月島駅から、現地までのバス代が本人負担というのと、60～70人の関係者がいるのに、試験場内にレンタルトイレが2個だけというのにはあきれた。商業映画の花形監督が、自主映画まがいの環境でしか映画が撮れぬ邦画界のゆがみ。貧しさを美風と取り違えている制作陣。石井監督がダンディで金持ちそうなのが、せめてもの救いでした。（'95・1）

何のために、あれだけの血税を皇族につぎ込んでいるのか？

税金は生命と財産を、いざという時に国が守ってくれるように、国民が国家と交わす契約金のようなものだ…といった趣旨の文を先

日、『日本経済新聞』の書評欄で読んだ。確かあれは先週の日曜日、阪神大震災の2日前のこと。で、結局はこれである。国とか県、市は、豊田商事並の連中、つまりペテン師だったってのが明白になった。USSO君、メガデス君、くーみんさん、大丈夫でしたか？

本震災を見て、まず3つのことを感じた。まず1点。軍隊（自衛隊）は、自国民を守ってくれないということだ。なだしおや、日航機墜落の時もそうだったが、人殺しの訓練は適当にしといて（必要な場合もある。テロ対策とか）、国営土方集団に徹せと言いたい。

〝地方自治体から要請がないので出動しなかった〟との寝言をほざき、それを弁護するマスコミや、法律を改正せねばと論議をすりかえてる連中もいるが、治安出動ではないのだ。緊急災害時には現行法でも、自主的に出動出来るのに指をくわえてたのは、要するに怠慢。殺人の現行犯を、警官が〝逮捕状がないから〟と見逃すに等しい。それとも自衛隊の幹部は、天災時にサボタージュすることで、治安出動をも含む、自らの権限拡大を企んでいるのか？

2点目。日本の大マスコミの脳天バカ振り。特にNHKはひどかった。17日の朝は、神戸支局付近を映してるのみ。映像的には、テレビ朝日が一番臨場感があったけど、燃えてる家の人から見りゃ、あれが自衛隊のヘリで、消火活動でもやってくれりゃと思い、撃ち落としたい心境だったろう。被害が拡大してからは、NHKも民放もただの官報。何人が死んで、何人が行方不明という役所発表のデータと映像を垂れ流しつつ、「だから私は昔から警告してたんですヨ」ってな、糞の役にも立たぬ、地震学者とやらの弁明を放送して、よく恥ずかしくないもの。特にNHKは、〝国の言い訳放送局〟として、完璧だったのではないか？　だって、被災者の血や汗、糞尿の臭気を全くシャットアウトし切っていたもの。NHKだけ見ていると、大規模な防災訓練を見ているような錯覚に襲われた。その点、BSのBBC、CNN等は、ちゃんと批判意識を持ってたし、筑紫哲也の『ニュース23』での、黒田清のレポートは良かった。どうしょもないトイレの惨状を映す中で、溢れる糞尿の映像もキチンと放送していた。糞学者の千の戯言より、見る者に訴えかける。

3点目。この時期に、中東を歴訪する皇室のありようだ。信じ難い。数千人の自国民が死につつあるのに、国際親善もなかろう。皇太子自身、及び回りには、「中止すべき」と考えたり、進言する人間が一人も居なかったのか？　このニュースを聞いて一番ショックを受けたのは、天皇制支持者であろう。やみくもにあがめる、いわば〝天皇制教徒〟ならまだしも、理性的な天皇制支持者は、「これは宮内庁に潜む、共産主義者の陰謀では？」と思った人も少なくないだろう（考え方は違うが、僕もそう思った）。大マスコミは例によって黙しているが、本誌の読者の、特に天皇制支持者の意見を聞きたいものだ（批判派のはほとんど想像がつき、意外性や面白味に欠けるので不要）。

今月は妙に堅苦しくなってしまった。俺ってこういうスタンスが一番嫌いで、自分の口が回る限りは、アホ話をペラペラペラペラかましまくろうと思ってたのに、いくら読者が多い地域だからって、ついこうなっちゃうのは、まだまだ修行不足だ（これじゃ以下の書評如き物が、一番嫌いな『日刊ゲンダイ』の孤みてな調子になっちまう。やっぱ目標は、大胆にも反人権雑誌の雄、『週刊新潮』の書評欄の〝読書雑感〟なんだから、もっと太々しくなんなくちゃ！）。

12月は9冊しか読めなかった。『モル・フランダース（上）（下）』（デフォー・岩波文庫）→『ペスト』もカミュよりこの人の方が面白い。もっと翻訳よ出ろ！　『新びっくり王国大作戦』（友成純一・扶桑社文庫）→永山薫センセのお友達だったはず。せんべいかじりながら読むのに最適。『アメリカン・テレビ・ウォーズ』（山口秀夫・丸善ライブラリー）→丸善のこのシリーズ、数出てる割に食指の動かないのが多い。『悪趣味洋画劇場』（洋泉社）→中原昌也っ

て奴が書いた部分のみ、ダントツに面白い。コイツ、天才じゃねーの？（ププッ…）『回想の江戸川乱歩』（小林信彦・メタローグ）↓レベルは超低すぎるかもしれないが、この人の江戸川乱歩との関わりって、俺の対遠山老人体験と少し似てなくもない。某日の吉田婆ちゃんとの会話。**塩**「東京直下型地震が来てもさぁ、遠山さんて何となく、〝江戸川区で80歳の老人が、100時間振りで救出されました〟なんて感じで、生き残りそうな気がする」**吉**「アッハハハ…。否定出来ませんね」**塩**「いつどこで死んでもいいけど、遠山さんよりは、一日でも長生きしてえよ」**吉**「アッハハハ…」『ジンジャー・ロジャース自伝』（キネマ旬報社）↓長いけど翻訳文も読み易い。それにしても、なぜ金子信雄は料理本なんぞじゃなく、赤裸々な2段組500ページの自伝を残さなかったのだ!?『孤独な街角』（パトリシア・ハイスミス・扶桑社ミステリー）↓最近のは無理矢理、水増しされてる感じが。60～70年代なら、半分の量で仕上げてたんじゃ？　が、この犬連れの中年インポ親父は怖い。アメリカの狂信的中絶反対派を思い出して、ブルルル。『市川崑の映画たち』（森遊机・ワイズ出版）↓市川監督への超ロングインタビュー集。600ページ余りあるものの、飽きさせません。そういや昔、話の特集から出た白井佳夫の監督インタビュー集本で、市川崑編のみ除外されてたよな。確か、〝訂正要求が多すぎる〟とかの理由で。白井のこったから、市川の反共的部分あたりを、ねちっこく追求したんだろうが、こーゆ盲目的信者のを読んだ後は、その手も読みたくなる。（'95・3）

ゲスな連中だからこそ、受難の時は打つな!!

しかし情けない。何がだってえ？　加納典明と〝新小岩の不動産屋のオヤジ風〟（『Ｍａｔｅ』3月号の、「嫌われ者の記」参照）の竹書房の社長がパクられた、例の『きクぜ！2』の一件ですがな。ＴＶや新聞を見てると、「単なる商売では」（ＴＶ朝日での石川次郎）とか、「うちの娘にはとても見せられないと思った」（『日刊ゲンダイ』の梨本勝）だの、何を考えてんだコイツらは？　どんなゲス野郎達が、単に商売のためにマンコを撮って見せようが、モデルが未成年だったり、無理矢理暴力的に撮影したりの違法行為がない限りは、御上に弾圧されたマスコミ関係者を、「無条件」で支持するのが同業界人、いや、真っ当な人間のすることだろうが!?

　テメーらに説教される前に、典明や高橋一平らが上等な人間じゃねえなんて、ＴＶの前の人間は誰一人とまで言わんが、8割方知ってんだよ、バカヤロー!!　だからって、〝単に商売のために風俗嬢の乳やケツの絵垂れ流してる深夜番組の司会者〟や、〝単に商売のために誰かが誰かとチンポやマンコの舐めっこしたなんてネタかぎ回ってるホクロデブ〟に、芸術論や道徳論をぶたれたかねえ。そーゆのは普段やってろ。表現の自由が、根幹に近い流通の自由段階までも浸食されようって時に、こーゆ寝言をほざいてる〝言論人〟とやらを見てると、連中こそが、〝保身のために表現の自由の問題を、感情的道徳論にすり替えて延命を図る一番ゲスな商売人〟なのだと分かる。この種の問題が起きた時に、〝極左だから極右だから、上品だから下品だから、金持ちだからビンボだから〟とかの理由で御上にすり寄る奴に、昔からロクな者はいねえが、ＴＶにゃ99％こーゆ人間きゃ出ねんだから、血圧は上がる一方。だからなるべく消すようにしてんだが、好きな『日刊ゲンダイ』にまでこーゆヨタ記事が載んだもん、アッタマ来るって（バカヤロー梨本！　エロ本わざわざ、娘に見せる奴がどこにいるッ!!）。

　で、先月号あたりから本欄が、三流新聞の社説みたいになっちまったのは少し問題。元々下品な文章もより品性を欠いて来ましたが、

こりゃ先週まで読んでいた、『三文役者あなあきい伝』（殿山泰司・ちくま文庫）の悪影響。来月は再び、上品タッチに戻る予定なのでヨロシク（なるわきゃねえ）。今日は2月19日。今、ＢＳ11で『アイドル・オン・ステージ』観てんだが、どうしてンなに銭かけてんのに締まらねえの？　出るタレントがアホすぎるってなぁ、スタッフは事前に分かってんだから、無理して「買物ブギ」等の古典歌謡を唄わせないとか、脇のダンサーをもっと前に出して、連中のどじょうすくいを中和させるとか、色々と方法はあんだろうに（西郷輝彦とスタジオナンバーワンダンサーズが活躍した、20数年前のＴＢＳの、『ヤマハ・ヤングジャンボリー』を思い出しつつ。それにしても、大原真由美の脚を映すのは許すとして、しゃべらすな。完治した切れ痔がうずいちゃう）。

1月は、くしだあしゅらとふぁんとむに原稿を落とされたので、次号の入稿は楽々だろうなんて甘い考えを抱いてたら、再び地獄を見た。ふぁん公（『レモンクラブ』）もしゅら公（『Ｍａｔｅ』）も何とか入稿させましたが、ふぁん公はともかく、しゅら公のは、トーン貼れない原稿が2枚も入ってるありさま（たった16ページの原稿で）。〝史上最悪のエロ漫画家〟との栄誉は、結局しゅら公の頭上に輝くことになったが、もう2本入稿させれば、奴の2冊目の単行本も可能なわけで、あと少しの忍耐…（途中で俺がプッツン、奴をブチ殺さなければの話だケド）。

1月は結局11冊。95年は、いきなり『三国志』にはまった年として、忘れられなくなりそう。『三国志（一）～（五）』（岩波文庫）↓30巻くらいあってもいい。好みのキャラは常識的で悪いけど、曹操と趙雲。趙雲が命がけで助けた、玄徳（恐怖のデクノボー）の息子の阿斗が、親同様、いや、それ以上の低能野郎である点に、この物語の奥の深さを感じた。『横断』（Ｄ・フランシス・ハヤカワ文庫）↓設定が凝り過ぎてて、良く分かりませんでした。『黒い天使の目の前で』（パトリシア・ハイスミス・扶桑社ミステリー）↓図々しい年寄りへの嫌悪感を描かせると、天下一品。著者は2月4日に、スイスで死去したと伝えられました。フランスのＦ２のニュースでは、映像も紹介してましたが、細面で、怖そうな顔したお婆さんでした。『啄木歌集』（岩波文庫）↓短歌や俳句も、オヤジっぽくていいから、そろそろ手を付けるか。たき火、庭いじり、犬の散歩…ますます充実するオヤジライフ。『いつもロンリーだった』（内館牧子＆小林旭・講談社文庫）↓凄いよな、アキラも…。こんだけ好んでオマンコ話する映画スターも珍しい。出来のいい本じゃないが、半年ばっか前に『週刊文春』に連載された旭の自伝は、いつになったら単行本化されんだろ？　『編集狂時代』（松田哲夫・本の雑誌）↓『本の雑誌』って雑誌は、マガジンハウスの全ての出版物同様に大嫌いで、そこから出てる本じゃやと不安でしたが、面白かった。後半50ページ程の自慢話がなけりゃ余計に。『純愛の精神誌―昭和三十年代の青春を読む―』（藤井淑禎・新潮選書）↓今月のハイライトと言うべき一冊。半年以上も前に出た本だけど、書名を間違えて記憶してたため、今年になってやっと入手。結論から言うと、全6章から成るこの本、章によって出来、不出来が極端。Ⅰの〝『愛と死をみつめて』〟やⅣの〝石坂洋次郎のために〟、Ⅵの〝手記を書く女たち〟は面白いけれど、Ⅲの〝甦る「こころ」〟とか、Ⅴの〝「忍ぶ川」と『忍ぶ川』のたくらみ〟あたりは、飛ばし読みするっきゃない。著者自身も、他の章に比べて興味がない感じ。無理してアカデミックにせず、ケーハクに徹した方が、より盛り上がった本になったはず。著者が一番力を入れてるのが、Ⅳの〝石坂洋次郎のために〟。昨今の石坂への無視振りに、立腹を隠さない著者の姿勢には、私も共感しました。

（'95・4）

マスコミに絶対に再登場しようとしない、美樹克彦に「バカヤロー!!」

埼玉に住んでいた頃はこれ程じゃなかったと、つくづく思う。こんなんで飲み水は大丈夫か？　そのくらい、北関東の冬から春にかけては、晴天の日々が続く。今日もまた晴れ。昨日、都心の地下鉄で何人もの人々が、わけも分からぬうちに無念の死を迎えているが、北関東の空にはどうでもいいことらしい。が、真っ青な空を見ていると、意味もなくむかついて来ませんか？「こんなに空が晴れたからって、それが何になるんだ!?　バカヤロー!!」と北関東、いや、全国の発情青少年の心を鼓舞したのは、25年程前の日方誠こと美樹克彦でしたが、41もの馬齢を重ねてようやく、この歌の奥行きを知った気が。

ただこの年になると、青空見てもいきなり、「バカヤロー!!」と絶叫したい気分にはなりません。怒りの感情が最高潮に達する瞬間と、晴らしたいと思う時との間にズレが出来る…のじゃなく、生活のためにズレさせる知恵が、身に付いちゃってる。本人にとっちゃ日常的行為ですが、第三者から見れば生出ししちゃった後、「割と早いのネ！」と言いたそうな尻軽女の横で、なえたチンポコにコンドームをかぶせるみたいな…。むろんこれは例えですが、たまった怒りを抑制し続ける癖をつけると、〝怒りを爆発させる瞬間〟を、空想して作り出しちゃったりもする。というわけで、澄み切った青空を見る行為は、一瞬スカッとすると同時に、日々の情けなさを確認することにも直結するという、やっかいな矛盾を抱え込む（濡れると男のコに変身しちゃう癖のある、超いい脚した美人の彼女を持った心境とでも言うか…↑どうしてこうも下品な例えが次々と湧いて来るのか？　地黒のクルクルパー女房を見てるゆえのストレスと言っては、身も蓋もないが。要するに、「こんな俺の苦しみなんか、誰にも分かりゃしねんだ！」といった所でしょうが、こーゆー状態が癖になるのは事実で、つくづく苦しみと快楽は紙一重と思わされ、谷崎潤一郎の偉大さを再確認する日々）。

2月。まずは『三国志(六)〜(八)』（岩波文庫）↓とうとう読み終えてしまった。悲しい。次は『西遊記』でもと思ったら、岩波文庫版は全10巻のうち、7巻までしか出てないとか。文庫本じゃないと、通勤時に手がだるくなっちまうし…。『25人の極地探検隊』（加納一郎・朝日文庫）↓トイレで毎日数ページずつ読んでいた。散漫で退屈。『ブタの丸かじり』（東海林さだお・朝日新聞社）↓最近の漫画はどうにもならないが、エッセイ集は相変わらず絶好調。漫画は捨てた方がいい。『「三国志」の智恵』（狩野直禎・講談社現代新書）↓この手の本に面白いのがあった例がないという点を、再確認。『山里の釣りから』（内山節・岩波同時代ライブラリー）↓舞台にもなる万場町には、万場高校があり、文化祭は〝万高祭〟だったはず（もう廃校になったかな？）。『三文役者あなあきい伝・PART1〜2』（殿山泰司・ちくま文庫）↓殿山が赤木圭一郎にカツアゲされたってのは、金子信雄がBSの番組で証言してたらしいが、川地民夫にもやられてたと、本人が書いてる。町田町蔵の解説が、名著に糞を塗りたくっている。ンなのは没にしろって。バッカな担当編集者。『テレビCMの青春時代』（今井和也・中公新書）↓金にはなるみたいですが、つまんね仕事みたいっすね、宣伝屋さんて。エロ本屋でホッ。『杉浦茂マンガ館第1巻〜第4巻』（筑摩書房）↓てっへっへっ。おっかしいし、お腹はすいちゃうしで、たまりませんね。5巻目と、『杉浦茂のちょっとタリない名作劇場』というカラー本は、どこの本屋さんにもないのでガックシ（漫画本の解説にはロクなもんがないというのは常識だが、1巻目の荒俣宏の「杉浦まんが

の健気な逸脱」はさすが）。『東京映画名所図鑑』（冨田均・平凡社）↓厚さの割には1950円と、高い本だが楽しい。映画の趣味も偏ってない。ただ、著者は相当癖の強い性格らしく、それがチラチラと顔を見せるあたりが欠点（そーゆーのは隠し味とすべし）。『アメリカ・ジャーナリズム』（下山進・丸善ライブラリー）↓もっともな内容。著者が『マルコポーロ』の一件の、文藝春秋の社員である点が笑わせる。『愉しみはTVの彼方に』（金井美恵子・中央公論社）↓『Ｍａｔｅ』の「嫌われ者の記」でも触れたけど、〝蓮實重彦の口パク本〟。〝高卒文学少女の星〟の成れの果てを確認するには、絶好の一冊。

毎月何だか良く分かんない傾向の本、色々と読んじゃいるけど、十代の暇を持て余してた発情期ならともかく、40男がやたら本を読む姿って、物欲しそうというか、えげつない景色だと思いません？よく居るじゃないっすか。バーコードヘアーのオヤジが、テメーは駅の階段降りてんのに、超ミニの姉ちゃんが下から昇って来たので、階段の下からわざわざと振り返り、ねっとりした納豆みたいな視線を、姉ちゃんの脚の近辺にからませてるとでも言うか…（こーゆ時、姉ちゃん達は嫌がらずに結構サービスしてくれる。やったんさい、一度。けど、脚の匂いかがせろとか、パンスト越しに尻の穴舐めさせろなんて言うと、ぶっ飛ばされる。でも、ぶっ飛ばされたり、蹴られてみたい脚もあるよね）。

そんな中娘2人を連れて、「高崎ピカデリー」まで『ガメラ』を観に行けば、前評判の割に大した映画じゃない。このレベルまで、鳴り物入りでほめまくらねばならぬ邦画って、一体!? いくら俺が若い姉ちゃんに飢えていようとも、愚妻が美人だなんては絶対に思わんし、ましてや口に出したりもせぬ。なのになぜ『ガメラ』を多くの人々は…。

（'95・5）

一度でいいから夜姉ちゃんの脚に触りたかった。

久々に宴会ネタ（かつては、毎号宴会情報が載ってたのに寂しい、なんつうハガキまで来るありさま。確かに田舎暮らしを始めてからは、以前ほど頻繁にやってないが、時々はやってる。が、どうもその出席メンバーが、読者の興味を引きそうにないので、めったに紹介しなくなった。例えば、市ヶ谷の世界文化社の前の土手で、富士美出版営業部主催の花見があったなんて、諸君にはちっともピンと来ないでしょう）。

〝やす○姉ちゃんの上京を祝う会〟なる宴が開かれたのは、何か起きる日、4月15日の前日。場所は、漫画屋関係の宴会がよく開かれる、竹書房の反対側の「ローソン」の地下にある、「ガスペ」。かつての〝岩手の大スター投稿者〟の上京を祝うにしては、メンバーは貧弱。俺、ま〜、夜おばさん、伊集院８０８（22歳・出っ歯・童貞）。そしてやす○姉ちゃん。仙台で世話になったＤＯＮＫＥＹは、締め切りを抱えてるとかで欠席。やす○お姉様が是非一度お会いしたいと言ってた、〝漫画屋パンパンガールズ〟のエース、菜摘ひかる嬢は、3回くらいポケベルで呼び出したのになしのつぶて。電話の向こうでまたひかる姉ちゃんが、彼氏とケンカ始められても白けるので断念（今月掲載分のコラムの請求だと思って、放っといたと思われる。けど今回の、ちょっとまずいんじゃねーの？ 事情通が読むとモロバレだし。首筋に冷たい物が走った連中も…）。

参加者が意外と少ないのもわーんの。俺も欠席しようかと思ったくらい。だって、やす○姉ちゃん、一人で上京したんじゃなく、コブ付きなんだもん。コブっつっても、ポッポ宮本とかま〜の隠し子なんつうんじゃありません。ただの男。結婚を前提とした野郎だとの

噂もあるが、他人様の〝幸福〟のための宴会くれえつまんねえもんはない。**俺**「ただマンやりたがる男の古典的な手口。何ィ考えてんだオメも?」**やす○**「いんです。ダメだったらやり直します。まだ若いし、私も…」(本人当年21歳)**夜**「彼って、資産家のコ? いざとなると、女はお金が大切よ。若くても年喰ってても」(本人当年27歳)**やす○**「ぜ〜んぜん。大学中退したプータローなんす。私も働かなくっちゃ。大丈夫! 私の彼には、ミュージシャンの才能があんです」**本人以外の全参加者**「……」。(これは俺の推測だが、だまくらかすなら東北女に限ると、全男性参加者が、やす○と練馬の性豪の夜を交互に見比べつつ、心に刻んでいたようだ)。

その沈黙を、いきなり破ったのが伊集院808(22歳・出っ歯・童貞)。そもそもなぜ奴がおるのか、理解出来ない読者も多いだろう。何も俺やま〜が、自分達のツラの引き立て役に、わざわざ稲城から呼び出したのではない。以前からやす○が彼のファンだと言ってたので、気を利かせたのだ。「今度、彼の音を聞いてみたいな」かまぼこの板を当ててカナヅチで一撃、一挙に矯正したい欲求にかられる出っ歯ヅラが、ンなスカした台詞を吐くもんだから、全員呆然。再び気まずい沈黙。「あっあっ…そーだそーだ。今度サイン帳持って来ますから、お願いします。伊集院さん!!」今度はやす○。や〜っぱ、だまくらかすなら東北女だな〜(で、明日は色々と心配だし、夜おばさんは13回目のお見合いもあるとかなので、参加者は11時頃には早々と駅に向かった。そだ! 利発で有名な沖田十三こと、三石片奈のヤロが一番知りたいデータを報告しよう。一番後ろから歩いた俺が、飯田橋駅までの7〜8分間観察した所によれば、脚の美形度に関しては、やす○&夜は、ほぼ互角。細さと長さはやす○が上だった気もするが、やや田舎臭い点も。夜のは少し太いが、ラインは洗練されていた。感触度? ンなことまで出来る権力が、下請け中年編集者にあるわけなかろう)。

3月。『脇役誕生』(花沢徳衛・岩波書店・1600円)↓役者の自伝でここまで退屈なのも珍しい。政治家のそれ並。『おかめ笹』(永井荷風・新潮文庫・400円)↓最高! こーゆせこい人間になりたい。『浅草最終出口・浅草芸人・深見千三郎伝』(伊藤精介・晶文社・1200円)↓小説の登場人物が俗物なのはイカすが、伝記の筆者がそうじゃ、読む方はたまらん。伊藤、テメ自身のことなんざ、どうでもいいんだバカッ!!『文化麺類学ことはじめ』(石毛直道・講談社文庫・860円)↓完璧に題名負け。『修羅を生きる』(梁石白・講談社現代新書・650円)↓この人や辺見庸の人間描写は鋭い。『さらば長き眠り』(原寮・早川書房・1600円)↓前半で浮浪者が、元有名建築家だと、あっさり判明する部分以外は良かった。『日本の現代演劇』(扇田昭彦・岩波新書・620円)↓なるほど。『悪意の不在』(大西赤人・すずさわ書店・1854円)↓帯で何で小林よしのりが絶賛してんのか、分からなんだ。『無頼平野』(つげ忠男・ワイズ出版・1900円)↓僕は昔から、兄貴よりこの人の方を買ってます。『今ひとたびの戦後日本映画』(川本三郎・岩波書店・2400円)↓「白いブラウスの似合う女の先生」との項目は、題名だけで泣かせる。『文士の風貌』(井伏鱒二・福武文庫・650円)↓〝文学青年〟だった高校時代を思い出す。『舵をとり風上に向く者』(矢作俊彦・新潮文庫・400円)↓中身はともかく、鈴木正文の解説にゲロゲロ。『わがハリウッド年代記』(ロバート・パリッシュ・筑摩書房・2500円)↓筆者が、自分以外の人間を語ってる部分のみ読ませる。『奇っ怪紳士録』(荒俣宏・平凡社・900円)↓俺は昔この人って澁澤龍彦みたいな人かと思ってたけど、数百倍はマシなのでビックリ。今後はいっぱい読もっと。『鉄腕アトム』(手塚治虫・講談社・1300円)↓全15巻のうち、10巻まで読む。7巻収録の「白熱人間の巻」は、すっかり忘れていた。娘と2人で競って読む。

('95・6)

追悼・遠山孝。

またもや宴会ネタです―というリードで始めようとしたけど、疲労で盛り上がりを欠いた宴だったため､他にネタを求めようとした。でも、「酔の助」なんつう、漫画屋の愛用宴会場では超Ｃ級コースの安酒のみじゃ、５月15日に、４０６号室の原稿倉庫への移転作業を、半日も手伝ってくれた諸君に対して失礼だから、ここに参加者の名前を記します。夜おばさん（当年27歳）、及び彼女がスカートの中から取り出した、かるあみるく君（美少年♥）、他２名の男性諸君、御苦労様！（７セントラルビルから栄昇ビルに引っ越した際も、当時出していた『真実新聞』の読者の、西岡某、加藤某の両名を一日中使い回しながら、安酒―といっても、今回よりは数段上等だった。確か夜は焼き肉屋で喰いたい放題。資金は写植の公栄社の社長持ちだったが。ホント、俺も吉田婆ちゃんもちゃっかりしてるよな―でうやむやにした記憶がある。御２人とも元気ですか？）

今月は他にも色々あった。倉庫への引っ越し前後に、俺や吉田婆ちゃんが非常に世話になった、㈲遠山企画の遠山社長が亡くなられたらしいのだけれど、遺族からは何の連絡もない。今でも遠山企画経由で、俺、吉田婆ちゃん、ま～は計５誌の雑誌の孫請けしているので、後任社長の娘さんは事務上の電話を時々寄こすのに、一言も触れない。こういう話は秘密にしようと思っても、パッと業界に広まるから、あちこちから問い合わせの電話が入るけど、「さ～」。アホみたい。僕は、〝１年以上勤務する奴は気違い〟と言われた遠山企画に、大学４年の１月から入社して、15年勤務した〝超エリート〟なのに。遠山さんは、僕を半人前にしてくれた大恩人です。人間的には99％嫌いでしたが。けどその最後の１％部分、つまり、カストリ、実話雑誌時代の思い出話を聞くのは大好きでした。坂口安吾、岩田専太郎、清水正二郎、東郷青児等、僕らにとっては歴史上の人物の裏話を聞くのは、半ばホラと分かっていても、至福の時でした（遠山さんは、井伏鱒二門下の文学青年だったらしい）。そして、遠山企画設立後の、初期『コミックＶＡＮ』時代の苦労話―。真崎守の理屈っぽさに辟易したり、ふくしま政美の蒲田でのバーテン姿にビックリした話、村野守美の田舎芝居染みた打ち合わせ登場の下り等、遠山さんのオーバーな身振りが、今でも目に浮かびます。

遠山さんも99％僕を嫌っていたでしょうが（僕もあなたに好かれようとは思わなかった）、この残りの１％で社員15年、孫請け３年の計18年もやってこれたのですから、世の中不思議です。俺が卒論に花田清輝を選んでたのを、妙に気に入ってくれたのも思い出す。どうも花田、あるいは岡本太郎のような、自ら弧高を選ぶ芸術家に、自分を重ね合わせてる面があった。内心俺は、「遠山さんが孤独なのは、江戸っ子を自称する割に金に細か過ぎたり、人への思いやりの精神に欠けるという、人格上の欠陥に過ぎないんじゃ。そのくせ、〝誰々は実は僕のことを好いててくれてね〟なんてグチを僕らにこぼすし。悪役なら最後まで徹して下さいよ。花田がどっかで書いてましたよ。〝愛されて死ぬよりも、憎まれて生きる方がマシ〟って」とは思ったが、もちろん口にはしなかった。

経済的な面にすれば、俺は遠山企画で一番の貢献者だったと思ってます（遠山さんにもそれなりに報いていただいた）。同時に編集面では､大正生まれのモダンボーイであった遠山さんの持っていた、カッコ良くて、ちょっと青臭い漫画誌作りを、身も蓋もないエロ漫画誌に変えちゃったという反省はある。というのも遠山さん、自分の持ってる青さを盛んに漫画家に吹き込みながら、いざ雑誌の成績が悪いと、全てを漫画家の責任にして、結局は雑誌をただのエロ漫画誌にして延命を図るという、悪い癖があったから（中でも、『漫画レッド』時代のキシもとのり［現松文館社長］なんか気の毒の極

みだった）。当時進行していた日活ロマンポルノ裁判での、斎藤正治らの〝ワイセツなぜ悪い〟の主張に共感していた俺は、そんな遠山さんのヘッピリ腰が大嫌いで、遠山さんをして、〝身も蓋もない〟といった顔をさせる編集に、徹するようになってしまったのだ。確かに遠山さんの、ダンディズムは継承出来なかったけれど、そのせいで今まで経済的に貢献出来たのだから、許して下さい。

　そんなこんなを含めて、遠山さんには一度じっくり時間をかけて、二〜三流漫画界の歴史をうかがって、記録しておきたかった。衰退し切った邦画界では、何種類もその手の本が出ていますが、漫画界、特に二〜三流の世界では皆無ですから。が、結局は実現出来ませんでした（今考えると、出来っこないのに、自分の尻を叩いていたような気もする。俺も未熟な人間。きっとどこかで、〝今遠山さん達を食べさせているのは、俺達なんだ〟という、ゴーマンな気持ちがあって、ブレーキをかけていたのだと思う）。

　噂では、関係者を招いて葬式をしないのは、故人、つまり遠山さんの遺言とのことですが、俺を遠山企画に引っ張り込んだ張本人の今村紀郎、故『マンモスクラブ』の加藤健次、吉田婆ちゃん、上原修一、業界は離れちゃったけれど、小林俊道、三村好一、そして俺、俺の女房（職場結婚だったんス）らは一人残らず、「線香ぐらいは上げさせて欲しかった」と、ガッカリしてます。

　とはいえ、どっかでホッとしてるのも事実。61歳の時から18年間お世話になった遠山さんと、精神的な意味ではともかく、経済的関係は清算されるのですから。噂では娘さん達は、僕や吉田婆ちゃんとの孫請け関係を、持続したい意向のようですが、僕らにその気は一切ありません。近く、ま〜センセの2誌を含む計5誌を、遠山企画に返上するつもりです。たかがエロ漫画誌の編プロに、金正日は不要でしょうし。それに、〝売れない漫画家を切り捨てるのが、編集者の一番の仕事だ!!〟というのは、あなたの最初の教えでした。遺族も僕らにすれば、若山ひろし、木村仁、浅丘譲、久留見幸守、大山学、トチボリ茂、加奈井ゆきおみたいなものです。99％嫌いだった遠山さん！　カッコ良かったモボの遠山さん、さようなら!!

（'95・7）

毛虫と遠山孝と谷崎潤一郎について。

今さら、過ぎてしまった春の話題から始めるのも、暑苦しさを増すだけで心苦しいが、やはり触れないわけにはいかない。この春は、終始妙な欠落感に襲われていた。その理由が分かれば対処の仕方もあるが、どう考えても「？」。6月も半ばを過ぎて、ようやく理由が判明。夏草を引っこ抜いていた今日の午後、裏庭のしだれ桜（桃かも？）を見ていて、この春は一匹も毛虫が発生せず、〝毛虫つぶし〟が、全く出来ずにいたことに気づいたのだ。ああ、俺は何て不幸なんだ！　スコップの先で幹を這う毛虫を、2匹同時に〝ブスリ!!〟と刺し殺す瞬間の快楽と言ったら…!!

　昨年徹底して毛虫つぶしをやり過ぎたため、今年は一つ娯楽を失ったのだ。この寂寥感は経験者にしか理解出来ないと思うが、何事も度を過ぎると後悔するという例として、今後の戒めとする決意（それ程のことかよってな言いがかりをつけて、自らを高みに置いてる諸君はまだ青い♥）。これは、象徴的意味合いも含んでいる。要するにパーな投稿者を、近頃は駆除し過ぎてんじゃないかという反省だ。蛇年生まれで乙女座の俺は、半端なことは大嫌いで、やる時はＳＥＸ以外は徹底してやっちゃう性格。で、誌面が時として一本調子になる。この場合、〝清水に魚棲まず〟の例えは、やや場違いな気もしないではないが、やはり、〝清濁併せ呑む〟と言うか、少々パーな野郎でも、脚の太い女でも、鷹揚に構えて出入りさせた

方が、誌面はより美的混沌を極め得るのではないかと、柄にもなく自らを顧みてるのだ（その前に誤植を減らせなんつう半畳を入れんな。漫画屋(塩)班のパー度は、俺に加えてやくる〜と＆シマのクルクルパーコンビのおかげで、鉄壁なんだから。尊師たる俺はともかく、両名は〝やっぱ高卒はパーばっか〟を、日々証明してんじゃねえ!! ↑フォローしとくと、性格は悪かねえ。教養がねんだ。教養はあるけど性格の悪い俺とは、ピッタリだろってな見方もあるが、限度もあるな）。

先月号は〝遠山孝追悼特集〟だったので、4月に読んだ本のリストが載せられませんでした。一人くらいは「残念！」と書いて来るかと思いきや、ゼロ。〝ムカ〜ッ〟とはしなかったけど、カストリ雑誌→実話雑誌→二流隔週漫画誌→三流エロ劇画誌→ロリコン漫画誌→レディコミと、戦後50年をエロ一筋で生き抜いた遠山さんへの追悼文を書いたのが、俺一人というのも寂しい…と書いてると、また切りがなくなっちまうので、5月のリスト行きます。

『われよりほかに・谷崎潤一郎最後の十二年』（伊吹和子・講談社・3900円）→GWはこれを読んで過ごす。『陰翳礼讃』の著者が、潔癖症だというのがおかしい。値段の価値あり。『南方に死す』（荒俣宏・集英社文庫・520円）→〝南へ行くほど面白い〟と言われたのが、東映の〝網走番外地シリーズ〟だが（白眉はむろん『望郷篇』）、荒俣の本にも当てはまる。『鞆ノ津茶会記』（井伏鱒二・福武文庫・430円）→ルビが全くなく、漢文の教科書を読んでるみたい。結構面白い内容だけに、「エッラそーに!!」とむかつく。『江戸川乱歩全集・恐怖奇形人間』（ワイズ出版・1300円）→超安直な本で、余程の好事家以外は買う必要なし。数少ない好事家の俺としては、小池朝雄の横顔が覗けた点だけで満足。脚本家として立派と思った経験は一度もないが、田中陽造の石井輝男論、「腐肉を喰らう秀鷹の栄光」には目頭が熱くなる。『そして夜は甦る』（原尞・早川書房・1300円）→単行本買って数日後に、文庫本も出てんのを知る。昔は腹が立ったが、小金持ちになった今じゃ「フン！」（↑本当!?）。『反逆する風景』（辺見庸・講談社・1400円）→よくこんだけイモな題名付けましたね…。『もの食う人びと』のベストセラー化で、頭がおかしくなったのかと思ったが、内容はまあまあ。『続・映画の昭和雑貨店』（川本三郎・小学館・1500円）→本自体は悪くないが、近頃ここ、やたら〝サライ〟を強調すんのがうざったい。別にサライが川本三郎育てたわけじゃあるめえ？　『ビーグル号航海記(中)』（チャールズ・ダーウィン・岩波文庫・570円）→荒俣のそれに比べると色気に欠ける南方本だが、朝の通勤電車に座って読むのには向いてる（満員電車で立って読むのには不向き）。『図鑑の博物誌』（荒俣宏・集英社文庫・800円）→いい本。俺は読みかけの本のページを、しおりの代わりによく折るが、「もったいないか？」と何度か思った（結局は折ったが）。『哀しき父・椎の若葉』（葛西善蔵・講談社文芸文庫・980円）→有名な作家ですが、40過ぎて初めて読み、今まで読まなんだのはいいカンしてたと思った。『宮沢賢治全集9（書簡）』（ちくま文庫・1100円）→筑摩は、萩原朔太郎全集も早く文庫化すべし（余りの賢治人気に、少しだけ地域ナショナリズムを発揮してみました。確かに朔太郎ってのは、ヒロイックで70年代的だけど、近頃の賢治文献の異様なまでの分析趣味にゃウンザリ！）。『鵜の目鷹の目』（赤瀬川原平・日本カメラ社・2400円）→〝陛下の赤子〟の原平も、相変わらず笑わせる。『ビーグル号航海記(下)』（チャールズ・ダーウィン・岩波文庫・570円）→フーッ。『明日泣く』（色川武大・講談社文庫・640円）→「オールドボーイ」ってのがカッコいい。ハゲてない頃の、渡瀬恒彦の役所と思いつつ読む。『ガラスの仮面1〜12』（美内すずえ・白泉社・580円）→ひばり書房っぽい絵柄に、故杉戸光史氏を思い出す。ひばり書房からエロ劇画界

に入り、10年程前に亡くなった。数多い、創価学会信者の漫画家さんの一人だった。再録の特集本出すと、いつも一万円くれた杉戸さん。遠山さんも死んじゃいましたよ。『エースをねらえ！1～7』（山本鈴美香・中公文庫・540円）↓かつてかおるが、いかにひどいパクリをしていたか、ようやく納得。
自宅じゃ最近、漫画ばっか。だって活字本読んでると、電車通勤してる気分になっちゃうんだもん。
（'95・8）

コミケシーズンにおける、避けられない不幸。

この業界の編集にとって、8月はロクな思い出のない月だ。例のコミケのバカ騒ぎで、原稿遅れくらいならまだしも、原稿落ちの果ての、トンズラ漫画家が続出するからだ。諸君も手持ちの雑誌を手に取り、表紙のラインナップと中身を照らし合わせて御覧なさい。表紙に名前がありながら、漫画が掲載されてない漫画家が、各誌に1人～2人はいるのに気付きませんか？（その見本が本誌9月号だと、付記せねばならぬのが情けない）
うっとおしいのは、トンズラ漫画家だけじゃない。来なくもいいのに、〝ド田舎在住漫画家〟が、コミケの上京ついでに編集部に遊びに来るのだ。夏休み明けで、編集部は地獄の忙しさだが、「ちょっと寄っていいでしょうか？」と電話が来れば、むげにも断われない。女流漫画家だと、鼻の下を伸ばして飯でも食べればいいのだから、そう苦痛ではない（にゃんこＭＩＣ＆星逢ひろの両センセ、また年末には顔出して下さい。それとにゃんこセンセは、俺に腐れ同人誌の詰まった、重いバック運びだけさせてないで、パンチラ写真くらい撮らせるように。また星逢センセは、㊧編集で今発売中の〝男と男の体験コミック〟『ジャニー』に、必ず投稿してネ！）。
問題は野郎漫画家。投稿者上りのＷＩＬＬの馬鹿が、北海道みやげのサケのクンセイなんぞ吊って、そのアホヅラを現わしたのは、8月17日夕飯時。みやげだけもらい放っとけばすぐ帰ると思ってたら、いつまでもゴロゴロ。仕方ないので、近頃下請けの編集費まで手形で払うありさまとの噂の、竹書房近くの洋食屋、「伊香里」へ（今やお先真っ暗の竹書房だが、同社が『チャイニーズ・ドラゴン』を出した直後、社長が950円のカキフライ定食をここで食べつつ、マスター相手にホラ吹きまくってたなんて裏話は、『Ｍａｔｅ』連載の「嫌われ者の記」の読者なら、とっくに御存知ですよネ）。「いや～、東京の暑さは半端じゃないっすネ！」（そりゃオメのせい。俺は体温が5度上がったヨ）「それに物価も高いです」（どうせここの払いは俺だヨ）「上京して、バイトしながら漫画描こうかなんても…」（テメー、マジで自分が漫画家だと思ってんのかヨ）「塩山さん、案外普通な感じで驚きました」（バカヤロ、いつもヤケジョのオハヤシタッチで息してると思ったのかヨ）とまあ、薄汚ないド田舎不細工男流漫画家との食事ほど、苦痛千万なものはないが、ここの洋食弁当（1100円）は、味がバッチリなのがせめてもの救い。何とか叩き帰すと、再び『ジャニー』（発売中・Ａ5判平とじ・一水社・700円）のお仕事。缶ビールのつまみに、ＷＩＬＬのみやげのクンセイを食べたら、意外においしい。ＷＩＬＬよ、今後はクンセイだけ宅急便で送り、その踏みつぶしたザクロみたいな最終フェイスは、血圧が上がるからさらしに来ぬように（それと夜逃げ屋の恭よ、当日いきなり、〝遊びに行きたい〟なんて電話してもダメ。前出の3人でさえ、半月以上も前に電話でコンタクトを取ってたのだから。ましてや野郎のバヤイは…）。
7月。『秘本世界生玉子』（橋本治・河出文庫・720円）↓面白い。『ジャニー』編集する上でも、色々と役立つ。『エド・ウッドとサイテー映画の世界』（洋泉社・1700円）↓面白い。遠距離通

勤者にとっては、本書、あるいは後出の『悪趣味邦画劇場』のシリーズが、月刊化されれば車内も天国。『トーノ・バンゲイ(下)』(ウェルズ・岩波文庫・670円)↓最後の頼みの船と荷物が、海のもずくと化すあたりの喪失感が趣味。『日本仰天起源』(荒俣宏・集英社文庫・600円)↓前から気付いていたけど、集英社文庫の本文の紙って厚手。だからあっさり読めちまう。文庫本でもツカにこだわるあたりが、『少年ジャンプ』の版元らしい。『ナベプロ帝国の興亡』(郡司貞則・文春文庫・520円)↓この人のはかつて『滅びのチター師』を読んだが、思い込み過剰でうんざりさせられた記憶が。が、本作は割と淡々としていて、説得力もある。一方で、何の思い入れの感じられない筆致には、「NHKみたいな御方」とも。『木村伊兵衛・昭和を写す(3)』(ちくま文庫・800円)↓サッと見る。『水晶の精神』(ジョージ・オーウェル・平凡社ライブラリー・1200円)↓偶然ウェルズ論が収録されていたので、興味深く読む。平凡社ライブラリーは、文字の大きさ等理想的で読み易い。『日本映画300』(佐藤忠男・朝日文庫・1200円)↓著者が高く評価してる、『蜂の巣の子供たち』を初めて最近観て、映画にとってテクニックなんて、大したい問題じゃないと再確認。『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ(前)』(橋本治・河出文庫・480円)↓退屈。『戦後日本共産党私記』(安藤仁兵衛・文春文庫・550円)↓著者の軽薄振りへの評価が、本書の評価へ直結するのだろう。『悪趣味邦画劇場』(洋泉社・1800円)↓本年度出版界の頂点に立つ本。特に藤木TDCよ、オメーは凄い。〝『ズベ公』映画の系譜〟は、松本俊夫の『映像の発見』以来の名論文。『怪物の友』(荒俣宏・集英社文庫・600円)↓本シリーズの中では平凡。『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ(後)』(橋本治・河出文庫・580円)↓続退屈。『鯨の腹の中で』(ジョージ・オーウェル・平凡社ライブラリー・1200円)↓ディケンズ、スウィフトと、趣味の作家の論考が多く、一気に読む。スウィフトは不能者らしいと書いてある。なるほど。俺も古女房に逃げられる寸前になると、粗チンが嫌々立つことが年に4回程あるが、あれが中途半端な人生の原因なのだな。『ワイルド7(1)〜(4)』(望月三起也・徳間文庫・600円前後)↓昔から通して読みたかった。納得。実写版も日活勢が頑張ってたっけ。『最終フェイス』(小林よしのり・徳間文庫・680円)↓最高。『どとーの愛』(小林よしのり・徳間文庫・620円)↓最低。『夢みる頃をすぎても』(吉田秋生・小学館文庫・600円)↓悪かぁねえけど、読まんでも良かった。『カムイ伝(1)〜(15)』(白土三平・小学館文庫・650円)↓ホント、断ち切りが少ない。そのせいか、読んでいて目が疲れない。それが物足りなさも感じさせる。

('95・10)

1972年、「熊沢牛乳店」バイト時代の配達区域再訪。

目黒感傷旅行とでも名付けるべきであろうか。〝男と男の体験コミック〟『ジャニー』(A5判平とじ・一水社・700円・発売中)発刊のおかげで、24年振りに浪人時代を過ごした、目黒区東山近辺を訪ねる機会を得た。『ジャニー』の1号目が発売になったのは9月18日。その4〜5日前、本誌でもかつてコラムを書いてもらっていて、以前は〝雑誌つぶしのプロ〟として業界に名を轟かせ、今は浜野佐知監督のピンク映画制作プロダクション、旦々舎に所属し、ピンク映画兼ホモ映画の監督として知られる、山崎邦紀から電話があった。「(一水社の)多田君からは了解得てんだけど、今度君んとこでやる『ジャニー』をモデルに、一本ホモ映画を撮ろうと思ってね。脚本は2〜3日のうちに上げるから、君にもホモ漫画誌の編集長役で出て欲しんだよ。撮影の初日は9月15日だから、休日だよね。

こっちのアパートにでも泊まって是非頼むよ。からみ!? ハッハハハハ…残念だけど今回それはないよ。いつも通りの調子で、漫画家役の役者に毒づいてくれればいいんだ。バッチリ台詞もアップもあるから!」

強姦魔役等、台詞なしの役は、かつて浜野監督の作品で務めたこともあるが、本格的出演は初めて(『無頼平野』の時も単なる通行人)。これも宣伝だと、意を決して撮影参加(その日が、流れたDONちゃんサロン予定日の、9月15日だったのは皮肉だ)。ロケ場所も漫画屋とあり、プロの役者さんやスタッフに迷惑をかけつつも、何とか撮影終了。アフレコがあるからと集合をかけられたのが、ニューメグロスタジオの最寄り駅である、新玉川線は渋谷から一つ目の池尻大橋。かつて僕が一年くらい、住み込みで牛乳配達のバイトをしていた、東山にあった「熊沢牛乳店」から10分程の所。近所にあった大橋図書館にはよく通い、『現代日本戯曲大系』(三一書房)や、ハードカバーの『日本映画発達史』(田中純一郎・中央公論社)に読み入ったものだ。そんな街を四半世紀振りに訪れる理由が、ホモ映画『パレード』(大蔵映画・10月下旬公開予定)のアフレコというのも、俺の人生らしくていいと、少し強がる。

集合の一時間前に池尻大橋に着く。俺がいた頃は、この線は通っていなかった(工事をしていたような記憶はある)。見当をつけて目黒川の方へ歩く。そこが分かれば、〝配達区域〟のカンを、パッと思い出せるからだ。右手に、太陽テントの岩壁付きビルを懐かしく見上げつつ、あっという間に目黒川沿いに出る。昔は少し大雨が降ると、たちまち増水して付近が水浸しになったが、改修工事が済んだ今では、まず氾濫しそうにない。少し下って行くと、川向こうにポリドールレコードの建物。川越しに俺が住んでいた木造アパートがあったはずだが、今はマンションかな、駐車場かなと予測していると、第二東光荘は当時のまま、ビルの間にひっそりと建っていた。2〜3枚写真を撮る。直進すると山手通りの立橋に。左手に折れると、日活ロマンポルノの、田中真理の生家の薬局があったはずだが、遠目にははっきり見えない。右折して、そろそろ勤務先の「熊沢牛乳店」の建物がとキョロキョロ。建物はアパート同様まだ健在でした。しかしシャッターが降りて、牛乳店はおろか、もう使われている様子はない。ほこりっぽい建物をしばし見上げた後、山手通りの反対側、つまり「SONY PCL」の裏手の、俺の配達区域だった青葉台に向かおうとしたのですが、どうも足が進もうとしません。待ち合わせ時間にはまだ30分もあるのに、ここまで歩いて来ただけで、疲労感で一杯に。青葉台地区の再訪は次の機会にということで、東山の裏通りを池尻大橋に向かう。第二東光荘の一階に住んでいた、いつも銭湯でスネ毛を剃っていたオカマのおじさんや、偶然俺と同郷で愛人してるらしかったOLは、今頃何してんのかな?

8月。『乱菊物語』(谷崎潤一郎・中公文庫・880円)→面白い。未完な所が余計に想像力を刺激する。『動物好きに捧げる殺人読本』(パトリシア・ハイスミス・創元文庫・550円)→この人の短編はつまんない。『宮﨑勤裁判(上)』(佐木隆三・朝日文庫・580円)→続きがなかなか出ない。『狼煙を見よ—東アジア反日武装戦線〝狼〟部隊』松下竜一・現代教養文庫・640円)→〝あんたらのやり方は悪かったが、心情は良く分かる〟ってな、いい気な本。爆死させられた側の視点を抜きにしたこの種の本は、警察白書の裏返しに過ぎない。『「絶対」の探究』(バルザック・岩波文庫・670円)→バルタザール、ジョゼフィーヌ、マルグリット…登場人物の名前が全部カッコいい。映画化するならバルタザールは、やっぱビンセント・プライスだったろうが、死んじゃいました。『新ニッポン百景』(矢作俊彦・小学館・1800円)→いかにも『週刊ポスト』連載らしい、腰の引けた〝お皮肉〟が、それなりに笑わせる。『ヤミ市ガイドブック』(松平誠・ちくま新書・680円)→今でこそ区画

整理が終わったけれと、池袋のロサ会館の奥の方なんて、ついこの間まではスラム街で、僕もよく写真撮りに行きました。『ドイツの秘密情報機関』（関根伸一郎・講談社現代新書・650円）↓こりゃ面白い。ドイツ人て、こーゆことも徹底的にやりそう。『ライオンと一角獣』（ジョージ・オーウェル・平凡社ライブラリー・1400円）↓この巻は肩の凝らない文章が多いのだから、もっと最初の巻に持ってくれれば（これは4巻目）と思う。『浮沈・来訪者』（永井荷風・新潮文庫・520円）↓両方とも凄い。荷風はどんどこ文庫化せい。『11人いる!!』（萩尾望都・小学館文庫・580円）↓暑い時期に読んだので、余り憶えてない。『夏のおわりのト短調』（大島弓子・白泉社文庫・600円）↓こりゃあ趣味だな、割と。例によって、解説がなきゃ余計に良かった（読まねば済むのに、貧乏性だからつい読んでむかついちゃう）。『パレード』は「上野世界傑作劇場」、大阪は「東梅田ローズ」にて公開予定。（'95・11）

あの不良女子高生の菜摘ひかるが、ここまで出世致しました。

大学一年から最初の子供が生まれた30代初めまで、西川口で過ごした身ですから、ストリップにはよく通いました。東口に「西川口テアトルミュージック」という小屋があり、アパートから歩いて10分の距離だったため、銭湯でひとっ風呂浴びた後、公園に散歩に行く気分で通ったもの。入場料は3000円くらいで、土曜日はオールナイトもやっていた。「文芸坐」の小津安二郎のオールナイトの間を縫って出かけた記憶が。

当時は本番生板ショーの全盛期。まだＡＩＤＳは海の向こうの話だったためか、美人の踊り子さんになると、客同士のじゃんけんに殺気が漂ってた。金髪姉ちゃんともなると、そりゃあ凄まじい倍率な一方、ダブル生板で登場した相方のフィリピン系お姉様には、誰も手を挙げなかったりで、日本人の西洋信仰はキンタマの筋、いや、芯にまで染み込んでるんだと思わされた（俺え？　参加するわけないっしょ。ンな度胸と精力は、昔っからありません。が、生板ショーに上がる男は、立たなかったり、あっという間に射精だったりの、性的弱者の方が受ける。そりゃそう。自分と同じ入場料払っただけの野郎が、じゃんけんに勝ち抜き、美女相手にガンガンじゃ白けます）。

だから菜摘ひかるに、「新宿ＤＸ歌舞伎町」でファッション・ヘルスショーやるので、是非見に来てくれと誘われた際も、10数歳若返った気分になり、二つ返事で引き受けた（5年程前に、当時住んでいた蕨の劇場に一度だけ行った。ただ生板ショーになると、「外人はダメ、外人はダメ!!」とマイクで連呼、同じ入場料金払っている多数のイラン人が、本当に気の毒だった。彼等は〝完璧な反日家〟となって帰国したろう）。一人で行くのも、間違って舞台上のひかる姉ちゃんと、目が会っちゃった時に照れんので、30過ぎるまで一度もストリップに行ってないという、ＤＯＮＫＥＹを同行。

入場料は5000円。昔と余り変わってません（むろんＤＯＮの分も払う）。時間を聞いてて入場したためか、いきなりひかる姉ちゃんが、セーラー服にパンティ一枚で登場。後から登場したスレンダーな険のあるお姉様に、カッコいいお乳をモミモミモミ。レズショーの後、客一人上げての3人がかりのファッション・ヘルスショーに続き（このオヤジもボッキせずに受けていた）、タッチショー開始。これは要するに、スッポンポンのひかる姉ちゃんら3人が、客に体を触らせるわけ。昔からありますが、ここのは舞台からだけでなく客の群れに突撃、一度に5～6人の手、つまり10本以上の腕が、踊り子さんの体にワラワラ群がるのだ。で、俺は見逃さなかった。3人の中でも一番客の奥深くに突撃、なぐさみ者にされてた菜摘

ひかるの目が、完璧に行きまくり、遠い世界を見つめていたことを（ここは生板ショーはなし。踊り子さんも、踊り上手が埼玉あたりに比べると揃ってる。また俺もDONも、マイクで事前に警告されたように、踊り子さんの体には絶対に触れませんでした）。

9月。『奇想小説集』（山田風太郎・講談社大衆文学館・760円）↓つまんなくはないが、面白くもない。要するに趣味じゃない。『ロッパの悲食記』（古川緑波・ちくま文庫・600円）↓晶文社版の大冊の昭和日記を読んだ時も思ったが、なぜ女性にこの人は一言も触れないの？『にほんのうた・戦後歌謡曲史』（北中正和・新潮文庫・440円）↓安くて小さいが鋭い本。趣味もいい。終戦直後の「憧れのハワイ航路」等の底抜けに明るい歌謡曲の中に、日本人の無自覚、無反省を嗅ぎ取るあたりは、さすが。『神州纐纈城』（国枝史郎・講談社大衆文学館・840円）↓中学生の頃、復刊された本書（桃源社版）のPRを『東京新聞』で見て以来、いつかは読みたいと思っていた。こんだけ間があくと期待外れな場合も多いが、本書に限ってそんなことはなかった。谷崎、三島ファン必読。『嵐が丘』（E・ブロンテ・新潮文庫・680円）↓本て安い。600ページもあるこんな傑作が680円!! 一気に読み、メキシコ時代のブニュエルの映画化作品をビデオで観直す（詳しくは『ラッツ』12月号の「嫌われ者の記」を）。『にせニッポン人探訪記』（高橋秀実・草思社・1600円）↓〝日本人の皮をかぶったソ連人〟との自覚が少しでもある人は、一読に値するかも。もう2年出版が早ければ、もっと売れたろう。『貧農史観を見直す』（佐藤常雄・大石慎三郎・講談社現代新書・650円）↓駄本。最初は題名負けなのかと思ったが、出来た原稿を見て、余りのつまらなさに絶望した担当編集者が、売り上げ不振でボーナス査定のダウンを恐れ、必死の思いで考え出した名題名なのではと思い直した。本書を50ページ読んで、一度も破り捨てんとの衝動にかられなかった人の99%は、ドアホだと断言する。『パタゴニア探検記』（高木正幸・岩波書店・950円）↓日本、チリ合同探検隊の、いじましい駆け引きが非常に面白い（パタゴニア自体については、ほとんど印象に残らない）。『パーフェクト・ブルー』（宮部みゆき・創元推理文庫・550円）↓鈍感な俺は100ページくらいまで、主人公のマサは人間で、警察犬というのは韜晦だと思っていた。国産推理小説はめったに読まないが、いいですね、作者の学芸会的台詞に慣れさえすれば。『東北の神武たち』（深沢七郎・新潮文庫・600円）↓一見そういう種類の本じゃないのに、昼飯の時に持ってく小さなバックに入れて、少しずつ読んでいたら、次第に胃になじんで来た。深沢七郎の全集はいつになったら出るの？ 出てもやっぱ、「風流夢譚」は収録されないんでしょうね。じゃ、出なくてもいい。『神秘学マニア』（荒俣宏・集英社文庫・700円）↓退屈。『ワイルド7(5)〜(8)』（望月三起也・徳間文庫・560円前後）↓15巻までは読もうかな。『いしいひさいちの経済原論』（朝日文庫・460円）↓トンちゃん好きの、小沢一郎嫌い極まれり。『銀の三角』（萩尾望都・白泉社文庫・580円）↓描いてる方は本当に気持ちよさそ。（'95・12）

単なる馬鹿、要するに〝単馬鹿〟はテレビに登場する権利がないのか!?

NHKの大河ドラマ、『八代将軍吉宗』って面白い。日曜の夜は禁酒日で、豊川ピコ様にプレゼントされた裏ビデオでオナる気も起きず（詳しくは『Mate』12月号の「ズンドコジョッキー」参照）、録画しといたビデオや、読書で悶々としてる日が多いが（絵にならない中年男の悶々姿！）、ある夜ふと『八代将軍〜』を観るに及び、45分間だけは退屈せずに過ごせるのを発見、「さすがはスケコマシ中年、ジェームス三木の脚本だけはある」と唸らされた。特に中村

梅雀の馬鹿殿様振りなど、よくＮＨＫがと思わされたが、よく見ればば阿呆なはずなのに、妙に哲学的な警句など吐き腐り、「こいつのどこが阿呆なんだヨ？」。だからこそＮＨＫはＧＯを出したのだろうと、納得。が、視聴率アップのためなら、馬鹿でも阿呆でも利用しようとするＮＨＫの商魂は、漫画屋でも見習わねばと自省する一方、俺が差別糾弾関係の団体に属する者なら、「馬鹿は常に神聖な一面を持ってないとＴＶに出さぬという姿勢は、単なる馬鹿に対する逆差別だ!!」と、日頃ＮＨＫ受信料など一銭も払ってないのに、糾弾してやると思いもした。ともかくＮＨＫの商魂は、『気狂いピエロ』を『ピエロ・ル・フ』なんつう、それこそ気違い沙汰の題名に改悪して放送したＷＯＷＯＷよりは、一グラムは健全であるなと、新幹線の中で思った。

　が、その日俺が乗っていたのは、いつも通勤に使ってる上越新幹線ではなく、東海道新幹線なのであった。『ラッツ』連載の「嫌われ者の記」や（司書房は、各誌の紙質をもちっと何とか出来んの？漫画家や執筆者は一人残らず泣いておるゾ）、『Ｍａｔｅ』の読者なら既に知っていると思うが、漫画屋は吉田婆ちゃん班の㈲モアに続き、(塩)班も㈲塩山商店というのを設立したので、待望の社員旅行を決行したのだ。海外旅行が当り前の昨今、熱海へ一泊二日というのが、いかにも使い捨て下請けらしく枠であると、社長の俺は自認しているが、内実をバラせば、絶不調の『ジャニー』（Ａ５判平とじ・７００円・２号目発売中!!）が廃刊にならないうちに、一度社員旅行をしたかったというだけ（客観的に見れば泊りがけの宴会）。

　参加者は俺、やくる～と（浴衣が嫌いとかで、ジャージの上下持参した変な奴）、シマ（普段のトロい仕事振りに反して、終始はしゃぎまくってたヒール10センチの上げ底女）、ＤＯＮＫＥＹ（温泉入って飯喰った以外は、夜の９時から翌朝８時まで眠り続けたイビキ仕掛けの肉の山）、かやま☆みく（同時に誘った、菜摘ひかるがＡＶの撮影で、やす○が彼氏のシット…いや、仕事の都合で来られなかったのに、とどこうりなく参加出来たラッキー女）の計５名。宿泊先は「貫一」という、ワシらには不釣り合いな感じのリッチな和風旅館。部屋も料理もバッチリで満喫しましたが、総合評価は75点。マイナスの第一は、仲居の態度が悪かったこと。「○○さんとはどんな関係で？」と、このホテルを紹介してくれた人と僕らの関係を、しつこく聞きたがる。うさん臭い連中ゆえに、心配なのは良く分かるし、値踏みがあんたらの重要な仕事なのも知っとるが、される側の気分を害しちゃあきまへん。こんな所に実名で悪口を書かれてしまいますがな（別部屋の女のコ２人には、もっと失礼な対応をしたとか。確かに茶髪で、育ちの悪さと無教養さがストレートに出たコンビだが、「金曜日から社員旅行なんかしはるんですか？フフン」てな言葉を吐いてはいかん）。この糞おばんがマイナス20点。あとの５点は浴場の窓が小さく、ほとんど外が見渡せなかったから。これは客室からの眺めが良かったので、我慢の範囲内。それにしても、接客業というのは大変。泊る部屋も料理も合格なのに、阿呆な仲居一人のせいで、ぶち壊しになりかねぬのだ（その点を承知してたら、ホテル「貫一」も結構楽しめるかも。今年の忘年会は、熱海の「貫一」でどないだす？　ちなみにここ、僕らは人の紹介もあって割引いてもらいましたが、高いっすよ。けど仲居のあんな態度は、紹介者の顔に泥を塗ることになるっての、わーらんの？）。

　10月。『窓辺の悲劇』（バルザック・岩波文庫・４１０円）↓この巨匠の小説は、まだ３～４作しか読んでないので、読破するのを老後の楽しみにしよう。『史記列伝（一二）』（岩波文庫・５７０円）↓中国の古典って含蓄があっていい。特にこの人間カタログは、ピンからキリまで淡々とつづっているだけなのに、ドラマチック。『人間にとって顔とは何か』（レイ・ブル他・講談社ブルーバックス・８４０円）↓題名は申し分ない。中身は常識的で新味なし。アンケー

トを多用し過ぎてるのも退屈な理由。それもこれも、写真を使えないせいだろうが（不細工見本に、自分の写真を使うのを許す男女はおらんな、確かに）。『火の見櫓の上の海』（川本三郎・NTT出版・1300円）↓飲み過ぎた日の翌日とか、古女房のド阿呆さにめげた夜、年がいもなく日に2回ものオナニーにふけった休日の午後なんかに、この人の本はしみじみと胸にしみる。『三国志の風景』（小松建一・岩波新書・950円）↓『三国志』ファンがこいつを片手に、チェーン店ではない場末の居酒屋のカウンターで、あん肝をつまみに、焼酎のお湯割りをチビリチビリやりながら読むのに最適の本。『親指Pの修行時代(上)』（松浦理英子・河出文庫・580円）↓(下)を読んでから。『伝記文学の面白さ』（中野好夫・岩波書店・900円）↓下手な伝記より面白い。『黙阿彌オペラ』（井上ひさし・新潮社・1100円）↓中半以降ガタガタ。『ハノイ挽歌』（辺見庸・文春文庫・480円）↓カットがミスマッチ。『ロマンチック牛之介(上)(下)』（小林よしのり、徳間文庫・560円）↓退屈。『綿の国星①②』（大島弓子・白泉社文庫・560円）↓退屈。漫画不作の10月。（'96・1）

やっぱり『赤旗』は面白い。

ああ…何か気持ち悪くなっちゃった…。実家の母ちゃんがお汁粉作ったから、残しちゃ悪いのでどんぶりに一杯食べたのよ。ここらの味付けって、しょっぱいのも甘いのも極端だから…。甘い物にも二日酔いがあるんだなって心境。両眼とお腹が、逆方向に散歩してる。今日は1月14日。日曜夜の楽しみ、3チャンの『ふるさとの伝承』を観ているんですが、今回の「鳶を生きる・江戸町火消しの心」は、この番組にしては全然面白くない。今の〝火消し〟は、金持ち建築業者の名誉職になっちまってるから、そこらが鼻に付くのかな。江戸消防記念会のおっさんらの偉そうさは、地方の伝統行事を細々と受け継いでる青年団員とは、精神が根本的に異なる。その両方を残すことが、この種の番組の価値なのだと思いつつも、アホらしくなってスイッチを切る（同じ東京編でも、先週のしるしばんてん屋さんのは良かった。群れて威張ってる連中の晴れ姿くらい、傍から見て滑稽なものはない）。

で、皆さん家は新聞何取ってるの？　俺ん家はいっぱい取ってます（拡張員に脅されたわけではない。このゴロツキ共との関わりについても笑えるネタがあるが、これは後日）。そのくせ、一般紙は一紙もなんだよね。ここに越して来た直後は、『朝日新聞』取ってたけど、3面の次にあるマスコミ業界ページが、要するに〝自社の腰抜け振りの言い訳欄〟になってんので、ムカついて止めた。以降は『日本経済新聞』。この新聞がいいのは、自己主張がほとんど無い点。要するに、経済情報のデータ切り売り。すぐ泣いて逃げ出すくせに、思い入れたっぷりな記事載せる朝日や毎日と違って、ドライで良い。内容も常に具体的だし。最初から〝経済界芸者〟に徹した潔さとでも言おうか（時々、誰も読んでない社説で気が狂ったような正論を吐き、目を白黒させられるが）。

それと『赤旗』。もう10年以上になりますが、次の3点の充実振りは他紙の追随を許しません。①皇室ネタ。これは徹底してる。敬語も一切抜きなので新鮮。本来は日経がせねばならない、経済コスト面からの追及も小姑みたいに執拗（天敵立花隆も、この面での追及は『同時代を撃つ』で厳しくやってる）。②学習、党活動ページは、不況時代のセールスマン必読。創価学会ほどではないが、機関紙の拡張には力を入れてる。昔、〝寝た切りの党員が日刊赤旗3部拡大〟との記事があったので、良く読んだら、入院先への見舞い客に拡張したとか。うっかり共産党員にゃ、見舞いにも行けません。③スポーツ欄の体操関係の写真、特に女子の新体操の写真は、『熱

烈投稿』も真っ青。通信社から買ってるのか特写なのかは不明だが、ルイス・ブニュエル張りの脚への通人が、編集部に居ると思われる。〝宮本天皇〟への崇拝振りは目に余るが、以上の記事関係のみ拾い読みすると、楽しめる。

最近取り出したのが『日刊スポーツ』。つまんね新聞（『日刊ゲンダイ』、『夕刊フジ』の2紙を、いつも帰宅時に読んでるので、余計にそう思えるのかも）。なぜ読み出したかといえば、放映映画の全データが載ってるから。WOWOWは番組表送ってくるから分かるけど（ここの番組表くれえ、使いづらく糞なのもねえが）、BS11が深夜に放映する映画にゃ、とんでもねえ珍品が混じってるしね（去年放映した、『コルドリ博士の遺言』ってジャン・ルイ・バロー主演の映画が、ジャン・ルノアール監督作品だなんて、ちっとも知らなかった）。でもこれって、TV情報誌を買えば一発で解決するし、経済的だから中止しようかな？（政治面は、本家の朝日よりかは面白い。味方に撃墜された例の自衛隊機の値段も、ちゃんと表示してたし）。

最後が、週に3日発行の『日経流通新聞』。これは日経の体質のいい点ばっか出た新聞。天下、国家のことになんざ一切触れずに、〝今、どういう商品が売れていて、明日からは何が売れるか？〟という観点からの、小間切れ記事満載新聞ですから。欠点は、主たる読者のオヤジを意識してか、〝実態のない若者トレンド情報〟を、極端にスカして載せること。ガキなんざ銭持ったバカと内心規定、媚びまくんじゃねえよ、バカ!!（コラムも結構読ませるが、田中康夫のが終わった後は、イマイチ元気がない。「ダイエー」や「イトーヨーカ堂」の社長も、やたらに顔出すのでゲッソリ）

〝汁粉酔い〟もようやく収まる。12月ですが、行数が少ないのでデータのみで。『史記列伝(五)』（岩波文庫・520円）『ぼくらのSEX』（橋本治・集英社文庫・560円）『山谷日記』（宮下忠子・人間の科学社・1442円）『川釣り礼讃』（榛葉英治・平凡社ライブラリー・980円）『ブルース・リーと101匹ドラゴン大行進!』（洋泉社・1380円）『ゴリオ爺さん』（バルザック・新潮文庫・520円）『戦後再考』（上野昂志・朝日新聞社・2200円）『TARANTINO BY TARANTINO』（ジェイミー・バーナード・ロッキング・オン・1800円）『東京つれづれ草』（川本三郎・三省堂・1900円）『聞いて極楽』（ナンシー関・朝日新聞社・1000円）『テレビ疾風怒濤』（辻真先・徳間書店・1800円）『ぼくはこんな本を読んできた』（立花隆・文藝春秋・1500円）『漫画の時間』（いしかわじゅん・晶文社・1900円）『メッシュ①〜③』（萩尾望都・白泉社・560円）↓お上手な絵で立派とは思ったが、ページをめくる手は重かった。『ワイルド7(8)(9)』（望月三起也・徳間文庫・560円）↓ようやく面白くなった。巻を追うごとに加速化される（今(13)を読んでいる）。『アラベスクI〜IV』（山岸凉子・白泉社文庫・600円）↓やっぱ面白い。萩尾望都なんかレースじゃないが、後半、絵が上手くなるあたりが退屈。やっぱここらの通俗性が、天才（美内すずえ）と秀才（山岸凉子）の差だろう。

（'96・3）

別にカラオケマニアを嫌ってるわけではないが…。

意外に思われる読者もいると思うが、俺はカラオケが大嫌い。音痴だからではなく（小林旭の「自動車ショー歌」は、3年程前までは4番まで唄えた）、ごく単純で、要するにうるさいから。うるささというのは始末が悪い。ブスや馬鹿なら席を同じくしても、無視するなり適当に相槌を打っておけば済む。騒音はそうは行かない。ズンズンズンズンと、一方的にこちらの神経&肉体に土足で侵入して来

る。だから、漫画屋でも吉田婆ちゃん達と時々宴会をするが、まず2次会で切り上げ、3次会まではついて行かない。カラオケスナックで、婆ちゃんのリサイタルが始まるのが必至だから。彼女の歌が上手なのは認めるが、狭い場所に押し込められて、それを何十回も確認させられんのはまっぴら御免。

カラオケなら、相手の趣味が分かれば避けられるから、騒音公害としてはまだマシ（自宅近くにカラオケスナックがある人には、深く同情するが）。最大の騒音公害は、今、全国各地の市町村に普及しつつある、〝防災無線〟なる〝凶器〟だ。これは天災等の被害を、最小限にとどめるためとの名目で導入されてはいるが、現実には、〝気違いに刃物〟ならぬ、〝気違い公務員に防災無線〟とでも言うべき、言語を絶っする状況になっている。特に地方では顕著で、都会人からすれば笑い話としか思えぬことが、日夜繰り返されている。2年半前から、北関東に移住した僕の体験談を報告しよう。

僕が家族で移り住んだ故郷の群馬県のT市は、人口約5万。越して半年くらいは、それまで7～8年住んでた川口の芝園団地、別名小便団地（最低の作りで、上階の男がトイレで立ち小便すると、下の階に〝ジョボジョボ〟との音が筒抜け）に比べれば、回りも静かでなかなかでした。一変したのは一昨年末。例の凶器が、俺の住む地区にもドーーンとおっ建てられたのだ。100メートルも離れてない隣村にもドーーン。前市長が業者から数百万もの現金を受け取りながら、マスコミで報道されるや、「金とは知らなんだ。返したから問題ない」てな寝言を平気で言う土地柄ゆえ、多分業者のえげつない売り込みで、不要なのに建てやがったなと思ってたが、いざ放送が開始されるや、ンな甘っちょろい事態じゃないと思い知らされた。

まず定時放送というのが日に3回ある。12時にまず「ピンポンパンポーーン…」の例のメロディ。文字にするとカワユイが、〝小学校百校分くらいの音量でこれを流す〟と言えば、納得していただけるでしょうか？　文字通りの地響き状態で、驚いた村中の数十匹の犬が一勢に吠え始める（これはメロディのみ、音声放送の時の共通現象で、実際はほとんど内容など聞き取れない）。5時（夏場は6時）に、今度は「七つの子」の同じく地響きメロディ（犬も）。夜はさすがに放っといてくれるかと思うと、午後9時にこう来るのだ。「こちらは防災〇〇です。御家庭の皆さん、火の元の点検はお済みですか。もう一度火の元と戸締まりをお確かめの上お休み下さい。こちらは防災〇〇です。ピンポン…」。夜だからその大音響は、本当にお月様にも届きそうだ。しかもである、日に最低3回この他にも、〝防災無線を業者の奢りで飲む際のスナックのカラオケと同一視したらしいこの気違い公務員共〟は、「××で老人が迷子になりました。お気付きの方は、最寄りの警察にお知らせ下さい」「××の老人は無事保護されました。ご協力ありがとうございました」「雨のない日が続いております。水道局からのお願いです。節水に御協力下さい」等の、お節介、寝言、与太話の類いの放送を血税遣いつつ、宴会気分で頻繁におっ始めたのだ。

中でも節水の放送は、朝7時から連日だったので、さすがに温厚な俺も市役所へ電話をした。「騒音公害への苦情は？」「はい、環境課。は、防災無線ですか。それじゃそちらに回します」（これがそもそもおかしい。身内もちゃんとチェックすべし。が、面倒なので…）「節水の放送、朝7時っからやんの止めてよ。うるさくて眠れないんだよ」「え〜。もう7時ったら、フツーの人は起きてんじゃねんかい？」（7時に寝てんのは人非人と言わんばかりの口調）「あんた、役人を基準にされちゃ困るよ。サービス業の人はもっと寝てる人いっぱいいるし、夜勤明けの人だっているだろ？」「ま〜」（本当は納得してない。〝人権都市宣言〟なんてしつつ、地方じゃこの手のカス役人が王様気取り）「何も一切放送すんなっつってんじゃな

いよ。地震や火事なら仕方ないよ。けど節水のお願いや、老人の迷子のお知らせが、何で〝防災〟なんだよ。迷子は警察の仕事だし、節水は水道局の仕事だろ。それを何で市役所が下請けして、朝っぱらから何万もの市民に大音響で説教すんのよ？」「防災行政無線ですから…」「ならよ、市長の演説、毎日聞かされる場合もあり得んのかよ？」「……。何がおっしゃりたいんでしょう？」（〝気違い公務員に防災無線〟に、この俺様がゴロツキ扱い）「つまりさ、老人の迷子は、その家と警察の問題だよ。全市民に知らせる必要はない。おまけに、見つかりましたなんてお礼に至っちゃ、馬鹿丸出し。見つけてもらった老人の家族が、その人にお礼をすれば済む問題。そうだろ？」「え、ま〜」「それに節水なんて朝7時からせんで、夕方、水道局の車にでもやらせろよ。車にゃあんな馬鹿でかい音量のスピーカーは、ついてねえだろうし。要するにさ、一切止めろってんじゃねえよ（本当はそうして欲しいが）。必要最低限な放送を、なるべく小さい音量でしてくれとお願いしてんだよ。税金で騒音公害出されちゃ頭来るぜ！」「え〜と、まあなるべくそういう方向に…ムニャムニャ…」

その後さすがに老人迷子等の放送は減ったが、音量はそのままだし、近頃はやたらと消防署が防災のPRをする。頭に来たので、一年振りに抗議電話をしよう。故郷の山河を土建屋が破壊してるのは知ってたが、役人の一部も完全なグルだと改めて知った（『静かさとはなにか』第三書館・2060円には力づけられた）。（'96・4）

まずは富岡市に軽くジャブ。

42にもなりますと、元々立ちの悪いチンポコはより寝たきり状態と化しますし、記憶はボケッ放し（今日もハワード・ホークス監督の『コンドル』を、ロバート・アルドリッチ監督の『飛べ！フェニックス』を観ていて思い出したのに、主演のケーリー・グラントの名前が出て来ず、嫌になってしまった）、加えて肝機能低下のために酒も飲めず（休肝日が、従来の木、日に火曜日も加えた、週3日となり寂しい）、さらにギャンブルは全く興味ない性格ですから、いやはや、一体毎日何を楽しみに生きているのか、自分でも不思議というか、「人生ってこんなものか!?」というか、〝ツ――ッ〟と、一筋の涙さえ落ちて来ます。

こうなると張って来るのが喰い意地。とはいえ、近頃また増えて来た街角の立ち喰いそば屋の前を通ると、つい青春時代を思い出してしまう程度の育ちですから、グルメだ何だという、銭のかかる食道楽の道に踏み込もうなんて気は、全然ありません（そのくせ銭がたまらないのは、不要な騒音放送っきゃサービスの出来ない、JR東日本に高い定期代払ってるため。帰りに利用する、東京駅発20時20分発のMAXとき415号の車掌で、とんでもねえ馬鹿がいた。手荷物に気を付けろ、見送りの人は早く降りろ、ビュッフェはどうのこうのだのに加え、〝階段を御利用の際には手すりにおつかまり下さい〟とまで言うのだ。自己紹介もしたんだから、名前メモっときゃ良かった。オメはJR東日本を首になっても、群馬県の富岡市の、防災無線担当者として就職出来るだろう。この富岡市、昔は養蚕が、今はこんにゃくと下仁田ねぎくらいしか名物はないが、今後は〝気違い公務員のカラオケ感覚説教暴音防災無線〟が名物になるであろう。いや、この俺がしてやる。かつて富岡市は、社会科の殖産興業、富国強兵のコーナーで、八幡製鉄所と共に必ず名前が出て来たが、今後は〝公務員騒音公害の街〟として、テストに出るようになるかも）。

何の話だっけ？ そだそだ。立ち喰いそば屋だ。バブル期にはすっかり姿を消してたが、昨今ポコポコ増え始めたのは嬉しい。けど、まずいの多いよね。都内じゃ「富士そば」チェーンてのがワースト

味で有名だけど（この4～5年行ってないけど、まさかうまくなってないよね?）、そこに比べりゃマシとはいえ、伸び切ったたくたそばを出す、水道橋の「梅もと」の近く（例の「東西堂書店」付近）に出来た、「天加」って立ち喰いそば屋には唸らされた。たぬきそば、さばのみそ煮、御飯から成るサービスセット（550円）を食べたのだが、味に一切の迷いがない。つまり、うまくしようなどという、こざかしい細工を全て放棄した、〃一点の曇りもない澄み切ったまずさ〃と言うしかないのだ。半端なまずさに汚された食道が、カラリと洗われた（このまずさに匹敵するのは、JR高崎駅1番ホームに店を出す、だるま弁当で知られる、「たかべん」経営の立ち喰いそば屋しかあるまい。めんがまずいのは我慢するとして、つゆが死にぞこないの爺さんの小便のようにぬるく、化学調味料もバサバサで、恐るべき上州トリップ感覚が満喫出来る。群馬に来たら、ここのトリップ立ちそばと、富岡市の〃気違い騒音防災無線〃は、是非味わって欲しい）。

てなことを書いていると、20年振りに田舎に帰ったイモ野郎が、東京人振ってるポンチ巻のようだが、やっぱりうまいもんもある。俺は和菓子、特にあんこ系が35を過ぎてから好きになって、川口の小便団地こと芝園団地に住んでた頃は、「大和屋」のだいふくとだんごをよく食べていた。田舎に帰っても、早速色んな店を物色、高崎「スズランデパート」の並びに最近店舗を移しただんご屋が、安くてうまいのを、閉店した「ダイエー」脇にある頃から発見していた（この店、いつも名前が思い出せない。ちなみに前出の「大和屋」の息子と、小学校時代に同級生だったという、浦和の『Ｍａｔｅ』の常連投稿者がおったが、大学受かった?）。

最近また、うまいまんじゅうを発見した。高崎駅の、新幹線ホーム内のＫＩＯＳＫでしか売ってない。太助饅頭だ。10個入り１０００円の、いわゆる温泉まんじゅうだが、つぶあんの甘さがくどくなく、あっさりし過ぎず、皮も同様なのが気に入った（コンドーム並の薄皮を強調する温泉まんじゅうもあるが、10割そばと同様で、味も大したことない）。

火、木、日の休肝日には、熱い日本茶かウーロン茶で、太助饅頭を2個食べんのが生きがいになってる（3日のうち1日は、東京駅で売ってる大江戸きんつばになる場合も。この場合は1個。それに、田舎は近所に親戚とか多いでしょ。住んで3年近くになると、俺のまんじゅう好きが知れ渡ったらしく、〃水上に行ったから〃〃磯部に行ったから〃と、よくまんじゅうのおみやげが届く。で、益々〃まんじゅう評論家気取り〃に。今んとこは、ここよりうまいのはないっすね。読者でまんじゅう通の方がおられましたら、〃俺のまんじゅうベストワン!!〃を知らせて下さい）。

ＪＲ飯田橋駅東口にも、輸入物の鬼瓦みたいなツラしたおばさんが、だいふく類を売ってるコーナーがあるが、まずくて高くて問題外。漫画屋の近くにも一軒だけでいいから、安くておいしい和菓子屋さんがあればいい。もっとも高血圧と肝機能低下で、塩分と酒を控えながら、妙に甘い物に走っている俺を見て、例の地黒年増女房がポツリ。「あのさ～、あんまし甘い物ばっか食べてっと、糖尿になるよ。糖尿って怖いらしいよ。目は見えなくなるし、アレは役立たなくなるし。今より弱くなったらどーすんの?」「………」好きな物を食べる程度の銭を得る頃には、体が受け付けなくなってるという、悲しい教訓話でした。

（'96・5）

おろかなる富岡市とその糞役人。

皆さん今日は! 「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」の代表で、同会の機関紙、『こちら騒音富岡です!!』の編集長も兼ねている塩山のヤロです。この機関紙は漫画屋関係の漫画家さ

んの協力も仰ぎ、5月中には完成させ、全国の希望者にも80円切手を貼った返信用封筒さえ送ってくれれば、発送するから楽しみにしててね。旧ソ連か北朝鮮を思わせる、ファッショ的な説教防災無線で、住民管理を企む市当局との笑わせるやり取りは、今発売中の『ラッツ』6月号の「嫌われ者の記」にも詳しいから、是非立ち読みを（暇な役人連中は、大蔵省や厚生省から地方の下っ端まで、なすべきことをせずに不要な防災無線建て、業者を儲けさせ騒音で住民を苦しませたり、ソープやパチンコ屋放っといて、淫行条例作ってみたりと、亡国への道案内人と言うしかない）。

『嫌われ者の記』の単行本化もいよいよスタート。当初前宣伝した6月は苦しそうだけど、7月には何とかなりそう。編集自体は、フリーの石本種雄ってヤロがやるんだけど、やっぱ著者は種々せにゃならん。この週末も、収録予定の96回のうち、『アットーテキ』、『マンモスクラブ』分のスクラップチェックしてたんだけど、手間がかかりまっせ。8年前の業界や家族状況、観た映画の題名を見る度に、書くに書けなかった当時の思い出についふけったりしましてな。石本の話では、400字詰めの原稿用紙にして約800枚もあり、2段組にしても230ページ前後になっちゃうとか。文字物はエロ漫画と違い、最低でも1万部というわけには行かず、こういう特殊な素材、しかも無名な俺みたいなのが著者では、その半分の部数がいい所だろうから、定価も2000円くらいにはせにゃとの話。

ウ——ム。俺の読者は、昔から3000人は居そうだと考えてたが、その人達が果たして、2000円も出してくれんのだろうか？「こーゆ本はさ、結局値段の問題じゃないよ、高くても買う人は買うよ。(一水社の)多田君は、〝ンな低部数じゃ商売になんないヨ〞とか言ってたけど、高定価で低部数にした方が、版元の損も少なくてすむ。だいたい今、漫画以外の単行本で儲けようなんて、考えること自体が無謀なのよ！」「俺もそう思う。けど、あんまし赤字幅増やすと、余計に多田と一水社に借りが出来ちゃって、安いギャラでその何倍も儲けさせせなきゃならなくなるし。喜ぶべきか、悲しむべきか…」「何ィぜいたく言ってんだよ。世の中にゃ出したくても本一冊出せずに、死んじゃう文学青年や漫画家が、何千、何万と居んだよ。幸せだよ塩山なんか。こんな言いたいことを書いて、1回は稿料を稼いだ原稿が、今度は単行本になって全国の書店で売られて、印税までもらえんだもん。かなり、値切られてたようだけど」「久保書店の印税並にな」「ハハハ…」

んなこんなでこの週末は、いつもは5~6本は観てるビデオがたったの2本。『不良番長・口から出まかせ』（監督／野田幸男）と、Vシネマの『傷だらけのライセンス』（監督／長谷部安春）。2人とも今は、全く締まらない仕事っきゃしてないのが悲しい。単行本の校正等もせねばならぬのに、『こちら騒音富岡です!!』の編集作業まで出来るのかと案じていると、「こちら防災富岡です！　御家庭の皆様、火の元の始末と戸締まりの点検をもう一度…」云々の、夜9時の暴音説教垂れ放送が始まり、万難を排しても、『嫌われ者の記』と『こちら騒音富岡です!!』の編集作業を成し遂げてやるという決意の火に、油を注いでくれる。ホント、防災無線は、カラオケのようにこちらから避けるわけにもいかないし、右翼の街宣車のように通り過ぎてもくれないし、近所の夫婦ゲンカのように疲労で収まるわけでもないし、〝究極の公営騒音公害〞だけど、こちらの闘志を24時間鼓舞させるという長所（ああっ!!）はある（そのうちに、「上州の名物はからっ風とかかあ天下、それに富岡市の暴音防災無線だぜ号」と言うのを必ずやろう。ふと、高倉健の『網走番外地・望郷篇』での、オレンジ色のポスターの名惹句を思い出す。〝俺の故郷を汚す奴、消していこうか、どうせ明日は網走づとめ〞。いくら健さんの長ドスでも、あの鉄塔にゃ刃が立たんよな。尊大とは言え、騒音元の市役所職員や、消防署員を健さんが消したら、本当の

火事の時に市民も困るし。でも、ゴジラかウルトラマンに、市内に141カ所もあるというあの糞鉄塔、片っ端からなぎ倒して欲しい心境）。

ニュースを一つ忘れる所であった。やくる～とシマが、結婚するんだって。しばらく前から、「あの2人は出来てるんじゃ？」との噂が広まってたので、少しも驚きはしなかったが、奴もンな仕事しつつ結婚するだなんて、無鉄砲な野郎（もっとも、俺の下で7年間も働いてることに比べれば、少しも驚くには当らないとの声も）。やくる～とから、初めてその話を聞いた俺の台詞もふるってた。「へ～。何でもいいけど、俺を仲人にしようなんて考えても無駄だヨ」「いやそんな。結婚式はしないつもりですんで。6月頃から一緒に住んで、彼女ももう少しは一緒に…」「ならん。早く辞めさせろ。ンな新婚夫婦のイチャイチャ仕事につきあってられっかよ、アホらしくって。それにオメ、若い姉ちゃん入れた方が、仕事も楽しく出来るって」「ウエーーン。やっぱりそう言われちゃった～」とシマ。何言ってんだよ。旦那めっけたんだから、流すなら感謝の涙だろ。

以前から、映画&書物鑑賞家の俺と、野球狂のやくる～とは、第3のスタッフに漫画オタクを入れぬことには、これ以上業務の拡張は出来ぬと認識していた（実際、今でも校正等でかなり困ってる）。近く『フロムA』あたりに、〝社会常識のある女漫画オタク募集〟てな広告が載るかも知れないので、その気がある人はどうぞ。

（'96・6）

おろかなるリクルートとその社員。

本誌発売の頃には、既に後任が決まってるだろうが、先月の本欄で予告した通り、5月20日発売の『フロムA』に、〝女性編集アシスタント募集〟の広告を出した（今日は5月19日なので、反応についてはヤケジョやズンジョに譲りたい。前回は2日間で30～40人も押しかけて困ったが、営業の女性の話では、求人件数も回復傾向にあんので、今回はそこまでは行かないだろうとの話。広告代金は税込みで5万1500円）。

そのキャッチコピーに、〝社会常識のある女漫画オタク募集!!〟と、予告通りにやろうと思ったの。そしたら、担当のT女性営業部員が言うのだ。「この〝オタク〟って表現、社内倫理規定で、差別語に当るかもしれません…」「へっ？　何年か前、東映が『七人のおたく』って映画を全国公開したし、大新聞だってしょっちゅう使ってるよ」「は～。そうなんですけど…。一応、後で連絡します」で、自著（恥ずかしい言葉!!）『嫌われ者の記～エロ漫画業界凶悪編集者血闘ファイル～』（一水社・A5判平とじ・1631円・雑誌コード60011～13・7月中旬発売予定）の後書きを書いていると、T女史から電話。「本社に電話しましたら、やっぱりダメと言われまして…。申し訳ありませ～ん。あの部分、〝漫画通〟にするわけには参りませんか？」「全然イメージが違うよ。〝漫画マニア〟じゃ？」「私も最初そう思ったんですが、マニアは英語で狂人って意味もあるらしく、余計にまずいって…」「英語でどうだろうとここは日本だし、日本語の文脈で使われてるマニアって言葉にゃ、差別的意味はないよ」と言おうともしたが、この姉ちゃんにはどうにもならんだろうから、「仕方ない。〝漫画通〟でいいや」と答えてしまう。

受話器を置いて思ったが、こういう馬鹿げた自主規制に、しかもわずか（でもねえなぁ、漫画屋レベルの下請けにゃ）であろうが、お金を出しているスポンサーの側が（こんな時にしかスポンサー顔出来ない、〝使い捨て下請け編集者〟）、面倒臭がって妥協してしまうから、文化破壊としか言うしかない、〝差別語狩り〟なる愚行がまかり通るのだ。深く反省。同誌への広告掲載を拒否し、他の媒体を

見つけるべきであった（筆者はかつて本欄で、我が故郷の富岡市の糞馬鹿ゲロ役人共の、余りに非常識な防災無線の運営振りについて、〝気違いに刃物ならぬ、酔いどれ気違い公務員に税金でカラオケ防災無線〟なる罵倒の言葉を浴びせたが、ここでの〝気違い〟の使用に驚いている読者のハガキをもらい、こちらこそ驚いた。本来なら、天災時にのみ使用を許されている防災無線を、12時、6時、9時と、最低でも日に3回、日によっては5～6回、しかも夜9時の放送に至っては、「こちら防災富岡です。御家庭の皆様、火の元の始末はお済みですか？　もう一度火の元と戸締まりを確認の上お休み下さい。以上。こちら防災富岡です‼」なんつう、エッラソーなお節介説教暴音放送を、血税を乱費しつつ垂れ流している輩共を、税金泥棒、白痴、オタンコナス、馬鹿、気違い、糞ヤロー、ウスノロ、トンマ、マヌケ、猫の糞等々と表現せずに何と呼ぶのだ？　精神障害者なんつったら、本当の障害者が激怒しますよ。なお、私が代表を務める、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」の機関紙、『こちら騒音富岡です‼』の第1号は、既に発送済みなので、まだ届いてない方は連絡を下さい。また希望者は、80円切手を貼り、自分宛の住所、氏名を書いた封筒を同封、〒102　千代田区飯田橋2～11～5、栄昇ビル503号、漫画屋内、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」まで）。

ついさっきも、夜9時の馬鹿放送があったばかり。特に、市民を軍隊や会社での部下扱いしてる、〝以上〟の部分には、必ず血圧が30くらい上がる。この市にも何十人もの市会議員がいるらしいが、連中の耳はロバの耳なのか？　さっきまで読んでいた、『私が殺した少女』（原寮・ハヤカワ文庫）の読後のクールな気分もメチャクチャ。〝「そごう」は史上最低のデパートである〟というテーゼを、前号ヤケジョ屋台版で提起したが、〝富岡市は史上最悪の防災無線の運営で日夜市民に公営騒音をまき散らして平然としている戦時中の・ナチスドイツ占領下並の牢獄の街である〟との提起をと思ったが、これは『嫌われ者の記』の後書きにも詳しく書いたので、少しは明るく、結婚式の話でもしよう。

俺は自分でも結婚式はせなんだし、こういう性格だから、めったに式にも招かれず助かってるが、本誌の「赤き血のマット」の筆者の青木芳紀が、物好きにも招待状を寄こした。むろん、銭取られて退屈なスピーチ無理矢理聞かされる、〝この世の地獄〟にノコノコ出かける気はなかったが、例の山崎邦紀に尋ねると、「お前が行くなら行ってもいい」。で、久々の飲み会のつもりで出かけたが、親族以外にゃ生き地獄。私達のテーブルは、内心そう思ってる連中だけの〝はぐれテーブル〟だったせいか、山崎の他、ま～夫婦（ンな所に来てる場合か？）、畑中純、おだ辰夫、谷間夢路（出井州忍じゃないとピンと来ない）といったメンバーで、まだ救われた方かも。ただ「一テーブルに一人くらいは若い女性を！」て感じでポツリ加えられた、どこぞかの姉ちゃんは可哀想でした（青木君は某社の社員編集者なので、漫画家関係、その回りのゴロツキ共が、金もないのにミエを張って大量参加していた）。

山崎いわく。「『嫌われ者の記』の出版記念パーティー、すんだろ？」「まさか～。ンな数少ない友人に、迷惑かけるような真似はしませんよ」「でもほら、君の好きな新宿の〝三平酒寮〟あたりで、ちゃんと会費制でさ、本も一冊つけて、赤字になんないくらいの会費でやれば、物好きが集まるかもヨ」「三平での出版記念パーティーねえ。こいつはちょっと粋かも」「そうだよ」さて…⁉（'96・7）

おろかなる企業沖電気と富岡市の糞役人。

ムチャクチャな脚本と演出でゲンナリしちまうけど、やっぱ『秀

吉』は面白い。不況下の企業内生き残りリストラドラマとか、マザコン野郎悲喜劇群像等々、種々のキャッチコピーは付けられるけど、一番面白いというか、〝これだけで持ってる〟と断言していいのが、渡哲也、市原悦子、竹中直人の3人の独断専行芝居。想像だけどこの3人、特に最初の2人は、NHKのエリート演出家の指示なんか、シカトしてんじゃない？　『三国志』の、曹操の域に達してると言ってさしつかえない、織田信長役の渡哲也に至っては、完璧に自分が主役だと確信してて、そのオーラが画面全体に満ち溢れ、ブラウン管のこっち側までがひれ伏したくなる。間違いなく、日活時代の青春やくざ映画〝無頼シリーズ〟同様、俳優、渡哲也の代表作になるでしょう（この3人の充実振りに比べれば、沢口靖子や高嶋政伸の学芸会芝居が見るに耐えないのも、ささいなこと）。

6月16日放送の同番組の「左遷寸前」を観終わり、「ハ〜ア。よっくやるよな〜。NHKって、東映の山口和彦監督センスの奴が多いらしいな」とため息ついてると、また富岡市（市長・今井清二郎）企画部企画課の、緊急時のみにしか本来は使えない防災無線を悪用した、毎夜9時の大馬鹿説教放送が始まる（12時、午後6時、夜9時と、最低でも毎日3回の無意味な公営騒音をこの市は全市内に血税を遣ってまき散らしている。冬場はもっと多いし、火災の発生、鎮火、迷子等を入れると、年に1500回はこのド馬鹿放送がなされている。無神経な土建屋市長、今井清二郎君以下の傲慢極まりない富岡市のアホ役人、その気違いじみた運営を指をくわえてながめる、自民党から共産党に至る無能な全市会議員には、あきれて物も言えない。一番儲けたのは沖電気。約3億5千万でこの〝公営騒音公害基地〟の設置を請け負ったらしいが、今後は〝公営ギャンブル一つないあの富岡でさえ建てたんですよ！〟との口上で、富岡、渋川以外の、まだ静かで暮らしやすい市町村への売り込みに、狂奔するのでしょう。おい、沖電気！　使用上の注意には、〝アホ役人が無駄な説教カラオケ放送をするのを禁ず〟と、ちゃんと書いとけよ。じゃねえと何年か後には、今のミドリ十字みたいに〝沖電気は日本一の騒音公害企業〟と言われかねんぞ!!）。「こちら防災富岡です。御家庭の皆様、火の元の始末はお済みですか？　もう一度火の元と戸締まりを確認の上お休み下さい。以上。こちら防災富岡です!!」（塩山のヤロが代表を務める、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」の機関紙、『こちら騒音富岡です!!』を読もう。申し込みは、80円切手を貼った返信用封筒を同封、〒102　千代田区飯田橋2〜11〜5、栄昇ビル503号、漫画屋内、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」まで。大幅に完成が遅れてますが、本誌発売までには、いくら何でもどうにかなってるでしょう）

やっぱ、『嫌われ者の記〜エロ漫画業界凶悪編集者血闘ファイル〜』（塩山芳明・一水社・A5判平とじ・1631円・・雑誌コード60011〜13）に触れないわけにゃ行かん。先週までに、一応初稿の校正が終わったけど、ゲッソリ。2段組、200余ページの校正が、あそこまで大変だなんて。しかも、俺の駄文は固有名詞が多いから、事実確認の手間を喰うこと…。完璧になんて出来っこないのは分かってるけど、「文芸坐」の坐は座じゃまずいし、おおぬまひろしは正しく、〝おおぬま〟と〝ひろし〟の間に〝・〟を入れたいし（同様に、「池袋シネマセレサ」ではなく、「池袋シネマ・セレサ」としたい）、『ブルーベルベット』ではなく、正しく『ブルー・ベルベット』に、ましてや、やくるーとや、まーではなく、やくる〜と、ま〜にせねば…なんつってたら頭グッシャグシャ。途中から〝出来るだけ努力する〟に路線変更しちまったけど、ホント、文章のみって、絵の説明がないからトロい（固有名詞関係に比べると、数字書体の統一や、漢字やかなの問題なんて、〝小せえ小せえ〟と、ほとんど流しちまう。←流すというか、座頭市になるしかなかった。恥ずかしいが）。

今日は、戦前の憲兵隊よろしく、日に3度も市民に説教演説をせねば気がすまぬらしい、富岡市（市長・今井清二郎）の暴音防災無線の合い間を縫って、2本ビデオを観ると（『麗しのサブリナ』、『紳士は金髪がお好き』）、『それでも由利徹が行く』（高平哲郎・白水社・2200円）と、『小津安二郎と茅ヶ崎館』（石坂昌三・新潮社・1600円）を各半分、それに『こわい本・影』（楳図かずお・朝日ソノラマ・500円）、『こわい本・虫』（同）を読んだ。

一番面白かったのは『それでも～』なのだが、この本は値段が高すぎる。約230ページで2200円はあんましじゃない？　同じく同社から出ている、『岡本太郎と横尾忠則』（倉林靖）が、280ページもあり上質紙使用で2800円なのに、より大衆性もあり、読者にはビンボ人が多いであろう、〝由利徹本〟が何で2200円もすんだよ、バカヤロ!!（ちなみに、『岡本～』も読ませる。著者の発想、文章が非常に平凡で、とっつき易いのだ。こういう人は、評論家として大成するのではないか？）

『小津安二郎～』が、330ページもあるのに1600円なのは、販元が大手で部数もケタ違いだろうから納得が行くが、同一版元内における、こういう必然性のない定価の付け方には腹が立つ。〝「新宿コマ劇場」のエース〟の本に、「帝国劇場」の特等席みてな値段を付けけんな。これこそ、悪しき再販制の見本。出版物の再販制問題では、日経から『赤旗』までが口を揃えて、現状維持のキャンペーンを張ってるが、笑わせるな。鍋や釜、大根やニンジンと違い、何で本だけが御上に守ってもらわにゃならんのだ？　本なんて、鍋や釜、大根やニンジンの、以上でも以下でも、絶対にない。（'96・8）

各界の税金泥棒諸君へ寄す。

コロコロコロコロコロ、さらにコロコロコロコロコロと、各種目の予選で敗退して行く、アトランタオリンピックの〝日本選手団〟とやらを、オナニーの片手間（シャレです）に見物しても、『日刊ゲンダイ』の連載で、事前に世界とのレベルの格差を知っていた僕は、特に驚きも悲しみもしませんでしたが、決勝落ち後の千葉すずとやらの小便たれむれ肉女が、B組予選でスタート直前に、TVカメラが自分を拾ってると知るや、「ニヤッ♥」と愛想笑いを浮かべた際には、「テメー俺の税金を返せ!!」と、さすがに怒鳴ったものだ。こいつ引退後は、どっかのスイミングスクールの名目的コーチに就任する傍ら、エッセイスト（ゴーストライター付き）や、講演で、稼ぎまくろうとしてるとしか思えなかった。あの愛想笑いは、オリンピックの水泳選手としてではなく、数年後に出る予定の『徹子の部屋』への予行演習だったのでは？　だとするとその〝税金泥棒振り〟は、1年365日、12時（チャイム）、6時（童謡のオルゴール）、夜9時（こちら防災富岡です。ご家庭の皆さん、火の元の始末はお済みですか？　もう一度火の元と戸締まりをお確かめの上お休み下さい。以上。こちら防災富岡です!!）などとの〝公営超騒音公害〟を、血税を乱費しつつまき散らしている、富岡市（市長・今井清二郎。〒370～23　富岡市富岡1460～1。電話／0274～62～1511）と同レベルと言わざるを得ない（塩山のヤロが代表を務める、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」の機関紙、『こちら騒音富岡です!!』を読もう。希望者は、80円切手を貼り、自分宛の住所氏名を書いた封筒を、〒102　千代田区飯田橋2～11～5、栄昇ビル503号、漫画屋内、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」宛。1号目はかなり遅れてますが、8月中には出るでしょう）。

オリンピックでの日本の惨敗に一番ガックリしてんのは、実はマスコミ関係者ではないか？（各種目団体の幹部、及び選手の親族を除けば、〝一般国民〟は慣れちゃってる）今日は7月23日だが、今朝

の『日刊スポーツ』の紙面など、〝気が狂った〟としか思えぬ大ハシャギ振り。サッカーでブラジルに一勝した例の一件だが、一面から始まり、何と7ページ全部このネタ一色!! 中身はといえば、〝ラテンにゃ負けぬ大和魂サポーター〟といったレベル。いくら社費で出張してる手前があるとはいえ、こういう針小棒大なヨタ記事ばかりでなく、冷静な各競技での敗因分析記事は書けねえのか？（ＮＨＫはもっと凄かった。〝日本サッカー大金星!!〟と来たもんだ。愚妻など、「ええっ!? 日本がサッカーで金メダル取ったの!?」と、昨夜の11時のニュースを観てのけぞってたが、普通そう思うよ、あの報道の仕方じゃ。「惜しくも日本の××選手は予選落ちを…」と繰り返していた、ＮＨＫ関係者のフラストレーションが爆発した感があるが、何もテメーらは選手の後援会員じゃねんだから、逆上するこたない。ＮＨＫのサッカー報道を例えるなら、インチキ消化器セールスマンと同じ。つまり、「消防署の方から来たんですが…」と言っちゃ、ベラボーに高いのを売りつけるアレ。ＮＨＫの連中は、この種の馬鹿騒ぎを質の悪い一部国民といたすのが、〝マスコミの使命〟とか、〝愛国心溢れる行為〟だと思い込んでるんじゃないの？ 良かった。ンな馬鹿共にエサ代〈受信料〉、ビタ一文も払っとらんで）

予定では8月7日に発売になってるはずの、拙著『嫌われ者の記～エロ漫画業界凶悪編集者血闘ファイル～』（塩山芳明・一水社・1631円）のおかげで、映画もビデオも本も無縁な日々が。先週の夏休みに入って初めての週末も、『ガメラ2』を高崎に観に行く予定が、校正で流れてガキ共がブーブー。しかし、今回の『ガメラ2』は映写状態が心配。「高崎オリオン」て最悪なんだよね。『ベイブ』の時なんて、声は出なくなるはフィルムは飛ぶはで地獄。2人の娘、「何が何だか分かんなかった～」。そりゃそう。俺にもチンプンカンプン。『ライオン・キング』の時も、20分くらい中断してたし。さすがに『ベイブ』の帰りには客に招待券配ってたけど、一度傷付けられた映画のイメージは、なかなか再生出来ません。もっとも俺と上の娘は、その招待券で翌週の、『ジュマンジ』を観に行ったが（さすがにこの時は、映写状態が悪いのみで中断はなかった）。

漫画はそれなりに読んでるけど（面白い！ 光文社文庫の『鉄人28号』!! 俺は、60年の小学校入学前後からの読者なので、30年振りに初期のストーリーを知って、気分がスカッとした。横山光輝って古びてないね。アクションは、映画でも漫画でも不滅なのか!? 同時期に再読した、石ノ森章太郎の秋田文庫版『サイボーグ009』の、余りにセコイ感傷過剰振りに、ポンコツ化振りに、余計にそう思えたのか）、活字はすっかり読まなくなった。もう一週間で8月なのに、確か2～3冊。

今日、新幹線の東京駅で読み上げたのが、『ヴィガン波止場への道』（ジョージ・オーウェル・ちくま学芸文庫）。いいっすね。オーウェル節って！ 常にこの人の文章は具体的で、絵画的というか、漫画的。最初の「ブルッカー夫妻の下宿屋」なんて、その不潔振りに対するシンラツな描写は、ディケンズ張り。俺はこの章を読んでいて、まず自分が大学一年（73年）の時に住んでいた、西川口の四畳半で5000円の、ネズミを養殖してた石井アパートを思い出した。次に、4～5年前までふぁんとむが住んでいた等々力のアパートを。最後に、少なくとも昨年までは奥間まさみが住んでいた、白金の廃墟を。やっぱり奥間のアパートが、一番ブルッカー夫妻していたが、まさみちゃん、隣の菅井きんさんまだ元気ィ!?（噂ではまさみちゃん、コミケ会場ではよく目撃されてるらしい）（'96・9）

わかったぜ！ 処女喪失の気持ち。

42歳にして初めて出た自分の本ですから、書店ではどのように扱

われているのか、気になります。拙著『嫌われ者の記～エロ漫画業界凶悪編集者血闘ファイル～』（一水社・1631円）の発売日は、予定より20日以上遅れた8月7日。取次搬入は8月5日。つまり、神保町の漫画専門店なら、8月5日に出ててもおかしくない。が、5日は本誌や『Ｍａｔｅ』の下版で忙しくて外出は無理。6日に昼飯のついでに、白泉社の前を通って神保町へ。「東西堂書店」、「高岡書店」、「すずらん堂」、「新宿書店」、帰りについでに「コミックハウス」1号店と歩くものの、〝あの偉大な書〟は影も形もない。「？　雑誌と違って、単行本は早出ししないのかな」と憮然。

翌7日の、正式発売日。心配なので同一コースを再び歩く。ついでに「書泉グランデ」、「書泉ブックマート」、「冨山房」、「廣文館」等も。相変わらず影も形もない。「？？？」何十年振りかで漫画でない書籍を出した一水社の物が、何も書泉だ「東京堂」だの、一般大型書店にドカンと平積みされるはずないのは承知してるものの、漫画専門店にも全くねえってのはどーゆこと？　疑問度百％のまま日常業務をこなし、夕方になってタコ多田に電話。「俺の本だけどよ、本当に今日、発売になってんの？　飯田橋や神保町にゃ一冊もねえぞ～」（勤勉な俺は、「飯田橋書店」、「深夜プラス1」、「ローラン」神楽坂店もチェック済みだった）

「大丈夫、出てるって。あちこちの書店から、結構注文来てんだよな。もう200部くらいになるよ」「そりゃあ、発売日前までに来てた予約分だろ」「違うよ。あれは全部個人注文だろ。それとは別。書店分がそんだけあんの。〝まんがの森〟のどっかからも10部来たし、ひばりヶ丘の何とかいう書店からも、5部来てたよ」「本当に発売になってんだ。けど、神田付近に全然ねえってなあ、納得いかねえなぁ」「いいですよ。〝新宿書店〟あたりには、営業の〇〇君に直接行ってもらいますよ。けど、思ったより注文多いよな。さすがですね、塩山先生！」「ケッ！　この手のマニア本てなぁ、喰い付きはいいんだけど、途中でバッタリ止まるってから、油断しない方がいいんだって」「お…脅かさないで下さいヨ」

が、脅かされるというか、ビビらされたのは俺の方。『Ｍａｔｅ』8月号に、都条例の悪書指定が来ちまったのだ。こんだけ多くのエロ漫画誌を編集してるが、都条例は全誌を含めて2年振り。しかも、『Ｍａｔｅ』7月増刊の『麗』が既に受けてるため、連続2回となるのだ。つまり9月号も受ければ、連続3回ということで、実質廃刊に追い込まれる。かつて都条例の悪書指定は、言論、表現の自由とのかねあいで、連続指定は余程ひどい場合以外はしなかったが、最近は意識的に連チャン指定しているように、俺には思える。4～5年前の例の〝有害コミック追放運動〟の時にさえ、〝裏漫画誌スレスレ〟だった『ヤングジャンプ』や『ヤングサンデー』を、一度も悪書指定にしなかった同条例が、なぜよりによって俺の低部数高定価マイナー雑誌へ？　ひょとすると、『嫌われ者の記』の後書きで、同条例の運営への批判を書いたことへのシッペ返しか？…とも思ったが、指定時に同書はまだ発売になってないから、常日頃の反抗的姿勢へのブラフかと思いつつ、9日の午後に都庁へ行く前に、一水社に顔を出す。「おい多田！（スポンサー様に対してこの態度）俺、昨日（8日）、初めて自分の本が書店に並んでんの見たよ。しかも4冊も」「どこ？」「飯田橋の、うちの事務所とは反対側にある、最近新装した〝文鳥堂〟3階のコミック売り場。おまけに棚の一番目立つ所で、ガメラ本と並んでたから感動したよ」「うれしくって1冊買いましたか？」「さすがにそこまでは…。けど手ぶらで帰るのは悪いから、『三つ目がとおる』の7巻目を買ったよ」「全然、関係がないですね」「いいの。それより、何で神保町じゃ俺の本1冊も売ってねえのよ。小学館や集英社のある神保町や、大日本印刷のある市ヶ谷に置かなきゃ、売れやしねえよ」「そうなんだけど…」

そこへ、一水社の美人女性社員が登場（余りに美人なので、名前

を失念)。「それは、文苑堂が全然取ってくれなかったからですよ。どこも文苑堂待ちだったらしんですよ。全然入って来ないんで、高岡からは50部注文ありました」「チッ! 文苑堂ってのも、本見る目がねえなあ。あそこも昔は、阿宮美亜のアップルコミックスなんか、よそよりずいぶん部数取ってくれるとかで、日本出版社の営業の人喜んでたけどな。ケッ!!」「いつもお世話になってる取次さんの悪口なんか、どっかに書かないで下さいよ」「分かっとるわい! 俺だってそのくらい」「そろそろ、都庁に行く時間じゃないですか?」「あ〜。で、注文の動きは?」「悪くないですよ。昨日、一昨日で300部以上は来てます」「けど、神保町や飯田橋にねえってのがなあ〜」(都庁に行った際の下りは、9月末発売の『ラッツ』11月号の、「嫌われ者の記」第101回に執筆予定)

私がこの地区の各書店で、拙著の〝雄姿〟を拝んだのは、翌週の12日以降。目撃データその①「すずらん堂」→エロ系活字本の中に、2列平積み。その②「高岡書店」→『新・ゴーマニズム宣言!』の隣に2列平積み。その③「新宿書店」神保町店→レジ脇に1冊ポツリ。その④「深夜プラス1」→レジ脇に約10冊。その⑤「秋葉原デパート」内「明正堂書店」→一般単行本平積みコーナーの、一番前の角に1冊ポツリ。つまりここが、一番破格の扱いをしてくれていたのです。1冊のみ平積みされるはずがないから、他は全部売れたと判断出来る。その最後の1冊を、立ち読み始めた大学生風の細面の男。「立ち読み出来る量じゃねえ。早く買え!!」と念じつつ、前の文房具店から観察してたが、なかなか買わない。店長に代わって殴りつけたろかと思いつつ、店を後にした。　('96・10)

蕨の「丸好」で出版記念パーティーをするとは、やっぱり(塩)は渋いねえ!?

今回は9月13日の午後7時から、京浜東北線は蕨駅西口の居酒屋、「丸好」であった、〝『嫌われ者の記』出版記念宴会〟のことになるのは当然だけれど、その前に同店に予約に行った際の一件。知っての通り俺は群馬県富岡市(市長・今井清二郎。日本一の馬鹿げた防災無線の運営をして悪名高い。自らを旧ソ連のラーゲリの所長か、北朝鮮の政治犯収容所の幹部と思い込んでいるらしく、一年365日、日に最低でも3回、5万の市民に説教放送を繰り返している。特に〝夜9時の暴音放送〟に至っては、〝気違いに刃物〟そのもの。抗議先。〒370〜23　富岡市富岡1460〜1、富岡市企画部企画課。電話0274〜62〜1511)から、片道2時間30分もかけて超遠距離通勤をしているので、西川口に寝るだけのアパートが借りてあり、週に1回くらいは泊る(例のやす○がミュージシャン志望の彼氏と住むマンション近くの、羽衣荘なる風呂もないダニアパートからは引っ越した。すぐ近くですが。つまり、『Ｍａｔｅ』等で早くから披露していた、〝神楽坂引っ越し計画〟は軽く挫折〜70年代のトレンディ言葉〜したわけ)。

その日も、「今夜は久々に、蕨の〝丸好〟でじっくりウーロンハイでも飲んで、ついでに9月13日の宴会の予約してくっかな。電話一本じゃ風情がねえし」と蕨に出撃(というほどのこっちゃねえな。白髪アバタヅラ43歳で立ち悪しの吝嗇男が、一人で酒くらいに行くだけじゃ)。まずはワシの単行本、『嫌われ者の記〜エロ漫画業界図悪編集者血闘ファイル〜』(一水社・1631円)でもおなじみの焼き鳥屋、「安兵衛」(東口の同名店とは別)で、タン刺しをしょう

がのタレでつまみつつ、ビールを1本飲んで、はす向かいのストリップ小屋、「蕨ミニ劇場」の先にある、「應文堂書店」に寄る。この店のオヤジには、事前に本の発売日を知らせ、「10部くらい注文して下さい」と売り込んどいたのだが、行ってみるとエロ漫画コーナーにポツリ1冊。「フーーッ」オヤジは、「まだ本は出ないみたいだね。一水社に10部注文したのに、まだ入って来ませんよ」「いや、ここに1冊…」「アレーッ？　何でここに〜？」先が思いやられる。

13日の宴会日当日。驚いたのが集まりの良さ。俺を含めて36名が参加したのだが、7時20分頃までには32名が詰めかけていた。7時からの予定だから、普通これだけの人数は、8時頃でないと集まらないと、ここ10数年、漫画屋の忘年会をいつも仕切って来た俺は断言しておく（例の新宿の「三平酒寮」での）。ただ酒パワー恐るべし（トホホ…。ワシが印税から払うの。こうでもしないと、〝嫌われ者〟が埼玉の場末で開く宴会にゃ、誰もツラ見せてくれません）。会場が狭く、身動きしずらいというハンディはあったが、〝ただ酒に釣られて蕨くんだりまで押しかけた〟、物好きな漫画家、編集者達の、主な横顔を紹介しておく。

［タコ多田&捧順二］版元の〝ホモ漫画の殿堂〟、一水社代表。前者は知っての通り、『アットーテキ』、『純二』、『ロミオ』等を、後者は『ピーナッツ』を仕切っている。ただ酒喰らいながら、未だ俺の本を買ってない鬼畜もいたため、彼等に10冊持参させて売り切る。［DONKEY］デジタルカメラを持参、参加者を撮りまくった。同夜、終電に乗り遅れてワシの西川口のアパートに、十六女十八女と共に泊り、地獄のいびきで2人を発狂寸前に追い込んだ。［十六女十八女］本誌の4C&2C原稿もアップしてないのに、ノコノコ参加。しかも奴担当の宴会の案内状では、「丸好」の電話番号は間違うは、〝参加費無料〟を〝参加費無料〟などと書くはで、人格を根本的に疑われていた。［杉作J太郎］その気配り振りで、タコ多田等の年長者を感心させていた東映バカ。奴の本、『ボンクラ映画魂』（洋泉社・1631円）の増刷が決定と聞き、「よりによって俺の本より早く…」とムカついたので、からんでやる。［ふぁんとむ］『レモンクラブ』&『Ｍａｔｅ』専属イラストレーター。10月半ばまでに、久々に20Ｐの漫画をアップすると言ってるが、当人も含めて誰も信じていない。

宴会に花を添えてくれたのが、女性参加者。筆頭は、ラムちゃんのコスプレで参加した［やす〇］姉ちゃん。そして春麗姿の彼女のコスプレ友達。襖（畳の間だったのです）を開いて会場にいきなり現われた際は、そのエグさに会場は一時シーン。が、徐々に落ち着きを取り戻すと、参加者は本性を見せ始めた。［かたせ湘］はその筆頭。2人の姿を何本フィルムに収めたことか…。コミケで見慣れてるだろうに。もっともこの根性が、人気の秘密か。本誌でプロレスコラムを書いている、［青木芳紀］もしつこかった。彼の場合、中年タッチでネチネチ迫るので、嫌がられ振りも半端じゃない。遂には、つきあいの良さは並でない、〝例の女〟［Ｍ子］にまでそっぽを向かれる。彼女も相当いかれていた。炊きたて御飯の入った電気釜としゃもじ、御飯茶碗を持ってウロウロ。よっぽど腹がすいてたんだろう（鈴木清順監督の日活映画、『殺しの烙印』での宍戸錠を思い出した）。

女性陣といえば、大阪から駆け付けた〝『ジャニー』のエース〟［成田那佳］、同じく名古屋からの［橘孝志］の御両人も、遠路はるばる御苦労様。成田センセが年に似合わぬ過激なミニスカートをはいてたこと、逆に〝Dカップ書店員H漫画家〟として知られる橘センセが、仕事熱心な小学校の女教師風のファッションで決めておられたのが印象深い（レズっぽいとの言い方も出来る）。その他、もりを舞、葉月つや子、やまだのら、小鈴ひろみ等々、大して有名でもない、『嫌われ者の記』の登場人物ばかりを呼んだのですが、しょ

っちゅう登場するのに、声をかけられなかった漫画家、編集者の皆様ごめん。当然過去はともかく、今後の漫画屋に大して役に立たなそ・う・な・人・は、シカトさせてもらいました（何か忘れてたと思ったら、参加者の一人、町野変丸のキンタマを握り忘れていた。次の機会にゃねちっこく…）。 ('96・11)

上信電鉄発・札幌行き北斗星3号のガタピシ振り。

10月から上信電鉄のダイヤ改正があり、毎朝利用する電車が高崎に5分早く到着、大助かり。9月までは高崎に10時18分着だったため、同時に発車するとき454号には乗れず、何と30分も高崎駅構内で待っては、とき404号を利用していた。これだと結局、自宅を9時25分に愚妻の車で出て、漫画屋のある栄昇ビル到着は12時15分。つまり、合計2時間50分も、連絡の悪いせいで片道に要していたのだ!! この状態は、昨年のJRのダイヤ改正で、約1年続いていた。帰りは連絡が良く、ちょうど2時間20分なのに。いくら読書好きとはいえ、構内やホームで本読んでるのも、特に冬場はこたえる。この時期に上信電鉄がダイヤ改正をしてくれたのは、すっかり老いてしまった㊧には何よりもの朗報（帰りは、東京駅発20時20分発の、MAXとき415号を利用する。ガラガラで必ず座れる）。

やっぱ読書の秋ですな（近頃口調が、杉作J太郎風に。あんな貧乏色物ブンカ人に影響されるようじゃ、元々知れてるお里のランクがまた下がる）。今日は10月21日。今日までに読んだ活字本は8冊。『TVアニメ青春記』（辻真先・実業之日本社・1800円）。『セックスの邪魔をするやっかいな記憶たち』（ジョゼフ・グレンマン・白揚社・2575円）。『うるさい日本の私』（中島義道・洋泉社・1700円）。『猟盤日記』（戸川昌士・メタ・ブレーン・1800円）。『突破者』（宮崎学・南風社・1800円）。『雨・赤毛』（モーム・新潮文庫・360円）。『滅びゆくジャーナリズム』（本多勝一・朝日文庫・500円）。

後の4冊は面白かった。モームや本多勝一は、今さら持ち出すまでもなかろう。『猟盤〜』の著者も業界では有名人らしいが、俺は全然知らなかったので、やや買うのを迷ったが、「自伝と日記につまらぬものなし」は昔からの持論なので、飯田橋の「文鳥堂」2階の、レジ前の際物本コーナーで買った（最近俺は、事務所近くの「飯田橋書店」ではめったに本を買いません。ワシの『嫌われ者の記』を、1回も置いてくれなかったから）。

要するに、レコードコレクターの収集日記なのだが、千円単位の銭のやり取りのディテールが非常に面白い。アイテム自体は、本人はゲテモノと思ってるようだが、渥美マリ、池玲子、丸山明宏等と、すっごく真っ当で通俗。漫画分野に至っちゃ丸尾末広なんつう、『Mate』あたりの一部低能女性投稿者の必需品（音楽分野の戸川純）まで登場、「あっそ!」と言うしかないが、その次元の趣味人の小銭のやり取りが、身につまされて興味深い（例によっての、関・西・人・の自意識とやらも笑える）。

『突破者』は、『週刊文春』での前宣伝があって助かった。店頭でただ見ても、帯を呉智英が書いてんだもん、よっぽどの駄本と思って買わなかったろう。ケンカに強い男の自伝は面白い。〝見てきたようなウソ〟もかなり混入してんでしょうが、全部許せちゃう講談的面白さに満ちてる。最後にアジア各国を例に愛国心を鼓舞しちゃう、団塊世代特有の〝マッチョ振り〟にゃうんざりですが、そこまでは楽しんだんだから、まあいいか♥（かなりホモっぽく、『ジャニー』な楽しみも可!）

近頃は世間の人並に漫画も読むようになった。漫画文庫だけですけど。毎月10冊くらいは読んでる。各社から種々の文庫が出てます

が、一番楽しみなのは、朝日ソノラマから出ている、楳図かずおの『こわい本』シリーズ。今月の9、10巻もおっかなかったっ!! この文庫がいいのは、解説がない点。ホント、漫画文庫の解説に、面白い物があったためしがない（なぜかどの社も）。カバーのキャッチコピーもいい。「楳図かずおはすごい!!」その通り。低能なゴミタレントや評論家に、余韻をグシャグシャにされんのはうんざり!!（例外として、光文社文庫版の『鉄人28号』シリーズがある。横山光輝のエッセイはいい。何であの人の漫画が、どれもこれも面白いのか、何となく分かった）。

ンな日々ですが、月末は忙しくなりそう。ふと思いつき、札幌取材旅行を決意したから。しかも電車で（4～5年前の韓国旅行で、飛行機は懲りました。目の黒いうちには乗りたくない。←この旅行の旅日記を〝海を渡った嫌われ者〟とか称し、A5判平とじ時代の『Ｍａｔｅ』で特集した記憶もあるが、そんな時代からの読者も、まだいるのかな?）。

今回の取材旅行の日程ですが、まず10月26日、上野発17時18分発の、北斗星3号でスタート。車中で一夜を明かし、翌27日の9時20分に札幌着。そこには美人女流漫画家のなにがしが…のはずが、最悪なことに案内人は、『ジャニー』の付録漫画家、ＷＩＬＬセンセ。頭痛がしちゃう。札幌市内の腐れオタクスポット探訪の後、すすきのあたりの薄汚ない居酒屋で、当地の読者とビールでも飲もうという計画。女性読者を中心に3～4人来る予定なので、次号では詳しく報告できると思う（一番〝激写〟したかった、例の〝喪失したばかりの水姫あや〟には、連絡がつきません。読者同様にガックシ。ポール上良宛の手紙も、〝宛先に見あたりません〟と戻って来た。どうなってんの?）。

同夜はホテルに泊まり、翌28日は一日一般観光。で、同日18時14分の北斗星4号で帰る予定。〝巨乳〟の橘孝志センセの運転するジムニーでの名古屋取材旅行と違い、さっぱり色気のない旅になりそうですが、これもお仕事、ぜいたくは言いません、ハイ♥ 全く関係ないけど、ＢＳ7の長谷川園子アナって、薄幸そうな所が色っぽいと思いませんか? あーゆ女って、豹変するんだよ。

（'96・12）

〝土建屋市長の鑑〟今井清二郎富岡市長へのラブレター①。

ようやく、『こちら騒音富岡です!!』が完成しそう。ずいぶんと遅れましたが、12月中旬までには、希望された全国約50名の読者の方の元に届くものと思われます（『こちら騒音富岡です!!』は、塩山のヤロが代表を務める、「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」の機関紙。これは〝日本一の馬鹿げた防災無線の運営をして5万の市民を24時間眠らせないスターリンかヒトラー気取りの非常識土建屋市長今井清二郎及びその部下を徹底糾弾する〟、Ａ3判裏表のミニコミ。一文にもならぬのに塩が、400字原稿用紙で30枚も書きまくってますし、カットも阿宮美亜＆ＤＯＮＫＥＹと、その筋の人にはこたえられない豪華版。希望者は、今からでもＯＫ。80円切手を貼り、自分の住所、氏名を書いた封筒を、〒102 東京都千代田区飯田橋2～11～5、栄昇ビル503号、漫画屋内、『こちら騒音富岡です!!』係まで。また、今月より新手のサービスを開始した。日に3回の気違い騒音放送を、テープにダビングして差し上げましょうというのだ。希望者は、10分テープを入れて、190円切手を貼り、自分の住所、氏名を書いた封筒を、前出の住所の、『こちら騒音富岡です!!』係までね。機関紙＆テープ共々、著作権など全く放棄しているので、ホームページ等、各種媒体で用いて下されと、宣伝に余念のないワシ）。

11月はピリッとしない月になった。決して暇じゃないし（今月も、

雑誌5誌とコミックス1点の計6誌こなした)、何でだろう? 考えたら、9月は大阪&名古屋、10月は札幌と、連チャンで取材旅行があったのに、今月は何もなかったからね。旅があると仕事は余計に大変だけど、そう思ってると、いつもよりスピード出したりすんだよ。それが11月はないから、ついダラ～ン(誰だよ。「そりゃ(塩)のチンポだろ?」なんて失礼なこと言ってんのは?)。わさびかとんがらしを欠いた、ざるそばみたい。

とはいえ、自営業者はつらい。漫画屋は(塩)班も吉田班も、基本的に11時～6時、土日は完全休みでやっとるが、経営者はそうもいかぬ。この1年(『ジャニー』がスタートして以来。半年前から『ヤケッパチ』が加わり、余計にひどくなった)は、土日もまともに休んでない。やくる～と、メメとの3人で、日常の編集業務を月～金の間にこなしてるが、どうしても残っちゃうのが、各誌の読者欄(あれを普段やってたら、3人で毎晩9時頃まで残業するハメに)。

俺って一体、幾つ読者欄やってんだろう? まず「ヤケクソジョッキー」(『レモンクラブ』)。「ズンドコジョッキー」(『Ｍａｔｅ』)。「ナイーブジョッキー」(『ジャニー』)。「飯田橋青年団」(『ヤケッパチ』)。『ジャニー』と『ヤケッパチ』は隔月だから、2誌で月刊1誌と数えると、3種類の読者欄やってることに。月に5回の週末のうち、3回はこれでつぶれる。しかも、これに「嫌われ者の記」(『ラッツ』)や、別名で書いてる某誌のコラムを入れると、ちょうど毎週末が原稿書きでパー。トホホ…。これぱっかは他人任せに出来ないと、老体にムチ打ってやって来たが、そろそろ考えないと、過労死しかねん(これは各版元に、「もっとギャラ上げてくれ。じゃねえと、俺はセコい原稿料稼ぎの果てに死んじまうぞ。俺は別にどうでもいいが、その後をコミックハウスに依頼すると、法外なギャラ吹っかけられんぞ。なら俺を大事にしといた方が、結局は安くつくぜ!」ってなブラフを、婉曲的にかけてるのではない)。

昨日(11/23)の土曜日も一日つぶして、「ヤケクソジョッキー」のテープ起こしをしたが(その間に自宅近くの防災無線塔の真下に、12時、5時、9時と3回も出かけ、気違い放送をテープに録音した。50メートル離れた俺の部屋でも発狂しそうな音量だから、真下ともなると空前絶後で、脳ミソが肛門から、胃袋が口から破裂して飛び出しそう。で、俺は無用な拡声器騒音には、心底腹を建てるナイーブ人間だが、自室では大音量で種々の音楽を聴いてますぜ、当然。今聴いてるのは、「新星堂」飯田橋駅ビル店で税込み１８５０円で買った、『ゴスペル・サウンド・オブ・スピリット・フィール』。この畑は全く無知なので、アンソロジーで好みのタイプを知って後、個人ＣＤを…というわけ)、今日は本欄のみなので、昼間はくつろぎました。

午前中はゆっくり新聞読むと、我が家の駄犬、チビ&コチの散歩。狩猟解禁後、川で泳いでいた鴨の姿が見えなくなって寂しい。ここらは人家も多いし、全面禁猟にすべしと、堤防に落ちていた緑の空薬莢を蹴飛ばしつつ思う。帰宅後ビデオに。まずはランドルフ・スコット主演の『グレート・ロックの決闘』(監督/エドウィン・L・マリン)。ランドルフ・スコットって人が、B級西部劇スターだとは知ってたが、映画自体を観るのは初めて。映画が始まって15分以上たつのに、よぼよぼの死にかけた爺さんが3～4人よたついてるのみで、主役がちっとも出て来ない…と思ったら、タラのひものみたいなツラしたオッサンが、主役だったという恐ろしい映画。ストーリーも、観てる側が「ひょっとしてこうなるのでは…でも、そこまで安易じゃプロとして恥ずかしいな」と思ってると、恥ずかしい方向に一直線という物凄さ。

が、続いて観た『クローゼット・ランド』(監督/ラダ・バラドワジ)に比べりゃ余程まし。〝ぶったエセ芸術映画の見本〟。何も期待せずに続いて観た、『愛情萬歳』(監督/ツァイ・ミンリャン)に

ガク然。素晴らしい!! ウォン・カーウェイなんて猫の糞以下だ、これに比べりゃ。女性不動産屋営業部員が延々と歩く、住宅開発地の下りの冷徹な人間描写に、ボーッと観入っていた。俺もこんな風に泣きたい。

('97・1)

〝親馬鹿史観〟に群れる馬鹿共を笑う。

今日の昼と夜の食事は、ちょいと変わったメニューで、胃がとまどってる感じ。朝は西川口のアパート泊りの日がいつもそうであるように、東口の「ウイング」という喫茶店のモーニング(500円。コーヒー&トースト&ハムエッグ&サラダ。東口の「ファミリーマート」の向かいのビルの2F。午前中は2人の姉ちゃんが切り盛りしてるが、一人はかなりいい脚してるし、もう一人もB級アニメの声優風の声で刺激的。テレクラの桜でもやった方が、よっぽど金になるだろう)。朝はパンだったし、昼は米の飯が喰いてえと思いながら、十六女十八女の本号掲載原稿の修整指示をしてると(昨夜はコイツと飲んだ。普段は温厚な男だが、俺が〝日本代表〟で、昨今の日本人の〝嫌韓&嫌北朝鮮〟感覚を加味した論争を吹っかけたら、柄にもなく興奮、口角泡を飛ばし始めたので、面白かった。どちらかが、〝東方のセルビア人〟になる日も近いかも。ヒヒヒ。けど最近の、右翼の従軍慰安婦問題にからめた教科書批判も見苦しいぜ。

〝自虐史観〟だって? バッカじゃなかろうか。ガキにしろ国家にしろ、自らを客観的に検証する勇気のない〝親〟に育てられては、ろくなもんにゃなりませんがな。〝親馬鹿史観〟に明日はない。ただ、雑誌の編集してると、困っちゃうことも多い。俺はこのように、〝日韓サッカー〜〟とすべき所を、妙な卑屈さから、アルファベットを引っ繰り返してまで、〝韓日〜〟などとする連中に、ツバを吐きたくなる程度のナショナリズムは持ってるが、前出の連中のような従軍慰安婦は商売のみだった、南京大虐殺は人数的に疑問だから無かった、てな考えは全くの恥ずべき寝言だと確信してる。が、執筆漫画家陣にゃ色々な思想の持ち主がおるからね。特に阿宮美亜は、〝エロ漫画界の女右翼〟と言われるだけに、とんでもねえの描いて来る。今発売中の『漫画バンプ』2月号の、「抜かずにこのまま…」てのも、俺の対極思想漫画。よっぽど破り捨ててやろうかと思ったが、それじゃ言論弾圧になると、いつもこらえてる。雑誌なんて、色々な思想が渦巻いてた方が、活気が出ると思っての方針だが、最近は左翼っぽいエロ漫画なんてねえな。阿宮美亜や小林よしのりがデケーツラしてる景色ってのも、情けねえ)、ちょいと時間が出来たので、秋葉原に足を伸ばして、昼飯かたがた漫画専門店を歩くことに。「虎の穴」が、本を全部ビニ本にしてたのでビックリ。もう来る必要ないな。ここは、商品をビニ本化してない数少ない本屋だったので、奥付をチェック、どの漫画家がどの程度売れてるかを調査すんのに便利だった。ガックシ! 他の店にも行こうと思ったら、雨がザーザー。仕方ないので、「秋葉原デパート」の1階にある食堂街へ(池袋東口の「スナックランド」を小型化、立ち喰いではなく、カウンター席に座れるようにした、〝油まみれの飯屋の巣〟)。

何カ月か前の「嫌われ者の記」にも書いたが、前回はこの一角で、タコ焼き、焼きそば、お好み焼きのセット(!)を食べた所、地獄のようにまずく、かつ悪い油だったので、〝鋼の胃袋〟を持つこの俺も、3日ほど息絶え絶えになった。さすがにその店は避け、相向かいの「伊呂波」という店へ。牛丼やカツ丼等の丼類メインの店。キジ丼(600円)を頼む。2時頃なのにカウンターはいっぱい。繁盛している。カウンターの中は、奥にやせたオヤジが一人いて、各メニューの具部分を一手に引き受けている。残るおばさん2人の一方が丼と飯の用意。残る一人が客に出して集金、そして食器洗いと

いった構成。
　注目したのが、奥のオヤジがカツ丼や牛丼を作りつつ、火にかけて引っ繰り返している、中華鍋みたいなフライパン。最初は牛丼でも入ってんのかと思ったが、よく見ると、もっと色んな種類の固形物が。じっくり観察すれば、何のことはない。中にはもう出来上がったカツ、キジ丼用鳥肉のフライ、かきあげ（かきあげ丼もあるのさ）等々が、みんな一緒に仲良くひとっ風呂浴びているのだ。商品を冷たくすまいという、客への暖かい配慮なのはよく分かるが、出来たらワシらに見えない所でやって欲しい（キジ丼は、特にうまくもまずくもなく、ボリュームだけはあった。丼の外側のベタ付きは気になったが、油は相向かいの店よりは良質だったのか、特に胃もたれもしませんでした）。
　夜。今日は禁酒日なので、しっかりと食べねば（最近は禁酒日の方が多い。4日間。つまり、週に3日しか飲めないのだ。肝機能障害でこうなったのだが、慣れると案外平気。r―GTPも、ようやく70くらいに下がったし）。久々に事務所近くの「平禄寿司」の隣の、つけめん「大王」に行き、肉入り野菜いため定食（８５０円）を。あっという間に「お待ちどう！」。客は珍しく僕の他一人。トレイの一角を見て、「やはり…」と思う。そこにはちゃんと（？）、白いパックの納豆が鎮座ましましていたのだ。そう。この店は定食を頼むと、必ず納豆が付いて来る妙な中華屋として、近辺では有名。
　野菜いためと納豆は全く合わない。が、せっかく出してもらった物を残すのは生活信条に反するので、きれいに食べる（吉田婆ちゃん班の舞センセは、いつも手を付けずに残すそうだ）。帰りに今日こそ、「何で納豆を付けるようになったんですか？」と、尋ねようとするのだが、いっつも出来ない。実を言うと店の料理人さん達が、男っぽいというか、怖い顔してんです。対応は顔に似合わず優しいが、〝無駄なおしゃべりを職人はするもんじゃねえ〃と、確信していそうな雰囲気が。店は見方によれば清潔。味は中の下。読者諸君も、一度訪ねてはいかが？　（'97・2）

〝土建屋市長の鑑〃今井清二郎富岡市長へのラブレター②。

　やはり97年の正月も、富岡市（今井清二郎市長）の馬鹿げた防災無線との闘いからスタートした。言うまでもなくこの気違い防災無線は、盆暮れ正月の区別なく、一年３６５日、毎日最低3回はお節介極まる、馬鹿げた説教放送を繰り返しているのだが（昼12時の時報のメロディ。５時の童謡。夜9時の「もう一度火の始末と戸締まりの確認をして寝ろ」という、刑務所の所長まがいの偉そうな説教放送）、1月5日朝9時からは、富岡消防署（細山昂三署長）からの、以下のような馬鹿げた臨時放送があった。「ピンポ〜ン。こちら防災富岡です。今日、消防車のサイレンの音がしますが、これは出初め式のものなので、火災と間違えないで下さい（もう一度繰り返す）。以上（何が以上だ馬鹿役人！　俺はテメーらの部下じゃねえ!!）。ピンポ〜ン」（この騒音がどれだけひどいか、同じ富岡市役所の環境課に測定してもらったので、以下に記す。夜9時の放送の際、筆者の部屋の窓辺では、普段は40デシベル前後なのに、58・5デシベルまで跳ね上がる。50デシベルが、僕の住む地域だと理想とか。筆者宅は、沖電気製のこの騒音公害防災無線塔61番から、約50メートルの所にある。県の騒音防止条例では、拡声器から10メートル離れた場所で、85デシベル以上あれば違法と定められているから、この防災無線は軽くその数値をオーバーしていよう。しかし、この騒音防止条例は、公共のために行政が出す音は例外扱いという、とんでもないザル条例なのだ。そもそも法律は、役人の違法行為こそを取り締

まる物なのに、あきれた糞条例。しかし時報や童謡、夜９時だから寝ろという説教が果たして行政か？　という疑問は当然あるので、種々研究してみたい）

翌１月６日、富岡市役所（〒３７０～23　富岡市富岡１４６０～１。電話０２７４～６２～１５１１。ＦＡＸ０２７４～６２～０３５７）と、富岡消防署（〒３７０～23　富岡市富岡１９２２～７。電話０２７４～６２～４３２５。ＦＡＸ０２７４～６４～５６６５）に、以下のような抗議のＦＡＸを送る。〝１月５日午前９時の、何ら緊急性のない防災無線の使用に抗議します。この消防署の出初め式の広報は、『広報とみおか』12月15日号７Ｐ上段に記載済みであり、重ねて防災無線を用いる必要は一切ありません。去年11月20日の火災予防運動においても、全く同様な愚行をなしておりましたが、これは、①騒音公害。②施設の不当使用による税金の無駄遣い。③がんを引き起こす可能性もある電磁波公害の全市内ばらまき。—といったデメリットはあれ、何一つ市民にメリットはありません。そもそも「火災と間違わないように」などと、お節介極まりない怒声をばらまいてますが、火災発生と鎮火は、深夜であれ大音響で絶叫しているのだ。そうでないなら演習なことくらいは、７歳のガキにも分かります。要するに、単に職務を遂行しているにすぎない消防署員が（他の公務員同様に御苦労様）、税金遣って偉ぶってるだけじゃないですか？　見解をうかがいたい。なお、傲慢にもあなた方はダンマリを決め込んでおられるようですが、本ＦＡＸをはじめ、あなた方の対応は、富岡市役所企画課職員の、公務員の守秘義務違反行為を筆頭に、全て記録してあり、『こちら騒音富岡です‼』で順次発表していくつもりです。「富岡市の暴音防災無線から市民の健康を守る会」塩山芳明〟

反応？　例によってのダンマリ。防災無線での偉そうな説教放送は、１年３６５日休まずに全市を沖電気の広告塔にしてでもやるが、住民の質問にはシカトを決め込むのだから、あきれ果てた公僕共（『こちら騒音富岡です‼』１号の希望者は、80円切手を貼り、自分の住所氏名を書いた封筒を、〒１０２　千代田区飯田橋２～11～５、栄昇ビル５０３号、漫画屋『こちら騒音富岡です‼』係まで申し込んでね）。

正月休みも、今井清二郎富岡市長と細山昂三富岡消防署署長のせいでメチャクチャ。結局連中は、自らが市民の税金で公務を委託されてるに過ぎぬのに、富岡市という刑務所の所長、あるいは江戸時代の城主、よっぽど好意的に考えても、大企業の工場長のつもりか何かなのだ。根性は厚生省の岡光や茶谷と同一。こいつらこそが、国や地方公共団体を、財政的、道徳的に腐らせ、自然、そして住民の健康を破壊して行くのだなと、柄にもなく〝愛国者〟と化した俺は、『バビル２世』（横山光輝・秋田文庫・６３０円）の６・７・８巻を、防災無線騒音の合間を縫って読了すると（主人公が、ガクランの前ボタンを、２個外しているのがカッコいい）、読みかけてあった『白壁の緑の扉』（Ｈ・Ｇ・ウェルズ・国書刊行会・１８００円）を片づけ、『空気をもとめて』（ジョージ・オーウェル・彩流社・２８００円）を、もったいないので50ページのみ熟読（こんな傑作を一気に読むほど、あたしゃ太っ腹じゃない。合理的なのではなく、単なるケチですな、ケチ！）、神保町の「東京堂書店」の２階で買った、『バルザック全集１』（東京創元社・４０００円）のページをめくり始めた。収録作品は「ふくろう党」と「Ｚ・マルカス」。値段の割には上等な印刷・造本じゃありませんが、２段組で小さな活字にもかかわらず、バルザックは面白い‼　俺は文庫化されたほんの一部っきゃ読んでないので、全26巻の本全集は宝の山。40代半ば以降の読書はこれで決まりだ…てな感じで、毎日ページをめくってます。活字が小さいので、50代になったらつらそう。最近はバルザック、マーク・トゥエイン、ジョージ・オーウェル、

モーム、永井荷風、谷崎潤一郎、立花隆、楳図かずお、横山光輝、こんなとこばっか読んでる。映画？　正月の2日間に、「文芸坐」、「池袋シネマ・セレサ」、「大宮白鳥座」とはしご、『ミッション・インポッシブル』、『キッズ・リターン』、『ラバーズ・ラバー』、『ファイナル・プロジェクト』、『ジングル・オール・ザ・ウェイ』と見物。『キッズ～』は昔、西村昭五郎や江崎実生が日活でよく撮ったレベルだと思うと同時に、ジャッキー・チェンの老化にショックを受けた。（'97・3）

今井清二郎、細山昂三、高間栄の三偉人に寄せる詩（うた）。

読者としても毎月毎月、〝市内141カ所の沖電気製の騒音公害防災無線塔により、年に千数百回以上も列車高架真下並の80デシベル以上もの暴騒音を血税を遣ってバラまいてる厚顔無恥な**今井清二郎**富岡市長（〒370－23　富岡市富岡1460－1。電話0274－62－1511。FAX0274－62－0357）ネタを書かれても飽きると思うので、今回はその今井清二郎君の忠実な部下で、筆者の市役所に出向いての抗議に対して、「この防災無線は昭和48年からやってるんだから、これからもずっとやんです!!」と、「テメーら住民は、ガタガタ言ってねえで黙って税金払ってろ!!」と言うに等しい暴言を吐き腐った、同市企画課係長**高間栄**君ネタもあるのだが（バカヤロー高間!!　従来10数カ所しかなかったのに2年前から141カ所にもしながら、音量や放送回数を合理的基準を元に、減らす努力してねえから文句言ってんだ!!）、あえてそのネタは後回しにして、今回はお礼とお願い、ついでに宣伝をしちゃおうと思う。

しつこいPRがそれなりに好評な、例の『嫌われ者の記』（一水社・1631円）ですが、発売から半年たって、だいたいの成績が分かりました。6500部くらい刷ったようですが、5500部前後は売れた様子。約1000部の残。これなら、今井清二郎富岡市長並の、厚顔無恥な宣伝を続ければ売り切れると、最近は『ジャニー』や『秘密少年』でもPRし、やおい系読者にも浸透をはかってる。増刷は無理でも、何とか完売を目ざす、上州商人(塩)でんねん。

当然出て来たのが、単行本第2弾の企画。ここで大口叩いちゃう（そうでないと、ズルズル伸びちゃいそうなので。今から発表しちゃえば、不精なオイラとてシコシコ作業を始めるでしょうし）。8月頭の夏コミ前には、(塩)の単行本第2弾、**『現代エロ漫画』**を一水社から出します!!　これは、当初予定されていた読者欄の単行本化ではなく、(塩)のエロ漫画&エロ漫画家論をメインとした、ゴシップコラム集。ちょっと格好つければエロ漫画評論集。アタシもそれまでエロ劇画専門だったのが、ロリコン漫画（宮崎事件以前はこう呼ばれていた。美少女漫画なんつうふやけた言い方よりよっぽどいい）に手を伸ばして、10年チョイになるので、ショーもない原稿がいっぱいたまってる。

まずは『ロリタッチ』の「亜流誌の内幕」、『レモンクラブ』の「凡人回想録」、その他、書いたり編集した人間も誌名を忘れちゃってる種々の自販機本や、スポーツ新聞、書評紙、実話誌等に、色々と書いてたのだ。知っての通り俺は超ナルシスト。この種の仕事、スクラップしてちゃんと保存してんですね、こういう日が必ずや訪れるとの確信の元に（こういう下りは〝バシッ!!〟と言い切らんと、読む側に下品さを抱かれる）。これらの多量のスクラップを、エロ漫画状況論、エロ漫画家論に大別して単行本化する予定。また、〝抜ける評論集〟を目ざして、少なくとも各時代の代表的エロ漫画家さんの、2ページ程度の濡れ場シーンも収録、皆様のお役に立ちたいと考えてます。

多分定価は『嫌われ者の記』と同様、１６００円前後になると思うので、夏コミ予算とは別枠で金銭の確保をお願いします…と書いてると、例の防災無線がいきなり大絶叫。市内の拙宅から車で15分くらいかかる所の火事だとか。無線塔の近所に住む、心臓の弱い人なら麻痺でも起こしかねぬ音量。無論、火元の人は非常に気の毒であるし、消防署員は御苦労様であるが、市内の一角の火事で、なぜ富岡市中１４１カ所の防災無線が、80デシベル以上もの暴騒音をまき散らさねばならぬのか？　署員への連絡方法は、ポケベル、携帯電話などいくらでもあろう。しかもこれだけではないのだ。発火から30分くらいすると、必ずまた例の大音量で、「××地区の火災は鎮火しました」と繰り返すのだ。知人宅などがある人は、サイレンの方角で、電話なりちゃんとしとるよ。本当に要らぬ世話であり、血税の無駄遣い。あの非常識な今井清二郎富岡市長ありて、この非常識な**細山昂三**富岡消防署長ありと言った所か（富岡消防署／〒３７０−23　富岡市富岡１９２２−７。電話０２７４−６２−４３２５。ＦＡＸ０２７４−６４−５６６５）。

それはもともかく、今週末は〃今井清二郎式気違い防災無線〃の間を縫って、４本ビデオで映画を観た。『群衆』（監督／フランク・キャプラ）、『恐怖分子』（監督／エドワード・ヤン）、『柳生武芸帳』（監督／稲垣浩）、『流血の縄張り』（監督／長谷部安春）ですが、エドワード・ヤンて、センスいいね。撮影者の力量かもしれないが、画面がズッシリと安定してるのがいい。チャラチャラした画面の映画にゃうんざり（ウォン・カーフェイって何よ？　ゲロシャワー!!）。この人の映画これっきゃ観てないので、今後たっぷり楽しめそう。笑えたのが『柳生武芸帳』。57年の東宝作品で、監督は『無法松の一生』で有名な〃巨匠〃ですが、ギャグ映画としても大いに楽しめる。

三船敏郎が忍者ってのがまず大笑い。あんなノッシノッシ、地面を踏みしめて歩いてる忍者がいるかっつうの。冒頭での登場シーンも傑作。真っ昼間から木の上に隠れて、体のあちこちに竹笹をまとってんだが、余計に目立つよおっさん！　柳生十兵衛一味から逃げる際に炸裂させる、爆雷の煙幕のせこさも瞠目。さんま３枚焼いた方が、まともな煙が出んじゃないの？　にしても、俺が観た稲垣監督の映画って、これといい『手をつなぐ子等』といい、〃とんでも映画〃としか思えぬが、運が悪いだけで他の作品は傑作なのか？

『流血の縄張り』は、なぜ今まで観るチャンスがなかったのか、不思議としか言いようのない、日活末期の小林旭主演映画。が、『縄張りはもらった』とは異なり、旭が脇の中丸忠雄と名和宏に喰われちまっている珍品。中でも名和宏の、兄貴へのコンプレックスに悩む悪役はカッコ良く、代表作の一本と言えよう。ニヒルな猫好きやくざ藤竜也も、完全にかすんでる。

（97・４）

〃土建屋市長の鑑〃今井清二郎富岡市長と親分の岩井賢太郎県議、及び両名の不潔なケツの穴を舐め回して銭儲けしてる『上毛新聞』へのラブレター。

富岡市周辺の福祉施設〃丸投げ疑惑〃指摘／関係者らは反論／宇都野洋一氏（共産）が一般質問で、「富岡市選出の県議と市長が、地元の社会福祉施設建設工事を同族会社に契約させ独占している」とする〃丸投げ疑惑〃を指摘した。指摘された２人は副議長の岩井賢太郎氏（自民党）と今井清二郎富岡市長。質問は岩井氏が理事長を務める社会福祉法人の施設建設に際し同氏の親族が経営している

建設会社のＪＶ（共同企業体）と契約を結び結果的に補助金を独占しているのはおかしいという趣旨。今井市長についても同様の疑惑を示した。これに対し、県側は直接の答弁を避けた。岩井氏は「悪いことはしていない。いろいろな解釈がある部分で、身内で固めたつもりはない。しかし、謙虚に受け止め、地域のみなさんに愛される施設を運営する」と否定している。また、四月開設に向けて同市内で建設中の身体障害者療護施設について、「社会福祉法人経理規則準則」で定められている一般競争入札を省き、随意契約で同族企業に誘致したとの指摘にも、「社会福祉法人は地元の農協に委託契約し、農協がＪＶと随意契約を結んだ。意図的な話ではない」と反論している（『東京新聞』、97年3月1日付けの群馬版より）。

さすがは、〝市内141カ所の3億5千万もした沖電気製の騒音公害防災無線により、年に千数百回以上も列車高架真下並の80デシベルもの暴騒音を人間と自然と市財政を破壊しつつバラまいてる厚顔無恥な土建屋市長〟今井清二郎君だけのことはある（富岡市役所／〒370〜23　富岡市富岡1460〜1。電話0274〜62〜1511。ＦＡＸ0274〜62〜0357）。環境破壊の一方で、「彩」福祉グループ並の、福祉をネタにした銭儲けに狂奔していたらしいのである（ちなみに、前市長の廣木康二君も土建屋で、業者から数百万受け取り、返した返さないとのスキャンダルを起こし、結局は市長選辞退に追い込まれた）。前市長は小渕派と言われていたが、今回は福田派コンビ。何派であろうと、土建屋の血筋は争えないと言った所か（筆者が毎週通っている、市内唯一の屋内民間プール、「富岡スイミングスクール」は岩井賢太郎君が理事長で、ロビーにはニヤけた岩井君と、木原美智子のツーショット写真が飾ってある。薄汚ないプールですが、従業員は皆さん感じがいい。いつかスピーカーでラジオを放送しだしたので、「うるさいですよ。泳ぎに来た人に、余計なサービスです」と言うと、すぐ中止してくれた。市の防災無線の実行部隊長、富岡市企画課の高間栄君らには、是非見習ってもらいたい。また、今回クリーンヒットを飛ばした共産党も、拡声器の使用はもっと控えるべき。特に、毎年元旦に朝っぱらから同党の市議が、「今年も頑張ります!!」とがなり立ててるが、頑張るのは勝手だが、市民に正月から騒音公害バラまくな。これじゃ年末に3日続けて、夜8時から深夜の1時まで、カンカン鐘鳴らした消防車を、市内中に暴走族まがいに転がして、消防活動したなんて思い上がってる、富岡消防署〔〒370〜23　富岡市富岡1922〜7。電話0274〜62〜4325。ＦＡＸ0274〜64〜5665〕の、細山昂三署長を笑えない）。

今後の展開が非常に楽しみになって来た。〝岩井県議＆今井市長福祉疑惑〟ですが、両名以上に地元民の怒りを買っているのが、〝群馬唯一の地方紙〟『**上毛新聞**』（〒371　前橋市古市町1〜50〜21。電話027〜254〜9911）。何と、県議会での質疑応答を、一行も報じないのだ。福田派の圧力!?　いやいや、ンな上等なもんじゃありません。『こちら騒音富岡です!!』の読者なら既にご存知のように、独占地方紙という立場を利用して、この三流赤新聞は各種公共団体の〝下請け出版業者〟として喰い込み、暴利を貪ってんのだ。つまり銭。地元ボスににらまれるのを恐れ、ペンをボキボキ折り腐ってんのである。政治家の親族企業が公共事業を丸投げで請け負い、血税をかすめ取ってんのと同一構造。北海道や秋田での役人共の税金泥棒振りについても、地元紙が似たような痴態を演じてたらしいが。一方で中央の大マスコミは、「新聞・出版物の再販制を守れ!!」と、恥を忘れて大蔵省＆大銀行並の護送船団方式キャンペーンを張って、〝鍋や釜に比べて印刷物は文化的に上位に立つ!!〟と言わんばかりであるし、救えないのは納税者。

地元の警察、検察関係者も、廣木前市長の時のようにうやむやにせず、しっかり捜査してもらいたい。「共産党の得になるような捜

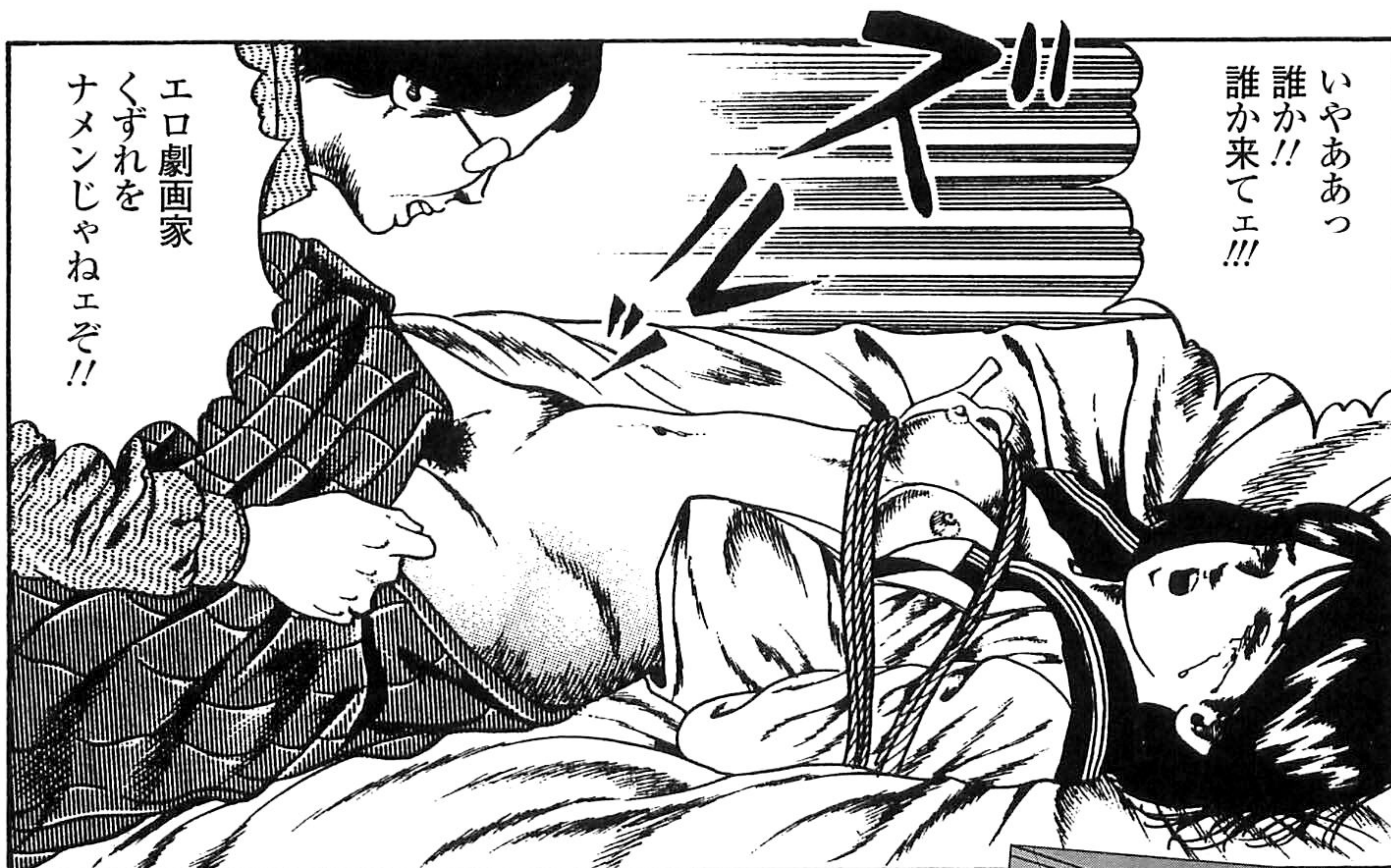
査は…」なんつってたら、役人不信の波は必ず近い将来、自らの領域にも及ぶと思うべし…とまで、たかが〝下請けエロ漫画編集者〟の俺が言うのはまずいかな？　と思ってたら、また夜の9時。始まりましたよ。例の80デシベルの糞役人のゲロ放送が。

「ピンポ〜ン。こちらは防災富岡です。御家庭の皆様、火の元の始末はもうお済みですか。もう一度戸締まりと火の元をお確かめの上お休み下さい。以上。こちら防災富岡です。ピンポ〜ン」福祉で私腹を肥やしてる連中が、毎晩5万の市民に説教こいて、〝以上〟なんつってふんぞり返ってんだもん、恐ろしい街だよ、富岡市は。

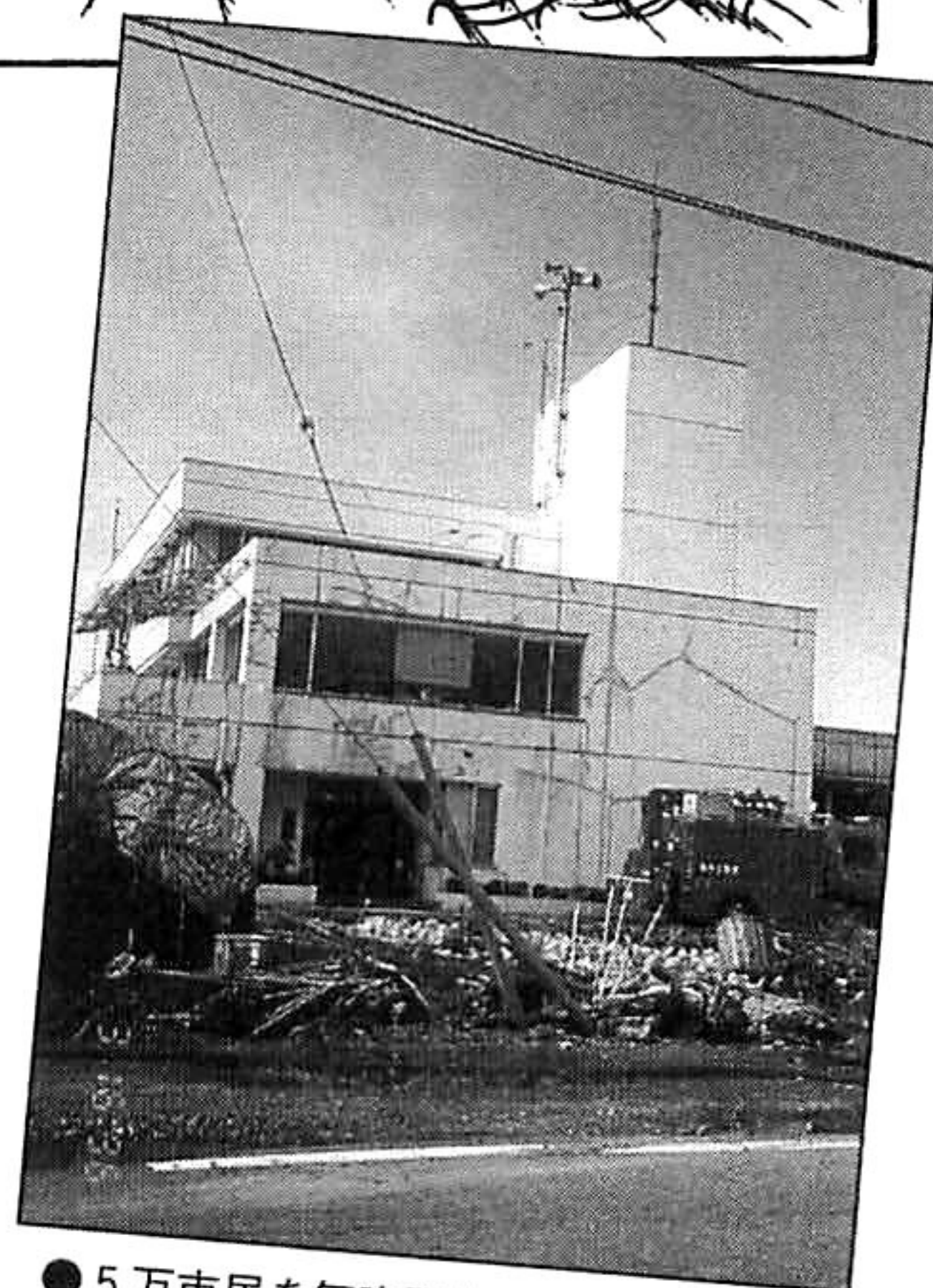
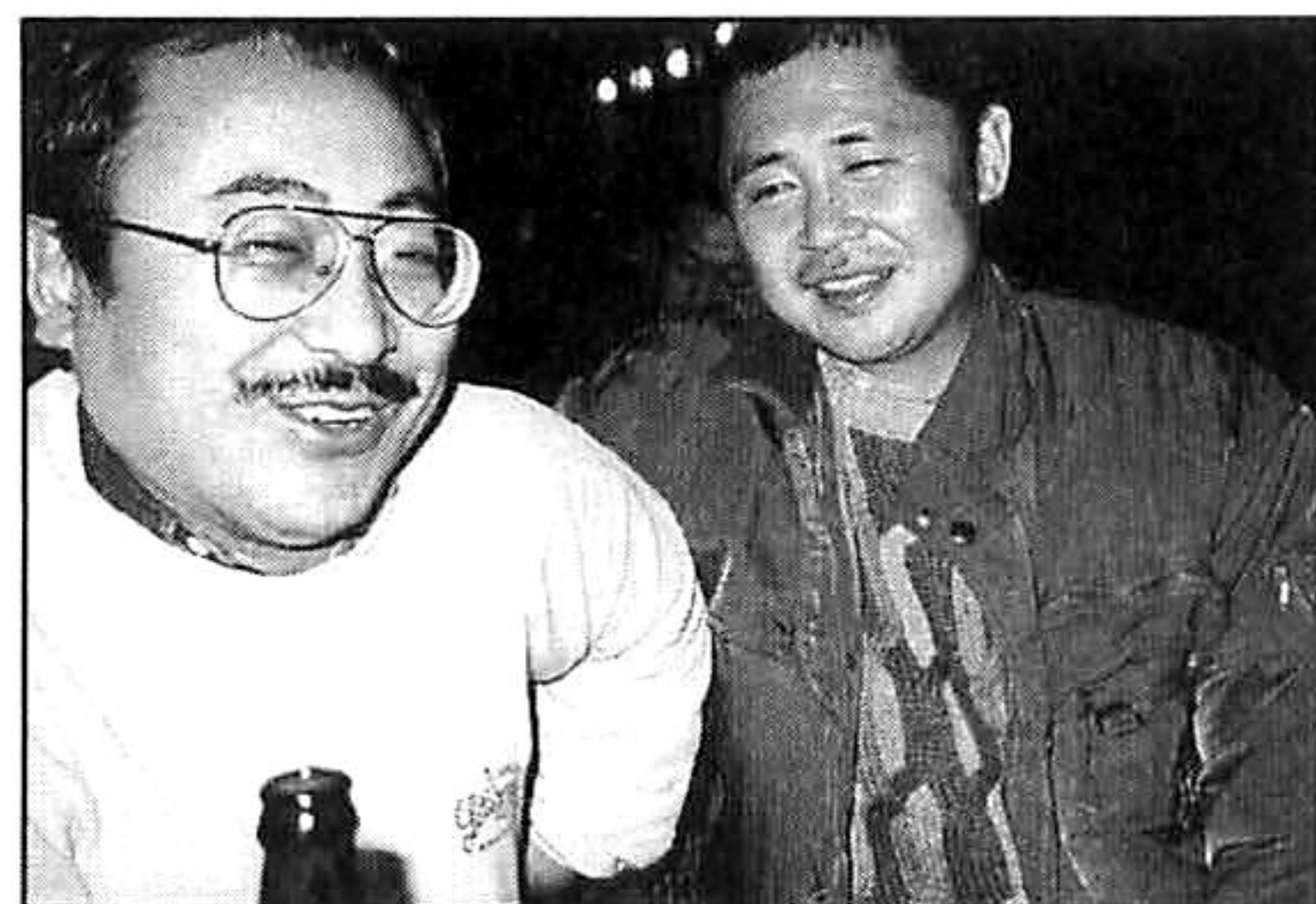
本はよく読んでいる。けど飽きっぽいというか、２冊ずつくらい順ぐりに読んでるので、読みかけの本がいっぱい。しかも、どれもこれも面白くってね。そのせいかもう3月22日なのに、読了した本は漫画本、活字本共に5冊。こりゃ各10冊の目標は達成できないか？　併読中本リスト↓『マザーネイチャーズ・トーク』（立花隆他・文春文庫・５２０円）。『詩人と女たち』（ブコウスキー・河出文庫・１２００円）。『要約すると』（モーム・新潮文庫・６００円）。『アシェンデン』（モーム・ちくま文庫・８４０円）。『ウォーホル日記（上）』（パット・ハケット編・文春文庫・１４００円）。『ポップ中毒者の手記』（川瀬正幸・大栄出版・１８５４円）。『立花隆の同時代ノート』（講談社・１７５１円）。寝る前には大冊の『戦争とラジオ』（ジョージ・オーウェル・晶文社・９８００円）と、『バルザック全集２』（東京創元社）を少しずつ読んでるし、充実してるね、読書タイムだけは！（「女でこれなら」なんて突っ込むなよ）

（'97・５）

●妙義山の景観もズタズタ。住民の神経を逆なでする、富岡市の防災無線。

●糞役人の巣窟、富岡市役所。“人権尊重”の文字が踊る。

●Ⓒ阿宮美亜『気分は少女色』(インポ変態牛川の逆襲)より。

●5万市民を毎晩説教する、富岡消防署。

●㈲遠山企画の忘年会(三平酒寮)にて。三条友美(右)、阿宮美亜(左)。

●タコ多田(左)、山崎邦紀(右)。

第3章

エロ漫画家論①

『ギャルトピア』'82.10~'84.1／『漫画スキャンティ』'86.7／『ぺあ』'83.12~'86.9

エロ漫画界裏通り

『漫画スキャンティ』'87.3~'88.8

エロ漫画家論②

『ぺあ』'87.6~'97.9

やまだのら

中卒は今や女子高生の処女と同様、めったにお目にかかれない貴重な存在だ。エロ漫画家の世界とて同様。美少女SM劇画で知られるやまだのら氏はその点、高校中退などという不純な中卒ではなく、文字通り血統書つきの中卒として、多くの編集者に尊敬されている。

のら氏は中卒後フーテンを長らく務め、ロックバンドを中卒仲間と結成。秋になるとあちこちの大学祭でアルバイト、つかの間の大学生気分を味わっていたという。漫画はまずギャグからスタート。数年前に廃刊になった、『増刊ヤングコミック』にも掲載されたことも。当時のペンネームが、本名でもある山田雅彦。

美少女劇画を描き始めたのは、『漫画スカット』（みのり書房）で六年前。この頃のペンネームは「山田のら」。その後、ある編集者の勧めで、現在の「やまだのら」に改めた。今も一部の雑誌には山田のらを用いているが、「編集に任せっきり。どっちでもいいンです。どうせ中卒だし」（本人）とのことだ。

バンド時代の仲間が、現在の女房殿であるマリヤ。彼女は大卒。おまけにいわゆるコケティッシュな美人。氏の描く劇画のキャラクターの原点と、多くの編集者が指摘する。またマリヤさんは酒を飲むとキス魔になるとも言われ、氏が売れっコになった真の要因と語る同業者もいる。

その間のら氏は、ニコニコしながら眺めている。しかし帰宅後、「この淫乱女め、俺が中卒だと思って舐めンな!!」と殴ったり蹴ったりとか。「のらは二重人格なんです」（マリヤさん）。正に氏の描く劇画通りの私生活ではある。

しかしのら氏を、「サドってのは隠れミノ。奴は本当はホモ。一度彼の家に泊まってチンポを舐められた」（氏が連載してる某劇画誌編集者S氏）との証言もある。もっともS氏も、その時こっそり酔いつぶれたマリヤさんの寝乱れ姿を覗いていたので、拒否出来なかったとか。恐るべき三角関係。

ゆえにのら氏の劇画、本当は〝美少女劇画〟ではなく、〝美少年劇画〟なのだとの声も。月産八十枚、月収五十万の家庭を預かるマリヤさんの心配もこの点。「時々外泊するンです。男が出来たンじゃないかと心配で……」

事実が劇画より奇なる作家は数多いが、中卒夫の男を心配する大卒女房というのは珍しい。

（『ギャルトピア』'82・10）

前田俊夫

実力と名声がイコールでないのは、どの世界でも同じ。劇画界では前田俊夫（29歳）がその典型と言われている。代表作は『漫画エロトピア』に連載した、「タクシードライバー」と「血の罠」。特に「血の罠」は、自伝的要素を込めた傑作との声が高い。サン出版から単行本化されつつあるが、いわゆる〝劇画的劇画〟としては、池上遼一の「I飢男ボーイ」に勝るとも劣らない。劇画的劇画とは妙な言い方だが、その反対として、〝イラスト風劇画〟が挙げられる。前回紹介したやまだのらを始めとする、ロリコン物作家の九割はこれだ。

劇画的劇画、つまり劇画の主流を行く作家の特徴は、ストーリー性、コマ割り、めくり等に念入りに気を配ること。要するに〝読ませる〟劇画。具体的に言えば、『ビッグコミック』などほとんどこのタイプの作家を起用している。しかしエロ劇画界においては、羽中ルイ出現の後は、このタイプは古いと言われるようになった。ストーリー性よりキャラクターの可愛さ、流行感覚等が重視されるようになったのだ。結果的に、技術的には未熟極まりないやまだのら、

西江ひろあき、野上としみ、石野ひろし等まで結構な原稿料を稼ぐようになった。今は、劇画テク以前の、可愛い女のコさえ描ければ喰える時代なのだ。キャラクターの動きも不要だから、一コマずつ写真から写せばよいありさま。

これも時代の流れ。善悪の問題ではない。もう一つ、前田俊夫の売れない要因として、その世界の暗さがよく指摘される。鳥取生れで大阪河内の育ち、二児の父親たる本人はサービス精神豊かな男だが、描く劇画たるや確かに気がめいる。「もう十年早く発表してたら…」と、『エロトピア』連載中の「血の罠」を見て、多くの劇画好きが思ったものだ。

前田をよく知る人は、彼の家庭環境の複雑さを背景として挙げる。しかし読者にそれは関係ない。ただ、近頃の劇画が読者にコビすぎる傾向にあるのは事実。現実にフィルターをかけ、読む者に満足感を与える。考えようによっては、中流国民への追従だ。前田はこの面で劇画界の〝悪所〟と言える。声高に政治を語るのではないが、オメコ漫画を通じて満たされぬ人間のウックツを炸裂させる。アメコミ風糞リアリズムで。60年代のシッポを引きずるこの高校中退作家には、いくら飢えてもイラスト漫画だけは書いて欲しくないものだ。

(『ギャルトピア』'82・11)

三条友美

北炭夕張炭鉱の労働者が、萩原吉太郎というオジンのおかげでヒドイ目に会っているが、この事態に劇画界で一番心を痛めているのが、三条友美氏。これは彼が人並以上の正義感に溢れているからではなく、実家が夕張市内でマーケットを営んでいるという、経済的理由からだ。

炭鉱労働者が顧客であるから、彼らが解雇されて夕張を離れれば、閉店に追い込まれかねない。さらに三条氏自身も、9月の檸檬社(『漫画大快楽』、『漫画快楽王』の版元)倒産で、16万もの負債を負っている。同社の倒産では100万以上の負債を負った劇画家もおり、軽傷な方なのだが、何せ遅筆で知られる氏のこと。「俺さァ、月に2本、ページ数で50枚が限界なのよ。そいで稿料が五~六千円じゃない。手取り20万ちょっと。去年結婚した女房も喰わせにゃならんし。檸檬社倒産のおかげで、先月なんか貯金残高3万よ。これで実家が閉店でもして、仕送りよこせなんつわれたらどうすんの?夫婦で心中だよ」

当年24歳のこの劇画家の嘆きはもっとも。彼は中央大学法学部を昨年卒業したばかり。同級生が全てエリートではないが、エロ漫画家はおそらく彼のみ。在学中から『漫画快楽号』、『漫画大快楽』で活躍していた。一見して分かる通り、池上遼一の流れに連なる、本格ハード劇画である。デッサンどころかろくにトーンも削れぬ、そこいらのカンナクズのようなロリコン劇画家とは、下地からして違う。

女のコの表情がうまい。特に濡れ場に至る過程の、〝むかれてゆく少女〟の恥らいの視線、しぐさ、ネーム、コマ割り等のテクニックは念入りで無駄がない。それでいて同系列の劇画家、すぎうらあきとのように、自らの才気に酔うようなナルシスティックな面がなく、良い意味での通俗性もある。

今やエロ劇画は、富田茂の活躍でロリコン風劇画は一掃されつつあるが、これを追えるのは三条ただ一人というのが業界の定説。男が富田ほどうまくない、精神的にいささか軟弱である等の指摘をする、彼を個人的に知る編集者もいる。ただ我々読者の側では、三条氏の描く少女には富田氏にない、粘液質の色気を感じてる者が多いのもまた事実。これは彼の劇画素材の九割が、スカトロジー物であることと表裏の関係にあろう。富田茂が描くアヌスバンド少女を、

単なるオブジェと化しうる可能性を、一番感じさせる成長株が三条友美なのだ。

(『ギャルトピア』'82・12)

すぎうらあきと

誰ということもなく、自然に〝エロ劇画界の川俣軍司〟と呼ばれ始めたのが、すぎうらあきとである。知っての通り川俣軍司は、深川でシャブ中毒の果てに、包丁片手に通行人を切りまくったが、すぎうらは今のところ包丁の代わりに、ペンを手にしているにすぎない。しかし、彼と一度でも会った編集者、劇画家は異口同音に口を揃える。「奴がこのまま畳の上で死ぬはずがない。最低でも3人は人を殺し、絞首刑台送りだぜ!!」と。

当年26歳のこの男、6年前に「ビッグコミック新人賞」の佳作に入選。一時は少年誌を志したらしいが、その後『漫画快楽号』に「非行学園」を発表。荒々しく、妙に読む者の神経を逆撫でる斬新なタッチが一部の注目を引いた。この頃のすぎうらは『快楽号』の独占状態。他誌編集部の問い合わせにも、姑息なことに発行元のベストセラー(現ワニマガジン社)は、川俣軍司の、いやすぎうらの電話番号を教えようとしなかった(注*その後天罰のためか、『快楽号』は廃刊に)。

専属雑誌の廃刊で失職状態になったすぎうらは、一昨年、持ち込みをして、『スーパーコミック』、『漫画バンプ』で連載を開始。当人によればそれまで6~7千円もらってた稿料が、持ち込みのためか、たった4千円になったとか。しかし仕事に打ち込む時間があったためか、この頃の作品が一番充実していたというのが、衆目の一致する所。少女の感性の機微表現の切れ味たるや、正に刺身包丁。ゆくゆく包丁には縁のある男らしい。

落ち着きのない男である。さらにその会話たるや飛びっ放し。名詞と動詞が機関銃のように乱射され、普通の人は30分聞いてると吐き気さえ催す。この性格に加え、注文の殺到に乱作をしたためか、近頃は再び仕事がパッタリ。おまけに吉原のトルコで淋病まで背負い、一時はこの男の口から数々の性病名や、気色悪い症状が連発され、一層仕事を減らした。

遂には、新宿2丁目のウリセンスナックに勤める奇行振り。現在は来年の「群像新人賞小説部門」を目ざして、原稿を執筆中とか。いずれのニュースにも誰も驚かず、「奴ならやるだろう!!」。劇画のネームの切れは抜群の男だから、あるいは第二の赤瀬川原平になるかも…との声も。しかし、「奴のことだ、群像新人賞をもらう前に、シャブ中毒殺人で新聞ダネになる」との声も多い。

(『ギャルトピア』'83・1)

笹沼傑嗣

「エロ劇画家の女房って、どういうわけか美人が多いんだよな、糞ッ!!」深いシットと憎悪に満ちた口調のS氏は、エロ劇画誌の編集歴7年。今年で29歳になりながら、オナニーが唯一の趣味である氏の、独断的な美人女房の持ち主のベスト3は次の通り。第3位やまだのら氏、第2位もろかわ拓氏、そしてダントツのトップが、SM劇画の帝王、富田茂氏。

『漫画ブリッコ』という雑誌が最近創刊され、エロ劇画家へのインタビューが写真入りで連載されている。2回目で富田夫妻の写真が載った。「チクショウ! もう頭に来た。エロ劇画なんかよく描けるよ、あんな女房がいて!!」こう激怒したのが、今回登場願う笹沼傑嗣氏。

本誌が出る頃には『漫画エロトピア』で、氏の新連載が開始されているだろう。茨城の貧乏百姓の小倅である氏は、当年で30歳。顔

はチェ・ゲバラを連想させる野性的美形なのだが、とにかく女に持てない。ある編集が、「僕はトルコに一度も行った経験がない」と言った所、「じゃ持てるんですね」と答えたとか。つまり笹沼氏は、素人女と30になるまで一度として寝たことがないのだ。信じられないが本当の話だ。つくづく世間には色んな人がいると驚く。

多かれ少なかれ、エロ漫画家は自分の満たされない面を仕事で晴らす。しかし笹沼氏の場合は、その欲求不満度が100%。月に最低3回は吉原に通う氏だが、トルコに行って2〜3日は、漫画を描く意欲がなくなるというから怖い。「俺だって素人とやりたいよ。でも駄目なんですよォ。近頃じゃトルコの個室でないとチンポも立たないンす。万一素人と出来ても、終わった後で金を差し出しそうで…」

〝笹沼ホモ説〟もかなり根強い。近所のやまだのら氏と出来てるとの噂もあるが、まだ確認はされてない。氏の部屋を一度でも訪ねた人は、異常なキレイ好きにギョーテンするが、このあたりが噂の発生源か。さらに悪質な〝イボ痔〟が、噂に火を注いでいる。大酒を飲んだ翌日は、肛門に生理用品を当てがって大の字になり、六畳一間の部屋ですすり泣いているという。色んな人生があるもんだ。

このウッセキのためか、彼の描く少女は抜群のカワユさ。満たされぬ氏の心に育まれた、ペン先の天使とも言えよう。また笹沼氏の奇想天外なユーモア感覚は、他の追随を許さない。アンネを尻に敷きながら、なお一層女に持てぬことを祈ろう。

（『ギャルトピア』'83・2）

いがらしみきお

〝エロ劇画〟という言葉の定義は、あるようでいて実は全くない。〝オナニーをかき得る劇画〟と言えなくもないが、石井隆を読んでボッキする人がいれば、「巨人の星」の星飛雄馬の股間に興奮する人も、必ずや存在するだろうからだ。

だが、さすがに今回のいがらしみきおの4コマ漫画でマスる野郎は、100%おるまい。余程変わった読者がいたとしても、困ったことに読む側が抜く前に、いがらし漫画の登場人物は、自ら射精を終えちまうのだから始末が悪い。

無数にあるエロ劇画誌から、講談社の誇るクズ雑誌『コミックモーニング』まで、いがらしの月産執筆原稿は120枚。以前は東京にいたこともあるらしいが、ここ数年はズッと宮城の山奥住まい。だから原稿は全て郵送で、現在27歳と伝えられる本人の素顔を知る人は少ない。電話での口調は、ジャイアント馬場が言語障害を起こしたかのようであると言われ、一部では、「あんなアホっぽい声の奴がねェ。ヒョッとすると別人が…」とまで噂かれたという。

毎度登場願っているエロ劇画誌編集者のS氏（29歳）は、いがらしの実像を知る数少ない人間の一人。氏はこう証言する。「あの野郎はよォ、とんでもねェ裏切り者、権力の手先、いや反革命だぜェ。〝ネ暗〟だ何だ言っちゃって、自分は結構二枚目。近頃は羽振りもいいのな。この前東京で一緒に飲んだ時も、ふざけてるぜ。〝奢ります〟だとよ。ついこの前まで死にそこなってたくせしやがって。俺も頭来たから言ってやったよ。〝どうせならもっと高え店で言いやがれ〟って。そいで他でたかって、酔ったついでにシャレで小便ひっかけたら、後で電話寄こして、〝仕事休ませて下さい〟だと。やだねェ、シャレの分からん百姓は、ナハハハ」

ネタミ深い上にホラ吹きのS氏の発言だから、全部は信用出来ぬが、いがらしが二枚目で、痔の他多数の難病に取り付かれていることは分かった。体中の穴という穴に薬を突っ込んでいるというのも、本当らしい。全身の体液を噴射しながら、怒りオナリ狂う彼のキャラクター達は、自画像でもあるらしいのだ。

忘れてならぬのは、彼の8コマ漫画での空間処理、及びネームの擬音的処理の前衛性である。この面での先駆者谷岡ヤスジは、いがらしの登場で、初めて追われる立場となったのだ。東北恐るべし。

(『ギャルトピア』'83・4)

あきすぐり

ギャグ漫画家は昔からだが、近頃は劇画家でもペンネームが、オールひらがなという例が多くなった。このコーナーにも登場願ったやまだのら、すぎうらあきと、さらにひで・かず、さっさきくじ、そして今回のあきすぐり。ふぐりではないから御用心。

神奈川県は相模原の出身で、当年28歳。既婚。子供はなし。高校時代はハンドボールの選手で、そのツテで大阪経済大学に進んだものの、一日も登校せずに退学。門井文雄のアシスタントを2年ほど経験。既に廃刊になったが、ワニマガジン社で発行していた『男のゲキジョー』でデビュー。それから5年。氏の現在の執筆誌は、『漫画バンプ』、『漫画快楽園』、『漫画ラブラブ』等で、決して売れっコとは言えない。

なぜか？　見ての通り絵は実に達者であり、感覚も悪くはない。自らストーリーが出来ぬ欠点はあるものの、これだけのテクニックを持つ劇画家が、前出レベルの雑誌でしか活躍出来ぬのはうなづけない。その辺の事情を、毎回御登場願っている、エロ劇画誌編集者のS氏に証言してもらおう。

「アイツが売れねェのは当然。何しろ原稿が遅い。一日一善、いや一日一枚しか描けねっつんだから。で、しょっちゅう原稿落としてるうちに、注文が来なくなっちゃったわけ。ヤツの落とし癖は一種のビョーキ。自宅に住んでるから喰えてっけど、アパート暮らしならとうに心中よ。絵がうまいのに!?　それがシロート。この世界ね、妙にテクニックあるヤツほど駄目になるの。回りがほめると、本人はその気になっちゃうから。で、絵に進歩がなくなんの。その間に新人はどんどん出てくるし、ある日気づくと一人ポツンと忘れられてたなんて連中、いくらでもいるよ。それまでに各出版社を泣かせてるでしょ、そういう奴って。持ち込みも出来ずに消えちゃうわけよ、ナハハハハ……」

あき氏の遅筆振りを指摘するのは、S氏だけではない。前出の連載誌の某誌などは、2色原稿を入れた後で活版原稿を落とされ、2色、活版ともに再録原稿に差し替えたことまであるとか。一歩間違えば、雑誌が体をなさなくなる。怖い話。

抜群のテクニックに将来を期待されたあき氏、このまま消え去って行くのか。再びS氏。「消えないね、ヤツはいわば秀才。消えも伸びもしない…な」。

(『ギャルトピア』'83・5)

小槻さとし

天下の『朝日新聞』でさえ取り上げた4コマ漫画ブーム。このブームの終息を心待ちにしているのが、何を隠そうこれで飯喰ってるはずの編集者達。毎度御登場願っている、エロ劇画誌編集者のS氏(29歳)もその一人。

「4コマなんちゅうのは今まで刺身のツマ。原稿も作家がペコペコしながら持って来たもん。それが近頃じゃこっちがペコペコ。当然連中の自宅にまで出向いて、おまけに待たされ、下手すりゃ一日つぶれちまう。これもみんな、『まんがタイム』だ『まんが笑ルーム』だのの4コマ専門誌創刊のせい。バーローあいつら、今までエロ劇画誌に細々と描いて、女房やガキ養ってたくせに、ブームが来るや、〝ボクもうエロ雑誌にゃ描きたくないんです〟だかんなあ。平ひさし、かまちよしろう、宍倉ユキオ…あいつらこの間までエロ劇画誌

のおかげで喰ってたのによ。いい格好すんなっつうのォ」
さすがはエロ劇画業界の嫌われ者で、〝ラッシャーS〟とまで呼ばれてるだけに、大した毒舌。そんなS氏をして、「奴は差別意識もなく、思想も赤くて健全である」と、妙なほめられ方をしたのが小槻さとし氏。京都の出身で32歳。あの「養老乃瀧」チェーンに勤務、宣伝カーに乗って、「席料サービス料一切無料!!」と連呼していた変わり種だ。

その後種々の職を転々とし、5年前にデビュー。〝似顔絵4コマ〟であり、一見高橋春男に似ているが、その世界は本質的に異なる。例えば高橋春男に、タレントが自らを描かれても、まず怒る人はいまい。しかし小槻の手にかかると、カットを見れば分かるように、石野真子もこのザマ。

そこには明らかに小槻の〝悪意〟が存在する。良い言葉で言えば〝批評性〟だ。『まんが笑ルーム』ではよく政治ネタを描いているが、なかなかシンラツ。読む者の心を刺す。このいわば小槻の才能が、逆に彼をメジャーにしない。

いがらしみきおの〝ネ暗〟に通ずる部分も、彼にはある。だが見た通り絵は明るい。このアンバランスを、僕は非常に高く買うのであるが、居心地の悪さを感ずる人の方が多いらしい。「ケッ！ こんな酒飲む暇もねえ4コマブームなんか、早く終わって欲しいね。日本も不沈空母ンなって、戦争でもしてなくなれっつうのヨ」

月産80枚。ブームは4コマ漫画家の多くを、表面的には〝無欲〟にしている。

（『ギャルトピア』'83・6）

段・玲児

年齢出身地ともに不詳。エロ劇画界にはそんな得体の知れない連中が、多数いる。筆頭が、猟奇性を帯びた暗いSM劇画で知られる、段・玲児氏。年齢は40代の前半とも言われるし、「いや、奴はもう50にはなってる」と言う編集者もいる。

エロ劇画界の嫌われ者として有名な、ラッシャーS氏（29歳）も50代説の有力な証言者。「以前一度だけ飲んだことあんだけど、何でも銀座のゲイバーに、知らないで勤めてたらしいぜ。そこでよォ、ベトナム帰りの米兵を相手にしてたんだってさ。段さん持てたらしいぜ。尺八くらいまでしかやらせない店だったらしいけど、凄く持てんでマスターに呼ばれたんだって、マンションに。そしたらそこでマスターに掘られちゃったんだってから、怖い話だよ」

にわかにはS氏の話は信じかねるので、筆者は江古田に住む段氏の自宅を訪ねた。氏は体重百キロ近い巨漢で、白髪混じりのゴマ塩頭。驚いたのはホラ吹きで知られるS氏の証言が、ほぼ事実だったこと。今はないその店は、三島由紀夫の小説、「禁色」のモデルにまでなったという。ベトナム戦争、三島由紀夫、いずれにしても古い話だ。ひょっとして50代説は本当？…と思い問いただしても、プライベートは一切黙秘。一昨年結婚した、30代前半らしい奥さんと微笑み合うばかり。

デビューは6年前で、数年前に廃刊になった芳文社の『漫画ルック』。既にSM物だったというから、氏のアブノーマルな世界に対する執着には年期が入っている。「本当はただのSM劇画じゃなくって、もっとフリークっぽい、ドロドロした世界を描いてみたいんだけど、暗すぎるって、編集の人が許してくんなくて…。ホモ!? もちろん興味ある素材の一つですよ」

本来は油絵を描きたくて、美術学校にも通っていたらしい。尊敬する画家はエゴン・シーレ。段・玲児というペンネームを逆に読むと…ホラ、お気づきかな。そのくらい尊敬するだけに、数カ月前に封切られたシーレの伝記映画（『エゴン・シーレ／愛と陶酔の日々』）のヒドイ出来には、ガックリしたとか。

一時のロリコンブームの際は仕事量も減ったらしいが、今はまた『漫画アイドル』、『漫画コブラ』、『漫画エキサイト号』等で大活躍。確かにそのグッグツした世界は、パッとした人気を得る作風ではないが、逆に一番一般大衆に好まれる、シブトさも秘めている。そんな氏に、徹底したフリーク物を描かせる、勇気のある編集者が現われるよう期待したい。

（『ギャルトピア』'83・8）

富田茂

少年誌で活躍している師匠の元でアシスタントをしながら、エロ劇画誌でデビューした劇画家は数多い。しかし彼らは、その過去を余り語らない。田舎の両親にも、仕事の話は一切しないという者までいる。悪事を働いているわけでもなし、もっと堂々として欲しい。

こんなコンプレックス（少年誌への未練が捨て切れてない）を持つエロ劇画家連中の中へ、〝そんなヤワな根性じゃ、キンタマおっ立つエロ劇画は描けんぜ〟とばかりに乱入、アッと言う間に〝帝王〟とまで呼ばれるようになったのが、富田茂。

富田自身も矢口高雄のアシスタントを数年経験してる。本当は少年誌で描きたいのかと問うと、キップのいい言葉が返って来た。

「少年誌!?　カラッキシ興味ないね。俺も矢口さんの所にいたから、あの世界のことはそれなりに知ってる。大人から見た理想的な少年像みたいなのが、まず求められるわけよ。映画で言や『E．T．』みたいなのがね。今の俺にゃ興味ない。とにかくSM劇画が描きたいわけよ、ハンパじゃないのをね。フッフッフッ」

〝ストロング・スタイル〟とも言える、富田のエロ劇画に対する姿勢は、他の劇画家にも強い影響を与えている。「富田さんの登場で、気持ちがふっ切れたね。この仕事で飯を喰ってるのに、犯罪者意識みたいなのが前はあった。けどあの人の仕事への取り組みを見てると、こんな宙ぶらりんじゃ駄目だ…と思ってね」こう語るのは富田にあと一歩で迫る勢いの、三条友美。一部ではあるが被害者もいる。「富田さんとか三条さんとか、ヘビーなタッチの人が人気出て来たでしょ、去年頃から。俺なんてハンパな少女物でしょ。ロリコンブームのおこぼれで喰ってたのに、まいっちゃうよ。あんなハードな画家の星〟、やまだのら。ともかく富田の登場で、ロリコン派のハンパな部分が総崩れになったのは事実。

この異才、劇画だけじゃ満足出来ずに、『ウルフ』なるエログラフ誌では、モデルさん相手に緊縛、浣腸としたい放題。決して美しいとは言えぬ、自らの肢体もフルオープン。噂では、モデル嬢と本番もしちゃっているとか。いやはや。富田にだけは、さすがに嫌われ者編集者で有名なラッシャーS氏（29歳）も、「御立派!!」の一言。

まだ31歳の富田茂は、劇画だけを描かせておくには、何とも惜しいキャラクターの持ち主である。

（『ギャルトピア』'83・10）

榊原隆

エロ劇画家には異常な程のド助平人間か、カチンカチンのド真面目人間しかいないというのは常識だが、後者の代表格が、今回御登場願う榊原隆だ。劇画の方は見ての通り、愛液と汗がグッチョングッチョンの、インポ総立ちといったいやらしさ。

しかし私生活に一歩戻ると、エロのエの字とて縁のない市民に早変わり。広島の生まれで当年35歳。6つ年下の美人奥方と、2人の子供に囲まれた彼にとって、最大の楽しみは加入する宗教団体の集まり。「劇画家って世界が狭くなりがちなのね。仲間同士で集まって編集の悪口言ったり、こう何ていうか広がりがない。その点、俺

の入っている宗教の会合に行くと、色んな職業や年齢の人とつきあえて、勉強になるんですヨ」
次に楽しみなのは、広島カープのテレビ観戦らしいが、何せ今年はあのテイタラク。声も湿りがち。デビューは6年前で、『週刊漫画別冊』（芳文社）。実際の事件を素材にした物だったそうだが、既にエロ度も強烈だったという。数年後、海潮社（『漫画エロジェニカ』等の発行元）の倒産では50万も引っ掛かって大災難。
しかし今や、『漫画セクシャル』、『漫画大官能』、『漫画バンプ』等で、月産80枚前後はコンスタントに執筆。どの雑誌でも看板作家として扱われており、巻頭作品が多いのも榊原の特徴。冒頭でも述べた通り、確かに彼の絵のグチョグチョ振りは読者受けしそう。だがよく読んでみると、ストーリー、構成、キャラクター等は、いささかセンスが古くなってないか？　特にストーリーはかなり御都合主義。リアルな絵で異常な迫力があるからこそ、以上のような弱点もまた目立つ。
そこらを毎回御登場願ってる、この道7年のエロ劇画界の嫌われ者編集者、ラッシャーS氏（30歳）に証言してもらおう。「フッフッ…相変わらずのトーシローの発想だ、ケッ。お宅さ、エロ劇画買う読者がよ、〝ゴルゴ13〟みてえなストーリーや、ヴィヴィッドなキャラクターを期待してると思ってんのォ？　要するにセンズリかける絵を欲しがってんだよ。榊原の濡れ場の構図の特徴は、センズル人の立場で描写されてること。女の側が主導権を取ってる体位も圧倒的に多い。つまりよ、マザコンぽい、モラトリアム人間の多い近頃のガキに一番受けるってわけ。ストーリー性なんか、高坂幸雄みてェなうまいのが他にいるからいいのよ。わ〜る!?」
何人かのタイプの違う劇画家が、一つの雑誌をつくってるのだが、榊原の役割は、先制攻撃のミサイルに似た所があるらしい。なお、エロ劇画家の支持政党は、日本共産党と公明党とで二分されてるとか。

（『ギャルトピア』'83・12）

杉作J太郎

4コマ漫画ブームの衰退と共に、エロ劇画誌にもページ物のギャグ漫画が、少しずつ目につくようになった。とはいえ、所詮はエロ劇画誌にとって、ギャグは刺身のツマ。メンバーもだいたい決まってる。
スノウチサトル、高井研一郎（この人は4コマ、ページ物の両刀使い）、そして近頃、一部で注目されつつあるのが、杉作獣太郎（後に杉作J太郎と改名）。まだ若干22歳で、駅弁、いや駒沢大学の4年生。愛媛は松山の出身で、本来は芸人志望。『笑ってる場合ですよ』にも出演したとか。
しかし2日目にして早くも落第。己れの芸人としての才能に見切りをつけるや、早速ギャグ漫画家を目ざした（4コマブームの最盛期に時が重なる。杉作の安易な転身には驚くばかり）。『漫画ラブトピア』に持ち込む。これは幸いであった。なぜなら同誌の宮本正生編集長（現コミックハウス社長）は、〝仏の宮本〟とも呼ばれる、ソフトタイプの切れ者だったからである。デビュー開始だ。
そこで『漫画カルメン』、『漫画パーキング』を紹介される。両誌の編集部では、ギャグ漫画家としての才能ではなく、奇妙キテレツな人格の方を買われ、雑文の注文を受けて好評を博す。むろん本業のギャグも、他のエロ劇画家が急病になった際には、時たま描く。
絵の方であるが、一見すれば分かる通りかなり下手だ。むろん二見した所で上手く見えるような、奥行きのある絵ではない。さらに、コマ割りや、構成などもムチャクチャ。劇画界の嫌われ者編集者として知られるラッシャーS氏（30歳）など、イチベツするなり、「ヘタヘタ漫画としか言いようがない！」と、タンと一緒に吐き捨

てたほど。

「しかし…」と、S氏は次の発言をするのも忘れなかった。「あの野郎は結構売れる。なぜなら、奴は自分の絵がド下手であることに気づいてるからだ。それが絵に出ている。読者ってこういうことに敏感なのよ。奴がよく描いてる雑誌に載っとる、マディ上原、西秋ぐりんなんかの、いわゆる〝計り売り4コマ漫画家〟とは、そこが根本的に違う。ただ、自分の下手さに素直なだけじゃ駄目。彼にゃ、それプラス〝分裂病的ギャグ感覚〟という特技がある。サザン・オールスターズの歌詞みたく、ワープすんのはギャグの一般的特徴だけど、他の漫画家みたいに、垂直的にワープすんじゃねンだ。杉作の漫画は水平的に、同時多発的に笑いが爆発する。そんな漫画に構成力を求めても無駄。読者は読みたいコマから読みゃいいんだ」

本人にS氏の意見を伝えると、「好きな寺山修司の影響かも」と、ニヤリと品なく笑った。しかし筆者の眼には、氏のギャグも絵も、どう見ても便所の落書きにしか見えないのだった。

（『ギャルトピア』'84・1）

早見純

「日本は法治国家か?」とは、毎朝新聞に目を通す度に、誰もが一度は感じることだろう。確かに、今回取り上げる早見純の、『これが芸術だ』（一水社・500円）のようなド悪書がバッコして、全国の青少年に害毒をまき散らしてる現実を見ると、稲村佐近四郎が野口英世のように思えてくるし、横手文雄の上さんの新聞配達も、「御苦労様!」と一声かけて手伝いたくなる。

とにかく悪質だ。編集兼発行人に多田正良とあったが、〝赤〟に違いない。でなければ、日本人の皮をかぶったソ連人である。いかにこの不逞の輩が、チェルノブイリの原発事故並に、我が国の明日をになう青少年の心を汚染してるか、具体的に検証してみたい（著者の早見は、筆者の調査で完全なソ連人であることが判明した。さらに驚くべきことに、祖父の代には赤化中国人の血さえ混入している。幾代にも渡る血の汚れが、日本人としての魂を捨て去るだけでなく、容共思想を流布するという、恥ずべき行為に走らせたのである）。

まず「血の除膜式」なる作品は、5～6ページ読むだけで日本人なら必ずヘドを吐く。病に伏してる少女の家に、同級生の男が見舞いに行く話だが、少女の脚は両方切断されている。包帯こそ巻いてるものの、変態学生はその脚をペロペロ。

少女までがそれに応じ、野郎のキンタマをシャブリシャブリ。その間、引用するのもはばかられる会話も交わす（少女が、野郎の糞まみれの尻の穴を舐めながら）。「岡くんのは何色なの?」「え?ああ黒色が多いな」「まぁ!」「今度は見せ合おうよ」「ええ」恐るべきハレンチ!!

ムクな青少年達が、キンタマやベッチョ、さらに穴に事欠き、肛門まで舐めるという、犬畜生にも劣る行為を真似したら、彼らの肉体は一体どうなる? お国に捧げるべき肉体は、内側より赤く腐り始めてしまう。

「純の暗い情熱」なる作品になると、赤化度はより増す。主人公の学生（またもだ。学生は全て変態であらねばという、マルクス主義特有のプロパガンダの実践であることは、読者も既にお気づきかと思う）は、電車にひかれて死んだ女性の片脚を、コッソリ家に持ち帰る（事故が、赤色暴力集団の国労の仕業である点は、故意に隠されている）。

部屋には盗んだ物らしい、女性の靴が山になっている。しかしそれには見向きもせず、生身の片脚を、キンタマにグリグリ押しつけてハーハー。次にハイヒールのとがったカカトを、自らの肛門に突き刺して目をトロン。容共的異常思想の、極致とも言うべき痴態で

ある。
賢明なる読者は、このソ連人エロ劇画家の悪魔の如き遠大な野望に、戦慄を感じ始めてることだろう。つまり彼は、健全な青少年達の旺盛な性欲を、変態人間の側に引きずり込むことにより、我が日本男児の生殖能力を、根絶せんと画策しているのだ。〝進め一億火の玉だ!!〟の精神は、芽のうちから赤の手によって、日々朽ち果てされつつあるのだ。

しかし私は見逃さなかった。一見日本人のように描かれているが、この悪書に登場する人間は全てソ連人である。カツラでゴマかしてはいるが、まごうことなき露助共である。全国の若者が、赤色集団のこのような稚拙なトリックに引っ掛からぬよう、切に祈るものである（ハーハーハー）。

（『漫画スキャンティ』'86・7）

赤星ジュン

読者が想像するより概して地味なのが、ポルノ産業の現場。ただビデオ、グラフ誌等では、何だかんだ言っても、生身の女の裸は必需品。それなりに色気もある。が、色気どころかグロテスクだとさえ言われてるのが、エロ劇画の制作現場。

注文する編集者も、引き受ける劇画家も9割が男。早い話、内臓を安酒で痛めた顔色の悪いハードゲイコンビが、少女や女子大生が1ページおきに悶える、エロ劇画誌を作っているのだ。〝妄想純度〟の最も高い世界と言えよう。

だが、女流エロ劇画家も皆無なわけではない。ベテランではさがみゆきが有名だが、いささか絵、ストーリー共に古く、第一線級とは言い難い。4～5年前に最盛期を迎えた羽中ルイ、やまだのらは、名前こそ女流っぽいが正真正銘の男。

そんな男臭い世界に2～3年前から、彗星、いや天女のように登場した女流劇画家が、沢木あかね、そして赤星ジュンだ。沢木は早稲田の漫研出身で25歳。絵柄はギャグっぽさも濃厚に残しており、雑誌の看板にはなりずらいものの、少ページ数ながら各誌に色を添えている。こんな沢木をエロ劇画界のお茶くみとするなら、赤星ジュンは専務くらいまでは出世しそうなサラブレッドだ。

中学校の英語教師上がりで、現在29歳と言われる赤星の劇画の最大の特徴は、とにかく意味が分からないこと。1回読んで分かるのは作者本人くらい。2回目には概略くらい分かったような気がする。でも幾つか疑問が残るので、さらにもう1度読んでみると、2回目に読んだ時には死んだはずの男が、最後まで生きてたりする。〝エロ劇画界の女埴谷雄高〟と称されるゆえんだ。

しかし、単に構成力、ネームづくりの未熟さ等からなる難解さなら、人々はたちまち放り出す。が、奇妙なことに、赤星の世界は再読、あるいは再々読を強いずにおかない。これは多分、赤星自身が自らの生理に99％忠実な劇画家だからだ。不可解な感情をそのままの状態で絵に託している作者の素直さは、決して読者の反発を招かぬものなのだ。

成熟という言葉の下では生き長らえぬ、変声期前の少年の声にも似た、危うい世界に生きる女流劇画家なのだ。

（『ぺあ』'83・12）

吉田昭夫

定価300円で月刊、そしてエロを売り物とする劇画誌の総数を、物好きが数えたら約70誌あったとか。それが春先の話。8月に入ったらもう6誌が廃刊です。『漫画ラブセブン』、『劇画パニック』、『漫画ライブ』、『漫画セクシカ』、『漫画アルタ』、それに、誌名不詳が一誌。

なるべくしてなった物ばかりで、一向に惜しむ声は上がらないと

か。ならばと『劇画パニック』の編集長（山崎邦紀）が、〝廃刊パーティー〟を自ら企画した所、同業界の編集者がドッと集まった。どうやら自分達の先行きの不安を、こんな所で解消しようという根性らしい。他誌の有望エロ劇画家と知り合おうなんて、セコイ思惑の編集もいたのですが、どだいこの糞暑い中、そんなパーティーに超売れっ子が集うはずがありません。畑中純、近藤よう子、つか絵夢子等、キラ星（!?）のような芸術漫画家を前に、「ボ…ボク先生のファンです」と、マヌケなことを言ってた連中ばかりというから笑止。

今回はエロ劇画家さんではなく、表紙のイラスト担当の、ブラシの絵描きさんについて。この世界は第3の男が現われぬと言われ続け、6～7年たちます。現在トップを走るのが吉田昭夫。月に10誌近くこなし、女性をメロウなタッチで描かせると右に出る者はいません。一昔前まではそのメロウさが、「インパクトを欠く」とも言われたそうです。『漫画チャイム』、『劇画デカメロン』、『スーパーコミック』、『漫画バンプ』等で活躍。

2番目を走るのが西岡保之。いや歩くと言う方が正確でしょう。この人は注文があるのに仕事をしない。リアルなテクニックでは吉田昭夫をしのぐと言われながら、現在月にたった4誌。「ブラシが嫌い」と平然と言ってのけもします。『漫画キック』、『漫画エマニエル』、『漫画カルメン』、『漫画エキサイト号』で全て。

むろん、第3の男の候補者は何人も現われました。石川五郎はその筆頭ですが、仕事量が増えるのと比例して画質も落ちるので、評価がイマイチ。依頼を断われない性格のためか、廃刊誌に関わることも多く、冒頭に紹介した6誌のうち、半数は彼の担当。

しかし、絵描きさんが依頼を拒めないのも分かります。表紙は一枚、最低の所で6万。10万は普通です。これを器用な人なら、1～2日で描き終えてしまう。「俺もブラシが出来たら…」エロ劇画家にこの話をすると、誰もが口を揃えます。

（『ぺあ』'84・10）

諸川拓

努力は昔から報われないと相場が決まっていますが、エロ劇画界はその点捨てたものではないとか。もちろん、直線も曲線も引けないようでは問題外ですが、「女の顔が多少カワユク描ければ、たいていの人はプロになれる」と、あるエロ劇画誌編集者が秘訣を話してくれた。

「メジャーと違って、読者がまずストーリー性を求めない。当然、キャラクターの奥行きなんて不用。要は女のコのカワユサ。これが第一。あとは濡れ場が描ければいい。これもほとんど裏本からの模写。スクリーントーンを大量に使い、少し時間をかけりゃ、たいていの奴は描ける。つまり努力した者が、報われる世界なんだよ」

少しオーバーな気もしますが、1にカワユサ、2にスクリーントーン、3、4がなくて5に時間…てな面はあるようです。これが売れっ子の条件ですから、引っ繰り返せばマイナーの条件に。

諸川拓（もろかわ拓とも名乗った）という劇画家がいます。デビューして3～4年たちますが、一向にウダツが上がりません。一時乱作してペンが荒れてましたが、近頃はまた一本一本テイネイな仕事をしています。諸川が売れぬ理由は簡単とか。1に女のコがカワユクない、2にスクリーントーン不足、3にどうでもいいのに、ストーリーが面白い。これだけだそうです。

3つ目など長所のはずなのに、エロ劇画界では欠点扱い。「そんなもん考える暇があんなら、いい構図の裏本めっけるか、トーンの一枚も余計に貼れってのヨ」と前述の編集者。暴論です。そもそも、カワユクない女のコ、線中心のタッチこそが、諸川の諧謔的ストー

リー作りの根幹なのですから。

根本敬を持ち出すまでもなく、自虐趣味は商売になりますが、やや生意気な諧謔趣味は、下向志向も内に秘めてるせいか、銭になりません。センズリ読者はもとより、諸川のウダツは当分上がらないでしょう。

いや、永遠にかも。そのくせ少しでも努力を怠ると、屈指の下手さで有名な、小鈴ひろみクラスにまで落ちかねない、凡庸さも見え隠れします。悪い星の下に生まれたエロ劇画家なのですね。

(『ぺあ』'85・2)

矢島みのる

才能と金はいくらあっても重荷にはなりません。しかし以前に乱真澄を取り上げた際、妙に才能ある奴はエロ劇画家として大成しないと、安良城考を例に述べた記憶があります。その後も、奇人振りで知られたすぎうらあきとが姿を消しました。絵のうまさはもちろん、鋭利な刃物を思わせる、独特なネームづくりで鬼才振りを発揮しましたが、自信過剰の果てに、サラ金地獄のドロ沼に身を投じたのです。

つい半年前、『漫画セクシャル』でデビューした矢島みのる(後の細馬信一)の作品を初めて見た時に思い浮かべたのも、その故事。文字通り、ハッとするくらい鮮烈な個性的少女と男。それも、今街中をノシ歩いてるであろう、チンピラ少年達の描写が実にリアルでした。リアルなのは表面的技巧にとどまりません。視線をメインとした繊細な処理による感情の起伏の表現が、これまた巧み。トドメを刺すのが背景テクニック。どちらかといえば劇画的とは言えず、素人臭さもプンプンしてますが、各作品における登場人物達の心象風景が、シックリ投影されているのです。

以上は生来の才能の分野に属することで、努力して誰もが得られるわけではありません。ただ全くアシスタント経験がないとも思えず、『漫画セクシャル』の女編集長、吉田薫さんを訪ねて実像を尋ねてみました。驚きました。アシスト経験がないどころか、現在は中国地方の某鉄道会社勤務。夜シコシコ描き、同誌に投稿したのがキッカケとか。「だから私も一度も会ってない。いつも電話。今は『スーパーコミック』の方でやってもらってるけど、先が楽しみだそうです。

ネームや構成には難点がありますが、彼が大器なのは間違いありません。各誌に雑巾みたいに使い捨てにされず、着実に伸びてもらいたいもの。そう言ったら吉田編集長の隣りにいた、アバタヅラ編集者がニヤつき一言。「使い捨てにされるような奴は、最初からその程度の才能なの。各社の海千山千編集者間を泳ぎ切ってこそ一流。矢島にはその才能がある。アンタみたいにセンチな男が編集長やると、本を廃刊にするだけじゃなく、有望新人を片っぱしからつぶすだろうよ」………。

(『ぺあ』'85・4)

ダーティ松本

最近一番ガッカリした映画が、『マッドマックスサンダードーム』。ジョージ・ミラー監督の映画で居眠りをしようとは。これは一作二作の出来が良かったため、観る側が過剰な期待をしたためですが、エロ劇画誌の中には、ハナっから期待出来ないインポ名柄が結構あります。

メーカー名で言えば、サン出版、日本出版社、辰巳出版、白夜書房の物で、各出版社がグラフ誌類にのみ金と人材を注ぎ、エロ劇画誌はアリバイ的に発行してるだけのためにアナクロ化しているのです。『劇画悦楽号』(サン出版)は典型。沢田竜治、保谷良三、片

桐七郎、福原秀美と、偉容を誇る超ロートル劇画家陣にはめまいが。エロ劇画界にも、社会福祉の波が押し寄せて来たのは御同慶の至りですが、老害のため影の薄い内山亜紀、沢木あかねには同情します。

しかし同誌も、一人だけ注目すべき人を起用しています。ダーティ松本です。「斬姦狂死郎」と題された読み切り連載シリーズは、彼の物としては設定、話の展開も分かりやすく、お得意のキャラクターづくりも相変わらずのサエで、扉に「エロ劇画の常識を破る、スーパーヒーローが遂に登場!!」と謳ってあるのも、あながちハッタリとは言えません。

古い人です。『漫画エロジェニカ』の頃から看板作家でした。一時影が薄れかけましたが、近頃は月に4本は必ず見かけます。キャリアのみピックアップすれば、いわゆるロートルの側なのですが、古さを感じさせないのは、線が、特に人物の描線が、依然シットリと濡れて色気を失っていないから。

10月号に同時執筆している、片桐七郎のひからびた線と比較すれば一目瞭然。が、〝濡れた線〟を持続するのは大変。〝SMの帝王〟富田茂も、昨今は湿気を失って来たようですし、『エロトピアデラックス』で時たま見かける石井隆に至っては、竹ペンタッチとでも言うべき無惨さですから。

唯一の難点はエロ描写センスの古さ。ダーティ自身がその点を克服、編集部もロートル陣を一掃したり、下らぬ記事や読者欄を全廃、「斬姦狂死郎」の大増ページを図れば、『悦楽号』はバンバン売れるでしょう。

（『ぺあ』'85・11）

阿宮美亜

天下の講談社のエロ本作戦には、目を見張るものが。『PENTHOUSE』、『スコラ』は言うに及ばず、『オレンジ通信』も真っ青な『BUNTA』、遂にはエロ劇画に的を絞った、『コミックスコラ』の創刊です。2号目までに和気一作、乱真澄、沖圭一郎らが堂々のドエロ劇画を描いており、修整も少なくやる気充分。

儲かると知りながら、芳文社、双葉社、少年画報社らのコミック系二流成り上がり出版社が、成金特有のミエで指をくわえていたのに比べ、そのドン欲さには感心します。唯一、『漫画ボン』という老害エロ劇画誌を擁する少年画報社にしても、世間体を考え系列の大都社発行にしてる程ですから、成金の心理たるや複雑かつ笑止。

とはいえ、既存のエロ劇画誌の編集者はあわててる様子。何しろ原稿料を、最低でも1ページ1万5千円から2万円出してるらしいのです。8千~1万円が従来の売れっコの上限と言われてましたから、〝ニィバ～イ〟です。しかし当然です。エロ劇画誌の原稿料は、10年前から据え置き。一誌あたり、100万~150万円が平均と言われ、ページ5千円以下の劇画家も珍しくない、タコ部屋業界なのです。一方でエロ本出版社はビルを建ててるのですから、講談社の殴り込みは、生き血を吸われてたエロ劇画家には朗報。

さて、有望な女流エロ劇画家が誕生したようです。『漫画エキサイト号』、『漫画スキャンティ』で連載中の阿宮美亜（あみやみや）です。長野在住で信州大学中退の、只今23歳の変わり種とか。デビューは今年初め。最初はいがらしみきおを崇拝、4コマを描いてたのですが、ブームの凋落を見てエロ劇画に転向したとか。

ほとんどアシスタント経験のない彼女は、全てが見様見真似。三条友美をベースに、時々大友克洋らのキャラクターもパクっていて笑わせます。しかしナイーブでいて力強く、同時にシットリと湿り気を帯びた彼女の線タッチは、近い将来に模倣の域をおのずと脱するでしょう。

稿料の方はまだ5千円クラス。当然喰えません。「頑張れコーダ

ンシャ！」の口とか。内部の人間がこんな調子では、50誌体制と言われるエロ劇画誌の半減、あるいは3分の1化は、いよいよ秒読み段階に入ったのかも。自業自得。喜ばしい限り。

（『ぺあ』'85・12）

ケン月影

めっきり目にしなくなったのが、裾の広がったジーンズと、時代物エロ劇画。かつては木村仁、若山ひろし、石井まさみ、臣新蔵、九紋竜、ケン月影らが、一大勢力をなしていましたが、現役はほんの数人。石井、九紋は時代物と縁を切って生き延びましたが、木村、若山に至っては、往年の活躍を知る人もいません。ちなみに筆者は、民俗学者、宮本常一の世界を思わせる、コエダメの臭気に満ちた若山の、〝農村エロ劇画〟の隠れファンでした。

　結局、時代物で現役なのはケン月影ただ一人。生き残ったという言い方も、妥当ではありません。『漫画ボン』や『劇画デカメロン』等、銭を出すので有名な雑誌で、華々しい活躍振り。いわゆる1ページ1万円以上取る、〝万札エロ劇画家〟と考えて間違いないでしょう。当然、なぜ彼だけが生き残ったのかという、素朴な疑問がわきます。

「世の中全て、需要と供給の関係。ケンが残ったのもそのため。他の連中が脱落したせい」と誰もが考えますし、そういう面があるのは僕も認めます。しかしそれではなぜ生存者が、いや堂々生存万札劇画家が、ケンだけなのかという説明にはならない。忍耐心なら、彼よりありそうな連中が腐るほどいました。前出の他にも、藤生豪、片桐七郎（現代物に転向したが、線が結局は時代物のために苦労している）ら、その死体累々たる様は、文字通りエロ劇画界の二〇三高地なのですから。

　ケンが残ったのには、個別的理由があります。〝エロ心〟を知ってたことが基本ですが、技法的に言えば常にマスをかく側に立って描く、親切心があったからです。昨今のエロ劇画は、即ファックシーンに移りますが、彼の作品はそれに至るまでのシーンが実に入念。〝クイクイ〟というヒップの躍動から始まる描写は、劇画自体の構成を不自然にしてまで、読者が抜きやすいアングルで満ちています。〝男まさりの女〟を常に主人公に据えたのも、マザコン世代に受けた理由。

　ここから、一つの事実が明らかになります。時代物エロ劇画はケン一人が生き残ったのではなく、時代物の器で現代のエロを描き得る鬼才が、現在も活躍中だということです。エロ劇画界の、あるいは〝必殺シリーズ〟なのかも。

（『ぺあ』'86・5）

南日れん

場違いな奴はどこにでもいる。先日も「元禄寿司」で職人さんに、「オアイソーッ!!」とがなりたて、「いいネタ使ってるね」と付け加えたオッサンを見た。全ての場違い人間がそうであるように、好奇の視線にも一向に動じない。可哀想なのは話しかけられた方。目を白黒させながら、「すいません、お会計はアチラで…」と、飯つぶだらけの手で出口をオズオズ指差した。

　エロ劇画界にも当然いる。いわゆる、〝マニア受け〟するタイプの人々だ。産業的に隆盛を誇っていた6～7年前までは、必ず各誌に1人か2人はこのタイプが執筆していたので、特別に目立たなかった。だが、総数が50誌を軽く切り（3～4年前は70誌以上あった）、今では、彼らの突出した場違い振りは、異様でさえある。

　影中白葉、永田トマトが双璧だろうが、今風のロリコン的臭気の

ある御両人より、70年代初頭ムードに未だドップリ浸っている南日れんの方が、場違い指数ははるかに高い。
　僕の知ってる範囲では、彼は『スーパーコミック』と『デラックスエロトピア』でしか描いていない。当然だろう。このタイプの絵でオナニーにふけられるほど、最近の若い連中は想像力が豊かではない。多少毛色の変わった奴が、スペルマはともかく、知的オナニーとやらを試みんと、ティッシュを脇に置いて熟読したとしても、数ページ読んで吹き出すだろう。「クセー話!!」と吐き捨てながら。
　湿度の低い乾いたタッチの絵だから、本来エロ向きではない。無論、起用側も承知しているだろう。だとしたら、編集者は彼に何を求めてるのか？「毎日が欲情」という、『スーパーコミック』7月号の作品の内容はこうだ。倦怠夫婦の妻が家出。そこで夫はマンションの上階の女をレイプ、久々に興奮する…と思ったら夢想で、また妻のグチを聞く日々が始まるというお話。
　何百回と他のエロ劇画家が繰り返して来た話を、ただなぞってるだけだ。コマ割りの妙味も皆無。南日の場違い振りの背景には、編集者の文化事業意識の欠如ではなく、産業的衰退から来る、彼ら自身の職業的無力感のみが漂っている。

（『ぺあ』'86・9）

山口花子

　ワープし切ったストーリーづくりで、読者の頭を混乱させながらも、根強いファンを持っていた赤星ジュンが休筆宣言をし、各誌の編集者をあわてさせてるそうです。某社（東京三世社との噂）の単行本の書き下ろしに専念するのだとか。ライフワークのため、生活苦もいとわぬ決意らしいのですが、「大丈夫？」と御節介な懸念も。商業主義との軋轢(あつれき)の中で秀作を生み出してた人が、自由と時間を得たとたんにズッコケた例は、枚挙にいとまがありませんから。書き下ろしの単行本が、中島貞夫がＡＴＧで撮った『鉄砲玉の美学』や、同じく森崎東の『黒木太郎の愛と冒険』にならぬように祈りましょう。
　教員上がりの赤星が、良い意味での大学の漫研の臭気を売り物とするなら、山口花子は土着の香り消えやらぬ、集団就職派の屈折した心情を漂わせています。絵の線自体はよく見ればシャープなのですが、全体的な印象はかなりドロドロしたもの。これは一般に女流エロ劇画家が苦手な面と言われ、赤星や深倉街子、沢木あかね、古株のさがみゆきらに比べても傑出しています。
　ドロついてるのは絵柄だけではありません。ストーリーがこれまたグチャグチャで、湿気度１００％。ドロついた絵柄と、ねばっこい陰気なストーリーが納豆状になっているのですから、胃弱な人は読む前からゲップ。この陰湿な粘り気は、一体どこからわいて来るのでしょう？
　超寡作な山口ですから、作品はお目にかかるだけで大変。しかし〝在野のエロ漫画研究家〟を自称する筆者は、意地になってデビューした『漫画オリンピア』から、連載中の『漫画娯楽館』まで、作品を追い求めました。読み終えた時、一曲のナツメロが口をついていました。〝花よキレイとおだてられ〜♪　咲いて見せれば〜♬〟
　怨念…懐かしい言葉。この70年代初頭の心情が、彼女の描く女達が男に抱く思いの、基調となっているようなのです。カラリと嫌なことは忘れる気質が尊ばれるこの国では、エロ劇画さえ臭い落ちと共に見事に完結しがち。最終ページを読み終えた後も、粘液質の分泌物が脳に糸を引く山口花子のしつこさは、落日のエロ劇画界にカツを入れる凄味があります。

（『ぺあ』'85・6）

エロ漫画界裏通り①

〝ヒンシュク売ります。ケンカ買います。闇夜の道は気をつけます〟（日立市・水原一城作）のモットーで有名な、〝亜流誌の本格派〟『ロリタッチ』（毎月27日発売・５００円）のファンの皆様コンニチハ。塩山でございます。『ロリポップ』（毎月12日発売・５００円）の沖田翔二クンと、左足で遊ぶのも飽きちゃった所へ、本誌からお座敷がかかりました。アチコチに顔を出すと、〝だるま編集者〟なんて言われそうだと少し心配しましたが、本誌の編集長、松本博にも若干の義理があるため、引き受けざるを得ませんでした。ＯＫしたからには、毎月絶対〝ヒンシュク売ります!!〟。

事情を知らない読者の中には、なぜ『ロリタッチ』がそれほどのヒンシュク誌なのか、分からない方も多いと思います。書店で両誌と見比べてもらうのが一番いいんですが、念のため表紙の写真を掲載します。良く似てますねェ。判型、ロゴ、レイアウト、マスコットキャラ（ポップちゃんに対してタッチちゃん）、背の処理、おまけに台割順序までソックリ。こんな極悪非道雑誌見たことねェと、早速分身の術で肉体との離脱をはかった僕は、第三者の立場から塩山編集者にインタビュー開始。

「ええ!?　何ィその『ロリポップ』ってェ？　俺全然知らないよ。多分『ロリタッチ』が売れてるんで急遽つくった、真似っコ雑誌だと思うよ。多いんだよこの業界。というか、日本人の宿命だね。そもそも日本文化なんて本質的に猿真似で…」

分身、本体へ再び合体！　というわけで、自分で言うのも何ですが、この業界の人間の図々しさが、良く分かってもらえたと思います。「真似された真似された！」とピイピイ騒いでいる『ロリポップ』編集長にしても、所詮は『レモンピープル』や『漫画ブリッコ』の亜流の輩なのですから、問題は複雑というか、馬鹿らしい限り。

そんな折りに思い出すのが、かつて隆盛を誇ったエロ劇画誌、『漫画ラブトピア』の宮本正生編集長（今出てる『漫画ラブトピアスペシャル』は、似ても似つかぬクズ雑誌）。もう５～６年前になると思いますが、３００円エロ劇画誌が全体に落ち込んだ時、同誌のみかなりの売り上げを維持しました。で、早速僕は例の調子で、亜流誌づくりを始めたのです。

漫画家陣に関しては予算上対抗出来ぬので、やっぱ表紙オンリー。担当している『漫画バンプ』のロゴの中も、天から螢光ピンク、地からアイの各グラデーション。作品題名も従来の書体、ナールＤから、淡古印や曽蘭へフルモデルチェンジ。校正が上がって来た時は、我ながら顔が赤らむ（『ロリポップ』の編集長も、きっと似た思いだったのだろう）。

これを『バンプ』だけでなく、㈲遠山企画で引き受けていた数誌で同時に行なった。『ロリタッチ』を３～４誌同時に、あちこちの社でデッチ上げたと思えば間違いありません。沖田の翔二クンあたりだと、アワ吹いてブッ倒れることでしょう。

これに対して、宮本編集長がこう語ったと人づてに聞きました。「真似されるようになって光栄だ！」負けたと思いました。そこで、一層念入りに真似しました。そうこうするうちに、『ラブトピア』は売れてたにもかかわらず、天下の悪法都条例に引っ掛かり廃刊に。螢光ピンとアイのグラのロゴは、今や『バンプ』が元祖みたいな顔してますが、これが真相です。

（『漫画スキャンティ』'87・3）

エロ漫画界裏通り②

〝真似されるようになって光栄だ！〟とまで言い切った、太っ腹編集長宮本正生氏ですが、『漫画ラブトピア』廃刊後に辰巳出版を退社し、編集プロダクション、コミックハウスを設立。現在は『漫画スーパーエロス』、『ペンギンクラブ』、『ココナツパイ』等を各社より請け負う、青年実業家として大活躍。

一方我が〝個性的な亜流誌〟『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）に対し、普段認められたことのない善良な馬鹿特有の舞い上がり根性から、グダグダ泣きごとを腐れ業界誌、『COMIC BOX』に書き連ねていた川瀬某こと沖田翔二クンですが、相も変わらぬトリックスター振りで、ロリコン漫画界に活気を与えています。

この男がセコイのは昔から分かってました。我が亜流誌のフルネームも書かない。『ロリ○ッチ』と来る。宣伝になると思っちゃうらしい。そのせいか、自らの『ロリポップ』（毎月12日発売・笠倉出版・500円）で充分反論が可能なのに、よりによって腐れ業界誌『COMIC　BOX』あたりに泣きつく。

この腐れ業界誌もまた問題。一方の主張を勝手に、何の取材もせぬまま掲載しといて、〝反論スペースをあける〟と来た。アホかこの脳天カス!!　良心的なツラして漫画家を搾取してる、ド腐れ雑誌らしい図々しさ。

そもそも、この世の中何が楽しいと言っても、他人様の不幸とケンカに勝るもんはありません。読者にすれば〜マニア意識が強いロリコン漫画誌の読者ならなおさら〜、同業者間のケンカは〝江戸の花〟。つまり商売になる。そのネタを、誰がタダでダニ共に差し出しましょう。

腐れ業界誌、沖田クンの文章を一回目はちゃんと記事として掲載したのに、以降は『ロリポップ』（毎月12日発売・笠倉出版・500円）のPR欄だったり、他社の広告の空いたスペースだったりでムチャクチャ。将来、僕とこの腐れ業界誌がことを構える事態になった時、ダニ共は「あれは広告の一種だ」と、逃げを打つつもりなのでしょうか？

再び僕らの愛しい沖田クンのトリックスター振りに、話を戻します。最近、緑沢みゆきが『ツインアップル』という単行本を日本出版社（850円）から出しました。ほとんどが同社の『ペパーミント』に掲載された原稿ですが、少し分量が足りないため、作者の了解を取った担当編集者が、沖田クンに『ロリポップ』（毎月12日発売・笠倉出版・500円）に描いた何本かを出してくれと、連絡を取ろうとしたらしい。

ところが、いつ電話をしても留守。遂には緑沢本人の委任状を、ファクシミリで仕事場の笠倉出版に送ったのに、ナシのつぶて。結局発売に間に合いそうもないので、作者が偶然コピーを取っておいたものを使用したというから、開いた口がふさがりません。むろん原稿の著作権は漫画家のもの。出版社は、一回の掲載権のために稿料を払うにすぎません。何考えてんでしょう？

さらに笑ったのは、この〝下請け編集者のツラ汚し野郎〟は、『ロリポップ』（毎月12日発売・笠倉出版・500円）の使用原稿を、仕事場の笠倉出版社のビルから、わざわざ自宅に毎月持ち帰ってること。漫画家の財産を、これほど大切に扱ってる編集者は、きっと沖田クンだけでしょう。

（『漫画スキャンティ』'87・4）

エロ漫画界裏通り③

今世間で急増中なのが、さほど女性経験もねえくせに、勝手にエイズノイローゼになって悩んでる馬鹿野郎と、女流エロ漫画家の数。恥ずかしながら、僕はエロ漫画界に身を沈めて10年になりますが、かつて女流エロ漫画家といえば2人だけ。

まず、さがみゆきおばさん。おばさんと言っては失礼でしょうが、いつか原稿が遅れて、「娘がネームを持って行くので、駅まで迎えに…」との電話があった。さがさんはひばり書房等で活躍なされたベテラン。娘さんも小学生くらいにはなるはずと、改札口でウロウロしてると背中をポン。スラリとした美少女はもう高校生。おばさ

んで充分。
深倉街子女史は、今も芳文社などで活躍中ですが、やっぱり〝おばさんグループ〟。おばさんだから女流じゃないと言う気はありませんが、御両人らよりグッと世代、センス共に若返った、赤星ジュンが引退しちゃったり、沢木あかねが余り顔を見せなくなったのは、残念至極。
と思ってたらこの1~2年、計り売りしたくなるほど大量に、女流漫画家が業界をバッコし始めました。ロリコン漫画ブームが火をつけたのはいなめませんが、その前段階で一つの動きがあったのです。
まだ赤星や沢木が、現役でバリバリ活躍なさってた頃、『漫画娯楽館』(今の『漫画スマック』)に描き始めてもらったのが、山口花子女史。暗~い、懐かしの〝女の怨念〟が渦巻くエロ劇画を得意として、一部の通に人気の花子さんですが(なぜかギャグ派の阿宮美亜や、中森ばぎなが彼女の熱烈なファン)、かなりの変人。
電話があるのに絶対に出ないのはまだ分かるとして、心底寒い2月初旬の雪の降る日に、素足にサンダルばきで編集部に原稿持って来た時にゃビックリ。徹夜明けでノーメイクのせいか、かなり顔に凄味も。さらに驚いたことに、原稿を例の黒いゴミ袋に入れて胸に抱えている。「そ…それに入れてらしたんですか?」「原稿濡れると困りますから…」
当時編集部があったのはお茶の水。花子さんは中央線の奥また奥の日野。雪の日の中央線の車内で、黒いゴミ袋を抱えたサンダルばきの花子さんが、どの程度の注目を浴びていたのかは、想像するだけで震えが。
「山口さんの漫画ですけど、いっつも女性がレイプされてて、誰か見てるのに助けてもらえないってモチーフばっかり。あんだけ執着してる所を見ると、暗い幼児体験があったのかな?」と、自ら陰気な視線を神棚に上げて弁ずるのが、今や人気絶頂の阿宮美亜。技術的には、花子さんに比べて稚拙極まりない美亜嬢、ギャグ感覚が時流に受け、今や女成金への道を着実に歩みつつあります。ついこの間までは、雨の降る日の野良犬のように、ゴミ箱の残飯を漁っていたのですが。僕に骨つきの肉をもらった恩も忘れ、本誌3月号にとんでもない漫画を描いてましたが、いつか天誅が下るでしょう。
〝漫画家は生かすな殺すな〟。これが僕のかつての編集哲学でした。しかし、女流エロ漫画家急増の今は、〝女流エロ漫画家は古女房と思え。一度甘い顔を見せたら、一生しゃぶられる〟に衣替えしています。その契機になったのが、前出の阿宮美亜の太々しさ。次号では、美亜嬢の赤裸々な姿を暴く予定。ボッキして待て!!

(『漫画スキャンティ』'87・5)

エロ漫画界裏通り④

本欄のカットを描いてもらってる中森ばぎな嬢は、僕の編集している『ロリタッチ』(毎月27日発売・東京三世社・500円)の連載メンバーですが、本誌編集長の松本博によれば、「19歳のバージン」でもあるそうな。「エロ漫画描くような女が…」と、読者は信じられないかもしれませんが、こういう例は結構ある。同じ『ロリタッチ』の連載陣で、初の単行本『DATE OF THE DEAD』(東京三世社・700円)を出したばかりの樽本一センセは、23歳の〝童貞エロ漫画家〟として全国的に有名。
2人は本誌や低部数エロ劇画誌、『漫画ギャルトピア』でも仕事をしています。ある日2人は光彩書房(一水社)で遭遇、一緒の電車で帰るはめに。両名に取材した所、次のような会話が交わされた様子。
樽本「あ…あのばぎなさん、僕の漫画読んだことありますか?」**ばぎ**

な「全部は読んでないけど、だいたいね」**樽本**「うれしいなァ…。そ…それで質問が一つあんですけど、いいですか？」**ばぎな**「いいよ」**樽本**「あ…あのですね、僕の描いてる女性のオマンコって、正確です？　間違ってませんか、構造とかが。僕って本物見たことないもんですから、不安で不安で…。遊び慣れてる読者や漫画家が、僕のこと陰で笑ってるんじゃないかと思うと、ノイローゼになりそうなんです」**ばぎな**「………」

男顔負けの気丈なばぎな嬢が、沈黙してしまったのには訳が。2人が乗ってた山手線は、有楽町を過ぎたばかり。時刻は夕方の6時。帰宅ラッシュで超満員だったのです。柄にもなく赤面したばぎな嬢が、口を開いたのは東京駅のホーム。2人とも中央線沿線住まいのため、乗り換えで満員の山手線から降りたばかり。算数の問題を女教師に問う、小学生のような純な目をした樽本センセに、ばぎな嬢は高層ビル街の夜景を眺めつつ、こう答えたそうです。「ああいうシーンて、裏本と違ってカンジンな所は修整されちゃうでしょ。少しくらい間違ってても、気にすることないよ」

樽本センセがどう答えたかは聞き漏らしましたが、両雄相まみえる歴史的シーンに、立ち会えなかったのが実に残念。

先日筆者は、その〝処女女流漫画家〟ばぎな嬢と、新宿で飲む機会がありました（本当は、「俺と飲みに行かねえと、連載打ち切りだ!!」と脅したのですが）。安飲み屋のカウンターに腰を降ろすと、早速ジロジロと観察開始。むろん、額に〝処女〟とハンコが押してあるわけでなし、徒労に終わるのかと思ってると、グッドタイミングなことに、隣席のカップルが悪酔い、ヘビーキッスをおっ始めた。

無視しようとするばぎな嬢を（彼女の隣席がカップルの女のコ）、「見ろ見ろ！」とけしかける僕。他人の目に興奮、余計にひっつく淫乱カップル。遂にはばぎな嬢の視線も、ライフル銃のように2人に据えられました。ヒクつく鼻の穴。すぐ下の唇を時々チロチロ舐める赤い舌。意味もなく組み替えられる脚。興奮が頂点に達したらしいのを確認すると、ズバリ尋ねました。この質問に口ごもるなら、ニセ処女であると確信しつつ。

「ばぎなチャンて処女？」「うん!!」「う……」想定しない反応に、口ごもったのは僕の方。しかし僕は見ました。彼女の襟足に密生した、銀色のうぶ毛を。「ばぎなは処女である!!」（今月は阿宮美亜の生態を暴く予定でしたが、都合により来月に延期しました）

（『漫画スキャンティ』'87・6）

エロ漫画界裏通り⑤

ようやく阿宮美亜であります。信州大学中退の、〝インテリ女流エロ漫画家〟を自称してますが、何のことはない、エロ漫画を描かなければ、〝上目使いの陰気なタダのブス〟であることは、『ロリタッチ』（毎月27日発売・東京三世社・500円）の読者なら、既に御存知の通り。

彼女のデビューにまつわる裏話は、2冊目の単行本『危険フレンド』（壱番館書房・480円）の僕の解説を参考にしていただくとして、美亜嬢には、実は記事原稿も依頼しているのです。『漫画エキサイト号』（毎月5日発売・平和出版・300円・ファミリーマート系で発売中）読者欄の、「阿宮美亜の諏訪日記」です。以前は「阿宮美亜の松本日記」だったのですが、彼女の引っ越しに伴ない、題名変更に。

記事はわずか数十行のため、以前は美亜嬢が電話で送って来るのを、僕が筆記していました。ところが多忙の身になった今では、エラソーにアシスタントの西川潤が読み上げるのです。ケッ!!

確かに阿宮の女（アマ）は、中学時代クラスに必ず一人や二人いた、頭の切れる陰気なブスでしかありません。彼女らの特徴は、思いやりが

あること。僕など、〝人間は外面だ〟という確固たる哲学がありましたから、この手のブス連中は常にないがしろにし、低能で美人のコにばかりコビを売ってました。

しかし低能な美女は、低能な不良とすぐくっつく傾向があり、よくホゾを噛んだもの。こんな時に優しく近寄り、「塩山クン、最近あんまり図書館から、本借りてねんじゃねん。やっぱり本ていんなあ。この前、川端康成の『眠れる美女』っつん読んだけど、テンゴーなくれ面白んなぁ」となぐさめてくれるのが、頭の切れる陰気なブス、通称〝インテリブス〟です。

話が脱線しましたが、いくらインテリブスとはいえ、普通電話は相手のツラが見えませんから、美亜嬢と話してる時も、「相手は美女なんだ」と自分に暗示をかけ、吐き気を押さえてました。しかし西川潤はレッキとした男。しかも、漫画家としては美亜嬢より半年早くデビューしながら、偶然当時彼のアシスタントをしていた、美亜嬢の原稿を担当編集者に見せたため、即連載を奪われ、その日から昨日までのアシスタントのアシスタントを務めるハメになった、薄幸な男（担当編集者というのは僕です）。

不幸な過去のためか陰気極まりない男で、電話で読み上げる文を筆記するのもウンザリ。ろくに飯も喰ってないらしく、「ハーハー」と息切れが激しくて気色悪いったらない。ある日、彼の生活実態を聞いて納得しました。

彼は美亜嬢の仕事場に同居、センセは近くの実家から通ってるそうですが、何と給料はゼロ。むろん食料は週二回センセから小遣いをもらい、近所のマーケットで買い出しをしてますが、他に現金支給は一切なし。逆に、「ここの家賃、今度半分出してよ」と脅されたとか（現金収入ゼロの彼に、払えるはずがない）。

それればかりか、月に2〜3度、美亜センセの夜の相手までさせられるのだとか。本人は、「人権ジューリンです」と言ってますが、まんざらでもない様子。しかし驚いたもの。男性漫画家が女性アシスタントに手を出し、嫁さんや愛人にするのはよくあること。しかし、男に手を出してタダ働きさせる女流エロ漫画家は、多分彼女が初めて。

西川センセにも心配が一つ。「近頃売れっコでしょ。よく上京してるけど、浮気してんじゃないかと不安で…」家庭を守る主夫の立場も、なかなか楽ではなさそう。（『漫画スキャンティ』'87・7）

エロ漫画界裏通り⑥

『ロリタッチ』（毎月27日発売・東京三世社・500円）をも上回る〝亜流感覚〟で、本家の『ホットミルク』（毎月3日発売・白夜書房・480円）をあきれさせている、超低価格ロリコン漫画誌『キャンディコミック』（隔月10日発売・日本出版社・350円）ですが、編集長の吉田嬢（別名カーマスートラ吉田）は、㈲遠山企画入社歴8年を誇るだけに、とんでもない女です。

その1。3年ほど前、彼女が何の連絡もなく出社して来ない日が。自宅に電話しても誰も出ません。けど暇な時期でしたし、「インド旅行で3キロ太った玉だぜ。死にゃあしねえよ、殺されても」という皆の、いや、僕の意見で放っとくことに。

2日目の朝、出社すると小汚ないソファに、小汚ない女が引っ繰り返えって高イビキ。汗とホコリにまみれた色黒で不細工なツラは、確かに吉田嬢ですが、かつて見たことのない疲労感が、だらしなく開かれ、ヨダレを垂れ流してる口元から漂ってます。どどめ色の歯グキや出張った黄色い歯にまで、疲労コンパイの跡はありありで、口から亀の子ダワシを噴いてるのかと錯覚したほど。

後に判明したことですが、吉田嬢は一昨日の夜、池袋で劇画家のいかづち悠センセと打ち合わせ後に酒を飲み、つい朝まで飲み腐っ

たというのです。ここまでは彼女にとって日常茶飯事。ところが2人とも朝になっても、「まだ飲み足りないネ」と、早朝からやってる飲み屋、中華屋、そば屋をはしご。ふと気づけばもう夕方。「ついでだから…」と再び本格的に飲み始め、遂に2日目の朝を迎えたが、家に帰るのもメンドなので、池袋からより近い事務所で、ヨダレを垂れ流してたのだとか…。

その2。一昨年の夏、新宿で阿宮美亜と吉田嬢、そして僕の3人で酒をくらった時のこと。4～5軒ハシゴした後で吉田嬢が、タクシーで中野まで帰ることに。しかしなかなか車が停まりません。不機嫌になりだした吉田嬢。「ったくブスの酔っぱらいくれえ、手に負えんもんはないぜ」と僕。「ホントにそうですね」と、自ら陰気なブス振りを棚に上げて、相槌を打つ骨太阿宮。その時でした。向こうから来たアベックを、吉田嬢がからかい始めたのです。

「てめえらこんな狭い道、イチャイチャしながら歩くんじゃねえよ」見れば女のコは色白でスレンダー。どっか知的で、吉田嬢が一番毛嫌いするタイプ。しかし、相方の男を見て自分の顔色が変わるのが分かりました。パンチパーマ、上下クリーム色のスーツ、白いメッシュの靴…。阿宮を見ると、これまた青い顔をして僕を見ます。

その瞬間でした。「バチッ!!」という音と共に、吉田嬢が路上に引っ繰り返りました。余りにしつこい彼女のカラミに（素人でも怒ったでしょう）、ヤっちゃんもカンニン袋の緒を切ったのだ。既に人垣が出来てます。「やりやがったな!!」懲りもせずに立ち上がり、殴りかかろうとする吉田嬢。その時です。阿宮が突風のように背後に回り、骨太な両腕で羽交い締めをかけ、事無きを得たのです（阿宮の単行本『感じるとしごろ』に、本事件を素材にした作品が収録されています）。

その時僕は何してたかって？ 人垣のはるか後ろの電柱の陰で、どうやって自分だけ逃げようかと、震えてました。ブスが2人ばかり殺されようが、日本の将来には無縁と念じつつ。その骨太阿宮美亜の増刊号、『恋色マドンナ』（B5判・170P・300円）も只今発売中ですし、カーマスートラ吉田も、三十路を超えてますます元気モリモリ。皆さんも2人のパワーを見習って、夏バテなんかしないで下さいね。

（『漫画スキャンティ』'87・8）

エロ漫画界裏通り⑦

皆さん今日は！ 自らの性的コンプレックスをバネに、弱者とのみのケンカで日々うさを晴らしつつ、それなりに人生を楽しんでる塩山です。『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）の9月号、そう今月は〝創刊阪神号〟っつんだけど、もう読んでくれた!? チェッ！ また宣伝しちまったぜ。やだね、下請け編集者のサガって。こんなことしたって、安い下請け料に、ビタ一文色がつくわけじゃねえのによ。あ～、やだやだ！

グチはともかく、『ロリタッチ』8月号のバックナンバー販売ページに、〝某女流漫画家〟とのキャプションつきで、ある女流漫画家の写真を載せたんだよね。そしたらいっぱい来たね。○×だろうとの予想の手紙が。その前にお断わりしておくと（余り業界通でない読者のために）、〝信用あるエロ漫画誌づくり〟で業界に確固たる地位を築いている、吹けば飛ぶよな下請け編集プロダクション、㈲遠山企画と、肉体関係を結んでる女流漫画家さんは以下の通り。

中森ばぎな、中総もも、若堂まりあ（以上『ロリタッチ』関係）、阿宮美亜、山口花子、森橋結実、萩原リエ（以上エロ劇画誌関係）。全部で出入りしてるエロ漫画家さんは70人くらいだから、だいたい一割が女流。けど、〝ブ男とブスが描いてブ男が編集、ブ男とブスが読む〟と言われるエロ漫画業界だけに、例外なく女流は破壊された女揃い。

予想で一番多かったのは、本欄カット担当の中森ばぎなセンセ。条件反射で、つまりパブロフの犬になって、「ひざ小僧も小汚ないばぎなだ!!」ってことになったらしい。次が、編集の中年男を、本当に泣かせるので有名な阿宮美亜。目つきが暗く、見上げるように写ってたため、「暗いローアングルな視線といえば…」ってことで、『危険フレンド』（壱番館書房・480円）の僕の解説読んでる読者あたりが投稿して来たらしい。

［お詫び＊前号の阿宮美亜羽交いじめ事件を素材にした漫画は、『感じるとしごろ』（辰巳出版・500円）にではなく、『危険フレンド』の方に収録されてます。すみません。傑作『気分は少女色』（一水社・500円）もお忘れなく］

でも結論から言うと、全員ハズレ。実は今度初の単行本、『聖LILY学園』（東京三世社・700円）が発売になったばかりの、若堂まりあ女史なんだよね。

このコもいいかげんなデビューして、ドサクサで単行本まで出ちまった、ハッピーブスなんだ。何せ前歴が、㈲遠山企画のアルバイト。しかも、半年以上勤まる奴は狂人だと噂される、かの塩山の助手を、一年半もしてたんだぜ。昨年夏の『ロリタッチ』発刊の折り、ネーム用の合成ノリのカンにしてた落書きを、塩山、つまり僕が発見、「メンバー足んねから、一発描いてみろ!」てんでデビューしたっつんだから、あきれちゃいます。

ブスに事欠かぬ㈲遠山企画なので、今後は束にして売りだそうとの計画もあんだよね。ほら、全盛時代の日活が、石原裕次郎、小林旭、赤木圭一郎、和田浩治の4人を、〝日活ダイヤモンドライン〟として売り出してたでしょ。あれに倣い、名づけて〝㈲遠山企画のゴールデンブスダイヤモンドライン〟。精選されたメンバーだけど、まず裕次郎代わりに阿宮美亜、旭代わりに中森ばぎな、トニー代わりに山口花子、和田浩治には若堂まりあでどう!?（選ばれなかった連中のシットが怖いな）

（『漫画スキャンティ』'87・9）

エロ漫画界裏通り⑧

やあ、今月もお会いしましたね。街を行くノースリーブ姿の女性の、汗ばんだ腋の下に眩惑され、その日見た一番のくぼみを思い出しては家でオナニーこいてる、〝資本家のアイドル〟塩山です。『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）10月号、もう読んでくれた？　今月は〝創刊白夜号〟っつって、タタキが、〝文化的亜流誌〟なんだけど、〝白夜号〟だからってラリって、『パンプキン』なんて買わんでね。せめて『ホットミルク』（毎月3日発売・480円）にしといてよ。

今月は投稿ハガキについて。『ロリタッチ』には「ヤケクソジョッキー」ってコーナーがあって、毎月100通以上投稿が来るけど、編集が編集だけに、相当いかれた常連が多い。本欄も毎回欠かさず読んでるらしい、市役所職員で〝エロ本評論家〟の小倉智充をはじめ、以下のような連中が常連みたい。水原一城、立川真、卯月恵、渋井元偉、佐々木政美、二之宮文典、浜谷正人、片桐忍、須崎政晴、浅松一、菊正宗精子郎、DDT。女性軍では、TOMOちん、ひのせ・りゅう、笙明凛、あきほ、浜崎昭子（以上敬称略）。

以前本欄で、〝女流漫画家は古女房である。おだてれば付け上がり、けなせばふて腐れる〟と、阿宮美亜を例に書いたけど、常連投稿者も全く同じ。割とオモロイと思って、続けて2回くらい採用するでしょ。すると、「俺ってやっぱ編集の心理、ズバリ読み切ってるよォ」てな気になるらしく、ワンパターンなの書いてくんだよ。その手は絶対にボツ。でも、昔の夢が忘れられないらしく、しつこく投稿して来る。立川真、卯月恵、渋井元偉、佐々木政美らで、編集部では〝ひや飯組〟と呼んでます。

次に多いのが、全部のロリコン漫画誌への常連投稿者。趣味は個人の自由とはいえ、もちっとマシな趣味が持てんのかいのう（小倉、おめえが一番重症だよォ!!）。小倉の他、浜谷正人、佐々木政美、菊正宗精子郎、あきほ、浜崎昭子らが有名（もっと軽薄なのもいるが、その手はハナっから相手にせず）。筆者は他誌の読者欄、コジュート根性出してマメに読んどるが、色々と発見が多い。例えばかつての水原一城。『ロリタッチ』と『ロリポップ』（毎月12日発売・500円）の両方に投稿してたという、無節操派。それをネタにいたぶってやったら、近頃では身心ともに成長した。『ロリタッチ』以外でも、『レモンピープル』、『プチパンドラ』、『ホットミルク』程度なら、まあ許せます。が、浜谷正人。かつて、〝弱くとも野球は阪神。ロリタッチでも商業誌〟なる名コピーを送って来たので、採用。プレゼントも当選させた直後、『ロリッコクラブ』で名前発見。即、〝ひや飯組〟へ。

その点あきほ女史はムチャクチャなテリトリーで、『ペンギンクラブ』なる糞雑誌では、漫画も描いてましたな。本来ボツ組だけど、2度ほど採用後、3度以上ボツにしてもまだ投稿してくんのね。「さすがプロ…」てんで、『ペンギンクラブ』派なのに未だ常連組。さらにTOMOちん。このコには、プレゼントを3回連続当選させた。理由は、たった一枚のハガキに常に全身全霊を傾けてるような凄みがあること。笙明凛。絶対毎月よこさず、隔月という常連者に見られぬ、禁欲性を評価。男では片桐忍。若いのにシャレが分かってる。

てんで、常連組エリートコースは、TOMOちん、笙明凛、片桐忍の3人と、現時点では認定してます。他誌にも投稿しててる方々かもしれませんが、この人達なら『ココナツパイ』に投稿してても、軽く許せる〝芸〟があります。

（『漫画スキャンティ』'87・10）

エロ漫画界裏通り⑨

長女以上の不細工とはいえ、何とか無事に次女も生まれ、一安心してる〝ブス女流漫画家殺し〟の塩山です。それはいんだけど、2〜3日前、マキノ雅弘監督の映画を観に行った、「大井武蔵野館」の明る〜いトイレで小便してたら、余りに我が粗チンがキレイなピンク色してるんでビックリ。長期間SEXしていないと、いわゆる淫水焼けの色があせるってのは本当だね。

愚妻の妊娠が分かったのが正月。それ以来、丸9カ月間一度も致してないもんね。浮気のチャンスもなかったし。みじめな僕、シクシク。風俗関係は性格的に嫌いだし、毎日一応〝編集芸のこやし〟にと、オナニーには励んでるけど、これじゃ色までにはね。今度団地の屋上で、チンポだけ出して日光浴しようかな。現在の我が粗チンは、愚妻や中森ばぎなさんのナニよりは、少なくとも美しいピンク色しています（アイドル漫画家の中森さん。夏にくらむぼんのヤローと新宿の「三平酒寮」で飲んだ時、「俺を落とすんなら今だぜ」と、股間をトム・ジョーンズのように振り回したこと、深く反省してます）。

常に本題より面白いと言われつつ、長くなるのが弱点の前置きも終わり、ようやく今月の本題。題して、〝あのエロ漫画家は今?〟。『アサヒ芸能』あたりがよくやる、レトロ物企画の一種。僕もこの業界に入り10年ちょいなんですが、色んな漫画家さんの浮き沈みを、目のあたりにして来ました。

担当した順に、まずは岩越国雄センセ。センセは「ビッグコミック新人賞」に輝きながら、この業界に漂着。小田急線の、小田原が間近の渋沢住まい。でも10年前の全盛期は、編集が日参した。お嬢様っぽいキャラクターと、ちょっと〝ひばり書房〟っぽいタッチが

魅力でしたが、ワンパターンが飽きられ、今はハタノエミなる名前で細々と描いているのみ。「稿料はいくらでもいい」と売り込みをしてるそうですが、いい方だっただけに心が痛みます。

岩越センセ同様、当時『漫画バンプ』（今の『漫画ダンディ』）で描いてもらってたのが、佐藤史朗センセ。ジョーハツ、原稿落としの名人。後に『映画ファン』でも描いてたが、結局はそれが原因で消える。性格もどうにもならんヤローでした。虚言癖がある上にマザコン。しかも女房までグルになってウソをつくという、煮ても焼いてもメンチにしても喰えぬ一家。結局は離婚。佐藤センセ、以前なさってた理容師に戻ったとか。

次は、『漫画モンロー』という雑誌に描いてもらってた、范・てつじセンセ。この人は後に、はしもとてつじと改名、『ＧＯＲＯ』や『ビッグコミック』で活躍しました。エロ劇画家時代は、スクリーントーンのメカタがヒシヒシ感じられる、超リアル派。宮谷一彦を俗化したような画風で、一部に大人気でした。その後メジャー化したので喜んでましたが、またたく間に転落。今は消息不明とか。絵に描いたような、浮き沈み漫画家人生を歩んだ方です。

３～４年前まで、『漫画娯楽館』（今の『漫画スマック』）に描いてもらってたのが、段・玲児センセ。ＳＭ物を得意としたナイーブな美青年で、年齢不詳。

「銀座の、三島由紀夫の〝禁色〟に出てくるゲイバーに勤めてたこともあんですよ。当時はベトナム戦争末期で、アメリカ兵のお客さん多かったなァ。よく持てたけど、体までは売りませんでしたよ。アッハッハ…」語り口も絶妙。締め切りも良く守る人格者でしたが、仕事上のスランプのためか現在ジョーハツ中。〝あの阿宮美亜、今は飯場の飯たき女に〟〝中森ばぎな、ばぎなを駆使して浅草ソープのナンバーワンに〟てな記事が出るのも、そう遠い日のことではないでしょう。

（『漫画スキャンティ』'87・11）

エロ漫画界裏通り⑩

レディス&ジェントルマン、毎度今月もおおきにでオコンバンハ。〝日本人の皮をかぶったソ連人〟の塩山ざんす。それだけじゃないザマス。祖父は朝鮮人と韓国人の混合ダブルス。おまけに祖々母はフィリピン人なんすヨウ。このフィリピン人の祖々母は、若い頃アイヌの恋人を持ってたらしんべッチョ。OK、〝友情で商売する亜流誌〟『ロリタッチ』（毎月27日発売・５００円）の体質は、こういった非国民的血統にあるらしいのモモリンチョ。チョンベチョンべで、ようやく本論にインサートするへッぺ。おっと、ツバ塗るの忘れてチョビレの、ツビツビでボボボボ。とはいえやっぱり、マラマラとイタリヤコンマ。

馬鹿やってるうちに、『ロリタッチ』も12月号で16号目。〝創刊社長号〟っつんだけど、もう読んでくれた？　い～のい～の、まだの人は別に。君達ビンボ人が、何人かこの記事読んで本買ってくれようが、下請け料が増えるわきゃないし。テメーのサイフに銭が舞い込む以外の努力は、一切せぬのが私の哲学（今月は『漫画ホットパンツ』なる増刊号もデッチ上げた。Ｂ５判の３００円。これも発売中ザマス。『キャンディコミック』に続く『ホットミルク』の亜流誌第２弾として、大いに業界のヒンシュクを買うことでゲショ。多田在良［多田正良改め］センセに次いで、斎藤Ｏ子女史にもこれで絶交されんのかと思うと、嬉しくてペニスがコチコチのアラリンチョ）。

この手のロリコン系エロ漫画を主力商品としてるのが、いわゆる漫画専門店。神田の「書泉ブックマート」とか、池袋の「芳林堂」のように、あるフロアーを漫画専門にしている所と、「高岡書店」（神田）や「まんがの森」（新宿）、「まんが書店」（渋谷）のように

丸っきり漫画ばっかかって所とがある。その中間に、「文苑堂」(神田)なんてのもありますな。

実を言えば今回、〝漫画専門店ランキング〟を、ブワーッと発表しようと思ったのですが、考えてみりゃ光彩書房も、いえいえこの私も、日頃お世話になってる身の上。恨まれでもしようなら、即会社を首で困りんチョ。で、考えたのが、政府広報番組スタイル。出席なされた大臣に、ただただゴマをする、アレですよアレハレハ。

「まんがの森」→従業員教育はピカイチ。立ち読みの注意の仕方も心得ている。かつて「セルフの店」なる、大人のオモチャ屋だった場所からも分かるように、ここは白夜書房の直営店。なのに実に客観的な月間コミック売り上げランキングを発表、全国の書店の漫画担当者を喜ばせてる。

「まんが書店」→従業員だけでなく、客の教育までしてくれるありがたいお店。「立ち読みするとお金をとる」とか、「片手でパラパラめくるな」との、神経の行き届いた貼り紙がうれしい。筆者のような礼儀を知らぬ隠れソ連人は、日に一度は行きたい店だ。

「高岡書店」→シェイプアップしたい人は、日に3度出かけよう。「立ち読みはしないで下さい。本は選ぶだけにして下さい」との、従業員の天の声に従ってると、「台車が通りま〜す」と、本を山積みの台車が店内をビュンビュン。よけるだけで運動になります。図々しい立ち読み客が多く、従業員の方も汗だく。「御苦労様!」と、声をかけたくなるのが人情です。

続いて、「書泉ブックマート」、「文苑堂」、「芳林堂」と続けようと思ったのですが、もう行数が足りません。今度の機会に譲るとして、最後に一言。一部赤色メディアでは、「漫画専門店は感じが悪い」との声が聞かれますが、言語道断。悪いのは、全部客の側に原因があるのです。この辺の事情を、高松在住の〝工員エロ漫画家の星〟くらむぼん氏が、『ロリタッチ』1月号で漫画化するとのこと。こいつぁ楽しみでマラがコチコチのネチョリンコ。

(『漫画スキャンティ』'87・12)

エロ漫画界裏通り⑪

あ〜あ、もぉ銭なんぞいらねえから、インポも治す尺八名人のオナゴと、熱海さでも行って、ゆ〜っくらお湯っこさつかっててえなあと思ってる、オラが〝業界の村八分者〟の塩山だあ。何でオラが村八分さなったただと? そげなこと言わねえでも分かるべな。〝尻の穴さ小さえ〟ことさ国の誇りにしてんのが、ニッポン人さゆうべさ。じゃけんのー、オラみたくいんたあなしょなるな心さ持った国際人はな、いっぺえ悪さされるんだがや。

じゃけんどものう、やっぱ各出版社の社長さんは、えれーのう。〝頭の色さ何色でも、ネズミさいっぺえ獲る描がえれー猫だ〟っちゅうことわざが中国にあるらしいけんども、〝どんな村八分者でも、米さいっぺえ出荷する百姓がえれー百姓だ〟と思ってるんだんべなあ。㈲遠山企画なんつう、オラが土地さ借りてる小せえ地主さんとこに、いっぺえ仕事さくれるんだ。

『漫画バンプ』、『漫画エキサイト号』、『漫画スマック』、『ロリタッチ』(今月は〝創刊百姓号〟っつんだよ〜ん)の定期物4誌の他に、今月ぁ単行本さ二冊もデッチ上げたんさぁ。一冊目は本誌読者にもおなじみだべよ。もりを舞センセの『幸せの青い鳥』(辰巳出版・700円)。もう一冊は、恐怖のウンコロリコン誌『漫画ビタミン』の表紙も描いてる、おおぬま・ひろしセンセの『ボディハンター』(辰巳出版・700円)だあ。月に6点も本さひり出すと、尻の穴がボロボロになんなあ。やっぱ銭より、人間は体がデージだあ。理屈は分かってんだども、〝日本人の皮をかぶったソ連人〟や〝業界の村八分者〟にゃ、銭だけが頼りだしのう。結局は仕方あんめと、今

日も尻の穴さで夜なべ仕事してたんだぁ。

けんどよ、この前テレビ朝日で、新人少女漫画家の毎日っつんさ見たんだども、やっぱり大地主っつうか、大手の出版社はやることが違わいなぁ。一本の漫画さ描かせんのに、ネーム↓絵コンテ↓ペン入れっつう三段階があんのはオラ達と同じだども、ネームん時だけで、何遍もやりなおしさあって、そのたんびにオナゴが出版社さ出かけるんさ。オカジョーキの銭だけでも大変ずら。

そこいら、オラ達の業界は簡単だっぺさ。ネーム段階さぁ、そもそも何にもしねえ。電話で簡単に話の筋さ聞くだけだ。で、99%が「それでいいべよ」。次の絵コンテん時にゃ、ネームとか筋なんか、見てる振りしてるだけだ。エロシーンが最低半分くれえはあるかを、チェックさするだけ。これでしまいだべ。簡単ずらよ。大地主の下で苦労してる漫画家さんも、皆オラ達の業界さ来りゃあいいんのになあ。そんだけじゃねえ。今までゆったんは、『ロリタッチ』なんかのロリコン漫画についてなんだ。昔からあるエロ劇画は、もっともっと簡単じゃぁ。「塩山だども。次の『エキサイト号』、活版18ページで頼むずら」「はいはい」「ネームは11月18日着。速達かファクスが助からいなぁ」「はいはい」「最近また都条例が結構来てるけん、SM残酷以外の内容なら何でもいいずらよ。この前女子大生物だったし、こんだぁ女子高生物でいくかや?」「はいはい。今月は何かいいアイデアないですか?」「んだなぁ。恒例のインポ物で行っか?」「また自伝ですか?」「放っとけ。インポのくせに、舐めワザがすんげえうまくってよ、持てまくってる高校生の話さどうだ。チンポ入れられるより気色いいっつんで、女子高生に大人気。態度もでけえの。題名が〝誇り高きインポ〟。締切りが11月24日」「はいはい」

相手は小森達センセ。センセさアイデアさ欲しがるから打ち合わせさ長くなったども、普通は、「×月×日までに、人妻物18ページ」で終わりだ。合理的な世界だべよ。エロ漫画誌の編集は、3日やったら辞めらんねえつうだども、ホントだいなぁと心底思う、オラの今日この頃だ（小森達センセの「誇り高きインポ」は、12月5日発売の『漫画エキサイト号』1月号に掲載されるがや。てんごーな打ち合わせの結果がどうなってんのか知りてえ奴は、立ち読みさしてみんのもいいべな）。

（『漫画スキャンティ』'88・1）

エロ漫画界裏通り⑫

一カ月の御無沙汰どしたなぁ。オラが噂のシオヤマだや。今月は〝創刊短足号〟っつんだども、『ロリタッチ』の2月号読んでくれたかや!? なぬ? そんな雑誌の名前は初めて耳にするってか。じゃあオラの名も知るわけねえな。だども、今度本屋で見かけたら、一度立ち読みしてくんろ（パチンコ代ケチってまで買うこたねえ。おめえさんらが買ってくれても、下請け編集してるオラの勤める社に、ビタ一文余分に銭っコがへえるわけじゃねえしな）。

『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）は、一応ロリコン漫画誌っつうことになっとるだども、内容は、エロ劇画的要素もミックスすた、〝単なるエロ漫画誌〟だ。じゃけん漫画じゃいっぺえセンズれるっつんで人気あっけど、読者欄等の記事欄は、態度でっけっつんで評判わりんだ。「亜流誌の内幕」っつ所じゃ、地方ブンカエロ青年に人気のある、白夜書房の事実に基づいた悪口毎月書いてるし、「ヤケクソジョッキー」つう読者欄じゃ、常連投稿者を〝アホ〟呼ばわりするっつんで、ヒンシュク買ってるずら。けど、真のジャーナリストは、いつん世の中でも、馬鹿な世間の無理解さあうだと思って、家さ帰ると、生後4カ月の娘とジャレてるだ。娘の笑顔さ見てると、浮世のつれえことなんざ、み〜んなぶっ飛ぶから不思議だいなぁ。

『ロリタッチ』の連載陣の単行本が、続々と版元の東京三世社から出とるけど、11月初旬に本欄カット執筆者の中森ばぎなセンセの、『極東ジャンクガール』も発売されるぞなもし。早速12月2日に、新宿の「三平酒寮」で宴会があってのう。10人くれえのささやかな宴だったども、漫画からだけじゃ想像出来ね各センセ方の個性がうかがえ、大変勉強になりやすた。

まずは芳賀露天センセ。『ホットミルク』や『キャンディコミック』で活躍してる、自称アナーキストでんが、「中森ばぎなファンクラブ」の会長だけに、その夜の準主役だ。恐れ多くもオラのことを〝オッサン〟呼ばわりするは、ばぎな嬢のファッション感覚の悪さをあざ笑うはの仕放題。オラは出席しなかったが、二次会ではばぎな嬢の膝枕で高イビキをかいてたっちゅうしのォ。全国のばぎなファンは、ファンクラブ会長のこったら公私混同を、村の常会で追求する必要があんべな。

ファンさ先がけ、てんごうな景色さ苦々しく見てたんが、樽本一センセだ。ゆうまでもなく、〝処女漫画〟のばぎな嬢に対抗でける、業界唯一の（?）、〝童貞漫画家〟サマだ。けんどセンセ酒はめっぽう弱く、ビールコップ一杯で、「僕ァエロ漫画だけで満足しないぞォ」と、メジャー進出宣言するのが関の山。九州男児らしい迫力が、酒席でも望まれるとこですたい。

描く漫画と裏腹に、顔面ヒゲだらけの小錦並の巨漢が、ＤＯＮＫＥＹセンセだ。一見温厚だども、毒舌家だ。それもオラみてな主導権を取る主犯格と違っての、横から合の手を入れ、主犯に死刑級の罪を犯させる知能犯なんさ（自分はいつも執行猶予つき）。〝ヒゲヅラの悪魔〟と呼ばれるんも、そう遠ー日じゃなかんべな。

〝ロリコンエロ漫画界の竹下登〟と呼ばれてるんが、同人誌界に顔の広い、まいなぁぼぉいセンセだ。一晩で20ページアップの手抜き漫画家のドンとして有名だども、酒席では〝気配り〟ベーが目につき、案外ジョシキの人でありんす。良くも悪くも、この辺がセンセの限界なんずらよ。

主役の中森センセは全くの下戸。酒席の雰囲気は好きらしく、下品な高笑いで花を添えとったいなあ。最後にオラ。実を言うと、中森嬢同様に下戸。つまらねえ男でごぜえます。けんど本欄の数ページ後の、池本浩一とかいう、川崎ぶら並の〝善良なゴミ〟の駄文より、ちったあ面白い文書く男かなと、謙虚に思うこの頃ですたい。

（『漫画スキャンティ』'88・2）

エロ漫画界裏通り⑬

一カ月のごぶさたどした。子ぼんのう編集者の塩山ですダ。いやあ、もう生後5カ月近くになるんだけど、2番目の子供っつんは可愛いもんだいね。確かに不細工で、思春期になってからが案じられて仕方ねえだども、今はヘラヘラ笑ってるだけだしの。めんこいことめんこいこと…なんつうのは、本誌読者にゃ関係さねえことだったいな。許してくんろ。

でだ、今月は同業者の電話での問い合わせについて、実名入りで論評してみべえと思ってるんよ。『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）の定期購読者なら御存知と思うけど、㈲遠山企画じゃ、「すいません。こちら○×出版と申しますけど、『ロリタッチ』にお描きになってる、本番女流エロ漫画家の、中森ばぎなさんの電話番号、お教え願えないでしょうか？」といった類の問い合わせについちゃ、例え相手が講談社だろうが一水社だろうが、こう答えることにしてるんよ。「かまいません。けど一つ前提条件があります。今後うちが、お宅の出してる雑誌に執筆してる漫画家さんの連絡先を知りたくなった場合も、教えて下さいね」

五分と五分、考えなくとも当然のこと言ってんだけど、面白いも

ん。社によって色んな反応を示すもんだいなあ。昨年、あきすぐりというエロ劇画家を知りたいっつんで電話よこしたのが、朝日ソノラマ編集部。前出のように応じてると、こうのたまったもんだ。「それはうちのバーイ、ケースバイケースで…」相手の名前は聞き忘れたが、いい度胸したガキ。むろんうちも、「ケースバイケース」の一つとして、教えてやらなかった。

大手でなくとも、ふざけた野郎はいる。先日、単行本でお世話になってる、辰巳出版の営業部の人から電話が。同社で出してる『漫画オリンピア』編集部の何とかいう糞ガキが、『漫画セクシャル』で描いてる杏咲もらるを使いたい。ついては、担当のカーマスートラ吉田に、杏咲が描くように説得してくれないかと言っているが…との話。

俺と吉田嬢、一瞬耳を疑ったね。しばらくして、力なく俺は彼女につぶやいた。「俺達は確かに、辰巳出版の単行本部門の方にゃ大変世話になってる。けどよ、縁もゆかりもねえエロ劇画誌部門のカス野郎の下請けを、しかもタダで、何で俺らがやらにゃならんの？」「それどころか、あの雑誌の人にゃ私、漫画家教えてもらえなかったことまでいっぱいあんですよ」「今、手塩にかけて育ててますって理由でだろう。辰巳のアホ社員編集の得意の弁。誰だって新人は手塩にかけて育ててんだ、馬鹿野郎。自分に都合のいい時だけ、しかも手前の頭も下げずに、他人のフンドシで相撲とろうたあどういう神経してんだ!!」「ぶっ殺したろか!?」

その日はもう一本ふざけた電話が入った。カーマスートラ吉田が、俺の編集してる『漫画エキサイト号』（毎月5日発売・300円）に描いてる、皆さん御存知のもりを舞の電話を教えてくれという。「南日れんさんが知りたいらしくて」と、彼女の編集してる『スーパーコミック』（毎月12日発売・300円）の連載劇画家の名を挙げる。「へえ～、あいつら忘年会で気でも合ったのかな」と思って教えてやる。それにしちゃ、カーマスートラの様子が変。聞けばこうだ。

南日は、『漫画エロトピア』のイトーという編集に、遠山企画にこっそり聞いてくれと頼まれ、わざわざ電話をよこしたのだとか。このイトーなる男、僕も知ってるし、過去何人も漫画家の連絡先を教えてる。あまり度重なるのと、〝大『漫画エロトピア』の誇り〟が、遠山企画に頭を下げさせないのなら、「お前の尻の穴は、それでよく糞がひり出せるな!?」と、亜流誌編集者としてここに一言記しておく。

（『漫画スキャンティ』'88・3）

エロ漫画界裏通り⑭

皆さん今日は！　今〝一番サイケな編集者〟の塩山だっす。で、今月は〝創刊念仏号〟っつんだけど、『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）立ち読みしてくれたかな!?　えっ、買っちゃったって!!　何てドジな人なんでっしゃろ。3カ月もたちゃ、古本屋に出回んのにのう。無駄遣いしたもんじゃ。少しはお父さんお母さんの苦労を考えなさい。あったらエロ本でマスかかせるために、御両親は夜な夜な交わって、君らをこの世に授けたわけじゃなかど。

てな説教グセが抜けずに困ってるんですが、エロ漫画の編集してて一番困ることの一つが、売れなくなった漫画家さんの連載を、どうやって打ち切るかってこと。「あんたの絵人気ねえから、もう今回で終わり。ガチャン」と、電話一本で素人目にはすみそう。ところが、編集者と漫画家との間には、それまでの長いつきあいがあるんですよ。

小心な編集になると、上役に命を受けたのに、漫画家に打ち切りの通告が出来ず、自分の方が退社しちゃうことまである。なぜそれ程までに苦労するかといえば、不思議と絵がアナクロになって消え

て行く漫画家には、〝善人〟が多いから。

一番多いパターンはこうだ。出版社に入社すると、何人かの漫画家を担当させられる。こんな場合編集長は、何かドジられると困るので、気むずかしい大御所連中より、性格のいい脇役的漫画家を当てがう。この手の人々は、10年近いキャリアを積んだベテランが多いので、新人編集者に何かと親切だ。彼らの心の一部に、この人が将来偉くなった場合は…という打算もあるかも。

とはいえ、右も左も分からぬ新米編集者にすれば、売れっコ漫画家をクン呼ばわりする、コケの生えかけた彼らは心強い。飲み屋に行くと「入社祝いですヨ」と、酒まで奢ってくれる。こんな時、「絶対に漫画家に、タダ酒飲ましてもらうんじゃねえ!!」との編集長の言葉が、頭をかすめるのも事実だが、上役ほどいい給料もらってない平にすれば、小学校の朝礼での校長の訓示程度の効果しかない。「入社祝い」が、原稿を取りに行く度に開かれることになるのもすぐ。

住んでるのが同じ沿線だったりすると、余計に悪い。田舎出の編集は漫画家殿の家に招かれ、奥方様の手料理であ〜コリャコリャ。しばらくして結婚、出産。その度に漫画家からお祝いまでいただく始末。遂には女房同士も友達になんて時に、いきなり上役からこうだ。

「だめだコイツ。もう完全なポンコツだな。それだけじゃねえ。本人も昔は自分の絵が古いってんで、背景いっぱい入れたり努力してたけど、最近は何だ？　コピーばっかの背景に、イモなキャラクターがアップアップしてるだけだ。今月で打ち切りだ!!」「あ…あの、××さん、上の男のコが来年小学校に上がんので、色々大変なんですが…」「馬鹿野郎！　手前は編集だろう。漫画家の将来より、自分の生活考えろォ。漫画家一人クビに出来んのなら、手前が辞めんかい、このボケエッ!!」

てな具合。私の場合どうしてるかって？　冒頭で紹介した、「あんたの絵人気ねえから、もう今回で終わり。ガチャン」を実践してる、数少ない編集の一人でんがな。そやから落ち目の漫画家からは、色々と恨まれてまっせ。「アイツは利用する時だけ利用する鬼だ」なんてね。無芸無能なエロ漫画家に鬼呼ばわりされると、うれしくて鳥肌が立っちゃいますね。ウッフン♥

そのうち、くらむぼんや阿宮美亜、中森ばぎなにも、打ち切り電話をかけるのかと思うと、うれしさでキンタマがボッキしてくる自分が、非常にいとおしい今日この頃。（『漫画スキャンティ』'88・4）

エロ漫画界裏通り⑮

おばんでやす！　豪放な風を装いつつ、実は小心かつ計算高いので有名な、サイケ編集者の塩山ざんす。くぉら！　川崎市の会社員、増田新也（26歳）。いい年こいて、『ロリタッチ』（毎月27日発売・500円）ばかりか、『漫画スキャンティ』なんつう、オイラのコラムしか読むとこねえ、低部数落ち目エロ劇画誌まで読んでんじゃねえっつーのォ。なぬ？　手前の文読むために買ってんじゃねえ。中森ばぎなさんが目的だと…ウ〜ム、もっと許せねえずら。ブス女は手前の彼女だけにしろっつーの。センズリの素までブス漬けじゃ、チンポが腐ってしまうがなもし、もしもしかめよ〜♪かめさんよ〜♬

てな御節介はこっち置いといて、今月は漫画家の原稿料のお話。ピンからキリまであんだけど、デビューしたての新人さんは、どこでもだいたいページ４０００円（一部のむごい出版社、例えば白夜書房あたりだと、３５００円なんてのもゴロゴロとか。さらに、一割源泉を差っ引かれんのはいたしかたないとして、５００円程度の振り込み手数料まで取るってんだから、〝文化的エロ本屋〟もお里が知れる）。

6000円前後の中堅が人数的には一番多く、8000円を越すあたりから、いわゆる〝巨匠〟となるわけ、あっしらの世界じゃ。最高ランクで、1万2千円くらい。このゾーンに入ってると思われる、漫画家の名前を挙げてみよう。間宮青児、三条友美、富田茂、青山一海、いかづち悠、城野晃、乱真澄あたり。むろん一人の漫画家の稿料に、定価があるわけじゃありません。デビューした雑誌にゃ比較的安く描き、新規に仕事を始めた所から高原稿料をいただく、てな方が多い。

彼らは当然年収ン千万ですが、悲惨なのはデビューしたての新人。一人じゃ月に50ページが限界の世界だけに、5000円以下だと親がかりや借金、副業してないと喰えません。6000円台でやっと食べられ、7000円前後の稿料で、ようやくサラリーマン並（単行本ブームのロリコン系漫画家は、この生活ランクが各1000円ほど下がる）。

ですから、稿料アップは漫画家にとって死活問題。その交渉振りをタイプ別に分け、㈲遠山企画社員のオイラが、どう応じるか公開しよう。

①**哀願型**／一番多い。生活が苦しいからと、グチを並べる。それも当然。能なし漫画しか描けないから、他社から注文も来ない。「アンタ、この仕事向かないんだよ」と、冷たく引導を渡す場合がほとんど。

②**キョーカツ型**／最も陰険なタイプ。原稿をメチャクチャ遅らせといて、落ちる寸前に、いきなり「稿料をアップしてくれ」。原稿が落ちると困るから、その回だけはアップし次号より打ち切る。かつて西江ひろあきにこれをやられ、ブチ殺してやろうかと思った。この手合はどの社でも似たようなことをすんので、大成しない。

③**休暇願いタイプ**／「一度だけ休ませてくれ」と言う。自分の所の稿料が、他社がアップした結果、最低になったのだなとピンと来る。優しい漫画家は、なかなか銭のことを言い出せないので、こういう方法を取る。有望株が多いので、500円程度はアップしてやる。

④**沈黙型**／何年描いてても何も言って来ない。無気味なので、時々上げてやる。超ベテランや4コマ漫画家、阿宮美亜とかくらむぼんのように、ドアホな連中にまま見られる症状。

が、中には数社の編集をペテンにかけて、自らの稿料アップを図らんという、不逞の輩というか、国賊もいる。その代表もりを舞の、〝稿料アップ未遂サギ事件〟について、次号で詳しく触れてみたい。

（『漫画スキャンティ』'88・5）

エロ漫画界裏通り⑯

栄枯盛衰は世の常とはいえ、昨今のやまだのらのポンコツ振りは目を覆わんばかり。もっと情けないのは、ンな中古品使わにゃメンバーの埋まらぬ、昨今の『漫画スキャンティ』の凋落振り…てなこと書くと、連載打ち切られちゃうので話題を変え、「一カ月のごぶさたでした。資本家のアイドルでサイケ編集者の塩山ざんす」と某編集長にコビる私ですが、既に奴の眼は座っているのでモーコハン、いや、ハーコワイ。

今月は〝超手抜きエロ漫画家の星〟、あるいは〝不逞の輩〟として有名な、もりを舞センセの悪辣振りについて書く予定でしたが、関係各方面から前号発売直後より、厳重な抗議が一切殺到しなかったので、予定通り実行します。前号を読んでる読者は御存知のように、もりをセンセが〝不逞の輩〟と言われるようになったのは、原稿料アップに関するある事件から。事件の伏線は、既に本欄で暴露してんですね、僕が。順を追って説明しよう。何カ月か前に本欄で、㈲遠山企画に南日れんて劇画家さんから、もりを舞の連絡先を教えてくれって電話があったって書いた。「どして？」って尋ねたら、

大『漫画エロトピア』の編集に、コッソリ聞いてくれって頼まれたっつうのよ。だもんで僕がアッタマ来て、「バカヤロー！　知りたけりゃちゃんと、自分で頭下げて聞いて来い、イトー君よ。いつまで『漫画エロトピア』の看板しょって、カッコつけてんだ、ボケナス!!」てなことを書いた（実は、もっとヒドイこと書いてるが）。

その原稿を一水社に渡した数日後、出社すると多田在良から電話。「お前んとこ、もりをに稿料△千円出してるってホント？」「朝から酔っ払ってんじゃねえよ。あんなヤローに×千円以上ビタ一文出すかってんだ。奴の稿料なんか○千円がいいとこ。なのに社会福祉法人みてえに、手前ん所が×千円も出すから、俺もイヤイヤ合わせてるだけだ。ラリってんのか？」「だよな。身銭どころか、スポンサーの金にまで守銭奴のお前が、ンな稿料出すわきゃねえよな」「もりをのガキがそう言ったのか？」「うん、まあ…」「分かった。『エロトピア』のせいだよ。アソコが△千円出したんだよ。で、もりをがない頭働かせてさ、俺んとこも上げたってお前にウソついて、稿料アップを図ったんだよ。太ぇガキだ!!　お前、俺の原稿読んでなかったの？」「う…うん。ほら、最近は、捧君に全部任せてるから…。またいじめられたのか」

阿宮美亜に去られた後の、『漫画スキャンティ』を支える数少ない漫画家だけに、サギ未遂の被害者の割に多田が控え目なのが、涙というか笑いを誘った。阿宮といいもりをといい、何ともムゴイ性格をした輩（阿宮、もりをの両センセは、私生活でも密着した関係なことは、『ロリタッチ』［毎月27日発売・500円］の読者なら御存知のはず）。

数時間後。『漫画エキサイト号』（毎月5日発売・300円）のネーム請求のため、もりを宅に電話。「はい」いかにもサギ常習犯らしい、上辺は誠実らしい声。「わしじゃい。早えとこネーム送らんかい」「忙しゅうてのう」「豊田商事もどきの、稿料アップ大作戦でかいのう？」「グゲッ!!　ど…どこでそれを!?」「われい、うちゃ『エロトピア』んこつド腐れ雑誌でも、多田んとこほどのアホでもなか。このことをバラされたくなきゃ、締め切り守らんかい」「は…はい」むろんその後、この件は一切口外してないので、安心して下さいもりをさん。

（『漫画スキャンティ』'88・6）

エロ漫画界裏通り⑰

あ〜あ、まンだ背骨が痛えぞなもし。実はの、ゴールデンウィークに田舎さ帰って、野良仕事したんだ。ラジオで阪神対巨人戦を聴きながら、コンニャクイモさ植えてたんだども、阪神がえらく調子よくての、野良仕事もはかどったもんじゃ。けんど、下請けエロ漫画編集者なんつう浮草稼業してっと、体中が退化してらいなあ。痛てて…また腰が…。こんでも小せえ頃は、村でも評判の孝行息子だなんつわれたもんじゃがの。

こげなこつ、読者の皆様にゃ全然関係なかったばいね。かんにんかんにん。かんにんで思い出したけど、編集者が一番かんにんして欲しいんが、前号と前々号で触れた漫画家の原稿料アップと、もう一つが〝落とす〟っつうんだけど、原稿の穴をあけられること。

本人が病気や事故で死んじゃったんなら、少々気の毒とはいえあきらめもつく。死なんでも重傷なんつうのじゃ、「あのドジ野郎！うちの原稿仕上げてっから車にひかれんかい!!」てな捨てゼリフでも吐いて、泣き寝入りする。一番問題なのが〝仮病〟。肺炎で寝込んでるはずの奴の新原稿（普通落ちると、同じ作者の旧原稿を再録する）が、同時期に発売の競合誌に載ってたの見た日にゃ、怒りでボッキしたまつ毛がワナワナと震える。

競合誌の編集の方が、一枚も二枚も上手だったのだ。漫画家を恨んであちこちで、「あのド腐れ落としオカマエロ漫画家め、いつか

ブチ殺してやる!!」などと吹聴せずに、有能編集者の爪のアカでも飲んでりゃいいのですが、そこは生身の人間。修身の教科書のようには参りません。

落とされた編集者の心の中には、犯人への怒りが日々沈澱して行きます。5年経過。漫画家の原稿落としは、別名〝15のガキのセンズリ〟と言うくらいで、一度味わうと中毒に。その漫画家はあちこちで落としまくったあげく、遂にはニセ肺炎で大恥をかかせた編集部にまで、オメオメと原稿を持ち込みに来ざるを得ない惨状に。苦節5年!! この仕事をやってて良かったと、心底思う瞬間です。

「われい、どのつら下げてここに来よった? 顔色悪いがどうした? また肺炎かいのう。オラオラオラオラオラオラ!!」とは、決してプロ下請けエロ漫画編集者は申しません。「あ、お久し振り。わざわざ来ていただいて恐縮です」「い…いえ、こちらこそ…。いつぞやは大変御迷惑を…。とてもうかがえる立場じゃないんですが、最近どうもスランプで…。心機一転しようと、思い切って絵柄も変えてみました。よろしくお願いします」「いえいえ、こちらこそ助かります。では拝見させていただきます。ウ～ム、さすがですな!!(心底感動した表情)」「じゃ…じゃ…使ってもらえるんですね。いや～良かった。上の娘が高校に進学すんので、どうしようかと思ってたんです。家の方はローンが払えず、3年前に手放してますし。いや～良かった。塩山先生、ありがとうございます!!」

相手の感が極まった所を確認すると、クールに一言。「さすがですが、さすがさが10年古かったですね」この後のことは勝手に想像して下され。悲観したアナクロエロ漫画家が、電車に飛び込もうが、首を吊ろうが、一家でガス心中しようが、一下請けエロ漫画編集者には、一切の法的責任はないっちゅうわけですたい(エロ漫画家の皆様、今月の本欄は3度は繰り返して読みませう)。

『ロリタッチ』のくらむぼんが今月は足を骨折、原稿が大幅に遅れた。奴の事故を告げる電話を聞くなり、「命はなくても、利き腕は無事であれ」と、つい神様に祈ってしまう自分が、ちょっと恥ずかしいような今日この頃。

(『漫画スキャンティ』'88・7)

エロ漫画界裏通り⑱

いんやあ、毎日あぢてのう。けんどよ、わしゃあこのシーズンというか、6月のジメジメした時分が大好きでのう。ちゅうのもこの時期さなると、オナゴ衆がいきなりノースリーブ姿になるべよ。腋の下フェチのオラとしちゃ、毎日の満員電車の中も天国だなやあ。

そりゃあ、夏の真っ盛りさなりゃ、余計にノースリーブ姿さ増える。けんどよ、そん頃んなると、オナゴ衆の柔肌さ、コンガリ馬糞色に日焼けしてるべっちょ。おらあ、日焼けした女の肌さ、漫画家の原稿料を図書券でしか払わねえくせして、手前らじゃ著作権法違反の漫画本さ出したり、反原発&反戦ポーズ取ったりしちゃ、あこぎに銭っこさ儲けている、腐れゴロツキ業界誌、『COMIC BOX』同様にデー嫌いなんさ。

あれえ? オラ何の話さしてたんだっけ? そーだそーだ、オナゴ衆の肌の色さの話だったなあ。だってよ、日焼けした肌なんて、皮がむけたりしてよう、小汚ねえだけじゃんかよ。そったら肌っこさに比べたらに、6月の肌は長い冬と春の、暴力的なまんでの長いソデの庇護から解放された直後じゃけん、銀色さ光って、それはそれはたまらんばいね。

まだノースリーブさ慣れてねえせーか、時々腋毛を剃り忘れとるコが多いのもこの時分よ。ンなコが座ってるオラの前で、吊り皮さ握ってんの発見した時にゃおめえ、地球の引力さめっけたニュートンの気持ちさ、よ～く分かるもんだいなあ。

ンでだ、今月は何の話するんだったっけか? あっ、そんだそん

だ、今出とるロリコン漫画誌は、どれが一番オモロイかっつう話さすんだった。ワリワリ、近頃は物忘れが激しゅうてのう。普通こーゆー話は、編集にたずさわっとる人間は余りしたがらんの。フェアじゃねえっつーことらしい。人間的に未熟な場合は確かにそうじゃろ。じゃがオラのように、物事を客観的に見渡し得る中年は、その種のササイなことにゃこだわらんのよ。

▼第2位▲『ハーフリータ』

(毎月12日発売・松文館・５００円)…去年までは、「同人誌より下手糞な漫画家ばっか」と言われたゴミ雑誌じゃったが、今年前半より急速に充実。〝センズリ本〟に徹したというか、徹せざるを得ないというか、志の低さにも好感が持てる。戯遊群、蘭宮涼、三月うさぎ、森永水基らが良い。

▼第3位▲『ホットミルク』

(毎月3日発売・白夜書房・４８０円)…『ハーフリータ』に反比例、ここ半年急速につまらなくなった。ともかくセンズれない。もりやねこがいなくなったら、何の本だか分からなくなる。記事関係の趣味の悪さもひどい。常連投稿者の頭の悪さも、編集部のそれに比例して低下の一方。けど3位なのは、去年までの余熱のせい。3カ月後には、このままいけば当然ワーストグループ。

▼第4位▲『ペンギンクラブ』

(毎月15日発売・辰巳出版・３００円)…執筆メンバーにロクな者はいないが、エロ描写の過激さに脱帽。その筋に見過ごされてるせいだろうが、たとえそうだろうと、筆者にゃここまで実践する勇気がない。ただその種の勇気は半分くらいにして、漫画自体の企画、記事欄等、もちっと頭ァ使えねえの? (ないのを知ってて言う僕って、とても悪いコね)。

第5位はってんで考えたけど、後はロクなもんない。『アットーテキ』(一水社・４８０円)なんつうのは半年でつぶれんだろうし、『キャンディコミック』(日本出版社・３５０円)は安いだけの退屈本。『漫画ホットパンツ』(東京三世社・３００円)は便所紙にもならんし、見所のあった『チューリップ』(大陸書房・８５０円)は廃刊だしの。で、第1位は何だって? ヤボなこと聞くなよ。

(『漫画スキャンティ』'88・8)

新体操会社

冒頭からお詫び文です。前々号では特別に4ページいただき、好き勝手書かしてもらったのに、とんでもないミスを犯しました。50余誌あるエロ劇画誌の中で、数少ない推薦誌の一つとして挙げた『漫画ハンター』は、昨年末、つまり3カ月以上前に、廃刊になってたのです。ごめんなさい!!

まだ出てる雑誌を廃刊扱いするよりはマシだよと、内心で居直りつつ、今月は天才、新体操会社に触れてみたい。最近処女単行本、『思考錯誤』(一水社・８６０円)も出て、一部では知る人ぞ知る存在ですが、まだ世間では無名の部類。しかし、マイナー系の漫画家、というか創作者は全般に、無名のうちこそが食べ頃なのは御存知の通り。

彼の発表雑誌は、〝雑誌コードつき同人誌〟、あるいは〝雑誌コードつき裏本〟とも呼ばれている、『プチパンドラ』や、『漫画スキャンティ』。けれど、『スキャンティ』誌発表分は、極端な手抜きが多いので、今回は『プチパンドラ』11号に発表された、「ボルシチ回路」を中心に論じます。

扉からして意表を突かれます。一番前に機関銃を持った少女。その後ろの丘から、兵隊やサラリーマンが無数に駆け降りて来ます。丘のてっぺんに手をかけ、徐々に頭を出しつつある、坊主頭の巨大な男。どう見ても東条英機です。

ストーリーはないも同然。その人なりの感覚で解釈すれば良いのですが、ヤボを承知の荒筋紹介（行数埋めにもなるし）。生理不順の少女に赤紙が来ます。「へ？」ここまでが扉込みの3ページ。4ページ目からは、ハッキリ言って戦場ミュージカル。

「赤紙ひとつで呼ばれたからにゃ♪それが私の♪ご主人様よォ〜♬」といった楽譜風ナレーションが、ワープしっ放しの絵となぜか納豆のように絡みあい、異様なスピード感覚で読む者の胸グラを握みます。後はもうこづかれ放題。「エイズOS♪」「チャチャ♪」あっそう!!

欠点は、彼のオーケストラ指揮者としての姿が、まだ垣間見える点。読者への滅私奉公振りがより徹底される日を期待して、ペンを置きます。

（『ぺあ』'87・6）

雨宮じゅん

売れっコ漫画家が手抜き原稿を描くのは、中学生売春や警官の犯罪同様、昔から珍しいことではありません。筆者が幼少の頃、叔父さんの買って来た『漫画アクション』を盗み読みしたら、上村一夫の「同棲時代」の見開きページには、桜の花びらが何枚か描いてあるだけでした。他は真っ白。「こんなの僕にだって描けらい!!」まだツボミのようだった唇をすぼめて、小さな胸を怒りで満たしたのが、昨日のことのように思い出されます（本当は高校生だった自分が買った）。

カットを御覧下さい。『漫画ピラニア』1月号の、雨宮じゅんの「変態女教師／北原エミの逆襲Ⅱ」の一部です。題名のネーミングセンスが悪い等のことは、今回はあっちに置いときます。問題なのはこのページが、手抜き漫画として実に典型的である点。

第1にこの程度の構図で、1ページ丸々埋めるのがおこがましい。第2に、バックくらいは入れよ。小汚ない線をアシに引っ張らせてゴマかしてますが、線引いて商売になるのは、株屋か気象庁の小役人だけ。それに上着。拾って来たマジックででもつぶしてるんでしょうが、スクリーントーンくれ貼れっつうの。第3に、手抜きしといて自分で照れるんじゃない。「ばあ〜ん!!」という擬音が3つも描いてあるが、そう叫びたいのは読者、ないし、この原稿をもらった編集者。僕なら雨宮の頬を、「ばあ〜ん!!」と2〜3発殴りつけてやります。

第4に（実はこれが一番言いたかった）、この雨宮とかいう糞ガキが、エロ漫画を完全に舐めきっている点。「いいんだよ。俺にゃ『スコラ』があんの。『ピラニア』、ふん!!　インキンがうずくよ。描いてんじゃないの。描いてやってんの」との成金ガキ特有の奢りが、漫画全体にたちこめている。

第5には（実はこれが2番目に言いたかった）、この程度の落書き原稿をもらいながら、編集者が結構うれしがってるらしい点。貧すれば鈍すと言いますが、この手の奴は貧する前から鈍なのでしょう。

とはいえ内容は面白い。女装、喰い込み、マゾ男…全部筆者の趣味。頑張れ、手抜きのじゅん!!

（『ぺあ』'88・2）

三月うさぎ

戯遊群は銭っコがタップリ残ったせいか、最近全然面白くありませんが、それに反比例してボッキ力急増中なのが、三月うさぎ。あっ、すいません。今一番安くて一番抜けると言われてる、『ハーフリータ』（毎月12日発売・松文館・380円）についてなんです、今回は。「㊥研の越中くん」のキャラクターが、個人的に好みじゃないせいもありますが、濡れ場がいつも集団的すぎるのも、戯遊群

にイマイチ筆者が乗れない理由。その点、11月号の三月うさぎの、「勝手にすればぁ」は実に無駄がなく、エロ漫画の見本です。

生意気な美人家庭教師を、悪友とレイプしちゃうストーリーですが、構成が合理的で憎い。全12ページの作品なのに、扉をめくった後の見開き2ページで、家庭教師の美貌と勝気な性格、男共のキャラクター、どうして小屋に彼女を連れ込んだかを、全部説明してしまう。残りの9ページは、ゼ～ンぶ濡れ場。

作者の三月うさぎは、相当頭が切れると見た。普通なら景色、家庭教師との勉強シーン、ケーキを持って来る母親等をつい描いてしまう。しかし、彼（彼女？）は最初の見開きのトップのコマで、バストショットの家庭教師に、こう叫ばせてジ・エンド。「勉強中に何を考えているの孝二君‼ そんなんだからいくらやっても身につかないのよ‼」「今学期のテストではせめて平均点ぐらい取ってもらわないと　私立場がないのよ‼　孝二君‼」

いよいよ濡れ場。もう家庭教師は両足をロープで縛られ、大股開き。いちいち展開に無駄がない（もっとも、SMシーンを順に追って描ける程の技術を持った者は、劇画系も含めて、ほとんどおりませんが）。さらにうまいと思ったのは、いかにも手が早そうな2枚目の共犯者にではなく、ねぼけまなこの家庭教師の教え子の方に、まず犯させること。

コイツがズッコン行為中に、家庭教師の反応をいちいちダチに報告するのも笑わせる。これを読んでる多くの若い読者には、笑わせるどころか、あらゆる意味で非常に役立つネームでしょう。戯遊群が小さく見える鬼才です。

（『ぺあ』'88・12）

おがともよし

アクが強いため筆者は余り評価してませんが、知り合いのひねたエロ漫画好事家の間で、密かに人気を呼んでるのが、『漫画スマック』で連載中のおがともよし。同誌は、隔月で描いてる阿宮美亜の載る号のみ、ジックリ立ち読みしてましたが、阿宮なきはざかい期の号を手に取り、初めてしみじみとおがを味わう。

11月号の作品は「陰毛の放課後」なる、いじめっ子コンビと可哀想な少女の話。放課後の掃除の時に、悪ガキ2人が姦っちゃうという、実によくあるストーリーですが、男の子のコンビに味がある。

ボス格は平凡な顔した刈り上げ野郎ですが、笑わせるのは子分の、やたらに唇が厚いグロいツラの奴。こいつどうやら、刈り上げ野郎にホモ的感情を抱いてるらしく、「おい章二　なんか新しいブツねえか」と、新しい裏ビデオをねだられると、「そうッスね　最近買いに行ってないんスよ」なんて言いつつも、さらに「なんとかよ犬とやってんの　手に入れてくれよ」と畳み込まれると、「ひゃははは　峰さんにたのまれちゃ　しょうがねえな」と、ニタニタうれしがる始末。

ところが、刈り上げ野郎が少女を本格的にいたぶり始めると、唇男ジッとしてられなくなり、「ねえ‼　ぼくと悦子と　どっちが好きなの‼」と絶叫開始。この漫画が、急に面白くなる瞬間です。惚れられてる刈り上げクンは、むろん唇男に気があろうはずもなく、ズタズタにぶちのめす。「ああ～ん　僕の方が好きって言ってよ～～ん」と泣き叫ぶ唇男を見下ろす、刈り上げクンの冷酷な視線が素敵。

唇男が去った間に、当然刈り上げクンは少女をごっつぁんしちゃう。それも知らずにやっと手に入れた獣姦物ビデオで、彼の歓心を買おうとする唇男が、何ともけなげで気色悪い。

エンディングには、少女が刈り上げと出来たせいか、唇男を急に馬鹿にし始めるというオマケも。クセが強いため、読む前に飛ばしちゃう人も多いだろうけど、より細分化されつつあるエロ漫画の、

明日が見えてくる人なのかも。

（『ぺあ』'89・1）

真弓大介

妙に百姓臭いというか、編集者の平凡さがスパークしている、近頃流行のＢ５判ロリコン誌の一つ、『コットンクラブ』をめくっていたら、噂のみ聞いていた真弓大介を見つけた。逸材である。かなりのテクニシャンでもあるが、文字通りスパークする途切れ知らずのギャグセンスのさえに比べれば、取って付けたようなもの（それでも、エロ漫画業界の水準からすればトップクラス）。

やはり技術などというものは、石の上に3年もいれば、誰でもある程度は身に付くのだなあと思いつつ、彼の2冊のコミックス、『ナイトエレメンツ』と『裏表13番地』を読了。最新作が読みたいと思っていたら、知人から『ロリタッチ』という、縁日の夜店がよく似合う、実にいかがわしい雑誌を勧められ、いやいや読む。4月号の作品は「愛の家庭教師」。ネーミングセンスも悪くない。一気に読了。『コットンクラブ』掲載作に比べ数段上。コマ割りの呼吸の良さは、斎藤寅次郎監督の、戦前のサイレント喜劇映画をホーフツとさせる。

こんな才人がどうして、エロ漫画業界でくすぶってるのかと首をひねってたら、何かと評判の良くない『ＣＯＭＩＣ　ＢＯＸ』に、彼について触れたコラムが。この本、反原発特集なんか組んでて、意外と硬派なんだと思っていたら、真弓に惹かれて買った『ロリタッチ』のバックナンバーによれば、同人誌作家に稿料払わず図書券でごまかしたり、著作権法違反本をバカスカ出して大儲けしたり、一方でよそ様を図々しく著作権侵害で訴えたりする、表ヅラとは打って変わったゴロツキ本なのだとか。こんだけバトーされて一言も反論しない所を見ると、その通りなのでしょう。

むろん、真弓に触れたコラムも退屈至極でしたが、笑わせたのは、真弓のカットを引用した下についていた©マーク。ここが無許可で©マークを付けてるのは有名。ただの無許可引用より数段悪質。『ロリタッチ』編集部はまだ知らないようだから、早速投書して知らせてやろう（本誌のカットは、©なしの無断引用です。すいません）。

（『ぺあ』'89・5）

わたなべわたる

〝エロ漫画の割にはストーリーがしっかりしている〟という言い方があります。ホメ言葉です。けれど、情けない賛辞です。言う方にも言われる方にも、むなしさがつきまとう。窓際の妻帯中年サラリーマンが、自らの出腹色黒女房を、ジョイナーに似ていると思い込むのと同様な。

逆に、〝下らねえストーリーだけど、よくチンポを立たせてくれるエロ漫画だ〟との賛辞は、弁明めかしてない上、描く側読む側ともに、自らの器を悟り切った孤高の精神が感じられ、「イカすじゃねえか‼」と、トレンチコートの襟を立て、石原裕次郎を気取りたくなります。

その代表格は、『キャンディータイム』のわたなべわたるや、『レモンクラブ』のかおるでしょうが、かおるは構成に難点があるので、やはりわたなべが王様。

同誌7月号の「アイドルドッキリ㊙レポート‼」も、〝おめえヘソねえじゃねえか‼〟いや、〝おめえ脳ミソねえじゃねえか‼〟と、思わず凡人なら叫びたくなる下らなさ。けれど、それはサラリと軽く読み通した時だけの、表面的な感想だったのだなと、再読すると思わざるを得ません（濡れ場以外のシーンまで、この人の作品を読み返す人は、まずいないでしょうが）。

控え室で仮眠しているアイドルタレント。その部屋に必然的に迷い込んだ中年プロデューサー。アイドルがゴロリと寝返りを。すると、御自慢のDカップを包む衣裳のボタンが、〝プチッ、プリッ〟という音と共に飛び散り、ムチムチオッパイがプルルンコ。

この人の漫画を読み慣れてる者には、何でもないシーンです。特に、ティッシュ片手に一人で読んでると、何の印象も残らぬでしょう。けれど、これを不特定の人々が集まる白昼の場で、つまり、理性がオナニー以外にも向いている所で、落ち着いて読んでみて下さい。その傑出した漫画的技巧に、ウ～ンと唸らざるを得ないはず。

その点、『ペンギンクラブ山賊版』に、「サッキュバシィ絵夢」を描いてる紺屋たかしは、相当の大物と見ましたが、まだまだ悟り切れてないのは惜しい。

(『ぺあ』'89・8)

南極いちご

別に筆者は宮崎勤容疑者の親類でも、ホラービデオ、あるいはロリコン漫画で生計を立ててる人間でもありませんが、彼が逮捕されて後の、マスコミの集団ヒステリーには開いた口がふさがりません。

昨日まではレンタルビデオと異なり、5歳の子供でも自由に観られるテレビで、スプラッターをバカスカ放映してた連中が、「なぜ当局はもっと取り締まらない!!」。ア然を通り越し、ボー然。例えば、ポルノビデオで大儲けしている奴が、こう発言したら多くの人は立腹するでしょう。

「私の仕事は、教育産業のようなものだ。なぜなら強姦したいと思った男が、うちのビデオを観て、オナニーして犯罪を思いとどまるからだ。国は私に、勲章を授けるべきだ」

今のマスコミ、特にモーニングショー関係の馬鹿野郎共がやってることは、構造的にはこの発言と全く同じ。人間をパブロフの犬並に扱っている点でも、ピッタリ付合します。この論理がまかり通ると、学校の図書館から一冊残らず、シャーロック・ホームズ本を撤去せねばならなくなる。

わけの分かんない新人が登場しました。『マンモスクラブ』の南極いちごです。9月号に載ってる「君の瞳にフリーター」なる作品も、プッツンどころか、静脈も動脈もブッ切れてる感じ。小汚ないアパートに住んでいるフリーターが、人妻やノイローゼっぽい女子大生と、ワンサカワンサカやるだけの話ですが、その描写が分泌物過剰というか、とにかく汚ない!!

絵が下手糞だから当然そう見えるのですが、多分もう10年修行してもこれ以上にはならぬだろうピュアな下手振りのせいで、見た通りの腐臭生ゴミ漫画の割に、妙に明るい救いがあったりも。

けれど、前回取り上げたY・Y・Zの時にも思ったのですが、こういうド汚ないエロ漫画でオナる奴ってどんな方? 羊水状態への回帰だなんて、バカな評論家なら説明するんでしょうが、私には読者像が具体的に想像出来ない。

(『ぺあ』'89・10)

杏咲モラル

最後のエロ劇画界の新人と言われつつも、低迷していた杏咲(あんざき)モラルが、ここに来て一皮も二皮もむける成長振りを示しています。多作の人ではなく、『スーパーコミック』や、『漫画スマック』でしか、レギュラーの仕事はこなしてませんが、『スーパーコミック』連載中の「娼婦の妖虫」なるシリーズは、ロリコン漫画にレイプされた、エロ劇画の生き残りの方向も示唆しており、読ませます。

主人公の少女は、ネームでは特定されていませんが、どう見ても小学生(多分、編集部がビビッて検閲してるのでしょう)。名前は美咲。この少女、自分が好きになった同級生の男の子が、女子大生

に憧れていて振られたのを根に持ち、女子大生の彼氏に接近（ここらの早熟な小学生の心理描写は、杏咲の最も得意とする所）。何とか親しくなるのに成功しますが、美咲が余りに幼いせいか、あるいは時節柄か（？）、なかなか手を出してくれません。

そこで少女は、ロリコンおたくを公園で逆ナンパ。少々お遊戯の相手をしますが、いざ本番になると冷酷にも彼を〝ロリコンブタ〟扱い。傷ついたおたく野郎が尾行してみると、例の愛しの大学生の部屋に押しかけて半裸になり、「今日ここに来る途中ね　変なおじさんにここをいたずらされたの…」とブリッコしている。モルモットにされたと気づいたおたくが逆上、その大学生を警察に密告する所で1月号は終わっていますが、近頃のエロ劇画誌でこれだけ凝ったストーリーに挑んでるのは、杏咲の他には三条友美くらい。

ただ三条は、各キャラクターの心理描写は近年は苦手で、その分ハッタリのある絵柄を生かし、浣腸、刺青、緊縛等の、視覚的展開で人気を得て来ましたが、どうも最近は袋小路に入ってる感が。こんな中、絵はややチマチマしてるものの、ジックリ読ませ、キャラは限りなくロリコン漫画に近い杏咲は、ポスト三条の最有力候補。少年の感覚描写も抜群で、矢島みのる（細馬信一）のエロ劇画家時代を思い起こさせます。

（『ぺあ』'90・2）

MEEくん

ラブホテルに入って抱きつくなり、「何もしないって言ったじゃない！」と、わざとらしい言い訳をする女性は多いようですが、一種の前戯と考えるならそれなりの風情が。が、ベッドに入って、こちとらがガラパン一枚になってるのに、まだンな寝言を言い張る女性に出会うと、多くの男性は大魔人の心境になる（しつこく抵抗する女性に限り、なぜか顔も大魔人級なのが多い）。

エロ漫画家にも似たようなタイプがいて、ギンギンになったポコチンとティッシュ片手の自分が、ドアホに思えちゃう場合も。『キャンディータイム』のMEEくんは、その筆頭。僕もファンなので、同誌連載の「ひろみちゃん奮戦記」は欠かさずに読んどるのですが、昨今は「いつになったら抜かしてくれるんじゃい!!」と、絶叫したくなるばかり。

元々画力のある漫画家です。シャープな線を見ているだけで、惚れ惚れするほど。だからこそ、60～70年代のポルノ映画みたいに、ろくに男女の重なりもない、単品ヌード程度でお茶をにごされると、怒りは一層つのる。

「われい、いつまで乳首チラリや、お尻プルンくれえのことばっかやっとんじゃい。ンなことじゃあ、深夜TVにも対抗でけへんでっ!!」と、北関東生まれの筆者にして、訳の分からかん関西弁でタンカを切りたくなるほど。

この人、『漫画エロトピア』等の二流雑誌で活躍してるので、辰巳クラスのエロ漫画誌にグチャグチャエロシーンを描くのは、抵抗があるのかも。けんど兄さん、そりゃあアサハカな考えでっせ。二流だろうが三流だろうが、〝センズル読者〟に階級の差なんてありゃあせんのじゃっ!!（連載の初期は、もちっとごついシーンがあった）

同誌には似たようなタイプがもう一人。女流の谷内和生です。MEEくんに比べると、かなり画力が落ちます。多分人間の重なりも、描きたくても描けないのでしょう。ならば前戯シーン等で、もちっとサービスして下され。ティッシュ片手の僕達を、ンなにいじめないで!!

（『ぺあ』'90・3）

町野変丸

よく分かんないし、分かろうと努力する程のタマでもないのに

(矛盾してる。努力せねば分からねえような奴は、ハナっから大したタマじゃねえ)、それなりに発情ガキには人気あんだろうなってのが、『アットーテキ』の町野変丸。

初の単行本『ヌルえもん』(一水社・830円)は、筆者の身辺にも2〜3持ってる者がおり、「読んでると気持ち良くなる」とか、「この業界としちゃ、いがらしみきお以来の逸材では」との、やや興奮した声も聞かれますが(この手のマイナー系雑誌の読者の、初物買いへの興奮を語る姿は、その説得力のないナルシズムゆえ、自ら肛門の臭気を語る以上に見苦…いや、嗅ぎ苦しい)、どーもアッシにゃ好きになれねんですョ、旦那。ポン!!(キセルの灰を落とす音)

要は筆者の個人的好みで(幼女に全く興味がない。その傾向は、自分の娘が成長するに連れて余計に強まった)、彼の魅力が理解出来ないのです。で、こういう時に無理に理解しようとする、中年の脂ぎったヤロー共の顔つきが、マイナー系雑誌の初物買い趣味読者と同様に、気色悪くて大嫌い。と、色々とグチってるけど、正直な所を告白すれば、コイツ(町野変丸)の漫画はパラパラめくるだけで、ジックリ読んだことなかった(ゴメンゴメン)。

で、同誌6月号の「ヌルえもん」第9話、〝白い巨塔〟ってのを、ポン!!(例の音)、あっしも恥ずかしながら、隅から隅まで、ズズズイーッとばっかし、いい年こきゃあがって、読ましてもらったと考えねえ、よォ、旦那。てんごうな漫画でな。一昔前なら、全員獄門ハリツケはまちげえねえ。ポン!!

とはゆうもんの、役立たなくなってえらくたつのに、ナニがピクンと来たから、人間てなあ罪な生き物だねェ。変丸とやらの漫画、懐かしの〝お医者さんゴッコ〟の匂いがプンプンするずらョ。それがオメー、てんでたまんねんサ。このヤロのケツの穴趣味は、ハンパじゃねえずらョ。おんなじ号に載ってる緒図乃真朋っつんも、昔はンな魅力があったども、上手くなりすぎて今はダメじゃて。変丸よ、上手くならず、お医者さんゴッコに専念するずらよ、ポン!!

(『ぺあ』'90・5)

上総志摩

古い人ですが、ちっとも上手になりません。「ひょとして、これが彼の個性なの?」とまで言われてしまうのが、上総志摩。ロリコン漫画家としては完全に長老格。同時期に活躍した、内山亜紀、島崎れむ、番外地貢らは名前を見なくなりましたが、「下手だ! ゴミだ! カスだ! 権力の手先だ!」等々の悪口のシャワーの中で、しぶとく生き残っている上総を見ると、峠を越えた自らの人生にも、やや希望を見出したりするから不思議。

確かにカットを見れば分かるように、絵は稚拙。ワンタンみたいな描線にも、全然色気を感じません。喰わず嫌いな人も多い。が、ストーリーは、ジックリ読むと結構面白い。面白いと言っても、構成がしっかりしてるとか、ネームがフィリップ・マーローしてるとかの次元じゃない。要するにデタラメ。

「エロ漫画なんちゅうのは、どれもこれもデタラメに決まっとろうが」との、お叱りを受けそうです。確かにそういう傾向が強いのは、僕も否定しません。が、一応は、「いやだいやだと言いながら、下の口はグチョグチョじゃねえか」的作品にも、3ページ読めば割れるとはいえ、〝落ち〟もあるもの(電車の中で痴漢に遭い、ツラ見たら亭主だった…とかの)。

上総の作品は、そういった通俗的配慮は一切なされてません。ならば、ただ姦りまくってるだけかと思いきや、そうでもない。この種の漫画としては登場人物も多いし、場面転換も頻繁。でも笑ってしまう。なぜかといえば、最初の伏線を途中で捨てちゃうのなんか

朝飯前だし、キャラが描き分けられてないから、話が全然理解出来なかったりとムチャクチャ。しかも、なぜか復讐を誓うヒロインは、いつも逆襲され犯されっ放しでTHE　END。とんでもない極悪漫画。

勧善懲悪ならぬ、ルイス・ブニュエル風〝勧悪懲善エロ漫画家〟とでも申しましょうか。エロ劇画誌等での活躍も多いようですが、決して上手にならずに、その道を極めて下さい。（『ぺあ』'90・7）

ちゃたろー

劇画系、ロリコン系を問わず、一番退屈なエロ漫画は、SEX描写がスポーツ化しちゃってるもの。Dカップエロ漫画家として一部に人気がある、ぽいんと☆たかしはその典型で、「おめえ何も分かっちゃいねえな」と、ちっとも硬度を増さないチンポを片手に、説教したくなります（筆者のそれがいつもふにゃついてるのは、ぽいんと☆たかしだけのせいではないが）。『キャンディータイム』等で活躍中の、ちゃたろーセンセもその一人。むろん、キャラクターの商品価値、スクリーントーンの処理技術においては、ぽいんとなど足元にも及ぶ存在ではありませんが、こんだけの技量を持ちながら、何でスポーツマン精神のみ溢れる、非刺激的エロ描写しか出来んのだろうと、いつも不思議に思ってます（担当編集者の頭が悪いでのでしょう）。

具体的に言えば、余りに女のコを簡単に脱衣させすぎる。確かに現実の女のコは、「服がシワになるから…」とおっしゃったりして、男に脱がす楽しみを満喫させませんが、これは漫画なんです。「いやっ、もうこれ以上は…」とかのたまわせつつ、擬似ストリップを演じさせて下さい。

パンティ一枚の状態になりましたら、それをクルリと脱がせる前の、見たり、嗅いだり、突いたり、つまんだり、しゃぶったりのシーンに、最低3ページは費してよね。おねげえしますだ!!（筆者は中年でやや脂ぎり過ぎてるかもしれないが、主たる読者層の童貞中高生も、似たような心境では？）

前段のカッコ内の、多くの童貞中高生の代弁をすれば、そもそも彼らは、SEXなんかしたことがないのだ!!　この点を、決してエロ漫画家は忘れてはいけない。つまり、インサートシーンは確かにないとまずいが、あまり早い段階でそれをされ、「ほ～、中がヒクヒクして良く締まるじゃねえか。まるでタコツボだぜ。おっおっおっ…」とおっしゃられても、読む方はチンプンカンプン。

つまり〝前戯描写〟こそが、エロ漫画の本質（他のポルノメディアも同様）。その点の努力と、コマ割りをもう少し工夫すれば、この人はボッキ派の巨匠です。（『ぺあ』'90・9）

伊魔崎斎

他人様がどんなエロ漫画をネタにオナニーにふけろうと、第三者がとやかく言う問題じゃないでしょうが、それにあえてゴタクを並べるのが筆者の仕事。

で、取り上げたのが、昔からイモだゴミだチリだと言われつつ、なぜか発行され続けている、『ヤングビタミン』（辰巳出版・320円）。明日香のぞみ、白井薫範、みづの剣士、並木みどり、弾丸三四郎、伊魔崎斎…ウ～ム。確かに読者にコビない、編集者が進取の気性に富む、今時珍しいスピリッツに満ちた雑誌（高潔な編集者諸氏の、売れ行きを無視してのお仕事、御苦労様。〝こうすれば売れない〟とのサンプル雑誌も、一誌はなけりゃ）。

どれもこれも、ニラレバイタメとギョーザを食べて吐いた奴のゲロを、秘伝のクサヤのタレで95日は漬け込んだような、クッサーイ

臭気に満ちた作品ばかり。中でも異彩を放っているのが、「ウィザードフォース」なる、カッコいい題名の作品をお描きになっている、伊魔崎斎大センセ。

古い人です。この人が好きなのは、その長〜いキャリアにもかかわらず、ち〜っとも、それこそ古女房の処女膜の残りカス並に（ホントはカスも残ってないが）、進歩がないってこと。ただ、心意気だけは並の漫画家の10倍はあるようで、色々とチャレンジなさる。テクは例によってなので、結果は必ず大失敗。僕はそのギャップをギャグとして楽しんでるけど、銭出して買う読者はたまったもんじゃないよね。

どういう連載なんだって？　仕事なので仕方なく、吐き気を押さえながら読んでみたけど、ち〜っとも分かんない。オメコシーンらしきゲロ描写の間に、時々男女が怒鳴ってる大ゴマが入ってるって以外は。情けないことに最終ページに、「みんな手紙くれよー(伊)はさみしーぞー」だって。ショーがねえ奴。

きっと意味のない大ゴマでの登場人物の絶叫は、作者の自ら稚拙さへの怒りなのでしょう。エロ漫画家志望の読者の中には、他山の石とすべき方も多いのでは？

（『ぺあ』'90・11）

かたせ湘

予想通り、関西の主婦の方々が果敢にも実行なされた〝反H漫画キャンペーン〟は、『ヤングサンデー』や『ヤングジャンプ』の総ザンゲにより（ずいぶん今までのエロ路線で儲けたんだろうね、小学館と集英社は）、結局そのシワ寄せを中小のエロ本出版社が一身に受ける雲行きに。『小学一年生』や『週刊明星』に、路線転換したくとも出来ないエロ本出版社の中には、屋台骨が傾く所も出て来るかも。

反公害や自然保護運動は、幾多の人間が息長く展開しても、相変わらず苦難の道が続いていますが、〝お上受けのいい〟管理強化キャンペーンは、この通りの大成果。〝弱い者いじめ国家日本〟の典型的光景ですが、一方で酒やタバコの自販機、スピーカー騒音等は野放し。大した大国とやらもあったもの。

てなこと考えながら、路地裏の小さな、それこそ『少年ジャンプ』やベストセラー書籍などまず配本されそうにない、親父一人で深夜まで営業してる書店で、立ち読みして見つけたのがかたせ湘（エロ本とエロビデオで成り立ってるこの種の零細書店も、これから大変でしょう）。

『コットンコミック』や『ドルフィン』で見かけるこの漫画家、かなりのブルマーフェチ。濡れ場になってもブルマーを、なかなか脱がせません。ブルマー越しの性器を、種々のスクリーントーンと削りのテクを駆使、微妙な形に浮き上がらせては悦に入ってる様子がありあり。いいですね、こーゆ誠実な人の漫画って。

が、〝視姦〟方面に力が入り過ぎているためか、フィニッシュの性交シーンがややおざなり。一応は発射させとかないと、読者に対して不親切だから―てな調子なので、下手すると見落とし、この種の漫画としてはドケチな、前戯シーンのみの作品と誤解されかねません。もう少し自分の楽しみを抑制し、濡れ場シーンと対決すべきでしょう。

（『ぺあ』'91・2）

中山たろう

サッパリした男性キャラが上手なのもこの人の特徴。劇画系はともかく、ロリコン系も男となると、脂ぎったギトギトフェイスしか描けない漫画家が多いですから。厳しいH漫画環境の中で、めげずに頑張って欲しい新人です。

最近若づくりを心がけている『EROTOPIA』（旧『漫画エロトピア』）ですが、やはりお里は争えないらしく、懐かしの〝ドエロ劇画〟の血が断ち切れず、フランス料理店で煮込み定食をかっ込むような、居心地の悪さがつきまとう。

前田俊夫から真弓大介ならともかく、もりやねこまで一冊にまとめるってセンスがアナクロもいいとこ。こういった過去の栄光を捨て切れない因業雑誌は、時々漫画家に犠牲者を生み出す（ンな程度のエロ漫画誌の編集の口車に、乗せられる方もアホなんですが）。「怪盗エンゼルス」という連載を開始した、中山たろうはその筆頭。知っての通り彼は、かつて『ホットミルク』等で活躍した、作風はやや暗いものの、テクは十分の実力派。が、今の彼ときたら何トチ狂ったのか、ギンギラの劇画家になっちまってる。

この連載は天才ギタリスト、瀬川京介クンが主人公ですが、扉のタタキからして、〝いっただきま～す♥　聖夜を濡らす天才ギタリストの官能ビート！〟てなシロモノ。編集者のモーロク振りが、ストレートに表われてます。

それはともかく、中山自身は非常に努力しています。テクに一層磨きがかかってるのも確か。同一コマにキャラが5～6人異なる位置におりながら、遠近感、デッサンが狂っていない漫画家なんて、そうはいません（デフォルメされたキャラならともかく、今の彼は超リアリズム派ですから）。

が、中身は全然面白くない。元々影と固さのある中山に、音楽畑の素材を描かせるのがミスキャストなのですが、絵の上手さに比べて、この退屈さは尋常ではありません。あたかも落ちぶれたエロ劇画家の、見様見真似で描いた、〝ニセ物ロリコン漫画〟を読まされているような。

ここまで書いて気づいたんですが、中山はその逆をやらされてるんですね。本来は良い物があるのに、アナクロ雑誌のセンスに迎合させられ懐メロを唄っている。これもまた人生ではありますが——。

（『ぺあ』'91・3）

悠理愛

しばらく前に見た時、ハシにも棒にもかからぬ駄本だったので、もう廃刊になったと思っていたら、まだ出てたんですね、『漫画ホットパンツ』って。

パラパラとめくると約1年半の間に、かなりカルトな漫画誌になってるのを発見、思わず「ホ——ッ」と、擬音入りで驚く。メンバーは中総もも、さかしたR、谷内和生、ふとがね裕美、悠理愛と、原稿料の安そうな新人がメインですが、注目したいのが悠理愛。

これはもう、完全に来てるというか、行っているというか、独自の世界に生息なさってる方々の世界。大昔、プッツンというはやり言葉がありましたが、四六時中、プッツンingなされている高貴な方々の、香しくて気色いい、世迷い言漫画とでも申しましょうか。

ストーリーはよく分かりません。これは何も、連載だからばかりでもない様子。多分一冊にまとめられた物を読んでも、表面的な粗筋はともかく、作者の言わんとするストーリー、いや物語は、理解できないのでは。

だってこの方の漫画って、一コマ一コマでそれぞれ完結しちゃってる。カットに用いた4月号の作品の扉を見て下さい。分かります？　もう完全に一度来て、タッチした後で行きまくってる絵ですよ（書いてる自分もよく分からないが、この人の漫画はどの一コマを見ても、読む側が気持ち良くなることはもちろん、描かれたキャラの側は、その数10倍のエクスタシーを感じているようなのだ！　下世話な言い方をすれば、一コマごとに発射された精液の香りがする）。

普通この種の自己陶酔は、例えば能篠純一、かわぐちかいじ、石井隆、大友克洋、藤原カムイ、近藤よう子らに典型的なように、聡明な人間にはバケツ一杯のゲロを催させますが、この無名ロリコン漫画家の作風にはそれが一切ない。

きっと大成する人でしょうが、B5判ロリコン漫画誌が主流になった今、この520円もするA5判雑誌がいつまで持ちこたえられるか。雑誌の運命などはともかく、この超ナルシストの未来は気になります。

(『ぺぁ』'91・6)

りえちゃん14歳

よくそこまで虫のいい発想が出来るもの…てな設定のエロ漫画が、男性読者の人気を得るようになって大分たつ。何年くらい前からなのかは不明ですが、エロ劇画の凋落と、ほぼ軌を一にしていたのは確か。

『SMセレクト』や、谷ナオミ主演のSMポルノが持てはやされたのも、ついこの間の気もしますが、今やああいった〝攻撃的SEX〟を主(メイン)に据えた世界は、エロ漫画類に限らず、全てのポルノメディアで不人気とか(70年代後半には、〝レイプブーム〟てなのもあり、漫画界でも山崎亨という方が、双葉社で強姦を素材にした作品を連打、〝レイプ漫画の鬼〟と言われてました。『レイプマン』の元祖です)。

『ホットミルク』誌上で時たま見かけるりえちゃん14歳(時節柄、この過激なペンネームには感動)は、深さを人一倍感じさせる、透明感溢れる画風で将来が楽しみですが、同誌7月号で、そんな虫のいい軟弱読者が、泣いて喜びそうな作品を描いてます。

「ラブゲーム」と題された作品の主人公は、女子中学生。年上の彼とデートをしますが、彼はカラオケBOXで悪酔い。とまどっている少女に、失恋したと打ち明ける始末(ふざけたヤローだ!!)。中学生の主人公なんて、恋愛の対象外だったのです。

酔いつぶれた彼を、タクシーで中学生がアパートへ送って行きます。するとこのヤロー、スースー。ここから少女の活躍開始。粗筋を読めば分かるように、エロ劇画であれば、完全に男女の設定が入れ替わっていて当り前。が、今の発情オガキ様の間では、〝強チン願望〟こそ保守本流。

わたなべよしまさや、かおるといった連中がこの手の素材を扱うと、「またかよォ」とゲップが。が、りえちゃんの流麗なコマ運びや、カマトトぶったネームのユーモアははじけており、〝やりそうでやらない〟「君の名は」的な設定も、NHKのドラマと違い、もう3年くらいはダラダラ続けても大丈夫。虫のいい発情オガキ様方は、ティッシュを振り振り応援してくれるでしょう。

(『ぺぁ』'91・8)

井上英樹

お昼時の花火、あるいは浮気するとインポのくせに、古女房の前じゃギンギンのペニス、または私服の婦警へ挑んだ痴漢とでも言おうか、間の悪いオマヌケ野郎はどこにもいます。

エロ漫画界とて同じ。今時、新しいエロ劇画誌を出す版元があるんだからビックリ。その名も『漫画ストレート』(雄出版)。文字通り3号で、『スーパーコミックスペシャル』や『漫画パラダイス』同様に廃刊だと思ってましたが、まだヨタヨタ続いてる様子。化石と化したメディア(エロ劇画誌)にいくら水や肥料やろうとも、芽を出すとは思えないのですが。

一番驚いちまったのが、あの懐かしのエロ劇画家、井上英樹センセが、久々にその健筆を奮っていたこと。古い人です。亀和田武センセや、高取英センセが御活躍あそばした、懐かしの〝三流エロ劇画ブーム〟とやらの頃には、共産同赤軍派の塩見孝也議長が〝日本

のレーニン〟と呼ばれたのと同様に、〝エロ劇画界のバタイユ〟と呼ばれてたらしい。恥ずかしさの余り、自分の肛門をおっぴろげて隠れてしまいたくなりますね。

昔から下手糞でした。熱意だけは、15～16のマスカキ少年のザーメン以上に豊富なのですが、何せテクがついてかない。だから、抽象的ネームやコマ割りで、ハッタリをかまして逃げる（篠田正浩の映画を連想させる）。加えて、真崎守以上に魅力のない女性キャラ。当然、彼の執筆した劇画誌は次々と廃刊に（村祖俊一とよくガン首を並べてた）。

そのバタイユが、季節はずれのオマヌケエロ劇画誌で描いていたのが、『漫画ローレンス』張りの人妻浮気エロ漫画。彼のキャラじゃ、少女は無理でしょうしね。読んでみると、相変わらずテクは未熟だし、コマ割りも古臭いのですが、妙にエロい臭気に満ちてるので驚きました。かつての彼には全然なかったもの。

苦労したのでしょう。噂では劇画家を廃業後、ピンク映画関係に身を投じてたとか。落日の業界を転々とするとは、オマヌケな奴。ともあれ、エロ劇画界は文字通りの新人は皆無で、彼のような舞い戻り型が時々現われるのみとか。わびしいけど再生上手で、エコロジックな業界じゃありませんか!?

（『ぺあ』'91・11）

時坂夢戯

かつてのドエロ劇画誌の雄、『漫画エロトピア』が、『EROTOPIA』とリニューアルを図って何年たつのかは忘れましたが（興味もなかった）、ようやく〝セブンイレブンでも売ってる数少ないB5判ロリコン漫画誌〟としての、体裁が整いつつあるようです。

執筆メンバーも、和気一作なんつう『漫画ラブトピア』全盛時の残りカス、もとい、残党を除けば、真弓大介、海野幸、谷内和生、水谷零G（コイツは下手糞）、時坂夢戯、佐藤丸美、ねぐら☆なおと、決っして豪華とまでは言えないまでも、20世紀末のオナニスト達の心をなごまし得る連中かと思われます。

初の長編成功作になりそうな、「ライオンMAN」の連載を開始した真弓大介に関しては、かつて本欄でも触れたのでアッチに置いとくとして、今回は「DRAGON ERASER」を断続的（入稿がよっぽど遅いんだろうね）に連載している時坂夢戯。

一読というか、一見して感じるのが、恐るべきスクリーントーンの量。〝ここの世界とは違う〟所から来た、このみなる少女を守る白都クンのお話ですが、「ウッヒョーッ! すんげえトーンの量。おまけに細けえ削り。こりゃページ1万以下の稿料じゃ完全に赤字だナ」てな邪念が入り、なかなかストーリーが頭に入って来ない。

が、ジックリと読むと、これが新手の格闘技漫画だということが分かって来ます。白都クンは探偵事務所の調査員ですが、〝竜族が支配する世界・ファンタリズン〟の化け物を相手に、捨て身の大活躍。むろん、ボロボロにされちゃうのですが、鋭利で青竜刀みたいな画風を身上とするこの人は、〝痛み〟の表現がなかなか巧み。このみちゃんじゃなくっても、思わず涙ぐんじゃいそ。

メタリックな時坂の画風だと、従来の格闘技漫画のような汗臭さは感じられませんが、そこが逆に今風です。素速いコマ落としも、時にはセル画の枚数をケチッた、安手のTVアニメのように思えなくもありませんが、スピード感を多くの場合に与えてる。〝メタリック格闘技漫画〟の原稿落ちがないように、陰ながらお祈りさせてもらいます。

（『ぺあ』'91・12）

中ノ尾恵

蛭児神建という、いかがわしさの北極星みたいな兄チャンが編集

していた、アヴァンギャルドロリコン漫画誌『プチパンドラ』の時代から、一水社という新橋の場末の零細出版社は、デタラメ雑誌を出して好事家を喜ばせています。

またやってくれました。『LOVEゆり組』（A5判・平とじ・520円）だってサ。松原香織なんつー、それこそ蛭児神のゲップの臭気に満ちた、古〜いオッサン漫画家の表紙は（松原が女だなんて思ってるヤロは、まさかもういないよネ？　単なる脂ぎった中年男）、色盲の気のある編集が色指定をしたらしく、作品名、漫画家名もほとんど読めません。

どうせエロ漫画本よ、結局は…てな身も蓋もないこと思いつつ、ペラリペラリ。そうめぐみなんつー、ケロヨンみてえなキャラしか描けんゴミは飛ばし、さて次はと見れば、近頃すっかりごひいきの、中ノ尾恵の登場。題して「微熱、DIARY」。

いきなりトイレのシーン。いいゾ！　もれちゃいそうな男がドアを開くと、カワユイ少女が〝ジョボジョボ〟と放尿の真っ最中。「いやあッ！　仲尾さんっ見ないでェーっ!!」ウッシッシ、ますますええゾイ！　見られちゃったこの少女、「許せないっ!!」とか言いいながら、見た男にも眼の前で放尿しろと責め立てます。するとこのヤロ、何と女みたいな格好で放尿。「あ…何だろ…？　何か興奮してしまった…見られながらオシッコするって変な気持ち…」と独白しつつ、興奮したおももちで少女と向かい合い、「み…見た？」「見たわ…」とかの会話(前戯)を交す。こりゃ立ち読みですますわけにはいかぬ、ナイスな変態コミック誌じゃわいと胸を踊らせ、即レジでチ〜ン!!

一番オイシイ所は、自分の部屋でコッソリと…ルンルン。こんな時の帰り道は最高。新しいテイッシュの箱まで用意して、息を荒げながら読み進むと、ガチョ〜ン。何と仲尾さんて、男じゃなくて女だったんスよ。しかもこの本、この中ノ尾のだけじゃなく、ゼ〜ンぶがレズ漫画。

ぼやけた表紙をよく見れば、ちゃぁ〜んと〝愛がある…女同士〟とのコピーも。が、多くの凡愛にふける凡人に、この雑誌は果たして役立つのかしらね？　不安ざまス。

（『ぺあ』'91・1）

しのざき嶺

突出した〝反社会的ネタ〟同人誌制作で知られるしのざき嶺は、実につまらぬ絵を描く漫画家としても有名。淡泊な描線は二昔前の少年誌まがいですし、男女を問わずに魅力のないイモキャラには、既婚者なら色黒な愚妻を、独身者なら押し入れに隠してある、南極Z号を思い出さぬわけにはいかないでしょう。当然、彼の通った後には廃刊誌の山が。

今彼が、「もう誰も愛せない」なる作品を連載している『ドルフィン』が、その山のにぎわいに花を添える運命なのかは不明ですが（彼を巻末で起用している点に、やや救いを感じる）、例によっての退屈極まりない絵柄ながら、相変わらずストーリーは抜群の面白さ（だからこそ、マヌケな編集が懲りずに次々と依頼、のめり込んでは巻頭カラーまで任せ、雑誌を廃刊に追い込む）。

いつもの少年の女への変身願望をしつこく追求した、超マンネリネタと言ってしまえば身も蓋もないのですが、同傾向の他の漫画家の作品にない、臨場感というか、ウォルター・ベンヤミンが言う所の、アウラのようなものを感じさせます（年がバレますね）。

淫乱な姉が、女装して手を縛られた弟の前で、中年男とのSEXを見せつけるという2月号のネタも、やはり読ませます。姉達が外出した後で少年は、責められる姉に同化せんと、バック責めでの姉と同体位を取り、ビールビンをペロペロ。で、アヌスにズブリ。姉と同じように、「ああっ突いてもっと突いてェ!!」と絶叫するので

すが、下手な絵ゆえの緊迫感が、妙に読む者の心を打つ。
そう、彼のアウラとは、常にその稚拙な技術と同居している。より流麗な線を引けるようになった時は（あり得ないが）、彼の作品の臨場感も消えてるでしょう。ただ将来を考えた場合、彼の今のストーリー性で傑出し、絵は三流という立場は、一考を要するのでは？
下手に商業的に妥協して二流を目指すよりは、〝芸術的女性崇拝エロ漫画〟に徹し、孤高の存在を目ざすべきです。今のままじゃ、色物扱いの果てに消えるしかありません。

（『ぺあ』'92・3）

美衣暁

久保書店発行の単行本形式の雑誌や（誌名はしょっちゅう変わるので覚えてない）、『花いちもんめ』、『レモンクラブ』などで見かける美衣暁は、中堅の部類に入る作家です。が、流麗な描線は依然としてエロく濡れており、よほど不幸な性生活を営んでいるのだろうと、余計な世話をやきたくなります。
そのスカした作風や、自己陶酔の過ぎる各キャラのアングルを見ると、「チッ！　粋がってんじゃあねえよ。お里が知れるぜ!!」と憎まれ口の一つも叩きたくなりますが、これも一つの個性とあきらめてジックリ読むと、どの作品であれ傑作とまでは言えないまでも、エロ描写のみに流れることなく、それなりの話づくりに成功しています。
話の中身は画風と異なり、案外泥臭いものが多く（そのアンバランスさが、読む者のエロ心をくすぐる）、TVドラマで言えば、一昔前の傑作『特捜最前線』を思い出したりしますが、彼の今の所の代表的単行本、『言霊（ことだま）』（日本出版社）の解説を読んでいたら、少し引っかかる部分が。

彼はこう記しています。〝…単一民族である日本人が一神教でなく多神教であるのは日本語（言霊）を以て宗教としているからである、と言うことを聞いたことがある。果たして言葉は面白い〟美衣自身が石原慎太郎ばりに、アナクロな「日本人単一民族説」を主張しているわけではないのですが、言葉へのこだわりからなる作品集の後記で、彼自身がこういう愚論に対し、曖昧な態度を取っているのは惜しい。
最近、彼のB5判の特集本が出ました。『キャンディクラブ』8月号で、懐かしの『ロリタッチ』時代の、〝リリスシリーズ〟が6本収録されています。確かこのシリーズは10本程あったはずで、中途半端な刊行ですが、依然として新規単行本が少ない今、こんな物でも貴重だからと一冊購入。
で、思いました。この人は、昔から同じ曲しか唄わぬ人なのだなぁと。しかし、何曲もの持ち歌があるかのように思わせる彼のテクは、やはり並ではないのです。

（『ぺあ』'92・9）

九紋竜

大昔に、本欄でも取り上げたことのあるケン月影は、『漫画ローレンス』等のエロ劇画誌ばかりでなく、『日刊ゲンダイ』あたりでも大活躍ですが、似たタイプの絵の九紋竜は、最近めったに見ることもなく寂しい限り。
だいたい、彼の描く雑誌ってすぐ廃刊になっちゃう。『劇画ジャック』、『漫画ブッチャー』、『漫画ゴリゴリ』。九紋自身はエロを描き惜しみする人じゃないので、廃刊の理由は他にあると思うのですが（廃刊誌の常連漫画家は、昔なら井上英樹、村祖俊一、諸川拓、小鈴ひろみ。今だとしのざき嶺、綾坂みつね、白井薫範、後藤寿庵らが代表格）。

一見して分かるように、本来は時代劇の人。女性は人妻くらいのキャラを描いてる限りは目立ちませんが、男の顔はどうしても、戦国時代の若武者っぽくなる。今の読者なら古臭さを感じるのも当然。多くの時代物エロ劇画家が消えたので、彼も必死で努力していますが、今の路線になって10年近いのに、まだ男の腰に刀がちらつく。

ケン月影は違いました。一時、現代物にも手を染めてたのですが、やっぱり柄ではないと悟ったのでしょう。従来通り時代物エロ劇画オンリーに。で、その頃になると、時代物を描くのはケン一人となり、逆に商品価値はグンと高まったのです。

ケンは昔から業界でも有名な〝商人（あきんど）漫画家〟でしたから、計算もしていたのでしょうが、九紋とその後の漫画家人生を比較すると、文字通り〝天と地〟。が、そういう差が生じたのは、商人性の有無が全てではありません。やはり、九紋はエロ漫画家として三流なのです。

彼の漫画は男女が出てくると、いつも、いきなりベロベロ（フェラチオ）、ズボッ（本番）、ドピュッ（射精）の馬鹿の一つ覚え。ケンの漫画を思い出して下さい。武家の奥方はいきなり尻から登場。〝クイックイッ〟との尻の動きを2ページは見せた後、やっとドスケベかごかきの登場となる。これこそがエロの基本なのです。入れるだけのエロ漫画で抜けるのは、15のガキ共だけ。

（『ぺあ』'92・11）

ふぁんとむ

近頃はあまり見かけませんが、一時大量生産していたねぐら☆なおは、〝和姦漫画の王様〟と言われてました。僕は脳天気なその路線は嫌いじゃなかったのですが、漫画家自身が飽きちゃった様子で、シリアスっぽいのや、ギャンブルネタにまで手を出し、結局は人気を落としました。

漫画に限らず、どのメディアでもよくあることです。「これでいいっちゅーのにィ!!」と客が絶叫してんのに、「本当の俺は、もっと色んな分野にチャレンジ出来る奴なのだ」と、勝手に作家の側が思い込んでしまう。

今回のふぁんとむも、何とも脳天気な白痴エロ漫画を描くシロモノです。廃刊になった『マンモスクラブ』でうろちょろしていた漫画家ですが、当時は『フラミンゴ』っぽいと言うか、臭い、ギトギトしたエロ漫画しか描けない、ヤボテン作家でした。

『レモンクラブ』に移ってから、急速に女のコのキャラをライトで今風の馬鹿姉ちゃんに変えたのを見て、「へえ〜」と思わされた（男性キャラは今でも相当に泥臭い）。馬鹿度を増したのがストーリー面。〝馬鹿の居直り〟とでも言うのでしょうか、「エヘヘ。私馬鹿なんだもん、しょうがないでしょ。エッヘヘ」的な馬鹿姉ちゃんを主役に据えた、吸血鬼物やエスパー物の馬鹿祭り振りには、あきれるというよりか、興奮してしまいました（!?）。

もう一つ彼には売りがありました。ギャグセンスです。元々『レモンクラブ』は、業界のお笑い雑誌として有名だったので、水が合ったのでしょう（同誌の3大スターと言われる他の2名の、妖華や真弓大介にしろ、ギャグセンスを抜いたら何が残るというのでしょう?）。

後はもう〝業界の藤山寛美〟として、徹底したノータリン路線を歩む道しか、彼には残されておりません。一昔前の喜劇役者みたいに、ちょいと売れると「シリアスな役を」なんて言い出したら、すぐにねぐら☆なおです。それに、「これでいいっちゅーのにィ!!」との客の声は、「お前にゃこの程度しきゃ出来んよ」という意味も含まれていることを、漫画家は胸に刻むべきでしょう。

（『ぺあ』'93・1）

魔北葵

業界通によれば魔北葵は、〝下手でビンボな割に大口を叩くバカ野郎〟として有名なんだそうです。何でも1年程前の、『Ｂｅａｔ』という雑誌のコラムでの放言が、その噂の原因とか。

いいじゃないですか、〝下手でビンボ〟な野郎の大口くらい。確かに〝達者で金持ち〟の野郎の大口には、筆者とてむかっ腹を立てるでしょうが、革命がそんな連中にしか出来ないように〝下手で無名でビンボな若者〟にとって、大口は中学生がガクラン姿でこれ見よがしに吹かすタバコのように、ヤボですが可愛いファッションの一つです。

とはいえ、僕はコイツの絵が生理的に大嫌い。妙にチマチマしてる割に描き込むので、読みずらくてスッと入って行けないのがまず第一。それと男女のキャラの人形みたいなマユ。御公家様じゃありますまいし、もちっと何とかしてちょうだい！　で、不人気な割に長期連載を誇る本欄では、当然取り上げてしかるべき漫画家だったのに、まだバージンだったんですねぇ（つい淀長風に）。

初めてジックリと読んでみたのが、『ＤＡＩＳＵＫＩ』12月号の、「その名はラッキー！」なる悪魔ネタ物。ストーリー自体は、〝例えどんな形になっても良ければ契約は成立…汝の望みは速やかに叶うであろう〟（ネームより）という、良くあるパターンですが、その〝形〟というのが魔北らしい。

主人公の少女が片想いしている少年が、不良グループに倉庫へ連れ込まれます。つけて行って覗くと、少年がボス格の不良にフェラチオを強制させられて、「たまんねえぜ　女みたいな肌しやがってよお」。「かりっ」と耳たぶまで噛まれて悶えてる。

これを見てオナってた少女は仲間に見つかり、散々なぶられてしまうのですが、つまらない設定。この手は、中ノ尾恵でうんざりしてんですよね。それに中ノ尾の方が線がきれいで、アップゴマの用い方も数段上手くて迫力がある。基本的にアクション漫画の線の魔北では、三船敏郎が文芸映画の主役を張ってるような違和感が、終始ぬぐえません。

いっそ、昔の本宮ひろ志風の、アクション・ホモ・エロ漫画を目指したら？

（『ぺあ』'93・2）

ＤＯＮＫＥＹ

とにかく古いロリコン漫画家です。今回取り上げるＤＯＮＫＥＹ（よくＤＯＮＫＹと誤植されてますが）は、デビューしてもう10年近いはず。もっと古い漫画家もいますが、未だ現役であるとの前提をつければ、間違いなく最古参の一人。

が、どうもパッとしない。どんな漫画家でも、一度はチヤホヤされる時期があるものですが、彼には無縁。それどころか、一時は疫病神扱い。彼の執筆した漫画誌が、次々と廃刊になったためです。『ペリカンハウス』、『ロリッコクラブ』、『ピーチパイ』…パッと思い浮かべただけでこれですから、他に何誌あることやら。

しかし、これは完全な冤罪でしょう。彼の漫画自体がそう個性的ではないため、良くも悪くも、一つの雑誌の命運を決するようなパワーは、最初から秘めていないからです（むしろ、その程度の漫画家しか看板に出来なかった、編集者こそ責められるべき。どんな注文もホイホイ引き受けてしまう、ＤＯＮＫＥＹの軽薄さにも、問題はあるでしょうが）。

見ての通り、特に可愛いわけではありませんが、キャラ自体は水準に達しています。確かに背景が少なく白っぽ過ぎる絵ですが、もっと手抜きの絵で売れっコの漫画家は、腐るほどいますから。スト

ーリーも決して新鮮ではありませんが、一応はあります（わたなべよしまさや悠宇樹よりは、凝ってるような気も）。
　これは裏を返せば、全ての面でほどほどの、〝あってもなくてもいい漫画〟ということに。例えは悪いのですが、刺身のツマの大根の千切りとでも申しましょうか。けれど、それ故の長寿だった（まだ過去形にしちゃ悪いか）とも言えます。世の中には、養殖はまちや水銀まぐろより、大根のあっさりした味の方が好きだなんて人も、結構いますから。
　本人にしてみれば、天然ぶりや高級ふぐはともかく、近海物の、いわしの刺身くらいにはなりたかったでしょう。が、いわしもあれで、安いけどこくがあるもの。いわしの刺身の隣で、〝生涯一大根の千切り漫画家〟というのも、世紀末的風流さに満ちてると、僕には思えてなりません。
（『ぺあ』'93・5）

中総もも

　結構ペンが早いらしくて、あちこちに執筆してるのに、どの作品でも必ず抜ける貴重な漫画家が。急増中の女性漫画家の一人、中総ももです。デビューして6〜7年はたつようですが、相変わらずコッテリした色っぽさで、〝使えるエロ漫画〟の第一人者の地位を確保しています。
　今でもその傾向は残っていますが、デビュー当時はもっと陰気で、SMっぽさを売りにしていました。本人もその方面の造形は深いらしく、当時人気の高かったかおるなどと共に、地下室の湿った色気に満ちた作品を連発していたもの。
　その後、美少女系の各漫画誌にも都条例の悪書指定が相次いだため、各誌ともSMチックな作品を締め出すようになります。不器用な漫画家だと、編集者のこういう身勝手な変身についていけず、廃業に追い込まれたりするのですが（エロ劇画系の、富田茂や早見純はそれに近い）、この人は器用に路線転換をしました。
　Dカップが流行すればすぐ取り入れ、明るい話が受けそうだと、すぐに〝キャピキャピムード〟を出すといった身変わりの早さで、業界を泳いで来たのです（噂ではホラー物まで、ペンネームを変えて描いていたとか）。
　ただ、この人の根本的な魅力は昔から変わってません。中総エロスの本質は、〝シーツの黄ばんだシミ〟です。昔から若い連中は、「独立プロのピンクは暗いから、にっかつロマンポルノで」、「大洋図書のエログラフ誌は暗いから、英知出版の『Beppin』で」、「辰巳出版のエロ劇画誌は暗いので、白夜の『ホットミルク』で」といった調子で、〝暗さ〟を理由に旧世代のズリネタをコケにしては、粋がって来ました。
　しかし30歳を過ぎると、急にそばやおしんこがうまくなるのと同じで、この種の新しがり意識ほど、はかないものはないと気づくのです。所詮は畳の上が一番落ち着く人々ですから、どうしても〝明るいズリネタ〟で洋室で抜いてると、腰が疲れてしまう。久々に畳の上にドッカと座り、「さてひと抜き…」と思った時、中総ももはいきなり我々の前に、ドーンとそびえ立つのです。確かに蘭宮涼もいい。が、25歳過ぎると疲れますよ、正直言って。
（『ぺあ』'93・7）

まいなぁぼぉい

　初恋の味らしいカルピスは、筆者には〝歯痛の味〟の記憶しかないのですが、今20代半ば過ぎの男達にとって、内山亜紀、そして今回取り上げるまいなぁぼぉいは、〝わびしいオナニーのおかず〟として、永遠に記憶されるだろう、美少女漫画家の化石、いや、先走

り液のような存在です。

一時は『少年チャンピオン』でも、オシャカ仕事をしていた内山はともかく、まいなぁぼぉいは一般的には知られてませんが、美少女漫画に一時でものめり込んだ者なら、必ずや彼の漫画を何本かは読まざるを得なかったはず。今でこそ、『ペンギンクラブ』、『レモンクラブ』、『ＳＨＡＫＥ』でしか見かけませんが、3〜4年前までは、流通している雑誌の半分以上に執筆していたと、錯覚を起こすほどでした。

その彼も中年にさしかかり、仕事量も一時ほどではなくなったばかりか、内容面でも生彩を欠き始めた様子。昔から彼は連載仕事がメインで、過剰なネーム（特にナレーション）、この世界としてはよく入ってる背景のせいもあってか、ＮＨＫの大河ドラマ風10話完結シリーズを得意にして来たのですが（なぜ10話で完結するのかと言えば、16ページ×10話、つまり１６０ページが、一番単行本にしやすいという業界事情による）、そのスタイル自体が、読者から見離され始めたようなのです。

読者はこの手の漫画に、昔からストーリーなど求めていないのですが、かつての彼は、逆にこの世界では貴重で数少ない語り部として遇されて来たのです。が、昨今の読者はそんな余裕もないらしく、「おっさん、うざってんだヨ！」と、使用済みティッシュを投げ付けられんばかりに不評なのだとか。ある編集者が語ってくれました。

「要するにまいなぁの世代は、にっかつロマンポルノなのよ。ドラマ性のあるエロ漫画。けど今は、読者の頭の中に早送り機能がついてて、そーゆの排除しちゃう。結局はキャラのカワユサだけが残っちゃう。エロビデオ風エロ漫画とでも言うか…」

が、その手の漫画にも、新しいドラマ性が潜んでいるからこそ、若者に受けるのではないか？

（『ぺあ』'93・9）

法田恵

数カ月前に取り上げたまいなぁぼぉい同様に、法田恵も古い漫画家です。例の蛭児神建の責任編集で知られた、〝超サイケデリック美少女漫画誌〟『プチパンドラ』の、常連執筆者の一人だったのですから（この2人とか、今でも『ＥＲＯＴＯＰＩＡ』で看板を張るねぐら☆なおを見ると、つい青春の思い出が甦ってしまう、子持ちの元美少女漫画マニアのオッツァンも多いのでは）。

『プチパンドラ』の執筆漫画家は、編集長の個人的趣味もあってか、アクの強い絵柄の持ち主が多く、以降も商業的成功を収めた者は少なく、松原香織や新体操会社を除けば、ほとんど名前も見かけなくなりましたが、法田恵だけは依然健在です。

特にキャラクターが可愛いわけでもないのにと、彼の特集をしていた『オレンジクラブ』なる雑誌を買い、初めてジックリ読んでみました。一言でいえば、よくあるエロ漫画。ただ、濡れ場の描写が非常にねちっこい。ここらでしょう、読者に飽きられない一番の秘訣は（キャラよりＨ描写の執拗さが売りの漫画家は、女流の中総ももも有名）。

個人的にはこの人は、〝投稿漫画家〟としての印象が強い。投稿と言っても、彼自身が美少女漫画誌の読者欄にイラストを投稿してたのじゃなく、〝Ｈ漫画家・法田恵〟が、その名前で『毎日新聞』の読者欄に投稿してたのを見たのです。例の〝Ｈ漫画弾圧運動〟華やかなりし頃で、自らを〝エロ漫画で生活してる人間〟とまず宣言した上で、〝エロ漫画への弾圧は言論弾圧への第一歩〟といった正論を、堂々と展開しておりました。

正直に言って僕はそれを読んだ時、感動しました。むろん他でも聞き慣れた彼の発言趣旨へではなく、森山塔やいしかわじゅんでは

なく、〝平民エロ漫画家・法田恵〟という看板をしょっての発言に対してです。「ここまで成熟したエロ漫画界は、そう簡単には滅びぬだろう」という、確信さえ抱きました。『創』を中心とする〝反H漫画弾圧運動〟がうさん臭いのは、法田のような〝平民の声〟が聞かれぬから。文化を床の間に戴いた運動は、そこに立ち小便ひっかければ、一発で〝シュン〟と消えそうです。

（『ぺあ』'93・11）

十六女十八女（いろつきさかり）

十六女十八女と書いて、〝いろつきさかり〟と読むのだそうです。が、この人の漫画を読む度に、実力を伴なわぬ漫画家が妙に凝ったペンネームを付けるのは、悲劇というより喜劇だと思わざるを得ません。

デビューして3～4年になります。執筆誌は、遠山企画系（現在は漫画屋）雑誌の、『ロリタッチ』（現『Ｂｅａｔ』）、『レモンクラブ』、『Ｍａｔｅ』等ですが、はっきり言ってこんだけ進歩のない漫画家さんもまれ。

粗雑な線は相変わらずですし、キャラも一向にアカ抜けません。ついでで充分なこの業界レベルのストーリーも、よく同一雑誌に掲載されている、すてぃる88とどっこい。ダラダラ起用している編集者にも問題はありますが、飽きずに愚作を発表し続けている作者の心臓の強さにも、驚愕を禁じ得ません。

ごくたまに、「この人もこーゆー素材を描くと」と関心することも。精神的ＳＭ漫画とでも言いましょうか、〝いじめＨ漫画〟を描く時です。都条例の悪書指定を恐れてか、縄やムチといった器具は出てこないのですが、主人公をいじめる女の先輩の理不尽さに、胸の悪くなるようなリアリティを感じることが（器具が出てこないなからこそ、逆に生々しさを感じるのかも）。

Ｈ漫画家さんには、かつてのいじめられっ子が多いとの噂を聞いたことがあるので、彼もその一人かと思っていたら、しばらくして執筆誌のコラムで、彼が在日朝鮮人だと知り、「なるほど」と妙に納得したりしました。また彼は、国立大学を卒業しながら、希望の職種に容易に就けぬのでＨ漫画を描いてるとも知り、〝何て志の低い奴〟と、一種の感動を覚えたもの。

ただ、いくら〝国立大出の在日朝鮮人〟だとしても、漫画家としては三流ですね、どっから見ても。それを一番感ずるのは、稚拙な漫画の背景に時々見受けられる、「俺は本当はインテリなんだヨ」と言わんばかりの落書きやネーム。「バカヤローッ！　ンなことは、絵やコマ割り自体で表現しろ!!」と言う他ありませんが、やっぱりＨ漫画家という肉体労働者に、学歴や国籍は、盲腸以上でも以下でもないようです。

（『ぺあ』'93・12）

悠宇樹

世間の不景気も底をついたのでは？…という希望的観測と願望が入り混じった新聞記事を、チラホラ見かける昨今ですが、逆に不景気に突入して暗中模索中なのがＨ漫画業界。昨秋からの落ち込みに一向の回復が見られず、各社とも「弱った」「困った」を連発するばかりとか。

最大の要因は、雑誌、単行本共に乱発し過ぎた結果ですが（新規の物ほど目の当てられない返品をくらってて、雄出版の『ラビットクラブ』は6号にて廃刊）、もう一つ、大手の雑誌もエロに再び力を注ぎ始めたという点も見逃せない。質的にも量的にもピカイチを誇る、コミックハウス系列の雑誌も同様の事態を迎えている様子なので、その他は推して知るべし。少なくとももう5～6誌は廃刊雑誌が出ないと、復調の兆しはないだろうとの噂。

そのCH系雑誌のひとつ『キャンディータイム』（富士美出版）で、悠宇樹が新連載を開始したので、「おや？」と思いました。辰巳系列の富士美は、CHの古くからの大スポンサーですが、茜新社という出版社を買収してからのCHは、どちらかというとフランス書院（『パピポ』）や、英知系のメディアックス（『花いちもんめ』）に売れ筋漫画家を重点的に配置、辰巳よりどう見てもトーシロ揃いの両社の目を巧みにくぐり、売れ筋は茜新社でドンドコ単行本にしちまうという、ボロい商売をして来たからです。

蘭宮涼や悠宇樹はその筆頭だったのですが、あえてその中の一人を古巣に舞い戻らせざるを得ないところに、現在のこの業界のシビアさが感じられます。悠宇樹のこの新連載、文字通りの大サービス企画で、感心すると言うより口をアングリ。

まず主人公が、高校生なのに親父の経営するソープの支配人。出社途中で見た美人が、偶然（？）お店に面接に来て、当然SEX面談。翌日学校に行くと、そのコが転校生として主人公のクラスに姿を現わしたのだ!!（ハ〜ア…）で、以下次号となるんですが、ここまで実用に徹しられると、アングリと開いた口の奥のノドチンコまで、やや硬度を増してくるというもの。上昇志向をここまで捨て去ると、ハッキリ言って怖いのは税金だけ。立派です。

（『ぺあ』'94・5）

アップルトン

ちょっと目を離してる間に、這いずり回っていた赤ん坊が、オナニー盛りのニキビヅラ青少年に急成長していた、といった感のあるのが『漫画ばんがいち』。

６月号も、猫賀じゅん自身の鳥ガラヌードにゃウゲゲでしたが、千葉治郎、尾崎未来、まついもとき、SHIZUKA、アップルトン、ひぽぽたますと、強力な布陣。が、この雑誌、編集が頑張っている割には、売れ行きはもうひとつなのでは。編集者の絵柄の好みがモロに出すぎているせいか、主要漫画家のカラーがほぼ同じで、互いの魅力を相殺し合っており、雑誌全体のイメージが、薄っぺらで平板になってるからです（バカ売れしてんなら、御免♥）。

で、アップルトン。６月号では、「ふぇありーてーる」というレズ物を描いてます。絵柄は、千之ナイフが20年ばかり若返った雰囲気ですが、ベタが多く、オヤジ世代にも読み易いのはホッ。が、似ているのはベタが多い所だけでなく、レズ、悪魔、鏡、バイブ、宝石箱といった、〝ウンザリゲップ369回〟級の小道具までがぞっろぞろ。もっとこう、生活に根ざしたというか、みそ汁の香りが漂うエロ漫画が描けんもんなの？（そういや浮世離れしたエロ漫画揃いなのも同誌の特色。あ、まぢい！　これ白夜書房のんだった。これ以上悪口言うのはやめよっとぉ♥）

とはいえ、アップルトンセンセのキャラは上々。顔面の作りはむろん、女のコの尻のラインがお上手でそそります。が、その尻の魅力を強調する努力を怠ってるのは、いただけない。脱衣シーンを省いちゃってるのも許せない。ページが少ないからだってぇ？　てやんでー！　笑えんギャグゴマはいっぱいあるじゃん!!（いくら白夜の物だからといえ、もう一つ言う。異化効果［!?］を狙ってんのかもしれんが、下らぬギャグゴマを、各漫画家に余り散りばめんように注意しといてね。こちとら真摯な気持ちで抜こうとしてるのに、あちこちの漫画でその手の真似されっと、馬鹿にされた気分になり萎える。確かに馬鹿なことをしてんですけど、それを読者に気づかせちゃ、ギャグにはならないんじゃ？）

（『ぺあ』'94・7）

安世夢

今一番抜けるエロ漫画家は誰か？　と問われて、真っ先に名前を挙げたいのが安世夢です。コミックハウス系の雑誌で活躍している中堅ですが（初の単行本、『当たりが出たら』はお買い得。辰巳出版刊で800円）、抜き所を逃さないだけではなく、ストーリー作りがふざけていて、一本読むとやみつき。

売れてないと評判の『カイザーペンギン』8月号でも、「堕ちて…」なる、30ページ物の怪作を描いてます（なお同誌はテコ入れ中のためか、執筆陣はコミックハウス系では一番充実してて必読）。

5年振りで帰省したOLが、女友達の家の前で、高校時代の〝異常体験〟を回想するというのがだいたいのストーリー。この人の話の展開の一番の面白さは、その〝もっともらしさ〟。本作も、5年前にその女のコの家に遊びに行ったら、近親相姦関係にある弟との3Pに巻き込まれたという、良くある都合のいい馬鹿話。が、本人が少しも照れることなく（現実には大照れであろうが）、「今年の七月会社の休みを利用し　帰省することにした私は　あの家の前で　忘れ得ぬ友人に出会ったのです…」ってな、一昔前の昼メロのナレーションタッチで始める導入部も、今では逆に新鮮。

画力も結構あり、近頃のH漫画ではめったにお目にかかれぬ俯瞰ゴマもあったりで、将来は他分野でも活躍するのでは（しかしよく見ると、遠近感が狂ってたりするのが御愛嬌）。濡れ場に至るコマ割りも、大映テレビ並の臭いアングル、ネーム、人物処理（ベタの用い方がなかなか）で、とどこおりありません。特にこの世代がやたら入れたがる、ギャグゴマが一切ない点に、作者の知性が感じられます。

いよいよ濡れ場。立派なのが、アップシーンとロングショットの部分。平凡な漫画家は、いざ服を脱がせてからは、楽なアップゴマでページ数を稼ぐのですが、この人の場合、1ページに必ず2～3カットはロングショットの男女を入れます。カーテン等の背景も欠かさず、〝抜く者の想像力〟に具体性を与える努力を忘れません。ハマった（チンポとマンコが）後の構図は親切心の余りか、やや類型的なものの、〝買い〟な漫画家なのは保証します。

（『ぺあ』'94・10）

プロトンザウルス

秋葉原に出来たエロ漫画専門店「虎の穴」は、その店名のエグさでまたたく間に好き者の間に評判が広がっています。多くのこの手の店が世間体を考え、一応は漫画専門店らしさを装っているのに対し、あくまで〝エロ〟に徹してる姿勢には、関西商人的さわやかさが感じられます。〝漫画文化がどーのこーの〟といった寝言をほざき出す馬鹿店員が出る心配も、今のところはなさそうなのでホッ（とはいえ、海賊同人誌をあからさまに販売してるので、同人誌関係者はムカッ腹を立ててるらしい。大量に万引きでもして復讐するか!?）。

同店はこの手の書店としては珍しく、出版社ごとにではなく、作家別の品揃えをしていて便利。中でも一番目立つ所で、大量に各種の単行本が平積みされているのが、プロトンザウルス。唯登詩樹や悠宇樹ほどのハデさはないものの、単行本は一点あたり、8万部前後ははけるというから大したもの（今のところ彼の単行本は、一水社の独占状態。これがもう少し規模の大きい富士美出版あたりから出ていたら、軒並10万部以上は行けてたろうとの噂）。

上総志摩ほどではないものの、「プロトンが何であんなに売れんのか分からん」との声は、業界人の中にも少なくない。結論として、「線がきれいだし、エロシーン以外の無駄ページがないから使い易いんだろう」てな所に落ち着くのですが、そういう漫画家は腐るほどいるのに、それほど単行本がはけたなんて話は聞きません。

で、『アットーテキ』10月号の、「九月の空」という新作をジックリ読んでみました（と言ってもたったの16ページ）。前評判通りの漫画なんですね。ホント、エロでないのは扉ページだけ。当然、ストーリー如きもんも皆無。ねちっこい前戯から始まって、しゃぶらせ、入れて、出して、またしゃぶらせて、ジ・エンド。う～む。考えてみるに、これはひょっとすると凄いことかも。こんだけ芸のない設定なのに、一応は飽きさせずに読ませちゃうんだから。

再読して納得。表情の変化の描写が、彼は抜群なのです。同じフエラチオシーンを描かせても、他の漫画家とは〝使用感〟が違います。8万部は一日にして成らず。

（『ぺあ』'94・11）

田中ユタカ

女のコのキャラクター面においては、割と水準以上の漫画家を揃えている、富士美出版のB5判誌『ファンタジィカクテル』ですが、そのライト過ぎるエロ描写と、一本あたりのページ数が短か過ぎるあたりが、どうもオヤジ世代たる筆者には、薄め過ぎたワタナベの粉末ジュースを飲むようで不満が残るのですが、中に一人ねちっこ～いのがいてホッ。

田中ユタカという新人です。同誌3月号に描いてる「ふたりのトレイン」という作品は、例によってこの業界特有のデタラメ話。顔は知ってるものの、口をきくのは初めての高校3年生の男女が、満員電車の中で急接近、他の乗客が呆然とする前で、立ちマンまで致してしまう。

田中のどこが良いかと言えば、一にも二にも、その描線のぐしょ濡れぶり。前にも書きましたが、同誌はキャラクター的にはハイレベルな漫画家を揃えています。ただ、キャラクターさえ可愛ければ即抜けるかというと、そう甘くはない。

たとえば田中の前に載ってる夜魔猫ミルクも、それなりの絵を描いています。が、濡れ場になると全然ペケ。裸の女が一人でオナってるのを見て抜けるのは、小学3年生くらいまでのガキだけ。衣服、下着等へのフェチ精神が皆無なのも致命的。加えて竹ペンタッチとでも言うべきドライな描線と来ては、エロ漫画に一番不向きな漫画家さんと言うしかない。

再び田中です。まず扉がいい。中身とはまったく無関係なスクール水着姿ですが、濡れて肌に貼り付いてる状態のトーン描写が超エロで、通人はこれだけで一回は抜くでしょう。電車の中。主人公の姉ちゃんは、この寒いのに汗だくで目がトロン。ますます混む電車。ひっつく2人。「オッパイ大きいんだね」「や…エッチ…」ええかげんにせい。

オッパイモロ出しにして、パンティまで降ろしてマンコるのですが、その間のアングルが、漫画のコマ割り上の必然性より、センズリ的必然性に従って構成されているのも見事。2ページほどの駄ページはあるものの、マンコした後、冬枯れの公園の中での初々しいシーンで終わるのも粋。使える新人です。

（『ぺあ』'95・4）

縛霞奈

一にキャラ、二にキャラ、三にキャラ、四、五がなくて六に筋（ストーリー）。こうまで極言する編集者がいるくらい、美少女漫画界は女主人公の容姿のみが重要視されます。背景のリアリティや、共演する男のすね毛に興奮を覚える読者も、皆無とは思えないのですが、ほとんど顧みられません。最後に挙げた筋にしろ、いわゆる起承転結的な意味ではなく、より刺激的なネーム作りといった程度のことだとか。

そういった意味では、フランス書院こと三笠書房から発行されていて、コミックハウスが下請け編集している『パピポ』は、ほぼ完

璧な漫画家揃えをしています。5月号を例にとっても、山文京伝、きみおたまこ、縛霞奈、富士参號、山本賢治、平野耕太、佐野タカシ、海月未夢、てるひさお、みずすみ俊明と、豪華絢爛。誰がカラーページを担当しても通用します（富士美出版やメディアックスに比べて、フランス書院は下請け料が破格なのか？）。

これで320円たぁ安いと、早速一冊買って来ました。まずはむっちりキャラのお姉さんが食指をそそる、縛霞奈センセの、「本当はけっこう悩んでいるのよ!!」に目を通す。即売会に参加したカップルの女のコが、露出過剰なコスプレで来たので、男は嫉妬で疑心暗鬼に。浮気までしそうになるものの、結局は踏みとどまり、最後にマンコして終わるという心暖まるお話。

筋はありふれているものの、3人登場する各キャラの心理描写はなかなかていねいで、この業界における16ページ漫画としては上質な部類。が、悲しいかな、実用的じゃない。濡れ場は6ページと、特に少ないわけでもないのに、いまひとつ抜き所がない。妙な話。

ところがこれは、縛だけの問題ではなく、富士参號、みずすみ俊明の各作品にも言えるのです。一応エロ描写はそれぞれがちゃんとしているのですが、いずれも急に背景が消えて抽象的になったり、重なり描写が少ないため、読者はついチンポを握ったまま逡巡してしまう。

これは各漫画家の、「俺は本来エロ漫画描いてるような器ではない!!」との自負が放つ、オーラなのではないでしょうか。おかげで他社の低レベル雑誌も、一息ついているのです。（『ぺあ』'95・6）

伊集院808

ふざけたペンネーム。伊集院808と来ます。内容もかなりのもの。例えば『レモンクラブ』6月号の「ドラマ」なる作品。居残りで、忘れた宿題をやらされている男子生徒の所に、同級生の女のコが現われ、単刀直入な台詞をポンポン。「ぶっちゃけた話　星崎君私のこと好きでしょ！」「でもそれを伝える勇気はない」「気づいたときには　青春も季節はずれ…」。遂には「私の身体　全部あげる」。

いくら実用第一がエロ漫画の使命とはいえ、もう少し情緒が欲しい気もするのですが、伊集院センセ、そんな要求は一切却下。以下の如く、書き移すのもはばかれる台詞を連打。「もっと奥まで来てぇねっ　ねっほらここ気持ちいいでしょ!?」「カリがひっかかってんもう最高っ〜っ」……。

読み進むに連れ、このダイレクトな台詞展開が、独自のユーモアを醸し出していることに気づきます。デッサンの狂った稚拙極まりない絵の女のコが、もっともらしい台詞を吐くことへの落差のみとも言えない、ヤケクソじみた隠し味とでも申しましょうか。

特に最終ゴマでの、アーパー姉ちゃんの大演説には思わず吹き出す。「先生だの親だの学校家庭会社どーでもいいじゃない　ほらこんな学校やめてどっか行こうよ!!　ねっ連れてって!!　私を連れてどこか逃げて!!　それがイヤならこの場で　私を刺し殺してもかまわなくてよ」

前述したように、伊集院センセの画力は素人以下。一人しか出て来ない女のコの顔が、コマによって別人としか思えない場合もしょっちゅうですし、パーツの狂った教室の机は、ダリも真っ青。

そのくせ一ページ読むごとに、肩凝りが少しずついやされるような、妙な〝治療効果〟を感じさせずにはおきません。伊集院センセは、好んでヒロインの相手役の男に、いじめられっ子を配します。友人や教師による暴力描写は、下手な所が逆にリアル。以下は筆者の想像ですが、作者はいじめられっ子だったのでは。エロ漫画を描くことで傷をいやしているのかも。肩凝りに効くエロ漫画なんて、ちょっとイカしてますよ。

（『ぺあ』'95・7）

大暮維人

編集長が交代したとかで、一時は行く末が案じられた『ホットミルク』ですが、最近ではA5判誌のみならず、B5判誌を視野に入れたとしても、そのレベルは独走的なまでの充実振りで、「さすがは老舗！」と素直にほめて上げたくなります（前編集長は、白井薫範等、臭さ過ぎるメンバーを必ず1～2名使うという悪癖があったが、現在は徹底した売れ筋路線を取っており、その非情さは若いのに立派）。

中でも、大暮維人はピカイチ。〝キュートでハードなシリーズ♡〟と謳われている連載、「September Kiss」は、業界でも屈指の抜き所に満ちた傑作（コミック化された暁には、最低でも5万部ははけると思われます。遅筆そうなタッチなので担当は大変でしょうが、もう一息！）。

この人の絵の一番いい所は、人物のライン。太からず細からずで、やや筆圧が低すぎるのではと内心案じつつ追って行くと、いつの間にかエロ～いオッパイ仕上げちゃうんだから、憎いね（特に7月号の扉絵の、〝濡れたノースリーブのTシャツ〟の描写には、思わず息を荒げる。ノースリーブであるという点に、作者の聡明さが爆発してます）。

女のコの表情もリアル。中でも〝ずるがしこい少女の描写〟は傑出しており、〝日本男子総マゾ化〟（!?）の昨今、その実用性はいやが上にも高まります。この連作、かなりSM的描写も多いのですが、器具が出て来る前段階で、筆者などすでに「ゾクッ♥」。これもひとえに、表情描写の巧みさのなせる業（個人的な性癖を、ストレートに出してすいません）。

男の存在感が稀薄なのも、エロ漫画としては理想的。ここまでだと本欄らしからぬ、〝ベタボメコラム〟になって気色悪いので、少しだけ欠点を。コマ割りが見ずらい。断ち切りも多過ぎる。全体の構成はもっと古臭い方が、作者の才能が前に出ます（俯瞰ゴマを要所要所に入れてあるあたりは、カッコ良くていい）。

特に根性悪の山口理香は、〝女成田三樹夫〟みたいで、すっかりファンに。後は二流メジャー誌（!?）に引っこ抜かれぬのを祈るのみ。

（『ぺあ』'95・8）

久我山リカコ

超豪華ラインナップとの謳い文句がピッタリの『快楽天』は、営業的な面で色々と損をしている漫画誌です。まず表紙。村田蓮爾のイラストからなるそれは、個性的を通り過ぎスカし過ぎ。中身は単なる〝センズリエロ漫画〟なのですから、もう少し分をわきまえましょう。そして各漫画家のエロ描写。どうもダイレクト過ぎる。その上に総量も少ないから、ギッタンバッコン即ドッピュ!! 脱衣描写等を増やし、もう少しネチネチとまぐわって欲しい。また、技量ある漫画家陣を揃えているのには敬意を表するものの、ちとグロ趣味過剰。もちっとおだやかなキャラで抜きたいと、心臓の弱い筆者は思ってしまいます。

ンな中では割ととっつき易い久我山リカコの、「純愛♡らぶそでい」からチン立ち度を検証（けど、扉の作者名上の〝本誌胸キュン初登場!!〟なるキャプションは、恥ずかしすぎねえか!? 21世紀までもう4年だぜ）。水泳部の女マネージャーが、憧れの先輩の汚れたブリーフでオナニーしてた所を当人に見つかり、マンコ舐められチンポ入れられ、「おうおっ……」とのお粗末の一席。この間の総ページ数が18頁。濡れ場の連続描写は、好意的に数えて6ページと3分の1。しかも久我山だけでなく、『快楽天』の作家は大ゴマの

割合が多いので大味（大ゴマでハッタリをつけるのもいいが、読者は2度目、3度目にはだまされない）。
エロシーンの総量が少ない上に（総ページの半分は欲しい）、小ゴマで微に入り細に入り女体を舐め回すような、オナニストにとっての〝親切描写〟が少ないから、店頭でパラパラとめくった時のときめきが踏みにじられるかのようで、読後にチンポは立たずに腹が立っちまう。
つまりですね、ンだけの豪華なメンバーを揃えてんですから、編集はもちっと絵コンテ段階で指導性を発揮しろってんです。これがコミックハウスの『パピポ』みたいに、エロを排したファンタジィっぽさを、腐れオタク編集が狙って出してるのなら何の文句もつけません。が、『快楽天』は何度も言うように、単なる〝センズリエロ漫画誌〟なのです。唇だけは許さないみたいな笑止な誇りは、一日も早く捨てなさい。
（『ぺあ』'96・2）

グレイス石川

忘れた頃にヒッソリと発売になる『アリスの城』（『ホットミルク』増刊号・コアマガジン社）は、独自の臭気を帯びた漫画誌です。鬼畜なロリコンビデオのPRが、延々と載っている点に示されてるように、今や〝美少女漫画〟とのもっともらしいネーミングに移行した、かつての〝ロリコン漫画〟のエキスが、今でも誌面全体に横溢しているからです。
エースのりえちゃん14歳をはじめ、きお誠児、知恵袋一番、カマヤンと、なかなかの人非人ラインナップ（「超級デジコミ通信」なるコラム書いてる永山薫ってヤロも、この種の俗悪雑誌の必携アイテムになってる感があるが、もっとピチピチしたライターめっけろよな）。
一番目を引いたのが、「雲のうえふわふわ」なる作品を描いてる、グレイス石川。ドッジボールみたいな、まん丸顔の女のコを描く漫画家さんです。と書くと、どこかユーモラスな絵柄を連想させますが、なぜか薄幸そうなキャラなんだな。絵全体の処理の仕方も妙に寒々としていて、〝♬はる〜か〜はる〜か〜彼方にゃ〜オホ〜ツ〜ク〜♪〟とつい口ずさみたくなるほど（注＊これは高倉健主演の東映映画、『網走番外地』シリーズの主題歌です）。
てな特徴を列記すると、「不感症H漫画なの？」との声も出そうですが、逆で刺激的というか、〝使える〟のだ。グレイスはドッジボールの少女の瞳の光りを、ポンと一カ所しか輝かせません。2〜3カ所光らせるのはざらですし、斜めに夕陽如き物まで差し込ませる漫画家もいるのに、謙虚なこってす。これが薄幸さにつながってる。
その少女の小鼻、そして唇の描写も、妙にあっけらかんとしている。中でも唇は名人の作った釣針といった趣さえあり、一度喰らいついたら離さないだろうなぁという、完成度がうかがえます（〝喰らいついたら離さない薄幸の美少女〟…もう多くを語る必要はありませんね、ウン！）。
つまり、電気掃除器みたいな唇をした少女というわけ。扉だけで2回は抜けます。となると、中身を使えば10回はと思うのですが、意外にこれがペケ。どうやらモデル業界出身らしく、しゃべると大根女優なんですよ、この薄幸少女は!!
（『ぺあ』'96・3）

『闘姫』と都条例。

それが廃刊になったと聞いても、余程のエロ漫画通でもない限り（例えば永山薫や小倉智充）、「えっ、まだ出てたの？」との反応しか示さないであろうエロ漫画誌が、3月号でひっそりと廃刊になりました。『SHAKE』（A5判平とじ・東京三世社・520円）で

す。

高定価のA5判誌は、『ホットミルク』や『闘姫』（これも都条例の連続3回の悪書指定でお先真っ暗）、『アットーテキ』を除けば、ほとんど青息吐息なので、そのキリの部類の同誌が消えるのは何ら不思議はないのですが、それにしても終刊号のメンバーは凄まじい。呂熊進、馬波平、六条麦、永井道紀、さえわたる、勇気ちゃん、北条ミチル、乃崎せり、R―KIDS…すぐに3人以上の絵柄が浮かぶ人は、これまた前出の2名以外にはまずいないでしょう（ひょっとすると、同誌編集長自身も）。

これが終刊号だけでなく、普段からのレベルであったという点に、この業界の底辺の深さを感じざるを得ません。『闘姫』のように、多くの業界人の嫉妬に満ちた視線を受け、「18歳未満の人には販売出来ません」との腰巻をするハメになっても、「ざまあ見ろ」といった感じの、栄光に満ちた退路を用意された雑誌にではなく、あえてこの種の〝ゴミエロ漫画誌〟にイチベツを加えるのも、本欄らしいと一人悦に入ってた所に、とんでもない情報が。

『闘姫』のように、都条例では年に連続で3回、バラでも5回の指定を受けると、改題するか例の腰巻を3号続けて巻いて販売せねばならぬと言う、〝内規〟があります。この内規の回数を、警視庁と都庁の強い要望で、年にバラでも3回にしようという、超反動的策動が功を奏しつつあり、下手をするとこの春にも実現しそうだというのだ。

あきれ果てました。警視庁や都庁の連中にではありません。連中は大蔵省の役人同様、そうやって天下り先を物色してるコジキ共なんです、昔から。そうではなく、その条例の指定をする審議会には、取次、版元代表らが参加しているのに、それに表立って異議をとなえている節が全然ないからです。自殺志願者が首吊りの縄を編むかのような彼らもまた、出版人とは!!　孤独な人間のための娯楽産業に従事する者が、コジキ役人を前に卑屈になる必要は毛頭ありません。

（『ぺあ』'96・4）

柏樹玲

何でそこまで?…と、材料代をこちらで負担しているわけでもないのに、思わず問いただしたくなる緻密なトーン処理をする漫画家が、稿料の安さで定評のあるエロ漫画界にも時たまいます。一時は抜群の単行本セールスを記録した、悠宇樹はその筆頭でしょう。経済的に引き合わないのかどうか、以来その流れは途絶えていたと思っていたら、心強い（!?）後継者が登場しました。SM漫画専門誌と銘打つ、『Ｍａｔｅ』に隔月のペースで描いている、柏樹玲です。

同誌4月号掲載の作品、「パラダイス」のスクリーントーンのめかたも半端じゃありません。その証拠に、掲載誌の断截部分が、柏木の作品部分のみ真っ黒。ノンブルの入らない、断ち切りページがダントツに多いのです。トーンのめかただけでなく、執筆面積も人一倍多いこの人、いったいどんだけ原稿料をもらっているんでしょう?　デビューが1枚5千円で、6千～8千円クラスが一番多いと言われるこの業界ですが、柏木の場合最低でも1万円はもらわないとペイしないでしょう。

「パラダイス」は、仲良し少女2人組が闇の組織に誘拐され、香港らしき所で性の玩具として弄ばれるという、古臭い設定ながら、〝でも許せる〟抜き所の多い作品。トーンのめかたの多い絵は、えてして作品全体に重苦しい雰囲気を漂わせる傾向がありますが、本作の場合、事前にキャラが〝賢明な子〟と〝ドジな子〟に描き分けられていて、オムツ姿でのSMバイブ責めシーンでは、鬼畜読者も思わず大爆笑。

「ご主人様　茜ちゃんにはもう何もしないで下さい　親友なの　だ

からあっ　いやっ」「ごめんね真由　私がわがまま言ったからこんなことに　許して　ううっ」「ううん…　違うよ茜ちゃんのせいじゃない　私がのろまだったから本当にごめんなさい　覚えてる　小学校の頃さあ　イジメられた私をかばってくれたよね　嬉しかったあ…」ま、一晩中やってなさい。

が、このトーンの量はやっぱ異常。〃どんな小さなコマでも白バックは許すまじ〃という、脅迫観念に追いまくられているかのよう。こんな調子じゃ、2冊目のコミックスが出る前に、発狂しちゃうんじゃない？

（『ぺあ』'96・5）

友永和

忘れた頃に発売になる『漫画クリスティ』（一水社・720円）は、今時珍しい季刊誌。A5判の平とじ雑誌で、この高定価にもかかわらず細々と続いているのは、数少ない〃SM専門漫画誌〃だからでしょう。都条例による悪書指定対策のためか、成年コミックマークまで付いてます。単行本や、単行本形式の雑誌以外でこのマークを付けているのは、僕の知る限りでは本誌のみ（コンビニに頼らぬ、低部数高定価漫画誌だからこそ出来る、〃奇策〃でしょう）。

友永和、王置勉強、プロトンザウルスらがメインを張ってますが、春号ではやはり友永が他を圧倒しています。「MOMONE」なる作品の主人公は女教師。普通はショーもない通学とか授業シーンが出て来てムカつくんですが、いきなり口枷をかまされて縛り上げられた女教師が、屋上の階段に手錠で吊るされているサービスぶり（しかも、「私は、マゾの変態教師です。もっといじめて♡」と記された看板を、中国の文革時代の走資派よろしく、股間に掲げられているのも心憎い）。

この〃巨乳走資派女教師〃が、主人公にさんざん弄ばれたあげくに、上着だけ着せられ校内の片隅にある、忘れ去られた汲み取り式トイレに閉じ込められます。わざと生徒にティッシュを借りさせ、彼らに覗かせるという周到さ。で、オナニー→オシッコ→脱糞と続き、再び屋上に戻ると、〃みんなの先生〃だからと姦りまくられるのですが、全24ページ、何とも無駄のないエロ漫画で感服しました。

友永のキャラは、繊細なボディラインこそたぷたぷして刺激的ですが、奥村チヨしてるというか、眼と眼が離れすぎている点が筆者の個人的趣味にそぐわないのですが、〃忘れ去られた汲み取り式トイレ〃という、エロの心の故郷ともいうべき究極の情景を導入することで、個人的趣味など吹き飛ばしてしまう、興奮の嵐を巻き起こしているのです。

『パピポ』や『ペンギンクラブ』等のコミックハウス系雑誌、あるいは『快楽天』などに決定的に欠如しているのは、この部分なのです。むろん、毛穴まで照らし出しそうな明るさに満ちた、コンビニを主とした大部数雑誌と、この種のマニアック誌を一緒にしようとは思いません。しかし、きれいで明るいコンビニも、裏へ回れば木造民家を、表だけ改造した場合が多いもの。カッコつけた君の黄ばんだパンツが、ケラケラ笑ってませんか？

（『ぺあ』'96・6）

『コンボ』と『阿吽』

エロ本出版社は昔から、地方の人口5万人くらいの市の指名土建業者程度のちっぽけなビルを建てたり、ハシにも棒にもかからぬ薄らバカ息子が二代目社長になるあたりから、だいたいがミエを張って脱エロ志向を出して、倒産したり、傾いて経営者が代わったり、そこまで行かなくとも、萎えたチンポコ並のわびしい姿をさらすのが常。

そういった意味で、〃未だ自社ビルを持たない版元の雄〃を挙げ

るとすれば、一水社（光彩書房も含む）と桜桃書房（オークラ出版、ヒット出版を含む）でしょう。両社ともに美少女＆やおい漫画の巣窟といった感がありますが、これにひかり出版を加えた3社を、〝三大やおい版元〟と名付けることも可能。

桜桃書房ですが、中高年世代にとっては懐かしい社です。スケパンヘアが嵐を呼んだ、ビニ本屋がスタート。奥付に目黒区の住所が記されているのは、ほとんどがこの社の物でした。〝目黒のさんま〟ならぬ〝目黒のビニ本屋〟です。群雄社だとかグリーン企画（後の白夜書房）だの種々のビニ本屋さんがありましたが、生き残っただけでなく、これだけの元気パワーを保持し続けているのは大したもの（とはいえ、漫画に手を出したての頃は、なかなか取次コードが取れなかったらしく、同社の営業マンは車で、「書泉グランデ」や「書泉ブックマート」に直接本を運び込んでいて、涙を誘ったもの）。

その桜桃系の『コミックコンボ』と『コミック阿吽』に、勢いがあります。前者がA５判中とじ、後者がB５判平とじと形態は異なりますが、コミックハウス系の、「こんだけのキャラ描ける漫画家さんがエロも描いてやってんだぜ」、あるいは漫画屋系の、「要するに抜けりゃいいんだべ？」といった雰囲気とは、全く別の疾走感に溢れています。

が、前者はさっそく都条例の悪書指定を喰らったらしく、いきなりエロ度が激ダウン。後者も本欄でも取り上げた、同じく都条例で廃刊に追い込まれた『闘姫』の後釜だけに、どうも腰が引けちまっているのは残念。とはいえ、数あるロリコン系エロ漫画誌ですが、この2誌や『快楽天』には、それぞれの編集者の臭気が、好き嫌いは別にちゃんと漂っていて、立派です。

（『ぺあ』'96・7）

矢間野狐

裏表紙まで入れると全部で240ページもあるのに、わずか定価320円。数あるB５判中とじ美少女漫画誌の中で、『漫画ばんがいち』は一番お得用（その逆が『Ｍａｔｅ』。200ページしかないのに定価380円）。

トイレットペーパーじゃないんだから、紙の量が多ければいいってもんじゃありません。そこは『ばんがいち』、ちゃんとＪ・さいろー、矢間野狐、尾崎未来、アップルトン、智沢渚優、河野慎太郎、谷内和生と、数多くの有望新人から、一部のロートルポンコツまで、漏れなく揃えているのはさすが。

今回の主役は矢間野狐。８月号の作品名は「ミックス♥ベジタブル」。これ連載なの、単発なの？　どっちでもいいが、連載なら回数くらいは入れて欲しい。優秀な女子高の生徒会長さんと、〝頭の悪い中坊のガキ〟との、キッチンでのオマンコお粗末の一席。

この人の絵は、見ての通りデッサン力の欠如から、人間の座りが悪いのが特徴。そこがエロ漫画の場合、逆に女体をコロコロとさせるばかりか、３Ｄっぽく見せるというメリットが生じます（逆に言えば、傑作した画力を持つ漫画家の濡れ場は、〝理屈が通り過ぎていて〟、使う側の〝エロイマジネーション〟の飛躍を、時に妨げかねない）。

しょうもない話なんだよね。エプロン一枚にさせた生徒会長さんを、彼女の買ってきたニンジンで散々いたぶった後で、オマンコにはキンタマを、お口にはニンジンをぶち込んで、ハメにハメまくるという安易な設定。

が、それがいんですね。絵の下手糞な漫画家がありふれた設定に、あえてではなく安易に挑むってあたりが、実はエロ漫画の命。漫画家の漫画への個人的野望等は、ビデオのモザイク以上に邪魔なもの。しかし、そういう漫画ばっか載せてる雑誌は、なぜか長期的には売れなくなる。ホント、センズリロードをひた走るガキ共の心理くら

い、複雑怪奇なもんはありません。
むろん、同誌はそんな点も当然わきまえてるらしく、頼もしい限り。が、量的には多い記事ページ、よくあんだけ全部退屈に出来ますね？

（『ぺあ』'96・9）

きみおたまこ

相変わらずハイレベルな漫画家を揃えている『パピポ』（フランス書院こと三笠書房）は、兄弟誌ともいうべき『Ｚｉｐ』ほどは〝下描き漫画〟の載る頻度も少なく、編集も頑張ってると思っていたら、偶然買った9月号で李ＫＰＡが、仕上げのトーン貼り一切無しの、水墨画風エロ漫画を掲載しとりました。この人、元々こういう絵柄だなんてこたないっすよね？　筆者も毎号隅々まで読んでないので、正直なところ分かりません。
30歳を過ぎた世代から見ると、同誌のコミックハウスの先端的部分の画風に満ちた感覚は、書店でパラパラする分には「おおっ…!!」と思わせられるのですが、深夜自室で一人、妻子に隠れてのオナニーのおかずにしようとすると、「ど〜もこりゃまた」なんすよ。30過ぎの妻帯者の、濃密な夜にゃどうも薄過ぎるのですな（白昼の書店の店頭では、あれほど輝いているのにね。ここいらのギャップ、独身者は感じないの？）。
が、一本だけ、〝30男の濃密な夜〟にも通用する作品が。きみおたまこの、「未来予想図」（後編）です。絵柄は、蘭宮涼のはとこといった雰囲気ですが、オマンコ中のネームが渋い。「やぅうっ　そこ……ちが　おしりの穴だよぉ　さっさわっちゃだめえっっ……」「ぜっ全部入った　お…おいっちょっと　力抜けっ…きつっ…」「おちんちんが出たり入ったり……ああっ……んあっ」
さすがは、〝コミックだけでは描けないエッチとコーフンの連続パンチ〟の、ナポレオン文庫を擁するフランス書院の漫画誌と唸りました。ネームを部分的に引用すると、安手のエロ小説のディテールに過ぎません。が、それなりのキャラを物にしている漫画家が、ネーム化する必要ない〝ＳＥＸ進行状況解説ネーム〟を、意識的に読者サービスとして作品中にぶち込んでいる例は、かたせ湘をはじめ多いのですが、これだけの成功例は少ない。
絵かネームのどっちかが突出して、白ける例がほとんど。その点きみおたまこはかなりのレベルですが、女の子のボディが貧弱すぎるのが弱点。猫賀じゅん的すぎると売れないっすよ。

（『ぺあ』'96・10）

清水清とＴＡＲＯ

Ｂ5判平とじ形式の、つまり少年誌風の美少女漫画誌といえば、しばらくの間は『カラフルＢｅｅ』（青磁ビブロス）のみでしたが、『阿吽』（桜桃書房系のヒット出版刊。オークラ出版も同系列）の登場以来、市場に活気が出たのは御同慶の至り。第2、第3の類似誌の登場も近い…と思いきや、なかなかそうも行かないとか。
コスト面がネックらしい。例えば『カラフルＢｅｅ』は３６４ページで５５０円。一方の『阿吽』は３４０ページで５００円。これでは返本率が2割5分をオーバーすると、ほとんど儲からないのでは？（刷り部数によって、数字は変動するでしょうが）
2誌を見比べると、やはり後発の『阿吽』に勢いがあります。2流出版社〝青磁ビブロス〟の看板を背負った『カラフルＢｅｅ』と、ついこの前までは雑誌&書籍コードも無く、柄の悪い営業マンが車で神田の「書泉ブックマート」や「書泉グランデ」に、大量にエロ漫画を直に搬入していた、〝目黒のビニ本屋上がりの桜桃書房の無頼の血のなせるワザ〟の差と言ってもいいでしょう（書泉や高

岡は無修整エロ同人誌の販売で、警視庁保安課の摘発を受ける以前は、同人誌と今の成年コミック類を大々的に販売していた。事件後のこれらの書店の、長期に渡る卑屈なまでの自粛が、〝エロ漫画のメッカ〟の看板を、秋葉原に奪われる最大の要因になった）。

で、〝臭い飯の2度や3度、エロ本屋なら喰らったってしゃーねーだろ!?〟、てな無修整ぶりが心強い『阿呍』で、一番抜けたのがキャラ面では「清澄通りに死す」の清水清。女の下半身をサッパリ描写しないという決定的欠陥を差し引いても、そそるキャラです。もっとも原稿落ちでもしたのか、再録らしい。構図面ではTAROの「ちょっとだけSorry♥」。キャラはクセが強くて半立ちくらいですが、〝舐めハメ構図の無修整振り〟は、「やっぱしサンマは目黒、おっとエロ漫画は目黒に限るねえ」と、意せずしてつぶやくほど。

一方の『カラフルBee』は、たかがポスタ1枚描いた田沼雄一郎如きを、表紙にハデに謳ったりして、バッカじゃなかろうか。目黒のサンマも、いつかこうしてひものと化すのでしょうか？

（『ぺあ』'96・12）

ユナイト双児

表紙のロゴの上に、〝帰宅途中の車内でコラムを、家に帰ってコミックを〟とある『漫画ばんがいち』12月号ですが、漫画家陣は例によって充実しているものの、コラムにゃ何一つ面白いもんがないのはなぜ？

表紙に他の連中より一回りデケー写植で、〝ドン!!〟と名前の謳ってある4大H漫画家は、表紙キャラを中心に、右に昇り坂の平木直利、ユナイト双児を配したのに対し、左側にはすっかり落ち目の河野慎太郎、アップルトンというのは、ちと露骨すぎませんかの？（編集なんてどの社でも、この程度の軽薄さ）

さてユナイト双児。この人の絵って、新しいんだか古いんだか、ちょっと判断に迷っちゃうとこありますね。確かに姉ちゃんのキャラは悪くないけど、人物のラインは決して流麗とは言えないし、エロ劇画っぽい雰囲気さえある（妙に存在感のある野郎キャラもムカつく）。

12月号掲載の「デリシャスLIFE」（前編）を見ても分かるように、〝見せ場〟作りは非常に上手。彼女に学ラン着せて学校の校庭で立ちマン致すなんて、男のロマンそのもの。縦長のコマ割りとベタ使いの巧みさが、素材に非常にフィット（ここでも野郎のツラが気色悪い。顔をカットするなり、吹き出しの陰に隠すなりの読者配慮を）。

後半は急激に退屈に。クラスの連中に彼女の下着を売ったり、一発決めるのを見物させるのですが、急にアングルが単調になったり、アップゴマが増えたりとメタメタ。時間がなくなったのかもしれませんが、ここまで俺のキンタマをおっ立てといて、これはねえでしょ？（次号に勝手に続かれては、あまりにも息子が不憫(ふびん)）

それと、姉ちゃんのアクメ時の大口、どうにかなりませんか？と不満のあるユナイトセンセですが、スレスレの所で〝今のH漫画〟になってるのは事実。一歩間違えれば、その名前を思い出しただけでもチンポが萎える。大噴火五郎になっちゃうんですが、ギリギリの所で刑務所の壁の外側に落ちてる。H漫画界の中曽根康弘なのか？

（『ぺあ』'97・1）

村野犬彦

〝革命的アダルト耽美コミック〟というキャッチコピーは激ゲロ物ですが、『麗人』（竹書房）は数あるやおい漫画誌の中でも、屈指の水準を誇っています。が、ナルシズム過剰なレイアウトのせいもあ

り、エロ本としては非実用的。

漫画家はいずれも技量はあるけれど、耽美過剰というか、各キャラの藤田まこと顔、いや馬ヅラが、今時のチンポやマンコを、刺激し切れてません。さらに、笠井あゆみを筆頭に、どうも漫画家自身が、読者より先に行ってしまってる自己陶酔派揃いなのは、〝センズリ本〟（あるいは〝マンズリ本〟）として致命的。

そんな中、営業面を一手に引き受けてるのが村野犬彦。12月号の「裏通りの記憶」は、警官ホモ漫画。世の中も変わりました。数年前までは、エロ本じゃ婦警や警官は御法度だったのですが。警官のコスプレして楽しんでいたホモカップルの片割れが、モノホンの警官と遭遇、公園のトイレでいたしちゃうという渋い設定。

筆者がいい年のせいか、全誌面を通じ抜けそうなのはこれだけでした。続く笠井あゆみは論外として、36ページも描いている木仁戻なんて奴に至っては、能條純一が左手でペン持って描いてるような絵で、ウゲウゲ。編集者はなぜこんな安っぽい、『エマニエル夫人』風の濡れ場っきゃ描けん連中ばかり起用したがるの？（地獄のリストラ旋風が吹き荒れる、竹書房の薄給社員編集者が、心の安らぎを仕事に求める気持ちは分かるが、〝お客様第一〟の精神は忘れて欲しくない）

再び村野犬彦に戻れば、この人は濡れ場を、常に読む側（抜く側）のアングルで描いているのが素晴らしい。ンなこたエロ漫画のいろはの〝い〟なのだが、『麗人』では圧倒的に目立ってしまう。言うまでもなく、SEXは異性間、同性間に関係なく、身も蓋もないカッコしてやるもん。そのカッコをどれだけ露骨に描くかで、ポルノとしての商品価値は決まる。当然〝本当の美〟など、〝露骨のぬかるみ〟から回帰した地点から芽ばえるのが常識と、筆者は昔から思っていますが。

（『ぺあ』'97・2）

矢萩貴子

〝満を持して〟という言葉がありますが、サン出版系列のマガジン・マガジンから出た、〝女性向けホモ漫画誌〟『ピアス』は、編集者のそんな気負いが誌面の隅々から、「どうだ、どうだ、凄いだろう？」とばかりに迫ってくる重量級雑誌です。

確かにメンバーは豪華。小野塚カホリ、矢萩貴子、藤本ミツロウ、御茶柱さむ、神籠石亮と、やおい畑からレディコミに至るまで、〝金に飽かせて豪腕メンバーを狩り集めた〟風格に溢れています。さすがは〝巨大部数SMレディコミ〟『アムール』の版元。傾向の似ている『麗人』なんか、かなりのダメージ受けるんじゃと、表紙を見た時は僕も思いました。

が、買い込んでじっくり読んでるうちに、逆に「こりゃあ失敗するんじゃねえの？」と思い始めたのです。というのも、余りにレディコミ的と言うか、〝劇画的臭気〟が強烈。知っての通り、劇画ティストが一番残っていた分野がレディコミだったのですが、ホモ漫画誌の主な読者の10代〜20代の女の子たちは、一番ここらの〝胸やけのするような脂っこさ〟に拒否反応を示す。

サン出版関係の編集者が得意の、〝カッコいい写植芸者振り〟は例によって決まってますが、そんなデザイン感覚のみでは、この脂っこさはとても消せない。たとえば1ページジン万と言われる、レディコミ界のスター矢萩貴子は、その稿料に似合わぬ背景スカスカの、「地獄へようこそ」なる手抜き作品を描いとりますが、それでも濃すぎる。正直な所、4〜5ページ読んだだけで気持ち悪くなった。加えて、この人特有のナルシズムがあさっての方向に炸裂、「そんなトコいくら舐められても、俺はちっとも感じねえヨ」と、思わずつぶやくありさま。

この感想は本業界の女性読者の多くが抱く、『ピアス』への思いでは？　確かに『アムール』を読んでいた、従来のホモ漫画の読者層よりやや上の、人妻やOLがドドッとなだれを打って喰らいついてくれれば、前途は洋々でしょう。実は陰ながら、そうなるように筆者も祈っています。だって、こんだけ銭と手間暇かけて作った雑誌が売れないと、死にたくなっちゃいますからねえ、編集者は。

（『ぺあ』'97・5）

大阪ぴえ郎

新橋にある出版社といえば、実質的に住友銀行の管理会社と化した、〝エロ『アサヒ芸能』〟と宮崎駿で有名な、徳間書店くらいしか一般には知られてませんが、もう一社〝忘れちゃいけねえ〟版元が。〝ホモ漫画の殿堂〟一水社（光彩書房）です。『モーリス』（最初は『カノン』）から始まり、『純一』、『カレス』、『少年天使』、『半熟天使』（以上雑誌形式）、『ジャニー』、『ロミオ』、『秘密少年』（以上単行本形式）と、とどまる所を知らず、その安易な姿勢は約20年前の、エロ劇画誌全盛期における辰巳出版グループ（蒼竜社、綜合図書、富士美出版）の、キャラメル商法を連想させます。

中でも一番の売れ行きで、部数も5万部をうかがうと言われる（定価700円でこれだとボロい）、『純一』4月号を手に取って見る（この分野はすべて隔月誌。月刊にすると売れ行きが急落するのだとか。まだまだ市場は狭いらしい）。巻頭4色の担当は、大阪ぴえ郎の「ユア・ザ・オンリー」。タタキに〝総天然色青肉カラー巻頭20ページ〟とあり、〝青肉〟の左右に、ヤオイ&キチクのルビが。編集ポリシーが百%示された、ナイスなタタキと申せましょう。

確かにそのタタキに恥ない中身になっています。黒髪の長髪兄ちゃんが、公園で昼寝をしている空腹の茶髪の兄ちゃんを拾って来ます。この茶髪兄ちゃん、言葉もしゃべれず、字も書けない。そのくせエロ本読んでチンポおっ立て、毛の生え揃わない一物を見せて主人公を誘惑するので、つい…といった調子。

とんでもない内容ですが、〝いかにも新橋のエロ本屋にふさわしい・・・・・・・路線〟という見方も出来ます（各キャラが今風なファッションで決めているにもかかわらず、新橋闇市マーケットの煮込みの臭気を放っている）。描写も過激で、今が旬のホモ漫画界といった所ですが（必ずや〝「有害ホモ漫画」から青少年を守れ!!〟との運動が起きるでしょう）、一番興味深かったのが、某編集者に聞いたエピソード。

「読者の9割は10代の女の子。ホモ好きを自称しているのに、彼女たちはすね毛、腋毛、陰毛は絶対ダメ。ロリコン漫画風の絵でろ過されてないと、オカズになんないんだって」

昨今の発情野郎と全く同じ趣味。これが日本だ僕らの国だ。

（『ぺあ』'97・6）

平木直利

下請け編集プロダクションの請け負っている漫画誌は、ハングリー精神があってワイルドな反面、ケチ臭い営業方針のせいで、露骨な手抜きもまま行なわれます。例えば、最大手コミックハウスの手になる『ペンギンクラブ』は、部数30万部と言われてダントツなシェアを誇りますが、内容がロートル揃いなのは御存知の通り。

それなりに売れている物より、改題や創刊直後で苦労の絶えない、『コーヒーブレイク』や『ZetuMan』に力を注ごうというわけ。これは下請けの意向でどうにでもなることなので、新規のスポンサー（出版社）の新雑誌ほど、その時点での売れっコ漫画家が集中的に導入されます。むろん手を抜き過ぎると既存の物が傾くわけ

で、ここらのサジ加減が編集の腕の見せ所。
一方、コアマガジンこと白夜書房は、昔から下請けに頼らず、社員編集者の育成を怠らぬ版元。雑誌コードだけ死守、取次へのこびへつらいと再販制に守られてのみ存続してる、〝空洞化した出版社〟が多い中では、立派と言わねばなりません。本欄にもたびたび登場する『漫画ばんがいち』は、下請けのセコい編集者なら即分割し、月刊2誌をでっち上げるであろう豪華メンバー揃い。
6月号に、「愛されたいの♡」なる作品を描いている平木直利は、長編が描けそうにない弱点はありますが、なかなかそそるキャラを物にしています。16ページで連載という所を見ると、かなりの遅筆と思われますが、ベタの多い作風は非常に読み易く、くっきりした描線は同誌のユナイト双児とは異なり、妄想への案内役として、より不特定多数の読者の支持を得るでしょう。
今回の見せ場は、女子トイレが故障中とかで、男子トイレで用足ししている主人公あゆみが、男の子に発見され、ドア越しにオナニーを強制される下り。読者のサービスのためか、叔父との結合シーンを想像してオナるというおまけ付き。さすがプロ。
ただ、ドアの外の〝脅迫者〟に関しては〝いかにも〟な落ちが付くのでガックリ（女友達が変声器を使っていたずらしてたんだって）。一話のみを読んだだけでは、この人のねちっこいエロは理解出来ないでしょうがね。また今の編集者が一般的に嫌がる、連載物が多いのもこの雑誌の良い面です。
（『ぺあ』'97・7）

消費税とエロ漫画誌。

知っての通り、消費税は4月1日から5％に引き上げられ、直前の3月一杯までは値上げ前の駆け込み需要で、百貨店、マーケット等が久々の活況を呈したそうです。もっとも4月以降はその反動で売り上げが大幅にダウン、なかなか以前の状態に回復していない様子。
後遺症が残ったとはいえ、駆け込み需要があった業界はまだ救われます。悲惨なのがエロ本業界。中でも今やそのメインを占める、各エロ漫画雑誌の売り上げは地獄とか。2月頃から4～5％返品が増加したと思っていたら、3月売りはさらに4～5％の返品増加。つまり、計1割も返品が増えた結果、3月売りの4月号は、各誌とも4割前後の返品をくらってる様子（つまり10万部刷ってたなら、4万部が返品され、古紙として処分される運命に）。
一番の要因は、4月からの消費税アップに備え、計算が繁雑になる旧定価の雑誌は早めに返品してしまえという、書店やコンビニの事情にあったらしいのですが、それに加え消費者側、つまり〝オナニーする側〟の、偽らざる本音も存在したと思うのです。
つまり、インスタントコーヒーやファクス用紙同様、値上げ前におかず用のエロ本を備蓄する気になるか否かということ。確かにエロ本は生物ではないし、腐る心配はありませんから、いくらでも買い置き可能な商品です。
にもかかわらずサッパリ駆け込み需要がなかったのは、結局〝オナニーのカキだめは出来ないし健康にも悪い〟という、意外なまでに健全な、現代の青少年達の常識が存在したからでしょう。「そんなの当然じゃんか！」との声が上がりそうですが、実を言えば僕、彼らはもっと駆け込み需要に走るのではと、内心予想していたのです。
家庭や学校で子供の頃から管理されて来た彼らは、20～30冊のエロ漫画誌を3月中に買い占めるや、4月になると1冊ずつ、押し入れから取り出して使用すると考えたから。筆者みたいなオヤジ世代にはとてもそんな忍耐心はなく、20～30冊の内から一番いいのを選び出して使うと、他は全部捨ててしまったでしょう。が、彼等には

…と少し期待（!?）したのですが、外れて内心ホッとしました。

（『ぺあ』'97・9）

●巨額の血税を投入した東京都庁（上）と、切っても切れない関係のエロ漫画群。

還元されるわけだ…こんな風に!!

ズブッ

アアン!!

ズブブッ

●Ⓒ阿宮美亜『ドッキリ姉妹』（税務署万歳）より。

評伝「迫害に耐えて15年」

杉作J太郎

非常につらいところである。
だが、男はつらいヨといいながら車寅次郎が彷徨を続けたように、つらさと楽しさは表裏だったりする。
実際にはそれほどつらいことでもないのだ。
きっと、上機嫌なのではないか？
だから見ていてかわいそうだなと思ったりすることはない。
本人が気持ちいいのだからそれでいいのだ。
しかし、怒鳴られたり、蹴り飛ばされたりしてる側にしてみればこれはまったく面白くない。
本書を読んで、この著者は自分をことさら悪く書くタイプだと思ったら大間違いである。
「てめぇ、どーなってやがんだ、バカ！　てめえにその仕事紹介したのは俺だけどヨ、うちんとこの仕事に穴あけていいと思ってんのかよ！　今すぐ描いて持ってこい、ガチャン！」

塩山さんは態度が悪い。
そして、恐ろしい。
ま、これは塩山さんとつきあいのある人なら誰もが一度は感じたことがあるのではないか？
一言で言うなら、ヤクザみたいな人である。
ただし、女を転がしたりしているのではない。ひょっとしたら女を転がしてる一面もあったりするのかもしれないが、そーゆー面を人に見せることはモーロクすれば話は別だが、まずないと断言できる。そのあたりにヤクザはヤクザでも俺のよーな東映派ではなく、日活派の片鱗は見える。おそらく渡哲也演じる人斬り五郎の気分なのだろう。ただ、松原智恵子が泣きながら走って追いかけてきているかどうかの違いである。いや、ひょっとしたら追いかけてきている女もいるのかもしれない。だが、そーゆー面を人に見せることはモーロクすれば話は別だが、まずないと断言できる。

最後のガチャンというのは受話器よ壊れんとばかりに電話を叩き置いた音である。今まで何台ぐらいの電話を塩山さんが壊したかを俺は知らないが、そばでその姿を見た人の脳裏から、そのあまりにもぶっそうな態度が消えることはないだろう。

ちなみに、今、この文章、尺がまだまだあるので少しばかり調整する意味でも俺の思い出話を書かせてもらおう。

20歳で漫画家デビューした俺に、一番最初に原稿依頼してくれたのが塩山さんだった。その時、俺は原稿を持ち込んで採用された出版社や編集プロダクションに漫画を納品していたが、ある日突然見知らぬ人から、

「キミ、『漫画カルメン』に描いてたでしょ。あのさ、うちでも描いてもらえる？」

と電話がかかってきたのは塩山さんが最初だった。今から15年も前の話であるが、その時のうれしさはやはり忘れていない……というのは実際のところ正確ではない。うれしかったはずだと思うのだ。きっとうれしかっただろう。汚い木造アパートの2階で、ウヒョウヒョ跳び跳ねたかもしれない。いや、きっと跳び跳ねたはずだ。が、その記憶がない。

ありがたかった記憶がない。

なぜなら、その後、俺もご他聞に漏れず、前述したよーなひどい目に遭ったからである。

あがった原稿を持っていくと、

「フン！」

鼻で笑いもせずにクズカゴに放り込んだ。

または風邪で熱が39度あった。

「バカ野郎、ヤレ！」

なんとかかんとか仕上げた時にはフラフラになって立つ元気もなかった。

「塩山さん……すみませんけど、今回だけ、原稿を取りにきていただけませんでしょうか……近くの駅まででもいいんですけど」

すると塩山さんは即座に怒鳴った。

「いらねえ！」

「え？」

「いらねーえんだよ、それなら。どっちなんダ。持ってくるのか、こねえのか、ハッキリしろ」

「も……持って行きます」

「早くしろ、バカ！　ガチャン」

で、持って行けば、また鼻で笑いもせずに、

「フン！」

クズカゴ行きである。ま、それでもキッチリ本に掲載されるのだから、そのまま捨てっぱなしではなく、ま、こちらもまさかホントに捨ててるわけではあるまいとは思っているのだが、腹は立つ。

クソ～ッ……今に見ておれ！

帰りのエレベーターの中で、何度唇を噛んだことか。

でも、あれから15年。ただの一度も原稿を取りにきてくれたことはないです。

「捨てページなんだからヨ、てめえの漫画は。真っ白でなきゃなんでもいいんダ！」

通算百回以上聞いたね、この言葉。

で、さらには漫画を依頼しておきながら、

「てめえにゃ女を描くのはムリだ。漫画に女を出すな。出したらしょうちしねーぞ、てめえ！」

そう言ったのも塩山さんだ。だが、当時、俺が描いていたのはいわゆるハダカの女が登場するエロ漫画。女が出てこなければエロ漫画にならないではないか……と思っても口に出せるわけではないし。

ここで念の為言っておく。俺も杉作といやぁ四国にいた頃は「ニイさん」と呼ばれた、ちったァ知られた男ですよ。そんじょそこいらのひよわな野郎とはひと味もふた味も違う。自分でいうのもナンだが、ハッキリいってコワモテだ。世が世なら間違いなくヤクザになってるね、俺は。そんな俺でも塩山さんの無軌道な暴走っぷりの前では対応策が見当たらなかった。だから、この時もシブシブ女を描くのはやめた。かくしてエロ漫画雑誌に女の出て来ない、ただの野球漫画やプロレス漫画が10ページ、載る事態となった。

そして15年。

「俺ァ、いなかに帰って農業でもやるのヨ」

うそぶいていた塩山さんも、これで2冊目の著書となる。

前作にも負けぬほど、絶対に面白い本であることを断言できる。

そして、心の底から、おめでとうございましたと俺は言いたい。

そんなにひどい男なのに?

ムチャクチャな男なのに?

ニイさん……ヤボはよそうや。

そんな男がホントにひどい男なわけないだろ?

ホントにひどい男というのはほかにいる。ふだんはオツにすまして気取ったりすかしたりしながらチヤホヤされるためにチヤホヤされるよーな態度を見せまくってる野郎たちだ。いるだろ、そこいらのすました雑誌をペラペラめくったらそんな野郎がいくらでも。わかってるだろ、そんなこたァ!

塩山さんが実際どんな男なのか?

ヤボになるから書かないが、まァとにかく態度が悪くて、恐ろしい、ヤクザの上前をはねるよーな男である。

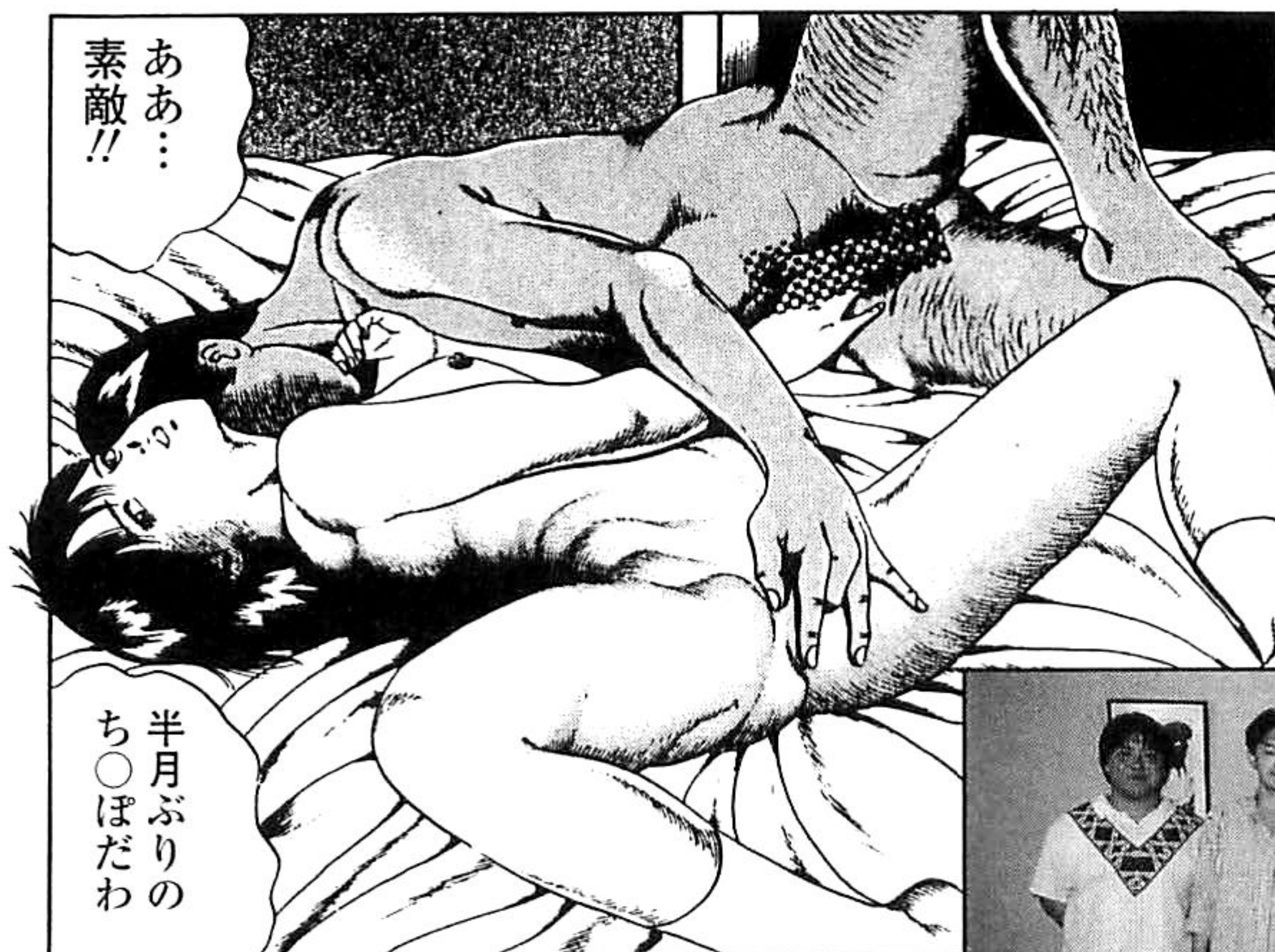
たぶんこの原稿を見ても言うね。

「改行だらけじゃねーか! ゼニはらわねーぞ、てめえ!」

慣れたよ。

●ⓒ阿宮美亜『ドッキリ姉妹』(塩山に背を向けて)より。

●『嫌われ者の記』出版記念パーティーにて。
やす○(右)、杉作J太郎(下)。

●Ⓒくらむぼん『マニアック』(編集者哀話)より。

●Ⓒ阿宮美亜『気分は少女色』(少女フェラチオ時代)より。

●塩山芳明くん、下請けエロ漫画編集者生活15周年パーティー(三平酒寮)。

解説

永山 薫

おこんばんわ。ワシントン条約で保護してもらいたい稀少動物「エロ漫画評論家」の永山薫だ。

さて、塩山芳明の二冊目。内容は例によって塩山のオヤジが「いつか単行本に…」とセコセコ保存しておいた雑文集。十年前の雑文なんか普通はだれも取っておかねぇってば。これが文学青年崩れのナルシズムなのか、単に「捨てるのもナンだし…」という北関東的貧乏性故なのかは判らないが、こうして一冊にまとまってみると、まるで因業オヤジが爪に火を灯して小銭を貯め込んだ郵便貯金通帳を見るような、一種爽やかな感動がありますね。

ここにはエロ漫画評論家の俺ですら知らなかった驚愕の事実、忘れてた瑣末な諸々が山ほどある。前著「嫌われ者の記」と併せてエロ漫画史を語る上での根本資料になることは百%間違いない。一文一文舐めるように読み込めば、あなたももういっぱしのエロ漫画通だ。まあ、誰もホメちゃあくんないけどな。

ただし、ここには公正な視線などという「無能な凡人」向きのフレーズはない。文字通り、エロ本下請け編プロの中年オヤジが偏見誤解嫉妬聶肩劣等感優越感をモロ出しにした悪口雑言誹謗中傷罵詈讒謗の集大成である。俺から見ても「これはアンマリだろが」という表現も随所にあるくらいだから胃が弱い人はパンシロンでも飲んでから読んだ方が身のためだ。もう一つは塩山は相手を見て叩くということも計算に入れて読むこと。俺に対する扱いが今と昔では大違いなのを見てそれはよく判る。互いにツラも知らない間柄の時は糞味噌だったが俺に仕事を廻すようになってからは揶揄の中にも「締切直前にケツまくられるとヤバイ」という計算が透けて見えて微笑ましい。ただ、塩山の眼力はバカにできない。こないだも「アンタ、評論は下手だよね。小説は面白いのに」といきなり急所を衝かれてしまった。そうなんだよ。俺は別名でやってる全然売れねえ作家業の方が本職だと思ってんだよ。悪かったなッ！

本書の白眉と云えばやはり第3章。漫画家評と業界情報がテンコ盛りになってて、エロ漫画通にはたまらん内容だ。80年代前半あた

りの文章には今や完全な死語になった「ロリコン劇画」が頻出し、時代を感じさせる。当時でもロリコン漫画という呼称が一般的で劇画とは別のものとして認識されていた。このあたりをザッと「解説」すっと以下のようになる。80年代初頭のロリコン漫画ブームはSF&アニメファンやかなりインテリ入った同人連中が仕掛けたもので、最初期には「アニメ絵のエロなんて」と団塊オヤジ編集者に相手にされなかったらしいんだが、吾妻ひでお、内山亜紀を核弾頭にしてエロ劇画誌に橋頭堡を築き、後は一気に全面展開。ロリコン色が次第に薄まり、エロ劇画に引導を渡し、ネタも一般化し、現在の「美少女漫画」隆盛に至るというわけだ。この流れの中で、塩山芳明はエロ劇画、美少女漫画、やおい漫画（女の子向けのホモ漫画）へと転身してきたのだが、面白いことに過去を振り捨てずに現在でもそれぞれのジャンルの雑誌や単行本を並行して編集している。どれが壊滅してもいいようにである。まるで自分の子孫を日本、カナダ、オーストラリア、アメリカに移住させる華僑のような商売感覚には頭が下がる。第3章に登場する劇画家や漫画家には専門家であるはずの俺が知らない人も結構いる。特にフィールド外である劇画家は取りこぼしが多く、山口花子なんて自殺した山田花子の誤植かと思ったほどだ。ただ、初出が10年以上前の文章も多く、彼ら（彼女ら）の現状については定かではない。このあたりは注記でも入れて欲しかったが、追跡調査し始めると何年もかかってしまうので、今回は俺が判る範囲で軽くフォローしておこう。

●前田俊夫：コミケで旧作原画を叩き売ったのは有名な話。ただし並んだのは全員古本屋。現在はアニメのプロデュース等も行っているらしい。前田俊夫原作のエロアニメは海外でも人気。

●三条友美：現在ミリオン出版から全集が刊行中。

●富田茂：現在も相変わらず美少女SM。最新の単行本は97年。

●杉作J太郎：絵はちっとも上手くなんないが文章が素晴らしく、カルト人気はいっこうに衰えない。

●早見純：現在は編集者。復刻の動きもあったらしい。今でも猟奇事件が起こると東スポあたりからコメントを取りにくるとか。今時のキチク系の先駆者。

●ダーティ松本：97年にエロ劇画生活25周年も迎えた。萩原一至に誘われてコミケに参加するわ、絵柄を美少女漫画風に変えるわ、流行のショタやアニパロにも手を出すわと一向に枯れる気配なし。

●ケン月影：画力はトップクラス。劇画がイマイチな俺でもあの豊満な女体にはついムラムラ。

●福原秀美（豪見）：最近、あのバカバカしいノリが一部の物好きの間で再評価されている。

●九紋竜：エロ劇画だけではなく時代劇画も描いているらしい。

●樽本一：超危険なSMネタを得意とする。エロ漫画大弾圧期にはガスまで止められる極貧生活を送ったという噂。

●蘭宮涼：うたたねひろゆきと結婚。

●雨宮じゅん（淳）：大手系で活躍。

●わたなべわたる：全く変わらないゴムマリ巨乳。

●MEEくん：今やアニメ化作品もありの人気作家。

●町野変丸：いしかわじゅん（そーいえばこの人もエロ劇画雑誌出身）や江口寿史（変丸の絵はこの人のコピーから始まる）にも評価され、多方面から注目されているがスタンスは変わらず。

●ちゃたろー：塩山にかかればボロクソだが俺は評価してる。この人も元イジメられっ子。

●伊魔崎斎：本業のアニメ作監が忙しいせいか漫画はほとんど見かけない。最近ではダーティ松本の同人誌にイラストを描いていた。

●美衣暁：エロ以外も描いているがやはり本文にあるように「同じ曲」を唄っている。ただしそれで読ませるのは見事。

●魔北葵：「昔の本宮ひろし風のアクションホモエロ漫画」ではな

いがホモネタは好きでよく描く。永山薫とは長電話友達。
●DONKEY：最近ではショタホモ（少年愛）にも進出。あっさりした線と可愛いキャラがロリよりも生きる。
●まいなぁぼぉい：SM小説を原作にした大長編シリーズが人気。
●十六女十八女：現在では本文中で「ごくたまに」だったイジメSMがメインになっている。
●アップルトン：昇り調子だった96年11月13日に急逝。明朗な作風。ドテ高な股間描写がHだった。
●まついもとき：現在は別のペンネームで週刊少年誌で活躍中。
●SHIZUKA：本文当時はアイディアコメディ。現在はSM。
●プロトンザウルス：一水社の看板作家。ドラマCD、アニメなどもある。ちなみに本文中に出てくるアキバの「虎の穴」は拡張を続け、現在、一般、アダルト、同人誌とフロアが分かれている。
●田中ユタカ：批評家にイマイチ受けないが、読者人気がすごい。
●大暮維人：本文に「二流メジャー誌（!?）に引っこ抜かれぬのを祈るのみ」とあるが、祈りは通ぜず、徳間で大手デビュー後、集英社で連載開始。エロもやめたワケではない。
●久我山リカコ：この人もエロと大手の二足の草鞋組。集英社からも単行本を出している。
●グレイス石川：仕事量はピカイチ。98年には3冊くらい単行本が出る予定。業界の噂に強い。
●カマヤン（鎌ヤン）：オウムの頃トバッチリで逮捕されたりとか色々あったが97年に初単行本を上梓。漫画家では数少ない理論派。

この他にも現役の漫画家は多いが、紙幅がいくらあっても足らんのでパス。もちろん消えた作家もいる。その中に塩山に消された漫画家がいるのかどうかは謎。まあ塩山如きに消されるようじゃ遅かれ早かれ消えてたでしょうが…。メジャーに比べりゃ大甘なエロ漫画業界だけど資本主義は資本主義。売れなきゃ消えるのが大前提。

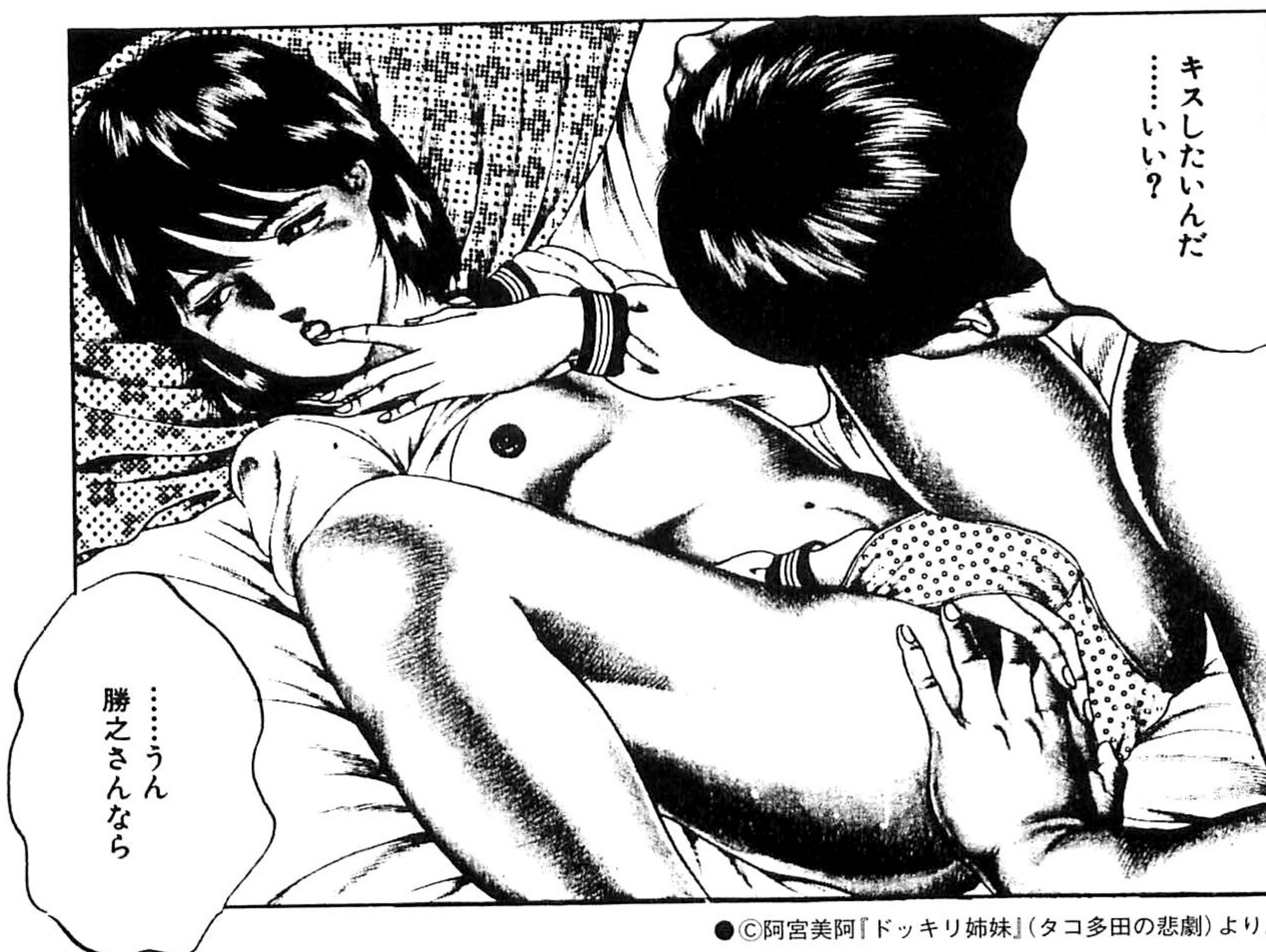
だから塩山は怒りは買っても恨みを買っていない…と思う。

塩山のオヤジも、はあ、自分が消えんように、行けるトコまでいくべしだなや。全山の紅葉は麓からしか見れんよーに底辺からだけ見える乙な景色もあるっつーこったよ。

（平成九年十一月吉日）

●韓国ボラレ旅。山崎邦紀（左）、浜野伝知らと。

●文化の香りのしない
業界初のゲイ漫画誌。
"せめて2、3号は出したいですネ"
とのたまう、塩山編集長。

●ホモ映画『パレード』公開記念トーク。(上野世界傑作劇場)

●Ⓒ阿宮美阿『ドッキリ姉妹』(タコ多田の悲劇)より。

〜後書きに代えて〜「裏版・嫌われ者の記」

8月×日…自宅裏を流れる、丹生川での鯉釣りにはまってしまった。釣れる数は鮒の方が多いが、時たま40〜50センチ大の鯉を釣り上げると、その感触が忘れられなくなる。この不況時代に、釣りほど安くて安全な趣味はないが、問題はえさのみみず。昔と違って、牛などどこの家でも飼っていないため、堆肥場がない。5〜6匹のみみずを見つけるのに、30分以上もかかったりする。サオを持つ前に、蚊にあちこちを喰われてグッタリ。やっとこさえさを確保、川に糸を垂れてポケッとしてると（最高に心がなごむ時！）、夕方6時の**〝今井清二郎式気違い防災無線〟**が、胸の悪くなるような童謡ノイズを付近一帯にばらまき始める。昔、ピアノ騒音をめぐる殺人事件があった。許されざる行為とはいえ、犯人の気持ちはよく分かる。しかしピアノはその人（殺された被害者）が身銭を切った物。だが、防災無線は俺達の血税で建てられた。今井清二郎、高間栄、細山昂三といったレベルの〝公僕〟が、それを悪用して偉そうに説教を垂れるとは、盗っ人猛々しいにも程がある。

9月×日…その今井清二郎君の親分格の、岩井賢太郎県議が理事長をしている「富岡スイミングスクール」で、俺が富岡高校時代にハンドボール部の監督を務めていた、小林進氏を時たま見かける。相変わらずいい体格で、重厚かつ礼儀正しい方であるが、富岡高校時代は極め付きの暴力教師であった。高3の時（71年）、友人のA君が同教諭がクラスメートに暴力を振るったのを止めた所、足払いをかけられた上に殴られ放題。しかも職員室まで引きずって行かれ、〝反省〟（？）を迫られた。新聞記事にもなり（まだスクラップも保存中）、高教組が調査団を出したり、俺達も抗議のビラをあちこちに貼りまくった。当然そういう経歴だから、平教員のまま退職したかと思いきや、上信電車の中で再会した高校時代の知人によれば、某高校の校長にまで出世したとか。さすがは国定忠治を生んだ上州と言いたいが、忠治親分は強きをくじき、弱きを助けた侠客。プロレスラーまがいの体格をした運動部の教師の暴力に、果敢にも抗議したA君こそが、忠治に擬せられるべき。当時の校長は上島大作氏だったが、氏には少々気の毒であった。というのも、富岡高校の運動部の教師を中心とした暴力的体質は、前校長の藤生宣明氏の時代に形成されたものだからだ。小林氏を筆頭に、宇佐見某、木村某、三木某、黒岩某らが、しない片手に校内を闊歩していた（『男組』だよ、これじゃ！）。A君の事件を報じる当時の新聞に、「再びこのようなことを起こさないように注意する」とコメントを寄せた上島氏とは、一度市内の「横山書店」で会った。「塩山君、君達に今人気ある作家は誰ですか？」と言うので、高橋和巳の『わが解体』を勧

◆後書きに代えて◆

めた所、「ほう。僕らの若い頃の、倉田百三みたいなもんですかね」と言いながら、早速買っていた。同書店では、大学入学後に、前出の黒岩某なるドチンケな暴力教師の一人にも遭遇した。驚いたのは、3年間反面教師としてお世話になったので、あいさつしようと近寄った所、文字通り脱兎のように逃げ出したこと。小林氏や宇佐見氏の金魚の糞らしい情けない姿だったが、群馬県教育界のこと、この手の輩は大出世したのでしょう。

10月×日…漫画好きの上の娘が、「これ、お婆ちゃんちから借りて来たんだけど、あんまし面白くないよ。有名な漫画家なのにねぇ」。見れば、富岡市が昨年発行して全戸配布した、『漫画絵巻・富岡の歴史』（松本零士）である。ハードカバーで250余ページの豪華本。編集は富岡市総務部秘書課。印刷は当然のように、糞役人共の尻を舐めるのが趣味の、上毛新聞社。松本零士＆『上毛新聞』といえば、本書でもおなじみ。原発推進漫画家と三流赤新聞のこまめな銭儲けには、ただ脱帽するばかり。『上毛新聞』の厚顔無恥振りを、よく示した記事を紹介しよう。97年7月20日付け。〝軽井沢浅間プリンスホテルがオープン／「自然と調和」を強調〟—以降、超自然破壊企業、コクドの税金を利用した悪辣商法への、〝キンタマシャブリシャブリ記事〟が続くのであるが、こいつらと、〝海の家・うらしま〟に大金をぶち込んでいた、東芝、日立、大日本印刷、そしてそれを受け取っていた総会屋連中との間には、どんな差異があるのか？　とはいえ、腐ってるのは『上毛新聞』やその記者連中のみではない。筆者は『こちら騒音富岡です!!』を仕上げた後、県内のあちこちの役所やマスコミ関係に発送すると同時に、市役所内の各部署、及び庁内の記者クラブとやらにも配布した。記者クラブには、午前9時頃に行ったが、記者は誰一人おらず、掃除のおばさんが一人で、ゾウキンがけをしていた。そこに『こちら騒音富岡です!!』をまいて来たのだが、タダで役所の一角を特権的に用い、掃除まで役所に頼ってる腐れアゴアシ付き記者共に、一体何が期待できようかと、浅野健一氏並に思ったものだ。もっともそこに属する『産経新聞』の女性記者が、筆者が留守中に自宅を訪れたらしい。名刺を置いていったので電話をしたら、そのうちに取材したいと申してましたが、以降連絡なし。昨年（96年）の末のこと。〝愛想取材〟なんてしちゃダメっすよ、『産経新聞』のナントカさん（ちゃんと実名報道しようと思ったけれど、名刺を捨てちゃってた）。

10月×日…『お役人のいじめ方』（後藤雄一・徳間書店・本体1400円）を読む。いかにも徳間らしい、際物的題名の本であるが、凄い本。著者は「世田谷行革110番」代表。後藤氏が最近、都庁の糞役人共による、記者クラブ記者への過剰な接待を裁判所に告発したと『東京新聞』で知り、「凄いおっさんや!!」と改めて尊敬した。コジキ役人、ボケナス政治家、ごっつぁん大マスコミが三位一体となって、この国を破綻へと導いてる。こんな連中が「新聞・出版物の再販制を守れっ!!」などと言って、反規制緩和キャンペーンを張る一方で、橋本アンパンマン首相の腰抜け行革批判をしてるのだから、開いた口がふさがらない。総論賛成各論反対ってなあ、テメー（大マスコミ）らのためにある言葉だよ。暴力校長が朝礼でシャブ打ちながら、生徒に薬物追放の説教を垂れるに等しい笑い話。

11月×日…本年初頭からの出版不況は、一向に回復のきざしがない。エロ漫画だけでなく、全出版物が前年比一割強のダウンとか。そもそも書店に客が入らないというのだから、どうしようもない。大手書店にも、経営悪化が伝えられ始める始末。まあ、家賃が下がったからといっちゃ、先の見通しもなく大型店をポコポコ出した、バブル書店は片っ端からつぶれればいい。が、このままでは、その前に自分が下請け編集してるエロ漫画誌が、廃刊に追い込まれちまう。比較的健闘していると伝えられる、『ペンギンクラブ』、『ＺｅｔｕＭａｎ』、『パピポ』、『カラフルＢｅｅ』、『夢雅』等を、神保町の

「すずらん堂書店」で立ち読み。各誌ともいい漫画家を揃えている。好調なのも当然。ロリコン漫画も、エロ劇画から業界の主役の座を奪って10余年。ここへ来て絵が、ヘビーというか、劇画っぽくなりつつある。その分野が袋小路に追い込まれると、常に顕著になる傾向であるが、ンな評論家みたいなことを言ってても仕方ない。それなりに対応しなければ。正直な所、44にもなってこの種の漫画の編集を続けるのは、かなり疲れる。とはいえ娘らはまだ義務教育の最中。金がかかるのはこれから。弱音を吐いてもいられない。あの遠山孝氏は、79歳になるまで現役を通したのだから。ちなみに同書店は、『嫌われ者の記』をまだ置いてくれている。うれしい。大して必要もなかったのに、『URECCO』等を数冊買ってしまう。

11月×日…長野新幹線が開通以来、帰りはともかく、朝、高崎からはまず座れなくなってしまった。それも当然。JR東日本が、ド汚ねえ商売をしているからだ。筆者は高崎発10時25分発の、あさま506号を利用することが多いのだが、何と全8両のうち、自由席が3両しかないのだ!! 上越新幹線はだいたい5両は自由席にしてるのに。運賃を実質的に大幅値上げしてるようなもの。沖電気、上毛新聞社、コクド、大日本印刷、JR東日本…ハゲタカは地上にも無数にいるのだなと、あさま506号の車内で、『末枯・続末枯・露芝』(久保田万太郎・岩波文庫)を立ち読みしつつ思う。永井荷風、谷崎潤一郎、久保田万太郎、三島由紀夫、手塚治虫、横山光輝、楳図かずお、谷岡ヤスジ…読みたい本はまだまだある。読書タイムである通勤時間は、片道5時間と今の倍になってもいいが、この糞高い料金(新幹線定期は1カ月約10万!!)を取っといて、山手線並の混雑を放置してるJR東日本は許せねえ。

11月×日…『アレ!』、『SPA!』、『噂の真相』、『熱烈投稿』、『日曜研究家』、『クイックジャパン』、『地獄のブックレヴュー』(書籍)、『COMIC GON!』の関係者の皆様、『嫌われ者の記』出版の際は、献本したわけでもないのに、紹介していただきありがとう。しかもあんな〝悪口本〟におほめの言葉をいただき、赤面のいたり。お礼代わりに今回は本書を贈呈させていただこうと思いましたが、さもしい真似は柄ではないと中止。またお買い上げいただき、罵倒するなりほめるなり、勝手になさって下さいね。

11月×日…自分の本でありながら、校正疲れで吐きそう。編集作業がスタートしたのは8月末だが、以来ろくに朝立ちもしない。女房に逃げられそう。それはともかく、土曜漫画から出てた自販機本、『ギャルトピア』の編集長だった北村富夫さん、酔狂な連載をしてくれてありがとう(同誌は『漫画ギャルトピア』とは全く別の雑誌)。酔狂といえば、未だ連載を続けさせていただいてる、『ぺあ』の槇野達彦氏には言葉もありません。そういえばもうすぐ12月。今年もそろそろ、「三平酒寮」に忘年会の予約をしなければ…。

●水道橋は7セントラルビル時代の㈲遠山企画。

●(塩)も会員。岩井賢太郎県議が理事長を勤める、富岡スイミングスクール。

現代エロ漫画

1998年1月30日　初版第1刷発行　（検印廃止）

著　者　塩山芳明
発行者　多田在良
編　集　スタジオ DIG
発行所　株式会社一水社
〒105　東京都港区新橋5-35-8
TEL　03-3437-6315（代表）
FAX　03-3437-9536
D T P　㈱公栄社
印刷所　城南グラビヤ
製本所　共同製本株式会社

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします。　Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

現代エロ漫画

定価	1,700円 本体1,619円
発行日	1998年1月30日[初版]
著者	塩山芳明
発行所	一水社

現代エロ漫画
塩山芳明

9784870768277

1929476016195

ISBN4-87076-827-5
C9476 ¥1619E

いずみムック㉗
定価1,700円 本体1,619円
雑誌 60011―27
一水社